YQ2-H54
1200500241691

表圖計統

覽總殖拓

內外經濟調查會編


大迫
野田
サイパン
ヤルート
ポナペ
ヤツブ
トラック
パラオ諸島
コロール


奉天
鉄嶺
遼陽
新義州
平壌
元山
鎮南浦
大石橋
営口
山海関
大連
京城
仁川
釜山
大邱
木浦

拓務大臣

松田源治閣下序

統計圖表

拓殖總覽

內外經濟調查會編

YQ2-H54

國立國會圖書館藏書
42.7.-6

國立國會圖書館藏書
I種
W
1200500241691

序

我國ノ海外領土及統治領域ハ面積ニ於テ、一萬九千三百餘方里、即チ本土ノ七割八分强ニ當リ人口ニ於テ二千五百八萬八千餘人即チ本土ノ四割四厘强ニ相當ス此等ノ地域ハ何レモ施政以來其成績見ルベキモノアリト雖モ人文啓發ト産業ノ開拓トハ尚之ヲ將來ニ俟ツベキモノ多シ況ヤ我國ノ如ク內ニ天與ノ資源ニ乏シク而カモ人口過剩ニ苦シム國柄ニ於テハ內外領域ニ亘リテ國民經濟ヲ合理化シ進デ海外發展ニ努ムベキハ急務中ノ急務ナリ。

此秋ニ當リ茲ニ『拓殖總覽』刊行ノ擧アリ朝鮮、臺灣、樺太、關東州、及南洋群島、其他ニ於ケル重要ナル諸統計ヲ網羅シ之ヲ巧妙精緻ナル圖表トナシ加フルニ懇切平易ナル解說ヲ附シ看ル者ヲシテ津々タル興趣ノ裡ニ各外地ノ狀勢ヲ一目瞭然タラシム、寔ニ本書刊行ハ有益ニシテ機宜ニ適セルモノト認メ之ヲ推奬スル所以ナリ。

拓務大臣 松岡洋右

本書發行に就いて

盛なる人口の增殖は之を喜ぶべきも、食糧の生産之に伴はざるを如何に解決せんとするか、之れ實に我國最大の惱みであつて、亦多年の懸案である。然し乍ら、海外領土に在つては其人口内地に比し大に稀薄であつて、平均一方里人口、内地二三七四人に對し、海外領土は一二四一人、内地人の海外領土に移住せるもの僅に百萬人に過ぎず、而も猶開拓すべき多くの天産物資を藏し、之が調査研究は、經濟的行き詰りの觀を呈せる我國に於て、頗る緊要の事に屬する。仍ち、本會茲に觀るところあつて、之が調査研究資料たるべき海外諸領地の各種統計を總括し、無味乾燥なる數字を、興味深くして理解し易き圖表に作成し、以て海外領土の狀勢を一覽の下に會得通解せしむべき企圖に於て本書を編纂した次第である。

附言

一、拓務省に於ては、深く此擧に贊意を表せられ、あらゆる必要の資料を貸與し、且つ、圖表解說、共に、一々之を檢閲して補足訂正された。

一、朝鮮總督府、臺灣總督府、樺太廳、關東廳、南洋廳、南滿洲鐵道株式會社に於ても同じく資料の貸與、其他各種の便宜を與へられた。

一、右の如く各當局官廳に於て調査蒐集された最も正確なる資料の中から取捨撰擇して、之を統一ある編成となし、通覽比較對照に便ならしめた。

一、圖表の作成は最も苦心せる處であつて、何人にも一見容易に理解せしむる事を主意とし、正確緻密にして興趣ある圖表となすべく大に努めた。

一、解說は平易を旨とし、難解の字句を避け、而も必要の事項は勉めて懇切に之を說明し、通讀理解に便した。

昭和五年十月

内外經濟調査會

編輯部

拓殖總覽目次

朝鮮の部

■現在戶口圖表……五
▲戶　數……五ノ一
▲人　口……五ノ二
▲各道別戶口……五ノ三
▲平均一方里人口……五ノ四
■現住戶口職業別圖表……七
▲漁　業……七ノ一
▲商　業……七ノ二
▲林　業……七ノ三
▲工　業……七ノ四
▲牧　畜……七ノ五
▲農　業……七ノ六
▲公務及自由業……七ノ七
▲其ノ他ノ有業者……七ノ八
▲朝鮮現在內地人戶口本籍別圖表……七ノ九
▲戶　數……七ノ一〇
▲人　口……七ノ一一
▲內地朝鮮氣候比較……七ノ一二
▲一年平均氣溫……七ノ一三
■交通圖表……一一
▲鐵　道……一ノ一
▲船　舶……一ノ二
▲乘客數……一ノ三
▲貨物數量……一ノ四
▲運輸成績表……一ノ五
▲船舶現在數……一ノ六
■朝鮮總督府特別會計圖表……一五
▲歲　入……一五ノ一
▲歲　出……一五ノ二
▲歲入主要科目……一五ノ三
▲歲出主要科目……一五ノ四
■金融機關圖表……一九
▲朝鮮銀行總況……一九ノ一
▲朝鮮殖產銀行一覽……一九ノ二
▲手形交換所手形交換高……一九ノ三
■農業者戶數及人口圖表……二三
▲戶　數……二三ノ一
▲人　口……二三ノ二
■主要農作物作付段別及收穫高圖表……二七
▲米作付段別及收穫高……二七ノ一
▲麥類作付段別……二七ノ二
▲麥類收穫高……二七ノ三
▲豆類作付段別……二七ノ四
▲豆類收穫高……二七ノ五
■商業及畜產圖表……三一
▲朝鮮ニ本店ヲ有スル會社營業種別……三一ノ一
▲朝鮮ニ支店ヲ有スル內地及外國會社……三一ノ二
▲鹽輸移入高……三一ノ三
▲人蔘生產高……三一ノ四
▲家畜及家禽數……三一ノ五
■貿易額圖表……三五
▲輸　移　出……三五ノ一
▲輸　移　入……三五ノ二
▲港別貿易額……三五ノ三
▲釜山開港以來累年貿易額表……三五ノ四
■輸移出入重要品價額圖表……三七
▲輸移出米、大豆、生糸、鮮乾鹽魚其ノ他十八種……三七ノ一
▲輸移入、粟、肥料、機械類、其ノ他二十八種……三七ノ二
■水產業及林業圖表……四一
▲出漁船數……四一ノ一
▲乘組人員……四一ノ二
▲漁獲高……四一ノ三
▲造林本數……四一ノ四
▲造林面積……四一ノ五
▲林野概算面積……四一ノ六
■鑛業面積及鑛產額圖表……四五
▲面　積……四五ノ一
▲生產高……四五ノ二
▲生產額……四五ノ三
■拓殖資金供給高圖表……四九
▲各年度末拓殖資金供給高……四九ノ一
▲拓殖資金供給地域別……四九ノ二
■殖民地郵便累年比較圖表……五三
▲郵便物受付及配達數……五三ノ一
▲郵便振替受付高……五三ノ二
▲郵便貯金受拂高……五三ノ三
▲電報受付及配達數……五三ノ四

臺灣の部

■有租地圖表……五七
▲田……五七ノ一
▲畑……五七ノ二
▲養魚池……五七ノ三
▲建物敷地……五七ノ四
▲合計比較……五七ノ五
■無租地圖表……五九
▲國有……五九ノ一
▲民有……五九ノ二
▲合計比較……五九ノ三
▲土地割合……五九ノ四
▲增減比較……五九ノ五
■人口累年比較圖表……六三
▲合計割合……六三ノ一
■氣象圖表……六七
▲溫度……六七ノ一
▲雨量……六七ノ二
▲濕度……六七ノ三
▲風速力……六七ノ四
▲島內各地平均雨量……六七ノ五
■臺灣總督府特別會計歲入及歲出圖表……七一
▲歲入……七一ノ一
▲歲出……七一ノ二
▲主要科目歲入二箇年比較……七一ノ三
▲主要科目歲出二箇年比較……七一ノ四
■專賣事業圖表……七五
▲阿片煙膏販賣數量及價額……七五ノ一
▲煙草販賣價額……七五ノ二
▲酒類販賣數量及價額……七五ノ三
▲食鹽販賣數量……七五ノ四
■交通圖表……七九
▲樟腦油、肥料、茶、薪炭、米、煉瓦土器類、石炭、甘蔗、砂糖……七九ノ一
▲運輸數量（貨物、旅客）……七九ノ二
▲運輸收入（貨物、客車）……七九ノ三
■耕地累年比較圖表……八五
▲米收量、作付面積……八五ノ一
▲甘藷、茶、收量、作付面積……八五ノ二
■製糖成績圖表……八九
▲原料使用高……八九ノ一
▲砂糖製造高……八九ノ二
▲糖蜜製造高……八九ノ三
▲甘蔗收量及植付面積累年表……八九ノ四
▲砂糖生產額ノ變遷……八九ノ五
■林業圖表……九三
▲蓄積……九三ノ一
▲面積……九三ノ二
▲阿里山……九三ノ三
▲八仙山……九三ノ四
▲濁水溪……九三ノ五
■水產、工業及鑛業圖表……九七
▲水產業產額累年表……九七ノ一
▲水產貿易額對照表……九七ノ二
▲茶輸出表……九七ノ三
▲鑛產價格種別表……九七ノ四
▲金、金銅鑛、砂金、銀、銅、硫黃、石油、採發油、石炭……九七ノ五
■內地貿易品累年價額圖表……一〇一
▲移出……一〇一ノ一
▲移入……一〇一ノ二
▲主要移出品……一〇一ノ三
▲主要移入品……一〇一ノ四
■外國貿易品累年價額圖表……一〇五
▲輸出……一〇五ノ一
▲輸入……一〇五ノ二
▲主要輸出品……一〇五ノ三
▲主要輸入品……一〇五ノ四

關東州南滿洲の部

■戶口圖表……一〇九
▲戶數……一〇九ノ一
▲人口……一〇九ノ二
▲管轄別人口……一〇九ノ三
▲職業別人口……一〇九ノ四
▲一方里平均人口割合……一〇九ノ五

■關東廳特別會計圖表……一一三
▲歲　入……一二ノ一
▲歲　出……一二ノ二
▲歲入主要項目……一二ノ三
▲歲出主要項目……一二ノ四
▲地方費收入支出……一二ノ五
▲地方費收入主要項目……一二ノ六
▲地方費支出主要項目……一二ノ七
■農業圖表……一一九
▲農業者戶數……一九ノ一
▲農業者人口……一九ノ二
▲州內各署別耕地面積……一九ノ三
▲穀菽類收穫高……一九ノ四
▲蔬菜類收穫高……一九ノ五
▲特用作物收穫高……一九ノ六
▲果實生產高……一九ノ七
■氣象圖表……一二一
▲滿洲各地氣溫　▲滿洲各地降水量……一二ノ一
▲滿洲各地風向風力　▲氣象平均各地對照……一二ノ二
■牧畜圖表……一二三
▲全滿洲家畜數……一二三ノ一
▲關東州家畜及家禽數……一二三ノ二
▲滿洲毛皮出廻高……一二三ノ三
▲關東州及滿鐵附屬地內屠肉量……一二三ノ四
■鑛業圖表……一二九
▲三港豆粕輸出噸數……一二九ノ一
▲三港豆油輸出噸數……一二九ノ二
▲三港豆粕輸移出價額……一二九ノ三
▲三港豆油輸移出價額……一二九ノ四
▲土石類產額……一二九ノ五
▲鑛產物產額……一二九ノ六
▲鑛產物生產高……一二九ノ七
■工業圖表……一三一
▲工場別投資金額……一三一ノ一
▲生產價額……一三一ノ二
▲生產額累年比較……一三一ノ三
■水產業圖表……一三五
▲關東州漁獲高（數量價額）……一三五ノ一
▲關東州水產製造高（數量價額）……一三五ノ二
▲鹽田面積……一三五ノ三
▲製鹽高……一三五ノ四
▲製鹽輸出高……一三五ノ五
▲製鹽移出高……一三五ノ六
▲會社別製鹽高……一三五ノ七
▲會社別移輸出高……一三五ノ八
■商業圖表……一三九
▲會　社……一三九ノ一
▲株式取引高……一三九ノ二
▲手形交換高……一三九ノ三
▲信託會社營業成績……一三九ノ四
▲民營取引所營業成績……一三九ノ五
■南滿洲鐵道株式會社事業圖表……一四三
▲鐵道運輸收支……一四三ノ一
▲鐵道運輸收入區別……一四三ノ二
▲大連埠頭營業收支……一四三ノ三
▲大連埠頭輸出入貨物噸數……一四三ノ四
▲石炭賣却噸數……一四三ノ五
▲諸事業投資額……一四三ノ六
▲地方經營公費歲計……一四三ノ七
■南滿洲鐵道營業收支累年比較圖表……一四七
▲收　入……一四七ノ一
▲支　出……一四七ノ二
▲營業收支內譯……一四七ノ三
▲損　益……一四七ノ四
■滿蒙鐵道一覽圖表……一四九
▲南滿洲鐵道輸送乘客及貨物……一四九ノ一
▲東支鐵道營業收支……一四九ノ二
▲北寧鐵道營業收支……一四九ノ三
▲東支鐵道輸送乘客及貨物……一四九ノ四
▲北寧鐵道輸送乘客及貨物……一四九ノ五
■南滿三港總貿易高圖表……一五三
▲輸　入　高……一五三ノ一
▲輸　出　高……一五三ノ二
▲三　港　合　計……一五三ノ三
▲南滿三港對手國別貿易……一五三ノ四
▲輸出對手國百分比……一五三ノ五
▲輸入對手國百分比……一五三ノ六

■南滿三港貿易品別價額圖表……一五七
▲輸出高……一五七ノ一
▲輸入高……一五七ノ二
■北滿洲貿易高圖表……一五九
▲輸出高……一五九ノ一
▲輸入高……一五九ノ二
▲哈爾賓稅關管內對手國別貿易……一五九ノ三
▲哈爾賓稅關管內主要輸出入品……一五九ノ四

樺太の部

■樺太戶口圖表……一六三
▲戶數……一六三ノ一
▲人口……一六三ノ二
▲職業別人口……一六三ノ三
▲種族別人口……一六三ノ四
▲支廳別人口……一六三ノ五
■特別會計歲入及歲出圖表……一六七
▲歲入……一六七ノ一
▲歲出……一六七ノ二
▲歲入主要科目……一六七ノ三
▲歲出主要科目……一六七ノ四
▲各銀行貸付及預金額……一六七ノ五
■農業圖表……一七一
▲農業者戶口(戶數人口)主要農作物收穫高……一七一ノ一
▲數量、價額……一七一ノ二
■鑛業圖表……一七五
▲出炭額累年表……一七五ノ一
▲石炭需要額表……一七五ノ二
▲封鎖炭田責任出炭量……一七五ノ三
■林業圖表……一七九
▲事業成績……一七九ノ一
▲製材賣却數量……一七九ノ二
▲製材賣却價額……一七九ノ三
■水產業圖表……一八三
▲鰊漁獲高……一八三ノ一
▲鮭及鱒漁獲高……一八三ノ二
▲鰒及鰛漁獲高……一八三ノ三
▲蟹漁獲高……一八三ノ四
▲昆布製品高……一八三ノ五
▲鹽鰊鰮蕃殖狀況……一八三ノ六
■商業圖表……一八七
▲貿易總表……一八七ノ一
▲內地貿易(移出高、移入高)……一八七ノ二
▲外國貿易(輸出高、輸入高)……一八七ノ三
▲パルプ資材生產高……一八七ノ四
▲酒造高及移入酒高……一八七ノ五

南洋の部

■南洋戶數及人口圖表……一九三
▲戶數……一九三ノ一
▲人口……一九三ノ二
▲密度……一九三ノ三
▲職業別人口……一九三ノ四
▲邦人本籍別人口……一九三ノ五
■農業、林業、糖業圖表……一九七
▲農業者戶口……一九七ノ一
▲耕地面積……一九七ノ二
▲椰子林面積及生產高……一九七ノ三
▲燐鑛(精鑛)移出累年表……一九七ノ四
▲甘蔗作付面積及產糖高……一九七ノ五
■貿易圖表……二〇一
▲移出品……二〇一ノ一
▲移入品……二〇一ノ二
▲移輸入品累年表……二〇一ノ三
▲移輸出品累年額……二〇一ノ四
▲輸出入島別比較……二〇一ノ五
■海外拓殖事業圖表……二〇七
▲移民渡航者總數……二〇七ノ一
▲補助、契約、非契約別移民數……二〇七ノ二
▲職業別移民數……二〇七ノ三
▲出身地別移民數……二〇七ノ四
▲渡航地別移民數……二〇七ノ五
▲在留地別邦人數……二〇七ノ六
▲各地組合員數及移住者送出數……二〇七ノ七
▲邦人栽培面積地方別表……二〇七ノ八
▲主要栽培物植付面積……二〇七ノ九
▲在外邦人總數……二〇七ノ一〇
■拓殖總覽關係法規抄……二〇九—二一四

朝鮮の部

（昭和五年度朝鮮總督府調査）

■地形及地勢

【地　形】朝鮮は亞細亞大陸の東部に斗出せる一大半島にして、東經百二十四度十一分より百三十度五十六分二十三秒、北緯三十三度六分四十秒より四十三度三十六秒の間に位置し、その面積は**一萬四千三百十二方里**に及び、本州と略ぼ伯仲の間にある。東は日本海に面し、西は黃海に臨み、南は朝鮮海峽を隔てゝ九州及び中國と相對し、北は鴨綠江及び豆滿江によりて滿洲及び露領に界して居る。東部海岸は概して良港に乏しく僅かに元山、城津、淸津、雄基等を數ふるに過ぎないが、南部及び西部海岸は大小の島嶼散在し、幾多の岬灣出入して良港を形成し、就中、釜山、木浦、群山、仁川、鎭南浦等は著名なるものである。

【地　勢】朝鮮の地勢は、蜿蜒たる長白山脈が東北方より西南に連りて北方の國境を擁し、その一脈は南に延び、平安南北道及び咸鏡南北道の境を劃して江原道に入り、東海岸線に沿ひて南に走り、以て半島の脊梁を成して居る。この脊梁山脈以東の地は斜面急峻にして、大川、平野は少いが、その以西は比較的傾斜が緩漫で、處々に平野開け、鴨綠江、洛東江、大同江、漢江、錦江、蟾津江の六大江を始め大小の河川多く、舟楫の便と灌漑の利に富んでゐる。造林、治水の事業未だ完からざる爲め、屢々洪水旱魃の害を蒙ることあるも地味概して肥沃なる爲め農業に適し、米、麥、豆類、雜穀人蔘、棉花、煙草、繭、麻、蔬菜、果實等の農産物に富み、また牛、木材、鑛物等をも産するのみならず、沿海は魚族その他の水産物が極めて豊富である。斯くの如き狀態なるを以て現在は、國民生活上必要なる食糧の供給に不足せず、その剩餘を年々巨額の輸移出して居る。



朝鮮總督府

■氣　候

【氣　溫】朝鮮に於ける一年平均氣溫は、南部海岸は攝氏十三度餘にして、北進するに從ひて次第に遞減し、中央部京仁地方は十度内外なるも、國境内陸に入れば四度乃至三度に降る。また東部海岸地方は西部海岸地方に比すると氣候溫和にして、夏季を除けば約二度内外高溫なるを常として居る。これは西部海岸は冬季北西の季節風多きも、東部海岸は脊梁山脈のため風勢微弱となり、且つ海水溫度が西部海岸に比し高溫なるに因るのである。尙ほ寒氣は南北に於て大差あるも、暑氣はその差少く、酷寒期たる一月の最低氣溫日々の平均は、國境内陸地方に於ては零下二十九度に下降するも、南部海岸は零下一度餘にして約三十度の大差を見、酷暑八月中の最高平均氣溫は大邱の三十一度を最高とし、雄基の二十四度を最低とし、僅に七度の差に過ぎない。

【季節風】亞細亞大陸の東部は一般に季節風の勢ひ強きを以て、朝鮮に於てもまた季節に因り、主風方向略ぼ一定し、冬季大陸方面より來る風は朝鮮附近に於て北西風となり、夏季は一般に南偏の季節風となり、兩季節風の交替期たる春秋の候は風向區々にして一定しない。兩季節風は雪に風向相反するのみならず、冬季は空氣一般に乾燥して天氣晴れ、氣壓の傾斜概して急峻で風力も強いが、夏季は溫潤にして曇天、雨天の日多く、且つ氣壓の勾配緩やかなるを以て風勢弱く、また冬季の季節風は夏季の季節風に比し、その期間永く特長が甚だ著しいのである。西部海岸地方は、冬季北西風を受くるを以て、この季節に於て風力強きも、東部海岸地方は、これに反して脊梁山脈に遮らるゝ爲め風勢弱く、全域を通觀すると、風勢は沿岸地方に於て強く、内陸に於て弱き傾向がある。

【雨　雪】雨雪の年量は概して少く、全土の大半は八百乃至千粍を示し、南東部海岸は稍多く、北部並に北西方に至るに從ひ次第に遞減してゐる。即ち釜山より元山に至る沿岸地方は年量千五百粍に達し半島中最多雨地方に屬し、中部は約千粍、西部海岸は九百乃至千粍を測るも、北部内陸地方は遙かに減少して七百粍内外となり、就中咸鏡南北兩道の高原地方は最も寡雨にして、年量五百粍に滿たざる處がある。降雨狀況は内地と著しく異なり、季節によりて差異甚だしく、十月より三月に至る間は乾燥期にして雨量極めて少きに反し、六月より八月に至る三箇月間は降雨期に屬して居る。而して南部地方に於ては降雨の最盛期は七月なるも、東部海岸地方の北部は八月にして時に九月に渉ることがある。斯の如く各地方に通じて、雨期と乾燥期と截然たる區別あるは半島の一特色である。朝鮮は内地に比して雨量少く、且つ空氣乾燥し、加ふるに日照時數の多い爲めに蒸發が盛んで、元山以南の東岸を除く外は一般に降水量を超過し、年量は南部の釜山地方最も多く、千五百粍弱に達し、漸次北進するに從ひ遞減するも、京畿、黃海の沿岸並に雄基の地方に至ると稍增加して千三四百粍を算し、最少量なる江原道以北の東部海岸及び北部内陸地方に於ても千乃至千二百粍を示すのである。

【濃　霧】朝鮮近海は著名なる濃霧の發生所で、その區域は殆ど沿岸全線に亘り、航海業者の常に警戒を怠らざる所である。就中、最も多い多島海附近は濃霧日數一年中七十日内外に達し、西部近海、北東部沿岸地方又た之れに亞ぎ、その他は二十日乃至五十日の間に在り、元山以南の東部海岸地方最も少く、また濃霧は沿岸に近づくに從ひて減少し、内陸に入りては殆んど皆無となり、冬季は概してこれを見ないが、初春より漸次發生して、晩春より初夏の候に最も盛んとなり、盛暑期に入るに及び減退するを常として居る。

【降　雪】降雪終始の期は年々遲速あるも、初雪は北部高原地方に於て最も早く十月下旬に見、他は概ね十一月に、南東海岸地方は最も晩くして十二月下旬になる。終雪は北部國境地方が最も晩くして四月末に、釜山地方は最も早くして三月上旬、その他は三月中旬乃至四月中旬の間に在る。冬季は一般に雨雪量少き爲めに、積雪一二尺に及ぶは北部の山地に限られ、中部以南の平原に於ては五寸を超ゆることは稀れである。また初霜は北部地方に在りては九月上旬に見るも、他は概ね十月中旬より十一月中旬の間に在りて四月中に終るを一般とし、北方地方に於ては五月に入りて終るを常として居るが、南部に於ても往々五月中旬に晩霜を見ることがある。

これを要するに、朝鮮の氣候は大陸の影響を受くることが多く、内地に比し寒暑の差違は著しいがその地勢が南北に長く、略ぼ九州の南端より北海道の北端までの間に於て見る寒暑と大差のない爲め動植物の分布もまた内地と朝鮮とは相似た所が多く、從つて内鮮人相互の移住同化及び經濟的提携には極めて好都合である。試みに朝鮮に於ける主要地の緯度を示し、これを内地の著名地の緯度と比較して見ると圖表の如くなつて居る。氣候の寒暖は同緯度の地に在りても、沿岸を通ずる潮流や、土地の高低、地勢の關係などによりて一定せず、殊に氣候上大陸の影響を受くること大なる朝鮮と、海洋の支配を受くること多き内地とは、必ずしも同一に見ることは出來ぬけれども、

人口の集中や物産の分布が、緯度の影響を蒙ることの尠くないのは論を俟たない（朝鮮都市と內地都市との氣温の比較圖表は次頁にあり。

■面積

朝鮮全土の面積は**一萬四千三百十二方里**で本州より恰かも滋賀縣の面積を除いたものに略ぼ匹敵して居る。朝鮮十三道中で、面積の最も大きいものは咸鏡南道（九州より鹿兒島縣を除）の二千七十三方里餘、その最も小さいものは忠清北道（宮崎縣の面積に略ぼ等し）の四百八十一方里である。各道別の面積及び道廳所在地は左の如くなつて居る。

各道別面積表

道名	道廳所在地	面積
京畿道	京城	八三一方里
忠清北道	淸州	四八一
忠清南道	公州	五二六
全羅北道	全州	五五三
全羅南道	光州	九〇〇
慶尙北道	大邱	一、二三一
慶尙南道	釜山	七九八
黃海道	海州	一、〇八五
平安南道	平壤	九六八
平安北道	新義州	一、八四四
江原道	春川	一、七〇三
咸鏡南道	咸興	二、〇七三
咸鏡北道	羅南	一、三一九
合計		一四、三一二

■土地

朝鮮全土をその土地の組成別にして見ると、林野一千六百四十七萬町歩、畓（內地の田に相當す）百六十萬三千町歩、田（內地の畑に相當す）二百八十五萬一千町歩、僧（宅地）十三萬一千町歩、其他百二十萬三千町歩となつて居る。

▲面積の組成別（昭和二年末調査）

道名	林野	畓	田	僧（宅地）	其他	合計
	千町歩	千町歩	千町歩	千町歩	千町歩	千町歩
京畿道	三九	一四	一八六	一四	一二	二七一
忠清北道	一四六	三〇	八九	六	三	二七四
忠清南道	一二一	一三〇	八三	一〇	四	三四八
全羅北道	三五	一三〇	二一〇	九	三	三六七
全羅南道	八九五	三五	三一〇	一五	七	九六三
慶尙北道	一、三五〇	一四〇	一九七	一三	一三	一、九一四
慶尙南道	八三一	一五一	一〇八	九	一三	一、一三〇
黃海道	一、〇〇八	一三一	四四	一一	一三	一、二七七
平安南道	九九	二七	三九	八	一〇	一、三〇四
平安北道	二、三四八	八〇	三九	八	一〇	二、八六八
江原道	二、三三三	八二	一六一	八	七	二、二三九
咸鏡南道	二、八二一	四八	三六	八	一三	二、〇四一
咸鏡北道	一、三〇四	一三	三五	三	一二	一、三〇四
總計	一六、四四〇	一、二〇四	二、八五一	一、一〇五	二一七	二三、二八八

朝鮮の面積の組成別割合を見るに、林野は實に七割三分九厘を占め、畓七分二厘、田一割二分八厘、僧六厘、其他五分四厘となつて居る。總人口一人に付耕地面積は、內地の一段一畝歩、臺灣の一段九畝歩に對し、朝鮮に二段四畝歩である。また農家一戸當り耕地面積は、內地の一町一段一畝歩、臺灣の一町九段五畝歩に對し、朝鮮は一町六段歩である。この點より見るも朝鮮は農業上に於て有望なる將來を有して居るが、未だ土地の利用に於ては內地に比較して甚だしく劣つて居り、最近に於ける未墾地の面積は**七萬三千八百四十九町歩**に達して居る。さればこの廣大なる未墾地の利用を計ることも、また國利民福の增進上極めて大切なことである。

▲國有私有未墾地面積

道別	國有	民有	合計
	町歩	町歩	町歩
京畿道	三、九一〇	一、三四〇	五、二五〇
忠清北道	四二〇	四五八	八七八
忠清南道	二、七二三	二、四七七	五、二〇〇
全羅北道	一、一五〇	二、一二四七	三、三九七
全羅南道	二、〇五八	一、二〇八	三、二六六
慶尙北道	一、七六六	一、五二〇	三、二八六
慶尙南道	三、一四六	一、五二〇	四、六四八
黃海道	七一七	三、三〇〇	四、〇一七
平安南道	二、三三〇	二、五九七	四、九二七
平安北道	一、三二一	一、九四六	三、二六七
江原道	七、八七三	九、八一九	一六、六九二
咸鏡南道	二、二四七	一、七三八	三、九八五
咸鏡北道	一〇、八七一	二、六七八	一三、五四九
合計	四〇、五三二	三三、三一七	七三、八四九

▲備考　朝鮮に於ける未墾地に對しては從來正確なる調査を遂げたるものなく、本表の面積は各地方に付概觀的に算定せるもので、目下實施中の土地改良基本調査完了の上は相當修正せらるべきものである。

【未墾地】　別表の外山麓傾斜地の大部分は未墾地に屬し、殊に咸鏡南北道及び江原道地方には一箇所數百町歩に亘るものありて、未墾地の利用は產業の開發と共に有利なるを認め、田畓に開墾するものが漸次增加して居る。而して國有未墾地利用法は、これが利用奬勵の趣旨を以て制定せられたるものにして、處分の敏活を期し事業の促進を圖るため、面積十町歩未滿のものに在りては所轄道知事の處分に委ねられ、その他のものは朝鮮總督の許可を受くるのである。貸付期間は最長十箇年にして、公共の利益となるべき事業に供するもの又は農民若くは漁民の宅地に供するものとし、その他の利用に付ては拂下を受けねばならぬ。未墾地の貸付料は一町歩五十錢であるが、特別の事由ある場合はこれを減免される事に成つて居る。

【干潟】　干潟及び沼澤は從來國有未墾地として取扱はれたるも、大正十三年八月以降朝鮮公有水面埋立令施行せられたる結果、埋立及び干拓に付ては同令の適用を受くることゝなつた。從來國有未墾地利用法に依り處分せられたるもの內、比較的大面積のものは公有水面（干潟）にして、一個所數百町歩數千町歩に達するもの尠なからず、これが利用に當りては築堤、水門等の設備に相當費用を要するも、內地のそれに比すると遙かに僅少の額にて足るのみならず、その餘地も甚だ多く、且つ畓は成功後地味概ね肥沃にして收益亦鮮少ならざるを以て、これが利用を出願するもの漸次增加し、着實なる事業家の投資する者多きを加ふるに至つたのである。その取扱に付ては國有未墾地と大同小異であるが、公有水面埋立令及び同埋立法に於ては、免許の法定期間なく免許料を徵せず、且つ工事竣功認可に依り所有權を取得することになつて居る。

■戸口

昭和三年十二月三十一日現住戸口に依れば總戸數**三百六十二萬六千八百八十九戸**にして其の內々地人十二萬二千七百七十三戸、朝鮮人三百四十八萬九千三百四十四戸、外國人一萬七百七十二戸、人口總數**一千九百十八萬九千六百九十九人**にして、其の內々地人四十六萬九千四十三人、朝鮮人一千八百六十六萬七千三百三十四人、外國人五萬三千三百二十二人なり。（圖表參照）

著名地

【京　城】朝鮮の首都にして李朝五百年間の王城の地たり、總督府の始政後行政區域次第に擴張せられ、今や龍山、麻浦を併せ東西一里三十餘町、南北三里十餘町、抱擁人口三十餘萬、街衢井然、而かも現代文明の諸設備一として闕然する處なく、內地に於ける都市に比し、毫も遜色なきのみならず、歐亞連絡の沿線中モスクワ以東唯一の最大都市にして、朝鮮に於ける政治上、文教上の中心地たるは勿論又た經濟上の心臟部とも云ふべき重要都市たり、朝鮮銀行、朝鮮殖産銀行、朝鮮商業銀行、漢城銀行、韓一銀行等も又た此の地に本店を有せり、其他東洋拓殖會社の業務部及び著名なる內地の銀行、會社等當市に支店を有せざるなし、以て當市の盛賑推知するに足る。
人口三十二萬千八百四十八（內地人八萬六千五百四十八、朝鮮人二十三萬七百三十四、外國人四千五百六十六）

【仁　川】京城より二十四哩西に在りて釜山に亞ぐべき貿易港なり、月尾島、沙島等其の前面に橫はりて內海を圍み、八尾島遙に外港を成す、潮水の干滿甚しく其の差三十三尺に及ぶ、築港は閘門式船渠にして渠內には四千五百噸級の汽船三隻繫留するを得べし、內地及び滿洲諸港との定期航海の便あり。
人口五萬七千四百四十九（內地人一萬千二百六、朝鮮人四萬四千二百八十八、外國人九百五十五）

【水　原】京城を距る南方二十六哩の地點に在り華城址、華寧殿、訪花隨柳亭杭眉亭等の遺蹟を存せり、人口一萬一千五十九（內地人一千三百八十四、朝鮮人九千六百二十四、外國人五十一）

【清　州】鳥致院より東に分ゝ朝鮮中央鐵道線十四哩の地にして邑內に有名なる石橋及鐵幢あり。人口一萬二千四百一（內地人二千七百六、朝鮮人九千千六百六十三、外國人百八十九）

【大　田】湖南線の分岐點にして、京釜線中大邱に亞ぐべき貨物集散地なり。
人口一萬六千四百四十二（內地人六千七十九、朝鮮人一萬二百十七、外國人二百六）

【江　景】湖南線中の一要驛たり、又た錦江を利用して舟楫頗る便なり。
人口一萬千九十（內地人一千五百七十九、朝鮮人九千二百九十四、外國人二百十七）

【裡　里】湖南線より群山及び全州に至る鐵道の分岐點にして、全州平野地を占め、四邊に著名なる農場多く、農作物の搬出頗る豐富にして商業殷賑の地なり。人口一萬四千十二（內地人三千四百七十三、朝鮮人一萬四百十三、外國人百二十六）

【群　山】南鮮有數の貿易港にして米穀の輸移出釜山及び仁川に亞ぎ大連、仁川、木浦、內地との間に定期航路あり又た江景、公州地方よりは舟楫を利し、裡里よりは鐵道の便あり、貨物の集散上甚だ便にして商況又た繁盛を極む。
人口二萬四千八百五十八（內地人八千二百四十五、朝鮮人一萬六千七十五、外國人五百三十八）

【全　州】湖南線裡里驛より東南十哩餘鐵道開通し、全州、平野を控へ有名なる米産地にして內地人の農事經營者頗る多く殊に養蠶及び製紙の業亦旺盛を極む。人口二萬二千百三十五（內地人四千百三、朝鮮人一萬七千六百六十三、外國人三百六十九）

【木　浦】湖南線の終點にして米穀、棉花、海産物の貿易盛んに行はる、內地の諸港及び沿海各地との間には定期航路の便あり、此の地商業殷盛にして、朝鮮銀行、殖産銀行及び大會社の支店尠からず。
人口二萬九千八百九十四（內地人七千九百三十一、朝鮮人二萬千七百七、外國人二百五十六）

【大　邱】京城を南に距る二百三哩、地味肥沃なる平野を繞らし穀類、果實、棉花、煙草、漢藥等の集散地にして街況極めて殷盛古來有名の市場たり。
人口八萬八千六百九（內地人二萬六千五百三十四、朝鮮人六百十八）

【慶　州】大邱の東方十七里許り自動車及び鐵道の便あり、新羅千年の古都にして瞻星臺、石氷庫、月城、南山城、歷代の王陵、古墳等今尙存するもの尠からず。人口一萬六千九百九（內地人六百八十八、朝鮮人一萬六千二百八十三、支那人三十八）

【釜　山】內地朝鮮間交通の咽喉にして、海陸運輸連絡の設備完整し京城を南に距る二百八十哩餘、京釜線の最南端に位し大阪、浦鹽並に鮮內諸航路の寄港地にして商業頗る殷賑を極む、又た附近に東萊、海雲臺等の溫泉地あり。
人口十一萬六千二百七（內地人四萬二千二百四十六、朝鮮人七萬三千三百三十六、外國人六百二十五）

【馬　山】鎭海灣の良港にして鐵道の便あり、釜山を距る海路三十九浬灣內景色に富み舊蹟亦多し。人口二萬三千七百三十四（內地人五千三百三十九、朝鮮人一萬八千三百、外國人百九十五）

【鎭　海】馬山半島と固城半島との間に在りて巨濟島其の南に橫はれり、灣內水深く、山を負ひ海に臨みて形勝を占む、又た鎭海灣防備隊の根據地なり。
人口一萬五千五百二十九（內地人四千九百三十三、朝鮮人一萬五百七十三、外國人二十三）

【統　營】慶尙南道の最南端に突出する大漁港にして、釜山より四十浬の南西に當り、多島海に面し風景絕佳氣候又た溫和なり、附近には名勝古蹟多し。
人口一萬八千三百十五（內地人二千七百三十六、朝鮮人一萬五千五百三十三、外國人四十六）

【開　城】京城を西北に距る四十五哩餘一に松都と稱し、高麗朝四百餘年の古都にして頗る名勝古蹟に富めり、殊に朝鮮人蔘は白菜と共に此地の特産たり。
人口四萬四千五百九十九（內地人千三百八十八、朝鮮人四萬三千二十二、外國人百八十九人）

【海　州】京義線沙里院驛を距る十八里廿三町にして鐵道、自動車の便あり。
人口一萬九千百十（內地人二千六十三、朝鮮人一萬六千八百七十七、外國人百七十）

【平　壤】京城を西北に距る百六十一哩餘、西鮮に於ける貨物集散地たるのみならず、附近に於ける石炭及び鐵鑛其の他諸鑛物の豐富なる埋藏と水量多き大同江と相俟ち、大工業地を以て目せらる、又名勝古蹟として牡丹臺、乙密臺、七星門、玄武門、大同門、箕子陵、練光亭、浮碧樓、綾羅島等あり。
人口十二萬七千百三（內地人二萬五千五百五十九、朝鮮人十萬六百二十八、外國人九百十六）

【鎭南浦】平壤の西三十四哩餘、京義線の一支線平壤より分岐して此に達す、大同江口に在る貿易港にして阪神及び支那安東、大連等に至る航路あり商業又た殷盛を極む。人口三萬五百二十一（內地人五千二百六十六朝鮮人二萬四千百九十三、外國人千六十二）

【新義州】京城を北西に距る三百八哩餘、鴨綠江に架せる三千九十八呎の大鐵橋を以て安奉線に連絡し、又た江上舟楫の便を有すること百廿餘里に達す。
尙最近總督府に於ては附近楊下、北中の兩面の地を拓き、一大製鋼所建設計畫中なりと、果たして實現せば之に隨伴せる各種の產業勃興し、交通の發達人口の增加等、將に西鮮地方唯一の大都會を現出するに至らんか。
人口二萬六千三百四十二（內地人六千六百七十七、朝鮮人一萬五千三百三十六、外國人四千三百二十九）

【義　州】新義州の東北四里三十町、鴨綠江を隔てゝ遙に九連城と相對せり。
人口一萬二百六十三（內地人四百六十九、朝鮮人九千五百五十三、外國人二百四十一）

【春　川】京城を距る東北二十三里餘自動車の便あり。附近に名勝古蹟少なからず。人口七千八百三十五（內地人千三百九十、朝鮮人六千三百八十三、外國人六十二）

【金剛山】江原道に在り區域十餘方里奇峰簇立一萬二千峰の稱あり、順路は鐵原驛若くは平康驛より金化、末鮮里を經卅餘里にして內金剛長安寺に至るものと元山驛より庫底、長箭を經て卅六里にして外金剛溫井里に至るものとあり、又別に元山港より汽船に乘り長箭港を經て溫井里に至る交通の便あり。

【元　山】京城の北百四十哩餘永興灣の一部を占め松田灣と相對し南より葛麻岬北より虎島岬の突出と更に灣外に橫はれる大島、高島等は自然の防波堤を爲し、築港工事亦竣成して大阪並に浦鹽及び裏日本との交通頗る盛んなり。
人口四萬五百九十六（內地人一萬六百五十六、朝鮮人二萬九千七十七、外國人八百六十三）

【咸　興】京城を北に距る二百十七哩餘、北に盤龍山を負ひ西北は城川江に臨み西南に平野を控へ、土地繁盛なり、附近に本宮、歸州寺、定陵、和陵等の古蹟あり。人口三萬二千二百四十九（內地人六千三十七、朝鮮人二萬五千九百六十七、外國人二百四十五）

【城　津】元山の北方百二十四浬餘日本海に面せる開港場にして咸鏡南北兩道一部の貨物集散地たり。人口九千五百十六（內地人一千二百五十、朝鮮人八千百九、外國人百五十七）

【鏡　城】南に鏡城川を控へ北に勝巖山を負ふ元帥臺は邑南里餘に在り古來其の名高し。人口一萬五千四百十六（內地人三百六十九、朝鮮人一萬四千九百六十八、支那人七十九）

【羅　南】清會線輸城驛より九哩餘の南に在り、兵營及び朝鮮、殖產兩銀行の支店等あり。人口一萬二千六百九十四（內地人五千九百二、朝鮮人六千五百八十六、外國人二百六）

【會　寧】豆滿江岸の大邑にして間島貿易の要衝に當り林業、採炭等の商業頗る殷盛なり。人口一萬三千五百二十五（內地人二千二百六、朝鮮人一萬八百九十一、外國人四百二十八）

圖表對照統計

◇各道面積と現住戶口表（昭和三年末調査）

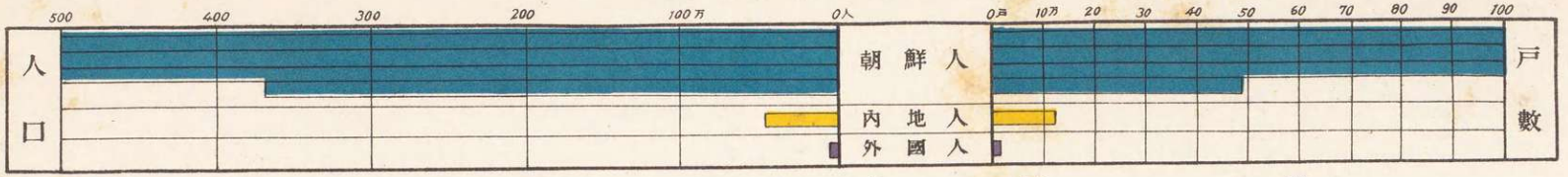
道別	面積方里	戶數 內地人	戶數 朝鮮人	戶數 外國人	戶數 合計	人口 內地人 朝鮮人	人口 外國人	人口 合計	平均一方里人口
京畿道	八三一	二、八〇三	三五、〇九三	一、九六二	三八、〇九八	一二五、七〇三	八、九〇七	一、九四〇、〇六三	二、三三四、六
忠清北道	一、四八一	二、一四一	一五、八四五	一、〇四三	一七、〇三一	八三、三八九	一、〇四三	八六、三六六	一、七九九、〇
忠清南道	三、六五三	五、六四〇	三一、一五四	三、〇七四	三九、八六八	一、三五七、九三四	三、〇三〇	一、三六〇、九六四	二、四四一、六
全羅北道	三、九〇〇	七、六八三	二六、三九八	六、三五〇	四〇、九三一	一、三五四、八六六	二、三三一	一、三五七、一九七	二、三五二、六
全羅南道	九〇〇	八、五四三	四〇、八三八	四五四	四九、八三五	一、四一五、六五三	四、五四四	一、四二〇、〇四七	一、八四五、七
慶尚北道	一、三三一	二、一八六	四一、一七一	四、五四	四七、四〇一	一、八四五、三八	四、五四四	一、八五四、四二六	一、四二五、六
慶尚南道	七、九八	一九、四七四	三六、四〇二	八四三	五六、七一九	二、七五五、五七四	八、九八八	二、七六四、四六二	一、七九、〇
黃海道	一、〇〇五	一、一〇五	二三、二一〇	一、四二四	二五、七三九	一、〇七二、四九九	一、四二四	一、〇七三、九二三	一、〇六九、〇
平安南道	九、六八	五、六五八	二三、九三三	六五〇	三〇、二四一	一、一四二、八六四	六五〇	一、一四三、五一四	一、一八四、五
平安北道	一、八四四	三、〇一九	四五、七一三	四五四	四九、一八六	二、一三三、一七一	四五四	二、一三四、〇二五	一、一五八、七
江原道	一、七〇二	三、〇七四	三五、一九四	一、三五九	四〇、三二七	一、六五四、四〇八	一、三五九	一、六五五、七六七	九六七、〇
咸鏡南道	三、〇二〇	六、九三三	四九、八四九	一、四一四	五八、一九六	二、三五二、九二四	一、四一四	二、三五四、三三八	七七九、〇
咸鏡北道	一、三三九	一、四三三	三七、四八五	一、四二三	四〇、七四一	一、七二九、〇六九	一、四二三	一、七三一、四九二	一、二九二、〇
合計	一四、三三一	三八、〇九三	三五〇、九二八	一九、六三二	四〇九、六五三	一五、七一九、一三六	一二、三五七、九三四	一六、〇三二、〇六九	一、七九、〇

◇現住內地人戶口本籍別（昭和三年末調査）

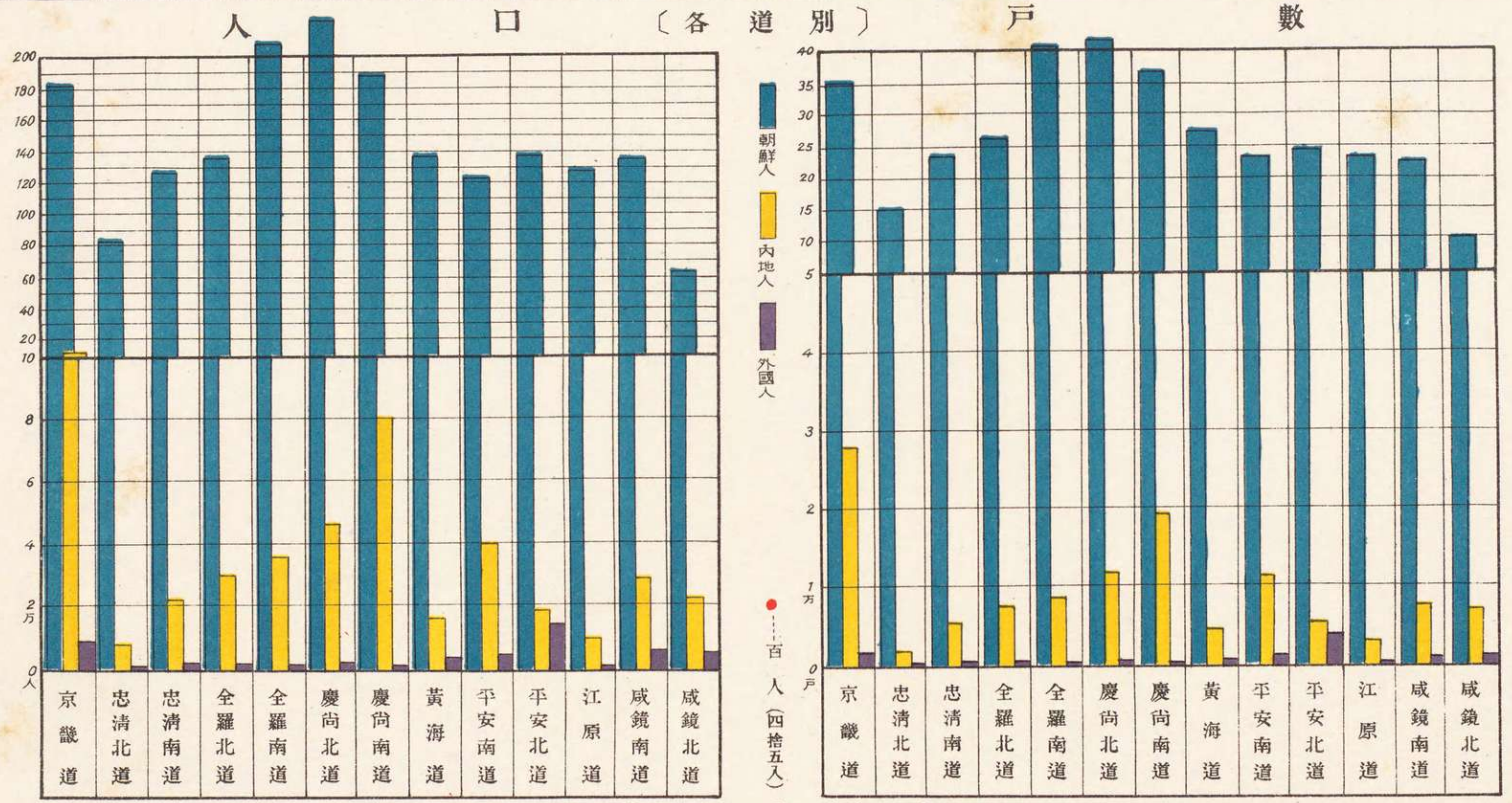
府縣別	戶數	人口 男	人口 女	人口 計	府縣別	戶數	人口 男	人口 女	人口 計
北海道	三五七	一、五四五	一、三七四	二、九一三	滋賀縣	一、四三	二、九八	二、五四五	五、五四三
青森縣	七五八	一、一七八	一、〇一〇	二、一八八	京都府	一、七三	三、五六四	三、一八〇	六、七四四
岩手縣	七八一	一、一四四	一、〇一四	二、一五八	大阪府	二、七四九	五、四八四	五、〇三三	一〇、五一七
宮城縣	一、六六八	三、五九八	三、一三六	六、七三四	兵庫縣	三、七九	五、三五七	五、〇一〇	一〇、三六七
秋田縣	八二	一、三九	一、三五九	二、七四八	奈良縣	一、〇一九	二、〇三三	一、七三五	三、七六八
山形縣	一、三九	三、一六七	三、〇九二	六、二五九	和歌山縣	一、六四一	三、三五四	三、〇九二	六、四四六
福嶋縣	一、七一	三、三五九	三、一五七	六、五一六	鳥取縣	一、三三四	二、五〇八	二、四一七	四、九二五
茨城縣	一、三三	二、七八三	二、五〇三	五、二八六	島根縣	一、三五〇	二、七〇七	二、五〇四	五、二一一
栃木縣	八五九	一、七六二	一、六三三	三、三九五	岡山縣	一、七二八	三、四二三	三、一六八	六、五九一
群馬縣	八〇三	一、六九七	一、四八六	三、一八三	廣島縣	二、一三五	四、二四八	四、〇四七	八、二九五
埼玉縣	九二五	一、九五五	一、七〇二	三、六五七	山口縣	一、八九九	三、六七一	三、四五三	七、一二四
千葉縣	一、〇一三	二、一三五	一、九三五	四、〇七〇	德嶋縣	二、九二	四、三五三	四、〇三六	八、三八九
東京府	三、三五九	六、七二一	六、一九二	一二、九一三	香川縣	一、九三一	三、四七九	三、三五八	六、八三七
神奈川縣	九一六	一、七六一	一、六一二	三、三七三	愛媛縣	一、四九	三、五九七	三、四八一	六、九七八
新潟縣	一、七六一	三、五九八	三、三六三	六、九六一	高知縣	一、〇三五	二、一四二	二、〇六三	四、二〇五
富山縣	一、三三九	二、一四三	二、〇九五	四、二三八	福岡縣	二、三五九	四、六三五	四、三九二	八、九二七
石川縣	一、六三四	三、二七九	三、〇七二	六、三五一	佐賀縣	一、三九	二、九七一	二、七九二	五、七六三
福井縣	一、三九一	二、七四九	二、五九二	五、三四一	長崎縣	一、二五	二、六六九	二、五二一	五、一九〇
山梨縣	九〇八	一、九二	一、七九九	三、七二一	熊本縣	二、一九二	四、二六一	四、〇六九	八、三三〇
長野縣	一、八三	三、三三八	三、一〇二	六、四四〇	大分縣	一、三五九	二、八五一	二、六一四	五、四六五
岐阜縣	一、六四二	三、三三一	三、〇九二	六、四二三	宮崎縣	一、四三	二、八五五	二、六一四	五、四六九
靜岡縣	一、七二九	三、四九九	三、二五五	六、七五四	鹿兒嶋縣	四〇七	一、七九	一、六八四	三、四八四
愛知縣	一、七〇九	三、四八九	三、二五九	六、七四八	沖繩縣	一、三二	二、七五	二、六五九	五、三三四
三重縣	一、六八一	三、二五四	三、〇九五	六、三四九	總計	一四、三三一	三四五、三八四	三四五、六五九	四九、〇四三

現住戸口

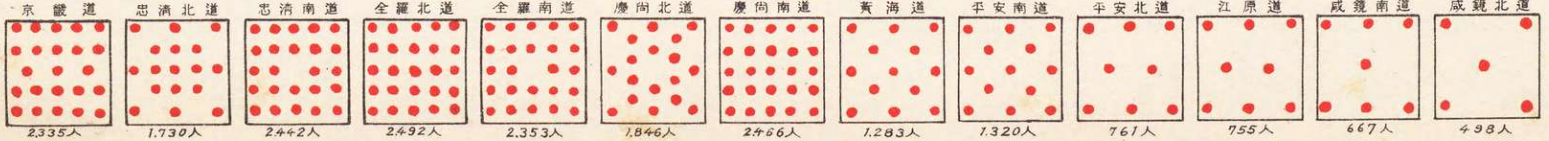
（昭和三年末調査）



人口〔各道別〕戸數

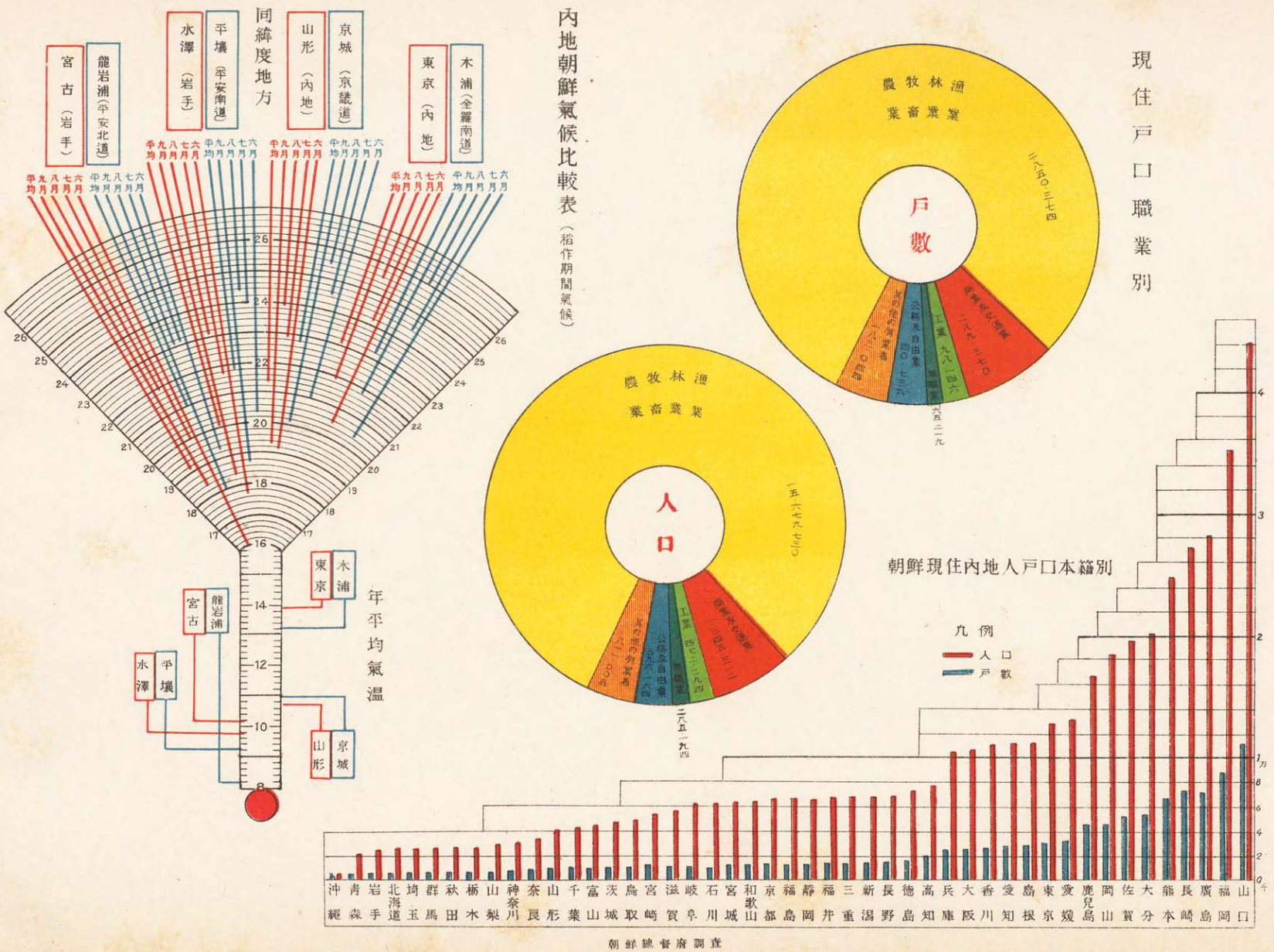


平均一方里人口



朝鮮總督府調査




内地朝鮮氣候比較表
（稻作期間氣候）
同緯度地方
宮古（岩手）
龍岩浦（平安北道）
水澤（岩手）
平壤（平安南道）
山形（内地）
京城（京畿道）
東京（内地）
木浦（全羅南道）
平均 九月 八月 七月 六月
年平均氣温
現住戸口職業別
戸數
人口
農業 牧畜業 林業 漁業
公務及自由業
工業
商業
別籍本口戸人地内住現鮮朝
例 人口 戸數
沖縄 青森 岩手 北海道 埼玉 群馬 秋田 栃木 山梨 神奈川 奈良 山形 千葉 富山 茨城 鳥取 宮崎 滋賀 岐阜 石川 宮城 和歌山 京都 福島 岡静 福井 三重 新潟 長野 徳島 高知 兵庫 大阪 香川 愛知 島根 東京 愛媛 鹿児島 岡山 佐賀 大分 熊本 長崎 廣島 福岡 山口
朝鮮總督府調査

■交通及通信

【國有鐵道】 鐵道は明治三十二年九月京仁間一部の開通を始めとなし、同三十八年京釜線竣工し、翌三十九年京義線の竣工と共に半島を縦貫して、支那安東縣に達する延長五百九十哩餘の大幹線となれり、爾來湖南・京元・咸鏡等幹線の敷設あり、湖南線は京釜線大田に起り木浦及び群山に達し、京元線は京釜線龍山に起り元山に達するものにして何れも大正三年竣功し、咸鏡線は元山より國境會寧に至るものにして昭和三年九月一日全通、其の他支線としては永登浦より分岐し仁川に至る京仁線、三浪津より馬山に達する馬山線、馬山線昌原より分岐して鎭海に至る鎭海線、京義線孟中里より分岐する博川線咸鏡南部線甑潭より分岐する川内里線、平壤より鎭南浦に至る平南線、大同江より勝湖里に至る平壤炭鑛線、黄州より兼二浦に達する兼二浦線及び會寧より鷄林に至る會寧炭礦線あり、其の他新規計畫に基き買收を爲したる裡里全州間、松汀里潭陽間、大邱・蔚山及び慶州・蔚山間等あり尙目下建設中に屬する平元線は其の西部に於て西浦・順川間は既に開通し昭和四年十二月現在全線の延長一千七百九哩餘に達せり、次に國有鐵道の業務は大正六年七月より一時南滿洲鐵道會社に委託せしが、同十四年三月限り之れを廢止し同年四月一日より總督府の直接經營に移れり。

朝鮮に於ける鐵道は鮮内産業興隆文化促進の先驅たるのみならず、内地大陸間に介在し滿洲・支那各地は勿論西比利亞を經由して歐洲各地に至る國際交通の要路に當り、尙昭和二年度以降十二箇年に亘り圖們外四線八百六十哩の建設、全北鐵道外四線二百十哩の買收並に改良を行ふべき計畫を樹て、着々實施中なるを以て、之れが完成の暁は更に其の面目を一新せんとす。朝鮮に於ける大正四年以來の鐵道運輸成績表を示せば左の如し。

▲朝鮮鐵道運輸成績表（昭和五年三月朝鮮總督府統計年報ニ依ル）

年度別	營業哩數	乘客	貨物	收入 車	收入 其他	收入 計
		千人	千噸	千円	千円	千円
大正四年度	一、〇〇七	五、〇四〇	一、六五七	三、三二九	三二〇	七、八六六
同六年度	一、〇九三	七、〇〇五	二、四七四	五、九三三	五七〇	一二、五七七
同八年度	一、二五三	一一、八四	三、六四三	九、三五五	九八八	二一、三八七
同十年度	一、六五一	一三、七〇一	四、三三一	一〇、八三四	一、九五三	二六、〇九八
同十二年度	一、八九	一六、七〇	四、三九七	一三、七四	二、一九六	三二、〇二五
同十四年度	一、三四五	一八、四五七	四、三九七	一五、一五六	二、四五五	三五、〇一四
昭和元年度	一、三四五	一八、四五七	四、三九七	一五、四〇一	二、四五五	三五、三五七
同二年度	一、三四五	二〇、〇五八	五、三七〇	一七、八六九	二、八〇七	四〇、六五五
同三年度	一、三四五	二一、三八	五、三七〇	一八、八七七	二、九九七	四一、二六〇

【關釜連絡船概況】 下關釜山間海上百廿二浬の連絡線は現在景福丸、德壽丸昌慶丸（各三、六一九噸）の三隻を旅客專用に交替運航し、晝夜二回兩地發船一航海約八時間を要す、尙新雜丸（三、〇三五噸）、高麗丸（三、〇二八噸）、多喜丸（一、二二七噸）の三隻は旅客輻輳の場合及び貨物運送の爲め不定期に運航せり。

【私設鐵道及軌道】 一般運輸を目的とする私設鐵道に對しては朝鮮私設鐵道補助法に依り補助金を交付されつゝあり、昭和四年十二月現在に於ける私設鐵道及び軌道の總延長は開業線四百九十六哩四分、未開業線六百九十九哩三分專用鐵道既設線七十六哩に達し將來益々其の延長を見んとしつゝあり。

■通信

韓國に在留する日本人の數が增加するの趨勢に鑑み、明治九年始めて釜山に日本郵便局を設置せり。其の後同十三年には元山に、同十六年には仁川に、同二十一年には京城に、同三十年には木浦に、同三十四年には平壤に設置され主要都市には日本郵便局の普及を見るに至れり、斯く日本政府の郵便局が韓國内に增加して行く一方、自國の郵便制度なるものを有たなかつた、韓國政府は明治二十九年に日本人を郵政顧問に招聘して、日本の郵便條例に倣つて郵遞規則なるものを制定公布し、近代的郵政の端を啓くに至つた。後ち明治三十八年韓國政府は日本政府と通信機關委託に關する取極を締結し、從來併立し來つた日韓兩方の通信機關は玆に合一することゝなつた。後ち統監府が設けらるゝや其の管理に屬し、併合後は總督府遞信局に所屬することゝなつた。かくて今や通信機關の配置都鄙を通じ、七百八十餘所に及び主要なる地點には通信、電話を開始して舊來の面目を一新し、昭和三年三月末に於て郵便局百、同分室四、電話局一、同分局二、郵便所五百八十、電信電話所八、鐵道電信取扱所九十八、同出張所一、郵便切手賣捌所四千四百二十六を算するに至れり。

■道路

【道路】 總督府設置の初め先づ道路の根本制度を樹立すると共に道路網を確定し、國費を以て築造すべき一等道路十七線延長三千二百十八粁餘、二等道路七十九線延長九千四百八十六粁を測定して主要路線となし、別に地方費を以て築造すべき三等道路四百十九線延長一萬一千三百二十一粁を以て地方的脈路を完ふするを期したり、爾來道路修築の第一期事業として一、二等道路中最要なる路線三十四線二千六百九十粁を選び、明治四十四年度より七箇年の事業とし、工費一千萬圓を以て其の修築を行ひ併せて漢江鐵橋を架設せり、次で第二期計劃として一、二等道路線中交通並に經濟上最も適切なる路線二十六線延長一千八百八十粁餘と主要なる河川の橋梁九箇所の架設を企て、大正六年度より六箇年の繼續事業として、總工費七百五十萬圓を以て施行中適々經濟界變動の影響を受け、豫定の改修を爲すこと能はざると、最近の事情に鑑み新なる路線を加ふるの必要より其の改廢を加へ、總延長を一千七百三十一粁とし之れと同時に既設木造橋梁の耐久力を考慮し、少くも橋脚の如きは永久的工法に依りて構造するの必要を認め、之れが改良を併せ施行することゝし、大正十一年度以降、七箇年繼續事業として二千十七萬圓を追加計上し、實施中財政の關係上竣工期を昭和八年度に改め、更に大正十五年度に至り國境道路五百三十粁餘、工費五百六十六萬五圓を追加し竣工期を昭和十年に改め、實施中にして最近に於ける一、二等道路の改修濟延長は國庫補助又は夫役施工に依るものを加へ九千八百十粁餘に達し三等道路七千九百四十二粁に達せり。

翻つて交通の狀態を見るに近年各地方産業の發達に伴ひ、貨物の出入旅客の來往益々頻繁を加へ荷車、荷牛馬車、自動車等著しく、其の數を增加し昭和二年末に於て荷車三萬七千百八十三臺、荷牛馬車十四萬一千九百二十臺、自動車一千六百八十八臺を算するに至り、客馬車、人力車は年々其の數を減じ最近客馬車八十八臺、人力車三千四百八十三臺を算す。

■港灣

【港灣】 統監府時代釜山、仁川、鎭南浦、平壤、元山、新義州、群山、木浦清津、城津、馬山の十一箇所の夫々應急施設を行ひしも、釜山、仁川、鎭南浦の如きは工事半途にして併合となりしを以て、總督府は更に規模を擴大して水陸連絡設備を大成するの計劃を樹て之を施行し、次で大正四年度以降の繼續事業として元山港、同十一年度以降の繼續事業として清津港及び城津港の修築に着手し、同十五年度以降の繼續事業として群山、木浦、多獅島及び雄基港の修築を追加し目下工事中に屬せり。

地方港灣の修築施設は主として地方公共團体に於て施行し、總督府は其の緩急を計り相當國庫補助金を支給し之が完成に努めつゝあり。

海事

【船舶】沿岸各地に於ける海運事業の勃興に伴ひ、汽船の新造又は購入を爲せるもの多く、近來益々增加の傾向を誘致するに至れり、最近に於ける船舶現在數は別表の如し。

【船員】歐洲大戰は帝國海運事業をして急激なる發展を爲さしめ、俄に海員需給の均衡を失したるを以て、之れが對策として海員養成機關の急設を企て以て時代の要求に順應したるも、戰後一般海運界の不況に依り一時過剩の現象を馴致するに至りしが、最近朝鮮在籍船の增加及び海運事業の發展に伴ひ其の需給は圓滿となれり、隨つて此等の好影響に助長せらるゝものありて年々其の數を增加し、就中鮮人職員に在りても累年增進を告げ著しく進歩發展を示せり。

【定期航路】昭和三年十月一日現在航路は百二十四線、二百七十四隻九万九千九百七十噸にして、之れを航路の種別より觀るときは(一)朝鮮内に限るもの(二)内地を起點として朝鮮に往來するもの(三)内地及び臺灣を起點として朝鮮を經由し外國に至るもの(四)朝鮮を起點とし内地又は外國に至るもの(五)外國を起點として朝鮮に往來するもの、五種にして朝鮮總督府の命令に依るもの及び朝鮮總督府地方官廳の命令に依るものは(一)種又は(四)種の内に屬し、更に鐵道省の經營、陸軍省、遞信省、長崎、福岡兩縣命令に依る(二)種並に遞信省當山石川兩縣及び關東廳と朝鮮總督府との各聯合命令に依るべき(三)又は(五)種の航路あり、又た補助命令に依らず、自營を以て定期航海を爲すもの等あり、今之れ等の航路に配在せる線數、隻數及び噸數を示せば

一に屬するもの	九七線	二二八隻	九、六一三噸
二に屬するもの	一一線	二〇隻	四一、三一一噸
三に屬するもの	二線	三隻	五、九三六噸
四に屬するもの	一二線	二一隻	三二、五七五噸
五に屬するもの	四線	四隻	六、五九七噸

にして更に政府及び地方廳の補助命令に依るものと、自營に依るものとを區別すれば左の如し。

命令航路(官公營を含む)四一線		一六八隻	六五、七九一噸
自營航路		一〇八隻	三〇、一六一噸
	八五線		

前記各航路の主なる經營者は朝鮮郵船株式會社、鎭南浦汽船株式會社、鴨綠江運輸株式會社、大阪商船株式會社、北陸汽船株式會社、對馬商船株式會社、嶋谷汽船株式會社、朝鮮汽船株式會社、阿波國共同汽船株式會社、近海郵船株式會社及び鐵道省等とす。

【航路標識】朝鮮に於ける航路標識事業は、明治十六年日韓兩國間に締結せる日本人民貿易規則に基き、帝國政府の交渉に應じ韓國政府は同三十六年仁川月尾嶋外三箇所に燈臺を建設したるを嚆矢とし、同三十八年度末に於て標識總數五十三を算するに至りたるも、之れを朝鮮の海岸線九千三百二十四浬に平均するときは、僅に百七十五浬毎に一標識を有する割合に過ぎず、殊に西南部海岸の如きは無數の嶋嶼碁布羅列し、濃霧常に襲來して航海業者の最も困難とする所なるを以て、更に同三十九年度以降五箇年計畫を樹て、併合後の同四十四年に至る迄、標識百三十五を增設し總數百八十八に達したるを以て、海岸線四十九浬に對し一標識を配置するの割合となれり、總督府始政後は銳意標識の普及を圖られ、年々建設に改良に努めて整備增設を計られたる結果、昭和三年度に於ては夜標百二十一基、晝標百〇七基、霧信號二十一箇總計二百四十九基に達し、其の海岸線に對する割合は夜標七十七浬に一基を有するに至れり。

河川

【鴨綠江】源を白頭山の南麓に發し、惠山鎭に於て虛川江を新坮坡鎭に於て長津江を合せ西北に流れ、中江鎭附近より南下して楚山附近に滿洲より來る渾河と合し、義州の下流に於て滿洲の甕河を容れ、河中に多數の中洲ありて河流を分派し、安東縣に至り再び合して一となり、更に柳草嶋黃草坪を堆成して濶大なる三角洲を成し、黃海に入る其の流路七百九十粁餘に及ぶも河床傾斜急にして岩礁多く激流奔湍少からず、河口龍岩浦より溯ること二十八粁安東縣まで高潮時に於て約三米突の水深を保つも、此の間水路狹くして曲折多く航行困難なるを以て水先人を要すべし、新義州、新坮坡間には總督府命令に係る淺吃水汽船の定期航行あり、且支那船及び高瀨船の航行頻繁なり、本江の上流は有名なる大森林地帶にして亘木鬱生し。其の伐材は筏に組みて流送せらる。

【大同江】源を平安・咸鏡道界の狼林山に發し、寧遠、德川、及び平壤附近を流れ、兼二浦を過ぎて戰寧江と合し鎭南浦に至りて黃海に注ぐ、流路延長三百九十七粁餘、航路延長二百四十五粁にして、河口より六十三粁上流の保山浦まで二千噸級の汽船溯江し得べく江運上重要なるもの一なり。

【臨津江】源を咸鏡南道の馬息嶺に發し、江原道を經て京畿道へ入り漢灘江を合せ、坡州郡に至りて漢江の末流に合して江華灣に注ぐ、流路延長二百五十四粁餘河口より上流百五十一粁餘舟楫を通ずべし。

【漢江】源を江原道の鷹岬山に發し、寧越、丹陽及び忠州附近を流駛し、廣州郡に入りて北漢江を合せ、龍山を過ぎ金浦郡の北端に於て臨津江と合し江華灣に注ぐ、流路延長四百七十粁其の舟楫の通ずる處三百粁、水運上頗る重要の地位を占む。

【錦江】其の流域主として忠淸南北道、全羅北道の三道に跨り、流路延長四百一粁餘河口に群山港あり、扶餘附近まで自由に航行し得べし。

【洛東江】流路延長五百二十五粁餘、其の流域慶尙北道及び慶尙南道の大部分を占め、平野到る處に存在し、地味概ね肥沃にして灌漑の便多し、且本江は水面勾配緩にして三百四十二粁の上流安東まで溯航し得べく水運の利あり。

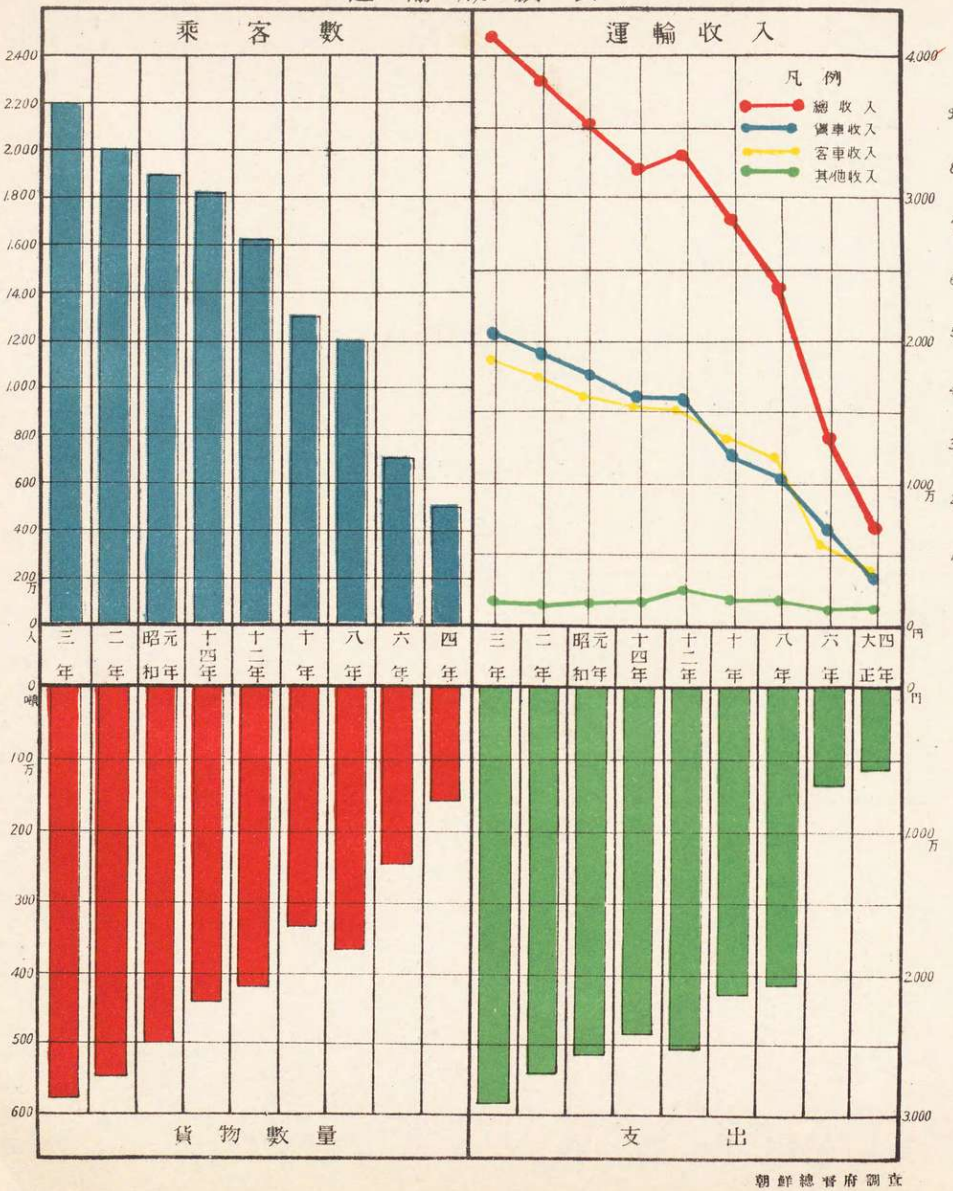
【蟾津江】源を全羅北道鎭安、長水兩郡界なる八公山に發し、流路延長二百十二粁餘水運上重要なる河川なるも、航路に障礙多く求禮地方の上流は殆んど舟楫を通じ難し。

【豆滿江】源を白頭山の南麓に發し、茂山、會寧、鍾城を經、穩城の北に至り布爾哈圖河と合し、更に慶源に於て琿春河と會し水量益增大し、露領の境界を劃し西水羅の東に至りて日本海に注ぐ、流路延長五百二十一粁に及べども琿春河の合流後舟楫の便あるのみ。

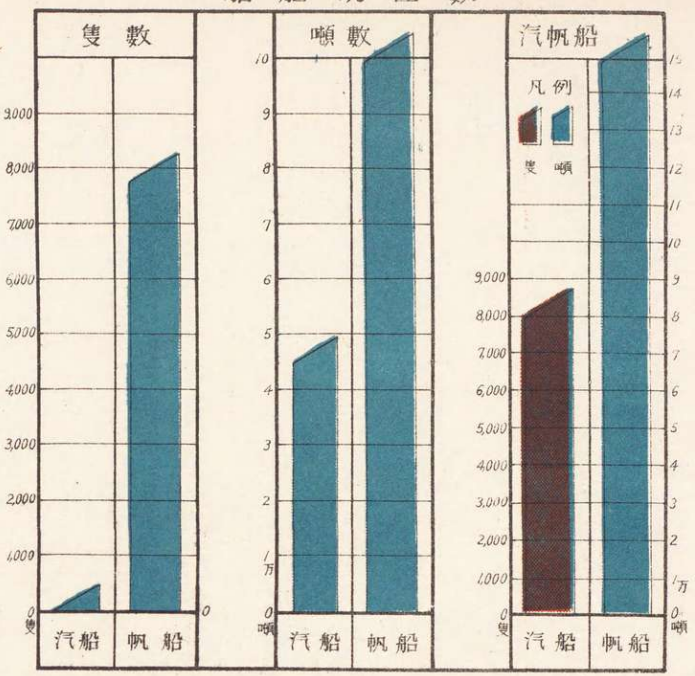
從來朝鮮に於ける河川は殆ど治水施設の行はれたるものなく、概ね天然の放流に委せられたる結果、毎年河水の氾濫に依り鐵道、道路、橋梁等は勿論、農作物其の他の損害額數千萬圓に達すること尠からず、仍て之れが改修は頗る緊切とせられ、總督府は治水及び水利計劃上に於て重要なる洛東江外十三大河川を選定し、大正四年度より其の流域狀況、水害、水運、水利地點及び經濟關係等の調査に着手せられ今や大体其の調査も終了したるを以て、大正十四年度に於て先づ萬頃江、戰寧江の二河川中最も緊要なる區間に對し、六ケ年繼續事業として工を起し、次で大正十五年度に於て、漢江、洛東江、龍興江及び大同江の四ケ川に對し十ケ年繼續事業として着手せり、右に對する工費豫算額は四千八百四十萬圓にして爾來着々進捗中なりしが、其の後施工の實狀に鑑み、萬頃江及び戰寧江の改修區域擴張の要に迫られ、昭和四年度に於て前者は四百萬圓、後者は一百萬圓を既定計畫に追加する事となり、昭和十一年度迄に以上六ケ川の第二期事業の完成を期すべく銳意改修工事を施行しつゝあり。

鐵道及船舶

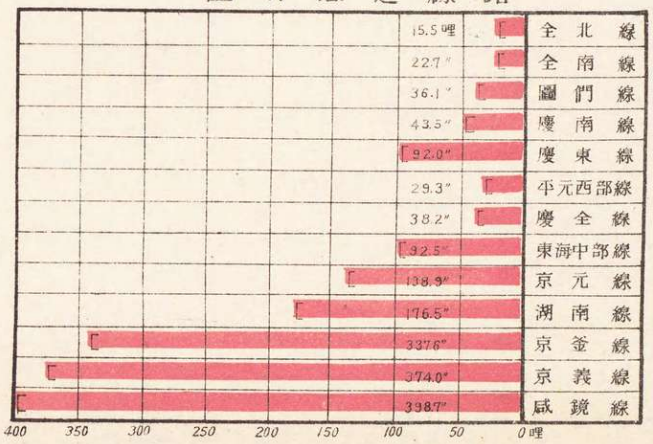
運輸成績表



船舶現在數



國有鐵道線路



財政及經濟

【歳　計】朝鮮總督府の歳出入は昭和元年以後に於ける決算及び豫算を別項圖表に掲げたるを以て、一目其の消長を窺知せられ可きも、聊か玆に其の沿革を略記すべし(總督府編纂朝鮮要覽に依る)韓國政府時代の財政は紊亂其の極に達し、明治三十七年十月財政顧問の設置ありて銳意刷新を圖りしも、積弊の致す所容易に掃清する能はず、其の後統監府の設置せらるゝに及び同四十年に於て日韓協約の結果、行政各部の擴張、各種事業の發展に伴ひ歳出著しき増加の傾向を來たし、到底其の支出を辨じ難きを以て帝國政府は同年度以降、同四十五年度に至るまで六箇年度内に總計**一千九百六十八萬二千六百二十三圓**を無利子無期限を以て貸附したり、然れども併合當時に於ては經常歳入を以て到底豫期の施設を爲すこと能はざるに因り、同四十四年以降中央政府の一般會計より一千二百三十五萬圓の補充を仰ぎて應急の策を講じ爾後諸般の事業を整理して經費を節約し、大正二年度には該補充金中より二百三十五萬圓を減じ、更に同三年度以降五箇年を期して朝鮮特別會計の獨立計畫を實行せんが爲め一方に於て諸般制度の整理を行ひ、行政費を節約し他方に於ては産業奬勵の必要上確實なる財源を求むる爲め諸税の増徴並に新設を行ひ同八年度に於ては全く中央政府の補充を仰がざること、したるも、警察制度の改革、其の他諸般行政の刷新に伴ひ再び補充金を要するに至り、九年度に一千萬圓、十年度に千五百萬圓、十一年度に千五百六十萬圓、十二年度に千五百萬圓、同十三年度に於ては豫算踏襲の爲め、前年度と同額十四年度及び大正十五年度に於ては災害費の財源を含み前者に於て千六百五十五萬四千五百二十九圓、後者に於て千九百四十四萬五千四百七十一圓、昭和二年度三年度及び四年度に於ては各千五百萬圓の補充を受くるに至れり。尚歳出入統計及び豫算科目等を別表に掲ぐ。

【國　債】明治四十四年三月朝鮮事業公債法發布せられたる以來事業の進捗、計畫の變更其他の事由により屢々改廢變革を經過し、昭和二年三月朝鮮事業公債法を改正せられ其の限度を**六億三百七十萬圓**に改め昭和二年四月一日より之れを施行せらるゝことゝなれり。

【租　税】現行朝鮮に於ける租税中内國税の首位を占むるものは地税にして昭和四年度收入豫算額千五百三十四萬二千三百十四圓を算し内國税收入豫算額**三千三百八十九萬五千六百三十八圓**の約四割五分に當れり。

【所得税】本税は朝鮮所得税令に依り(一)朝鮮に本店又は主たる事務所を有する法人(二)朝鮮所得税法施行地、臺灣、關東州又は樺太以外に本店又は主たる事務所を有する法人にして朝鮮内に資産又は營業を有するときは其の資産又は營業より生ずる所得に付、其の法人に之れを賦課せらる四年度に於ける本税の收入豫算額は**百五萬九千百二十五圓**なり

【營業税】本税は朝鮮營業税令に依り左に揭ぐる營業を爲す者に賦課せらるゝのである、四年度に於ける收入豫算額は**百三十七萬九千九十六圓**なり。

一　物品販賣業(動植物其の他普通に物品と稱せざるもゝ販賣を含む)
二　銀行業　三　保險業　四　無盡業　五　金錢貸付業
六　物品貸付業(動植物其の他普通に物品と稱せざるものゝ貸付を含む)
七　製造業(物品の加工修理を含む)　八　瓦斯供給業、電氣供給業
九　運送業　十　運送取扱業　十一　倉庫業　十二　鐵道業
十三　請負業　十四　印刷業　十五　出版業　十六　寫眞業
十七　席貸業　十八　旅人宿業　十九　料理店業　二十　周旋業
廿一　代理業　廿二　仲立業　廿三　問屋業　廿四　信託業

【資本利子税】本税は朝鮮資本利子税令に依り朝鮮に於て資本利子の支拂を受くる者に對し之れを賦課するものにして税率は資本利子金額の百分の二なり四年度に於ける本税の收入豫算額は**二十七萬四千百三十六圓**なり。

【取引所税】本税は取引所に課する取引税と仲買人に課する取引税とを總稱したるものにして、定期取引に依る賣買各約定金高の萬分の五を賦課せり四年度に於ける本税(取引税を含む)の收入豫算額は**十萬三百一圓**なり。

【鑛　税】本税は鑛産税及び鑛區税の二者を總稱したるものにして鑛業權所有者に之を賦課せらる、四年度に於ける本税の收入豫算額は**五十二萬七千八百二十九圓**なり。

【登錄税】本税は(一)不動産の登記　(二)船舶登記　(三)船籍の登錄　(四)海員の身分登錄　(五)工場財團登記簿、鑛業財團登記簿、鐵道抵當原簿　(六)法人が登記を受くるとき　(七)商號の設定、支配人の登記　(八)法人の合併に因る不動産又は船舶に關する權利取得登記等に對し徴收せらる。

【印紙税】本税は印紙税令に依りて證書、帳簿及び證書、帳簿と類似の效力を有するものに對しては其の名稱に拘らず本法の規定に依らねばならぬ。

【酒　税】本税は酒税令に依り之れを賦課す、四年度收入豫算額**千二百四十四萬五千六百十二圓**なり。

【煙草耕作税】煙草專賣令に依りて自家用煙草耕作の許可を受けたる者より毎年一圓六十錢を徴收するものとす。

【砂糖消費税】本税は砂糖消費税令に依りて之を賦課す、四年度收入豫算額**二百三十四萬五千百七十七圓**なり。

【朝鮮銀行券發行税】本税は朝鮮銀行令に據り朝鮮銀行が制限外の銀行券を發行するときは、其の發行高に對し一年百分の五を下らざる割合を以て之を賦課す、四年度に於ける本税の豫算額は**十五萬六千四百十九圓**なり。

【關　税】朝鮮の關税制度は併合の際通商各國に對して聲明せる、十年關税据置の宣言に基き、舊韓國政府と通商各國との協定に成れる關税を襲踏し來りたるものなるが、大正九年八月二十八日右期間滿了と共に帝國共通の關税制度を布かれ關税法、關税定率法、保税倉庫法、假經場法等總て朝鮮に共の施行を見るに至たれり。併かし朝鮮に於ては其の産業民度其の他の事情に鑑み國境關税制度其の他關税上多少の特例を設け居れり、三年度中に於ける輸入税收入額は**七百三十八萬三百五十三圓**なり。

【移入税】移入税は統一關税制度採用と共に内鮮間相互に之れを撤廢するの筈なりしも朝鮮に於ては大正九年度の財政計畫に當り、爲政費膨脹の爲め朝鮮歳入中の主要資源たる移入税を撤廢なし能はざる事情に會したる爲め、内地側と同時に之れを實行すること能はずして、遂に今日に至たれり、併かし大正十二年度よりは酒精、酒精含有飲料及び織物を除く一切の物品に對し移入税の撤廢を斷行し、更に昭和二年度より織物中綿織物が生活上の必需品たるに鑑み、民衆の負擔輕減の爲め税率の三分の一を減じ之れを從價五分とせり三年度中に於ける移入税收入額は**三百三萬九千九百八十圓**なり。

【噸　税】噸税は大正九年八月中改正せられてより總て内地に於ける噸税法の例に依ることに改むると同時に朝鮮と内地、臺灣又は樺太との間に通航する船舶に對しては免税せらるゝに至れり、三年度中に於ける噸税收入額は**三萬三千二百五十二圓**なり。

【通　貨】韓國政府の舊貨幣は一切之れが鑄造を停止し、大正七年四月貨幣法を施行すると同時に舊貨幣の處分に關する法律を公布せられ、韓國貨幣條例に依り發行し又は通用を認めたる貨幣は、同九年十二月末日限り通用を停止し、其の後五年間は政府に於て之を通貨と引換へたるが其の期限も同十四年十二月にて滿了せり、現今に於ては葉錢のみ其の通用を認めらる。

▲通貨流通見込高

年別	金貨	補助貨及小額紙幣	舊韓國銀行券及葉錢	日本銀行券	朝鮮銀行券	合計
昭和二年末	一圓	八、〇〇九、圓	四、六六一、圓	一、圓	八、三三三、圓	九、一、四二七、圓
同三年末	一	八、四六九、	三、四四	一	八、七、〇六九、	九、五、四二三、
同四年九月	一	八、七四九、	三	一	五九、五四三、	六八、三二三、

圖表對照統計

◇朝鮮總督府特別會計歲入歲出

年度	歲入 經常	歲入 臨時	歲入 合計	歲出 經常	歲出 臨時	歲出 合計
昭和元年度	一五九、六六五、五九四円	五三、〇六二、三三四円	二一、七八、八九三	一二六、〇〇〇、〇〇〇円	五一、四九九、七三三円	一八九、四八〇、一〇一円
同二年度	一七三、九五五、一五五	六二、一四八、〇六四	二三五、一〇三九	一五一、六七、一九二	三五、二五五、九九	二一〇、八五三、一四九
同三年度	一九一、八四四、〇九八	四二、八三〇、〇一三	二三三、六四四、〇四三	一六二、八五二、二八一	二〇、八〇〇、六二一	二一四、六五三、四四三
同四年度	一九五、九五五、〇〇三	三五、八七、八四〇	二一四、八五三、四四三	一六五、五五八、六四四	七〇、二九四、一九九	二三五、八五二、八四三

◇朝鮮總督府特別會計歲入歲出豫算科目別經常部（經常部）

科目別	歲入 昭和四年度	歲入 昭和三年度	歲入 昭和二年度	歲入 昭和元年度	科目別	歲出 昭和四年度	歲出 昭和三年度	歲出 昭和二年度	歲出 昭和元年度
地所得稅	一五三、四二三、三四	一五二、六八一、一四七	一五二、五五二、一三六		李王家歲費	一、八〇〇、〇〇〇	一、八〇〇、〇〇〇	一、八〇〇、〇〇〇	
營業稅	一、〇九九、一二五	九九九、七九五	九二一、四二〇		總督府	四、八九一、六〇五	四、七六八、三五〇	四、七〇七、〇八一	
酒稅	一、二九一、〇六六	一、二四四、六一九	九七七、三七〇		裁判所、供託局及ビ刑務所	七、三四五、四六八	七、七五五、四六八	七、六九五、〇八六	
砂糖消費稅	三、四四五、六三二	三、九四四、七四四	九、八三二、八八〇		地方	三、二四七、三三〇	三、〇四三、六二一	二、九七、一五四	
關稅	二、〇八五、四三一	二、三五五、二六六	一、七八八、〇四九		學校及圖書館	三、六七、六四〇	三、六七、六四〇	三、〇五三、〇八	
資本利子稅其他	一、〇四〇、七五五、〇一三	一、〇三七、〇一三、一五二	九、九三六、六九七		關	一、七五九、〇四九	一、七五九、〇四九	一、〇八〇、〇〇七	
印紙收入	二、四五七、八八	二、四四五、八七三	一、八四五、三五八		專賣局	一、八四五、三五八	一、八四五、三五八	一、八九一、七二〇	
專賣收入	二六、九七〇、四五七	二五、六八六、二六六	一〇、〇〇八、二五九		鐵道作業費	一〇、〇〇八、二五九	一〇、〇〇八、二五九	三、七八二、七八九	
鐵道收入	三五、三六九、八二三	三五、四五二、九五二	二五、一七、四七		營林費	二五、一七、四七	二五、一七、四七	四、五六、八五七	
森林收入	六、九一〇、九三五	七、二五、六九六	五、四三、一四〇		雜費	五、四三、一四〇	五、四三、一四〇	二、八四〇、七九九	
郵便電信及電話收入	一四、二六、三五八	一三、四三一、九七九	一一、七四、七四一		其ノ他諸支出金	一一、七四、七四一	一一、七四、七四一	一、七六、七七、七六六	
刑務所收入	一、七五、六三三	一、五六一、〇四七	一、三一〇、一〇三		國債整理基金特別會計繰入	一、三一〇、一〇三	一、三一〇、一〇三	二、五〇〇、〇〇〇	
雜收入	二、六六、三五八	一、六四四、一四九	二、〇五二、一〇三		豫備金	二、〇五二、一〇三	二、〇五二、一〇三	一、〇〇一、五六六	
度量衡收入其他	一、四五三、一八八	一、六五三、七九五	一、五四一、四二一、五七七		計	一、五四一、四二一、五七七	一、六五三、七九五	一、五四一、四二一、五七七	
合計	一九五、九五五、〇〇三	一九一、八四四、〇九八	一六五、八五二、八七九						

◇朝鮮總督府特別會計歲入豫算科目別(臨時部)

科目別	昭和四年度	昭和三年度	昭和二年度	昭和元年度
官有物拂下代	三、〇〇一、二五〇	三、一九、三四	三、九四五、三五六	
寄付金	六、三〇九	六、三〇九	六、三〇九	
補充金	五、四五二、九一四	五、四五二、九一四	一九、九一九、五五五	
一般會計受入金	八〇〇、〇〇〇、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇、〇〇〇	
公債金	一九、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一九、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一九、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	

科目別	昭和四年度	昭和三年度	昭和二年度	昭和元年度
南滿洲鐵道株式會社納金	四四、八〇七	四四、八〇七	四四、八〇七	
治水事業費分擔金	一七〇、〇〇〇	一七〇、〇〇〇	一七〇、〇〇〇	二三三、〇〇〇
前年度剩餘金繰入	六、〇七、五六〇	三、九八、四四〇	五、九五五、三三〇	三、六三、九二一
合計	二四、六、八五三、六四三	二四二、六四五、二六三	二四二、六四七、五四四	二三九、一〇、一一一
歲入總計	二四、六、八五三、六四三	二三三、六四五、二六三	二三二、六四七、五四四	二三九、一〇、一一一

◇朝鮮總督府特別會計歲出豫算科目別(臨時部)

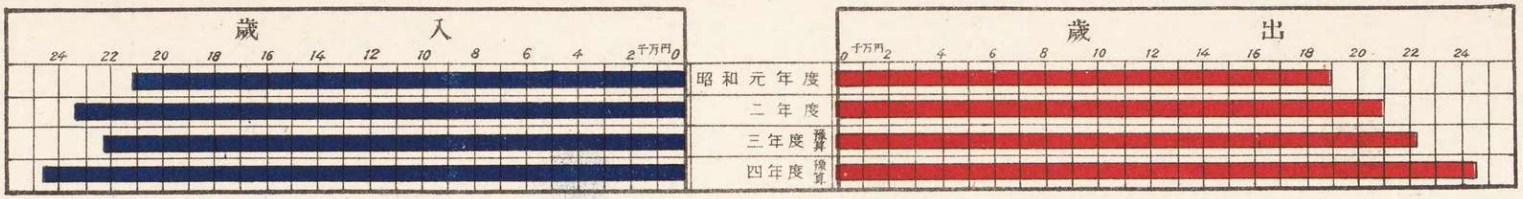
科目別	昭和四年度	昭和三年度	昭和二年度	昭和元年度
朝鮮部隊費	二四九、一三六	二六六、八九九	二七四、九〇一	
林野調査委員會費	一四四、六三六	一四六、四二六	一四六、四二六	
調査及試驗費	五〇、八四九	五五、一九五	五五、一八六	
補助費	一六、八九七、四六九	一五、五〇、三九二	一五、五〇、六六六	
營繕費	四、五七三、一一〇	三、四七九、〇四四	三、四七九、〇四四	
土木費	一〇、三五、〇六六	八、八九九、九〇一	七、六四四、一〇一	
鐵道建設及改良費	一〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	九、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	
防砂事業費	二、四〇〇、〇〇〇	一、八六、九二五	一、三三、一一〇	
地籍整理及國有地處分費	一、八六、九二五	一、三三、一一〇	一、三三、一一〇	
教員學生海外派遣費	一三、八〇〇	一三七、四〇〇	一三七、四〇〇	
臨時朝鮮語奬勵費	八五、九五〇	九六、〇〇〇	九六、〇〇〇	
森林產物利用地設費	五〇〇、〇〇〇	—	—	
耕地改良及擴張費	五、八〇八、一〇五	六、一〇四、八一八	五、九五二、八一八	
有林調査處分費	一〇五、二四二	一〇六、九五二	一〇五、九五二	
國有緣故林特別處分費	一三三、二九九	一〇五、四七三	八〇、七〇四	
國境稅關臨時諸費	六九、五六	七〇、二四四	—	

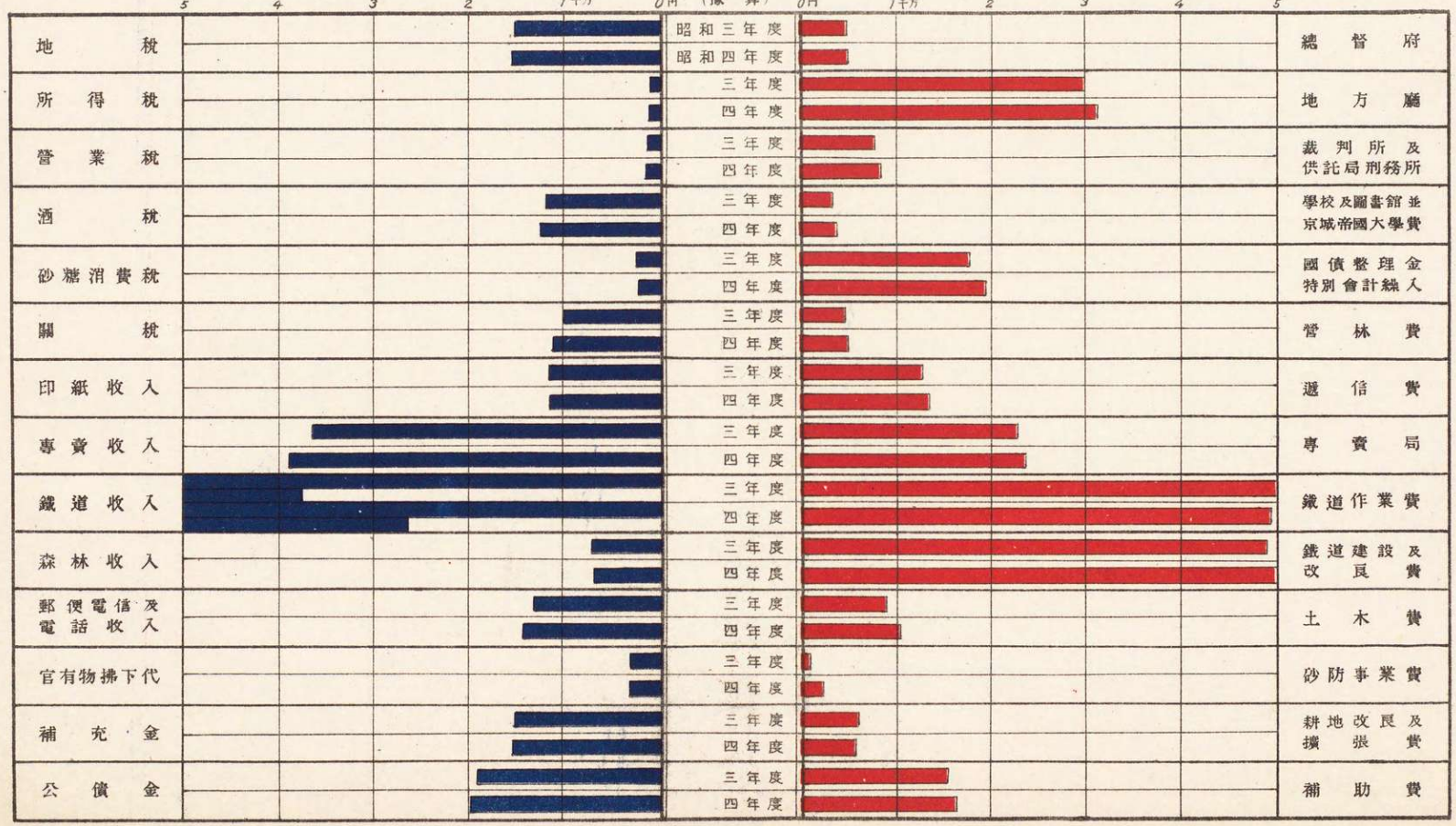
科目別	昭和四年度	昭和三年度	昭和二年度	昭和元年度
臨時特別手當	二六四、八六〇	二六四、八六〇	二六四、八六〇	
對在外鮮人施設費	九一、六八九	九五、九四九	九五、九四九	
朝鮮史編纂費	四六三、三五〇	四六三、三五〇	四六三、三五〇	
臨時取締費	一四、一五、〇七七	一四、一五、〇七七	一四、一五、〇七七	
租稅制度改正準備費	三三、三三、三九	三三、三三、三九	三三、三三、三九	
貯金奬勵費	六、八〇九、九〇一	六、八〇九、九〇一	六、八〇九、九〇一	
災害費	一五、〇〇〇、〇〇〇	一五、〇〇〇、〇〇〇	一五、〇〇〇、〇〇〇	
大禮施設費	二〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	
朝鮮鐵道品買收費	三三、一一〇	三三、一一〇	三三、一一〇	
臨時教科書編纂費	一五、四〇〇	一五、四〇〇	一五、四〇〇	
民製煙草整理費	九六、〇〇〇	九六、〇〇〇	九六、〇〇〇	
朝鮮博覽會費	—	—	—	
朝鮮貴族保護資金	五、九五二、八八	五、九五二、八八	五、九五二、八八	
朝鮮簡易生命保險特別會計繰入	一〇八、九五二	一〇八、九五二	一〇八、九五二	
合計	六九、五六	六九、五六	六九、五六	
歲出總計	二四、六、八五三、六四三	二三三、六四五、二六三	二三二、六四七、五四四	二三九、一〇、一一一

科目別	歲出 昭和四年度	歲出 昭和三年度	歲出 昭和二年度	歲出 昭和元年度
朝鮮貴族保護資金	六四、八六〇	六四、八六〇	六四、八六〇	
朝鮮簡易生命保險特別會計繰入	九五、四九	九五、四九	九五、四九	
合計	七〇、二四四、一九九	六〇、二四四、一九九	六〇、二四四、一九九	
歲出總計	二四、六、八五三、六四三	二三三、六四五、二六三	二三二、六四七、五四四	二三九、一〇、一一一

科目別	歲出 昭和四年度	歲出 昭和三年度	歲出 昭和二年度	歲出 昭和元年度
朝鮮林野調査委員會費	六四、八六〇	六四、八六〇	六四、八六〇	
調査及試驗費	九五、四九	九五、四九	九五、四九	
補助費	六二、一四九	六二、一四九	六二、一四九	
營繕費	二四、二四二	二四、二四二	二四、二四二	
土木費	二五、六三	二五、六三	二五、六三	
鐵道建設及改良費	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	
砂防事業費	二、四〇〇、〇〇〇	一、八六、九二五	一、三三、一一〇	
地籍整理及國有地處分費	一、八六、九二五	一、三三、一一〇	一、三三、一一〇	
教員學生海外派遣費	一三、八〇〇	一三七、四〇〇	一三七、四〇〇	
臨時朝鮮語奬勵費	八五、九五〇	九六、〇〇〇	九六、〇〇〇	
森林產物利用地設費	五〇〇、〇〇〇	—	—	
耕地改良及擴張費	五、八〇八、一〇五	六、一〇四、八一八	五、九五二、八一八	
有林調査處分費	一〇五、二四二	一〇六、九五二	一〇五、九五二	
國有緣故林特別處分費	一三三、二九九	一〇五、四七三	八〇、七〇四	
國境稅關臨時諸費	六九、五六	七〇、二四四	—	

朝鮮總督府特別會計





朝鮮總督府調査

金融

【金融機關】 朝鮮に於ける金融機關は明治十一年第一銀行が釜山に支店を創設し在留内地人の爲めに金融を計かりしを濫觴とし、明治四十四年中央金融機關として朝鮮銀行創設せられ特殊銀行業務の傍ら普通銀行業務をも兼營せり、尙不動産金融機關として朝鮮殖産銀行及東洋拓殖會社あり*



朝鮮銀行外、地方民衆の有するもの四の小金融機關として、各地に金融組合及び無盡會社等を多數設置せらるゝに至たれり。

昭和三年末に於ける各銀行の公稱資本金は壹億圓を超過し、金融組合の資本金は九百八拾餘萬圓の出資を見るに至たれり。

【朝鮮銀行】 總督府始政後明治四十四年三月朝鮮銀行法の公布せらるゝや、從來韓國の中央銀行たりし韓國銀行を朝鮮銀行と改稱せり、昭和四年九月末に於ける資本金は四千萬圓にして中央銀行として國庫金の出納、國債事務取扱並に銀行券を發行するの外左の業務を營む。

(一)爲替手形其の他商業手形の割引、(二)年常取引する諸會社銀行又は商人の爲替手形金の取立、(三)爲替及荷爲替、(四)確實なる擔保ある貸付、(五)諸預り金及當座貸越勘定、(六)金銀貨、貴金屬及諸證券の保護預り、(七)地金銀の賣買及貨幣の交換、(八)信託の業務、(九)尙政府の認可を受くるときは公共團體に對し無擔保貸付及び銀行の業務代理を爲すことを得、營業の都合に由りては國債證券、地方債券其の他確實なる有價證券を買入るゝことを得るものとす。

尙同銀行は本店を京城に置き東京、大阪、神戸、安東、大連、奉天、長春、哈爾賓開原、營口、龍井村、遼陽、鐵嶺、旅順、四平街、青島、上海、天津、鎭質浦鹽、米國紐育に支店又は出張所を設置せり。尙最近數年間の營業成績を圖表に示せり。

【朝鮮殖産銀行】 大正七年十月の設立に係り、其の資本金三千萬圓にして本店を京城に置き朝鮮内樞要の地に支店五十二ケ所、派出所五ケ所を置き左の業務を營めり。尙最近數年間の營業成績を圖表に示めせり。

(一)五十年以内の年賦償還又は五年以内の定期償還の方法に依り不動産又は不動産上の權利を擔保とする貸付、(二)五年以内の定期償還の方法に依り漁業權を擔保とする貸付、(三)法令の規定に依り設定したる財團を擔保とする第一號の方法に依る貸付、(四)農業者又は工業者十人以上連帶して債務を負ふ者に對する五年以内の定期償還の方法に依る無擔保貸付、(五)公共團體に對する第一號の方法に依る無擔保貸付、(六)金融組合漁業組合其の他營利を目的とせざる産業に關する法人に對する第一號の方法に依る無擔保貸付、(七)朝鮮の産物又は朝鮮の産業上必要なる貨物を質とする貸付、(八)國債證券は朝鮮又總督の認可したる有價證券を質とする貸付、(九)爲替及荷爲替、(十)公共團體の債券又は朝鮮に於て殖産事業を營むことを目的とする會社の社債券の應募又は引受、(十一)信託の業務、(十二)預り金又は地金銀有價證券の保護預りを爲し朝鮮總督の認可を受け他の銀行又は東洋拓殖株式會社の業務を代理し公共團體の爲めに其の金錢出納の取扱を爲すのみならず朝鮮總督の指定に基き普通銀行の業務に屬する貸付及當座貸越並に諸手形割引の業務を營み大正八年九月以降は更に貯蓄預金の業務を開始せり尙銀行は其營業資金を得る爲め拂込資本金額の十五倍を限り債券を發行することを得。

【朝鮮貯蓄銀行】 昭和四年七月一日の設立に係り其の資本金五百萬圓にして本店を京城府に置き朝鮮殖産銀行の鮮内各營業所を其の代理店となす其の業務左の如し。

(一)權利の方法に依る預金、(二)一回五圓未滿の預金、(三)據置貯金、(四)定期積金、(五)定期預金、(六)保護預り、(七)公共團體又は産業組合の金錢出納事務の取扱、(八)公共團體又は産業組合よりの預金

【普通銀行】 朝鮮に於ける普通銀行は明治十一年第一銀行を釜山に支店を設置したるを始とし經濟の發達に伴ひ漸次其の增加を見るに至たれり。現今普通銀行は朝鮮に本店を有するもの十四其の支店出張所六十五、内地に本店を有する銀行の支店出張所十六なり。左に普通銀行名及び公稱資本金を揭ぐ。

銀行名	公稱資本金	拂込資本金
	千円	千円
▲第一銀行支店		
▲十八銀行支店		
▲安田銀行支店		
▲山口銀行支店		
▲漢城銀行支店		
▲韓一銀行	三、〇〇〇	一、八七五
▲朝鮮商業銀行	三、〇〇〇	一、六三五
▲海東銀行	八、九三五	四、四七五
▲湖西銀行	三、〇〇〇	八〇〇
▲湖南銀行	三、〇〇〇	一、一五〇
▲慶尙合同銀行	三、三五〇	一、三三一
▲大邱銀行		
▲慶一銀行	三、〇〇〇	七五〇
▲慶尙共立銀行	三、〇〇〇	七五〇
▲釜山商業銀行	一、五〇〇	七五〇
▲慶南銀行		
▲東萊銀行	五〇〇	三五〇
▲密陽銀行	五〇〇	三五〇
▲鮮南銀行	五〇〇	三五〇
▲北鮮商業銀行	一、〇〇〇	一五〇
總計	二六、〇三五	一五、〇六六

【手形交換所】 明治四十三年七月京城に之れを設立し、京城各銀行を其の組合銀行とし組合銀行間の手形小切手の交換を開始し、次で明治四十四年一月仁川に、同年四月釜山に、大正七年一月平壤に同九年十一月元山に、同十年七月大邱に、同十二年十二月木浦に、同十三年一月群山に、昭和四年七月鎭南浦に之れを設立せり。左に昭和元年以來の手形の交換高を圖表に示せり。

【金融組合】 明治四十年金融組合規則を公布せられ、以來每年各地に數十の組合設立せられ、農村の經濟を緩和し産業を助長せること尠からざりしが、時勢の進運に從ひ大正三年に至り準據法に從ひ改正を加へ、新らたに地方金融組合令を公布せられ、組合員の權利義務を明かにし、業務の範圍を擴*



朝鮮殖産銀行

*張し、次で同七年六月更らに其一部を改正せられ、地方金融組合令を金融組合令に改めらるゝ事になれり從來農民に限りた組合員の資格を擴張して商工業者其の他の者にも及ぼし、殊に都會地に對し主として小商工業者を組合員とする都市組合の設立をも認められたるが、更に昭和四年四月中組合の組織及び業務の內容に亙り準據法を改正整頓せられ、今や之れが運用に依り、下層金融機關たる機能を遺憾なく發揮するに至れり。

圖表對照統計

◇朝鮮銀行總況

年度別	公稱資本金	拂込資本金	積立金	政府貸下金	借入金	預金	貸出金	銀行發券高
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
昭和元年	四〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	八、二	七二、三九七	八〇、二八一	五二、四九三	六九、八四一	二一〇、九三六
同二年	四〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	一〇〇一	七二、四一〇	七二、四一〇	八二、六一九	六九、八五七	二一四、五二七
同三年	四〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	一一二一〇	七〇、〇〇〇	六、〇〇〇	四二、三九三	六三、八一〇	二一四、〇八三

◇朝鮮殖産銀行一覽

年度別	公稱資本金	拂込資本金	積立金	債券發行高	預金	貯蓄預金	貸出金	政府貸下金
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
昭和元年末	三〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	四、〇〇三	一四四、八三七	五六、六三七	九、八六〇	二三三、七五五	一、四九九
同二年末	三〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	四、九五三	一七三、四四五	六八、一三三	三三、五一八	二三三、九九八	一、四九九
同三年末	三〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	六、〇〇三	一七七、二三三	八一、七三二	二六、二七四	二五二、一八八	一、四九九

◇手形交換所手形交換高

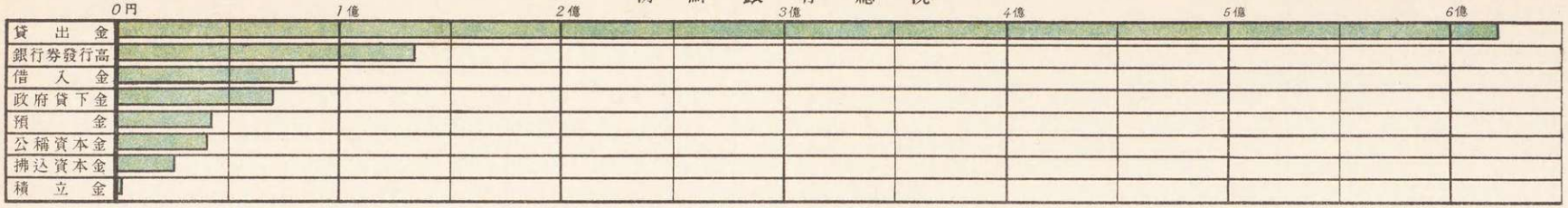
交換所別	昭和元年中		昭和二年中		昭和三年中	
	枚数	交換金額	枚数	交換金額	枚数	交換金額
	一、三一六、九三二枚	千円	一、九七〇、〇五五枚	千円	一、五一二、七四〇枚	千円
京城手形交換所	五九九、一二五	六六、六六六	四一五、一八七	二〇、二三七	一八一、二〇〇	六七、三九五
釜山手形交換所	一八〇、五二一	八三、一七	三九、四三	八三、二九	四四、五六一	一五、四五五
仁川手形交換所	三九、六四三	六二、三三	三八、七四六	二四、五六一	六四、三九八	六五、八四三
平壤手形交換所	三四、一四四	二四、八九六	二〇、九〇五	三二、四四〇	九五、三三七	二四、一二六
元山手形交換所	九五、一九三	二四、八五一	二一、七〇三	三三、九三三	三三、八一四	三六、九五三
大邱手形交換所	三三、七八八	二六、四九九	四二、九二七	二四、二六八	四四、〇八三	二二、五六七
木浦手形交換所	四六、八九八	二六、四九一	八七、九一〇	五九、二五三	八二、二九八	四九、六五二
群山手形交換所	八八、四六八	六二、九四一				
合計	二、三三三、三三一	一、〇九一、一六八	二、三四三、六六四	一、〇九一、一六八	二、四三一、二六七	一、一八一、〇八〇

◇手形種別交換高

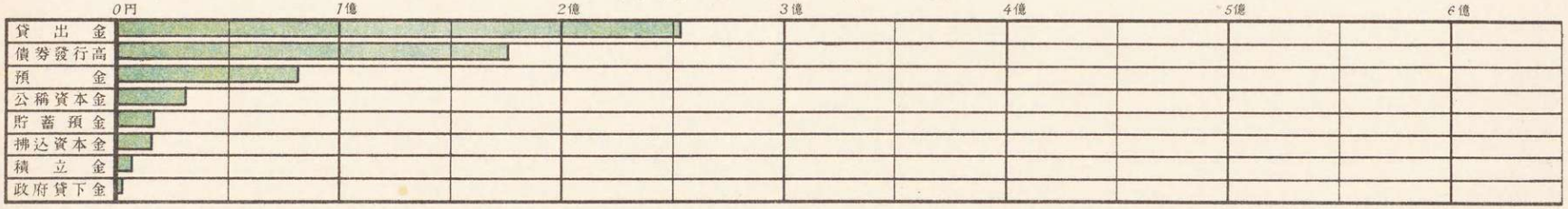
種別	昭和元年中		昭和二年中		昭和三年中	
	枚数	交換金額	枚数	交換金額	枚数	交換金額
	一、六二七、八二一枚	千円	一、五九五、六三五枚	千円	一、六七二、二四七枚	千円
小切手	二三五、六九九	六五五、八一六	二六、五九九	六九九、八一八	一四一、九二一	七〇七、五二九
送金爲替手形	九四、五四四	一〇六、九二六	一〇九、三三三	一三三、一四三	一三三、八〇八	一三〇、六二〇
約束手形	八三、〇四五	四五、九四〇	五三、一四三	四五、四九三	八三、一四九	六六、一三三
仕拂命令	—	八〇、〇四二	六八、九七	一九、三四九	八二、四九九	一〇六、一九九
出給命令	三二〇、九四五	五九六	一、〇一〇	八六、三三四	三六、四四三	一五二、一六八
郵便爲替證書	一、一六六	九〇、二四三	一、〇一四	八七、八三〇	九四〇	八六六
公債債券同利札	四二、九二三	一、七八一	四七、一六四	八〇、二四三	四三、一六八	一、八八一、〇八〇
雜證票	二三三、一三一	一、〇九一、一六八	二三四、六六四	一、〇九一、一六八	二四三、二六七	
合計						

金融機關

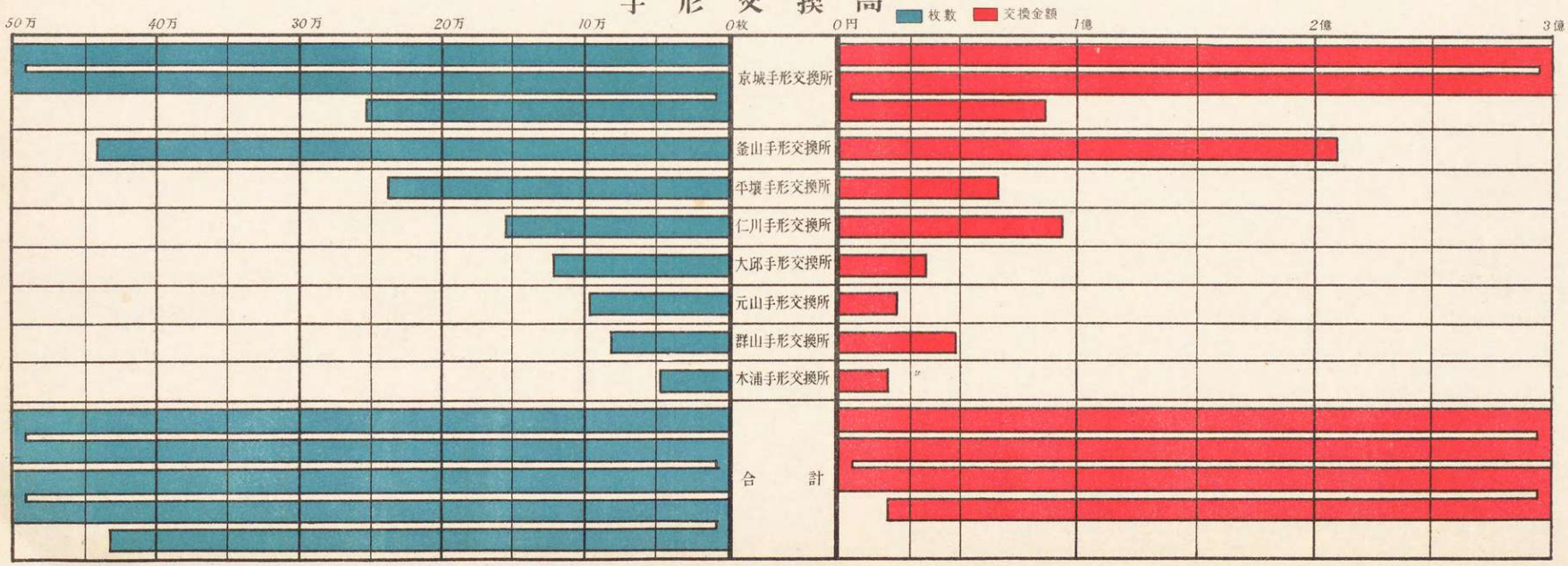
朝鮮銀行總況



朝鮮殖產銀行一覽



手形交換高



朝鮮總督府調査

農業

朝鮮は到る處農業に適し殊に南部地方は氣候溫暖にして農作物の發育最も佳良なり、冬季は寒氣強きも麥類の如き冬作物の枯死する處なく、年中概ね空氣乾燥せるを以て收穫物の品質良好なり、但夏作物中水稻の如きは氣候の關係上生育良好なるべきに拘らず、從來用水不十分なるを以て、屢旱害を被ることあり、然れども灌漑の設備年々發達せるを以て漸次其の度を減じつゝあり、產米增殖に付ては初め大正九年度より約十五箇年に亙り、土地改良事業を施行することゝなりしが、大正十五年更に計畫の一部を變更し、同年以降十四箇年を期し三十五萬町歩の土地改良を施行することゝなり今や着々進行中なるを以て、農業の前途は是より益々多望ならんか。

【米】農業生產額中首位を占むるものなり、然るに始政當時畓の荒廢甚しく從つて收穫少く且品質も頗る劣等なりしが、種々改良の結果今日に於ては收量品質共に面目を一新し、其の生產高は昭和二年に於ては一千七百二十九萬九千石に達せり。因みに昭和三年に於ける其の生產高は一千三百五十一萬二千石、其の輸移出高は六百七十七萬石、價格一億八千三百七十三萬圓なり。

【大豆】品質收量共に佳良にして各道到る處に栽培せらる、殊に西北部には優良品を產し內地及び滿洲種に比較すれば、蛋白質に富めるを以て豆腐、味噌、醬油等の原料として貴ばる、昭和二年中に於ける輸移出額は百四十萬七千石其の價格は二千三百三十九萬圓に達し米と共に重要輸移出品に屬せり。

【麥】大麥小麥を主とし裸麥とも到る處に栽培せらる、小麥は近年生活程度の向上に因り鮮內消費額益增加するも尙米、大豆に次ぐ重要輸移出品たり。

【粟】西北部に於ける主要畑作物にして、該地方の重要なる常食とし其の栽培古より盛に行はるゝも未だ鮮內の需要を充すに足らず、昭和三年に於て百九十七萬三千石其の價格は二千五百四十八萬九千圓の輸移入を見たり。

【甘藷】南鮮地方に多く栽培せられ、農家の補食用として嗜好せらる。

【馬鈴薯】北鮮地方に多く生產し品質佳良なるものあり、其の栽培年々增加し甘藷と共に農家各種の補給に充てられつゝあり。

【果實】風土極めて果樹の生育に適するを以て近時富川、大邱、大田、三浪津、金海、黃州、鎭南浦、平壤、咸興、德源、羅南を始め其の他各地に於て其の栽培に從事する者年々增加するに至れり。

一　苹果　近來優良種の苹果各地に栽培せられ、內地滿洲及び西比利亞に於ける需要多く朝鮮苹果として好評を博しつゝあり。

二　梨　咸興梨の如き稍良品あるも一般に朝鮮梨は味佳良ならず、之に反して內地種は良果を結び其の栽培逐年增加の傾向なり。

三　葡萄　風土能く洋種葡萄に適し、內地に於て栽培困難なる良種も容易に結實し甘味多く品質良好なり。

四　桃　毛桃は水蜜桃に類し味稍佳なれども毛無桃は從來の內地桃に類し品質劣れり、近來京城開城、三浪津に於て改良種の良果を產出す。

五　柿　概ね澁柿にして湯にて澁を拔き又た叺に投じて熟柿とし或は剝皮して乾柿と爲す、忠淸南北道、全羅北道、慶尙北道等產出多し。

六　栗　栗は各道に產せざるなきも、就中平安南道咸從の產は澁皮の剝離容易にして甘味に富めり。

【蔬菜】從來白菜、蘿蔔、甜瓜、南瓜、水芹、蒜等の栽培多く行はれ開城白菜の如きは其の尤なるものなり、近來內地人の移住增加に伴ひ種々なる蔬菜類の栽培漸次增加するに至れり。

【棉花】棉は江原道、咸鏡南道の一部及び咸鏡北道を除くの外、各地殆ど之れを栽培せざるなし、在來棉は纖維長くして彈力に富み各種の用途に適するも品質優良ならざるを以て、明治三十九年以來米國種陸地棉の栽培を奬勵せしに成績良好にして、年々其の栽培反別を增加し同四十三年に於ては陸地棉作付反別千二百六十八町歩、栽培戶數二萬九百餘戶なりしに昭和三年には作付反別十三萬七千六百六十三町、栽培戶數七十四萬二千九百戶の多きに達せり、尙大正八年より京畿、黃海、平安南北の四道及び忠淸北道、慶尙北道の一部に於て陸地棉に不適なる地方は在來棉を奬勵栽培せしめ昭和三年に於ては在來棉作付總面積六萬七千七百十四町歩其の栽培戶數二十六萬四千五百戶に及べり。

【甜菜】明治三十九年來勸業模範場並に道種苗場に於て試驗の結果、西鮮地方の風土に適するを認められ、大正八年大日本製糖會社は平壤に製糖工場を設置して同九年より製糖作業を開始し、昭和三年には平南、黃海兩道に亙り大約六百町歩に原料甜菜を栽培せらる。

【蠶業】蠶兒飼育の主要物なる桑樹は、朝鮮に於ては從來山桑又は在來桑のみにして、飼料としては不適なるもの多く、加之蕃殖法も採木接木の方法に依ることなく、種實より得たる實生苗に過ぎざりしが、總督府は始政以來各道農蠶奬勵機關をして、朝鮮に適應せる優良品種の選定に努めしめ一方當業者を督勵指導し、桑苗生產の助長と共に四滑なる普及計畫を樹て之を奬勵したり、斯くて現在に於ては魯桑、魯桑實生、市平、赤木、島ノ內、改良鼠返等の優良品種と在來桑たる耐寒性強き鼈桑、秋雨、唐桑等優良適種の選出を見るに至れり、昭和三年度に於ける生產業者は二千八百餘人に達し、桑苗生產數約七千四百七十萬本共の價額約百六十萬圓を算するの盛況を呈せり。而して是等桑苗の主なる生產地としては慶北、全南、慶南、京畿、忠南、黃海等にして、一般蠶業の進展と共に產繭百萬石增收計畫に基く植桑桑奬勵助成交付に伴ひ一段の發達をなし、一時は多數の桑苗を移入したる朝鮮も今や其要を感ぜざるに至たれり。加之卸て過剩の桑苗を移出するの狀況となれり。

【蠶種】蠶種は從來養蠶家自ら製造を爲し來り、且其の種類の如きも雜駁劣等なる三眠蠶なりしを以て、始政以來勸業模範場、蠶業試驗所に於て、優良蠶種を製造配付するの傍ら內地蠶種をも移入配付をなし一面地方廳に於ても大正二、三年頃より蠶種製造者を養成し、併て內地人蠶種製造者の移住を慫慂し是等に蠶種製造を經營せしめ、養蠶の發達に伴ひ漸次增加し來りしが、更に同八年四月朝鮮蠶業令並に其の附屬法規を發布し、其の製造及び移入に制限を加へ蠶種の取締をなせり、而して一面農蠶業奬勵機關に於ても鮮內の風土に適應せる蠶種の選出に努め優良蠶種の製造をなし、蠶種製造者に原蠶種を配付しつゝあり。

▲今其の主なる種類を擧ぐれば春蠶に於ては國蠶日一號、國蠶支四號並に國蠶歐七號、國蠶支七號の一代交雜種にして、夏秋蠶種は國蠶日一〇六號、國蠶支一〇一號の二化、二化交雜、國蠶日一〇七號、國蠶支一〇二號、國蠶支九號の三元交雜種、其の大部分を占む。

▲昭和三年の統計に依るに蠶種製造者は全鮮を通じ二百九十七名にして、其の蠶種製造枚數百二萬八千九百十七枚價額約百五十四萬三千三百餘圓を示し鮮內の需要枚數以上の製造能力を有するに至れり、而して養蠶の進展に伴ひ將來益々斯業の隆盛を見るに至るべし。

【繭】蠶繭は特殊農產物中最も重要なるものに屬し、今や全道到る處に其の生產を見ざるはなく就中慶北、全南、江原、平北、忠南、咸南、平南の諸道を其の主產地とす。

▲從來は劣等なる在來三眠蠶なりしも、奬勵の結果面目一新し全鮮到る處優良品種ならざるはなきに到れり。

▲總督府は大正十四年より向ふ十五箇年を期し、產繭を百萬石に達せしむる目的を以て計畫を樹立し、年々國庫より補助金を交付し、斯業の發達を圖りつゝあるを以て遂年激甚なる產繭額の增加をなし、豫定の年限を俟たずして其の目的を達する見込なり。

圖表對照統計

◇麥類作付段別表

地方別	種別	大麥	小麥	裸麥	計
京畿道		八四、一〇六、〇六	三五、〇三八、〇二	一、〇六四、〇五二	一四九、一〇八、二二
忠清北道		六五、四〇三、八	一七、六八一、〇五	三、八一七、七	五八、九八二、九
忠清南道		四五、三八一、二	一一、八六一、九	二、四八一、七	四三、八九四、七
全羅北道		一三、四四四、七	三〇、八二三、五	一、九四八、三	一六、三八九、五
全羅南道		一七、八五五、一	一八、三六〇、五	一、八九、九	一六、〇四七、五
慶尚北道		一二、九八、三	一二、三六九、五	一、四八、九	一四、二六七、〇
慶尚南道		一、三六、八	一、二六、五	一、四、九	一、二六七、〇

地方別	種別	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	計	總計
大麥		一三、一四七、一	一六、六五八、七	一三五、八六九、八	六、六五五、〇	一三、三四一、九	一五、六八八、二	一九、一〇八、二	二〇六、八八八、四
小麥		一、三四、三三〇	三七、六五四、九	三、一五五、一	三六、四一九、四	三、六五五、一	三五、四一九、四	三、〇三五、一	三六、九五五、〇
裸麥		二、〇三五、一	三、一五五、一	一、三五、八	一、三五、八	一、三五、八	一、三五、八	二、〇三五、一	四、五五五、一
計		一四九、一五、一〇八	五八、八八、九、二	一、〇六四、〇五二	一四、二六七、〇	一、二六七、〇	一四、二六七、〇	一、二六七、〇	一、二六七、〇

◇麥類收穫高

地方別	種別	大麥	小麥	裸麥	計
京畿道		四五、三六、三五六	一五、〇三八、〇二	五、〇一七	五二、八、九九
忠清北道		三五、七五二、七五五	七、六八〇、〇五	三、九四九	二七、三五〇、〇
忠清南道		四四、〇三三、九	八、一四八、七	三、八四一、七	三五、八九三、七
全羅北道		一一、四五九、一七	二、〇三六、八	一、〇七五、一	四、一七五、〇
全羅南道		一一、三四、九三	二、一三、五	一、〇七、八	四、一六七、〇
慶尚北道		一一、三四、九三	二、一三、五	一、〇七、八	四、一六七、〇
慶尚南道		一一、三四、九三	二、一三、五	一、〇七、八	四、一六七、〇

地方別	種別	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	計	總計
大麥		一三、一四七、一	一六、六五八、七	一三五、八六九、八	六、六五五、〇	一三、三四一、九	一五、六八八、二	一九、一〇八、二	二〇六、八八八、四
小麥		一、三四、三三〇	三七、六五四、九	三、一五五、一	三六、四一九、四	三、六五五、一	三五、四一九、四	三、〇三五、一	三六、九五五、〇
裸麥		二、〇三五、一	三、一五五、一	一、三五、八	一、三五、八	一、三五、八	一、三五、八	二、〇三五、一	四、五五五、一
計		一四九、一五、一〇八	五八、八八、九、二	一、〇六四、〇五二	一四、二六七、〇	一、二六七、〇	一四、二六七、〇	一、二六七、〇	一、二六七、〇

◇麥類一段歩收穫高

地方別	種別	大麥	小麥	裸麥	計
京畿道		四五、三六、三五六	一五、〇三八、〇二	五、〇一七	五二、八、九九
忠清北道		三五、七五二、七五五	七、六八〇、〇五	三、九四九	二七、三五〇、〇
忠清南道		四四、〇三三、九	八、一四八、七	三、八四一、七	三五、八九三、七
全羅北道		一一、四五九、一七	二、〇三六、八	一、〇七五、一	四、一七五、〇
全羅南道		一一、三四、九三	二、一三、五	一、〇七、八	四、一六七、〇
慶尚北道		一一、三四、九三	二、一三、五	一、〇七、八	四、一六七、〇
慶尚南道		一一、三四、九三	二、一三、五	一、〇七、八	四、一六七、〇

地方別	種別	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	計	總計
大麥		一三、一四七、一	一六、六五八、七	一三五、八六九、八	六、六五五、〇	一三、三四一、九	一五、六八八、二	一九、一〇八、二	二〇六、八八八、四
小麥		一、三四、三三〇	三七、六五四、九	三、一五五、一	三六、四一九、四	三、六五五、一	三五、四一九、四	三、〇三五、一	三六、九五五、〇
裸麥		二、〇三五、一	三、一五五、一	一、三五、八	一、三五、八	一、三五、八	一、三五、八	二、〇三五、一	四、五五五、一
計		一四九、一五、一〇八	五八、八八、九、二	一、〇六四、〇五二	一四、二六七、〇	一、二六七、〇	一四、二六七、〇	一、二六七、〇	一、二六七、〇

◇麥類收穫高

地方別	種別	大麥	小麥	裸麥	計
京畿道		四五、三六、三五六	一五、〇三八、〇二	五、〇一七	五二、八、九九
忠清北道		三五、七五二、七五五	七、六八〇、〇五	三、九四九	二七、三五〇、〇
忠清南道		四四、〇三三、九	八、一四八、七	三、八四一、七	三五、八九三、七
全羅北道		一一、四五九、一七	二、〇三六、八	一、〇七五、一	四、一七五、〇
全羅南道		一一、三四、九三	二、一三、五	一、〇七、八	四、一六七、〇
慶尚北道		一一、三四、九三	二、一三、五	一、〇七、八	四、一六七、〇
慶尚南道		一一、三四、九三	二、一三、五	一、〇七、八	四、一六七、〇

地方別	種別	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	計	總計
大麥		一三、一四七、一	一六、六五八、七	一三五、八六九、八	六、六五五、〇	一三、三四一、九	一五、六八八、二	一九、一〇八、二	二〇六、八八八、四
小麥		一、三四、三三〇	三七、六五四、九	三、一五五、一	三六、四一九、四	三、六五五、一	三五、四一九、四	三、〇三五、一	三六、九五五、〇
裸麥		二、〇三五、一	三、一五五、一	一、三五、八	一、三五、八	一、三五、八	一、三五、八	二、〇三五、一	四、五五五、一
計		一四九、一五、一〇八	五八、八八、九、二	一、〇六四、〇五二	一四、二六七、〇	一、二六七、〇	一四、二六七、〇	一、二六七、〇	一、二六七、〇

◇豆類作付段別表

地方別	種別	大豆	小豆	粟	平均
京畿道		〇、五四	〇、三五	〇、五五	〇、四六
忠清北道		〇、五〇	〇、三三	〇、五三	〇、四六
忠清南道		〇、九三	〇、四九	〇、六〇	〇、五二
全羅北道		〇、七二	〇、四七	〇、五三	〇、四八
全羅南道		〇、七二	〇、四七	〇、五三	〇、四八
慶尚北道		〇、七二	〇、四七	〇、五三	〇、四八
慶尚南道		〇、七二	〇、四七	〇、五三	〇、四八

地方別	種別	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	計	總計
大豆		〇、五四	〇、五八	〇、五四	〇、五四	〇、五四	〇、五四	〇、五四	〇、五四
小豆		〇、三五	〇、三五	〇、三五	〇、三五	〇、三五	〇、三五	〇、三五	〇、三五
粟		〇、五五	〇、五五	〇、五五	〇、五五	〇、五五	〇、五五	〇、五五	〇、五五
平均		〇、四六	〇、四六	〇、四六	〇、四六	〇、四六	〇、四六	〇、四六	〇、四六

◇豆類收穫高

地方別	種別	大豆	小豆	粟	計
京畿道		八五、三五、八五五	四、二七、九	一、一八三、一四五	一、一九一、一四五
忠清北道		四五、九三、一五五	一三五、一三五、八	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
忠清南道		四五、一四五、一五五	一三五、一三五、八	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
全羅北道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
全羅南道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
慶尚北道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
慶尚南道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五

地方別	種別	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	計	總計
大豆		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
小豆		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
粟		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
計		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一

◇豆類一段歩收穫高

地方別	種別	大豆	小豆	粟	計
京畿道		八五、三五、八五五	四、二七、九	一、一八三、一四五	一、一九一、一四五
忠清北道		四五、九三、一五五	一三五、一三五、八	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
忠清南道		四五、一四五、一五五	一三五、一三五、八	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
全羅北道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
全羅南道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
慶尚北道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
慶尚南道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五

地方別	種別	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	計	總計
大豆		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
小豆		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
粟		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
計		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一

◇豆類收穫高

地方別	種別	大豆	小豆	粟	計
京畿道		八五、三五、八五五	四、二七、九	一、一八三、一四五	一、一九一、一四五
忠清北道		四五、九三、一五五	一三五、一三五、八	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
忠清南道		四五、一四五、一五五	一三五、一三五、八	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
全羅北道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
全羅南道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
慶尚北道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
慶尚南道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五

地方別	種別	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	計	總計
大豆		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
小豆		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
粟		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
計		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一

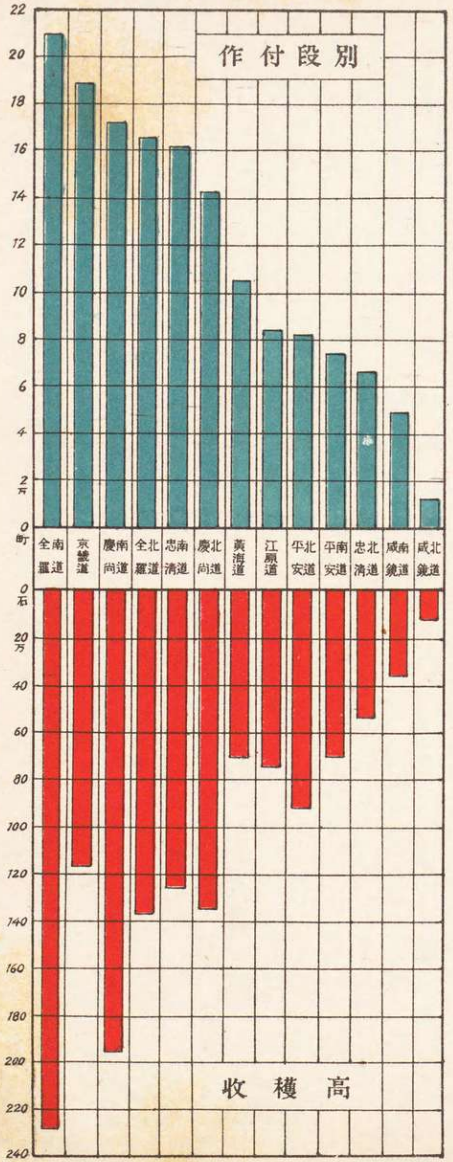
◇豆類一段歩收穫高

地方別	種別	大豆	小豆	粟	計
京畿道		八五、三五、八五五	四、二七、九	一、一八三、一四五	一、一九一、一四五
忠清北道		四五、九三、一五五	一三五、一三五、八	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
忠清南道		四五、一四五、一五五	一三五、一三五、八	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
全羅北道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
全羅南道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
慶尚北道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五
慶尚南道		一〇五、三五六、二	三一、三五五、四	一、一三五、四七五	一、一九一、四七五

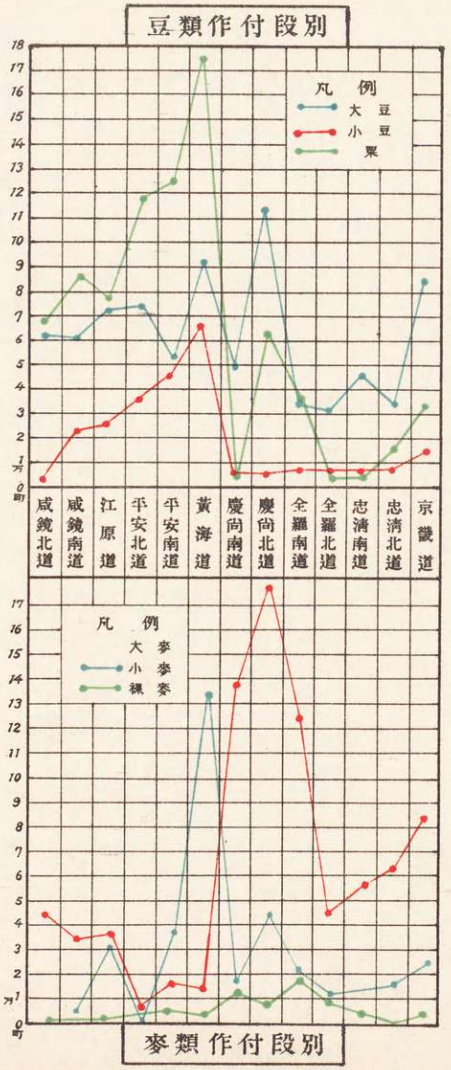
地方別	種別	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	計	總計
大豆		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
小豆		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
粟		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一
計		一、一四三、一六一	一、八三二、一四五	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一	一、一四三、一六一

主要農作物作付段別及收穫高

米作付段別及收穫高

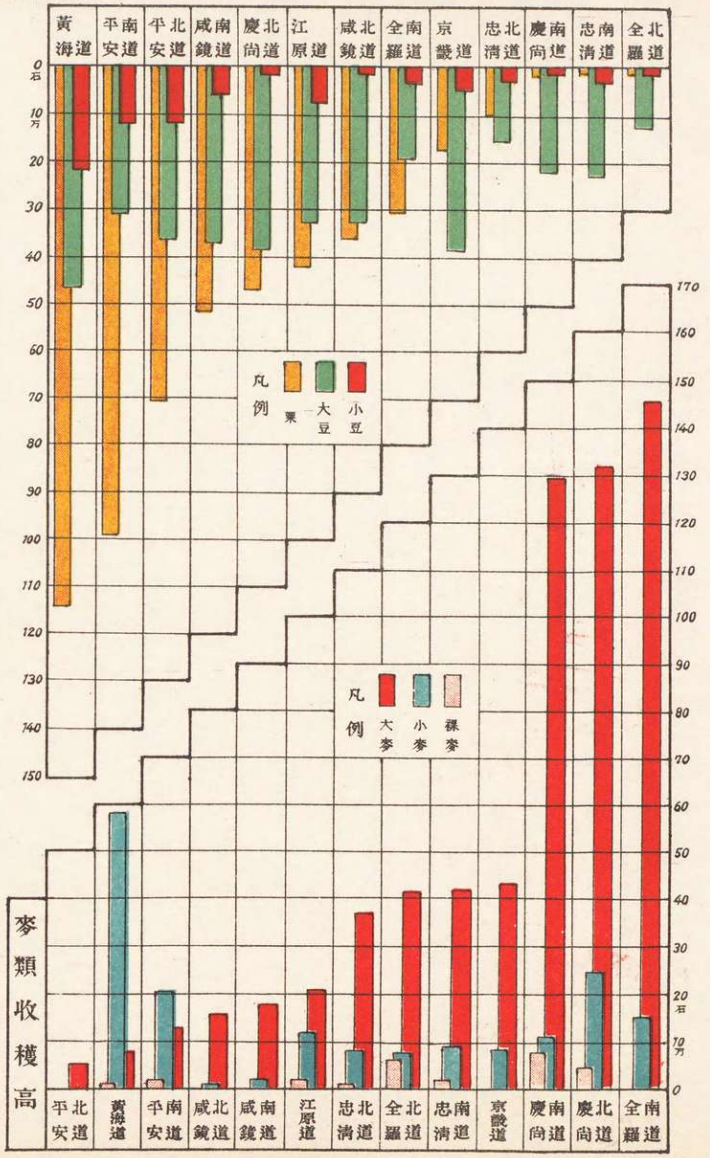


豆類作付段別



麥類作付段別

豆類收穫高



朝鮮總督府調査

【生絲】生絲は從來幼稚なる在來製絲法に依り繰絲せられ居りしも、曩近蠶業の發達に伴ひ漸次器械製絲法による輸出向優良生絲を製造する者續出するに至れり、而して是等の主要産地を見るに其の最も盛なるは慶北にして京畿忠南、全北、全南之れに亞ぎ、今や器械製絲釜數五千四百釜是等に依る生絲額十六萬四千百六十九貫、其の價額一千三百六十二萬圓にして、之れに其他の製絲法に依る生絲生産額七萬二千六百貫、其の價額三百八十四萬圓を加ふれば生絲總生産額に於て二十三萬七千貫總價額實に一千七百四十萬圓を示し逐年激增の盛況を呈するに至れり。

【穀物檢査】米は物産の大宗にして輸移出品の首班たり、其の改良に關しては種々の施設が行なはれ、大正四年二月米穀檢査規則が發布されて輸移出米の檢査を施行し漸次良好の成績を擧げ來れるも、既往の成績に鑑み同六年九月之れを改正せり、爾來米穀の改良大に進み、聲價著しく向上して廣く內地に取引せらるゝに至れり、同十二年七月再び規則が改正され、白米檢査を全鮮（江原咸北を除く）に施行せらる、現行檢査の要點を擧ぐれば（一）朝鮮産玄米及び白米を輸出、移出又は他の道に搬出せむとする場合は檢査を受くること（二）檢査は道地方費の事業として行ふこと（三）檢査等級は玄米は特等以下四等の五階級に、白米は特等以下等外の四階級に分ち不合格米は輸出、移出又は他の道に搬出を禁止し、白米の等外は輸出又は移出することを禁止せること（四）容量は玄米の一叭四斗（日米一合以上二合以內）白米は一叭四斗（日米三合以上六合以內）一袋二斗（日米一合以上二合以內）とせること（五）檢査方法は吸入は見刺法に依り布袋入は解口し石の粒數檢査は拔檢査の方法に依り之れを行ひ檢査を爲したる米には其の包裝に檢査證印及び道名記號を押捺すること（六）米穀檢査は當分の內咸鏡北道には施行せざること等なり。大豆は米に亞ぐ重要農作物にして、其の改良は最も緊要なるものあるを以て米穀檢査規則に準じ大正六年九月より之が檢査を施行せり、更に同十一年七月米穀檢査規則改正に伴ひ大體同令に準じ之を改正せり。

小麥は黃海道、平安南道、榮豆は咸鏡南道、咸鏡北道、豌豆は咸鏡北道、小豆は黃海道、咸鏡南道、咸鏡北道に於て何れも同樣檢査を施行せらる。

【肥料取締】近年鮮內に於ける販賣肥料の需要は逐年躍進的激增を來すに拘らず、農家の肥料に對する智識の向上之に伴はず、爲めに一部奸商の乘ずる處となり、不正粗惡肥料の橫行益々甚しからむとするの傾向ありたるを以て、昭和二年九月朝鮮肥料取締令（制令）及び同施行規則（府令）並に同施行細則（道令）等の取締法規を發布し、同三年一月一日より之を施行せり、右實施に關し昭和二年度本府に肥料取締事務監督官一名、各道に肥料取締官吏一名宛を設置するの外勸業模範場に肥料檢査係を新設し道又は肥料營業者其他の依賴に應じ肥料又は原料の分析鑑定を爲すことゝせり、肥料取締の効果に關しては實施後日尙淺く、未だ具体的に之を列擧すること能はざるも肥料營業者の自覺を促し、施行前に行はれたる肥料の僞造、他物混和の如き犯罪は漸くにして其の數を減じ、鮮內販賣肥料の品位漸次改善向上しつゝあり。

【勸農機關】農業は産業中最重要の位置を占め、國民の經濟は一に繫りて其の振否如何に在るを以て總督府は之れが改良指導の途を講ずる爲め勸農機關を設く卽ち左の如し。

一　勸業模範場　本場は京畿道水原に在り、産業の改良發達上に資する調査試驗、農事の模範、實地指導、講習、講話、種苗、蠶種、種禽、種畜の配付等を主たる目的とす。

二　西鮮支場　黃海道沙里院に在り、專ら朝鮮に於ける一般畑作物の調査試驗を行ふ。

三　木浦棉作支場　全羅南道木浦に在り、專ら棉花に關する試驗調査、種子の馴化、栽培等を行ひつゝあり。

四　木浦棉作支場龍岡出張所　平安南道龍岡に在り、主として朝鮮在來棉の試驗を行ふを目的とす。

五　蘭谷牧馬支場　江原道蘭谷に在り、蒙古牝馬を基礎とし飼養及び蕃殖試驗を行ひ、朝鮮に適する馬種を産出し之れが普及を圖るを目的とす。

六　蠶業試驗所　水原に在り、原蠶種の製造配付及び蠶業に關する試驗、調査を行ふ。

七　女子蠶業講習所　水原に在り、講習期間は十箇月にして蠶業に關する學理及び實地を講習し其の卒業生は總數四百七名に及べり。

八　道種苗場　種苗場は京城、淸州、公州、裡里、光州（濟州嶋に支場を設く）大邱、晋州、海州、平壤、定州（江界に支場を設く）春川、咸興、鏡城（穩城に支場を設く）の十三箇所に設けられ、農産の改良增殖に關する試驗及び調査、種苗、種卵、種禽及び種豚の配付又は種畜の種付農事に關する模範農具の貸與、農事に關する講習、講話、傳習及び實地指導を行ひつゝあり。

九　道原蠶種製造所　各道に一箇所宛を設置し原蠶種の製造を爲すと共に蠶業に關する試驗調査を行ひつゝあり。

十　道蠶業取締所　朝鮮蠶業令の實施に依り其の執行機關の一として各道に一箇所宛を設置し、蠶病の豫防及び蠶種、桑苗の生産販賣に關する取締を爲す。

十一　道種馬所　咸鏡北道の設立にして慶源郡雄基に在り、種馬はサラブレット種、ハーニーの雜種及び蒙古種を飼養し、附近の地方馬に種付して改良を圖りつゝあり。

十二　朝鮮農會　從來の朝鮮農會は任意團體として本會を京城に置き農業に關する調査研究を行ひ、每月一回內鮮文兩種の會報を發刊し講習會、講演會を開催し品評會共進會、展覽會、競技會を開催する等官民の間に介在して農業の指導勸奬に努めつゝありしが、大正十五年三月朝鮮農會令發布せられ其の實施を見るや系統農會の設立を促成し、昭和二年三月には全鮮十三道農會を網羅せる中央農會たる朝鮮農會の設立を見るに至れり。

十三　朝鮮畜産協會及び朝鮮蠶絲會　畜産の改良發達並に蠶絲業の改良發達を圖るを目的とする任意團体なり、何れも朝鮮を一圓とし官の施設に順應して設立されたるものにして會報の發行、講習會、講演會共の他共進會、展覽會、競技會を開催し專ら畜産及び蠶業の進展に努めつゝあり。

【水利組合】朝鮮水利組合令は大正六年十月一日施行せられたりしが昭和三年七月一日朝鮮土地改良令施行に伴ひ其の改正を見るに至れり。

一　水利組合の目的　水利組合は法人にして、官の監督を受け灌漑排水、水害豫防又は朝鮮土地改良令第一條の土地改良を以て其の目的とす、尙土地改良を目的とする水利組合は當分の內組合區域內の農事改良に關する施設を爲すことを得。

二　水利組合の區域及び組合員　水利組合の組合事業の爲め、利益を受くる土地を以て其の區域と爲す、而して灌漑排水又は土地改良を目的とする組合に在りては沓及び畓となさんとする田若くは未開墾土地等の所有者を以て組合員とし、水害豫防を目的とする組合に在りて田畓塩の所有者及び事業の爲め利益を蒙る家屋其の他の工作物の所有者を以て組合員とし、又た國有未墾地の利用者及び驛屯土の買受の契約を爲したる者並に公有水面埋立の免許を受けたる者は之れを土地所有者と看做し組合員と爲す。

三　水利組合の設置合併分割廢止又は組合區域の變更　水利組合の設置は組合員たるべき者五人以上創立者と爲り、組合規約を作り組合員たるべき者の二分の一以上にして組合の區域となるべき地の總面積の三分の二以上に當る土地所有者の同意を得て朝鮮總督の認可を受くるを要す、但し公有水面を組合區域に包含する場合に在りては尙其の他の土地の所有者の三分の二以上にして其の他の土地の總面積の四分の三以上に當る土地の所有者の同意を得朝鮮總督の認可を受くるものとす。

圖表對照統計

朝鮮の部

◇農業從業者戶數表

地方別	人種別	內地人	朝鮮人	支那人	其ノ他ノ外國人	計
總計		一四〇九、二三五	三三五、八二六	三五、八三六	九	一、七八一、一一七
京畿道		一、〇一七	一三五、〇一〇	一、四三五		一三七、四六二
忠北道		一、一八一	一三一、一四五	一、二三四		一三三、五六一
忠南道		一、三一八	一四一、〇一五	一、二三一		一四三、四六四
全北道		一、一八九	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
全南道		一、一八一	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
慶北道		一、一八九	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
慶南道		一、一八一	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
黃海道		一、一八九	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
平北道		一、一八一	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
平南道		一、一八九	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
江原道		一、一八一	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
咸北道		一、一八九	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
咸南道		一、一八一	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九

◇農業從業者人口表

地方別	人種別	內地人	朝鮮人	支那人	其ノ他ノ外國人	計
總計		五、八三九、九四六	一、二七〇、九八〇	一四、三五八	四三	七、一二五、八一九
京畿道		四三三、三三〇	一三五、〇一四	一、四三五		五六〇、七八九
忠北道		一四〇、五三五	一三一、一四五	一、二三四		一三三、五六一
忠南道		一四〇、五三五	一四一、〇一五	一、二三一		一四三、四六四
全北道		一四〇、五三五	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
全南道		一四〇、五三五	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
慶北道		一四〇、五三五	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
慶南道		一四〇、五三五	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
黃海道		一四〇、五三五	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
平北道		一四〇、五三五	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
平南道		一四〇、五三五	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
江原道		一四〇、五三五	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
咸北道		一四〇、五三五	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九
咸南道		一四〇、五三五	一三五、三三九	一、二三一		一三八、三六九

◇米作付段別表

地方別	種別	水稻	陸稻	計
總計		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
京畿道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
忠北道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
忠南道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
全北道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
全南道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
慶北道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
慶南道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
黃海道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
平北道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
平南道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
江原道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
咸北道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町
咸南道		一、四五、九六、八七〇町	三、六三、一三五町	一、七八、〇〇、〇〇五町

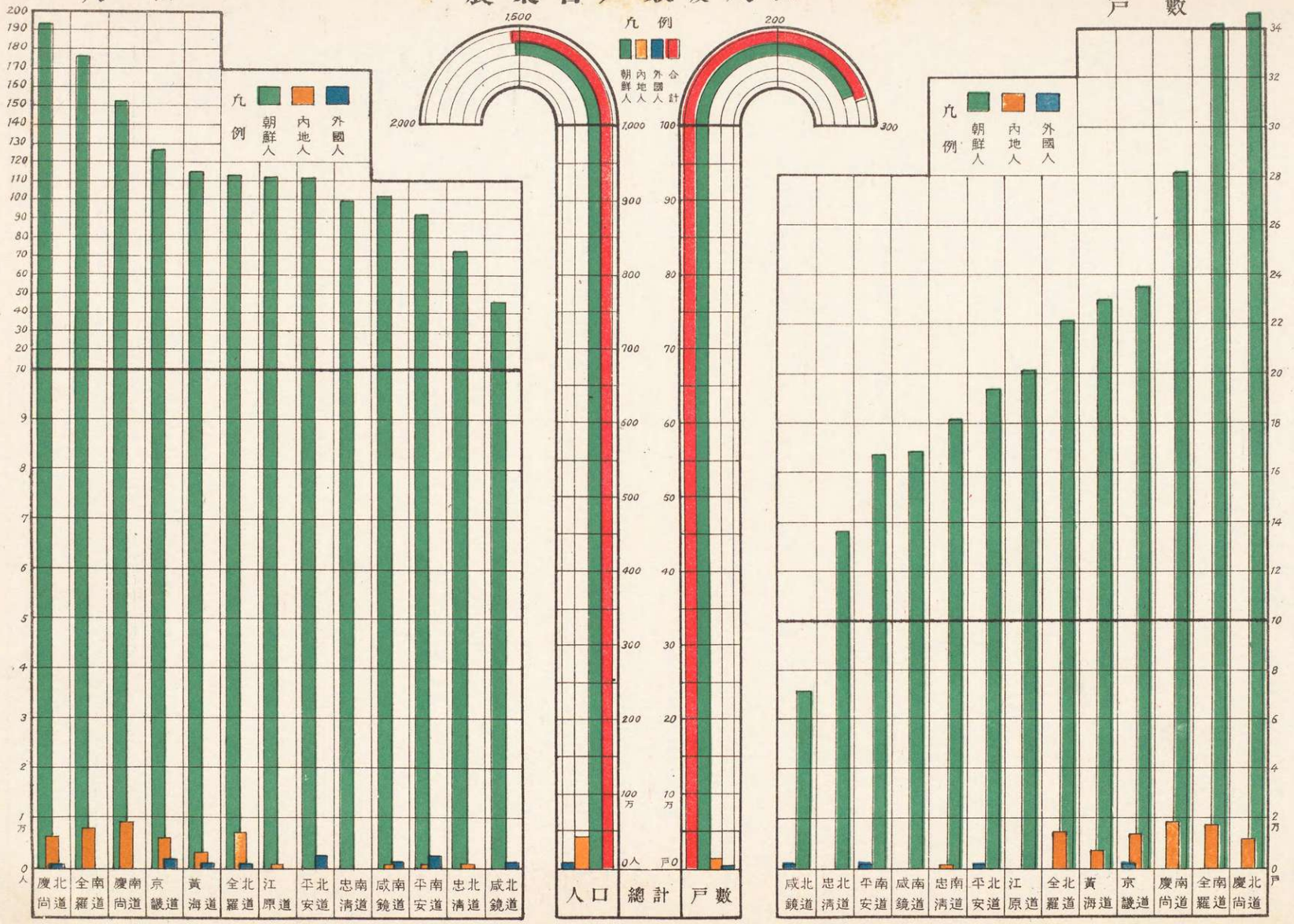
◇米收穫高

地方別	種別	水稻	陸稻	計
總計		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
京畿道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
忠北道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
忠南道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
全北道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
全南道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
慶北道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
慶南道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
黃海道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
平北道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
平南道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
江原道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
咸北道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石
咸南道		一、四五、九六、八七〇石	一、四五、七〇、九五石	一、六三、一三五石

◇米一段步收穫高

地方別	種別	水稻	陸稻	計
總計		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
京畿道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
忠北道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
忠南道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
全北道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
全南道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
慶北道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
慶南道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
黃海道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
平北道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
平南道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
江原道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
咸北道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石
咸南道		一、〇五、一二石	四、九九、六三石	一、〇五、一二石

農業者戸數及人口



朝鮮總督府調査

■商業

【朝鮮人の商業】古來朝鮮人の取引は大部分市場に於て行はるゝを一般の慣例としたりしが、近時店舗を常設して商業に從事するもの漸次增加するに至りしも市場は依然地方重要の商業機關として、昭和三年末に於ては全鮮を通じて其の數（現物市場を含む）一千三百九十一、一箇年取引額九億一千萬圓以上に達せり、此等の市場は每月五六回定期開市せられ附近の住民は勿論遠く八九里の地より來集す、市場には客主、居間、監考、典當の取引機關がある。

【內地人の商業】內地人の商業は京城、仁川、釜山、馬山、群山、木浦、大邱元山、清津、平壤、鎭南浦、新義州等內地人の集團地を中心とせしも、併合以來諸般施設の發展と共に今や都鄙の別なく到る處之れを見るに至れり。內地人の商業は穀物、海產物、牛皮等朝鮮物產の輸移出或は各種雜貨、綿絲布類、酒醬油、砂糖、燐寸等の移入貿易を主とし、各種商品の卸賣小賣に從ふ者亦多く日用雜貨及び米穀、呉服、煙草、酒醬油、文房具、菓子、荒物類の商品は概して京城、仁川、釜山等の卸商より各地の小賣商に供給せらる。

【會　社】會社の設立に對しては明治四十四年一月施行の會社令に依り、許可主義を採用し來りたるも、近時朝鮮人の經濟力の發展著しく知識の程度一般に向上して會社に關する理解亦進歩し、且つ朝鮮に於ける內地人の企業漸次其の發展を見るに至りしを以て、大正九年四月一日該令を廢止せり、但し取引所、保險業、有價證券の賣買若くは其の仲立業を目的とする會社に限り其の事業の性質上一般の自由に放任するときは種々の弊害あらんことを慮れ、之れが取締に關する特別法令の公布を見るに至る迄、當分從前の會社令を適用せらるゝ事に成つて居る。最近に於ける會社設立の狀況は產業の發達に伴ひ大規模の企業漸次增加し、殊に各種の工業を目的とする大會社の設立せらるゝもの多きを加ふるの傾向である。

▲朝鮮に本店を有する會社

種別	會社數	公稱資本金
內地人經營	合名會社	九六七
	合資會社	五四九
	株式會社	一、二三四
	計	二、三〇〇
朝鮮人經營	合名會社	八七
	合資會社	一、二八三
	株式會社	四四七
	計	一、四三七
內鮮人合同經營	合名會社	四
	合資會社	一五四
	株式會社	一〇二
	計	一〇七
外國人經營	合名會社	三
	合資會社	七
	株式會社	二九
	計	三九
合計	合名會社	一、一〇〇
	合資會社	一、五四七
	株式會社	一、三五〇
	計	四、〇〇四

種別	支店數	公稱資本金
內地會社	合名會社	二
	合資會社	一〇
	株式會社	一〇二
	計	一一四
外國會社	合名會社	一
	合資會社	一
	株式會社	五
	計	五
合計	合名會社	一〇
	合資會社	一〇
	株式會社	一〇二
	計	一二九

【商業會議所】商業會議所は從來何等據るべき法規なく、其の事業上及び監督上遺憾少からざりしを以て、大正四年八月會議所令を公布せられ、爾來一地區一商業會議所となし官民協力以て商工業の進歩發達を圖られつゝあり。

■專　賣

【煙　草】煙草は重要なる財源に屬し、大正十年七月より煙草專賣令を實施せられたりしが、朝鮮民度慣習に鑑み、先づ煙草の製造を政府の事業とし、漸を逐ふて制度の完璧を期するの政策を以てせられたり。大正十二年以來政府の製造設備及び販賣機關も漸次整頓したるを以て、昭和二年一月煙草專賣令を改正せられ、玆に始めて完全なる專賣制度を實施せらるゝに至たれり。煙草の種類は大別して內地種、朝鮮種、黃色種及び土耳古種の四種とし專賣實施以來耕作の改善指導に努力されたる結果近來煙草耕作發達し、數量及び賠償金等增加するに至れり其の概況左の如し。

年度	耕作納付人員	耕作面積	葉煙草收納高	一反歩平均收納高	賠償金高	一人平均賠償金
大正十一年	五九、三六八	七、三〇五町	一、四九、九三一貫	一、〇九五貫	一、〇五五圓	一圓四九錢
同十二年	五〇、七五八	八、一二六町	一、七三、八七〇貫	一、二六〇貫	一、二一〇圓	一圓六五錢
昭和元年	二三、七八八	四、三三七町	一、一三、四六五貫	一、二六〇貫	一、二一〇圓	一圓六五錢
同二年		一、九〇四町	五、〇三九、二四六貫	一、二六〇貫	一、二一〇圓	一圓六五錢
同三年		一、八七〇町	二、三七、八三三貫	一、二六〇貫	一、二一〇圓	一圓六五錢

【人　蔘】人蔘は古來高麗蔘と稱し世に貴重せられ、夙に政府の專賣に屬したるものなり、併合の際舊韓國政府の制定したる、紅蔘專賣法を繼續せられたりしが、大正九年十月紅蔘專賣令公布せられ、以來事業の發達亦大に見るべきものあるに至れり。尙政府の專賣に係る紅蔘原料產地以外に於ても、相當の人蔘產額あり、昭和二年に於ける人蔘收穫は七萬二千二十八斤に達せり。（累年の統計を圖表に示す。）

【鹽】朝鮮に於ては鹽は專賣局の經營する所たるに因り、聊か其の消長を述ぶる事とする。古來朝鮮に於て消費する鹽は專ら沿海各地にて製造する、煎蒸鹽を以て之れに充てたるも其の製造方法甚だ幼稚にして燃料勞力を要すること夥しく、隨て生產費の高價なるを免れざるを以て、明治三十五六年より漸次安價なる支那天日鹽の輸入を誘致し、逐年其の數量の增加を見るに至りしが、政府に於ては國民生活の必須品たる鹽の自作自給を圖る目的を以て、第一期事業として平安南道廣梁灣に七百七十四町步、京畿道朱安に於て鹽田を築造せられ其の成績良好なるに鑑み、逐次鹽田の擴張を圖かり現時に於ては二千四百四十六町步の既成鹽田を得るに至れり。專賣局の生產見込額は二億五千萬斤の豫定の由なり。

■畜　產

【牛】體軀肥大、體質強健而かも性質溫順なるを以て農耕運搬用を兼ね、又た食用として需要多く到る處の農家に飼養せらる、又た其の生產豊富價格低廉なるを以て內地、露領沿海州及び支那等に移輸出せらるゝもの多し、昭和二年に於ける生牛の移輸出額五万八千餘頭、價格四百八十四萬餘圓を算し牛皮、牛骨、牛脂、牛蠟等の輸移出額亦四百餘万圓に上れり。

【馬】體軀矮小にして、比較的力強く險路峻坂を行くに巧にして、專ら乘駄兩用に供せられ、普通一頭の價格約六七十圓以上百圓なり。

【騾、騾】乘駄兩用に供せらるゝも其の數少なく驢は一頭の價約五六十圓、騾は七八十圓內外なり。

【緬　羊】大正八年より成鏡北道、其他四道を選び蒙古種羊を民間に配付して試驗的飼育を行はしめつゝあり。

【豚】在來種は體軀矮小晩熟にして肥大性を缺き品質劣等なれども其の生產頗る多く一頭の價十二圓內外なり。

圖表對照統計

◇朝鮮に本店を有する會社營業種別

年次	農業	林業	商業	工業	水産業	鑛業	銀行及金融業	運輸業	瓦斯及電氣業	其ノ他	合計
明治四十四年末	一〇	二	六六	二七	一	一	一九	一九	七	—	一五三
昭和二年末	六六	八	四五六	三五六	三一	九	一八	一三三	四五	一三五	一、三五八
同三年末	六四	一五	四九五	四四〇	一三	三七	一三三	一四八	四六	一六六	一、五四七

◇朝鮮に支店を有する内地又は外國會社營業種別

年次	農業	林業	工業	水産業	鑛業	銀行及金融業	運輸業	瓦斯及電氣業	其ノ他	合計
昭和三年末 内地會社	二四	—	三	二	四	—	七	—	一	一四
昭和三年末 外國會社	一四	—	三	二	一四	—	七	—	一	一〇
計	三四	—	三四	二四	一四	—	一四	—	二	二四

◇人參製造高及販賣金高

年度	水蔘産收納高	製造高・蔘	製造高・紅蔘	販賣金高・蔘	販賣金高・紅蔘	販賣金高・尾蔘	販賣金高・副産物	販賣金高・計
大正十二年度	一六六、二六三斤	一五、七八五斤	二、二七、三〇七円	三、一七五円	一六、五九〇円	二、一七四、九二三円		
昭和元年度	一二五、〇〇五	一〇、〇八四	二、七九、三三三	八、〇二四	八、六九五	二、七三五、九五一		
同二年度	一二四、三三七	一四、〇一七	二、三三〇、六八一	六七、五四五	七八、四五五	二、四五〇、六六〇		
同三年度	一九七、四四〇	一四、五二九	二、八九二、八八三	九、一〇六	三八、二七一	三、〇二一、二三一		

◇鹽輸移入高

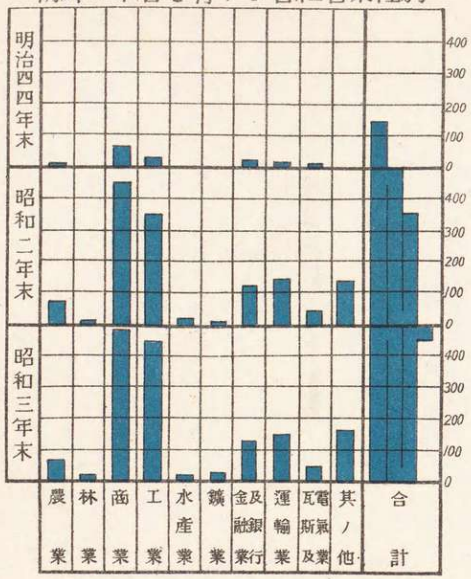
年別	內地鹽	關東州鹽	青島鹽	支那鹽	臺灣鹽	其の他鹽	合計
大正十二年	數量	七五、七六一斤	二二五、四五六、六四八	五二、六三一、五五〇	一二、四八四、八五五	一〇、九二二、三五〇	四、三五七	二九二、八四五、一八九
	價額	七、一九一円	一、〇〇七、一〇七	四五五、八三五	八八、八五三	一三五、四五五	六三五	二、四五五、六九九
昭和二年	數量	九、三三九斤	二二六、〇一九、八八〇	四四、六三四、四〇〇	九七、七五〇、一三五	六、一六〇、〇〇〇	五、五三四、九九五	二八〇、一二八、七二七
	價額	一、〇一〇円	九九〇、一二一	四〇〇、七〇六	九、一〇、四〇八	五六、〇〇〇	四五、六五八	二、四四五、九一二
同三年	數量	—	一二五、四五三、四五二	六、〇一〇	一三三、四三二、三一一	—	一、三七、〇三一	三六八、〇九〇、六九四
	價額	—	九八、八一〇	—	一、〇九八、九一八	—	二一、八四一	三、〇九九、三六九

◇家畜及家禽數表

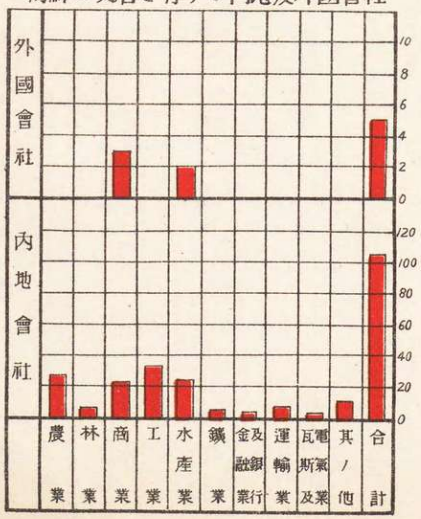
地方別＼種別	牛 牡	牛 牝	牛 計	馬	騾	驢	豚	山羊	緬羊	鷄
京畿道	四六、五五〇	四六、三五三	一〇一、〇一三	一、六六三	三三〇	九七	七五、二四一	五四四	六〇	五八〇、三七八
忠北道	三〇、四三〇	四〇、一四六	七〇、五七六	三五九	七三	四三	四八、六三三	一、五〇九	—	一一一、四五七
忠南道	一六、三〇八	四〇、八七一	五七、一七九	五四七	九〇	六五	四八、九五〇	一、五一五	五〇	三一〇、三五三
全羅北道	三三、〇一三	三一、三一四	五四、三三六	一、三三一	九八	二八	一二三、六三〇	三、六三三	六	一四九、一六八
全羅南道	四七、〇三五	八三、二六六	一三〇、三九九	二、四八四	二三	二三	一七三、四七九	三、五四九	五一	二七四、一三四三
慶尚北道	六八、六三四	七〇、二四四	一三六、八八八	三、五三一	一四三	一一〇	一六三、九九九	五、九五五	—	三〇三、四三三
慶尚南道	三三、四三四	一二九、〇八一	一三二、五五五	四、〇九九	六四	六四三	六三、〇四三	二、五五五	二六五	三五、九九五
黃海道	四六、一六〇	三七、九二七	一三三、六五七	一、〇三五	一五五	一〇五	一五四、〇四〇	八三	一六	四六、三五〇
平安南道	三〇、九二七	七三、三五六	一〇三、四六三	一、〇〇八	一三五	四三七	八七、二三一	八	一六	四六、三五〇
平安北道	八六、三五四	一三五、三一九	一三三、八八三	一、六六九	一六〇	一四五、七一一	一五	二六三	七三九、八九九	
江原道	五六、一五六	一五、八五一	一三、一七〇	四九四	九二	九、二五七	一五	二七八	四一四、一九〇	
咸鏡南道	六三、八四九	九五、三五七	一五九、三三六	一九四	一五五	一四、九二一	三三	四三五、七六七		
咸鏡北道	三五六、九六一	四八、一九七	八五、一〇五	三五、二五一	三五	一一、一六三	三七	三三五、二四一		
總計	五五五、八八八	一、〇一三、八四四	一、五六九、七三三	五五、八五〇	二、八三三	一七、二四八	一、一七九、一八六	二一、七四五	一、八八一	六、一三五、九五〇

商業及畜産

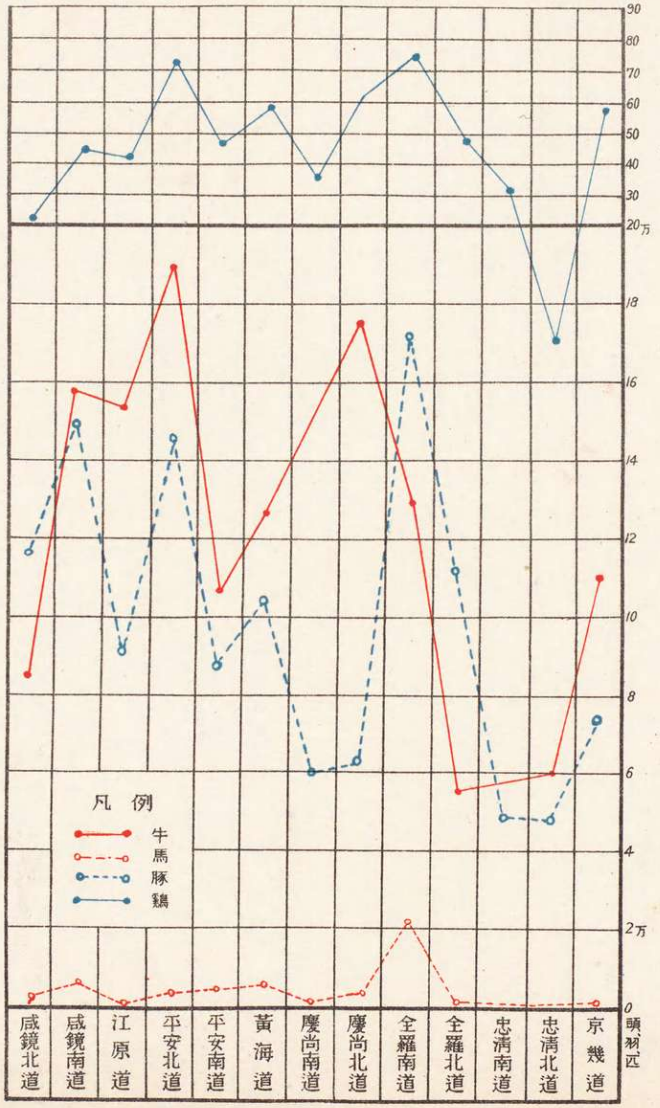
朝鮮に本店を有する會社營業種別



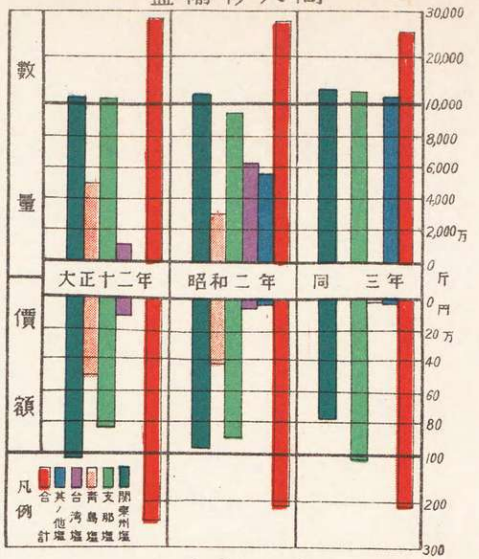
朝鮮に支店を有する内地及外國會社



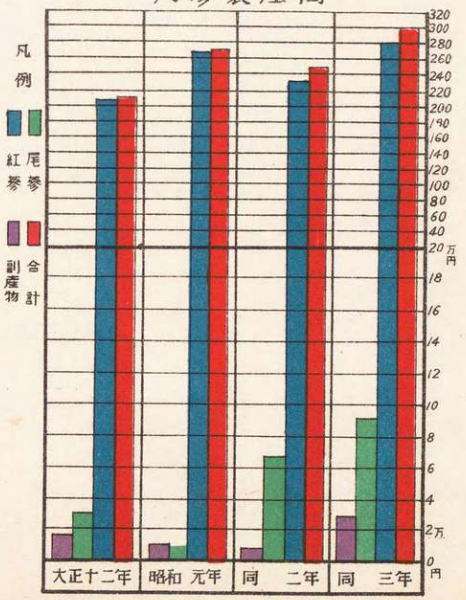
家畜及家禽數



鹽輸移入高



人參製産高



朝鮮總督府調査

■貿　易

【貿易の變遷】 由來朝鮮の貿易狀態は、韓國併合以前に於ては極めて貧弱なるものであつたが、總督府設置以來、產業上各種の保護奬勵施設を實行したると、世界大戰の影響によつて經濟界を剝戰したる結果、近年に至り移輸出入貿易共に急激なる膨脹を來し、併合當時と今日とを比較するときは、殆んど隔世の感がある。試みに既往の狀勢を見るに、明治十九年の頃に於ては、朝鮮の開港場は釜山、仁川、元山の三箇所を數ふるのみで、その貿易額は三百十萬圓內外であつた。殊に輸出額は僅に五十六萬圓に過ぎなかつたのであるから、當時の貿易不振の一班は略ぼ想像し得るであらう。然るに其の後開港場も次第に增加せられ、大正二年には一躍して一億圓を突破し、同十二年には六億三千八百萬圓に膨脹して、その間に於ける異常なる貿易の發展を示したのである。日淸戰役前の朝鮮の貿易關係は、日本內地及び支那の兩國がその大部分を占めたりしが、今や諸外國との間に貿易上密接なる關係を保つに至れり、試みに昭和元年より昭和三年迄に於ける貿易總額を見るに、その輸移出入額は左の如くになつて居る。

年次	貨物 輸移出	貨物 輸移入	貨物 計	金銀合 輸移出	金銀合 輸移入	金銀合 計	輸移出入超過
昭和元年	三五二、九五四千円	三七三、一六九千円	七二五、一二三千円	三六二、一七五千円	四六九千円	七、九二〇千円	入超 二、三三三千円
同二年	三五八、九二四	三七二、四一七	七三一、三四一	三五五、八二四	四五一	七、八三五	入超 一九、七五三
同	三五五、九七八	四三、九九〇	七七九、九六八	三五六、九七八	三五七	四、二〇八	入超 四四、八〇〇

【國別貿易】 貿易の對手國は廣く世界の各方面に涉れるも內地との關係最も密接をなす、今昭和三年の貨物貿易額を觀るに、輸移出貿易の九割一分及び輸移入貿易の七割一分は內地朝鮮間の貿易に屬し、外國貿易は輸出九分輸入二割九分に過ぎず、左に國別貿易額を示す。

▲輸移出（但し金額は單位千圓の計算）

年次	內地	支那	關東州	北米合衆國	印度	其ノ他諸國	通計
大正十五年	二四八、三五五	九二、三一三	四、五四三	六、六三五	一、四一四	三七二、六九一	
昭和二年	二五六、四七三	八九、九三五	五、六四一	八、一〇八	一、三五四	三七七、一六七	
同一一年	二九五、八三九	七三、八〇八	四、三三二	三、三五四	四三八	四三二、九九〇	

▲輸移入（但し金額は單位千圓の計算）

年次	內地	支那	關東州	北米合衆國	印度	其ノ他諸國	通計
大正十五年	三八、一七五	三、三五四	二三三	一、〇二〇	七二八	四六、一三五	
昭和二年	三〇、七九二	二七、二三三	二三三	一、一九八	七一八	六一、三四一	
同一一年	三三、八二九	三一、四二一	四六	一、一九〇	六八三	六七、九七八	

【港別貿易】 朝鮮に於ける開港は、仁川、釜山、元山、鎭南浦、群山、木浦、淸津、雄基、城津、新義州、龍巖浦の十一港であるが、京城、大邱、平壤には稅關支署を置いて、開港場より保稅運送に依る貨物の輸移出入を取扱ひ、その他陸接國境地方に於て、指定せる五十八箇所の交通地點に稅關支署又は出張所を設置し、更に大正十二年四月對內地移入稅の大部分撤廢さるゝと共に、一部移入稅殘存の貨物その他の爲め、十一箇所の指定港を設け稅關出張所を置いたのである。以上の諸港中、釜山港は貿易額第一位を占め、仁川港これに亞ぐ。この兩港は實に朝鮮の二大關門にして、釜山港は內地と朝鮮間に於ける貿易の樞要地なり、仁川港は支那、その他の歐米諸國貿易の中心となつて居る。尙輸移出に在りては群山、新義州、鎭南浦、木浦、淸津等を主なるものとす、左に釜山港に於ける開港以來の貿易額及び統計圖表を以て其の消長を示せり。

釜山港開港以來累年貿易額表
（釜山商業會議所調査）

年次	輸移出	輸移入	合計	超過	輸移入超過
明治十七年	五六、〇三七円	七七、〇六二円	一三三、〇九九円		二一、〇二五円
同十八年	七〇、七二九	一四一、七〇二	二一一、四三一		七〇、九七三
同十九年	一〇八、七二五	一二二、五五一	二三一、二七六		一三、八二六
同二十年	一〇五、九八六	一五五、一五四	二六一、一四〇		四九、一六八
同二一年	一四一、八六五	一九六、八六五	三三八、七三〇		五五、〇〇〇
同二二年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同二三年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同二四年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同二五年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同二六年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同二七年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同二八年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同二九年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三十年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三一年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三二年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三三年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三四年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三五年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三六年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三七年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三八年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三九年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同四十年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同四一年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同四二年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同四三年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同四四年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
大正元年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同二年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同四年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同五年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同六年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同七年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同八年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同九年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十一年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十二年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十三年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十四年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十五年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
昭和二年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同三年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同四年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同五年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同六年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同七年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同八年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同九年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十一年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十二年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十三年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十四年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同十五年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
昭和元年	一四四、八六五	一九六、八六五	三四一、七三〇		五二、〇〇〇
同

圖表對照統計

◇港別貿易額

港別	輸移出 昭和元年	昭和二年	昭和三年	輸移入 昭和元年	昭和二年	昭和三年
仁川	五九、八四三千円	五七、一一二千円	五五、八三九千円	六八、〇四三千円	七四、三三七千円	八四、三三七千円
京城	五〇	六三	五三	二〇、二四一	二一、三五五	二一、三五五
群山	四七、三三八	四五、一二九	四四、五二七	一九、二八四	三〇、七九九	一八、〇六四
元山	九、四八七	八、九二三	八、一三三	一七、四三四	一八、一三三	三六、一七八
城津	三、七〇九	四、〇九九	三、八〇三	三、八二五	四、六八三	三、九四四
清津	七、三四四	九、四五九	一〇、四八七	一二、一三七	一三、〇七三	一四、〇三九
雄基	四、一四〇	四、五九九	四、三五九	一、六五六	三、〇五六	三、〇六九
會寧	三六	四三	三五三	五五	六八	六八五
釜山	一二四、七二一	一二六、三九九	一二五、〇四九	一三五、〇四九	一二五、三九八	一三五、〇四九
木浦	三、七九九	三、一三三	二、九三〇	一二、三五〇	一二、三五三	一一、〇四六
大邱	一〇〇	一〇一	九五	五、一九七	五、三六三	四、三五〇
馬山及鎮海	四、八〇六	五、五〇三	七、九〇六	三、七八八	三、五八八	四七、三三三
新義州	二、六一〇	九、四三三	一三、六九〇	四、一六三	四、一八三	四七、一八三
龍巖浦	四、四八〇	二、一六三	一、九二〇	四四、九四四	一四、九四四	一四、九四四
鎮南浦	四、三八〇	四三、六五	四八、三三八	一、三六三	一六、八四七	一八、八四七
平壤	二、九五三	三、六七〇	五五、五九一	一三、三三八	一二、一九一	一五、四三五
共合	一六、五七〇	一七、〇〇八	一七、八三七	六、八五三	六、八五三	一〇、〇八四
計	三六三、九六四	三六八、九四四	三六五、九六八	三七二、一二九	三八三、四一七	四一三、九九〇

◇輸移出主要品價額

品名	昭和元年	二年	三年
金鑛	一〇八、九九九千円	一、三四六千円	一、八二一千円
鐵鑛	三三、三六五	七三	一、四五
牛皮	三三、三六六	三、六八八	一、〇〇四
パルプ	三、九七七	三、三八六	三、三六五
黑鉛	五、七〇七	三、三五三	四一四
鐵	一、九八八	八、八八	一、二六
煙草	三、七〇七	五、七〇三	七、三六九
生牛	六、一四〇	六二	一
藻類	三、六八九	三、九七〇	四、八四〇
海	一、三六〇	一、四〇五	一、五二七
肥料	一、三五〇	八、七三	七、一九一
木材	一、三二六	五、〇八六	三、一六一

◇輸移入主要品價額

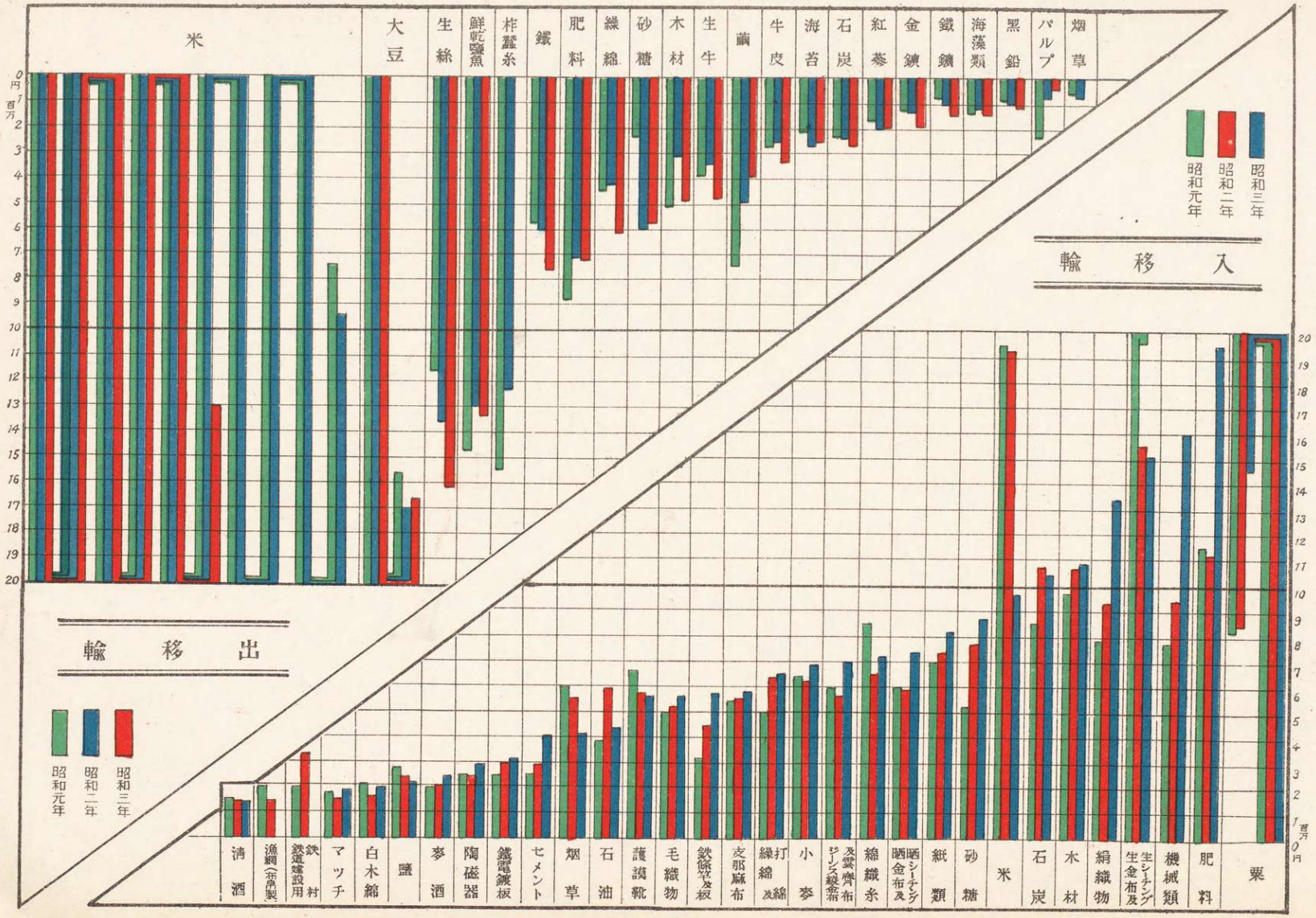
品名	昭和元年	二年	三年
米	一九、三五六千円	二四、三六八千円	一九、一五四千円
豆	一四、三六八	一四、九六三	一三、九六八
鮮乾魚	一四、九六三	一二、一〇八	一二、七六八
苔	二、一〇八	二、三三五	五、九六六
海藻	二、三三五	一、七一四	二、〇三三
砂糖	一、七一四	二、〇三七	三、三六九
蔴	二、〇三七	二、三九九	四、二六〇
紅蔘	二、三六〇	四、八九九	三、〇八〇
石炭	四、二五〇	一三、三六六	一三、三六五
綿織物	七、四七〇	四、三五〇	一、三五〇
生絲	一、三五四	一、三八〇	一、三五四
棹鑞	一、三五五	一、三八六	—

◇輸移入主要品價額

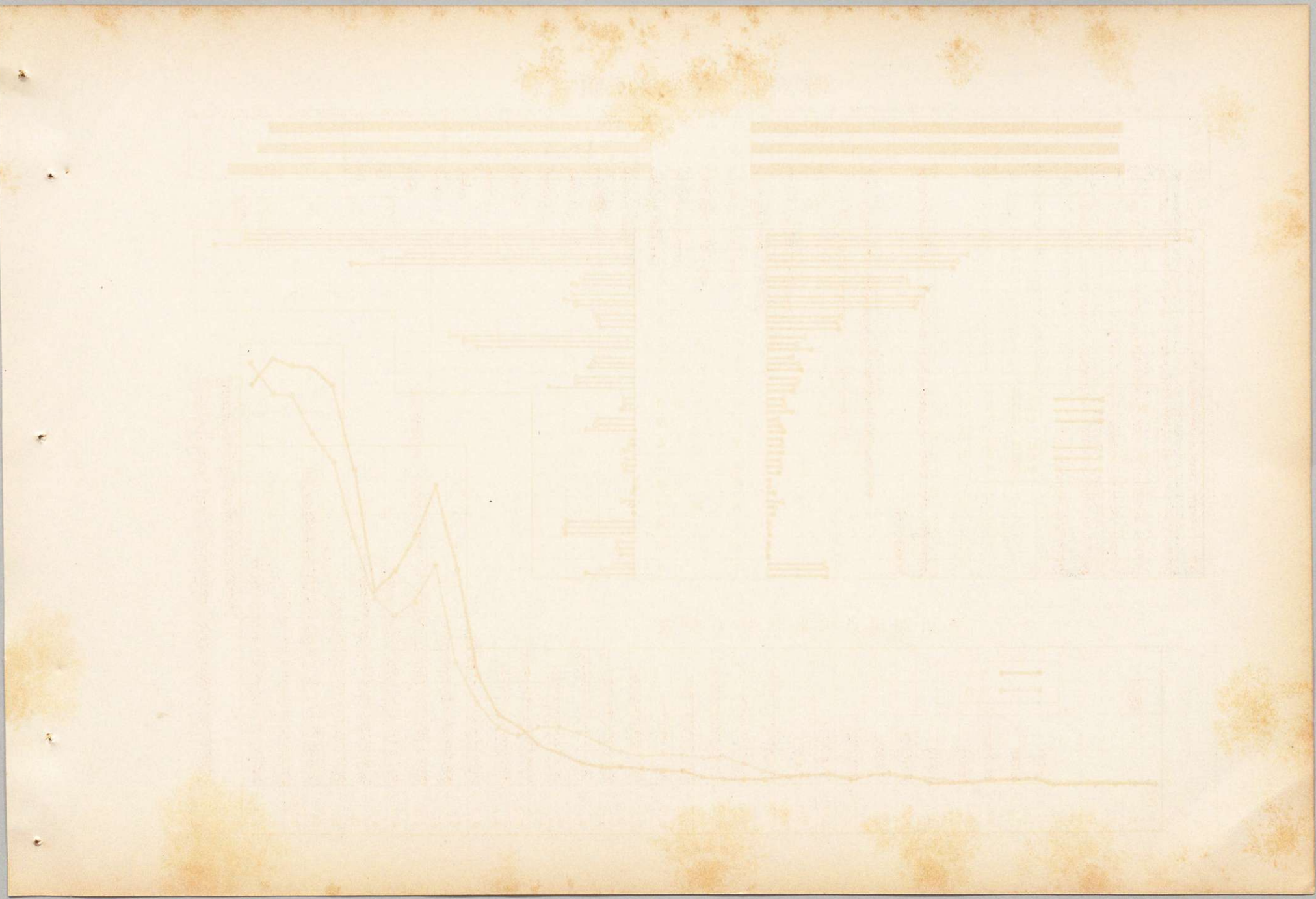
品名	昭和元年	二年	三年
米	一九、三五六千円	二、三八一千円	二、二三千円
粟	三一、八〇六	五、五七〇	四、一四五
粉	六、四三三	三、七四四	四、二八四
小麥	五、一九五	一、六九五	一、八四三
砂糖	一、四九〇	六、四二五	一、八四七
清酒	一、九三六	五、〇一三	六、四〇七
麥酒	三〇、二四五	八、四四八	七、八六六
生金巾及生シーチング	六、〇四四	八、五五七	一〇、三五〇
晒金巾及晒シーチング	三、〇三五	二、九四四	二、九二一
木綿	五、九六四	四、四四三	五、七四六
白ジンス綾金巾及雲斎布	一、九三五	二、四三〇	一、八四二
支那麻布	五、四一九	三、一二四	四、〇八一
毛織物	四、九五三	二、一九二	二、一九六
絹織物	七、九二二	七、七五〇	三、三〇三
漁網(布帛製)	一、九三三	九、四三〇	—
靴	六、六四四	一、六四〇	一、六、〇八三
護謨類	一、一三三	一、一三五	一、九四八三
紙	七、〇〇三	七、七五五	三、三一七

品名	昭和元年	二年	三年
鹽	九、七一四千円	二、七五四千円	二、七五一千円
煙草	三五、四八六	五、九四四	三、七八四
石油	六、八七三	三、七八四	一、六九五
マッチ	八、七〇一	一、五四八	一、六九五
繰綿及打綿	一、四〇〇	五、〇一三	六、四一五
綿糸	二、四一七	八、四四八	六、四四九
綿織	一五、四七九	八、五五七	一〇、三五〇
石炭	一五、一〇一	二、四八四	二、九二四
セメント	五、八四四	二、四四三	二、四三〇
陶磁器	七、三四五	二、四四三	二、四三〇
鐵條竿及板	一、九二四	三、一二四	四、四四四
鐵電鐵板	六、九三五	二、一五三	二、一九六
鐵道建設用鐵材	五、七五〇	一、九三一	三、三〇三
機械類	五、三五一	七、七五〇	九、四三〇
木材	一三、三六〇	九、七五五	一〇、六四〇
肥料	—	一一、四六三	一一、一三五
	五、五九四		
	八、一三四		

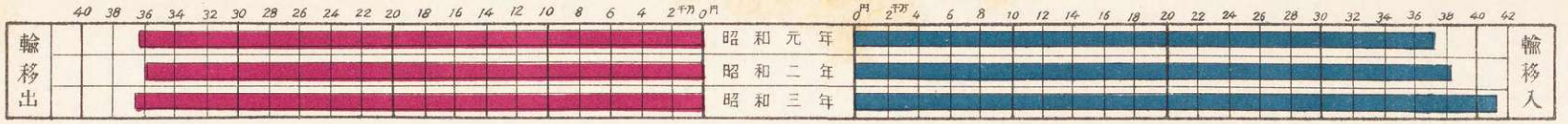
輸移出入主要品價額



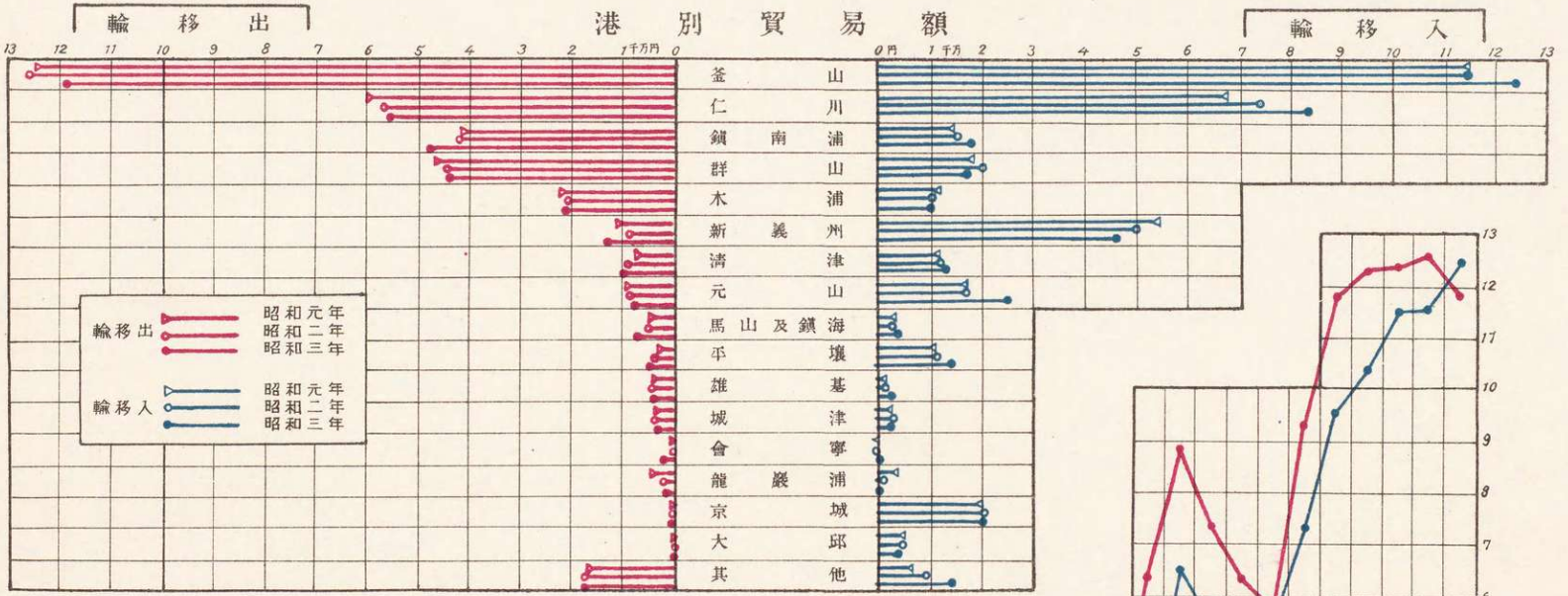
朝鮮總督府調査



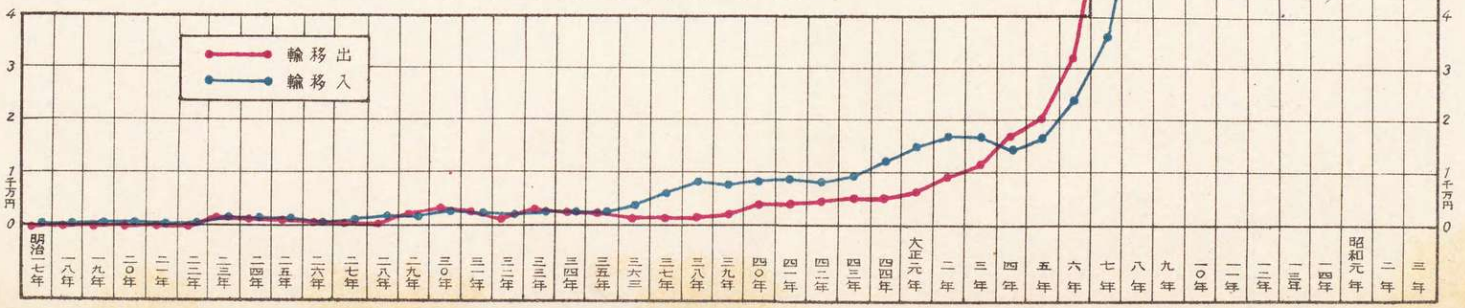
朝鮮貿易額



港別貿易額



釜山開港以來累年貿易額表



朝鮮總督府調査

■林　業

【森林保護】林野の總面積は約一千六百四十二萬町歩を算し、全土の約七割四分を占むるに拘らず古來林政不備にして、封山の如き特殊の保護林を除くの外は公山と稱し、一般人民の自由樵採に委して顧みざりしを以て、到る處濫伐を肆にし、僅に鴨綠、豆滿兩江の流域等に於て林相を保ちしに過ぎず、されば總督府に於ては明治四十五年國有森林山野保護規則を制定せられ、林野の保護取締に當らるゝと同時に殖林事業を起し、明治四十四年以來引續き造林に努められつゝあり、圖表を以て造林概況を示す。

【殖林事業】明治四十年以降國費を以て各地に模範的造林を行ひ、同時に一般に種苗の無償下付を爲し、又た一面に於て國有林野の內存置を要せざる部分は民間に造林貸付を爲し、事業成功の後無償にて付與し得ることゝし、大に造林の奬勵を行ひたる結果、民間に於ける殖林事業は輓近異數の發達を遂げ各地に大小の企業家簇出し、內地及び朝鮮の會社若くは富豪等にして大規模の造林を行ひ、又た企畫するもの遂年多きを加ふるに至れり。造林事業の第一步として、京城白雲洞及び平壤牡丹臺の二ケ所に植栽以來昭和三年末に至る二十二ケ年間に於ける國費計營、地方費計營、私營殖林等の總面積は約十四萬六千町步にして、此植樹數は三億五千六百二十萬本の多きに達せり。尙共の他記念事業として四十四年以來每年神武天皇祭日を期し、朝鮮全道を擧げて記念植樹を實行し、大に好結果を收め爾來回を重ぬるに從ひ益好況を呈し、昭和四年に於ては累計**三億三百四十八萬本**の大きに達せり。

【造林補助事業】一般民有林野の造林に付ては前記の如く、極力之が奬勵に努めたる結果、相當の成績を擧げ來りたりと雖も其の多くは資力乏しく、一定の補助金を下付するに非ざれば、造林の促進を期し難き狀態に在るを以て、從來道地方費に於て補助金下付の方法を講ぜしも、規模小にして事業の進展期し難きに因り、大正十四年度に約**三十萬圓**、大正十五年度に約**四十四萬圓**、昭和二年度より昭和四年度迄每年**五十五萬圓**づゝ國費を道地方費に交付せられ、人工造林を行ふ者に對し、補助金を交付し是が奬勵に努め居れり。

【國有林野經營】總督府の直營に屬する林野は大學の演習林十二萬町步を除き約五百二十萬町步なり、其の內成林地は凡そ八割四分卽ち百七十七萬町步にして、主として寒帶樹種を以て蔽はれ、全面積に對して針葉樹六割四分、濶葉樹三割六分を占む。大正十五年中林政を改革せられ營林署を新設し、植伐事業の實行に當らしめつゝあり。

【立木拂下】立木拂下は國有林經營上並に官行研伐實施上支障なき範圍內にて之れを實行せり、大正十三年度以降の拂下數量を記せば左の如し。

▲立木拂下數量及び價額

年度	材積	價格	年度	材積	價格
大正十三年度	一、六四〇、八五二尺締	七五九、七七一円	昭和元年度	二、八九三、三五四尺締	一、三五九、二九二円
大正十四年度	一、九六三、四七三	八四三、八四六	昭和二年度	三、〇七三、六二七	一、三一九、一六七

【製　材】製材は第一第二の二工場に於て各種建築用材を製作し、昭和二年度に於て函材製材工場（第三工場）を新設せられ、製材法にも改善を加へられし以來著しく製材能力を增進し一日の製材力約九百尺締となれり。

【林野副產物】林野副產物は多種にして其の用途極めて廣し其主要なるものは樹實類に於ては栗、胡桃、松の實、銀杏等樹皮類に於てはハギ、シナノキ、ナラ、カシワ、アベマキ等にして皆相當の生產額あり、又漆樹は殆んど全土に亙りて生育に適し、漆液の品種も亦內地上等品と伯仲の間に在り、且つ採漆容易なると勞銀比較的低廉なるとの爲め、漆業亦漸く勃興の機運に向ひつつあり、椎茸、五倍子、染料楓葉等も相當の生產額を有せり。

■水　產　業

【概　況】海岸線の延長四千三百餘里に達する朝鮮は水產物の漁獲上頗る有利なる地形なるにも拘らず、併合以前に於ては何等見るべきものなかりしが、總督府始政以來當業者の技能の啓發、資金の援助、組合の改善等各方面に涉たりて誘導保護に努められたる結果漸次發達の域に進み、昭和三年に於ては漁獲高**六千六百十一萬餘圓**、養殖生產高三百三十二萬圓、製造高四千四百八十六萬餘圓に上れり、今百萬以上の產額を有するものを擧ぐれば左の如し。

鯖	八、五六四、〇五二円	鰊	三、〇二六、四四一円	太刀魚	一、四四三、九三二円
鰯	二、一八九、五九九	石首魚	三、六五九、〇二五	鯷	一、三八一、二六六
明太魚	二、六三六、八四四	鰆	一、三五三、六四三	鯵	一、九六三、二八一
鰒	一、八九四、一三一	鯛	一、八三三、六三四	海苔	二、一六三、六三〇

水產製造物中五十萬圓以上の產額を有するものは素乾明太魚、鹽乾鰊、石首魚、煮乾鰯、海參、鹽藏鯖、鰊、石首魚、鹽辛鰯、蒲鉾、鮑罐詰、鰯締粕、鰯魚油、海苔、和布にして、以上製造業の盛衰は主として各地に於ける漁獲の狀況と相伴ひ、又た輸移出向製品に在りては仕向地の供給狀況に因り、製品の種類に多少の變化を生ずることなきにあらざるも大體に於て主要生產地及び製造の狀態例年著しき異動なし。

【內鮮人の漁業】昭和二年中に於ける內鮮人漁獲高は內地人三千二百三十三萬四千五百八十七圓、朝鮮人三千百七十四萬六百六十三圓合計**六千四百七萬五千二百五十圓**にして既往三箇年間に於ける漁業概況は圖表を以て示す。

【內鮮人の養殖業】漁業の奬勵と同時に水產物濫獲の取締を爲し、共の蕃殖を保護し更に進むで人工增殖と供給の調節を圖る目的を以て養殖業を奬勵し、總督府及び各道に於ては公魚卵の配付、牡蠣、海苔、養殖試驗及び鮭の人工孵化を行ふと共に廣汎なる干潟淺海の開拓に資する爲め、適種魚介藻類の適地調査中にして一方海苔、牡蠣增殖事業の有望なるに鑑み、之が奬勵補助を爲し企業の促進を圖りつゝあり。昭和三年末に於ける養殖面積は二千十七萬八千二百二坪に達し、共の收獲高**三百三十二萬八千八百六十二圓**に上れり。

【捕鯨業】現在捕鯨業を許可せるは東洋捕鯨株式會社の一あるのみにして共の捕鯨船數は從來十隻に限定せられたるも大正十一年末二隻を增加せり、昭和二年に於ける捕獲高は二百十六頭共の價額百十三萬七千百八圓なり。

【水產物製造業】朝鮮人間に於ける水產物の加工は、漁獲物の保存法として單に之を鹽藏とし又は乾製と爲すに過ぎず、共の方法頗る拙劣にして只鮮內の需要に應ずるに止まりしが、指導の結果逐年製造方法の改善と利用の發達を見るに至り、一面內地人製造業の發展に伴ひ著しく生產額を增加せり、昭和三年に於ける製造高は內地人千七百二十萬七千九百十八圓、朝鮮人二千七百六十五萬三千九百九十六圓合計**四千四百八十六萬千九百十四圓**に達せり。

▲水產業發展の狀況

一日本海方面　日本海に面せる延長約二千浬の東海岸は、リマン海流により寒帶性の魚族を送り、對馬海流は溫帶性魚族を齎らし、恰も魚族の滯留地帶の感あり、從つて漁業の利殆ど無盡藏と稱せらる。三年度に於ける主なる漁獲物は鰯〆粕五百五十九萬圓、魚油五百卅一萬圓、開鰒の百餘萬圓等なり。

二多島海方面　釜山より木浦に至る南海岸は大小の島嶼散在し、犬牙錯雜せる岬灣を有せるを以て魚族の棲息に便なるが如く、頗る魚族豐富たり、且つ水深概ね八十尋以內なるを以て漁具の使用に便なり、年額五百萬圓以上の漁獲品尠からず殊に全南道に於ける海藻類は三年度の收獲六百餘萬圓に達せり。

三黃海方面　木浦より鴨綠江口に至る西海岸は海底淺く、殊に潮汐の干滿の差甚しく三十尺に達する所あり、魚族の滯留に適せざるも魚介の養殖に適するを以て、近年投資を試むる者尠からず、將來此種事業の勃興を見る可きか。

圖表對照統計

◇林野概算面積表

道別	國有 要存豫定林野	國有 不要存林野	國有 計	民有合計
	千町 六	千町	千町	千町
京畿道	二七	一七	三三	六〇
忠清北道	一九	一六	三五	五一
忠清南道	一三	一三	二六	五二
全羅北道	一九	八	二七	四六
全羅南道	四	一四	一八	八七
慶尚北道	四	一三	一七	一〇五
慶尚南道	九	一三	二二	八四
黃海道	五	九	一四	三四
平安南道	二	一〇	一二	九六
平安北道	一〇	一四	二四	一〇二
江原道	八	一三	二一	一〇三
咸鏡南道	一四	一五	二九	一二七
咸鏡北道	九	一三	二二	四〇
總計	一四八	一五七	三〇五	八八九

◇官公營殖林事業表

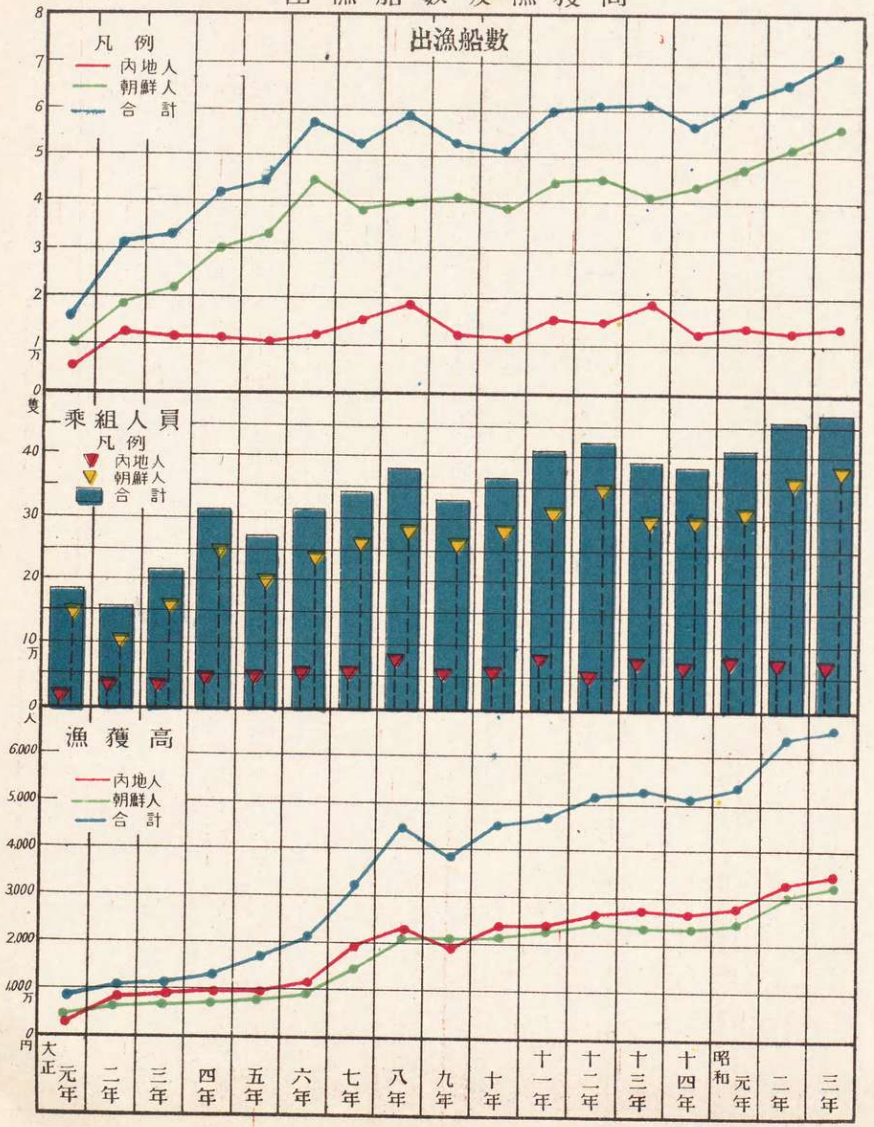
年次	國費 造林面積	國費 造林本數	地方費 造林面積	地方費 造林本數	合計 造林面積	合計 造林本數
	千町	千本	千町	千本	千町	千本
大正十三年	二、九七七	六、三三	五四、九八	三六、一〇五	五七、九七五	三三、四三六
同十四年	二、八三四	六、〇一〇	七〇、九三九	五九、三九〇	七三、七七三	六五、四〇〇
昭和元年	三、〇六二	六、一九〇	七〇、三九七	五九、三九〇	七三、四五九	六五、五八〇
同二年	二、五二四	五、一四八	八一、三五二	六三、八三五	八三、八七六	六八、九八三
同三年	二、四七〇	四、九四四	九三、三五二	七三、三四三	九五、八二二	七八、二八七

◇出漁船及漁獲高表

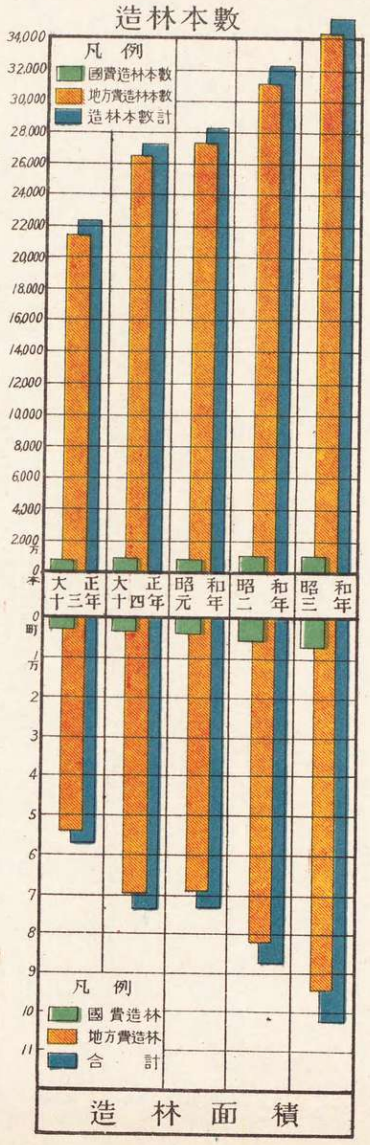
年次	內地人 出漁船數	內地人 乘組人員	內地人 漁獲高	朝鮮人 出漁船數	朝鮮人 乘組人員	朝鮮人 漁獲高	合計 出漁船數	合計 乘組人員	合計 漁獲高
	隻	人	圓	隻	人	圓	隻	人	圓
大正一年	五、六五三	一三、四九八	三、六五六、二一八	一〇、五〇二	二〇、〇九九	四、八五八、八三二	一六、一五五	三三、五九七	八、五一四、〇五〇
同二年	一三、〇九九	四九、六四二	五、八三二、二三八	一八、五七〇	二一、七九八	五、六五五、四五九	三一、六六九	五五、四四〇	一一、四八八、六九七
同三年	一一、三五五	四五、四五一	六、四四九、二三六	二三、一八〇	二六、一七九	六、四五五、六六九	三四、五三五	七一、六三〇	一二、九〇五、九〇五
同四年	一一、九九五	四五、七三一	六、八六九、二五一	二五、一八〇	二八、三四四	七、〇二五、九八一	三七、一七五	七四、〇七五	一三、八九五、二三二
同五年	一〇、六二一	四二、一八六	七、九四四、九四〇	三四、六七〇	三九、〇八一	九、八九五、三五一	四五、二九一	八一、九八六	一七、八四〇、二九一
同六年	一一、八九七	四五、一八四	一一、三五二、一〇〇	四五、八九一	五一、〇〇一	一二、七〇八、〇九一	五七、七八八	九六、〇七五	二四、〇六〇、一九一
同七年	一四、一二八	五四、三五九	一八、九三二、四四九	五九、〇〇〇	六七、一二八	一八、八五二、四四九	七三、二五七	一一三、二五八	三七、七八五、四九八
同八年	一九、八三一	七七、五九五	二三、五〇五、二〇一	七〇、三三九	八〇、一七〇	二三、五七五、五四〇	九〇、一七〇	一五七、九三四	四七、〇八〇、七四一
同九年	二三、六六八	九二、五九九	二七、〇一〇、八三五	八〇、九二一	九二、五八九	二七、〇九一、七五六	一〇四、二五七	一七三、一八八	五四、一〇二、五九一
同十年	二三、三五三	九二、四四九	二六、九九一、八三五	八〇、九二一	九二、三〇二	二七、〇七二、七五六	一〇四、二七四	一七三、三七一	五四、〇六四、五九一
同十一年	二四、〇三三	九五、八八六	二七、七〇七、八四〇	八二、四〇〇	九四、二八六	二七、七九〇、二四〇	一〇六、四三三	一七七、一七二	五五、四九七、〇八〇
同十二年	二四、八五八	九八、九七九	二八、四九八、八四〇	八四、八八〇	九六、七三九	二八、四九八、八四〇	一〇九、七三八	一八二、七一九	五六、九九七、六八〇
同十三年	二五、三五五	一〇一、四二一	二九、一九八、八四〇	八七、三四〇	九九、六九五	二九、一九八、八四〇	一一二、六九五	一八七、七六一	五八、三九七、六八〇
同十四年	二五、九一五	一〇三、九二三	二九、八九七、八四〇	八九、二八〇	一〇一、八〇三	二九、八九七、八四〇	一一五、一九五	一九二、二〇三	五九、七九五、六八〇
昭和元年	二六、八八六	一〇七、五四四	三〇、七八七、八四〇	九一、八〇〇	一〇三、六八六	三〇、七八七、八四〇	一一八、六八六	一九七、二四四	六一、五七五、六八〇
同二年	二七、九五五	一一二、三九一	三一、九二五、八四〇	九四、四〇〇	一〇六、三五五	三一、九二五、八四〇	一二一、三五五	二〇二、七九一	六三、八五一、六八〇
同三年	二八、〇三三	一一二、一三二	三二、〇六三、八四〇	九四、四〇〇	一〇六、四三三	三二、〇六三、八四〇	一二一、四三三	二〇二、九二四	六三、九八九、六八〇

水產業及林業

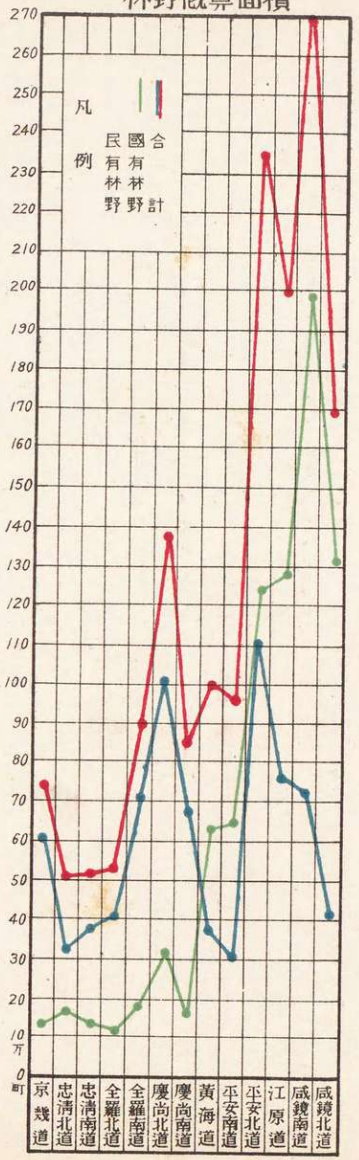
出漁船數及漁獲高



造林本數



林野概算面積



朝鮮總督府調査

■鑛　業

【鑛　政】諸種の鑛物に富み鑛業の起源亦頗る遠きに拘らず、韓國政府時代に於ては其の事業殆ど見るに足るものなかりしが、明治三十九年に至り初めて鑛業法及び砂鑛採取法を發布せしより、漸く鑛業制度備りたりしも未だ不備なる點免れざりしにより、總督府に於ては大正四年新らたに朝鮮鑛業令を制定し次いで同五年四月より朝鮮鑛業令施行規則、及び朝鮮鑛業登錄規則を施行せり、同令に依れば外國人の新に鑛業權を取得するを禁じ、新發見の重要鑛物を鑛業令の支配に屬せしめ、鑛業上必要なる土地の使用及び收用に付き土地收用令中の規定を準用する等、鑛業權の保障を確實にして以て益々鑛業の發達を促進せしめんことに努められたのである。

【鑛床調査】總督府に於ては從來不明瞭なりし鑛床の性狀を概査し、以て其の鑛業的價値を覺知すると共に一面鑛業行政の參考に資し、他面企業家の調査に便するの目的を以て明治四十四年度以降鑛業調査を行ひ、大正六年度を以て各道の概査を終了し、同七年度には鑛山調査の組織を變更して地質調査所を設置し、事業準備に着手すると共に地質鑛床の精査を開始し、同八年度に於て略其の設備を完了し、爾來着々各地の地質圖等を調製せられつゝあり。

一　選鑛製錬試驗　選鑛製錬は鑛業成否の岐るゝ中心作用たるに拘はらず、朝鮮に於ては其の施設一般に普及せず、未だ幼稚の域を脫せざるもの多し然かも從來之れに對する研究機關の設備なかりしを以て、大正十一年度に於て京城市外鷺梁津に燃料選鑛研究所を新設し、朝鮮鑛山に適應せる鑛石の處理方法を研究して主要鑛物の實收率を高め、又た從來遺棄して顧られざりし貧鑛の經濟的處理方法を考究し、鑛利の保全、操業の進歩を圖るの目的を以て、其の設備の工事中に在りしが同十三年五月之れが落成を告げたり。

二　石炭調査及び試驗　燃料動力問題は國民生活及び產業開發上極めて重要に屬するも從來之れに關する研究機關缺如せるを以て、大正十一年度に於て選鑛に製鑛製錬に關する研究機關をも設置せられ、先づ石炭の賦存量及び鑛床の狀況を明にし、其の經濟的利用法に付き、試驗研究を施行し、以て燃料供給策の樹立に資すると共に燃料給源の開發に資せんとす。

【主要鑛物】主要鑛物は金、鐵、黑鉛、石炭にして銅、亞鉛、タングステン等之に亞ぐ左に其の產出狀況及び鑛業の狀況を略述す。

【金】鑛產物の首位を占め其の鑛山の著名なるものは東洋合同鑛業會社（米國會社）に屬する平安北道雲山金山及び漢城鑛業會社（米國會社）の經營に係る黃海道遂安鑛山なり、之れに亞ぐは穩山金鑛、昌城佛國人金鑛、久原統營鑛山、栗浦金山、日置鑛山等にして各相當の規模を有せり、其の他尙州、林川、龍城、九峰山、高靈、北洞、樂山、光陽、三成、桃花、三德等有望の金山尠からず、順安及び穩山は主要なる砂金地にして共に機械操業の準備として試錐調査を終り、穩山金鑛は大正六年末砂金淺渠機操業を開始し、成績頗る良好なりしが昭和三年六月一日限り採取事業を廢止せり。

以上の外有望の鑛山尠からざるも歐洲戰亂後經濟界の變動に依り、或は休鑛の已むなきに至り久しく不振の狀況にありしが、近時物價勞銀の低落に伴ひ小規模金鑛業も收支漸く相償ふに至り、新に着手するもの若くは設備の擴張を行ふものありて金鑛業復活の曙光を見るに至れり。

【鐵】褐鐵鑛の產出最も多く黃州及び黑橋驛附近より西隣二浦に至る間及び平安南道价川郡に發見せらる、其の他載寧、殷栗の鐵山は皆此種に屬す、之れに亞げるは赤鐵鑛にして安岳鐵山即ち是なり、磁鐵鑛も亦各所に發見せらるゝも採鑛未だ盛ならず、各地の鐵山中其の產出最多きは載寧、殷栗の二鑛山にして、該山は舊韓國政府の經營に係り明治四十一年より採掘を開始し同四十三年一月農商務省の所屬に移れり、其の他朝鮮鐵山株式會社所屬黃州鐵山、株式會社日本製鋼所々屬价川鐵山、三菱製鐵株式會社所屬銀龍、載寧、兼二浦下聖面各鐵山、利原鐵山株式會社所屬利原鐵山等又た相當の產額を有し三陟、江陵、端川、茂山地方に於ても亦鐵鑛床の發見せられたるものあり此等の鑛石は主として內地製鐵業者に供給せらるゝの外一部は三菱兼二浦製鐵所及び本溪湖煤鐵公司に給鑛し來りしも、歐洲戰後後製鐵事業の縮少に伴ひ需要減退し各鐵山とも事業縮少の傾向なり。

最近總督府に於ては國防上の見地より、西鮮多獅島附近を卜し一大製鋼所を創設し、銑鐵五十萬噸、鋼材四十五萬噸產出の計畫中なりと、果たして實現せば各地に散在する鐵坑採掘の勃興を見るならんか。

【石　炭】無煙炭は特有鑛產物の一に屬す、平壤無煙炭田は朝鮮總督府平壤鑛業所に屬し經炭事業に從事せしが、大正十一年四月同所の施設一切及び炭田の一部を海軍省に移管し、爾來同所に於て海軍燃料廠平壤鑛業部を設置して其の作業を繼續せり、同炭田は鑛量頗る豊饒にして品質又た優良なり、採掘炭の大部分は德山海軍燃料廠に供給し一部は民間に供給せらるゝ鍊炭原料に消費せられ、其の品質優良にして需要漸增の傾向あり其の他近年鑛床調査の結果、平安南道价川、順川、德川、孟山及び江原道三陟の諸郡に於ても亦無煙炭の布胥せるを發見し其の品質曾に平壤無煙炭に劣らざるのみならず、却つて之れに比して緊硬の塊炭なるを確めたり、褐炭は其の質優良ならざるも其の分布甚だ廣く平安南道安州炭田、慶尙北道長鬐炭田、咸鏡南道咸興炭田、及び咸鏡北道鏡城炭田、會寧炭田、吉州炭田、明川炭田等を主要產地とし、其の他東海岸及び豆滿江沿岸に炭田の散在するもの尠からず。

【黑　鉛】鱗狀及び土狀の二種あり、鱗狀黑鉛は平安北道、咸鏡北道を土狀黑鉛は慶尙北道咸鏡南道を主要產地とし、品質共に良好なり鱗狀黑鉛の需要は殆ど內地に限られ特に歐洲戰時中錫蘭產品の輸入自由ならざりし當時に於ては內地の需要一に朝鮮產に依りし爲に、市價の昂騰を來し未曾有の盛況を呈せしも戰後需要漸次減退せり、之に反して土狀黑鉛は戰前に於て內地の需要極めて僅少なりしが爲め主として販路を海外に求めたるも、戰後內地の需要を增し大正九年度に於ては海外輸出と相俟つて稍盛況を呈したりしが、同十年に入り海外市場の不振と內地に於ける生產過剩等に因りて悲境に陷るに至れるも、最近滯貨の漸く消化せらるゝに伴れ稍市況回復の機運に向へり。

【銅】既知の銅鑛を擧ぐれば咸鏡南道の甲山、慶尙南道の昌原、平安北道の厚昌等なり、甲山銅山は初め米國人特許を得明治四十三年以降引續き探鑛し大正五年五月久原鑛業株式會社の經營に移り一時盛況を極めしも、歐洲戰後銅價暴落の爲め同十年六月限休業し、後同十四年六月再び貯鑛の製錬を開始し昭和三年七月限此の作業も終了したるが、一面同社鑛南浦製錬所に同二年六月一部銅鑛製錬を開始するに至れり。

【亞　鉛】亞鉛鑛床は銀鉛と共に生ずるを常態と爲すを以て、從來銀鉛鑛と認められ其の發見は實に近年の事に屬せり、平安北道寧邊郡蘇民洞、咸鏡南道端川郡檢德に於ける鑛床は共の主要なるものにして共に往古銀鉛山として稼行し共生せる多量の亞鉛鑛は遺棄せられたり、前者は一時藤田鑛業株式會社に於て採掘し、後者は探鑛中に屬せしも現時二鑛山共に休鑛せり、其の他黃海道載寧郡龍山面蒼川里、及び瑞興郡內德面勺詩里、平安南道成川郡地方等に於ける鑛床亦望を囑せらる。

【タングステン鑛】歐洲戰爭勃發後軍事上の必要に促され、タングステンの需用增加したるを以て之れが發見採掘に從事するもの多く一時盛況を極めたるも大正七年下半期以降市價低落し加ふるに需要著しく減少したる爲め、一般に事業を緊縮して休山廢鑛するもの續出するに至れり、既知鑛床中江原道金剛山附近、忠淸北道忠州郡、及び忠淸南道靑陽郡に存するものは共の主要なるものにして共の他諸所に發見せられたるもの亦尠からず。

圖表對照統計

◇鑛業の概況表（昭和三年度）

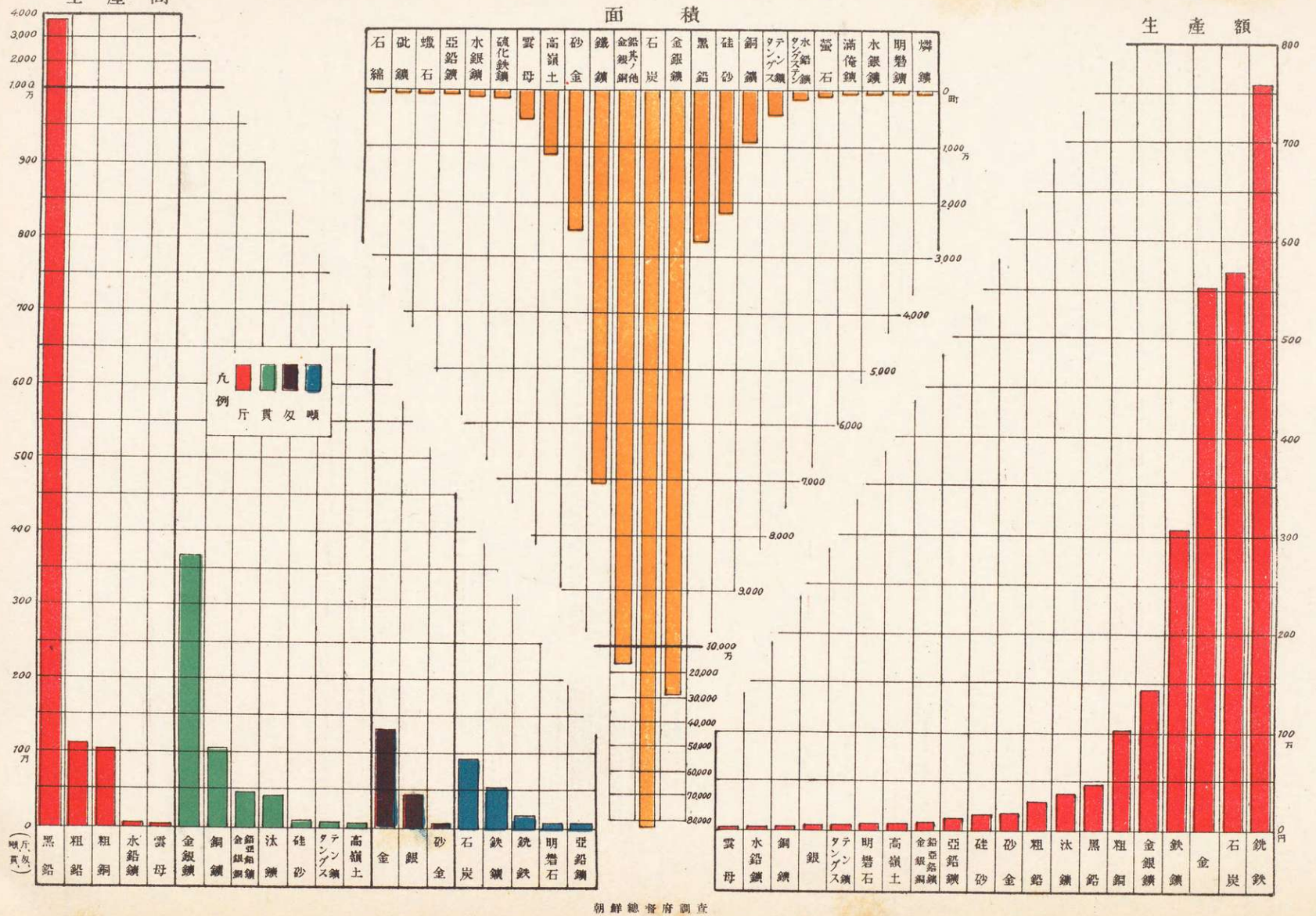
種別	鑛區數	面積	種別	鑛區數	面積
金鑛	六一四	二四七、二四四、四三二	砒鑛	四	四五五、〇四四
銅鑛	二四	七、七〇三、六九八	燐鑛	一	九〇、四二三
水銀鑛	三	五五五、九三二	鉛鑛	六五	二五、五三一、五四一
亞鉛鑛	六	八三三、九〇四	黑鉛鑛	六五	二五、五三一、五四一
鐵鑛	一六一	六、一七九、七九七	石炭	四六五	八九、八九五、七三〇
硫化鐵鑛	六	一、六三六、〇六二	雲母	一六	五、四七九、七三〇
滿俺鑛	二	八九一、二六二	石綿	二	二四二、一三六
タングステン鑛	一七	四、一八六、二五一	土	四	一、七三一、三六四
水銀タングステン鉛鑛	七	九九、一二六、八三一	砂	六五	二〇、三六一、五九四
金銀銅鉛亞鉛其他鑛	六	一、一六一、八三八	石	三	五一七、〇一二
金銀銅鉛亞鉛鑛	三八	二四、三三一、三六八	石	四	四四六、三五五
砂鑛	九	一三〇、六八二、一八五二	石	二	八八三、一四〇
一切鑛物	四	×四三、二六、一八	合計	二、一五二	一、五三九、八七九、六二三 ×四二、一六、一八

▲備考　本表には鑛山特許鑛區の一切鑛物一件は鑛區數のみを計上せり×印は河床の延長に依り許可したるものにして單位を里、丁、間とす次表又同じ

◇鑛産額表

種別	數量	價額	種別	數量	價額
金鑛	一、二四九、四八六匁	五、三三九、七一九円	鑛	三八、八三七貫	七、三七九円
砂金	三〇、六二五匁	一、九〇、〇六九	鉛鑛	一、一七、八九八噸	二七四、五二五
銀鑛	四五五、一七四貫	九、六四五	粗鉛	五、三三噸	一〇四、〇四一
金銀鑛	三、五三、〇四一貫	一、四四〇、八七〇	亞鉛鑛	五〇四、三五四噸	三、〇四二、九二九
汰銅	四〇六、八六四貫	三五、二〇〇	鐵鑛	一四八、六五二貫	七、六五二、九一四
銅鑛	一、〇六〇、四九二貫	四七、四〇一	硫化鐵鑛	一六貫	三五〇
粗銅	一、〇一三、四三一斤	一、〇七、三一九	タングステン鑛	三九、六七〇貫	六六、七三
水鉛鑛	五一、五八〇斤	三八、三三	嶺土	五、八〇八貫	九、五二四
金銀銅鉛亞鉛鑛	四八七、九七五貫	八七、三八	硅砂	七七、七六六貫	一三三、一二五
雲母	七、六八〇斤	三、八三	明礬石	三、七八〇貫	六七、三五
黑鉛	三七、四六四、四九八噸	四四〇、七三八	礬石	七五〇貫	六、六五〇
石炭	八二五、八一七	五、六九二、一九九	合計	—	二六、四三四、九七二

鑛業面積及鑛產額



朝鮮總督府調査

■拓殖事業

農事に適する地味氣候を有する朝鮮に於ては、古來農を以て國是とせられ居りしにも拘らず、山林の濫伐、灌漑上の不備よりして遂ひに耕地を荒廢せしむるに至たれり、總督府始政後銳意之れが挽回を計かり、農事の改良と産業の振興策に努められしが、萎靡困憊せる朝鮮の農事をして急速なる發展を遂げしめんとせば、官民協力し進歩せる内地の農法と將た資本を移入するの必要を痛感せられたる結果、其の機關として明治四十一年三月東洋拓殖株式會社の創設を見るに至たれり。當初資本金は一千萬圓なりしが、其の後事業の擴張に伴ひ漸次增資せられ、現時五千萬圓の大資本を擁し、京城、大田、大邱、釜山、木浦裡里、沙里院、平壤、元山、奉天、哈爾賓、大連等に支店を設置し其の他間島天津、青島等に出張所を設け、會社の使命たる開拓、水利、灌漑、農事の改良に力を注がれたるは勿論、更に進んで苟くも朝鮮の開發を目的とせる事業に對しては特別低利の資金を供給せらるゝ等、朝鮮の發展上に寄與せる處頗る多大なりと云ふ可きなり。然るに時勢の進歩は同社の營業區域を更に擴大するの必要を促がし、前記の如く外國領域にまでも支店及び出張所を設けらるゝに至たれり。創立後二十有餘年を經過せる同社の事業成績は別項圖表に示めせるを以て玆に同社の事業の梗概を記する事にせん。

【土地の經營】會社の經營地は出資地及び買收地の二種類より成る、出資地は舊韓國政府引受株式の拂込に代へて提供せられたるものにして、買收地は即ち、會社の投資せるものなり、會社所有土地の總面積は明治四十三年度末に於て一萬三千十五町歩なりしも、今や諸經營地を合算すれば約九萬餘町歩に達せり、昭和三年九月末迄に於ける經營土地を道別にせば左の如し。

道別	畓	田	垈	山林	雜種地	合計
京畿道	四、五七七・四町 七八一、六〇〇・〇	二、五二、三五八・二町 四九六、三四七・〇	二、三五、三九〇・〇 六五五、六二〇・〇	四、八一、四〇〇・〇 二、五六二・〇	一九、四一九・六町 七、八二三・〇	七、八九六・九町 一、三五一・〇
忠清北道	四、四三八・三 八、四三六・〇	六、三五五・一 七九三・〇	四、七七一・〇 二、三三〇・〇	三〇四・三 七、三五〇・〇	七、九三六・〇 五、九一〇・〇	一、二五九・〇 九、三六九・〇
忠清南道	八、四三六・三 九、三四六・九	七九三・〇 一、八三五・〇	二、三三〇・〇 四九七・〇	三〇四・三 七、三五〇・〇	五、九一〇・〇 九九〇、〇〇〇	九、三六九・〇 一二、八七二、三〇〇
全羅北道	九、三四六・九 三、八三六・〇	一、八三五・〇 五、七二三・〇	四九七・〇 一、五八〇・〇	七、三五〇・〇 九九八、〇五二・〇〇	九九〇、〇〇〇 六、七六〇、七五〇・〇〇	一二、八七二、三〇〇 六、三六三、七九九・〇〇
全羅南道	三、八三六・〇 一、〇五六、八〇〇	五、七二三・〇 一、三五八、二三五・〇〇	一、五八〇・〇 一、二四四、二〇〇・〇〇	九九八、〇五二・〇〇 六七六、七五〇・〇〇	六、七六〇、七五〇・〇〇 四、一五三・〇〇	六、三六三、七九九・〇〇 四、七三七・〇〇
慶尚北道	一、〇五六、八〇〇 三三〇、〇五二、八〇〇	一、三五八、二三五・〇〇 三、四三五、〇四六、六〇〇	一、二四四、二〇〇・〇〇 六六一、四二九・〇〇	六七六、七五〇・〇〇 七六、一四六、四四〇・〇〇	四、一五三・〇〇 二、八七一・〇〇	四、七三七・〇〇 二、三五九、二〇〇・〇〇
慶尚南道	三三〇、〇五二、八〇〇 一、〇三六、三〇九、〇〇〇	三、四三五、〇四六、六〇〇 三、三五五、四六六、八〇〇	六六一、四二九・〇〇 一、四〇〇、〇〇〇・〇〇	七六、一四六、四四〇・〇〇 六、一四九、九〇〇・〇〇	二、八七一・〇〇 一、九四四、〇〇〇・〇〇	二、三五九、二〇〇・〇〇 一、五九〇、〇〇〇・〇〇
平安南道	一、〇三六、三〇九、〇〇〇 三三一、〇五五、八〇〇	三、三五五、四六六、八〇〇 三四四、六六三、〇〇〇	一、四〇〇、〇〇〇・〇〇 九一、四二八、七九六・〇〇	六、一四九、九〇〇・〇〇 七四六、四四〇・〇〇	一、九四四、〇〇〇・〇〇 四、一五三・〇〇	一、五九〇、〇〇〇・〇〇 四、七三七・〇〇
平安北道	三三一、〇五五、八〇〇 一、〇〇六、九〇〇、二〇〇	三四四、六六三、〇〇〇 一、三三五、四六六、八〇〇	九一、四二八、七九六・〇〇 三〇四、六六三、〇〇〇	七四六、四四〇・〇〇 六、一四九、九〇〇・〇〇	四、一五三・〇〇 二、八七一・〇〇	四、七三七・〇〇 二、三五九、二〇〇・〇〇
咸鏡南道	一、〇〇六、九〇〇、二〇〇 一、〇一〇、〇四二、三〇〇	一、三三五、四六六、八〇〇 三五九、〇八〇、一〇〇	三〇四、六六三、〇〇〇 一、二六、九六一、三五〇	六、一四九、九〇〇・〇〇 九、四二八、七九六・〇〇	二、八七一・〇〇 一、九四四、〇〇〇・〇〇	二、三五九、二〇〇・〇〇 一、五九〇、〇〇〇・〇〇
咸鏡北道	一、〇一〇、〇四二、三〇〇 一、八三〇、〇五〇、八〇〇	三五九、〇八〇、一〇〇 七七一、三五〇、〇〇〇	一、二六、九六一、三五〇 七七一、三五〇、〇〇〇	九、四二八、七九六・〇〇 三、二三七、三一〇、〇〇〇	一、九四四、〇〇〇・〇〇 四、一五三・〇〇	一、五九〇、〇〇〇・〇〇 四、七三七・〇〇
合計	四八、四五五・一七九町	二六、三三五・五六二町	一六、三三五・五六二町	一三、三七五・三四〇町	二、五六九・六五三町	一、五九〇、〇〇〇・〇〇

【農事の改良】社有小作地に於ける内鮮農民に對して稻作の改良奬勵の爲め明治四十三年以來毎年各地に原採種小作畓を設け、改良種の栽培普及を圖ると共に苗代の設置、施肥、挿秧除草、害蟲驅除豫防、調製法等の實地指導を試みヌた一面種籾、農具、肥料等の貸付をなす等、極力農事の改良に努めたる結果、漸次好成績を擧げ昭和三年度に於ては原種畓六町歩餘、採種畓二百三十二町歩餘を設置し、約一萬六千二百二十町歩の種子更新をなし、一方地力の利用を充分ならしむる爲め改良犁を指定し、一般に普及し改善の實を擧ぐるに努めつゝあり。

【農事改良區】社有地に對し農事改良の徹底を圖り、增收の實を擧げんが爲め社有地の集團せる地方に於て、約二百五十町歩を一區とせる農事改良區を設置するの計劃を樹て、大正十四年之れが實施をなし現在十九區に達せり、而かも本施設は一般小作人の甚だ歡迎する處にして、更に之れが新設を熱望するのみならず一面官邊に於ても之れに對し諸種の便宜と援助を與へつゝあるを以て、今後社有地の改良工事又は水利組合事業の完成等に因り、旱水害の防除せらるゝに從ひ漸次之れが增設を見るならんか。

【金肥配給】鮮米の增收及び農産物の增加を圖らんが爲め堆肥、綠肥の普及奬勵は勿論、從來移住民並に小作人のみに限り貸付したる金肥は、大正八年より鮮內一般農民にも之れを配給するの必要を認め、同年より之れを實行せられたるに顧る良好なる成績を擧ぐるに至たれり、殊に同十五年度よりは總督府計劃の朝鮮産米增殖計劃の實施に伴ひ低利資金の供給を受け當社移住民、小作人等に貸付したる額は三百五十二萬餘圓に達せり。

【種子及農蠶具の供給】農事改良及び副業奬勵の目的を以て、移住民並に小作人に對して改良種籾、大豆、紫雲英等の種苗及び揚水車、製繩器、製縫器、唐箕、稻扱器及び蠶具等を貸付しつゝあり、其の金額昭和二年度に於ては二十萬四千餘圓なり。

【山林經營】明治四十三年以來年々經營の歩武を進め人工植栽又は天然生稚樹保育に依り造林を實施せるのみならず、同社經營の苗圃に於ける昭和三年度の成苗數は二百五十九萬一千餘萬本得るに至たれり。尙現在經營の山林面積は左表の如し。

▲山林經營面積表（昭和四年三月末日現在）

所在地名	國有林野借受地	國有林野讓受地	買收林地	計
	町	町	町	町
慶尚南道	—	—	三五七、四五〇・九	三五七、四五〇・九
慶尚北道	—	—	五五三、五八〇	五五三、五八〇
京畿道	三、五六六、〇四〇・〇	七、二〇〇	一四、六〇六、一〇三	一八、一〇九、三四三
江原道	一、一四〇、一六〇	二九〇、三四〇・〇	一、六六六、七〇〇	三、一四七、二〇〇
咸鏡南道	三、一四五、九〇〇	一、一〇五、三七〇・〇	一、三三五、二九〇	六、七六六、三五〇・〇
咸鏡北道	—	八、三六八、〇三〇・〇	一、九六六、〇三〇・〇	一〇、三三五、〇六〇・〇
黃海道	九、六五〇、八四〇	一、九七、八九、一八〇	一、九七、九五〇	二、七四、六九、三
計	三五、九七三、九八〇	八、三六八、〇三〇・〇	三六、九二三、三三	八三、七四一、六九三

【竹林經營】南鮮は竹林經營に適せるも只天然に委ねて栽培を行はず、年々荒廢するの悲態なるを以て、明治四十五年以來慶尚南道及び全羅南道に於て、民有竹林八十町歩餘を買收して模範林の經營に着手し、一面模範を示す爲め國有未墾地の貸付を受け、或は民有未墾地を買收し苗竹の新植を爲したり、今や其の經營面積三百六十三町歩餘にして生育頗る佳良なり。

【土地改良】社有土地の維持修築及び改良工事の實施及び干潟地草生地の開墾等をなし、又た他地主と協同して水利組合の設立、調査をなして事業の助成を圖りつゝあるが、昭和三年度迄に完成せる改良工事は合計三十七ケ所にして此の面積は五千五百七十二町歩に達せり。

【殖民事業】明治四十三年移住規則を制定し主として、內地人移民の募集分配を行ひ爾來移民を收容すること十七回、其の戶數三千九百七十一戶人口約二萬人に達せり、平安南道咸鏡北道の二道を除く外、朝鮮全道に亘りて地方開發農事改良に貢獻せり。

圖表對照統計

◇各年度末拓殖資金供給高表

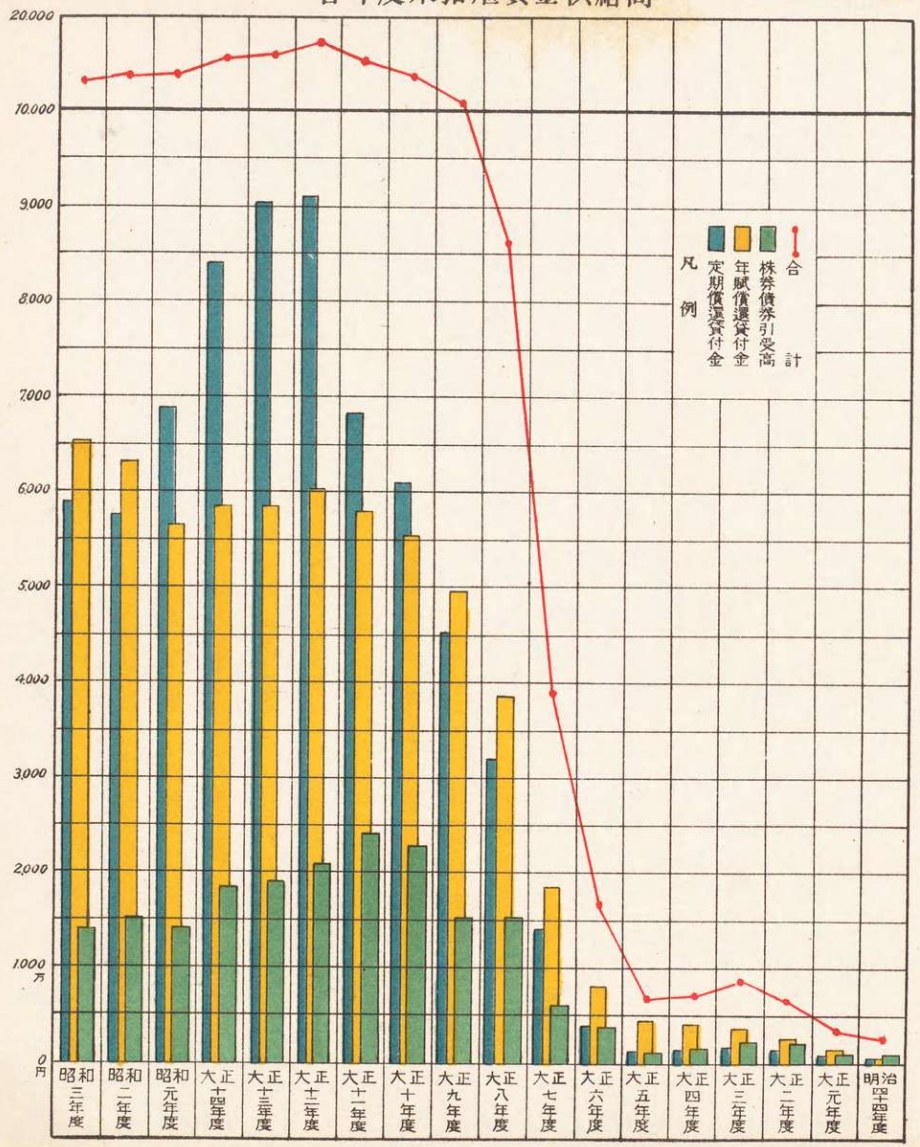
年度	種別	定期貸付償還金	年賦貸付償還金	株券引受債券高	合計
明治四十二年度		円	円	円	円
同四十三年度		四、元、七、二〇〇	一、六五、六〇〇	一、〇〇、〇〇〇	五九五、三三〇
同四十四年度		五四、三六九	六五、二四〇	一、〇〇、〇〇〇	二、一六、七九
大正元年度		九五、一四七	一、四八、三四七	一、〇〇、〇〇〇	三、四三、四四
同二年度		一、四五、六六	二、五三、三四	二、〇〇、〇〇〇	六、三四五、七九
同三年度		一、六七、九六二	三、六三、二三九	二、〇〇、〇〇〇	七、七五、一八九
同四年度		一、四一、五九八	四、三五、一、九四〇	一、六五〇、〇〇〇	七、四五三、五七
同五年度		一、八七、六三	四、三五、一、四〇	一、〇〇、〇〇〇	六、九五九、二二
同六年度		一、三五、〇一一	八、〇三五、〇七〇	三、六七、五〇〇	一五、八〇五、五八
同七年度		一、四二九、七四	一、八、六四〇、〇八三	一、五五、七、八四〇	二五、三九、八六六
同八年度		三、五八、五八	一、三、四〇、〇八三	一、五四九、三五一	八六、四九六、四五一
同九年度		四、一四、九七	四九、三五、八一四	一、五五、七、八四〇	一〇、〇七、〇二一
同十年度		六、四、九一二	五五、五六、八四	二、三、八六、四九八	二九、八二、一六九
同十一年度		九、〇三、三五	六、八三、九八	二、四、一三、一四三	三五、九、一八三
同十二年度		九、六三、三五	六、八三、三六五	二、七、〇、七三	三五、六七、八〇三
同十三年度		八、四、二四	五、二四、八四五	一、九、三、七、八六	二七、九二、一〇三
同十四年度		七、四三、二四	五、二四、八四五	一、六、八、四三、四八	二六、一三、三五四
昭和元年度		六、五九、五四	四、七三、三四	一、五、一九、八六、四	二四、三四、三四
同二年度		六、五、三五	四、七、三四	一、五、一九、八六、四	二四、三四、三四
同三年度		六、四三、三五	四、六、一八六	一、四、三、四九四	二三、七、四二

◇拓殖資金供給地域別表

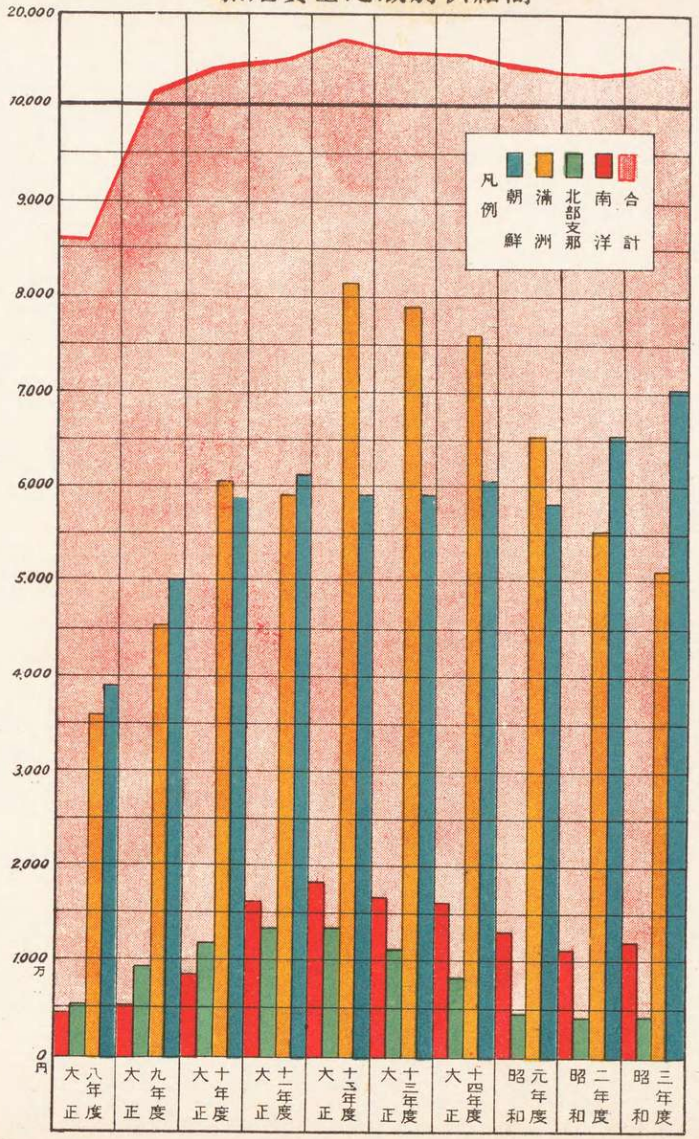
年度	朝鮮	滿洲	北部支那	南洋	合計
大正八年度	円	円	円	円	円
同九年度	三、八六、四三元	三六、六〇二、五一三	五、三六、〇〇〇	四、七〇二、五〇〇	八六、四九六、四五一
同十年度	三、六二、八三五	四五、一一、七四	九、五四、一五六	五、一九、九〇〇	一一〇、〇七、〇二一
同十一年度	五、一四、一〇三	六〇、一九、一六	一三、七九、九四〇	八、二三六、六九八	一三九、一八三
同十二年度	六、一五九、一五	五九、四〇三、九五五	一三、五四、五〇〇	一六、二三六、六九八	一三五、九、一八三
同十三年度	九、六三、一四	八一、九六二、一四	一三、七九、九四〇	一八、五九、三七八	一三七、九七、八〇三
同十四年度	九、七三、三五	九、三六八、二三	一一、一五、八三	一七、一三五、八六	一四〇、九二、一〇三
昭和元年度	八、六四、三五	九、四六八、九一	八、六四三、三四	一六、一三五、八六	一四一、三四、三四
同二年度	八、五九、一五	五五、六九、八九	四、八三、三五	一一、八〇八、三六	一三七、四七、三四
同三年度	六、四三、一五	五一、七四、三四	四、一五、八六	九、六七、一三	一二九、四二、三四

拓殖資金供給高

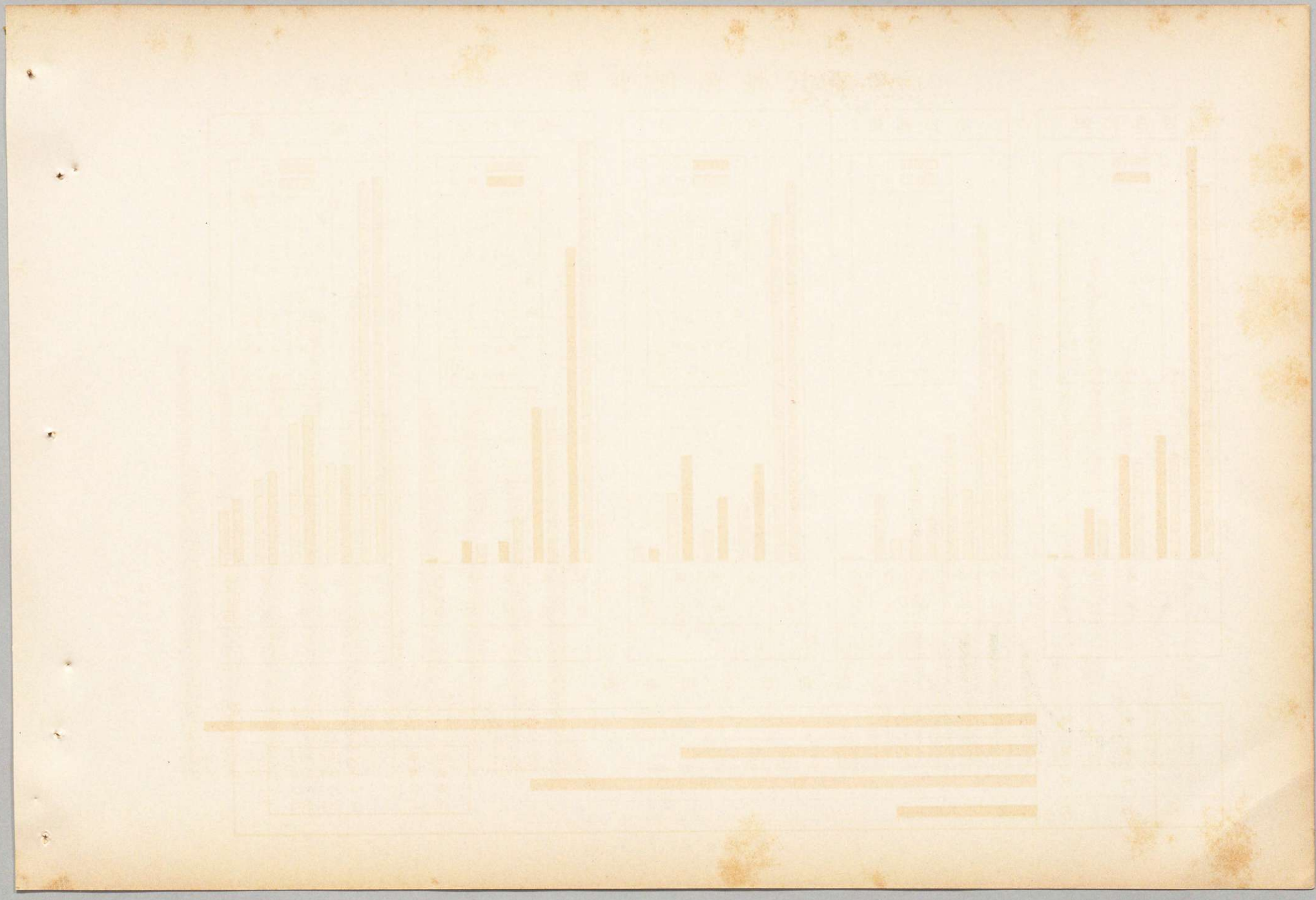
各年度末拓殖資金供給高



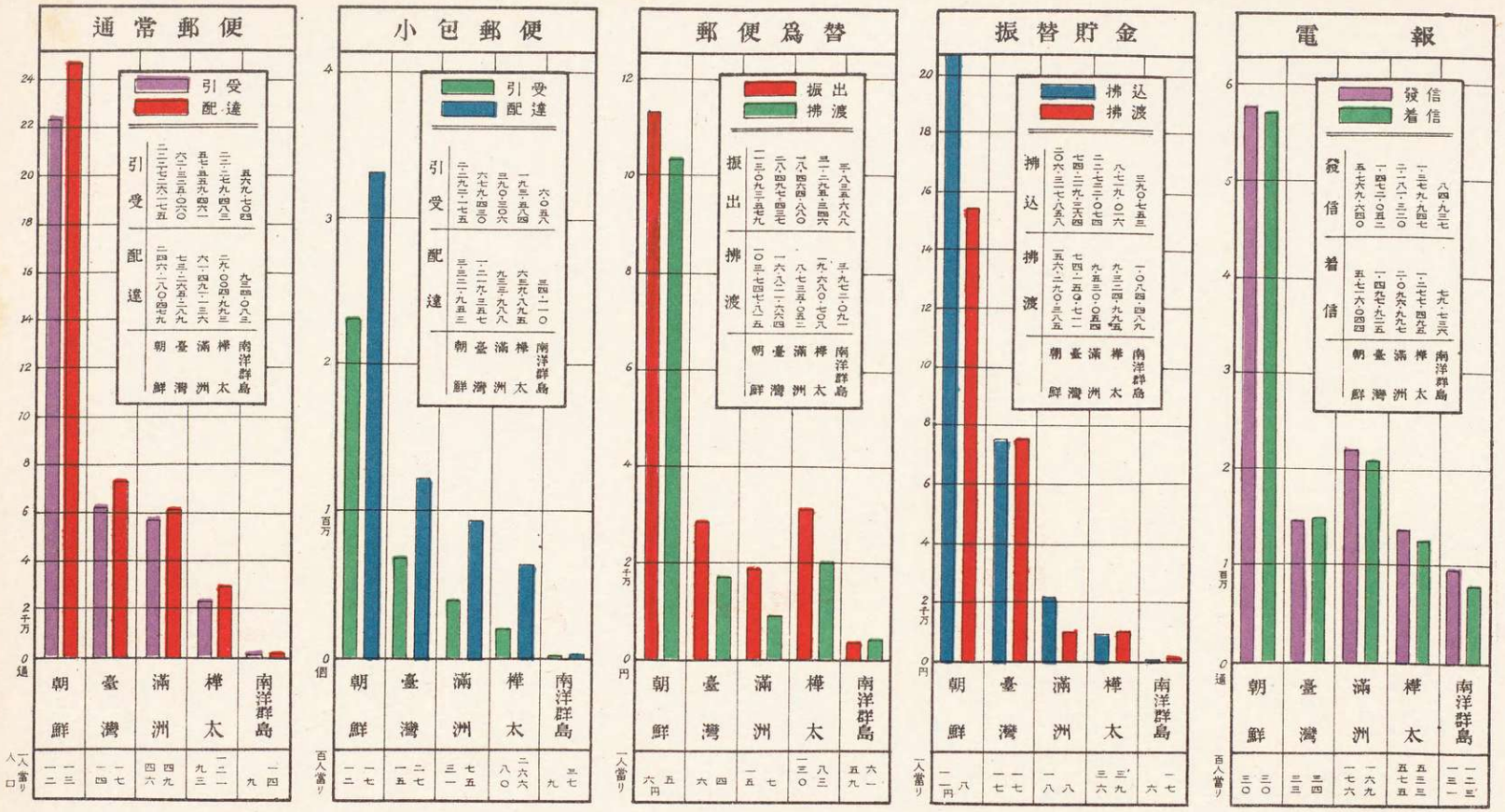
拓殖資金地域別供給高



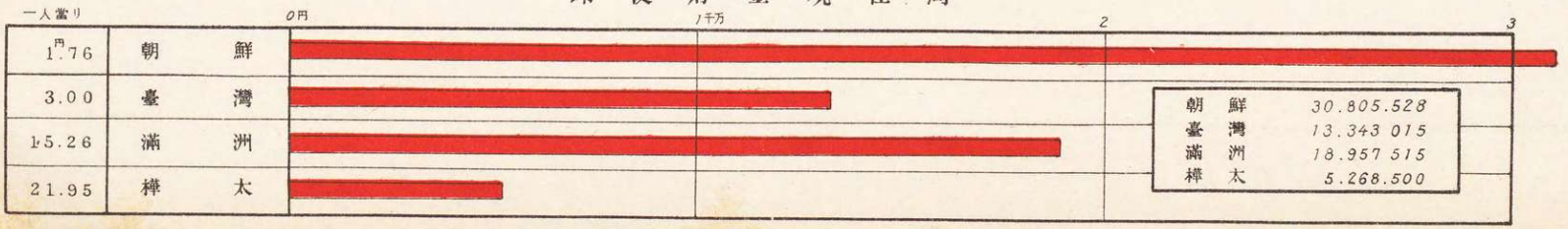
東洋拓殖株式會社調査



殖民地郵便事業 〔昭和三年度〕



郵便貯金現在高



拓務省調査

臺灣の部

（昭和五年度臺灣總督府調査）

地勢及面積

【位　置】臺灣は帝國の最南端に位し、臺灣本島、澎湖列島及び其の他の附屬島嶼から成り、東經百十九度十八分から百二十二度六分、北緯二十一度四十五分から二十五度三十八分の間に在り、北は海上六百四十一浬にして九州の南端鹿兒島に達し、西は臺灣海峽を隔てゝ近く支那大陸に相接し、東は太平洋を隔てゝ遠く米大陸に相對し、南はバツシー海峽を隔てゝ近く比律賓群島に相隣してゐる。

【面　積】その面積は二千三百三十二方里、周圍三百九十八里であつて、帝國の總面積の五分三厘を占め、九州よりは稍少さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれば約その六分の一に當る。

【地　勢】本島は其の形狀稍圓形をなし、南北は長くして百餘里に及ぶも、東西は最も廣きも四十里に過ぎない。所謂中央山脈（脊梁山脈）は稍々東方に偏して南北に貫通するが更に中央部より西方に分岐するものにシルビヤ山脈、水社山脈、新高山脈等がある。又た東部海岸には海岸山脈があり、北端に近く大屯火山彙があつて、本島總面積の三分の二は山嶽と稱するを妨げぬ而かも此等山脈中には海拔一萬尺以上のもの四十八座、九千尺級のもの十七座、八千尺級のもの二十四座、七千尺級のもの二十六座を有してゐる。即ち此の小面積の島上に聳ゆる七千尺以上の高山總數百十五座に及ぶといふに至つては、誰か一驚しないものがあらう。是れ蕃人の跳梁し來つた所以である。然し一度これ等高山境の人となれば、高山植物の美と風景の雄大とを併せ、地は熱帶圈内に在りながら四時春風駘蕩の雅趣がある。試みに一萬尺以上の高山を左に列記しよう。

一萬三千三十五尺　新高山

一萬二千尺以上　次高山（舊名シルビヤ山）、秀姑巒山、マボラス山、南湖大山、中央尖山、關山、大水窟山。

一萬一千尺以上　蒼萊主山北峰、東郡大山、大雪山、大覇尖山、雲峰、蒼萊主山、東巒大山、合歡山、北合歡山、南合歡山、南玉山、桃山、シンカン山、畢祿山、丹大山、白姑大山、蒼萊主山南峯、南雙頭山、能高山南峰。

一萬尺以上　卑南主山、干卓萬山、カシバナン山、郡大山、タロコ大山、卓社大山、小關山、能高山、屏風山、大武山、尖山、バトツノフ山、ハイノートーナン山、マビーザン山、白石山、ウハノシン山、安東郡山、巒大山、關門山、大石公山、小雪山。



【地　質】其の地質は水成系統の岩石類最も能く發達し、就中西部臺灣には第四紀層と第三紀層との包藏頗る廣く、重要な生産地域を構成し、以て脊梁山脈の中軸を組成する古生紀粘板岩系を覆ふ。然るに東部に於ては之に反し、太古紀層著しく發達し脊梁山脈の東側を構成し、第四系と第三系との岩層は地質年代の新古に應じて順次累積し、幾度か地體の變化に會うて著しく褶曲され幾多の向背斜軸をなし、更に之れを劃破し安山岩、玄武岩等の岩脈をなして噴起したものが少くはないが、一般の地層は概ね層位整然として島軸に從ひ北々東から南々西方に走る。

【土　地】領臺當時の土地制度は、各地方區々であつて一定せず、其の關係簿冊類も不幸にして或は兵燹に罹り、或は匪類の掠奪に遭ひ、或は隱匿せられ散逸せしめたる爲め、土地と聯絡ある臺帳なく、從て賣買讓渡等に際し其の權利を證明し之を整理すること不能の狀態であつたので、總督府では明治三十一年度より土地調査の大事業を起し、三十六年に至り之が完成され、玆に始めて庶政の基礎を鞏め、土地制度が確定され、爾來諸種の産業的施設經營の發展に伴ひ、逐年土地臺帳登錄地を增加し今日に至れり。

昭和四年一月一日現在の有租地は**八十三萬七千三百三十四甲一七六五**、免租地五千四百十四甲六八九四、無租地は四十二萬五千二百甲九七八五であつて、其の内譯は圖表の通りである。

（尚臺灣に於ける「一甲」の名稱は内地の二千九百卅四坪の面積に均し）

圖表對照統計

◇有租地表

（昭和四年一月一日現在）

州廳名	稅務課別	稅務出張所別	田 甲 數	田 地 租 筆 數	田 甲 數	畑 地 租 筆 數	畑 甲 數	養 魚 池 地 租 筆 數
臺北州	稅務課		三六、三八九・七一	四八、一七九	一四、五七九・八四	九四、三五五	一、三九二・三一	一、三五
宜蘭出張所			三六、七五八・八〇三	二八、六二一	四、七八〇・三一	一〇、一〇〇	三一五・一	一三
新竹州	稅務課		四一、七三九・九六八	四五、〇〇五	一七、二九三・七九	七一、五一四	九・六五一	一、四三二・三一
桃園出張所			九、五三一・四三九	一四、一四七	三、九三七・一三	二七、一〇〇	三・八四	三、〇五
臺中州	稅務課		一四、一四七・三九九	一四、一四七	三、九三七・一三	二七、一〇〇	三・八四	三、〇五
南投出張所			一四、一四七・三九九	一四、一四七	三、九三七・一三	二七、一〇〇	三・八四	三、〇五
臺南州	稅務課		三三、〇五五・八四	三四、一四一	一四、六四〇・三四	一〇八、五三一	一、四三二・三一	一、四三二
嘉義出張所			二四、八六二・七二四	二四、一四一	一〇、六四〇・三四	一〇八、五三一	一、四三二・三一	一、四三二
高雄州	稅務課		八、〇九〇・〇九	一〇、〇〇〇	四、二九七・〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
屏東出張所			八、〇九〇・〇九	一〇、〇〇〇	四、二九七・〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
澎湖廳			五、〇二三・七三	一、〇〇一	四、〇四〇・三三	一、〇〇一	一、〇〇一	一、〇〇一
臺東廳			三九、一〇八・二九三	一、〇〇一	四、〇四〇・三三	一、〇〇一	一、〇〇一	一、〇〇一
花蓮港廳			三九、一〇八・二九三	一、〇〇一	四、〇四〇・三三	一、〇〇一	一、〇〇一	一、〇〇一
計			三九、一〇八・二九三	一、〇〇一	四、〇四〇・三三	一、〇〇一	一、〇〇一	一、〇〇一
前年一月一日現在ニ比シ増△減			△三、三九九・五九二	二七、七二三	一四、九〇〇	九九四・五三五	△六九六・六五	八、四六一
							△二、五九五・七〇五	△一五〇・二
								七、八九五

◇有租地表（續）

州廳名	稅務課別	稅務出張所別	建物敷地 甲 數	建物敷地 租 筆 數	合計 甲 數	合計 地 租 筆 數	前年ニ比シ増△減 甲 數	前年ニ比シ増△減 地 租 筆 數
臺北州	稅務課		一、一一八・四四三	一、一〇〇・四四八	一、一二八・四四三	一、一〇〇・四四八	一、〇八一・六九九	一、〇八一・六九九
宜蘭出張所			二、六九一・四八六	二、六九一・四八六	二、六九一・四八六	二、六九一・四八六	一、六一〇・七八一	一、六一〇・七八一
新竹州	稅務課		二、六七二・七三七	二、六七二・七三七	二、六七二・七三七	二、六七二・七三七	一、六一〇・七八一	一、六一〇・七八一
桃園出張所			一、〇八〇・〇六五	一、〇八〇・〇六五	一、〇八〇・〇六五	一、〇八〇・〇六五	一、〇八〇・〇六五	一、〇八〇・〇六五
臺中州	稅務課		一、五九六・八四八	一、五九六・八四八	一、五九六・八四八	一、五九六・八四八	一、五九六・八四八	一、五九六・八四八
南投出張所			一、五九六・八四八	一、五九六・八四八	一、五九六・八四八	一、五九六・八四八	一、五九六・八四八	一、五九六・八四八
臺南州	稅務課		三、八四〇・九九四	三、八四〇・九九四	三、八四〇・九九四	三、八四〇・九九四	三、八四〇・九九四	三、八四〇・九九四
嘉義出張所			二、四六八・九七四	二、四六八・九七四	二、四六八・九七四	二、四六八・九七四	二、四六八・九七四	二、四六八・九七四
高雄州	稅務課		九七一・〇二〇	九七一・〇二〇	九七一・〇二〇	九七一・〇二〇	九七一・〇二〇	九七一・〇二〇
屏東出張所			九七一・〇二〇	九七一・〇二〇	九七一・〇二〇	九七一・〇二〇	九七一・〇二〇	九七一・〇二〇
澎湖廳			四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九
臺東廳			四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九
花蓮港廳			四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九
計			四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九	四、五二〇・八九
前年一月一日現在ニ比シ増△減			九二・一〇三	三、四五五	九二・一〇三	三、四五五	九二・一〇三	三、四五五

◇荒地免租地表

（昭和四年一月一日現在）

州廳名	稅務課別	稅務出張所別	田 甲 數	田 地 筆 數	畑 甲 數	畑 地 筆 數	養 魚 池 甲 數	養 魚 池 地 筆 數
臺北州	稅務課		五五〇・三九	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
宜蘭出張所			五五〇・三九	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
新竹州	稅務課		一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
桃園出張所			一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
臺中州	稅務課		一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
南投出張所			一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
臺南州	稅務課		一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
嘉義出張所			一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
高雄州	稅務課		一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
屏東出張所			一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
澎湖廳			一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
臺東廳			一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
花蓮港廳			一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
計			一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
合計			一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二
前年一月一日現在ニ比較増△減			一、一七二・九三	一、一七二	一、三四・三四	一、一七二	一、一七二	一、一七二

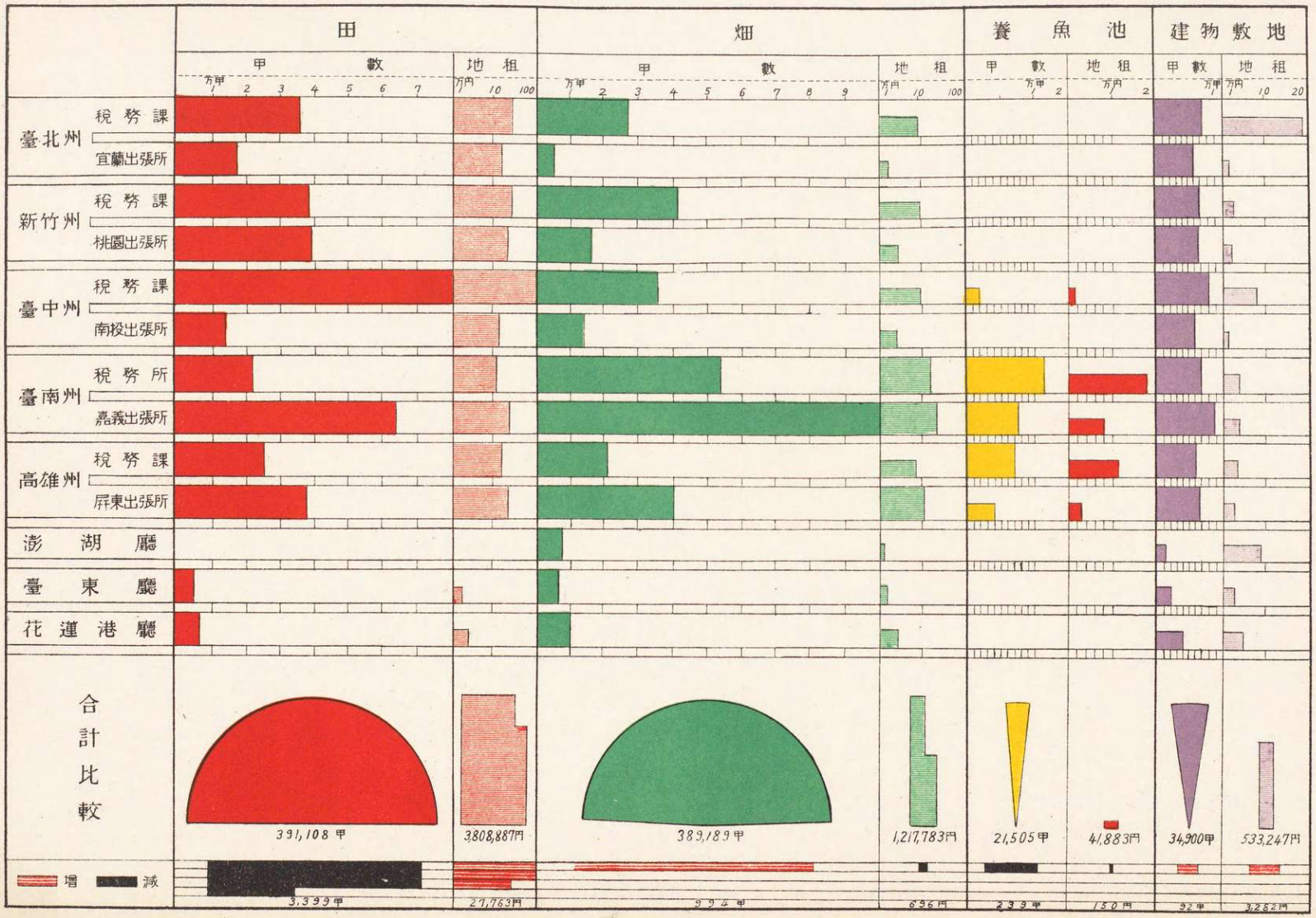
◇荒地免租地表（續）

（昭和四年一月一日現在）

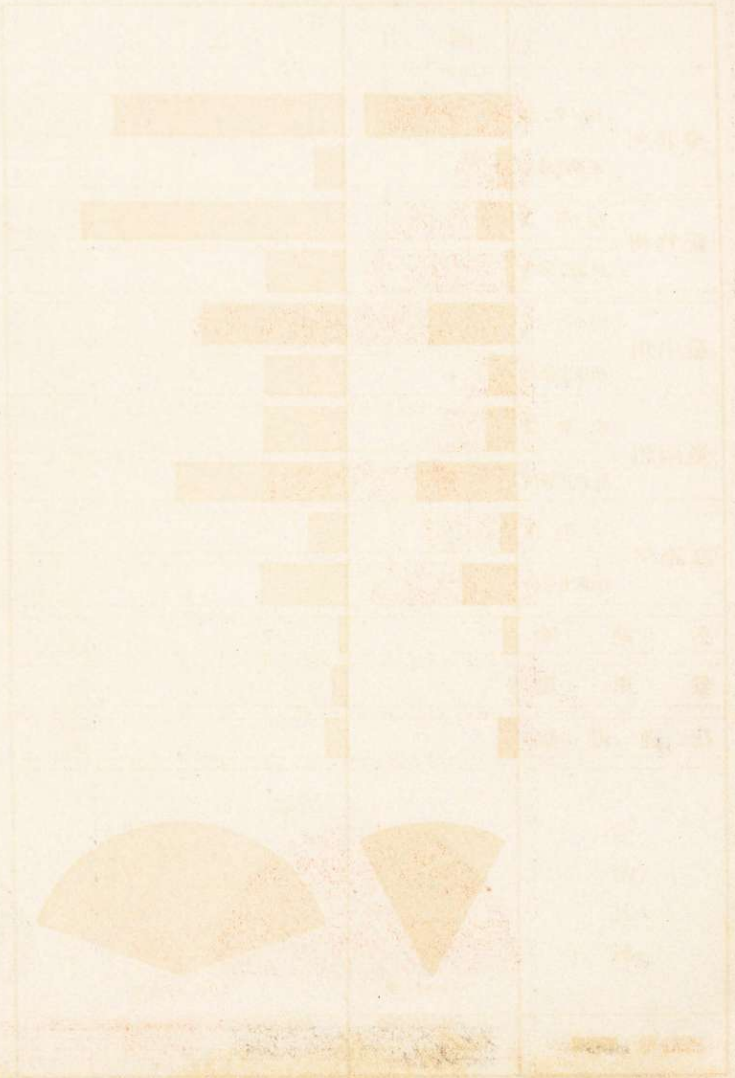
州廳名	稅務課別	稅務出張所別	建物敷地 甲 數	建物敷地 租 筆 數	合計 甲 數	合計 地 租 筆 數	前年ニ比シ増△減 甲 數	前年ニ比シ増△減 地 租 筆 數
臺北州	稅務課		一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
宜蘭出張所			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
新竹州	稅務課		一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
桃園出張所			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
臺中州	稅務課		一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
南投出張所			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
臺南州	稅務課		一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
嘉義出張所			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
高雄州	稅務課		一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
屏東出張所			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
澎湖廳			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
臺東廳			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
花蓮港廳			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
計			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
合計			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二
前年一月一日現在比較増△減			一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二	一、一七二・九三	一、一七二

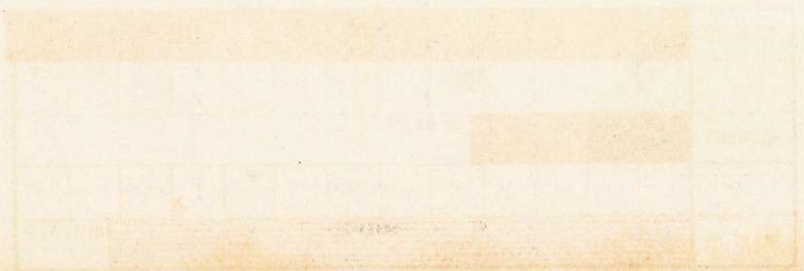
有租地

昭和四年一月一日現在

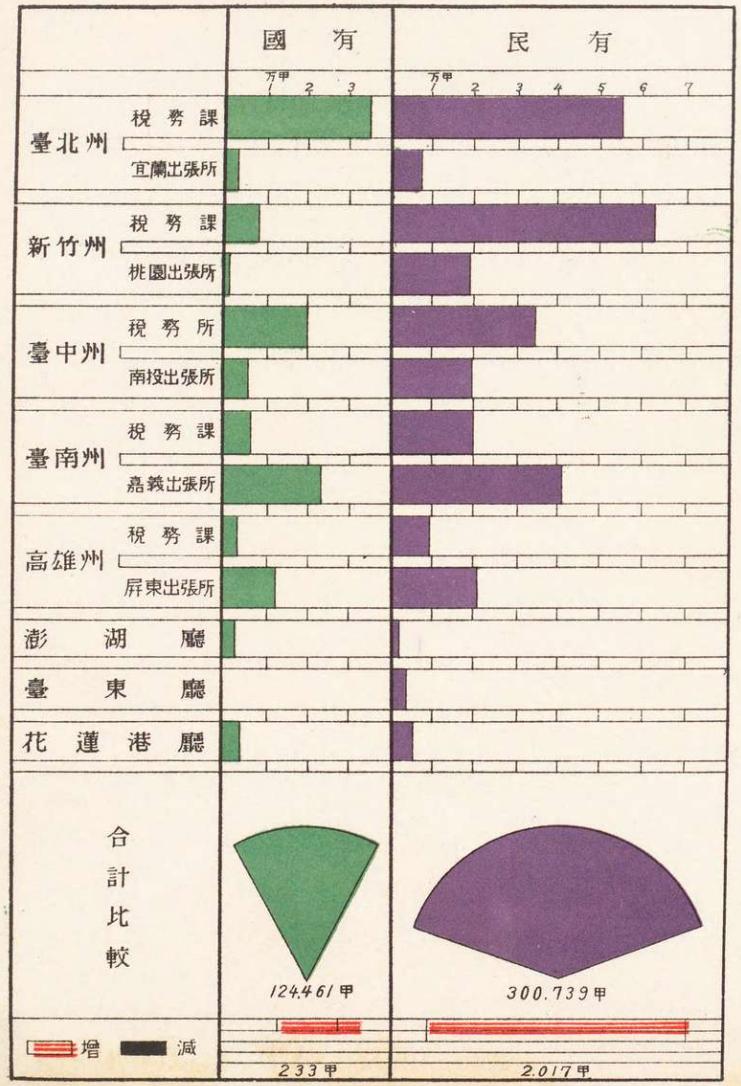


臺灣總督府調査

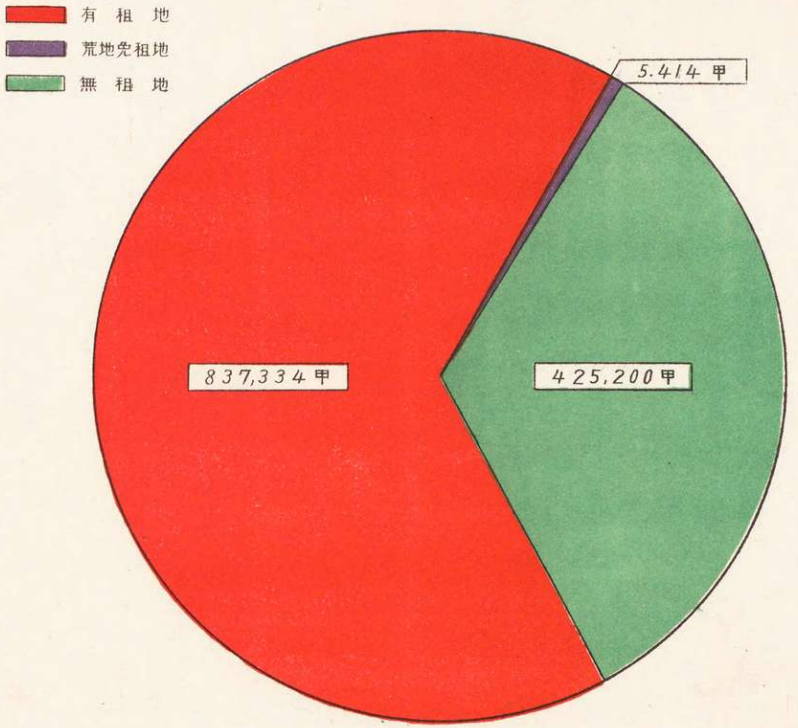




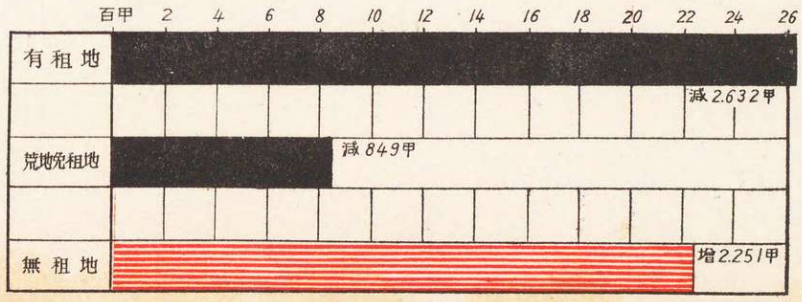
無租地



土地割合



增減比較



臺灣總督府調查

■戸　口

【戸口調査の基礎】 我が領臺以前に於ても支那式の戸口調査が行はれた樣である。然し方法は不完全で殆と何等の用をなさなかつた。依つて（一）本島人のために明治二十九年八月臺灣住民戸籍調査規則が定められ、同三十年三月臺灣住民分限取扱手續が定められる。（二）內地人の爲には明治二十九年三月に寄留屆出方が定められ、三十二年八月之れが改定され、同時に外國人取扱規則が定められる。（三）本島一般住民の爲には明治三十六年戸口調査規定が制定され、後之れを基礎として幾多の改定が加へられ、三十八年六月戸口調査規則が作られ、同年十月一日午前零時を現狀とせる第一回の臨時戸口調査が行はれた。之れ畢竟國勢調査で帝國の領土中最も魁をなしたものである。

【臨時戸口調査】 上述の如く第一回臨時戸口調査は、明治三十八年十月一日午前零時の現狀を後の三日間に調査され豫期の成績を收めた、然るに大正四年十月一日はその後滿十年に當るので第二回の調査を行ふべく、大正三年度から準備に着手され豫定の期日に決行されたのである。

【國勢調査】 臺灣に於ける上記二回の臨時戸口調査は事實上の國勢調査とも云ふべきだが、帝國全般の國勢調査は未だ曾て施行されてなかつた。されば曩きに法律第四十九號以つて、明治三十八年を期し第一回を行ふ旨規定されしが、偶々同年は日露戰爭に妨げられ無期延期の狀態となつた。然るに其の後各方面から之れを要求するの聲が盛んに起つたので、愈々大正七年度以後の繼續豫算に經費を計上され、大正九年十月一日を以て十有八年間の懸案であつた、第一回國勢調査の施行を見るに至つたのである。

併かし之れを臺灣に見るときは畢竟第三回の戸口調査に過ぎないから、調査事項は大體前二回の調査に則り、僅かに用語、教育及び出生地の調査方法に小差があつたに過ぎぬ。調査の結果は大正十年二月を以て調査委員要計表に依り男女別現在人口、常住人口の概數を發表され、九月に至りて種族及び男女別人口の確定數を發表せられ、同十一年十月には、職業名字彙を、同十二月には要覽表を刊行せられた。要覽表は各調査事項を簡明に表示し、一面に土地の區分即ち州、廳、市、郡、支廳、街、庄、區、大字及び蕃地名別等を細密にし、實用上利便のものであつた。

明治三十五年の法律に依れば我國の國勢調査は每十年に一回施行せらるゝ事に定められてあつた。然るに十年と云ふ期間は餘り長いので其の間に於ける人口の移動を測知することが出來ない爲め中央、地方に於ける諸般施設上に不便勘くないので、大正十一年法律第五十一號を以て十年の回歸を以て行はるゝ大調査に加ふるに、五年に一回の簡易調査を行ふ事に改正されたのである。大正十四年は恰も第一回國勢調査より起算し五年目に相當し簡易調査を行ふことゝなれり。併し臺灣に於ては是れが第四回目の戸口調査である。

【住民の種族別】 住民を大別して內地人、臺灣人、外國人の三種とさる。內地人は改隸以來の移住者で、外國人とは大部分支那人を云ひ歐米人に至つては極めて少數である。又た臺灣人は漢人種と蕃族とに分たれ、更に前者は其原産地に依り、閩（福建地方住民）と粵族（廣東地方住民）とに大別し、臺灣住民中の九割二歩餘を占め、後者は臺灣內に於ける最も古い、種族で生蕃と熟蕃（化蕃を含む）との二種なり。昭和三年末に於ける其の內譯は左の如くである

▲住民の種族別（昭和三年末調査）

種別	總數	男	女	百分比例
總數	四、四五九、〇四四	二、二七四、五四三	二、一八四、五〇一	一〇〇・〇
內地人	二一三、一〇三	一二三、六二〇	八九、四八三	四・八
內譯 臺灣人	四、一〇〇、三六三	二、〇一〇、八五四	二、〇八九、五〇九	九二・三四
內譯 生蕃	八六、三六六	四三、七五一	四二、六一五	一・九
內譯 外國人	四〇、三五四	二七、九七〇	一二、三九四	〇・九

▲備考　番人は蕃界內居住者の概數で、行政區域內居住番人は臺灣人中に算入す。

【人口】 昭和三年末の全島總人口（蕃界の蕃人を除く）は**四百三十五萬一千八百二十八**人で、之れを第一回の臨時臺灣戸口調査年たる明治三十八年の年末現在に比すると百三十萬四千九百六十九人を增し、每年平均五萬六千七百三十八人の增加となる。左に今第一回の臨時戸口調査以後に於ける各年末人口を表示すれば左の如くである。（圖表參照）

■理　蕃

【種　族】 蕃人は臺灣の最も古い住民で、彼等が山地に居住することに就ては、初め平地に居住して居たものが、往昔對岸から盛に移住して來た漢人の澆瀉たる新興勢力に壓迫せられて、漸次山中に後退逋入したものであると云ふ說と、古から山中に居住して居たものであると云ふ說との兩說がある。其の居住地が交通不便な山地であり、其の上彼等が祖先の遺訓とする首狩の陋習を固持して、長期間に亘り他種族の近接を拒阻し以て時代文明との接觸を少なからしめたのに因由して頗る原始的な生活を持續してゐたが、我が領臺以來銳意彼等民族及び其の占據地の緩撫開發に努力した結果、今日では首狩の如き殆ど絕無となり、一般の生活狀態も漸く舊套から蛻脫して進化した生活に進み入らうとしつゝあるに至つたが、其の文化は一般に比し今尙相當の輕輕あるは否み得ない。

人種は南洋の土人に酷似し、おそらくは馬來系統に屬するものと認めらる種族は、タイヤル、サイセツト、ブヌン、ツオウ、パイワン、アミ及びヤミの七に分類せられる。其等の各種族は昔南洋方面から移動し來るに方り、各々異つた團體をなし、以て夫れ〴〵今日の種族の祖先となつたものと推せられる。同一種族は如何に地域に遠近の差あるも、祭祀其の他の年中行事は時期を一にし、又た外敵に對し必ず攻守同盟を結ぶの慣習あり、排他的觀念が强烈である。昭和三年末現在の社數七百三十、戸數二萬三千四百九十六、人口十三萬九千二百三十四人、內男六萬九千八百二十三人、女六萬九千四百十一人、夫婦配偶數は二萬七千九百十三、壯丁は三萬百二十九人あり、更に之れを五州二廳に集計すれば別表の如くである。

【性情風俗】 種族に依つて多少の相違はあるが、概して動作輕捷で峻嶺を攀ぢ激流を涉る等の動作最も輕妙を極める。七種族中最も慓悍なるはタイヤル、ブヌンで、就中タイヤルは最も獰猛殺伐を以て聞え、其の利害相反すれば往々にして同族間と雖も互に殺傷する。ブヌン、パイワンの二種族は稍々タイヤルに似たる所あるも、同族間の爭鬪殺傷は稀にして、時に有りとするも其の手段方法は前者の如く大袈裟ではない。其の他の三種族は概ね柔順で農作をなし、就中ヤミ族は最も平和的で同族五に相睦み、アミ族は最も進化したる東臺灣の平地盤で、其の居住の清潔にして整頓せるは遙かに臺灣人も及ばざるものがある。

【理蕃の沿革】 如何に彼等を統御すべきかの問題に就ては、我が領臺以前でも容易ならぬ苦心を重ねたやうである。我が領臺に際しては、先づ專ら懷柔策に依るの計を立て、明治二十九年三月、樞要の地十一箇所に撫墾署を設けて專ら彼等の撫育に當らしめたが、當時は未だ到る處に匪徒の蜂起あり、加之流行病猖獗を極め、理蕃の業又た容易ならざりしが、數次官制の改革も行はれ明治四十二年中蕃務本署を總督府に移され、大規模の理蕃策を講ぜられたる結果、大正四年一月を以て一段落を告ぐるに至つたのである。尙當局に於ては各種の撫育機關を設けて指導啓發に努め、道路を開鑿して交通の便を圖り着々化育の方法を講じつゝあるから、其の進化は著しく今や農作に從事し租稅を負擔し、中には專門教育さへ卒へたものもある。

圖表對照統計

◇蕃社戶口集計表（昭和三年十二月末現在）

州廳	種族	蕃社及居住箇所數	戶數	人口 男	人口 女	人口 計	配偶數	壯丁數
臺北州	タイヤル	三五	一、一五九	二、七〇	二、八二九	五、六〇九	一、一五二	一、五九一
新竹州	タイヤル	八三	二、一四九	五、六七五	五、九〇八	一一、五八三	二、四四四	二、六一二
	サイセット	一三	二一〇	六、三三五	六、五三三	一三、八六八	三、二九五	三、九二〇
	計	九三	二、三五九	一、九二一	一、八三五	三、七五六	一、七九九	一、八三二
臺中州	タイヤル	四九	一、六七三	三、六一八	三、五六五	七、一八三	一、六九八	一、九一四
	ブヌン	五八	九二一	四、三五五	四、三八三	八、七三八	二、〇三四	二、三〇九
	オウ	二	一八	八四	八〇	一六四	四二	四二
	計	一〇九	二、六一四	八、〇七七	八、〇〇八	一六、〇八五	三、七七四	四、二六五
臺南州	ブヌン	一一	六一	二四五	二四四	四八九	一一四	一三〇
	オウ	六	一三六	七五五	六六三	一、四一八	三四三	三八九
	計	一七	一九七	七九九	七〇七	一、五〇六	三五七	四一九
高雄州	ブヌン	一一五	五三一	二、一五八	二、一四七	四、三〇五	一、〇一四	一、一四二
	ツオウ	一〇三	五三一	二、一四七	二、〇九八	四、二四五	一、〇一四	一、一四二
	計	二一九	一〇八四	四、三〇五	四、二四五	八、五五〇	二、〇二八	二、二八四
臺東廳	ブヌン	一〇五	五三七	二、一四七	二、一四七	四、二九四	一、〇一四	一、一四二
	ツオウ	一〇三	五三一	二、一四七	二、〇九八	四、二四五	一、〇一四	一、一四二
	計	二一九	一〇八四	四、三〇五	四、二四五	八、五五〇	二、〇二八	二、二八四
花蓮港廳	タイヤル	一四	六四二	一、三四九	一、三四八	二、六九七	六二四	七一二
	ブヌン	一三	六四二	一、三四九	一、三四八	二、六九七	六二四	七一二
	アミ	一	三	一〇	一〇	二〇	四	四
	計	二八	一二八四	二、七〇八	二、六九六	五、四〇四	一、二五二	一、四二八
總計	タイヤル	一三五	三、九二五	八、一四九	八、四二五	一六、五七四	三、八二一	四、三五一
	サイセットヤミ	一三	二一〇	六、三三五	六、五三三	一三、八六八	三、二九五	三、九二〇
	ブヌンウンワ	一三五	五三一	二、一四七	二、一四七	四、二九四	一、〇一四	一、一四二
	ツオウンワ	一〇三	五三一	二、一四七	二、〇九八	四、二四五	一、〇一四	一、一四二
	タイヤルミ	一四	六四二	一、三四九	一、三四八	二、六九七	六二四	七一二
	ブヌンミ	一三	六四二	一、三四九	一、三四八	二、六九七	六二四	七一二
	アミミ	一	三	一〇	一〇	二〇	四	四
	計	四〇九	一六、〇二八	三四、〇五一	三四、〇〇四	六八、〇五五	一六、〇二八	一八、二一九

◇蕃族人口增減比較表

種族別	昭和二年末	昭和三年末	增減（※印は減）
タイヤル	三、九二五	三、九二五	※
サイセットヤミ	一、二九五	一、二六五	※ 一四
ブヌンウンワ	一、八五二	一、八〇二	※ 五一
ツオウンワ	二、〇八	二、〇二七	※ 五一
タイヤルミ	三四九	三四九	
ブヌンミ	三四九	三四九	
アミミ	四	四	
計	一三九	一三九	

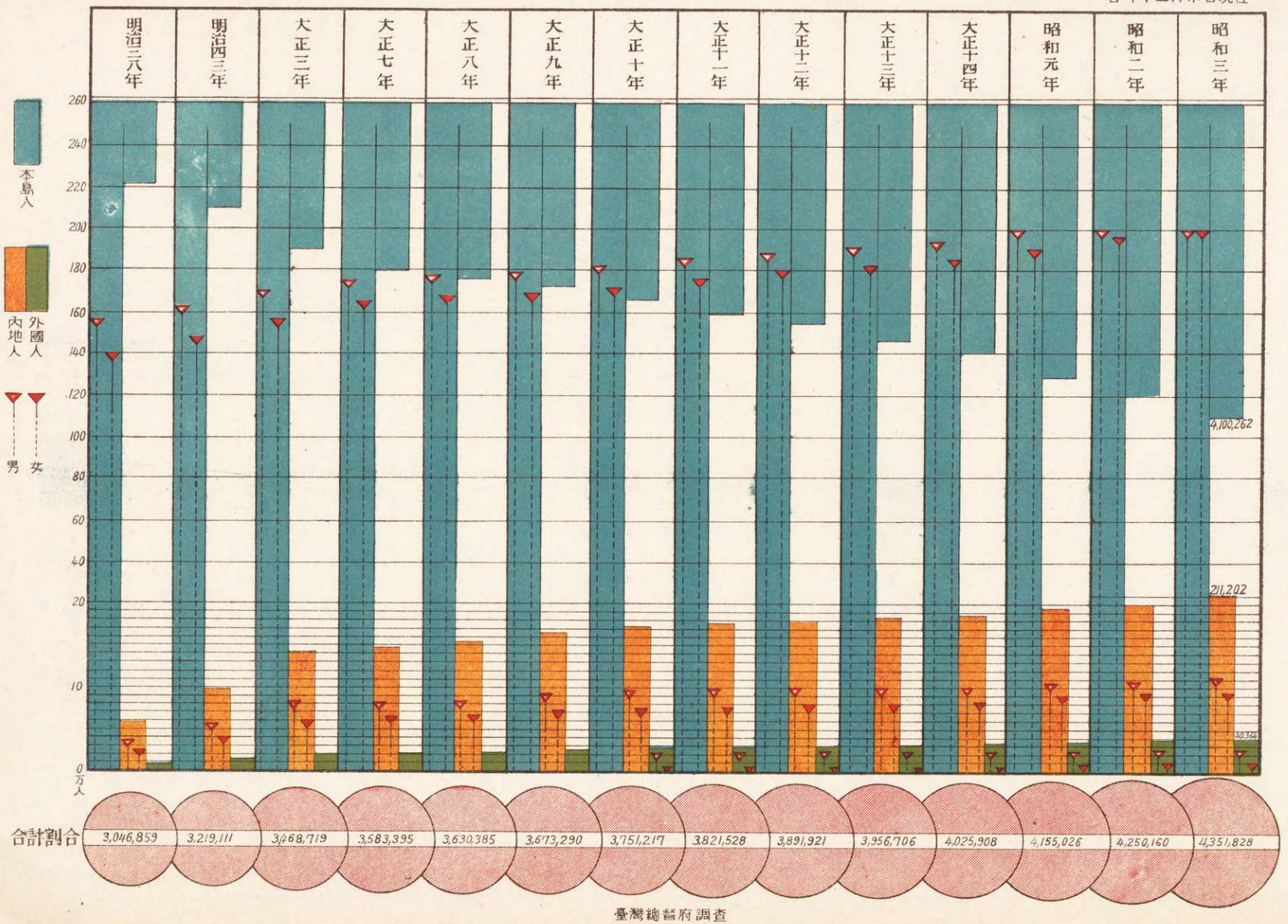
種族別	昭和二年末	昭和三年末	增減（※印は減）
パイワン	四一、三四九	四一、三四四	※ 五
アミ	四一、六二一	四一、六七〇	※ 四九
ヤミ	一三九、三二七	一三九、二三四	※ 九三

◇人口累年比較表（各年十二月末日現在）

年別	體性	內地人	本島人	外國人	計
明治三十八年	男	三五、三三	一、三七〇、三九	七、七九	一、三九四、一四
	女	三三、六五五	一、四〇八、七九九	五、四〇四	一、四四七、八六五
同四十三年	男	五八、五八〇	一、六六一、三五八	一、四四九、八五五	一、七六九、八九三
	女	五九、四九六	一、七一九、八五五	一、三三、三四八	一、八一四、七一四
大正三年	女	八三、三九一	一、七一八、八三五	一、四四九、八五五	一、八四九、〇九一
	男	八一、五五一	一、七一八、八三五	一、三三、三四八	一、八三三、二四四
同七年	男	八一、七二一	一、七七五、四九八	一、四四九、八五五	一、八七九、〇七四
	女	七九、〇九五	一、七七五、四九八	一、三三、三四八	一、八八七、九二六
同八年	男	八三、九八八	一、七七五、四九八	一、四四九、八五五	一、八七九、〇七四
	女	八一、三五六	一、七七五、四九八	一、三三、三四八	一、八八七、九二六
同九年	男	九〇、〇七七	一、七七五、四九八	一、四四九、八五五	一、八七九、〇七四
	女	八七、六五二	一、七七五、四九八	一、三三、三四八	一、八八七、九二六
同十年	男	九九、一二八	一、八五三、八六四	一、四四九、八五五	一、九七四、八一四
	女	九七、八五三	一、八四六、一三四	一、三三、三四八	一、九八四、七一四
大正十一年	女	一〇〇、八六一	一、八八五、七五	一、四四九、八五五	一、九八四、七一四
	男	一〇〇、九六一	一、八八五、七五	一、三三、三四八	一、九八四、七一四
同十二年	男	一〇一、二三七	一、九〇二、六五六	一、四四九、八五五	一、九八四、七一四
	女	一〇一、一三七	一、九〇二、六五六	一、三三、三四八	一、九八四、七一四
同十三年	女	一〇二、一三七	一、九〇二、六五六	一、四四九、八五五	一、九八四、七一四
	男	一〇二、一三七	一、九〇二、六五六	一、三三、三四八	一、九八四、七一四
同十四年	男	一〇二、一三七	一、九〇二、六五六	一、四四九、八五五	一、九八四、七一四
	女	一〇二、一三七	一、九〇二、六五六	一、三三、三四八	一、九八四、七一四
昭和元年	女	一〇二、一三七	一、九〇二、六五六	一、四四九、八五五	一、九八四、七一四
	男	一〇二、一三七	一、九〇二、六五六	一、三三、三四八	一、九八四、七一四
同二年	男	一〇二、一三七	一、九〇二、六五六	一、四四九、八五五	一、九八四、七一四
	女	一〇二、一三七	一、九〇二、六五六	一、三三、三四八	一、九八四、七一四
同三年	女	一〇二、一三七	一、九〇二、六五六	一、四四九、八五五	一、九八四、七一四
	男	一〇二、一三七	一、九〇二、六五六	一、三三、三四八	一、九八四、七一四

臺灣人口累年比較表

各年十二月末日現在



臺灣總督府調查

氣象

【測候所と觀測所】 現在測候所は、臺北、臺中、臺南、恒春、澎湖島、臺東、花蓮港等に設けられ、他に島内九箇所の燈臺でも氣象の觀測をなし、尙ほ雨量觀測所は内務局所屬のもの百三箇所と其の他の各種事業に屬するもの四十五箇所とがある。

【氣象電報】 氣象に關する電報は、島内では各測候所と基隆の燈臺から、島外では石垣島、那覇、名瀬、鹿兒島、長崎から、毎日午前五時と十一時と午後五時との三回宛これを受け、近海航行の船舶からは無線電信で毎日數回、對岸支那の福州尖石島東洋電信擴張會社からは毎日二回宛、又た昭和二年度からは中央氣象臺の發する毎日午前の全國氣象實況報と、氣象無線通報の一部とを受ける事になつた。以上は單に受信であるが、他に海外氣象臺と電報の交換をするものには、上海の徐家滙と香港及び馬尼拉とが海底線に依り、青島測候所とは無線に依つて氣象の交換をせられて居る。

【豫報と警報】 臺北測候所は各地方から集つて來る右の電報に基いて天氣圖を作り、全島を分ちて北部、南部東海岸、南部西海岸の三氣象區となし、正午から午後三時迄の間に各區へ夫れ〴〵の天氣豫報を發し、暴風襲來の虞ある場合は隨時警報を發すれば、地方の測候所では更に右の豫報に基いて其の地方の豫報を發し、警報の場合は直ちに之れを揭示せり。又た前年來近海航路に在る船舶の爲めに、臺北測候所から發する警報及び豫報を基隆無線電信局から六十メートルの電波長で放送することになつて居る。

【警報信號標】 臺北測候所から警報を受けると、各信號所に於ては直ちに信號を揭示して警戒を促がす。其の信號の種類には左の二種ある。

赤　球（夜間は紅燈一箇）暴風の爲め天候不穩であるか、又は險惡の虞ある時

赤四飜（夜間は紅燈横列二箇）暴風襲來し特に天候險惡の度ある時

信號所の所在地は、臺北州では臺北・基隆・淡水・頭圍・蘇澳、新竹州では後龍、臺中州では塩葛埔・鹿港、臺南州では下湖口・東石港・布袋・安平、高雄州では高雄・東港・鵝鑾鼻、花蓮港廳では花蓮港、臺東廳では臺東、澎湖廳では澎湖の十八箇所である。

其の他各測候所では地震計を備へて地震を觀測し、燈臺や雨量觀測所で地震を感じた場合は、直に臺北測候所に報告せしめ、又た同所では時の觀測を行うて毎日の正午全島の郵便局、鐵道部等に通報し、海軍水路部の委囑を受けて磁氣偏角の觀測をし、以上諸調査の結果は隨時報告物として刊行されるのみならず、臺灣人が舊慣に依つて使用する民曆をも編製さる。

【溫　度】 北回歸線は臺灣島の中央を橫斷し熱帶に跨るから内地に比べると夏季は長く冬季は短いが、其の最高氣溫に至ては特に内地より甚だしく高くない、それは別圖に徵しても明かである。之れに反し冬季は頗る暖かで、高山でなければ降雪なく、偶々霜を見る事もあるがそれは極めて稀で、結氷は領臺以來僅か二回に過ぎず。而かも之とて中部以北のことで、南下するに隨つて氣溫は益々高く、極南の恒春地方では、冬の最中でも其の名の如く恒に春のやうな好氣候である。（別項圖表參照）

【雨　量】 全島を通じて一年の平均雨量は二、四二七粍で、島の南北に依つて降雨期が違ふ。即ち北部は十月から翌年三月迄の冬季六箇月は、北東の季節風の影響を被り、恰も内地に於ける梅雨のやうで、其の量は基隆附近が最も多い、之れ同港が雨の港と稱せらるゝ所以である。一年間の總量の約七割は此の期間の降雨で、同港附近の火燒寮では一年實に六、七〇〇粍の降雨があり全島第一と稱せられる。

然るに南部の雨期は五月から九月に至る五箇月で、降雨の性質も自ら北部の漸々たる細雨と違ひ、雷雨又は暴風に伴ふものが多く、短時間に驚くべき多量を降す。阿里山では曾て一箇月に二、八〇〇粍、僅か一日に一、〇三〇粍も降つて居る、斯の如きは氣象界でも珍らしい事である。南部の雨期五箇月間の雨量は全年の約八割を占め、阿里山の年量三、九二四粍を以て最も多量とされ、尙北部の火燒寮の年量に比すれば其の約六割に過ぎぬ。而かも其の狀は沛然として盆を覆へすが如く、隨つて降雨時間の短かい事は到底北部多季の比ではない。今基隆と臺南との日照時數を比較すれば次の通りである。

基　隆	一月一八％	七月六〇％	七月は一月の三倍强
臺　南	同　五八％	同　五九％	七月と一月略ぼ同じ

又た全島中で最も降雨の少い地方は新竹、臺中、臺南の各州に於ける海濱と澎湖島であつて、就中澎湖列島の漁翁島の如きは、一年間僅かに九八八粍に滿たざる少量である。

【冬季と夏季】 以上の如く冬季と夏季とは、地の南北に依つて天候上に著しく相違がある。北部の冬季は前述の季節風に逐はれ來る多量の水蒸氣が、先づ其の山嶽に觸れ連日の雨降となり、漸次南へ向ふに從ひ水蒸氣の濃度を減じ、臺中以南に至つては北部と反對に却つて乾燥期たるの實が現はれて居る。

季節風の强い時に海は荒れ、東海岸の花蓮港、臺東などは船舶の往來寄港にも難く、海上から市街を望み乍ら空しく通過することさへある。然らば北東部方面の冬季の天候は始終さうかと云ふに必ずしもさうではない。偶々支那、朝鮮等の方面を低氣壓が通過する場合季節風は全く消えて基隆一帶の地方でも、内地の春のやうな天氣となる場合もある。

四月から九月迄の夏季中年間は暴風雨の襲來がない限り、北部は勿論、南部も亦上述の始末で、天候概して平穩、盛夏に於ける南方の季節風と云つても、決して冬季北東の其れの比ではない。

【暴　風】 颱風と稱する熱帶暴風の進路に當る臺灣島では、概ね毎年其の襲來を受け往々非常な大損害を蒙ることがある。明治三十年から昭和三年迄三十二箇年間に臺灣本島に多少なりとも損害を與へた暴風は實に七十七回、即ち平均一年に二回强となり、最も多かつたのは大正三年の七回で、明治三十六年の六回之れに亞ぎ、明治四十年と大正五年とは皆無、明治四十一年と大正四年の兩年も極めて輕微なもの一回に過ぎず。其の襲來を月別として歩合を求むると左の如く八月に於て最も多きを見るのである。

回數	五月	六月	七月	八月	九月	十月	計
	一	五	一八	三〇	一六	七	七七
歩合	一％	七％	二三％	三八％	二二％	九％	一〇〇％

圖表對照統計

◇平均氣溫各地比較表（攝氏、※は氷點以下）

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
臺北	一五・三	一四・七	一七・〇	二〇・六	二四・〇	二六・六	二八・一	二八・〇	二六・一	二三・九	一九・七	一六・六	二一・六
基隆	一五・六	一四・九	一六・六	二〇・一	二三・三	二六・四	二七・八	二七・七	二六・三	二三・二	二〇・〇	一七・〇	二一・六
臺中	一五・七	一五・四	一八・三	二一・九	二五・〇	二六・七	二七・六	二七・三	二六・三	二三・七	二〇・三	一七・一	二一・一
花蓮港	一七・五	一七・三	一九・一	二一・一	二四・五	二七・一	二七・一	二七・〇	二五・八	二三・三	二〇・五	一七・九	二一・三
臺南	一七・〇	一六・八	一九・七	二二・二	二六・〇	二七・三	二七・四	二七・四	二六・九	二四・七	二一・五	一八・三	二二・〇
臺東	一九・〇	一八・八	二〇・七	二三・三	二六・一	二七・五	二七・四	二七・三	二六・六	二四・三	二一・八	一九・八	二三・四
恒春	二〇・三	二〇・三	二二・三	二四・五	二六・三	二七・三	二七・一	二七・一	二六・六	二四・三	二二・一	二〇・三	二三・五
澎湖	一六・三	一七・六	二〇・三	二二・九	二五・八	二七・九	二七・九	二七・九	二七・四	二五・二	二二・四	一九・五	二三・五
長崎	五・八	五・八	九・一	一四・二	一七・八	二一・四	二四・九	二四・五	二一・四	一七・〇	一二・七	八・〇	一五・二
下ノ關	五・四	五・三	八・一	一三・〇	一六・九	二一・三	二四・五	二四・〇	二一・〇	一六・五	一二・六	八・〇	一五・〇
神戸	四・五	四・六	七・四	一二・二	一六・五	二一・五	二四・七	二四・一	二一・〇	一六・五	一二・六	八・〇	一五・〇
東京	三・〇	三・八	六・八	一一・六	一五・八	二〇・四	二三・四	二三・〇	一九・八	一五・二	一一・九	六・八	一三・九
札幌	※六・四	※五・四	※一・七	五・三	一〇・四	一四・八	一七・一	一九・〇	一四・五	九・九	四・〇	※一・〇	七・〇
大連	※五・〇	※三・五	一・九	九・二	一六・一	二〇・三	二三・五	二三・〇	一九・八	一三・七	七・二	※一・〇	一〇・二
大泊	※四・六	※一・九	※三・一	※一・〇	※五・二	※一・〇	※一・〇	※一・〇	※一・〇	※五・二	※一・〇	※六・八	※一・九
青島	※一・三	※一・〇	※五・九	※一・〇	※五・五	※一・〇	※一・〇	※一・〇	※一・〇	※五・五	※一・〇	※六・八	※一・九
大正	一七・〇	一六・六	一八・三	二一・九	二五・〇	二六・七	二七・六	二七・三	二六・三	二三・二	二〇・一	一七・〇	二一・一
馬尼拉	二五・〇	二五・五	二六・八	二八・四	二八・六	二七・九	二七・九	二七・八	二七・六	二六・八	二五・三	二三・九	二六・八
香港	一五・七	一五・五	一七・三	二一・二	二四・八	二六・三	二七・三	二七・八	二六・九	二四・八	二一・六	一八・九	二三・三

◇各地氣溫、濕度、雨量及風速度

（氣溫平均最高、最低は既往各年中の最高又は最低極の平均とす）

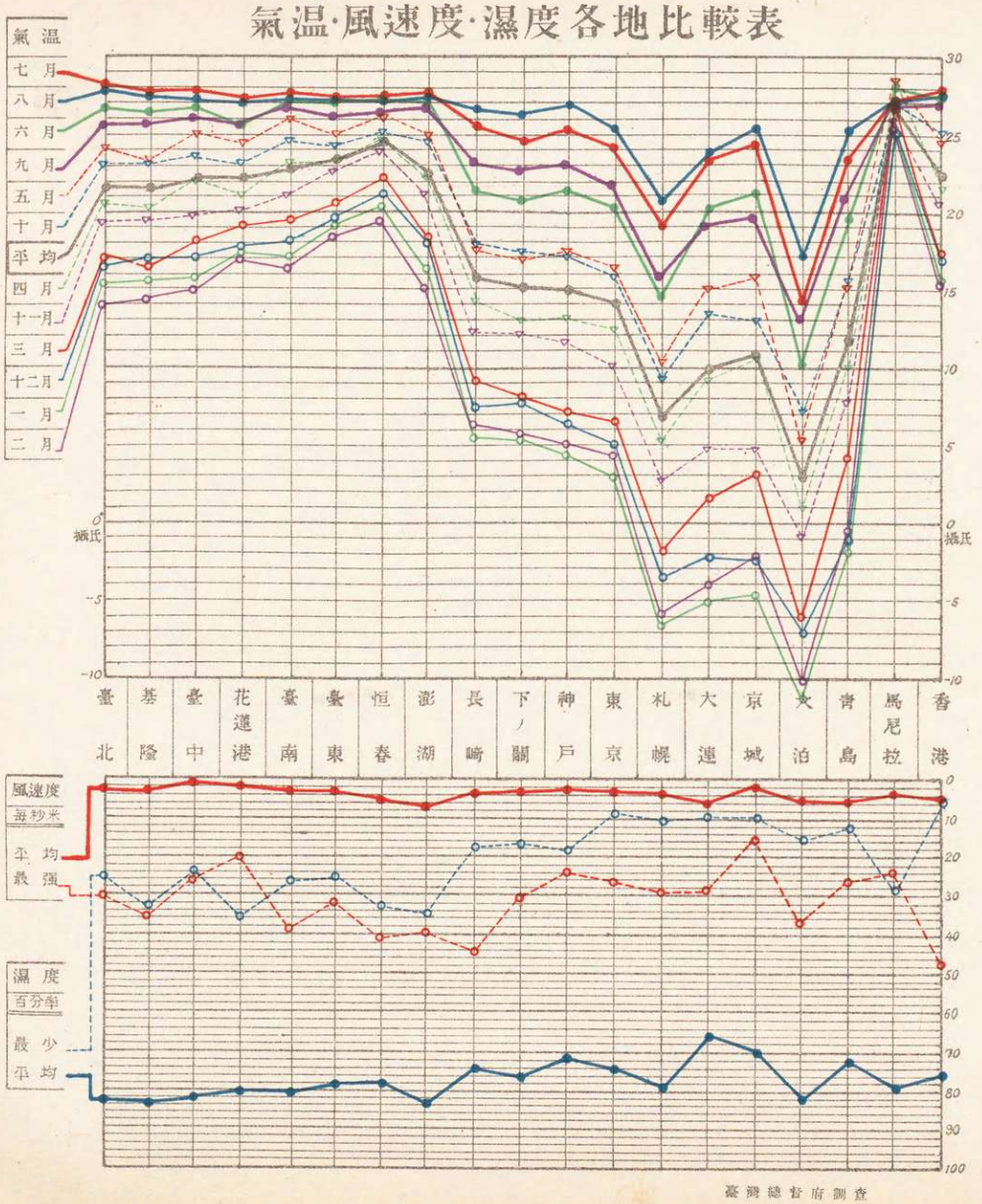
地名	溫度 百分率 平均	溫度 百分率 最少	雨量（粍） 一日最多	風速度（每秒米） 平均	風速度（每秒米） 最強 速度	風速度（每秒米） 最強 一方向
臺北	八三	七	八三・三	三・三	三七・七	東
基隆	八三	三	二四〇・〇	三・六	二七・七	東南々
臺中	八二	三	二二〇・〇	三・三	二八・八	北々西
花蓮港	八〇	五	四五五・八	四・七	二七・九	北
臺南	七八	五	二八四・九	三・七	二七・五	南西
臺東	七九	五	四五・五	二・八	二五・〇	北
恒春	八二	五	二九五・五	四・三	三〇・〇	北
澎湖	八二	七	二四三・八	三・七	三〇・〇	西南西
長崎	八二	七	二二・七	三・七	二四・八	東
下ノ關	八二	六	三六・七	三・三	二五・〇	東

地名	溫度 百分率 平均	溫度 百分率 最少	雨量（粍） 一日最多	風速度（每秒米） 平均	風速度（每秒米） 最強 速度	風速度（每秒米） 最強 一方向
神戸	七二	一七	一九九・四	三・三	三七・七	北
東京	七四	八	一九二・七	二・六	二七・七	東南々
札幌	七九	一〇	一三二・五	三・三	二八・八	北々西
大連	六六	九	八九・六	四・七	二七・九	北
青島	七〇	九	三五四・七	一・九	一五・五	南西
大正	七八	五	一八二・〇	四・三	二七・一	北
馬尼拉	七九	三	三三六・〇	三・五	二八・三	西南西
香港	七七	五	三三〇・六	四・一	二八・五	東

◇島内各地平均雨量（粍）

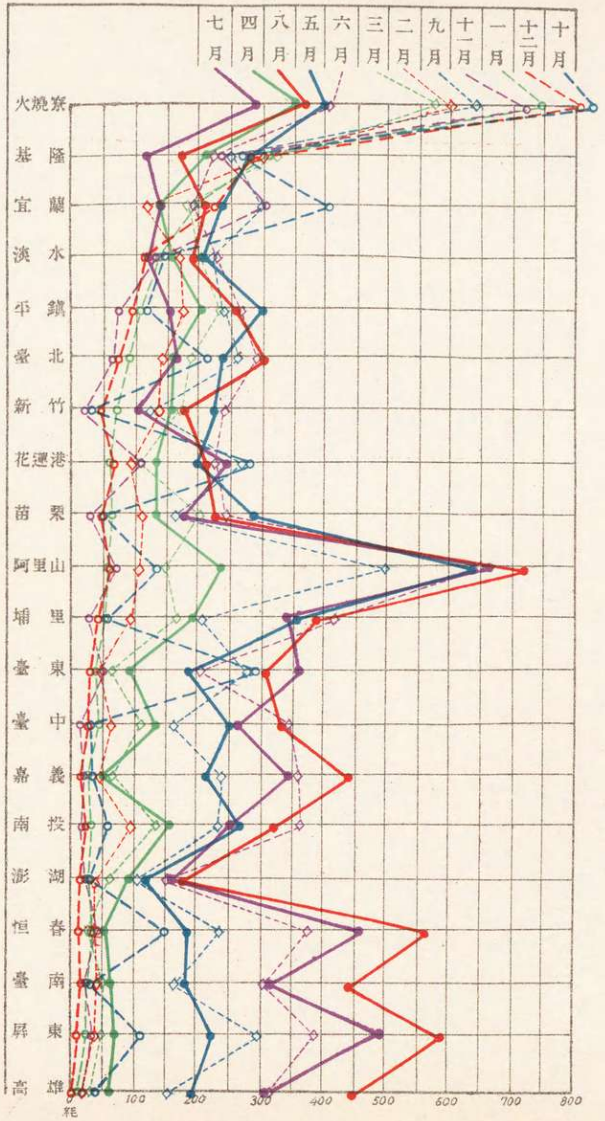
地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
基隆	二九九	二八五	三一三	二三五	二〇〇	二三八	一三三	一三五	二一四	二一七	二四一	二八五	二、九五七
火燒寮	一四一	一〇五	一七五	一三五	一〇〇	一四一	一四五	一四四	一四八	一四一	一七八	八五	一、七〇五
宜蘭	一四七	一一七	一九五	一七五	一三〇	一四七	一四七	一四八	一四九	一四七	一五五	一三三	一、五五四
臺北	一四七	一一四	一九五	一七五	一三〇	一四七	一四七	一四八	一四九	一四七	一五五	一三三	一、五五四
淡水	一四三	一一三	一九六	一七六	一三〇	一四七	一四七	一四八	一四九	一四七	一五五	一三三	一、五五四
鎮平	一〇七	一〇六	一三四	一三三	一〇〇	一三三	一三三	一三四	一三四	一三三	一四〇	一一三	一、三〇三
竹新	一〇六	一〇〇	一三一	一三〇	一〇〇	一三一	一三一	一三一	一三一	一三〇	一三五	一一〇	一、二八九
苗栗	一〇六	一〇〇	一三一	一三〇	一〇〇	一三一	一三一	一三一	一三一	一三〇	一三五	一一〇	一、二八九
臺中	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四
埔里	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四
臺投	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四
嘉義	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四
臺南	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四
高雄	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四
屏東	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四
恒春	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四
臺東	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四
花蓮港	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四
澎湖	一〇五	一〇〇	一三〇	一二九	九九	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一二九	一三四	一一〇	一、二八四

氣温·風速度·濕度各地比較表



臺灣總督府調查

各地平均雨量



■財政

【歳計】臺灣總督府特別會計は明治三十年度を以て開始されたもので、爾來同四十二年度迄引續き、臺灣の收入と一般會計の補足とを以て維持經營さるべき筈であつた、然るに其の後一般會計に於ける歳計の都合と、臺灣の歳入が次第に順調に趨つたため、三十八年からは全く國庫の補足を受けず獨立し得ることゝなつたのみならず、更に母國會計に對し、或は關稅の一半を繰入れ或は內地に於て消費する砂糖に對する消費稅の全部を提供する等、母國財政の爲めに多大の貢獻を爲しつゝあるのである。

而して昭和四年度豫算を明治三十年度及び明治三十八年度決算額と對比すると、前者に對しては歳入に於て十一・八倍歳出に於て十二倍、後者に對しては歳入に於て四・八倍歳出に於て六・一倍を示してゐる。收入の主なるものは官業收入と租稅とであるが、左に歳入歳出と、國庫の補足を受けた時代の所謂臺灣經費補充金と現在の繼續費とを表示することゝする。

【公債】明治三十二年三月中臺灣事業公債法の制定以來、種々なる變遷を經過せし後、大正十三年度以降は財界の狀況と事業の緊縮とに依り、公債の募集を一時打切られたるが、昭和元年度に於ては嘉南大圳工事費補助增額等のため之れが財源として三百萬圓を特に發行し、昭和二年度に於ては縱貫鐵道複線其の他の工事費及び二水——外車埕間鐵道買收等の爲め、九百三十三萬一千四百圓發行せられ、而して昭和四年度に於ては更に臺陽鐵道買收の關係上百七十萬四千五百二十五圓發行された。公債發行高と借入金並に其の償還高は別表の如くである。

【國稅】臺灣に施行する國稅は、地租、所得稅、鑛區稅、登錄稅、臺灣銀行券發行稅、輸入稅、噸稅、製茶稅、砂糖消費稅、骨牌稅、織物消費稅、酒精稅、印紙稅等である。

【地租】昭和四年一月一日現在の地租額は田三百八十萬八千八百八十七圓、畑百二十一萬七千七百八十三圓、養魚池四萬千八百八十三圓、建物敷地五十三萬三千二百四十七圓、年**五百六十萬千八百二圓**である。

【所得稅】昭和三年度の稅額は第一種百三萬八百九十五圓、第二種十八萬七千六百八十二圓、第三種百二十八萬三千九百八十二圓、計**二百五十萬二千五百五十九圓**である。

【鑛區稅】明治二十九年より鑛區一千坪毎に一箇年、(一)石炭、石油、硫黃、砂錫、砂鐵は一圓、(二)金鑛、砂金、其の他の鑛物は二圓の稅金を課することゝした。然るに明治三十九年に至り之れを改め、鑛區一千坪毎に毎年金鑛と砂金は各々二圓、(昭和二年分より一圓に改正)其の他の鑛物は一圓として今日に至つたので昭和三年度の調定額は**十九萬九千百五十圓**である。

【登錄稅】明治三十二年勅令を以て登錄稅法の一部を施行されたが、其の內容は甚だ複雜であるから玆には之を省略する。

【臺灣銀行券發行稅】明治三十年法律臺灣銀行法の規定に依り、保證準備發行制限高二千萬圓を超過して銀行券の保證準備發行を爲したる額に對し、年五分を下らざる課稅を爲すものであつて、課稅率はその都度大藏大臣之を指定することゝなつて居る。

【輸入稅】收入の經過を略記せば、大正元年の收入は二百七十餘萬圓なりしが大正二年からは漸次下降し、大正五年の如きは歐洲戰亂の影響もあり百二十八萬餘圓に激減した。然し大正六、七年からは米及び爪哇糖の輸入增加し、爲めに大正八年は四百七十餘萬圓と云ふ空前の巨額に上つた。大正九年、十年は依然四百萬圓臺を持續したけれども、其後は輸入糖其他の減少に依り三百萬圓臺に降り、十三年の如きは三月迄木材、小麥、大豆等震災關係の免稅等もあつて二百六十餘萬圓に激減した。大正十四年は三百十餘萬圓に盛返し、同十五年、昭和元年は米、砂糖の增入及び小麥の增稅等に主因して著しく增加し四百七十萬圓に上つたが、昭和二年は主として米穀法に依る米及び籾の輸入稅免除の爲め減じて三百九十五萬圓に降り、同三年は幾分增加して**四百一萬餘圓**となつた。

【噸稅】昭和二年には入港船舶二百六十五萬一千噸、噸稅七萬四千圓、同二年は入港船舶二百六十七萬五千噸、噸稅七萬九千圓と云ふ領臺以來のレコードを作りしが、同三年は日貨排斥に依る對支貿易不振等の關係に依り入港船舶二百四十一萬九千噸に減少し、噸稅も亦七萬九百圓に減少するに至つた。

【製茶稅】製茶稅は明治三十年一月一日から施行し來つたもので、百斤二圓四十錢の稅率である。大部分は島外に搬出せらるゝところから、便宜上稅關內で徵稅する。其の課稅額は年々四、五十萬圓であつたが、大正九年に至り、烏龍茶が其の主要輸出先なる米國財界の不況の影響を被り大に輸出額を減じた結果、稅額も二十萬圓に減退した。然し彼地の市況も漸次恢復して輸出を促進したので、同十二年以降は三十九萬圓に盛返し、大正十五年、昭和元年には包種茶が相變らず好況で四十一萬圓に上つたが、昭和二年は包種茶の輸出不振の爲四十萬五千圓に降り、昭和三年は前年來の輸出不振と天候不良に基く不作の爲め三十四萬七千圓に減少した。

【砂糖消費稅】領臺以來幾多の消長を經過したりしが、明治四十一年に至り稅率改正の結果三百五十二萬圓の收入を得、四十二年度からは內地精製糖の原料として我が粗製糖の無稅供給を開始せるに拘らず、同年度は五百四十六萬七千餘圓に躍進し、四十三年度には俄然一躍**一千二百十一萬七千餘圓**のレコードを作るに至つた。然るに四十四年以後は製糖の減額原料糖の移出額を增加せるなどの關係から、漸次其稅額を減じ、四十四年度は辛くも一千萬圓臺を維持せしが大正元年には七百萬圓臺に下り、更に二年度には五百萬圓臺に落下するの已むを得ざるに至つた。而かも三年度以後は內地に於て消費する砂糖は凡べて內地に於て徵稅する事となつたので臺灣での徵稅は僅に島內消費のみに局限され頓に收入を減じ、僅かに二百八十萬圓强となつたのである。

【骨牌稅】明治三十五年七月一日より實施、稅率は骨牌一組毎に二十錢で、包裏に收入印紙を貼用させ、其の製造業者には亦製造場一箇所毎に免許料年額六十圓を納付せしめて居たが、十五年四月より免許料の制度廢止せられ稅率は麻雀には一組三圓、其の他は五十錢に改められた。

【織物消費稅】明治三十七年三月の非常特別稅法中の毛織物消費稅の實施に始まり、後ち其の他の織物にも及ぼしたが四十三年四月一日からは織物消費稅法を勅令にて本島にも施行し今日に至つた。其の稅率は大正十五年三月迄は劃一的に價格の一割であつたが、四月一日より綿織物及び綿織物と看做される織物は課稅せざる事に改められた。大部分は輸入織物であつて大正十一年度以前は年々の收入二十萬圓以下であつたが、大正十二年度は輸入稅免除の關係上三十萬圓餘の收入があり、大正十四年度には二十萬圓に減少し、昭和元年度は稅法改正の爲め九萬二千圓同三年度は五萬五千圓に激減した。

【印紙稅】明治四十一年六月の臺灣印紙稅規則に依て印紙稅法を施行、大正十二年一月一日から勅令を以て施行することに改められた。其の稅額は的確な算定の資料は得難いが、從來大約三十五萬圓內外の見當であつたが、昭和二年三月に稅法改正が行はれた爲めに從前に比し約二割內外の減收となる見込である。

【酒精稅】大正十一年酒類專賣の實施と同時に酒精令が施行せられ、島內に於て消費する酒精は政府の專賣に屬した。酒精分九十度以上の酒精及び酒精含有飲料の製造は總て從來と變ることなく、民業の儘であるが爲め、各製糖會社は依然糖蜜を原料とし繼續して製造してゐる。大正十五年四月から稅率が引上げられたのと其の他の事情で昭和元年度は頓に增收となつたが二年度以降は略ぼ平常に復した樣である。

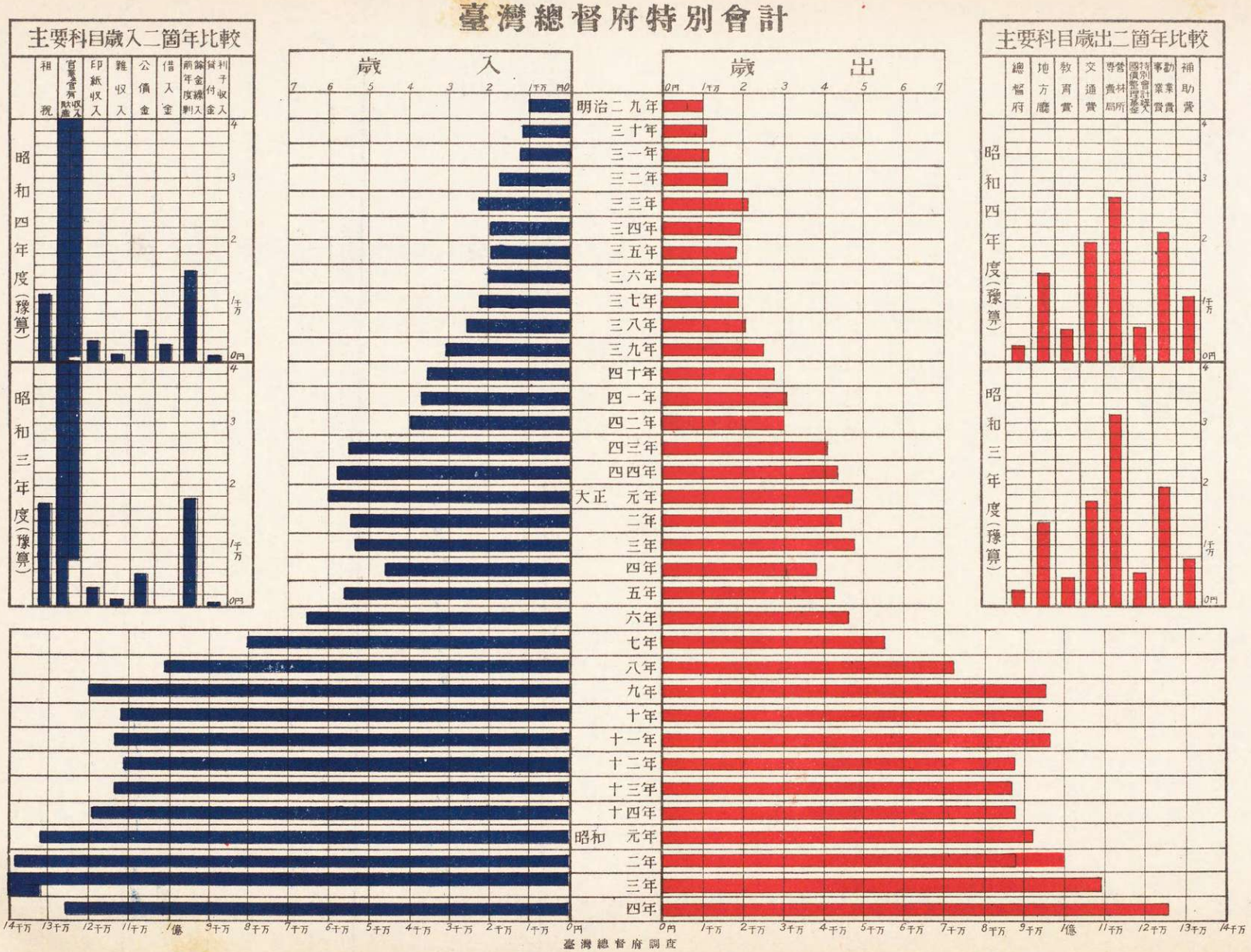
圖表對照統計

◇臺灣總督府特別會計歲入及歲出

年次	歲入				歲出			
	經常	臨時	合計		經常	臨時	合計	
明治二十九年	二、六四一、二八	七、〇七七、九二	九、六五二、〇九	圓	五、九一三、二四	三、七六八、八五	九、六五二、〇九	圓
同三十年	五、三五、八九	五、九七七、三六	一一、二七、八五		七、七七、九六	三、七六、八五	一一、二七、八五	
同三十一年	七四九、六五一	四、七八、三一〇	一二、三三、四六		八、〇〇八、七九	四、七六、〇八九	一二、三三、四六	
同三十二年	一、三五、八五一	七、三六、九六	一七、四四、一七		一〇、三四三、七四	六、〇八、八九	一六、四四、一七	
同三十三年	一、三〇三、三五〇	七、一四、一七	二〇、四七、五二		一〇、三四三、四一〇	九、四四三、一〇三	二〇、四七、五二	
同三十四年	一、七四、六七三	八、〇五一、六五九	二五、七九、七二		一一、八三七、〇三五	七、五六五、六六三	二五、七九、七二	
同三十五年	一、八七、八五三	六、三〇、七三五	二五、一〇、五六		一一、九七七、〇四五	七、四三四、〇〇〇	二五、一〇、五六	
同三十六年	一三、三九六、〇〇七	七、六四一、三五五	二〇、九三八、三五二		一一、三三八、一二五	六、六五三、〇三五	二〇、九三八、三五二	
同三十七年	一六、一七〇、三三五	六、一六三、七八〇	二三、三三三、一二五		一四、九五二、一二五	五、九四九、〇七〇	二〇、九〇二、一九五	
同三十八年	二一、六九九、九五八	三、七四二、七二七	二五、四四一、六八五		一五、二四九、六二三	五、一九二、〇六二	二一、四四一、六八五	
同三十九年	三五、六五六、六三	三、〇五五、五〇一	三八、七一二、一三五		一六、八五二、七三五	五、八五九、四六五	二二、七一二、一三五	
同四十年	二八、八五五、〇一七	六、四四五、八五五	三五、三五七、八七二		一六、八三三、四五七	五、九二三、四一五	二二、七五七、八七二	
同四十一年	二六、八三三、四三七	一〇、一七三、三三五	三七、〇七六、一七二		一七、〇〇六、〇八二	六、〇七〇、〇九〇	二三、〇七六、一七二	
同四十二年	三〇、六〇六、〇八七	九、八〇三、〇三〇	三九、九七九、二〇二		一七、八三九、一七二	六、〇七〇、〇九〇	二三、九一二、二六二	
同四十三年	四一、三六四、一八三	一三、九七四、一八六	五五、三四一、〇八九		一九、七六六、三三五	七、〇五一、一七五	二六、八一七、五一〇	
同四十四年	四三、三九三、七九五	一〇、一七三、三三五	五三、五六六、一二〇		一九、九四九、三五七	七、〇五一、一七五	二六、九九九、五八五	
大正元年	四三、五三〇、九一〇	一七、七六四、九五七	六〇、二九五、八九八		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同二年	四三、三六〇、六三三	一六、〇〇一、二九	五九、三六一、六二		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同三年	四五、〇七、六一九	一四、一五六、七〇九	五九、一八三、七二八		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同四年	四八、三五〇、九三	七、二九三、〇三	五六、〇四四、一三四		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同五年	四八、〇四四、一九七	九、五五四、四〇七	五八、〇九八、二四一		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同六年	五〇、一四三、三八	一〇、一七三、三三五	六〇、三一六、三七三		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同七年	五〇、六六〇、一五〇	一〇、一七三、三三五	六〇、八三三、四八五		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同八年	五〇、二三三、八五一	一〇、一七三、三三五	六〇、四〇六、一八六		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同九年	五〇、四三八、一九六	一〇、一七三、三三五	六〇、六一一、一七七		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同十年	五一、一四三、三八	一〇、一七三、三三五	六一、三一六、三七三		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同十一年	五一、三五八、〇四五	一〇、一七三、三三五	六一、五三二、一八〇		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同十二年	五一、三五八、八九	一〇、一七三、三三五	六一、五三二、一八〇		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同十三年	五一、〇七七、三三	一〇、一七三、三三五	六一、二五〇、一〇八		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同十四年	五一、八六八、一四六	一〇、一七三、三三五	六一、四二四、一八一		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
昭和元年	五三、二三五、七五三	一〇、一七三、三三五	六三、〇八、八九		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同二年	五四、四一〇、八三〇	一〇、一七三、三三五	六四、二八三、三六五		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	
同三年（豫算）	五四、三八六、九五五	一〇、一七三、三三五	六四、一四〇、八九〇		二〇、〇五七、三五三	七、〇五一、一七五	二七、〇八、五二八	

▲備考　昭和四度豫算は歲入歲出共一二六、一二五、八八一圓に決定公布せられたるも、同年七月中央政府の方針に依り整理節約の結果、歲入に於て經常部四五一、六一五圓、臨時部六、九五三、九八七圓、計七、四〇五、六〇二圓、歲出に於て經常部四五一、六一五圓、臨時部六、九五三、九八七圓、計七、四〇五、六〇二圓を何れも節約したるを以て結局歲入出共實行豫算額一一八、七二〇、二七九圓となれり。

臺灣總督府特別會計


主要科目歲入二箇年比較
相續稅
官業官有財産收入
印紙收入
雜收入
公債金
借入金
繰越金前年度剰入
貨付金元利収入
昭和四年度（豫算）
昭和三年度（豫算）
歲入
歲出
明治二九年
三十年
三一年
三二年
三三年
三四年
三五年
三六年
三七年
三八年
三九年
四十年
四一年
四二年
四三年
四四年
大正 元年
二年
三年
四年
五年
六年
七年
八年
九年
十年
十一年
十二年
十三年
十四年
昭和 元年
二年
三年
四年
主要科目歲出二箇年比較
總督府
地方廳
教育費
交通費
營林局所
特別會計繰入國債整理基金
勸業費
事業費
補助費
昭和四年度（豫算）
昭和三年度（豫算）
臺灣總督府調査

■專賣

【阿片】 阿片烟膏とは、罌粟の果殼から滲出する液汁を乾涸せしめた、阿片を溶解、濾過、煎熬等の操作を經て吸食に適する樣に精製したものである。生阿片即ち烟膏の原料は、印度産、波斯産、土耳古産等であるが現在に於ては主として波斯より輸入して居る。總督府に於ては其の吸食を絶滅する階梯として、阿片中毒に罹つた所謂癮者に限り鑑札を下附し、暫く吸食を特許せられた者である。而して阿片烟膏の現在の定價は百匁入一罐**四十圓**である。

【粉末阿片】 阿片烟膏の他に粉末阿片の賣下がある。是れ亦專賣局から地方廳へ送付し、地方廳では藥劑師、藥種商中の卸賣出願者から人選の上、卸賣特許鑑札を下附する。

【販賣數量と價格】 阿片の專賣は結局島内を擧げて阿片吸食者絶滅の域に達せしむる階梯である事は前述の通りであるが、其の效果は年と共に現はれ、吸食者の數も賣下烟膏の數量も年々減少して居る。併し上記の如く下等品の需要を減じて上等品が激增し、且つ賣下定價は四圍の事情から數次値上された爲め、販賣の總價額は是迄概して減退しなかつたが、今後は逐年減少すべく既に其の兆候は大正十年以降の成績により窺ふことが出來る。試に之を表示すると圖表の如くである。

【鹽業】 製鹽業は明治三十二年五月專賣制度を實行せらるゝことになつた。爾來本島の鹽業は面目を一新し、專賣法實施の當初鹽田面積僅に二百三甲、鹽の産額**一千八百餘萬斤**に過ぎなかつたものが、翌三十三年には六千餘萬斤に進み、既に島内の需要を充して尙餘りあるに至つた。併し專賣局に於ては當初の方針を以て銳意鹽田の改善並に擴張を補助奬勵した結果、漸次堅實なる發達を遂げ、本島主要産業の一たるの實を擧げた。斯くして昭和三年度末には鹽田面積**二千三百二十甲**となり、天日製鹽**二億四百二十萬斤**、煎熬鹽二千萬斤の年産額を得ることゝなつた。而して本島西部沿岸は製鹽適地に富んでゐるから、將來擴張の機運に際會すれば發展することは疑ひない。

【買收と供給】 製鹽業者からの買收は、日々專賣局所屬一支局(臺南)、及び出張所に於て整理し、其の價格は生産の難易と生産者の經濟狀態を參酌してあるので各地一樣ではないが現在百斤に付ては左の如くである。

上等鹽	四十一錢乃至五十五錢	中等鹽	三十六錢乃至五十二錢
下等鹽	三十錢乃至六十三錢	等外鹽	十六錢乃至五十錢
煎熬鹽	一圓四十錢		

【島外との取引】 臺灣島の製鹽地は中部以南に多い爲め、未だ交通機關の發達しなかつた、明治三十九年頃迄は北部地方では尙對岸の支那から鹽を輸入した、併し事實上南部の産鹽は明治三十三年以來、船便に依つて内地へ移出を計つてゐたが、爾來年々其の量を增し、殊に本島上等鹽は純白で品質が良好な上に價格も亦低廉であるから内地に於て煎熬鹽代用として最も歡迎せられた。内地以外の販路としては朝鮮、樺太、露領沿海州、香港、マニラ等である。移輸出希望者は當局から鹽の賣下を受け自ら移輸出をなすもので專賣局は直接移輸出をしない。尙内地及び朝鮮移出の取扱は特定人もあるが、其の他は一般に許して居る。又内地需要者を滿足せしめる爲め、大正七年安平に官營の洗滌鹽精製工場を設け、專ら天日製鹽の精製を爲し、別に大正十年から臺灣製鹽株式會社に於て煎熬鹽を製産することにし、需要の增加を促してゐる。其の年産額前者は**二千萬斤**、後者は**三千萬斤**である。

【樟腦】 明治三十二年八月專賣制度を實施せられたのである。蓋し樟腦は支那及び我内地からも産出するが、到底臺灣に於ける生産額の半にも達しない、實に臺灣産樟腦は世界需要額の大半を供給するものである。併し西紀一、八六九年、セルロイドの發明される前までは其の用途は單に藥用又は防蟲用たるに止まり、隨つて需要も少く我專賣制度實施當時を以てしても世界需要總額は約五百萬斤に過ぎなかつたが、近年歐米に於けるセルロイド工業の急激な發達を來すや、其の需要亦俄に增加し今や**一千二百萬斤**に上り、世界全需要の大半は臺灣から供給してゐるが、近時獨逸人造樟腦の活躍日覺しいものがあるので專賣局では之が對策に就き研究調査を重ね善處しつゝある。

【樟腦副産物】 再製作業中の副産物に赤油、白油、芳白油、藍色油並に芳油がある。赤油は香料(サフロール)の原料、防臭劑、驅蟲劑として多く外國に輸出し、白油は防臭、驅蟲、石鹼配合劑、其他テレビン油の代用に供せられ芳白油は白油と殆どその用途を同じうし、藍色油は防臭、驅蟲、殺菌、木材防腐及び選鑛用に用ひらる。芳油はメキシコ産リナロエ油と性分を同じうし、廣く香料界に尊重せられて居る。專賣局では是等副産物の利用に就て常に深甚の注意を拂ひ研究調査を進めつゝあるが、此の中芳油及び赤油は優秀なる香料として、品質及び産額に於ても特にその將來の發展を期待してゐる。

【煙草】 目下發賣中の煙草の種類を産地別に擧げると、内地製、外國製、臺灣製の三種で内地製は内地の專賣局から供給を受け、外國製は貿易商をして輸入せしめ、臺灣製は當初其の製造を民間に託してゐたが、大正元年以來は新式機械を用ひ專賣局に於て製造を開始し、現に十八種類を製出せり。

【販賣機關】 煙草販賣機關は煙草賣捌人及び煙草小賣人の二階級から成り、現在に於ては賣捌人七十名、小賣人七千二百二十九名であつて、人口五百八十九人に付小賣人一名、小賣人百〇三名に付き賣捌人一名の割合である。

【葉煙草の栽培】 刻煙草の原料となる葉煙草は一箇年三百萬斤内外を要するが品質の關係上多く支那産の輸入を仰ぎしも、專賣局に於て種々改良、奬勵の結果、今や支那産に劣らぬ程度のものとなり、逐年輸入を減少し、昭和三年期には支那種耕作面積七百五十四甲、産額**二百二十萬斤**に上るに至つた。又た一方には支那種以外に、兩切原料たるべき米國黃色種と、葉卷の原料たるべき種類を栽培し共に好成績を收めてゐる。

【酒】 酒の專賣制は大正十一年七月一日より實施せられたものである、爾來製造酒臺灣に行はれ來つた酒類は産地から云へば、臺灣製造のものと、内地製造の移入品と、支那及び西洋各地からの輸入品とに區別することが出來る。又た製造方法から云へば釀造したものと、蒸餾したものと、釀造又は蒸餾酒に加工再製したものとに區別される。其の内最も多量を占めて居るは米酒及び糖蜜酒並に蒸餾酒に加工した紅酒並に藥酒等の數種である。尙他に近年俄に發達した酒精がある。以上の酒類に就き大正十年度以後の製造高を圖表に示す。

【酒類の專賣】 酒類に對し酒稅を徵收をされたのは明治四十年で、爾來製造酒に造石稅を課するに至つた。其の後稅率及び徵收方法に變遷はあつたが、稅の收入は逐年增加するのみで、當初は年額五十萬圓程であつたものが、專賣實施當時に於ては**五百餘萬圓**に上り、總督府歲入の重要なものとなるに至つた。其の内容は酒精稅二百餘萬圓、飮用酒稅約三百萬圓である。

酒類專賣を實施するに至つた理由は、一は國民の保健衞生上、酒造及び酒類營業を政府の直接管理下に置くの必要からと、一は其の收入を以て財政の調節に資せんとするの趣意から愈々大正十一年七月一日から之れを決行せらるゝに至つたのである、歐米各國に於ても既に禁酒又は專賣制の實施せられたるもの勘からざるも、併し臺灣總督府管下に於けるが如く酒精含有飮料全部を網羅せる專賣法の實施は稀とする處である。

圖表對照統計

◇阿片烟膏販賣數量及價額

年次	一等阿片烟膏	二等阿片烟膏	三等阿片烟膏	計	賣下價額
明治三十五年	七四二、〇〇〇匁	三五、三四一、一〇〇匁	三四、〇五四、一〇〇匁	三四、八五九、五〇〇匁	三、〇〇八、六六四圓
同三十九年	三三、三六四、一〇〇	九、〇〇〇	一六、九六六、四〇〇	四〇、三五九、五〇〇	四、一四四、三五四
同四十三年	三一、四二八、九〇〇	—	六、三三〇、一〇〇	三七、七五九、〇〇〇	四、七四四、三五四
大正二年	三〇、三五三、八〇〇	—	四九、二〇〇	三〇、八四五、七〇〇	五、二六九、四五四
同七年	一九、〇四四、一〇〇	—	三四四、八〇〇	一九、三八八、九〇〇	六、三五〇、七六四
同八年	一六、九三一、三〇〇	—	一三六、〇〇〇	一七、〇八七、三〇〇	六、七三一、六四七
同九年	一五、一三一、一〇〇	—	一〇四、三〇〇	一五、三六、四〇〇	六、〇〇一、六六〇
同十年	一三、七四八、八〇〇	—	七二、〇〇〇	一三、八三〇、八〇〇	五、四四九、二四五
同十一年	一二、六六二、九〇〇	—	五四、〇〇〇	一二、七五〇、九〇〇	五、〇三三、八〇三
同十二年	一二、一四三、九〇〇	—	四〇、〇〇〇	一二、一八三、三〇〇	四、六三四、〇四三
同十三年	一〇、五九九、四〇〇	—	四四、三〇〇	一〇、六三三、四〇〇	四、四二三、六四〇
昭和元年	九、九五五、四〇〇	—	四三、一〇〇	九、九九八、五〇〇	四、一九三、四八七
同二年	九、九五五、四〇〇	—	一八、〇〇〇	九、九七三、四〇〇	三、九一九、九三〇
同三年	九、一八〇、四〇〇	—	—	九、一八〇、四〇〇	三、六三四、三一〇

▲備考　三等阿片烟膏は昭和二年八月より販賣を中止す

◇食鹽販賣數量及價額

年次	島內	內地	其他	計	賣上價額
明治三十七年	四七、八五二、一二七斤	二四、四三、八〇〇斤	三五〇、〇〇〇斤	二二、六三三、九三七斤	五五四、三五六圓
同四十年	四四、三六、三五〇、〇〇〇	五一、三五〇、〇〇〇	八、五〇〇、〇〇〇	一〇四、五六、五六〇	七三、三三九
同四十三年	四六、〇八〇、一四五	四六、〇八〇、〇〇〇	三五、〇八五、三五〇	一三六、〇三、一六四五	八九、六六
大正元年	四六、三七、三三	四七、三五、九五七	四、〇〇〇、〇〇〇	一〇四、九三五、一八〇	七四七、九三
同五年	四七、四七〇、六九六	一〇八、〇三、三三一	一、八三、三五〇	一五、七六、三五〇	九五、三五四
同七年	五六、六七一、二六九	一二六、三五七、八五五	二六、三五〇	一四、九五五、八八七	一〇、七五、一六四
同八年	六三、四三、二四四	一八、五六、一〇〇	四三、三五〇	一四、九五五、一六四	九九七、七八
同九年	六三、三五、八四四	八三、九〇、一四〇	一、八三、三五〇	一四、九五五、一六四	一〇、七五、一六四
同十年	六三、三三〇、四七七	九一、九四四、一〇〇	三五、八四〇、〇〇〇	一二三、六三、九三七	一〇四、五六、五六〇
同十一年	六三、九三、四七七	二三七、九三三、四七七	三五、八四〇、〇〇〇	一三六、〇三、一六四五	八九、六六
同十二年	六三、八六〇、三〇〇	二六三、八五〇、三〇〇	三五、八四〇、〇〇〇	一四四、〇三、一八〇	七四七、九三
同十三年	六三、三五、六五〇	二三五、三五五、六五八	三五、八四〇、〇〇〇	一三三、六三、九三七	一〇四、五六、五六〇
同十四年	六三、八六〇、三〇〇	二三五、三五五、六五八	三五、八四〇、〇〇〇	一三三、六三、九三七	一〇四、五六、五六〇
昭和元年	六三、八六九、〇〇〇	二三五、三五五、六五八	三五、八四〇、〇〇〇	一三三、六三、九三七	一〇四、五六、五六〇
同二年	六三、八六九、〇〇〇	二三五、三五五、六五八	三五、八四〇、〇〇〇	一三三、六三、九三七	一〇四、五六、五六〇
同三年	六三、八六九、〇〇〇	二三五、三五五、六五八	三五、八四〇、〇〇〇	一三三、六三、九三七	一〇四、五六、五六〇

◇煙草販賣價額

年次	賣上價額	年次	賣上價額
明治四十二年	三、七二二、三四〇圓	大正十二年	一〇、七五五、一五五圓
大正元年	四、五三三、八三四	同十三年	一一、〇三一、五六四
同六年	五、八一一、二四三	同十四年	一三、四五六、一四一
同八年	九、六六一、三五三	昭和元年	一三、八六八、五七七
同九年	一三、五四四、六八一	同二年	一四、九五五、六〇八
同十年	一三、五三一、八五〇	同三年	一五、八三一、三五九
同十一年	一〇、九八六、三一〇		

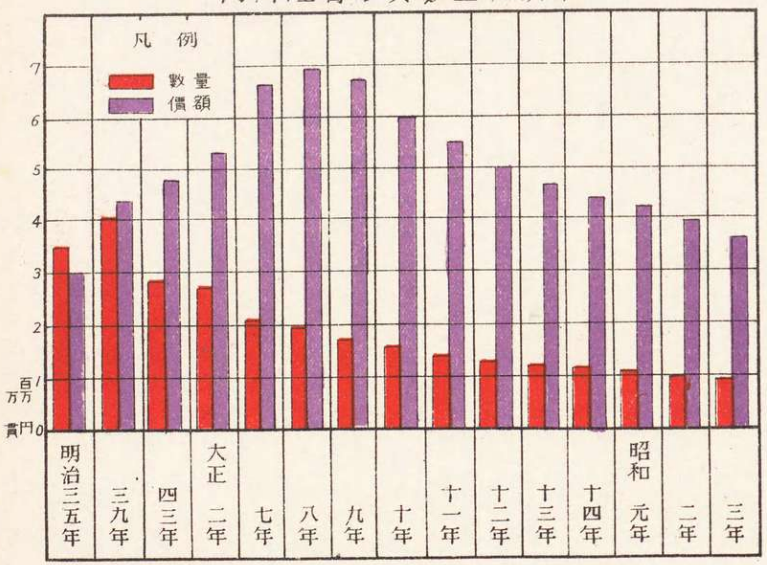
◇酒類製造高累年表

酒類	大正十年	自同十一年七月至同十二年三月	同十二年	同十三年	同十四年	昭和元年	同二年	同三年
造釀酒（清酒及其他）	五、三九九石	四、四三石	六、五七四石	八、九七三石	九、九一〇石	一二、五七八石	一一、七五八石	三一、一四四石
蒸餾酒（米酒）	一〇八、〇三四	九八、八三一	八、一八六	九三、六九八	奈四、三六一	七〇、二八六	七一、三五一	六一、八三九
蒸餾酒（糖蜜酒及其他）					三六、〇三四	三五、五一三	三四、三四六	二一、八三
酒精	七一、八三一	九〇、八〇六	一〇八、七一四	一三三、四九一	一四八、三四四	七七、〇三五	一四四、九九八	一、九〇〇
紅酒			一四、九六八	一四、九三四	一五六、八九八	三一、四四六	三三、七四〇	三六〇、九九八
再製酒（藥酒及其他）	三五、〇九三	三九、三四六	一、六九三	四、三九七	九、三八九	八、七三五	七、三五五	四二、三五五
			三、五九一	五、〇〇〇	五、六九七	四、八三五	三、六七八	六、六一〇
製造酒合計	三四一、三四八	三三四、九三五	三四、七三五	一六〇、三五三	二九一、三三五	一五九、三六八	一九九、三九〇	五三六、一〇四

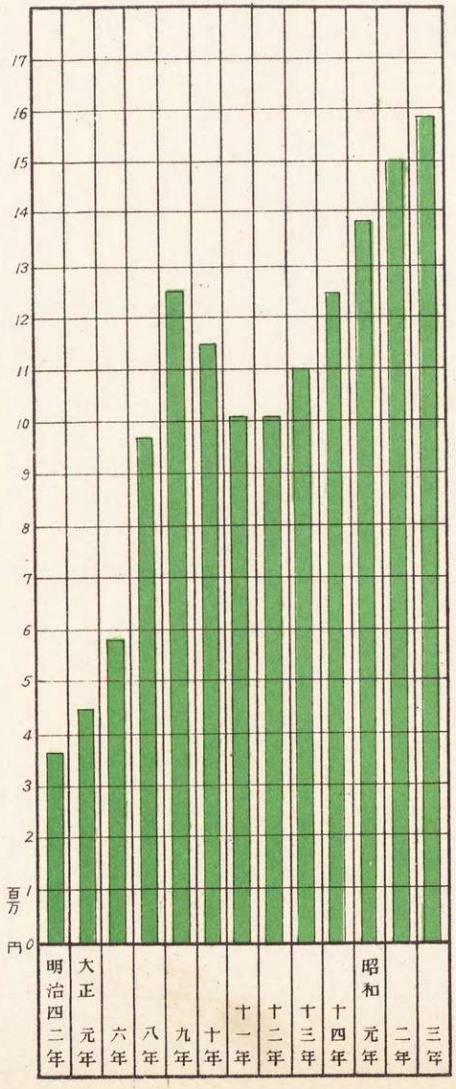
▲備考　昭和三年七月よりメートル法採用に依り三年度は噸を單位とす。

總督府專賣事業

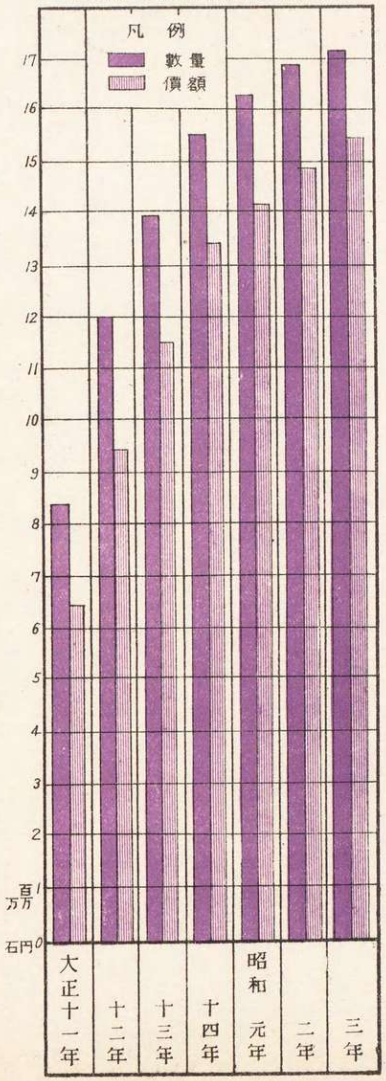
阿片煙膏取賣數量及價額



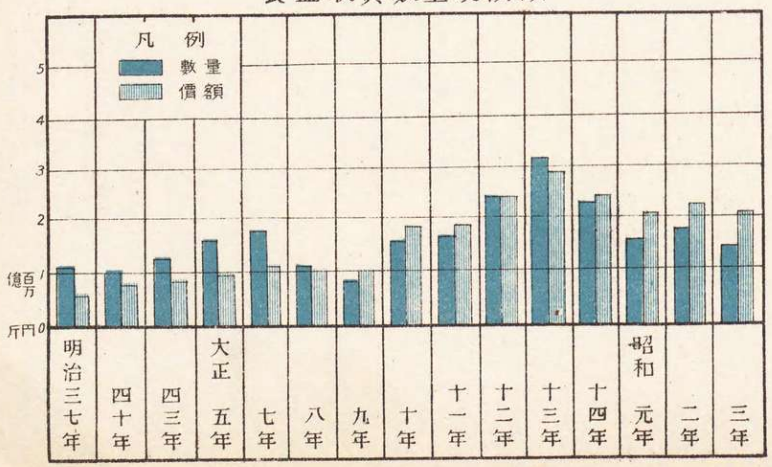
煙草取賣價額



酒類取賣數量及價額



食鹽取賣數量及價額



臺灣總督府調查

■交通

【道路】 我が領臺以前に於ける道路の修築は、本島の習慣として地方富豪の特志に委ねられ居りてを以て、道路の形體を備へしものなく、一朝降雨に際せんか泥濘脛を沒し、運輸交通の困難實に名狀す可らざるものであつた。依つて明治卅八年中工兵隊の手に依り南北縱貫する軍道を開鑿せられ、次で卅三年に至り道路橋梁規則の發布となり、地方住民に對し改修を指導訓諭せられ、更に卅八年に至たり重要道路七百餘里を指定して改修に着手せられたりしが、今や內地の國府縣道に準すべき指定道路は延長八百廿五里に達せり。

【鐵道】 我が領臺當時殆んど皆無に等しかつた臺灣鐵道は、先づ縱貫鐵道の全通となり、次で幾多分岐線の開通となり、更に東部鐵道の全通となり、今日の盛況を呈するに至つた。經過の大要は左の如くである。

▲縱貫線（明治四十二年四月開通、延長二百四十六哩餘、經費總額二千八百八十萬圓）　北の基隆と南の高雄とを繫ぐ所謂縱貫鐵道は、清領時代の遺物で、當時殆んど共の用をなさなかつた、基隆—新竹間六十二哩餘の鐵路を改良し、一方新竹—高雄間の新線を計畫し、上記の經費を以て明治三十二年度から十箇年繼續事業として、南北の兩端から工を起し竣成したものである。而かも此の間北方に於ては臺北—淡水間、南方に於ては現在の潮州線の內、高雄—九曲堂間は、縱貫線の竣成に先だちて開通された。

▲九曲堂—屏東間（大正元年十二月開通、延長四哩五分、經費二百三十萬圓）　明治四十四年度に於て上記の經費を以て三箇年繼續として工を起し豫定通りに竣成した。

▲臺北—基隆間複線（大正八年四月竣成、經費二萬六千二百圓）　大正元年度以降の六箇年繼續として起工したが世界大戰の爲め材料延着し、全部竣工迄には二箇年後れた。

▲臺東線（花蓮港—玉里間）（大正六年十一月全通、延長五十五哩、經費四百二十五萬七千圓）　西部に比し著しく開發の後れた東部臺灣の發達を促さんが爲め、先づ花蓮港、玉里間の五十五哩餘に敷設の計畫を樹て、明治四十二年から九箇年繼續として豫定通りに全通したものである。

▲宜蘭線と屏東（延長）線　經費總額一千萬圓、宜蘭線と屏東線は大正六年度から五箇年繼續として起工したりしが、十三年十二月一日に至つて基隆起點八堵を經て、蘇澳に至る六十一哩餘の全通を見るに至り宜蘭線と命名せり、又た屏東線は屏東—潮州間の九哩四分は大正九年二月迄に開通して、潮州線と改稱し、殘餘の工事は都合上一時中止したが同十一年九月上旬から再び潮州—枋寮間二十五哩餘の延長工事に着手し、潮州—溪州間四哩五分は大正十二年十月二十一日を以て營業を開始せり。

▲竹南、玉田間（海岸線）　經費總額一千五十五萬圓、所謂本島の海岸線なる竹南、玉田間の五十三哩餘は大正八年度から上記の經費を以て四箇年繼續として起工、同十一年十月十日全通したが、本線は現在縱貫線に編入し、在來の山線は之れを臺中線と稱してゐる。

▲東部線の延長　東部臺灣の開發を促進せんが爲め、花蓮港—玉里間に鐵道を敷設した次第は前述の通りであるが、更に之れを延長し臺東製糖會社線に連ね、臺東に直通せしめんとの目的を以て工費二百二十萬圓を計上し、三箇年繼續事業となし、大正十年七月より着手し十五年三月に竣工せり、是れで全部の開通を遂げたのである。

▲集々線　臺灣電力株式會社が日月潭水電工事用材其の他運搬の爲め、二水—外車埕間十八哩五分（軌間三呎六吋）の鐵道を敷設し、大正十一年一月から營業線として一般運輸營業をなし來つたが、昭和二年四月當該地方の開發を促進せんが爲め、金三百七十三萬八千圓を以て之れを官に買收した。

▲三貂嶺—菁桐坑間　臺陽鑛業株式會社が運炭用として敷設した專用鐵道を當該地方開發並に本島北部に於ける良炭田開發の爲め、昭和四年七月、金百五十萬圓を以て之れを官に買收したが、本線は近く一般運輸營業を開始する豫定である。

【沿線の概況】 本島南北の連繫たる所謂縱貫鐵道は、本島の一大關門たる基隆を起點とし、基隆と併稱さるゝ南部臺灣の要港、高雄を終點とする本島の幹線であり、脊梁であり將又た大動脈であるが、線路は途中新竹州下、竹南に於て二つに分れ、其の一方海岸線（縱貫線の本線）は大甲、清水等の街邑を經て彰化に入り、他の一方即ち山手を通る臺中線は苗栗、豐原、臺中等を經て彰化に至り、海岸線と相會してゐるのである。されば島內の主要市街は殆んど其の沿線に在り、產物の大部分も亦其の沿線に集注せり。

▲其の沿線の概況は、基隆附近には金鑛あり又た多數の炭礦あり、基隆今日の繁盛を來した一因は、確かに是等の富源を背景としてゐるからである。基隆より南へ一時間餘にして全島の首都臺北に達す。臺北より更に南下して中部に向へば新竹、臺中、彰化等の代表的都邑あり、又た產物としては桃園、中壢、平鎭の茶、新竹附近の柑橘、海岸線に於ける大甲附近の大甲蔺製品、又た臺中線に於ける苗栗附近の石油及び樟腦、豐原、臺中、彰化附近の所謂中部米及び芭蕉實等は孰れも本島を代表する名產である。

▲彰化の南員林、二水附近も亦米及び芭蕉實の產地である。二水の南、濁水溪の鐵橋を踰え斗六、斗南を過ぐれば程なく阿里山の登山口であり、且阿里山材の集散地たる嘉義に着く、嘉義より水上に至る間、我が國唯一の北回歸線標塔がある。此の邊より一帶の風物熱帶的色彩濃厚を加へいよ〳〵熱帶園內に入る。やがて臺南沃野の大灌漑をなさんとする嘉南大圳貯水池への通路たる番子田を過ぎ、本島の最肥沃たる臺南に入る。途中濁水溪より南に進むにつれて左右無涯の蔗園は渺茫として糖業國の面目自ら躍如たり、又た好晴の日、東方遙かに新高の雙峯を眺むることが出來る。

▲縱貫線の終點であり、又た潮州線の起點たる高雄へは臺南より一時間餘にして到着するのである。

▲宜蘭線は亦基隆を起點とし八堵より分岐して東海岸唯一の良港たる蘇澳に至るのであるが、途中四腳亭より頂雙溪に至る間は、所謂北部炭田の中心地であつて、石炭の搬出が盛んである。尙中部には頭圍、宜蘭、羅東、蘇澳の街邑あり、又一望十里の宜蘭沃野と千古斧鉞を加へざる大平山森林を控へ、石炭、米、木材、金鑛、砂糖等頗る產物に富んでゐる。

▲淡水線は首都臺北と領臺前の名港淡水とを連結し、沿線には官幣大社臺灣神社あり、圓山運動場、動物園、劍潭寺、芝山巖及び臺灣新根の稱ある草山、北投の溫泉等名所、舊蹟が頗る多い。淡水は港灣は殆んど廢滅に歸し、衙衙衰微を來したるも今猶對支戎克（ジヤンク）の貿易頻繁であり、夏季は海水浴場として著名である。

▲集々線は縱貫線二水より分岐して、中部山地に入り外車埕（新高郡集々庄）を終點としてゐる、途中水裡坑は鑽峰新高の登山口であり、又た終點外車埕は將來臺灣工業化の原動力たる日月潭水電發電所の豫定地に近い。尙中部山地の主要地たる埔里街、絕勝の地日月潭及び霧社へは外車埕より臺車の便がある。

▲潮州線は高雄を起點とし鳳山を過ぎ、本島第一の大河たる下淡水溪を越えて屏東平野に入り、屏東を經て溪州（東港郡林邊庄）に至るものであるが、沿線一帶廣漠たる沃野を成し、米及び甘蔗の產地だ豊かである。亦鳳梨及び芭蕉實の產出も頗る多い。尙鳳山には規模の大なること本邦有數の稱ある海軍無線電信所あり、屏東には陸軍飛行場がある。又た下淡水溪鐵橋は長さ五千七呎にて實に東洋第一の長橋である。

▲臺東線は東海岸の重要地たる花蓮港を起點として北より南へ走り、鳳林、玉里、里壠等の小邑を經て、臺東に達するのであるが、本線は軌間二呎六吋の狹軌鐵道である。

圖表對照統計

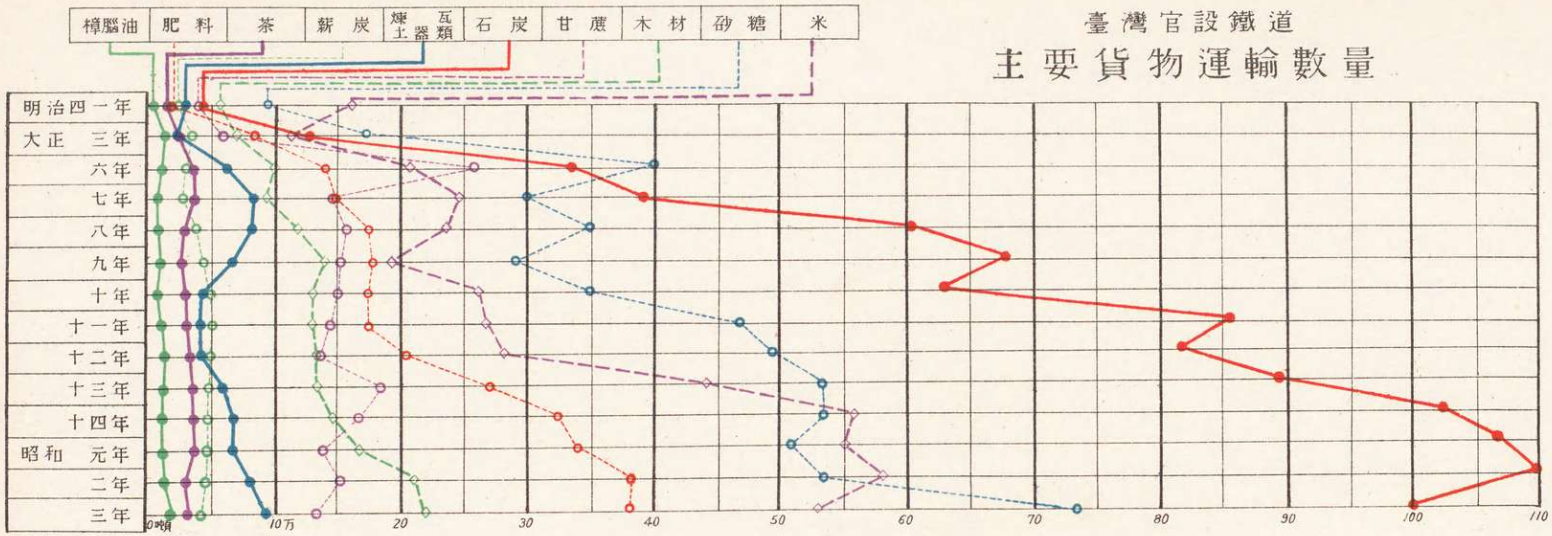
◇重要貨物輸送數量表

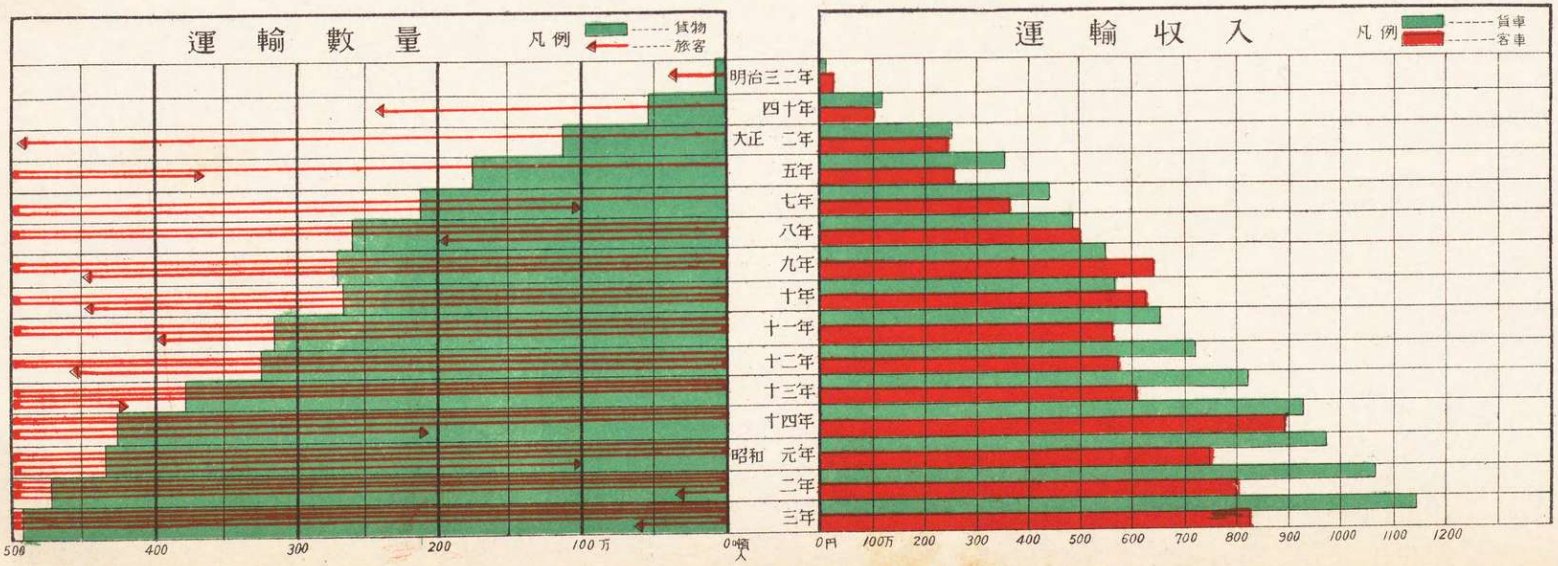
年度別 ＼ 種別	石炭	砂糖	米	甘藷	木材	肥料	薪炭	茶	樟腦油	煉瓦土器類
明治四十一年	三七、八三八噸	八九、九三四噸	一六七、七六四噸	三五、二一噸	三五、〇〇三噸	一七、一〇〇噸	二一、一三三噸	一六、七七六噸	九、一八四噸	二四、一六〇噸
大正三年	一三一、六四五	一七、一五〇	一三一、八〇三	三八、八五〇	一四、一五五	七、一二九	三七、九九九	二七、七九〇	一二、〇三〇	六〇、四八七
同六年	三三八、六〇七	四〇三、一五七	二一、八七七	三五、一四五	一四九、二九五	一四〇、一一九	三七、九三四	三五、一六四	九、八五七	八〇、四六九
同七年	三七七、九〇八	三〇一、四六四	二五〇、〇五四	三五、四三五	一五九、四三三	一六五、八九	三四、四三七	三五、八三八	七、三三一	七九、九八〇
同八年	三〇三、一一	三五一、三七〇	二四〇、〇三三	一四二、〇七九	一五四、〇七九	二一二、八四	四四、四三七	二八、五四七	七、六四〇	六六、四八五
同九年	四四四、四九〇	二九一、一七〇	一九六、八五五	一五二、一五七	一四一、四八〇	二一六、二〇九	四四、二九五	三〇、六四七	九、五七〇	六六、四八五
同十年	六二六、六九八	三五一、一五五	二三四、四二二	一五三、一五八	一二六、四三三	一九八、二六五	四四、二七九	三三、六八二	七、三〇〇	四四、四三五
同十一年	八五四、九三一	四九六、二四一	二八三、六〇一	一三六、六九八	一三六、〇五五	二六五、三四六	四四、七五九	三四、八八九	一一、三一〇	三七、八一五
同十二年	八二五、八三五	四九六、二四一	二八三、六〇一	一三六、六九八	一三六、〇五五	二六五、三四六	四四、七五九	三四、八八九	一一、三一〇	三七、八一五
同十三年	八九〇、三四〇	四六六、三四一	二四六、三三三	一八七、一四一	一三三、七三五	二六五、三四六	四四、七五九	三四、八八九	一一、三一〇	三七、八一五
同十四年	一、〇一三、七〇〇	五三七、四四五	四四六、三三八	一七一、八五五	一四七、七一九	三一六、三四八	四四、七五九	三四、八八九	一一、三一〇	三七、八一五
昭和元年	一、〇六七、五五五	五三八、三四三	五五五、四三一	一四三、八二一	一六六、七三五	三四六、四六八	四四、七五九	三四、八八九	一一、三一〇	三七、八一五
同二年	一、〇九四、八三六	五三五、〇二四	五三六、六六四	一五五、九三五	二一〇、三四三	三四六、四六八	四四、七五九	三四、八八九	一一、三一〇	三七、八一五
同三年	九九七、六〇九	七三五、〇二四	五三六、六六四	一五五、九三五	二一〇、三四三	三四六、四六八	四四、七五九	三四、八八九	一一、三一〇	三七、八一五

◇鐵道收支一覽表（△印は損失）

年次	鐵道收入	作業費	差引益金	諸支出金	差引益金	補充費	差引益金
明治三十二年	三四五、八三六円	四六、八四九円	七一、〇二三円	四八円	七一、四二一円	—	七一、四二一円
同四十年	二、三三六、八五一	一、四四〇、一九九	八八六、六五三	三、〇六八	八八三、五八四	六五四、九七七	八八三、五八四
大正二年	二、五一四、一〇〇	一、四三六、五八三	一、〇七七、五一八	七、四八〇	一、〇七〇、〇三八	六六七、〇三五	一、〇七〇、〇三八
同五年	二、三七〇、〇九三	二、三七八、九五五	三、四九二、一三七	三、〇六八	三、四八九、〇六九	六六七、〇三五	三、四八九、〇六九
同七年	八、〇一六、二三八	三、三九九、七四八	四、九二六、四九〇	三、〇六八	四、九二三、四二二	一、二四四、八六七	四、九二三、四二二
同八年	九、八七三、八六八	六、三七〇、七三一	三、五〇三、一三七	三、〇六八	三、五〇〇、〇六九	一、九四八、七二三	三、五〇〇、〇六九
同九年	一一、八二八、一三五	一〇、〇八一、八六	一、三五、九七三	四、一三九、〇三五	四、一三五、一六二	三、五七五、八一〇	四、一三五、一六二
同十年	一二、二五五、七八六	八、五七三、三六六	三、九八一、四二〇	四、〇三九、〇五五	四、〇三五、三五六	三、〇四一、八八〇	四、〇三五、三五六
同十一年	一二、二八八、一九三	八、九五四、一〇九	三、三三四、〇八四	四、〇三九、〇五五	四、〇三五、三五六	三、〇四一、八八〇	四、〇三五、三五六
同十二年	一二、九四四、六三四	八、七三四、〇四四	四、二〇九、五九〇	四、〇三九、〇五五	四、〇三五、三五六	三、〇四一、八八〇	四、〇三五、三五六
同十三年	一四、四二九、五七〇	九、一二八、五〇九	五、三〇一、〇六一	四、〇三九、〇五五	四、〇三五、三五六	三、〇四一、八八〇	四、〇三五、三五六
同十四年	一三、三五六、八三六	八、三五四、三五八	五、〇〇二、四七八	四、〇三九、〇五五	四、〇三五、三五六	三、〇四一、八八〇	四、〇三五、三五六
昭和元年	一三、三五一、三五七	八、四〇二、一三五	四、九四九、二二二	四、〇三九、〇五五	四、〇三五、三五六	三、〇四一、八八〇	四、〇三五、三五六
同二年	一九、八六四、二六七	一二、八二一、八六九	七、四二、三九八	四、〇三九、〇五五	四、〇三五、三五六	三、〇四一、八八〇	四、〇三五、三五六
同三年	一九、八六四、二六七	一二、八二一、八六九	七、四二、三九八	四、〇三九、〇五五	四、〇三五、三五六	三、〇四一、八八〇	四、〇三五、三五六

臺灣官設鐵道
主要貨物運輸數量





臺灣總督府調査

農業

我が領臺以來農業も亦著しく發達し、昭和三年度の生産總價額は**二億九千三百四十九萬百二十七圓**に達し各産業總生産價額の四割七分を占めてゐる。之れを大正五年度の八千八百五十萬圓（蔬菜を含まない）に比較すれは十年間に三倍以上に激增したことゝなる。生産物は島内の需用を充して尙餘りあるので、之れを内地と海外諸國とに送り出してゐる。（農業中畜業は別項にあり）

▲耕地と農業者

【耕地】 耕地の面積は明治三十二年度には三十六萬三千二百九十甲であつたものが、同四十二年度には六十八萬二千四百七十八甲に、昭和三年度には**八十三萬一千七百七十四甲**となり。明治三十二年以後二十九箇年間に二倍餘に達せり。又た臺灣總面積に對する耕地の割合は二割餘であるが、蕃地を取除いた面積のみに對しては四割餘となる。

【農業者】 農業は臺灣の主要産業にして、之れに從事する者は、總人口の約五割七分に當たれり、昭和三年末現在調査によれば其の數實に**二百四十五萬八千二百五十九**人に達し、之れを自作農と小作別にすれば、小作者は九十六萬五千百三十二人にして、自作者は七十二萬八千五百十七人なり、猶自作兼小作者は七十六萬四千六百十人である。

▲主要農業物

【米】 本島の主要農産物中「米」は臺灣の氣候に適し、一年間に二回の收穫が出來るのである。澎湖廳を除き全島遍く栽培され、殊に西部諸州が其の主産地である。領臺以來品種の改良と栽培の奬勵に努められた結果、面目大いに改まり、其の作付面積、收量、品質等の諸點に於て著しき進歩を來した。即ち今や年産數量は**六百八十萬石**に達せり、此の價額**一億三千萬圓**を超ゆるの盛況である、臺灣三大農産物（米、甘蔗、甘藷）中で最も主要なものである。尙近年蓬萊米の栽培盛んに行はれ、昭和三年度の作付面積は一、二期を通算すれば合計十三萬四千二百二十甲にして、此の收穫高は**百六十二萬四千九十七石**に達せるのである。

昭和三年度に於ける第一期作付は、水陸稻合計二十六萬九千五百二十八甲此の收量高三百十九萬六千九百十一石、第二期作付は、三十三萬三千五百三十甲、此の收量高は三百五十九萬八千九十四石に上れり。內地への移出は明治三十年來の事にして、爾來年々其の數量を增加し、昭和三年度の移出高は玄米及び白米を合せて二百三十三萬三千百十三石、此の價額**五千三百二十二萬九千百一圓**に上れり。

【甘藷】 米に次ぐ食用作物にして之れ亦良く臺灣の氣候に適するので、四時到る處に栽培されるが、就中臺南、臺中、高雄の三州は其の主産地である。直接食料とする以外に、養豚の飼料として最も重要品である。其の他切干藷（蕃薯簽）に製せられ酒精原料として移出せられ、又た澱粉原料にも供せられる。昭和三年の切干藷の移出高は四千四百萬斤を超え、此の價額は約百六十萬圓に及んでゐるのである。

【茶】 工業章下に示すやうに臺灣の主要輸出品で其の額**一千一百萬圓餘**、臺中以北に栽培され、臺北、新竹二州が主産地で年十數回の摘葉をする。其の種類には青心烏龍、黃柑、時茶、大葉烏龍、青心大有があるが、就中青心烏龍、青心大有、大葉烏龍の三種は最も優良種で茶園全面積の六割以上を占めてゐる。

【落花生】 食料、製油原料等に供し、全島到る處に栽培されるが、其の主産地は臺南、高雄、の兩州及び澎湖廳である。明治三十三年の作付は一萬一千九百五十八甲で、其の收量十二萬八百三十八石に過ぎなかつたが、爾來作付、收量共に年々增加して、昭和三年には二萬七千五十二甲、收量**四十七萬五百八十餘石**に上れり。

【豆類】 本島で栽培される豆類の種類は多いが、就中最も主なるものは大豆である。普通輪作として年二、三回の收穫が出來、臺南、高雄、臺中の各州を其の主産地とする。明治三十三年の豆類の作付は一萬一千三百六十五甲、其の收量五萬二百八十一石であつたが、昭和三年には作付は二萬二千八十五甲に、收量は**八萬二千七百三十二石**に增加せり。

【麥類】 麥類は本島至る所に於て栽培せらるゝと雖も、就中臺中、臺南二州の海岸地方に多く栽培せらる、併し爾來栽培方法極めて粗放な爲め、大正七年から品種改良に着手したが、作付面積は遺憾ながら減少しつゝある。明治三十三年に於ける大麥の作付は一千四百七十七甲、此の收量一萬一千四百六十石、小麥の作付は一千八百五十七甲、此の收量一萬一千二百八十二石であつたが、昭和三年には大麥の作付は七百六十三甲、此の收量**四千二百三十二石**小麥の作付百甲、收量**三千七十五石**となつてゐる。

【胡麻】 收穫品は多く製油原料に使用され臺南、高雄の二州は其の主産地である。明治三十三年の作付は六千八百八十九甲にして、此の收量高三萬六千三百四十八石餘であつたが、昭和三年には作付約半數に減じられ三千六百三甲となつた、從つて收量高も**一萬二百二十六石**に減じたは遺憾である。

【黃麻】 從來は綱索、七島表の製造又は結束用に供するに過ぎなかつたが、臺中州豐原に製麻會社が設立されて以來、米袋、黃麻布等の原料として需用は大いに增加し、臺南、臺中、高雄各州が主産地であるが尙年々不足を告げて居る。明治三十二年の作付は一千四百九十五甲、收量百四十四萬二千二十二斤に過ぎなかつたが、昭和三年には作付は二千七百五十二甲、收量は**七百三十萬二千八十二斤**に達した。

【苧麻】 平地のみならず山間の傾斜地にも適するので宜蘭、新竹等の蕃地に廣く栽培され蕃人も亦多少の栽培をしてゐる。明治三十三年の作付は一千六百五十四甲、收量百二萬二千六十三斤で、昭和三年は作付一千七百二十二甲收量**二百萬四千二百三十八斤**である。

【煙草】 主産地は臺南、臺中の二州と花蓮港廳であるが、未だ臺灣の需要を充たすに足らぬ。明治三十二年には、僅かに作付に於て百八十一甲、收量に於て十九萬六千九百七十六斤に過ぎなかつたが、專賣法實施以來總督府に於ては、之れが栽培を奬勵せられたるを以て、昭和三年には作付八百九十九甲となり、此の收量高**二百五十萬二千三百九十九斤**に激增せり。

圖表對照統計

◇耕地累年比較表

年次	田	畑	計
明治三十二年	二二、九九二甲	一五、三五四甲	三六、三二六甲
同四十年	三三、五四〇	三四五、九八三	六七四、五二三
大正元年	三四六、三四四	三四六、九〇八	七一一、二五二
同六年	三三〇、四六八	四一三、五一七	四七四、九八五
同十一年	三七六、三三三	三九七、四五五	七七四、八七八
同十三年	三八〇、〇五五	四五五、三五一	八二六、四三六
昭和元年	三九五、九四五	四三〇、六〇三	八二六、八三三
同二年	三九九、一五一	四三三、七三三	八三二、八三四
同三年	四〇三、八六三	四三七、九一二	八三一、七四

◇米作付面積と收量表

年次	第一期作稻 水稻 作付	第一期作稻 水稻 收量	第一期作稻 陸稻 作付	第一期作稻 陸稻 收量	第二期作稻 水稻 作付	第二期作稻 水稻 收量	第二期作稻 陸稻 作付	第二期作稻 陸稻 收量	計 作付	計 收量
明治三十二年	一五六、三二九甲	一、二五九、三五四石	二一、〇六二甲	二一、七四五石	一六六、八二一甲	七〇、二九一石	一四一、八一〇甲	五一、六八〇石	三六〇、九三七甲	二、〇五二、九七〇石
同四十年	三〇九、八七五	一、九八一、一四五	一九、一七六	一四、三九九	三三一、三〇三	一二九、一六八	三三一、五五八	一四、一五四	四八六、三七四	二、一四五、一四五
大正元年	三一三、八七八	二、〇二九、〇九九	一〇、四一五	四四、一五九	三三五、九七〇	一、七八一、六九八	三四一、二五五	一四、八五三	四九五、一二八	二、一八一、九四三
同六年	三〇八、七三三	二、四一〇、一九一	八、七一八	六八、三九九	三三四、〇二〇	一、八一三、〇一一	三四三、七九五	一三、八六六	四八三、八三三	二、一九三、〇九六
同十一年	三三四、五八五	二、六五七、三七一	一〇、九五〇	六八、三九九	三五三、七一五	二、四四三、七九五	三五七、〇八四	一六、四〇一	五二七、〇九六	二、四九三、〇九六
同十四年	三五八、一八九	三、〇五五、六四四	一〇、九五三	七八、一四九	三六八、七一七	二、六〇三、三三三	三七一、三五五	一六、四〇一	五四八、四三三	二、七一四、一七三
昭和元年	三四六、九四九	三、七五七、八五〇	一〇、七六六	七四、三七三	三六八、九九八	二、六〇三、三三三	三七〇、〇三〇	一六、四〇一	五四六、三四三	二、七一四、一七三
同二年	三五四、三五四	三、七五六、三一	一一、一八三	九七、九二五	三五八、六八三	二、七五五、〇五八	三七五、八八八	一六、四〇一	五五〇、九三一	二、七九三、〇九六

◇甘藷作付面積及び收量表

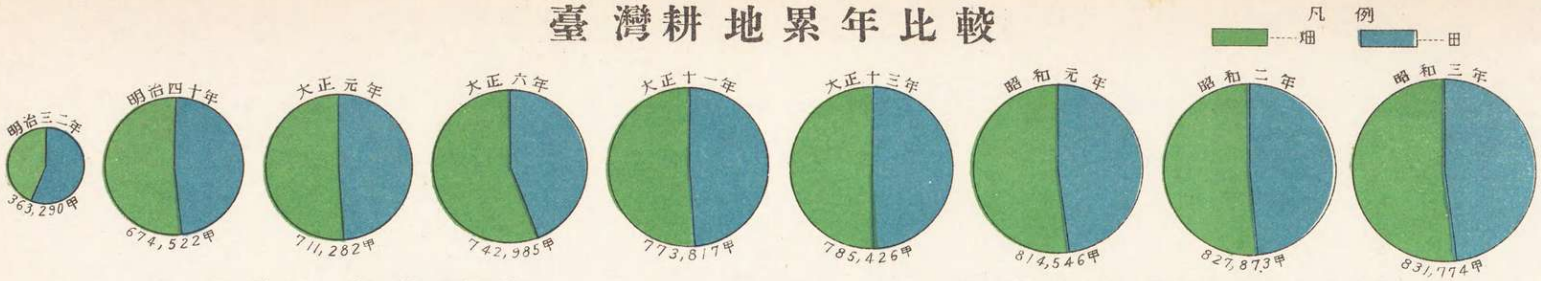
年次	作付面積	收量
明治三十五年	六三、一四七甲	五〇、一二〇、二九三斤
同四十年	一〇八、七六三	一、三〇八、八三六、四七五
大正元年	一二三、四三五	一、一三一、七六六、八九三
同六年	一〇三、五九九	一、三三五、五六六、三九四
同十一年	一三三、九六九	一、五八二、九九一、三三四

◇茶作付面積及び收量表

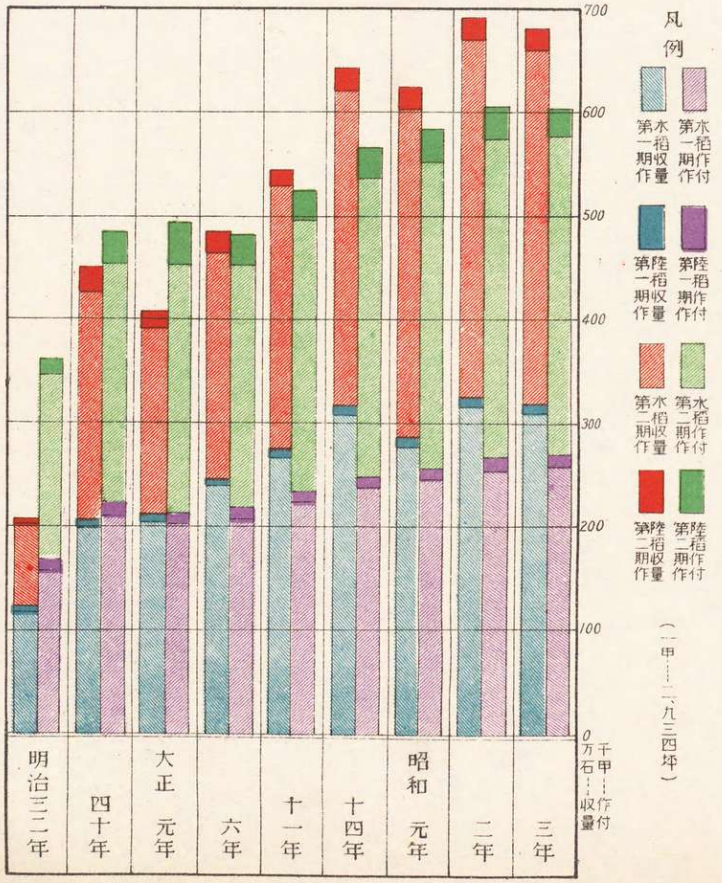
年次	作付面積	粗製茶生産高
明治三十五年	二八、三〇八甲	一二、六四一、一二七斤
同四十年	三三、三九八	一二、七九五、七二〇
大正元年	三五、〇九〇	一三、三五八、七六六
同六年	四六、五三一	二六、六〇七、八七八
同十一年	三七九、六九〇	一八、六五三、三五六

年次	作付面積	粗製茶生産高
大正十三年	四七、一八九甲	三〇、六三七、一〇三斤
同十四年	四七、六三五	三〇、九四四、四四九
昭和元年	四七、三〇一	一九、八四四、五〇六
同二年	四六、四六一	一九、三二六、九三八
同三年	四六、六三五	一八、三四二、八八〇

臺灣耕地累年比較



米收量と作付面積



甘藷·茶·收量と作付面積



臺灣總督府調査

【桑】 桑は北部及び山手には在來種、南部には廣東桑、又た冬期養蠶用としては、沖繩桑が適してゐる。内地桑は發芽が遲く、落葉が早いため本島には利用期間が短いので、未だ充分普及されて居ない。

【蠶業の將來】 本島の蠶業事業に對しては内地に於て到底見る能はざる特色を有するを以て、將來斯業の發展上頗る有利な立場にあるのである。そは何か曰く、臺灣に於ては一年中桑葉が絶へず繁茂する故に、内地の農閑の冬期に於てすら蠶を飼育することが出來る事である。勞賃の高騰や支那生絲に脅威されて居る、内地の蠶業界に對して此の安價な繭を供給することが出來る本島の養蠶は決して輕視すべからざる好問題にあらずや。

尚産繭の消費機關として臺北市に機械製絲場(二五四釜)、花蓮港街に足踏製絲場(二〇釜)、臺中州埔里街に電氣動力簡易製絲場(八釜)がある。

【蠶業奬勵】 明治四十三年以來殖産局附屬養蠶所に於て之れに關する諸般の事務を執つて居る。從來は蠶業技術員の講習、蠶具の配付、蠶繭買收奬勵、桑苗配付、蠶業試驗並びに蠶種の製造配付等を行ひたりしが民間の發達に伴ひ現時は蠶種の製造配布のみを行うて居る。

【茶業奬勵】 本島茶業の進歩改善を圖るために、茶業者を糾合して茶業公司又は組合を設立せしめ、之れに製茶機械を貸與し又た製茶教師を置いて製法を傳授する外、茶園の改善を圖るため模範茶園を設置せしめて肥料を補助し、其の他一般茶園の爲め優良苗の無償配付を行つてゐる。猶本年度からは茶業技術者を養成する目的を以て茶業傳習所を設置することになつて居る。

【鳳梨奬勵】 在來種鳳梨は纖維が多く、果形小さく而かも目深いため、生果として又た繊維原料としての價値が乏しいので、品種の改良と栽培の奬勵を行はんがため、大正十四年度から高雄州鳳山郡大樹庄小坪頂に鳳梨種苗養成所を新設し、優良外國種苗の繁殖、配布を圖つてゐる。

【畜牛改良奬勵】 中央研究所種畜支所に於て繁殖した印度牛と雜種牛とを貸下げ、又た一方には在來の黄牛の種牡牛を置かんがため、明治四十一年度から主な産牛地方廳に奬勵費を配付し奬勵せしめ來つたが、其の實績頗る良好であつたので、之れを水牛にも及ぼすことゝし、大正八年度から漸次全島に及ぼし實行せしめられてゐる。

【養豚改良奬勵】 從來中央研究所に於て繁殖養成した、バークシヤ種豚を貸下げ、若くは拂下げを行ひたりしが普及の趨勢は逐年盛んとなり、今や地方農民は競つて本品種を要望するに至つたから昭和元年度からは國庫の奬勵金により年々種豚四百頭を内地より購入し、農業部供給の三百頭と共に地方養豚の改良に努められて居る。

【獸疫豫防】 領臺以前から牛疫、豚コレラ、炭疽、氣腫疽等の獸疫があつて年々各地に流行して被害が甚だしかつたが、其の豫防規則を勵行すると共に、牛疫と豚コレラとの血清を製造し豫防制遏に努めた結果、多年惨害を逞うした牛疫は、今は全く終熄した。併し豚コレラは依然として地方的に猖獗を極めて居るので專ら之が防遏に努めて居る。

【害虫驅除豫防】 本島には害蟲の發生も亦甚だ多く、農作物の被害が多大であるから、當局は其の驅除豫防に努め既に明治四十一年中害蟲驅除豫防規則を發布して之れを勵行しつゝあるが其の現狀は左の如くである。

(一)害蟲巡視員を各州廳に配し、不蘇耕地を巡視せしめ農民を督勵する。(二)從來臺南、高雄の兩州管内で實行して來つた甘藷害蟲と稻作螟蟲との買收は十年度限り之れを廢し、十一年度からは專ら製糖會社と農民との自發的驅除を督勵することゝした。(三)甘藷鑽黄病は從來臺南、高雄、臺中の三州に巡視員を配し極力其の驅除に努めてゐる。

【小作慣行改善】 從來本島の耕地及び農業者の大部分を占むる小作地及び小作農家を支配する小作慣行は、頗る不良であつて改善を要すべき幾多の惡習があつた。之れが爲め一般小作人は農耕地に安定せず、其の生活を脅威さるゝこと甚しく、一方地主も亦不良小作人の爲めに苦惱するものが多く、將來益々集約的經營を必要とする臺灣農業の發達を阻害し、農産增殖上甚しき惡影響を及ぼしつゝあつた。のみならず近時農民思想の變動に伴ひ不良慣行の虚に乘じ、小作農民の中に團體運動を畫策するもの漸く多く、農村の平和を危殆ならしめる處れがあるので、先づ小作慣行を改善し臺灣の小作問題に備へんとして昭和二年度より國庫補助に依り小作慣行改善、小作爭議調停、其の他地主小作人の親善融和を圖る事業をなす地主小作人協調團體の設置を助成してゐる。

【農　會】 農會が米作改良、園藝改良、畜産改良、蠶業奬勵、農場經營、肥料共同購買、農業倉庫經營等をなして、我が農政上の助長機關として貢献した處甚大である。臺灣農業の近時著しく改良されたのも此の農會に負ふ所が多い。其の創設は明治三十三年であるが、今や各州廳共に其の設置を見ぬ所はない。農會の區域は州廳の區域に依り、其の會員は國又は公共團體を除くの外、其の區域内に耕地、牧場、森林、原野等を有するもの及び農業を營む者を網羅する。昭和四年度の其の經費豫算總額は二百四十九萬四百四圓で、地租と家畜とを標準として會員から之れを徴收してゐる。

【農業團體】 農會以外臺灣に於ける農業團體として、小作慣行改善を目的とする業佃會並に農事改良の實行を目的とする農事小組合等がある。其の内容を摘記すれば

(イ)業佃會　業佃會は大正十一年初めて、臺南州新營郡に設けられたが、昭和四年八月末現在では全島五市四十五郡の中三十六郡に設置されてゐる。各街庄を以て其の區域とし郡には其の聯合會を置いて居る。會員は郡内に耕地を有する地主、小作及び自作農から成り、會の事業は從來の口頭契約を會の趣旨に依る書式契約に改め以て耕作者の小作權確保と小作期間の延長、其の他の附隨事項の改善を行ふものである。而して漸次本事業の進行と共に、地主小作人の協調を促し、小作者が耕地に安定するを得たる結果、小作に關する從來の弊風が次第に改められ、農事の改良發達上顯著なる好影響を及ぼしつゝある。

(ロ)農事實行組合　農事實行組合は一派出所、大字又は一街庄區域を區域とするものと、一部區域を區域とするものがある。又郡下の農事實行組合を以て組織さるゝ郡聯合會もある。何れも官廳並に農會の農事奬勵方針に基き農事改良の實行を計り農民相互の福利を增進せんとするものである。組合の事業は一般に農事全般の改善實行であるが組合に依つては或特殊事業、例へば養豚事業、養蠶事業、共同苗代經營の如きものゝみを行つて居るものもある。

【柑　橘】柑橘類は必らずしも臺灣特有のものではない。內地に於ける紀州蜜柑、ワシントンネーブル等は共の名特に秀づるも臺灣産柑橘類が內地市場に於て特に著名なる所以は、母國に於ては到底見ることの出來ない甘味豐醇な椪柑（ポンカン）と文旦（ブンタン）とがあるからである。右の外雪柑（セッカン）、桶柑（トウカン）、斗柚（トユウ）等があり、九月中旬から翌年三四月迄紅橙色の豐醇な美果が、島內各地の市場に現はれる。柑橘は臺中以北に産し、臺中州員林、南投、新竹州新埔産は有名である。文旦と斗柚は全島到る處に産するが、前者は臺南州麻豆、後者は同州西螺が最も名高い。明治三十七年に於ては栽培面積三百十七甲、收量二百二萬五千九百六十五斤であつたが、昭和三年に於ては面積二千八百五十五甲、收量三千百七十五萬一千三百七十八斤、即ち約十倍餘の增加を見るに到つた。內地移出高も累年增進し、昭和三年に於ては二百二十九萬三千三百三十八斤、其の價額**二十六萬六千四百八十二圓**に上つた。輸出高も亦同年に於て二百四十四萬一千斤、價額十七萬二千圓に達するに至つた。

【バナナ】臺灣の代表的果實であるバナナ（芎蕉、芭蕉）は全島到る處に栽培されるが、共の主産地は臺中州で全島生産高の七割を産し、之れに次ぐは高雄及び臺南州下である。殊に高雄州下は最近に到り水田又は畑地に集約的栽培を行ひ單位面積よりの收量最も多く、作付面積も益々增加の趨勢にある。輸移出品中米、砂糖に次ぐ重要品で昭和三年の輸出高一億七千八百二十三萬七千斤、價額一千三百八萬七千四百九十八圓に上り、明治四十二年には作付面積五百六十甲、收量一千五十三萬六千六十二斤に過ぎなかつたものが、昭和三年には一萬五千六百九十一甲、産額**二億三千五百七十七萬六千斤**の巨額に達するに至つた。

【パインアップル】パインアップル（鳳梨）はよく臺灣の風土に適し、往時より栽培されてゐたが、最近に到り本島新興の一大産業として共の將來を囑望せられ、栽培事業著しく勃興するに至たれり。全島中の主産地は高雄及び臺中の兩州で、將來の適地面積七萬五千甲以上に達し、蓋し最も多望の作物である。之れパインアップルは此種作物の栽培困難な傾斜地を利用し得ること及び罐詰用として海外市場に輸出し得るが故である。昭和三年栽培面積は三千七十七甲、收量三千六百三萬四千顆、生果としての輸移出高三十六萬七千三百六十六顆、價額二萬二千圓、罐詰の輸移出高八十三萬百三十六打、價額**二百六十萬八千三百六十五圓**に達せり。

【龍　眼】遍く島內に栽培されるが就中臺南、臺中の兩州は主産地である。果實は直接食用にも供せられるが、乾龍眼又は肉龍眼とし主に支那に輸出される。現在樹數は五十一萬九千六百十本、總收量は**七百八十三萬六千百四十斤**

【蔬　菜】臺灣在來の蔬菜は、共の種類三四十種に達するが、多くは內地人の嗜好に適しないので、內外から良種を入れ栽培を奬勵した結果、近年大いに見るべきものがあり、昭和三年には**一千百七十萬六千六百十六圓**の生産があつた。就中大根（約百五十萬圓）、大芥菜（オホカラシ）（約百二十八萬圓）、胡蘿蔔（ニンジン）（約八十七萬圓）、甘藷（約八十萬圓）等はその主要なるものである。夏季は少く冬季の産出多い故內地に於て共だ歡迎される。

【畜　牛】臺灣の畜牛は主として水牛と黃牛の二種で、內地に於ける馬匹の如く專ら農耕と運搬用に使役される。他に洋牛と雜種牛があつて乳用其の他に使用される。

水牛は本島畜牛中最多數を占め、共の性溫順、體軀肥大、力强くして粗食に耐へ、耕作上必要な家畜である。黃牛は體軀大小不同であるが、水牛よりも一般に小さい。之れ亦性質柔順、力は水牛には及ばないが、而も水牛に比し動作が敏捷なので、農耕以外運搬用にも使用される。印度牛は黃牛改良の目的で輸入されたものである。洋牛と雜種牛は現在の頭數五千五百六十三頭で、共の過半は乳用である。尙本島に於ける搾乳業の現狀を言へば、同業者四十九戶、乳牛六百頭、搾乳量四千七百石、價額**四十二萬三千七百圓**を算する。明治三十年は之れ等の畜牛總數十九萬二千八百二十五頭であつたが、爾來逐年增加して昭和三年には**三十八萬七千九百四十四頭**に上り、內水牛二十九萬五千八百八十七頭、黃牛八萬六千六十一頭、洋牛、印度牛、雜種牛合せて五千九百九十六頭である。

【養　豚】豚肉は臺灣人の最も重要な副食物で、需要頗る多く農家の副業として每戶必らず數頭を飼育してゐる。明治三十二年の飼養數は四十七萬九千百七十七頭で、屠殺數は二十二萬九千五百八頭であつたが、昭和三年には飼養數百七十一萬八千三百二十四頭、屠殺數百六萬一千七百二十三頭及び此の價額約**三千百五十二萬一千六百六十四圓**に上つてゐる。

【家禽類】昭和三年末家禽類の飼養數は、鷄四百六十三萬九千百五十六羽、鴛百四萬二千二百五羽、鶩二十一萬八千三百七十五羽、七面鳥四千五百五十一羽を算する。

【蠶　業】臺灣に蠶業を奬勵してから十七年になるが、それ迄は本島に生産業としての蠶業がなかつたため、農家が共の副業としての價値を認める迄に彼是十年間を費した。共の後漸く農家の注目するところとなり、次表の如く近年は異常の發達を見るに至つた。將來副業として農家經濟に寄與すること尠なからぬものがあると思ふ。昭和三年度の蠶繭額は新竹州、蕃界（全島）、高雄州、臺北州、花蓮港廳の順序であるが總督府に於ては蕃界の蠶業に對しては、最も囑望されて居るのである。

▲本島に於ける産繭額累年表

年次	産繭高	備考
明治四十四年	三、〇〇〇石合	奬勵の前年
大正元年	八四、〇〇〇	大正元年より奬勵
同　六年	七六、三〇〇	
同十一年	一、〇八四、四八〇	
同十四年	二、一六六、三九〇	
昭和元年	二、四六二、六三〇	
同　二年	二、九八二、一二三	
同　三年	一、三五二、三〇六	

【蠶　種】蠶種は大正十年度以來本島に適應せる强健種を選出してから非常に蕉蠶を減じた。本島所要蠶種の半數は此の蠶種を蠶産局蠶業所に於て製造配付し、不足の分は之れと同一系統のものを內地の製種家に製造せしめ之れを移入して繭質の統一を圖つて居るのである。

糖業

臺灣の糖業は、漢民の移住と共に傳はり、西曆一六二四年蘭人占據の際に、既に砂糖は本島の主要貿易品として算へられ、爾來常に本島産業の首位を占め來つたものである。然かし我が領臺當時は年産僅に八、九千萬斤の粗糖に過ぎず、其の栽培、製糖共に舊習を套襲し少しも改進の跡の見るべきものが無かつた。一方當時の內地に於ける砂糖の需要額を見るに、一ヶ年約五億斤を超えるに、需要の四分の三は之れを海外の供給に俟たねばならなかつた。されば本島の糖業界には自ら大なる使命の存するものあるを以て、總督府に於ては積極的の改良施設を試み以つて其の缺を補ふは勿論、進んで海外にも輸出せんとの計畫を立て、之れが改良と擴張とに最善を盡した結果、今日の如き大進歩を來した。斯の如き我が糖業の大進歩は、啻に外糖を驅逐して巨額の正貨の海外に流出するを防止したのみならず又た本島の開發、經濟財政、交通運輸其の他の進歩發達に益したところ甚大である。

【糖業奬勵規則】 砂糖に於ける我國の需給關係は上述の如き狀態なるを以て、積極的に之れが保護奬勵の必要を認め、農學界の權威新渡戸博士をして各國の糖政を調査せしめ、其の獻策に基き糖業奬勵の規準として明治三十五年六月本規則の發布を見るに至つたのである。即ち其の要旨は甘蔗苗費、肥料費、開墾費、灌漑排水費、製糖機械器具費に對して奬勵金を下附し、若くは現品を下附又は貸付して砂糖農工業各方面に對し、汎く補助奬勵を行ふといふに在つて、發令以來昭和二年度迄に交付した奬勵金總額は**一千二百七十五萬四百九十二圓**の多額に上ぼれり。

【蔗苗取締規則】 總督府の奬勵策は善く時機に適中し、斯業勃興の機運を與へ年々隆盛に向ひたりしが、偶々明治四十四年と大正元年とに於ける數回の風水害のため、大いに蔗苗の不足を來し、糖業者は其の不足分を島外に需めざるを得なかつた。是れ一面には蔗苗改良の意味をも含むが、又た同時に病蟲害傳播の危險をも伴ふを以て、大正三年四月取締規則を設け蔗種、蔗苗の輸入に際しては檢査を行ふのみならず、之れを栽える苗圃は必らず他の蔗園と隔離することゝし、採苗搬出に際しても亦嚴密な檢査を行ひ、以て病蟲害傳播の防止を圖り今日に及んで居る。

【蔗苗養成所】 本島現在の製糖全能力に適應すべき原料を得んとすれば、甘蔗の植付は年々**十二萬甲**內外でなくてはならぬ。然るに當初蔗苗の供給は屢々暴風に妨げられて著しく不足を告げ、已むを得ず不良蔗苗を使用したから、年と共に品種惡變の歎れを來した。依つて之れを防遏し進んで其の更新を圖り、優良なるものを養成繁殖して配付するの必要上、大規模の官營甘蔗苗圃を設くるの必要を認め、大正二年九月臺中州管內に初めて蔗苗養成所を設けたが、現在に於ては左の如くである。

一　大南庄蔗苗養成所　所在　臺中州東勢郡新社庄大南耕地九百六十六甲
一　后里庄蔗苗養成所　同　同　豐原郡內埔庄同六百五甲
一　東部蔗苗養成所　同　花蓮港廳鳳林區林田村同約六十甲

蔗苗養成所で生産した苗は之れを各新式製糖會社の所謂中間苗圃に配付して栽培繁殖せしめ、更に會社は之れを所屬區域內の農民に無償で交付するの義務を負ふもので、斯くして區域內の蔗苗を三年以內に改良更新し、年々續行して惡變を防止せんとするものである。又斯の增殖普及すべき蔗苗は、外國から輸入の優良實生品種か、又は中央研究所農業部糖業科にて育成した新品種であつて、無病健全の苗を限り養成所にて三年一輪作に於て年々約五百甲宛の植付經營をしてゐるのである。斯くして增殖普及を計つた結果、優良實生種の普及は今や全植付面積の九割を超え着々其の目的を達しつゝある。即ち大正五年度斯の種の配給を始めてから、昭和三年度に至る優良蔗苗配付の總高は、實に**四億二千九百八萬三千三百十本**に上れり。

【糖業研究機關】 明治三十五年糖務局の設置に續いて、甘蔗栽培試驗の機關として、同局附屬大目降(現臺南州新化)に甘蔗試作場を設け、三十九年七月には糖業技術者を養成すべき糖業講習所を之れに併置し、又た製糖工場をも附設して之れを糖業試驗場と改稱した。然るに大正十年に至り中央研究所の設けらるゝや、農業部糖業科として是れに統一せられたが、是れ本島糖業に關する一切の試驗研究の中心機關であつて、我が糖業今日の發達に貢獻した所甚大なるものがある。又本島産糖額の增加するに隨つて、內外國に對する砂糖の取引は漸く頻繁ならんとする故取引の發達促進上、豫め糖分を檢定して之れを公證するの必要を生じたから、明治四十五年四月高雄に殖産局附屬檢糖所を設け、各種砂糖と肥料の分析檢證の機關となし來つたが、大正七年四月總督府研究所に併合し、今日にては中央研究所の支所となつてゐる。

【品種の改良】 蔗苗改良の施設に就ては前項に略說したが、以上其の改良の次第を述べよう。

本島在來の甘蔗とは竹蔗、紅蔗、蚋蔗等で品質も良からず、甲當り收量も少なく含糖分にも乏しいから、先づ之れを改良せんとして、布哇其の他糖業地から各種の蔗苗を輸入し試驗を重ぬるところがあつた。然るに其の結果は布哇産**ローズバンブー**と**ラハイナ**の二種最も良く本島に適し收量も在來種に二三倍するを確め得た故、其の種苗を繁殖配付し栽培希望者には種苗費を補助して專ら之れが普及を圖つた。

されば明治三十五年期には其の作付僅に三十七甲に過ぎなかつたが、大正五年期には全甘蔗作付の九割四分を占むるに至つた、されど是れ等の改良種も栽植年久しきと選擇充分でなかつた結果、惡變化を來し且つ暴風雨に對する抵抗力弱きを以て、更に優種を選ぶの必要に迫られ、研究の結果新らたに輸入せられたものは布哇實生種である。斯くして蔗苗養成所の設置となり、中間苗圃の設置補助となり、蔗苗三年更新の計畫となつたのである。

前述の如き幾多消長を經過せし後ち各製糖會社は、蔗苗養成所から配給された蔗苗を、更に自社の中間苗圃に於て栽培繁殖し、之れを一般農民に無償にて配付し、蔗苗の更新と優良種の普及とに努むることゝなりたる結果、三十六年期の甘蔗作付總面積は僅に一萬六千餘甲に過ぎなかつたものが、最近は年々十萬甲內外に達して居る。現在に於ける植付品種は瓜哇實生種、中大莖種全盛を極め、其の成績は遙かに從來の品種を凌駕し、灌漑排水其の他肥培宜しきを得るに於ては、一甲當り十五萬斤乃至三十萬斤の收穫を擧げ得るので、先づ中北部水田地方より漸次全島に普及し、昭和四—五年期蔗園は全植付面積の九割以上に上るに至つた。尙中央研究所糖業科に於ても着々臺灣獨特の有望なる新品種が出現することゝなるであらう。而かして世界屈指の産糖國に數へらるゝも、又た遠きにあらざる可し。

【蔗園の改良】 甘蔗耕作上灌漑排水の設備は最も緊要なるも、本島在來の蔗園には殆ど其の設備を見なかつた。だから總督府は明治三十五年度以降工費を補助して、井戶、埤圳水路の開掘、修繕をなさしめたが、此の種の事業は大なる資本と長日月とを要するを以て、官民協力して漸次計畫實行の擧に出づるの他はない。依つて明治三十四年以來一方には民設埤圳の改善擴張を圖らしめ、他方には官設埤圳の開鑿を計畫し、四十一年から實行しつゝある。是

等の埤圳は甘蔗作のみに限らず、米作にも利せんが爲めのものであるが、特に蔗園の灌漑排水の爲めには、四十三年以來工費の五割以内の補助を與へ、以て之れを奬勵した結果、昭和三年度迄の灌漑排水工事施行面積は**十萬八千七百四十五甲**に上る。

【植付と收量】 以上の如くにして我が甘蔗耕作は植付に於ても、生産に於ても、年と共に發達し來つたのは左表に示す如くである。

但し一時單位面積の收量は、反つて逆行の傾向を來した感があつたが、最近數箇年に至つては、各製糖業者の農事方面に對する緊實なる經營方針と蔗農の甘蔗耕作に對する自覺とは、天候の宜しきと相俟つて甲當り收量は漸次向上の傾向を示して來た。

【砂糖工業】 領臺當時の糖業界は、其の甘蔗耕作方法の幼稚であるが如く、製糖法も亦極めて幼稚で、**一千百餘**を算する工場中、一の新式機械を使用するものなく、何れも畜力を以て動力とした。されば壓搾力不充分にして多量の糖分を逸し、而かも其の品質不良にして市價騰らず、勤もすれば當業者の損失を來したから、糖務局の創設と共に此の方面の改良にも大いに盡力した。然かしそれは新式機械を裝置した大規模の工場で始めて出來ることであるが、當時は未だ匪亂全く鎭まらなかつたから、內地資本家も大資本の投下を欲せず、依つて先づ後項に述ぶる改良糖廍の設立を奬勵したが、果せる哉、豫期の如く斯業の勃興を來し、其の間に事情も一變して新式製糖工場も續々設立せられ、終に今日の盛況を見るに至つた。以下最新の創設たる白糖氷糖の工場をも併せ之れを說明しよう。

【舊式糖廍】 今日では多く山間の僻地に在る。二輪石車若くは三輪鐵車を畜力で回轉せしめ、甘蔗を壓搾して得た糖汁を六箇乃至十箇の平鍋にて煮詰め之れを冷却槽(打糖槽とも稱す)に汲み揚げ、攪拌冷却乾燥せしめて赤糖を製造する工場で、壓搾能力は石車のものは一晝夜原料甘蔗一萬二三千斤、鐵車にあつては二萬四五千斤、一期間に於ける製糖高は前者は平均五六百擔、後者は二千擔を普通とする。上述の如く此の種の製糖場は以前は其の數一千を超えたが、改良並に新式製糖場の設立と共に漸次減少して、昭和三年期には百三十五箇所、翌四年期には九十七箇所を算するに過ぎぬ。

【改良糖廍】 改良糖廍とは、壓搾機と原動力機とを改良して、新式機械とし其の他は在來の儘の一部新式製糖場を謂ふ。此の工場に於ける製糖法は、壓搾して得た糖汁で舊式糖廍同樣の操作により赤糖を製造するもので、壓搾能力は四十噸乃至二百噸である。此の種の製糖場は未だ大規模の新式製糖場を設立し得なかつた本島糖業勃興の當初に於て、在來の最も不經濟な壓搾裝置の改善によつて砂糖歩留の向上を圖り、以て糖業の發達に資せんとして起つたもので、明治三十七年に創められ、最盛期なる四十四年期には其の數七十四箇所、壓搾能力**六千百三十噸**に上つて居た。しかし畢竟過渡時代のものであるから、新式工場の勃興と共に漸く衰へ、昭和二年期及び三年期夫々九箇所能力六百噸に減退した。其の將來は舊式糖廍と共に過去の遺物たるに止まるも地域狹く交通不便の地には、運搬輸送の關係上全然廢止さるゝには至るまい。

【新式製糖場】 新式製糖場とは最も進歩したもので、三重乃至四重壓搾機、加熱機、清淨槽、三重乃至四重效用罐、結晶罐、結晶機、分蜜機、汽繰等の諸裝置を備へ、大量生産をなすべき組織のものである。壓搾能力は一日三百噸から三千噸にも及び、主として分蜜糖(又た粗糖)の製造に當る。其の設立は明治三十四年中臺灣製糖會社を以て始まり、後ち我が糖業の有利なことが、內地資本家にも認めらるゝに至つて漸く其の數を增加し、更に日露戰後財界の好調は競うて此の方面に資を投ぜしめ、其の新設若くは擴張を企てるもの續出し、一躍世界產糖國の班に列するに至つた。昭和三年期及び四年期何れも現存工場四十六、能力**二萬五千六百五十**英噸と**一萬三千五十**米噸であるが、更に增設又は擴張を計畫實現しつゝある。

【耕地白糖】 新式製糖工場中、一部機械の裝置と製糖の操作とを變じて、甘蔗汁から直接白糖を製造するものがある。是れ所謂耕地白糖であつて、今此の種裝置を有する工場と、其の最近五年期製造高とを表示せば左の如くである。而して嗜好の向上と時勢の推移に伴ひ、斯の種白糖工場並に生產高は將來益々增加の趨勢にある。

【再製白糖】 主として爪哇原料糖又は本島產若くは玖瑪原糖を溶解し、耕地白糖製造裝置を利用して白糖を製造し、主に支那に輸出するもので、砂糖市況の關係上各年共の製造量を異にするが、昭和三年期には**一千九百四十六萬三千二百七十九斤**を製造した。

【氷糖製造】 氷糖は白糖若くは精製糖を原料として製造する。鹽水港製糖會社高雄氷糖工場に於て之れを製造し、大正十五年期**十一萬六千九百斤**となつてゐるか。昭和二年期以降之れを休止してゐる。

【糖蜜】 分蜜糖製造の際に生ずる糖蜜は、酒精原料、飼料、肥料其の他利用の範圍は頗る廣い。糖蜜產額は昭和三年期二億五千七百二十四萬三千餘斤、同四年期**三億三千三百十七萬六千餘斤**に上つてゐる。

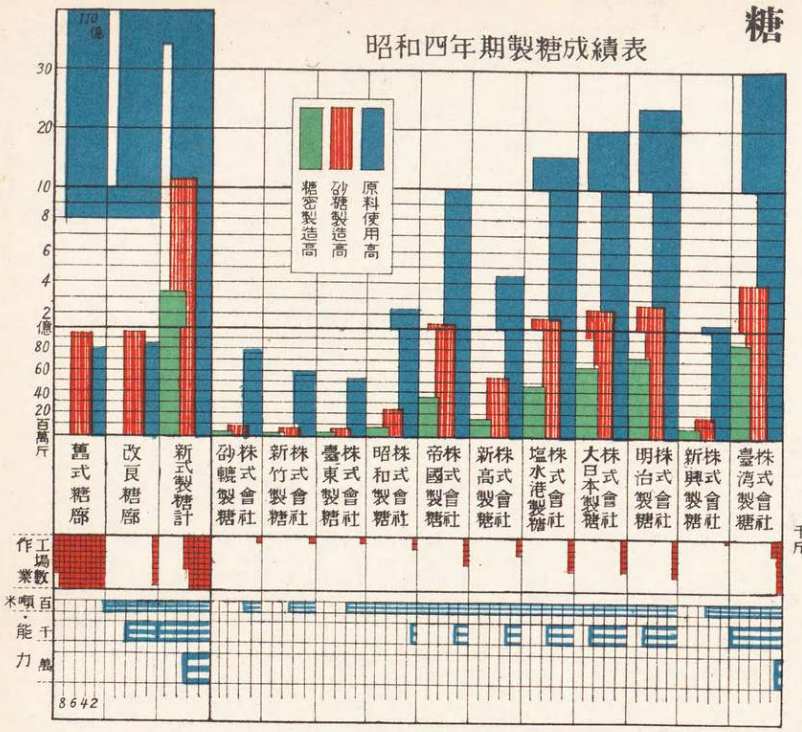
【糖業の概況】 最後に我が糖業の現況を概括すると、明治三十五年期には甘蔗の收穫面積二萬六千六百七十甲、新式製糖場僅に一箇所、能力二百噸であつて、資本金百萬圓に過ぎなかつたものが、昭和二年期には新式工場の運轉せるもの四十五工場、能力三萬九千四百三十四米噸となり、資本總額も亦二億九千五十一萬圓に增加し、翌三年期に於ては、會社の整理合同等により、資本金**二億八千二百八十六萬六千六百圓**となり、工場の增設擴張を企畫するに至つた。全島產糖總額は明治三十五年期には九千萬斤であつたものが、昭和三年期には一躍九億六千六百七十五萬餘斤に激增し、更に昭和四年期には優に十億を突破して、其の數**十三億一千五百五十四萬餘斤**に及ぶ新記錄を示すに至つた。

◇甘蔗植付面積及び收量累年表

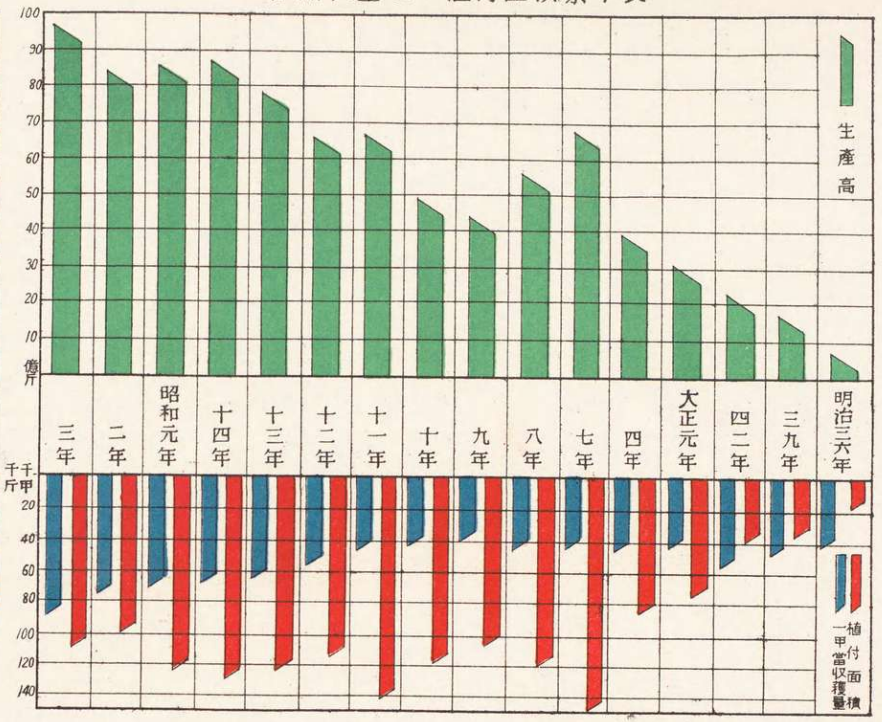
年別	植付面積	甘蔗生產高	一甲當收穫量	年別	植付面積	甘蔗生產高	一甲當收穫量
明治三十六年	二六、五六六甲	六八三、二七七、九〇三斤	四一、三八斤	大正十年	二九、八八八甲	四、九二八、三三五、〇七七斤	四一、九二斤
同三十九年	三三、二八九	一、九〇〇、〇六一、七四〇	四八、〇五五	同十一年	二四三、〇三三	四七、五四四、八三六、八三六	四七、〇五四
同四十二年	三九、〇五五	二、三九四、七二一、四二一	五六、八九八	同十二年	二六六、六三〇	六二、八三三、八四三	五六、八七七
大正元年	五五、三九五	三、一五九、五九八、五九九	五七、三〇五	同十三年	二三三、三三五	七七、七六三、八八八、五八三	五三、一四三
同四年	八五、一五〇	三、八三三、八〇五、七八〇	四五、〇五〇	同十四年	二三〇、三三二	八、八五九、八三三、八四三	五七、八〇五
同七年	一三〇、四五〇	六、八一七、五三五、七〇九	五二、三四	昭和元年	二三三、九五二	八、六二〇、一四四、〇九九	六六、四四三
同八年	一二〇、四一〇	五、六二二、三九九、〇三二	四九、九六八	同二年	九九、六四〇	七、四三〇、四八〇、九七七	七四、四三六
同九年	一〇八、三五六	四、六五二、五六六、六五三	四〇、四六八	同三年	九〇、三四二	九、六四四、九六六、〇五三	八九、六五三

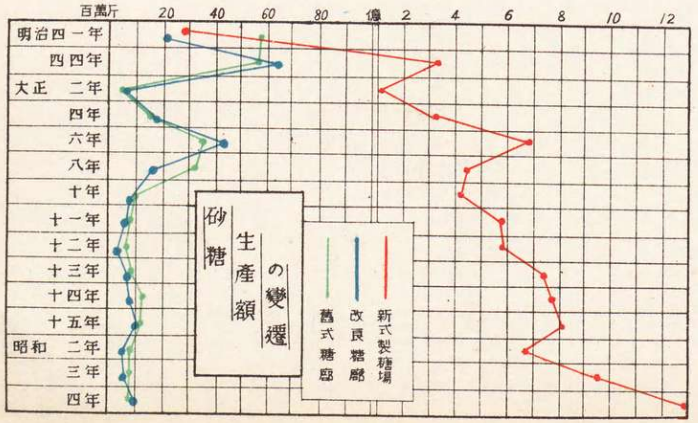
糖業

昭和四年期製糖成績表



甘蔗收量及び植付面積累年表





◇砂糖生産額の變遷

年期（自明治三十七年至昭和四年）	新式製糖場	改良糖廍	舊式糖廍	製糖高計
明治三十七年	三、〇六〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	五、一〇〇、〇〇〇斤
同四十一年	三、〇六〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	五、一〇〇、〇〇〇斤
同四十四年	三、〇六〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	五、一〇〇、〇〇〇斤
大正二年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同四年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同六年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同八年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同十年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同十一年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同十二年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同十三年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同十四年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同十五年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同昭和二年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同三年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤
同四年	一〇、二〇〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤	一二、二四〇、〇〇〇斤

◇昭和四年期製糖成績表（自昭和三年十一月至昭和四年十月）

會社	工場數	作業日數	原料使用高	砂糖製造高	糖蜜副産高
臺灣製糖株式會社	三	二六〇	三、〇六〇、〇〇〇斤	三、〇六〇、〇〇〇斤	一、〇二〇、〇〇〇斤
新興製糖株式會社	一	一八〇	一、一〇〇、〇〇〇斤	一、一〇〇、〇〇〇斤	三六六、〇〇〇斤
明治製糖株式會社	一	一九〇	一、一六〇、〇〇〇斤	一、一六〇、〇〇〇斤	三八六、〇〇〇斤
大日本製糖株式會社	二	二一〇	一、二八〇、〇〇〇斤	一、二八〇、〇〇〇斤	四二六、〇〇〇斤
塩水港製糖株式會社	二	二一〇	一、二八〇、〇〇〇斤	一、二八〇、〇〇〇斤	四二六、〇〇〇斤
新高製糖株式會社	一	一九〇	一、一六〇、〇〇〇斤	一、一六〇、〇〇〇斤	三八六、〇〇〇斤
帝國製糖株式會社	一	一九〇	一、一六〇、〇〇〇斤	一、一六〇、〇〇〇斤	三八六、〇〇〇斤
昭和製糖株式會社	一	一九〇	一、一六〇、〇〇〇斤	一、一六〇、〇〇〇斤	三八六、〇〇〇斤
臺東製糖株式會社	一	一九〇	一、一六〇、〇〇〇斤	一、一六〇、〇〇〇斤	三八六、〇〇〇斤
新竹製糖株式會社	一	一九〇	一、一六〇、〇〇〇斤	一、一六〇、〇〇〇斤	三八六、〇〇〇斤
砂糖製糖株式會社	一	一九〇	一、一六〇、〇〇〇斤	一、一六〇、〇〇〇斤	三八六、〇〇〇斤
新式製糖計	一三	二、四七〇	一四、八二〇、〇〇〇斤	一四、八二〇、〇〇〇斤	四、九四〇、〇〇〇斤
改良糖廍	七	一、三三〇	七、九八〇、〇〇〇斤	七、九八〇、〇〇〇斤	二、六六〇、〇〇〇斤
舊式糖廍	一	一九〇	一、一四〇、〇〇〇斤	一、一四〇、〇〇〇斤	三八〇、〇〇〇斤
合計	二一	四、〇九〇	二四、五四〇、〇〇〇斤	二四、五四〇、〇〇〇斤	八、一八〇、〇〇〇斤

臺灣總督府調査

林業

【大森林】 海拔八、九千尺乃至一萬二三千尺の高峰が、南北を一貫する臺灣に在つては、熱帶林あり、暖帶林あり、溫帶林あり、寒帶林がある。各種各樣の樹種、樹林が、全島面積の約七割を占め高山蕃地の間に今日尙蔚然として繁茂し頗る雄大なるものであるが、未た濫伐の行はれなかつた昔日に在つては如何に壯觀を極めたかを知る事が出來よう。

【森林の分布】 現存せる自然林中最も大なるものを擧ぐれば、(一)南部に在つては大武山より恒春半島の脊梁をなす中央山脈一帶の濶葉樹林、(二)中部に於ては西面に阿里山より新高山の西北面に連る針葉樹の大森林、之れに對する轡大山の森林、又八仙山の森林と相對し大雪山の森林、(三)東面には丹大山より能高山に至る中央山脈の東方即ち、馬太鞍溪、萬里橋溪、チヤカン溪木瓜溪域の大森林、(四)北部にては鹿場大山、宜蘭濁水溪流域、棲蘭山の針葉樹林、それに油雞山、阿玉山の濶葉樹林がある。

【造林】 臺灣の位置は熱帶と暖帶とに跨るが、高山に登るに隨つて溫帶及び寒帶を生じ、氣候、風土等內地と異るものがあるから、其の樹種、樹性も亦異り內地の造林法を其の儘に襲用する事が出來ぬ。臺灣造林の現狀を略說せば樟樹造林は明治四十年臺灣樟樹造林奬勵規則施行せられ、樟苗の下附又は土地の貸付を受け、成功の後無償にて所有權の付與を受くる者、又は右許可地外と雖も造林に對し樟苗を下附せし等充分なる保護奬勵の結果、昭和三年度末現在の造林面積は二四、四一甲餘に達するに至つた。

【林産物拂下】 林産物の拂下に對しては、既に明治二十九年中から特賣の方法を開始し來つたが、當時は街庄部落の附近に存する森林の産物を處分するに過ぎず、其の收入も些々たるものであつた。然るに爾來蕃地の開發と産業の發達とに伴うて、建築、土工、鐵道枕木、電柱腕木、下駄齒用材、製糖燃料等の需要漸增し、最近に至つては毎年度二十五萬圓內外の收入を持續しつゝある。今明治四十三年度及び最近七箇年の林産物拂下價額を摘記すると左表の如くである（圖表參照）

【阿里山斫伐事業】 阿里山は臺南州管內に在つて、鐵道本線嘉義驛の東方四十四哩、新高山の西から脈々として相連り、北緯二十三度半即ち北回歸線に蟠つた如く其の位置を占めてゐる。東西二里、南北五里、面積一萬二千二百三十三町歩、海拔二千八百尺から八千七百尺に及ぶ。故に其の氣候は盛夏七月と雖も華氏最高七十度內外、冬季一月も最低三十六度內外、一年の平均溫度は五十五度內外で誠に絕好の健康地帶である。

【樹木の分布】 其の樹木の分布を概言すると、海拔六千尺の頃迄は暖帶林で、それから上は溫帶林となり、六千尺頃からは紅檜を混じ、七千尺の頃に至つて紅檜と扁柏の純林となり、八千尺にして栂松を混じ、眞に靈尙ほ暗い鬱蒼たる千古の大森林となつてゐる。されど此の大山中に藏する幾多の樹木中、最も價値あるは扁柏と紅檜とで、前者は木質緻密、淡紅黃白色を帶び芳香を有し內地産の檜に比し稍々黃味强きも工藝上何等の差異はない。又紅檜とは本島特有の樹木で淡褐紅色を帶び、質輕くして一種の香氣がある、蟻害に耐ゆる事も又た此の木の特色である。

【製材】 木材搬送には、先づ架空式の鐵索集材機を以て、半徑三千尺以內にある伐木せる丸太材を鐵道沿線に集め、一輛平均二十四石見當で積込んだ貨車を、一日、三四列車の割で、山元と嘉義貯木場との間を運轉する。貯木場構內には嘉義製材工場がある。

【事業の經過】 明治三十九年以來大阪藤田組の經營であつたが、第二十六議會（四十三年）に同社の補償金百二十萬圓創業費三百七十萬圓の協贊を得、阿里山作業所官制の發布と共に、事業經營の歩を進められ、大正九年度中阿里山作業地を指定さるゝと共に、阿里山鐵道及び植林地域をも指定された。其の面積は五千五百三十九町歩である。事業の累年成績は圖表に示す。

【八仙斫伐事業】 西部本線豐原驛より大甲溪に沿ひ、遡ること約二十里の地點に在つて、中央山脈の中部、合歡山から西に分岐した支脈中の最高峰、白姑大山の西方に連る大森林である。北港溪と大甲溪とは南北の境をなし、作業區域は東西約四里、南北三里、其の面積と蓄積とは圖表の如くである。

【事業の經過】 大正四年七月中事業に着手したりしか、蓄情の不穩其の他の支障等の爲め施設上に手後れを來たし、十一年度に至つて漸く工事全部の完成を告げ、且つ其後蓄情の靜穩と相俟つて、各般の施設漸次改善せられ事業の基礎漸く安定し、最近又貯木場を縱貫鐵道豐原驛附近に移して、販賣上の便益を計るに至つた。創業年及び最近七箇年の事業成績は圖表の如くである。

【濁水溪斫伐事業】 臺北州宜蘭街に近く、濁水の濱々として流れる一大溪流の兩岸に沿つた大森林で、地形は西南より東北に長く、東北約十二里、西南五里に亘り、山麓の低地熱帶林から海拔一萬二千四百尺に及ぶ南湖大山の寒帶林に出る迄、全山殆ど斧鉞の跡無く、眞に千古の大樹林で、其の蓊鬱たる翠色に滿つるの偉觀は他に類を求むるを得ないだらう。其の茫々際涯を知らない大面積と阿里山にも倍加する大蓄積とは左表に之れを窺ふべきである。

【事業の經過】 此の大森林が、林相の美にして蓄積の豐富なことは、久しく喧傳されたところであるが、地は蕃人中に於ても最も兇猛を以て聞える溪頭蕃人の根據地であつた丈けに、僅か其の一小部分を遠望するに止まつて、又如何ともするを得なかつた。然るに討蕃の大業も、大正三年を以て一段落を告げ、同十月中實地踏査を行ひ、翌大正四年十月愈々事業に着手するに至つた今や二十二哩餘の鐵道を布設し、倘木材輸送の傍ら貨物の託送及び旅客の便乘取扱を開始すると共に、最近山內に集材機を設置し、且各所に索道及びインクラインを新設して、作業能率の增進と、生産費の節減を計る施設をなすに至つた。創業年並に最近七箇年の事業成績は圖表の如くである。

【製材處分】 上述の三大森林から生産する木材は、何れも扁柏と紅檜材とを主とし、其他亞杉、栂、姬子松、香杉（臺灣大杉）等をも伐採して丸太、柚角若くは製材品（機械製材は嘉義工場のみ）とする。其の材質は上來述べ來たつたところに依り明らかなる如く、各種建築、土木、車輛、家具、艦船用材等の孰れとしても可ならざるはないが、就中近年內地に於て長大な直幹に缺乏を告ぐるに至つた結果、艦船甲板等の用材若くは宏壯雄大を要する神社佛閣の建築材より、大華表の用材等に重用さるゝことは、既述の如くである。

【販路】 されば以上三大森林中、最初の生産たる阿里山材が始めて市場に提供せらるゝや、世人は其の眞價を疑つたが、大正四年以後に至つて漸く一般の認むるところとなり、新販路は益々開かれ、島內に於ける各官廳共の他の大建築は勿論、內地に於ては橫須賀、吳、佐世保の各海軍工廠、鐵道省、明治神宮、以下關東、關西、九州各地の造船、若くは建築用材として需用益々加はり、更に滿鮮支那方面より、遠く歐洲、印度、南阿、濠洲方面にて試賣をした結果甚だ有望とされ、殊に大正十一年度以來北支及び南支地方に檜出せる香杉の如きは頗る好評を博したものである。香杉は天津地方に於ては、櫻木と稱し恰も日本人の檜に於けるが如く貴重材の一に數へられてゐる程であるから本材の將來は甚だ刮目すべきであらう。

圖表對照統計

◇林産物拂下表

年次	樟腦原料として拂下げ	普通の主副産物	計
明治四十三年	一三、一一五円	四八、三三四円	一九、四七八円
大正十年	三六、四六四	三四六、九四九	三八二、四一三
同十一年	三六、三〇六	三四六、四八六	三八二、七二一
同十二年	三六、九七七	三四七、一四三	三八四、一二〇
同十三年	三六、〇三三	三四七、六七四	三八三、六八七
大正十四年	三〇、三三一円	三四八、三四二円	三七九、一七三円
同昭和元年	三九、二三五	三四八、七四一	三八八、九七六
同二年	三七、一四〇	三四八、一四〇	三八五、一八〇
同三年	三七、七七四	三五一、三五〇	三八九、一二四

◇阿里山の蓄積と面積表

林種	面積（町）	林種	面積（町）
針葉樹混淆林	一、八二九	草生地	一、五四四
針葉樹混淆林	三三八	合計	二、一〇〇
	四、三〇六		

◇阿里山事業成績一覧表

樹種	本数	材積（石）	樹種	本数	材積（石）
針葉樹 扁柏	三五二、四八三	四、三三、六八三	闊葉樹 楓類	二六七、三五四	三、二五、一六三
紅檜	三五、七八五	三三五、三五三	赤柯	二四七、三五六	三、三六四、七六六
亞杉	三五、〇九一	三三八、三四三	樟	二四五、二三五	六、七九四、三四〇
姫松	一三、八七六	一七九、四二三	楊	四五、八九八	一、二四三、三七八
梅	四八、九九八	六九九、五九九	木	一二、二〇〇	一、一二三、二八七
子	三五、二三〇	四六二、四三五			
計	一、〇六六、四四五				

◇八仙山の蓄積と面積表

種別	面積	蓄積（千石）					材積	價格
		扁柏	紅檜	針葉樹 梅	松	計		
針葉樹 闊葉樹混淆林	二、九五	八六				八六	一、〇三二	一、五九三、六二一円
同上針葉樹の更に疎なるもの	一、六二七	一、三一四	八六			一、四〇〇	一、六八〇、〇〇〇	二、六〇四、〇〇〇
闊葉樹混淆林	一、〇五	九二〇	三五			九五五	一、一四六、〇〇〇	一、七六一、三〇〇
草生地	三、九五							
計	一、六六、五五五	二、二五、七四	九四、三五			二、三二〇	二、七八四、〇〇〇	四、二九五、三二一

年次	伐木造材	搬出高	材賣拂價	材積	價格
大正十年	一、八二、一三五石	一、八二、一三五石	一、五九三、六二一円	一、八二、一三五石	一、五九三、六二一円
同十一年	一、四一、四六四	一、四一、四六四	一、二四一、〇九七	一、四一、四六四	一、二四一、〇九七
同十二年	一、三〇、〇九四	一、三〇、〇九四	一、一四二、三二五	一、三〇、〇九四	一、一四二、三二五
同十三年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同十四年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
昭和元年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同二年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同三年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五

◇八仙山事業成績一覧表

年次	伐木造材	搬出高	材賣拂價	材積	價格
大正十年	一、八二、一三五石	一、八二、一三五石	一、五九三、六二一円	一、八二、一三五石	一、五九三、六二一円
同十一年	一、四一、四六四	一、四一、四六四	一、二四一、〇九七	一、四一、四六四	一、二四一、〇九七
同十二年	一、三〇、〇九四	一、三〇、〇九四	一、一四二、三二五	一、三〇、〇九四	一、一四二、三二五
同十三年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同十四年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
昭和元年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同二年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同三年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五

◇濁水溪の蓄積と面積表

種別	面積	蓄積（千石）					材積	價格
		扁柏	紅檜	針葉樹 梅	松	計		
針葉樹 闊葉樹混淆林	二、九五	八六				八六	一、〇三二	一、五九三、六二一円
同上針葉樹の更に疎なるもの	一、六二七	一、三一四	八六			一、四〇〇	一、六八〇、〇〇〇	二、六〇四、〇〇〇
闊葉樹混淆林	一、〇五	九二〇	三五			九五五	一、一四六、〇〇〇	一、七六一、三〇〇
草生地	三、九五							
計	一、六六、五五五	二、二五、七四	九四、三五			二、三二〇	二、七八四、〇〇〇	四、二九五、三二一

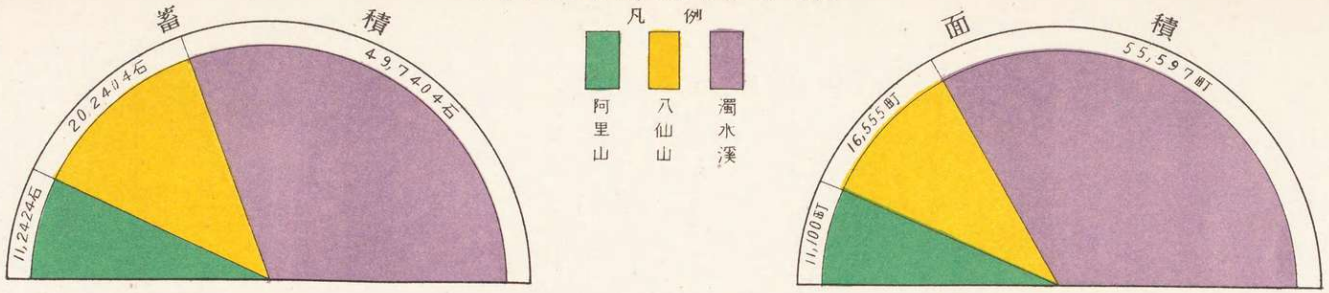
年次	伐木造材	搬出高	材賣拂價	材積	價格
大正十年	一、八二、一三五石	一、八二、一三五石	一、五九三、六二一円	一、八二、一三五石	一、五九三、六二一円
同十一年	一、四一、四六四	一、四一、四六四	一、二四一、〇九七	一、四一、四六四	一、二四一、〇九七
同十二年	一、三〇、〇九四	一、三〇、〇九四	一、一四二、三二五	一、三〇、〇九四	一、一四二、三二五
同十三年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同十四年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
昭和元年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同二年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同三年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五

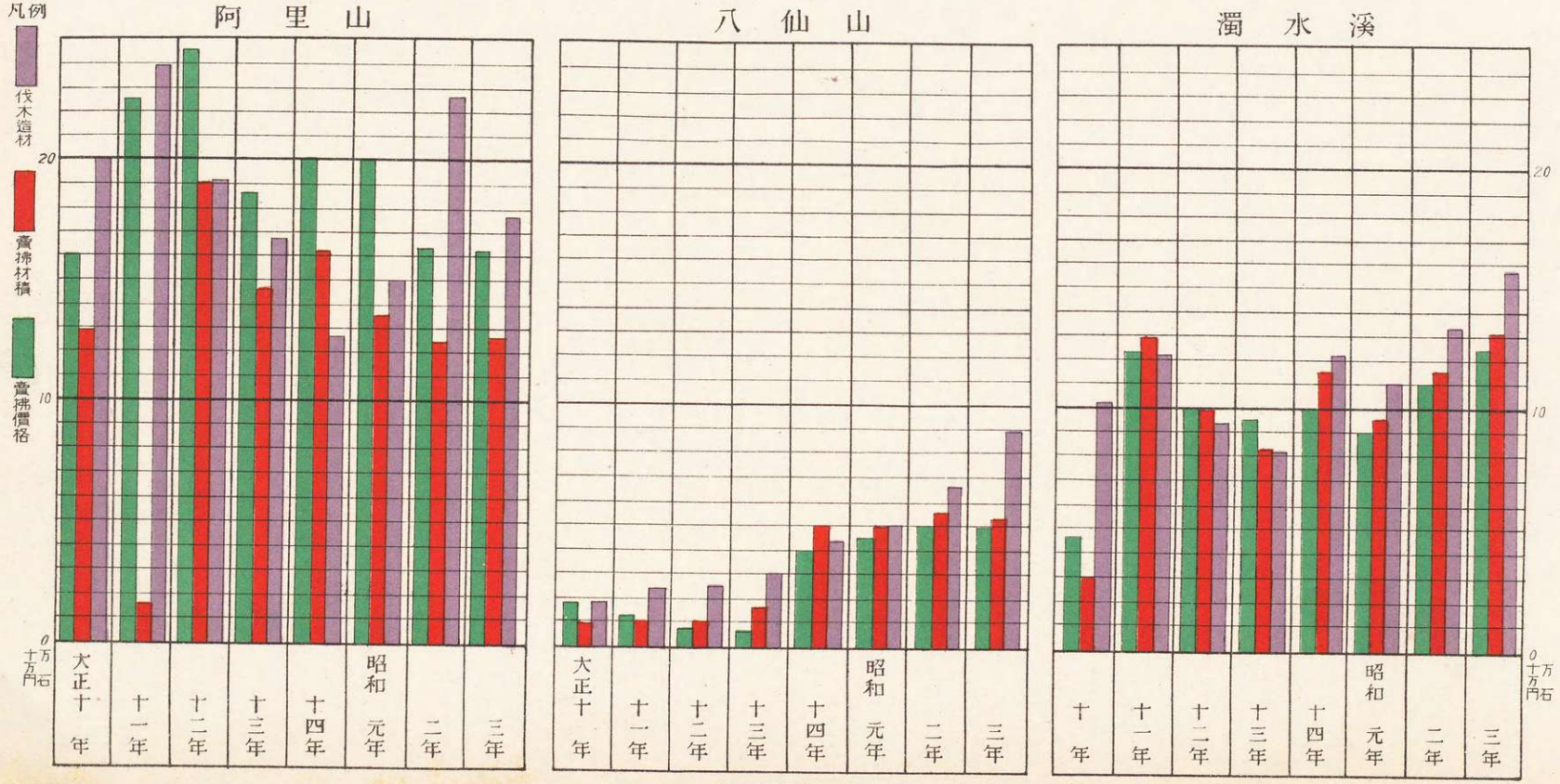
◇濁水溪事業成績一覧表

種別	面積	蓄積（千石）					材積	價格
		扁柏	紅檜	針葉樹 梅	松	計		
針葉樹 闊葉樹混淆林	二、九五	八六				八六	一、〇三二	一、五九三、六二一円
針葉樹濶葉樹混淆林	二、一〇七	一、三一四	八六			一、四〇〇	一、六八〇、〇〇〇	二、六〇四、〇〇〇
濶葉樹生地	一、〇五	九二〇	三五			九五五	一、一四六、〇〇〇	一、七六一、三〇〇
草生地	三、九五							
除計	一、六六、五五五	二、二五、七四	九四、三五			二、三二〇	二、七八四、〇〇〇	四、二九五、三二一

年次	伐木造材	搬出高	材賣拂價	材積	價格
大正五年	一、八二、一三五石	一、八二、一三五石	一、五九三、六二一円	一、八二、一三五石	一、五九三、六二一円
同十一年	一、四一、四六四	一、四一、四六四	一、二四一、〇九七	一、四一、四六四	一、二四一、〇九七
同十二年	一、三〇、〇九四	一、三〇、〇九四	一、一四二、三二五	一、三〇、〇九四	一、一四二、三二五
同十三年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同十四年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
昭和元年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同二年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五
同三年	一、三〇、一〇四	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五	一、三〇、一〇四	一、一四二、四二五

官營山林砍伐事業





臺灣總督府調查

水産

【沿岸】臺灣の沿岸は魚族頗る豊富であつて、北部海面には鰹、鮪、連子鯛、旗魚、珊瑚を産し、東部海岸には鰹、鮪、惣田鰹、飛魚、西部海岸には鰆、鰆、鰯、南部海面には旗魚、鮪、鰹、黄花魚、鯛を産する。就中北部及び南部の鰹、旗魚、鮪及び支那東海を漁場とする連子鯛は本島漁撈生産の最も尤なるものである。然るに始めて我が水産施設を定められた、明治四十三年に在つては養殖業の收獲は百六萬圓で、自ら其の發達の著しきを語るに反し、島の四方を周ぐる漁獲總高は僅に九十六萬圓に過ぎなかつたといふに至つては、如何に從來漁業が開却されたかを想察することが出來る。しかし水産施設の開始以來は別表の通り長足の進歩をなし、昭和三年度の漁獲高は一千二百六十七萬圓に達してゐる。

【鰹漁業】昭和三年度に於ける從業船數は二十隻、此の漁獲高一二、七六三、五〇〇斤に上る、其の内眞鰹五、三二八、〇七七斤、惣田鰹七、四三五、四二三斤とす。漁期は三月上旬から十月中旬に及び、漁夫は内地より招き餌料は主として鰮、鯷、鯵を用ゐる。漁場は北部、東部及び南部の暖流區域一帶に亘り一航海出漁日數は普通四、五晝夜とす。

【機船底曳網漁業】蕃殖保護の見地から許可船數の制限を行ひ、現在は六十組百二十隻に限定して居る。漁獲物は主もに連子鯛、眞鯛、血鯛等で其の他鯵、鯵、鳥賊、蝦、狗母等もある。根據地は基隆で一航海普通十三、四日、一萬圓以上を漁獲する事もある。本漁業の勃興に依り夙て盛況を謳はれた連子鯛延繩漁業は全く衰退した。昭和三年度の收獲高は二百萬圓に上る。

【旗魚、鰹、鮪延繩漁業】基隆、蘇澳、高雄を根據として行はれ、大正八年以來鮮魚の内地移出に依り益々旺盛に向ひつゝある。現在本漁業に從事する漁船は計約二百四十隻に及ぶ。昭和三年度の漁獲高は約百五十萬圓である。

【旗魚突棒漁業】大正十四年以來蘇澳及び基隆を根據として起り、現在約百三十隻を算へ、昭和三年度の漁獲高は八十萬圓以上に上る。

【鰹待網及大敷網漁業】主として東海岸に行はるゝ惣田鰹漁業であつて、一漁期五十萬尾以上の漁獲あることがある。漁獲物は荒節に製造するものと、鮮魚の儘販賣する物と殆ど半々である。

【釣漁業】鯛延繩は沿岸到る處に行はるゝが、基隆、新竹、高雄、東港、澎湖島を主とし、新竹、高雄、澎湖島に於ては近時機船漁業の勃興を見てゐる。鯵空釣は竹筏漁業中最も沖合に出づるもの四、五、六月の頃、臺中、臺南二州の沿岸二三十哩の漁場に行はれ空釣延繩を海中の下層迄垂れる。漁獲物は主として百斤内外のサカタザメ類が主なるものである。

【珊瑚漁業】大正十三年一月下旬、連子鯛延繩漁業に從事中、彭佳嶼近海で偶然珊瑚の小枝を得しより、遂に廣大なる珊瑚漁場を發見したるに始まり、爾後全島を擧げて斯業に沒頭するに至り、一時爲めに魚價の暴騰、鮮魚拂底を來したる程である。昭和三年迄の採取高三百二十六萬圓にして昭和三年度には八十萬圓の採取を見た。

【石花菜】古から行はれ年産約廿五萬斤、臺北州沿岸と澎湖島を主産地とす。

鑛業

【鑛區數と坪數】昭和三年末の現在鑛區數は七百五十三、此の面積**一億九千六百二十八萬三百九十二坪**で、稼業鑛區は百九十一、此の面積七千九百四十九萬二千六百八十八坪である。

【鑛産價額】昭和三年度の鑛産價額は一千六百五十一萬三千三百一圓で、前年に比し四百五十八萬九千三百七十三圓を減少した。明治三十年度及び最近五箇年の鑛産價額を鑛種別に示せば圖表の如くである。（圖表參照）

【主要鑛業】臺灣に於ける有用鑛物の分布を見るに、金屬鑛物は極北部から東部に限られ、石炭は北部と中部に、石油は殆ど全島に亘り、特に中南部に其の兆候著しい。されば極北から東部は金屬鑛物の産地帶、北部は煤田地、中南部は油田地と大別すべきである。鑛産額は年々著しく增加し、明治三十年の總額は僅に十一萬二千圓に過ぎなかつたが、同四十年には二百二十五萬五千餘圓、即ち二十倍餘に上り、僅々二十五年後の大正十一年には一千二百四十八萬圓に達し、實に當年の百十一倍六に上つて居る。

【砂金鑛業】明治二十三年中七堵錢橋を架するに際し、偶々砂礫中より粒狀の砂金を得たのが動機となつて採取勃興し、爾來上流に溯るに隨つて隆盛に赴き瑞芳附近に至つて最も盛況を呈し、極盛期たる明治三十五年の産額は百六十一貫餘、此の價額實に六十萬圓に達した。然るに同年を頂點として其の後は漸く衰へ、昭和三年には二貫七百七十四匁を採取したるに過ぎない。往時は採取者毎日三千人を算したが、現今では八十人内外の狀態である。

【金鑛】金瓜石鑛山は基隆の東方約四里餘、本島の東北端に在り、大正十五年七月より金瓜石鑛山株式會社の計營である、爾來三十年の間に幾多の金及び銅鑛床を發見し、就中三十八年には擴大なる第一長仁坑の硫砒銅鑛床を發見し之れを開掘すると共に更に熔鑛製煉所を新設し、又た會社所屬の汽船數隻を鑛區と内地間に往復せしめ輸送の便を圖り、大正二年には武丹坑鑛山を併合により其の面積は三百四十萬百七十六坪に達せり、其の設備産額共に内地の大鑛山に比し、毫も遜色なし。

【銅鑛業】銅鑛業は明治三十八年中、金瓜石鑛區に含金硫砒銅鑛を發見したのに始まる。其の品質が優良であつたから、金瓜石鑛山では翌三十九年末熔煉作業を開始し、爾來逐年其の産額を增進した。然るに大正十二年下期から金銅鑛石は内地へ粗鑛製煉をなすに至り、從て島内製煉高減少し、唯沈澱銅の採取を行ひつゝあり、昭和三年は沈澱銅十一萬千五百六十八貫、此の金額八萬八千三百九十八圓である。

【硫黄鑛業】硫黄鑛業は遠く西班牙の占據時代に創始されたと傳へられる。後幾多の變遷を經て光緒十三年（明治二十年）に至り、時の道臺劉銘傳は礦腦總局を設け官業とした事がある。我が領臺後は一般に許可されたが、鑛床は概ね分散してゐる爲め大規模の製煉所なく、且連年海外市場の壓迫を受け、發達を阻害せられしが、近年島内の需用も增加し稍々活氣を呈するに至つた。

【石油鑛業】は約八十年前發見せられたる以來幾多の變遷を重ね、大正十二年の大噴油以來益々盛況を迎り、現時日産二百石内外の噴油である。

工業製品

【一般鑛業】本島の工業は製糖を筆頭とし、製茶、酒精、鐵工、セメント之れに亞ぐ製粉、肥料、製油、紡織、醬油、煉瓦、鳳梨罐詰、製氷、過燐酸石灰麥酒、製紙、炭化石灰、石鹸、石灰等で、小工業としては木製品を主とし麵類、製帽、金銀細工、金銀紙、竹細工及び籐細工、靴、線香、製菓、蘭繩及び叺、蓮草紙、蠟燭、靴下等である。昭和三年中の工産總額は二億六千八百萬圓（專賣に屬するものを除く）に達し、前年に比し五千三百萬圓、即ち二割强の增加を示した。但これは砂糖の增産が主因である。工業製品中第一位たる製糖は圖表に示せるを以て第二位たる製茶の昭和三年度の産額を示す。

名稱	數量	價額
烏龍茶	七、九九四、三五五斤	四、三五二、〇六六円
包種茶	七、五二二、三五九	五、四四八、〇七五
紅茶	二、三四一、二〇〇	五四、九五五
綠茶	三一、八〇〇	一七、〇五五
計	一〇、三九九、四六五	一〇、三六二、一五一

圖表對照統計

◇三種水產業產額累年表

年次	漁獲高	製造高	養殖收穫高	計
大正七年	四、〇六四、三三四円	一、三五五、六九九円	二、一六七、三五〇円	七、七八五、六四三円
同八年	五、〇七〇、九六九	一、四二四、四八一	二、四三三、三五八	八、九〇四、七八八
同九年	五、五五九、八〇四	一、三五二、七三一	二、八〇〇、〇六八	八、九八三、〇三三
同十年	五、九四三、三一一	一、六四四、二四一	二、三五二、八五六	九、七六一、一〇二
同十一年	五、九八八、〇九七	二、一〇〇、一九一	二、一三〇、〇五五	一〇、三一八、三三三
同十二年	九、〇三〇、六五一	三、二九五、三五一四	一、九四三、三三四	一四、二六四、五五七
同十三年	九、一九三、〇五六	三、四三〇、三三七	三、一六六、七五四	一六、七九四、三五七
同十四年	一〇、一四七、〇〇一	三、五八一、一〇一	三、三三六、七二八	一六、七四八、八二〇
昭和元年	一〇、三三五、九三	三、八三六、八六	三、九二〇、五二八	一七、一四八、〇〇三
同二年	一〇、八三三、一二九	三、三〇五、三一一	三、四〇一、七九	一八、七八六、三二
同三年	一三、六〇〇、一八〇	一六、九八三、四三四	三、四〇一、七九	一八、七八六、三二

◇水產貿易額對照表

種目	昭和三年	昭和二年	增△減
輸出額	三、三〇六、四六二円	七、四九八、二七円	△四、二五一、六六六
輸入額	五九二、二九八	三八、〇〇〇	二四、二九六
移出額	三、七〇〇、七九九	三、一六五、〇〇九	△六〇七、二一〇
移入額	九、四〇三、八六四	一〇、三五六、六三五	△一、三五三、七七一
計	一六、九八三、四三四	二一、八七七、八二	△四、七〇五、三六七

◇鑛產價格種別表

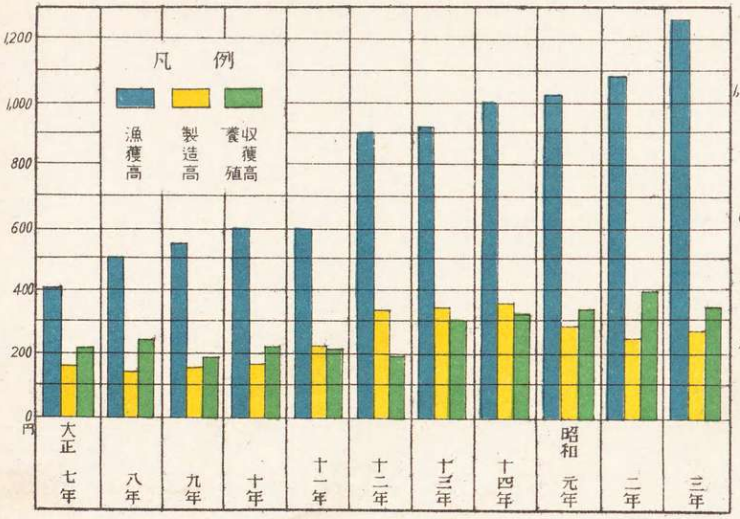
種目	明治三十年	大正十三年	同十四年	昭和元年	同二年	同三年
金鑛	円	三五〇、三五六円	三五九、〇九七円	四七五、二七円	六二〇、八〇八円	一、四七九、九四〇円
銅鑛	一	八七、九三三	五五、三四四	九三、三五九	一四、八三五	一四、八三五
金	八、八〇三	四、七六九、三三	四、五五一	九、七五三	一、六四六	一、六四六
砂金	一	一六、九九七	一八、七四四	一七、三八九	一、一〇八	一、一〇八
銀	一	一、三〇、六三	六〇、八七	三六一、九九八	一七一、一四〇	一七一、一四〇
銅（沈澱銅）	一	一	三、三五八	一三、三九八、九一三	一、三五、八四〇	一、三五、八四〇
鑛炭	一	一二、六四五、四六六	一二、九八六、一四八	一三、九八六、九一三	一、三五、八四〇	一、三五、八四〇
石黃	一	三五九、三一四	七、四一八	七、八五八	一、九三五、四三七	一、九三五、四三七
硫黃	一	二、八五三、八五六	三、三五八、三五六	三、四一八、三五六	四九、〇一四	四九、〇一四
石油	一	一	一	一	一、九三六、三五四	一、九三六、三五四
揮發油	一	一	一	一	一〇〇、一〇一	一〇〇、一〇一
計	一二、八八三	一三、三五九、三〇三	一四、六三七、三三四	一六、七五三、六三六	三、一〇二、七六四	三、一〇二、七六四

種目	昭和三年		同二年		同三年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
金鑛	六〇、〇九七円	三五、三四四円	六二〇、八〇八円	三五、九六九円	一、四七九、九四〇円	四、三五二、八九九円
銅鑛	一	一	一、三六九、七六六	五四、三五八	一、四八九、八九九	五、五二一、八三三
砂金	一	一	一、一〇八	六四、一〇八	六三、一〇八	六三、一〇八
銀	一	一	三〇、三五五	一七、一四〇	三四五	一、一九三
銅（沈澱銅）	一	一	一、一七一	一、一九三	五〇、三五五	一、一九三
鑛炭	一	一	一、一七一	一、一九三	五〇、三五五	一、一九三
石黃	一	一	一、九三六、三五四	一、九八四、〇九〇	四一、〇九〇	一、九八四
硫黃	一	一	四九、〇一四	二、三五八	一、六、三五五	二、三五八
石油	一	一	一、九三六、三五四	一、九八四、〇九〇	一、六、三五五	一、九八四
揮發油	一	一	一〇〇、一〇一	一、六、三五五	一、六、三五五	一、九八四
計	三、一〇二、七六四	一〇八、四四〇	三、一〇二、七六四	一〇八、四四〇	一四、八三五、六二六	一四、八三五、六二六

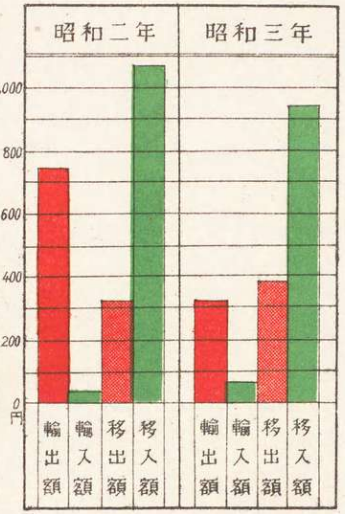
◇昭和三年臺灣茶種別輸移出表

種目	輸出		移出		計	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
龍茶	六、八六一、一三六斤	四、三五、七四〇円	三、三三三斤	三、六九二円	六、八九三、四七九斤	四、三五二、八九九円
包種茶	七、三九九、四三〇	五、四四五、二五五	六、八四〇	七、〇七〇	七、四二六、七七〇	五、五二一、八三三
紅茶	五〇、六八八	五〇、二一四	一、五五八	一、三四九	五二、四四六	六三、一〇八
綠茶	二七一	三四五	—	—	二七一	三四五
番茶	五、〇三五	一、一九三	—	—	五、〇三五	一、一九三
粉茶	四一、〇九〇	五七、九八四	—	—	四一、〇九〇	五七、九八四
莖茶	一六、三五五	二、三五八	—	—	一六、三五五	二、三五八
合計	一四、六九三、九二五	九、九三〇、九四〇	一三、一七〇、一	一〇八、四四〇	一四、八三五、六二六	一〇、〇三九、三八〇

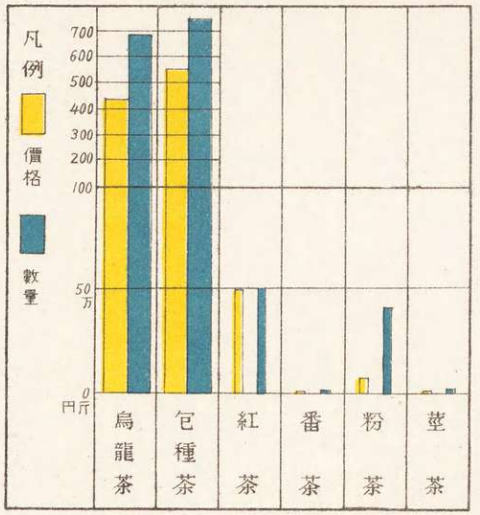
水產業產額累年表



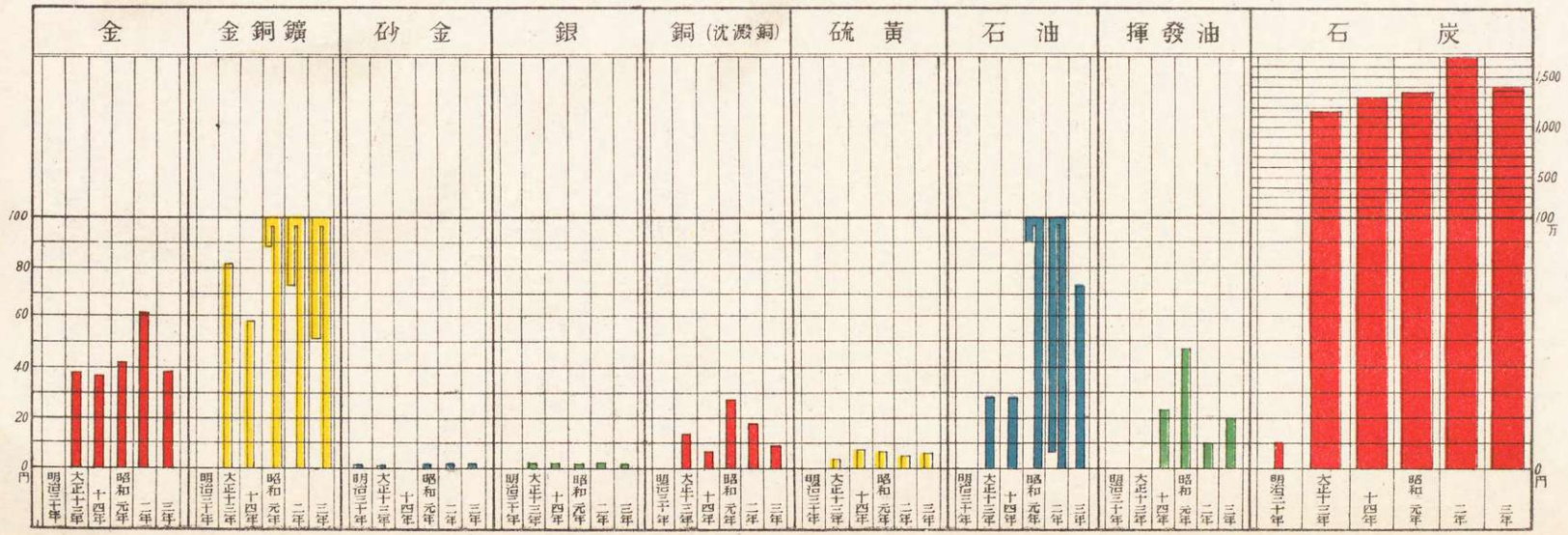
水產貿易額對照表



昭和三年 茶輸出表



臺灣鑛產價格種別表



臺灣總督府調查

■貿易及金融

【開港場】臺灣の貿易は基隆、高雄、安平、淡水の四開港場と舊港、後龍、梧棲、鹿港、東石、馬公の特別輸出入港六ヶ所とを以て行はれ居れるも、其の最も盛んなるは謂ふまでもなく基隆と高雄である。今之れを汽船貿易と支那形船貿易とに分つて十數年來の經過に徴するに、時に消長はあつたけれども概して前者の次第に發達するに反し、後者は年と共に凋落するを免れなかつた。又た之を對手に依つて分てば、對外と對内の二大系となり、何れも年々增進して其の總貿易額は明治三十年の三千百萬圓から、大正九年の**三億三千八百萬圓**臺に上り、實に當年の十一倍を示し、同十年は著しく不振であつたに拘らず、尚二億八千六百萬圓を示してゐる。其の後幾多の變遷は免ぬがれざりしも累年順調を辿り、殊に昭和三年度の如きは支那の排日問題にて非常に打撃を受けたるにも拘らず、總額では却て五百萬圓を增加し、四億三千九百萬圓に上れり、累年の貿易額を左表に示す。

【外國貿易】外國貿易は領臺當時關稅の低率であつた間は次第に隆盛に趨りつゝあつたが、明治三十二年以來數回の關稅改正の爲め、種々の障碍を生じたりしが、大正五年は砂糖の增産に加ふるに世界大戰の開始以來頗る好影響を受け、樟腦、烏龍茶等の直輸出激增せしのみならず、燐寸、綿布、海産物等支那貿易の仲繼品亦增加し、輸入に於ても又た著しく增加せしにも拘らず、前年に比して六割六分九厘の大增加を來せり。翌六年は船賃關係で烏龍茶の直輸出の激增、且つ對支仲繼輸出も發展し、前年に比し更に三割強の增進を見るに至れり。大正七年八年猶順調を重ねしも、歐洲大戰の終熄と共に其の反動を受け、昭和元年の一億一千萬圓を最高とし、二年は海産物の增産ありしにも拘らず、總貿易額は前年に比し九十萬圓弱と萎縮するに至つた。

昭和三年は樟腦が米國市場の好轉に伴れて出增した外は石炭、海産物、砂糖其他輸出主要品の殆んど全部が、主として排日の爲めに取引阻止せられて減退し、一方輸入に於ては肥料と大豆が目立つて增加したのみで米が在米の豐富米價の低落に遮られ、砂糖が再製輸出の不振に原因し著減したので、結局出入共に頗る不況に歸し、外國貿易額は最近數年間持續した一億圓臺を割つて九千二百萬圓に降つた。

【内地貿易】内地貿易は外國貿易の鬼角捗々しくなかつたのに反し、移出入共に年々順調に發展し、明治三十年の五百八十萬圓臺から、大正九年の二億九千二百八十萬圓臺に上り、其後は引續き不振であつたが、大正十二年は尚ほ二億四千萬圓に達するを得た。之れには運輸交通の便を始め種々なる原因もあるが、畢竟するに數次改訂された關稅の保護に負ふ所多く、現に領臺當時の數年間は海産物、燐寸、洋傘等の内地品にして遙かに香港を經由し島内に再輸入されたものが、明治三十二年の關稅改正後は内地より直移入せらるゝのみでなく、近時は本島を仲繼として南支那方面に輸出さるゝを見るも明らかである。其の移出貿易は二大重要品たる砂糖と米の增産と共に發展し、酒精、食鹽、樟腦油、芭蕉實、鑛石、銅等も亦産額を增し、隨つて移出額を增加し、移入貿易は綿布を筆頭に、海産物、各種肥料、鐵材、酒類、米、小麥粉、紙類、燐寸等概して增進の勢ひを示し來つた。更に大正十三年は米、砂糖、芭蕉實、食鹽、樟腦麻織物等の重要品が一齊に增加し、特に内地種米及び砂糖の目覺しき活躍は移出貿易を醸成し、一面農村好況に促され綿布、肥料、小麥粉其の他移入重要品が概して好調を持し、免稅外米の轉入仲繼、海産物の移入等が增大したので、貿易總額は前年に比し五千七百萬圓といふ巨額の增進を告げたりしが以來幾多の消長を經、昭和三年は主要物産たる米の減收であつたのに加へ内地在米の豐富、米價低落の爲め移出甚しく不振を呈し、其他木材等取引の減退を見たが、砂糖が未曾有の增量であつたのと、帽子の歐米輸出が頗る好況を示し、殊に前者の激增に主因して多大の出增を招致し、一方移入では僅に海産物が凶漁で減退した外は木材、鐵材等の建設材料を始め麥酒、清酒等各主要品は一齊に好轉せし爲め、出入共に多大の進展を告げ其の總貿易額は**三億四千七百萬圓**に上り、前年に比して二千四百萬圓の激增を見るに至たれり。（圖表參照）

◇内外貿易品價額

年次	輸出及移出	輸入及移入	合計	指數
明治三十年	一四、八五六、八四八	一六、三五三、〇一〇	三一、二一九、八六八	三〇〇
同三十五年	二一、一三一、七九九	一九、三三五、八三三	四〇、四六七、五九二	一八〇
同三十九年	二八、〇八六、六一三	二八、五七一、八〇一	五六、四一〇、四一三	一八二
同四十三年	五九、九五三、三五五	四八、九三三、二九九	一〇八、八五五、五四四	三四九
大正元年	六三、八八八、八二四	六三、六三七、一三三	一二五、五二三、九七七	四〇三
同五年	一一三、三四七、九四八	六五、一二、X〇〇	一七三、三五九、三四八	五六八
同六年	一四五、八〇三、七三三	八八、八八七、三四一	二三四、六九二、〇四四	七五一
同九年	二六、三六〇、五八〇	二七、四三七、〇九五	三八、七〇二、六五五	一、二四四
同十年	一三三、四三八、三〇〇	一三三、八五四、四五八	二八六、二九三、九五八	九六六
同十一年	一五七、八四四、九五五	一二九、〇五九、三〇九	二九六、九六〇、二五四	八八六
大正十二年	一九八、五四四、八〇三	一一〇、一二九、四九三	三〇八、七四四、二四四	九九八
同十三年	二五三、六四一、一五六	一三三、〇三六、〇九六	三八六、七〇〇、一二三	一、三八
同十四年	二六三、三四一、〇五一	一八三、三五五、三四〇	四四九、八九六、九二一	一、四二九
昭和元年	二五一、四三五、〇七〇	一八三、四二二、四五〇	四四二、八三七、五二〇	一、三五一
同二年	二四六、六五六、三四四	一八六、九四八、三七七	四三三、六三四、六二一	一、三五八
同三年	二四八、四一七、二五五	一九〇、六五三、九三三	四三九、〇七一、二八八	一、四〇六

圖表對照統計

◇外國貿易品累計價額

年次	輸出品價額	輸入品價額	輸入超過（△は出超）
明治三十四年	八、三四四、〇七七円	一二、八〇九、七九五円	四、五七五、六九八
同三十五年	一〇、六九八、六〇七	一〇、九三二、八七〇	三、三四、二七〇
同三十六年	一四、九六〇、三八一	一九、三〇五、一三五	四、三四六、八九八
大正元年	一四、〇三五、七二一	二一、〇九六、三五六	△六、一一六、四一五
同六年	三五、一三五、九四五	三〇、三六六、九三一	二五、一九三、九六八
同九年	三九、一五三、四三七	九、一二一、三六七	九、九六八、九四〇
同十二年	四七、九六五、八四四	五六、四八九、〇四〇	八、五三三、二六
昭和元年	四九、三二五、四八七	六三、〇〇五、六六六	一二、九六三、一七九
同二年	四四、五九七、七〇七	六五、八四〇、三六九	二一、三四三、六九九
同三年	三三、八九五、六八八	五八、三三五、七三九	二四、四四〇、〇四一

◇重要輸出品累年價額

年次	烏龍茶	包種茶	樟腦	石炭	砂糖	苧麻	燐寸
明治三十四年	二、九九六、〇六三円	五〇五、〇六三円	七八九、二九〇円	一二四、六〇五円	一〇三、一三一円	三八二、七九八円	一四三、二一〇円
同三十五年	五、三四一、二八〇	八九二、九七五	二、〇五二、一九三	一一三、七四〇	三五、七三〇	三七五、三二七	三七、三三五
大正元年	四、〇七七、六八八	二、三六三、六一九	四、四〇九、五〇九	一一七、七一三	一七、九三九六	三六九、〇三三	二七、六四〇
同六年	一、七一三、〇七三	二、二六一、七六七	四、四六二、六二三	一八二、八九九	一五、七七五、三〇五	三六九、七二四	一、七九三、六六七
同九年	三、五五六、〇二六	三、八二一、〇七九	八、八二三、二九	四、三五五、四八七	六、七一八、五九七	六五七、九八七	一、三六三、五五五
同十二年	五、一六〇、九六五	四、六八三、七三三	五、六九五、〇一〇	三、三四五、一〇七	一、七一九、七九九	五、八七九、九九八	一、三五六、五五五
同十四年	五、二三〇、九五八	六、一七三、七八四	七、四四八、二九	三、六〇九、三五六	二、四七六、一〇七	四九九、一〇七	一、七九八、〇一九
昭和元年	四、四〇三、一二九	六、七七二、二五五	八、四三七、四八三	一、九四九、二九一	一、七四九、四八四	六六七、〇三九	一、三六三、七九九
同二年	五、一〇三、六二一	六、四五四、二七四	六、一七四、四八四	一、八五五、一〇六	二、三五〇、七三三	四九六、〇三九	一、三六九、七一一
同三年	四、三五七、七五〇	五、四九五、二九五	三、九六四、七九七	三、三五、七五四	一、二五二、七八四	三八三、三三五	一二、三三五、八七二

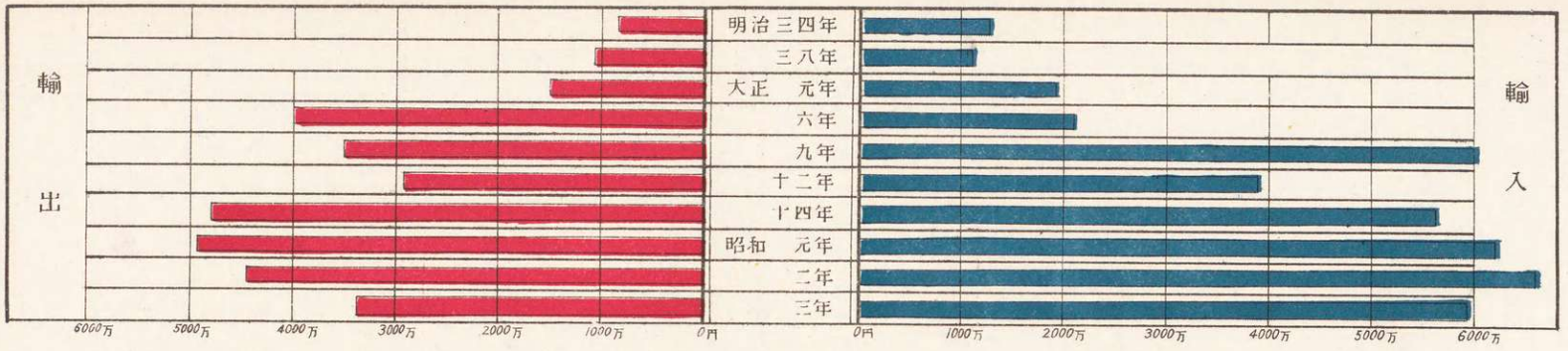
▲備考　本表の外、乾魚及び鹹魚、鰡、酒精、セメント、龍眼、綿織物等の重要品がある。

◇重要輸入品累年價額

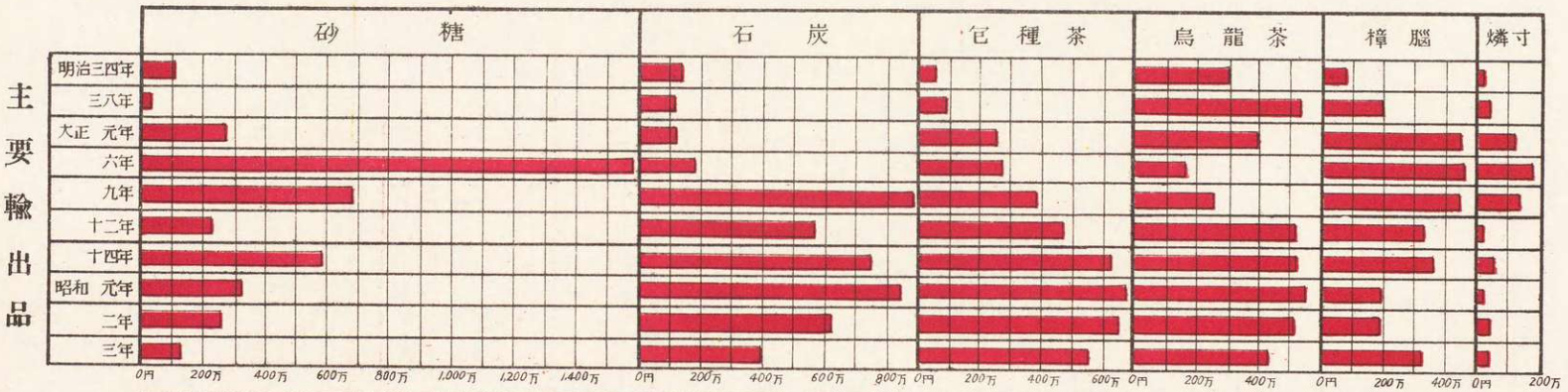
年次	阿片	葉煙草	燈油	ガンニー嚢	木材	包席	大豆糟
明治三十四年	二、三三〇、四三五円	一四三、六八四円	八四一、七〇円	三一、六四〇円	四三〇、九三一円	七四、八一円	七四、七七円
同三十八年	一、九三七、三七七	三三、四六七	六三〇、四三一	一〇三、九〇四	四一〇、九〇	一六六、一三	八四、四四
大正元年	三、〇九三、六五三	八九〇、六〇五	七六六、三四六	一〇〇、二九六	六〇八、七〇六	四九六、八七	一、九二三、八七
同六年	三、八三六、八四九	三九、三七六	八三九、五七六	一、九〇、四五九	五七八、三三四	四九七、九三	一、七九三、五五五
同九年	六、〇六三、三一四	一、六〇六、一〇九	一、九二一、四八八	七五五、六五九	二、四七六、一二三	四九九、一〇七	二、三五〇、九五一
同十二年	一、五〇三、六八五	四〇〇、一五	一、三五九、一三三	一七八、七八九	三、七〇五、九五一	一七六、一三	一、八〇、四四六
同十四年	二、八六、九〇七	八二〇、八〇九	一、三五七、六八七	一、七九四、七三三	三、七四九、七三三	四九六、〇三九	一、七二一、三四四
昭和元年	九八三七、二五五	七六四、七六八	一、一〇七、〇七四	二、四八五、六五四	二、四二一、四六三	四九六、〇三九	二、三三三、六九九
同二年	八三七、二五五	九〇〇、三九	一、三九五、四七五	一、二五〇、五四一	三、〇三〇、五四一	三八三、一四五	二、九八八、五四三
同三年	四五二、四五一	三四五、〇一九	一、一三〇、〇九五	一、一五二、七四	二、七八八、三四三	五三四、一四五	一二、三六九、七二一

▲備　考　本表の外、米、小麥、大豆、ガンニー嚢、苧麻布、黃麻、唐紙、禮拜紙、鰾材、重油、砂糖、硫安等の重要品がある。

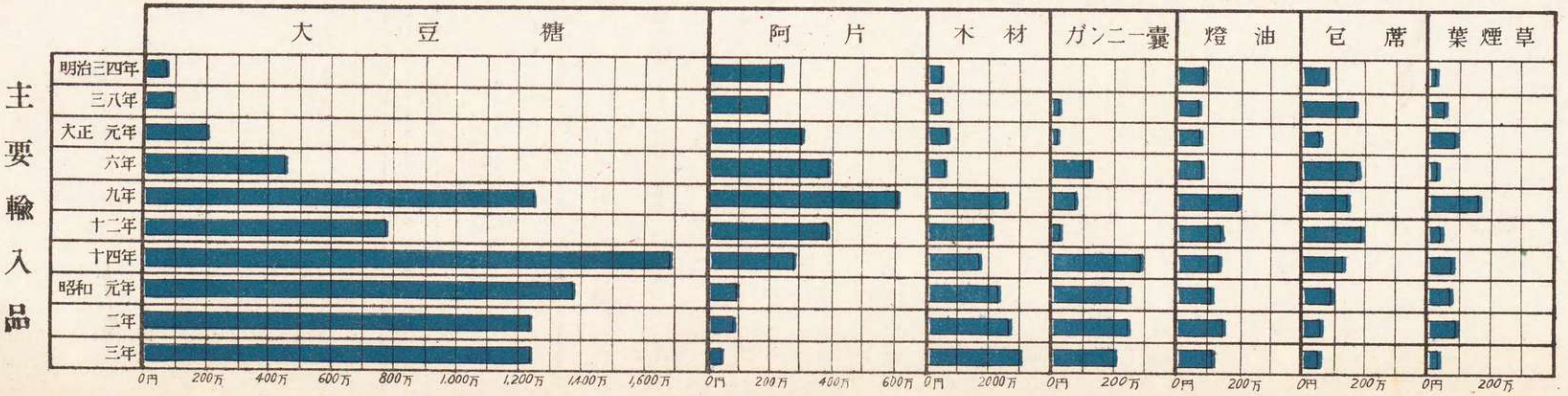
外國貿易品累年價額



主要輸出品



主要輸入品



臺灣總督府調査

金融

【貨幣】臺灣の我が領有に歸するや、時の通貨には從來使用し來つた複雜な種類あり、日本銀行の兌換券あり其の他各樣の補助貨があつて、其の幣制は極めて混沌たるものであつた。然るに明治三十年十月、本國に於て金貨本位制を採用するや、政府は本島の慣慣や支那との貿易關係に鑑みて、金貨を本位として計算した銀貨を臺灣に融通することを許し、機會を俟つて金貨本位制を完全に施行することを期した。

斯くして銀券の發行權は臺灣銀行に附與したが、圓銀の相場は變動常なくして、爲めに銀行券の流通は圓滑に行はれず、商取引をして非常に混亂せしめたのみでなく、其の銀相場の高低に對する投機心を挑發して、弊害百出の有樣となり、制度の改正は焦眉の急務となつた。されば一時の應急策として明治三十七年六月を以て臺灣銀行に對して金券を發行せしめられたるに、其の流通は頗る順調で取引上益する處多大となつたのである。爾來本島の幣制は全く內地と同一制度に統一せられ、極めて困難であつた多年の懸案も、所期の目的通りに解決することが出來た。

【銀行】領臺當時は未だ銀行と稱すべきものは無かつたが、總督府の開始と同時に、日本中立銀行は出張所設置の準備に着手して二十八年九月開業し、日本銀行も亦二十九年十二月臺北に出張所を設け、三十二年には上記の日本中立銀行が三十四銀行と合併し、之れを三十四銀行支店と改稱した。然るに是より先き總督府には特殊銀行設立の必要を認め、第十回議會の協賛を經て臺灣銀行法を發布せられ、三十二年九月を以て營業を開始するに及んで日本銀行出張所は其の業を閉ぢた、然し同年以來島內では各種銀行物興の機運に向ひ、同年中には臺灣貯蓄銀行、同三十八年には嘉義銀行、尙同年に彰化銀行、四十三年には臺灣商工銀行等の設立あり、右の內貯蓄銀行は明治四十五年中商工銀行に合併し、大正五年には新高銀行、同八年に華南銀行の設立を見るの殷賑を來たした。尙爾來日本勸業銀行は明治三十八年から是れ迄代理店を通じて貸付を行つたのであるが、島內不動產を資金化し、農業金融に貢獻する爲め大正十二年一月臺北に支店を設置し營業を開始した、斯くの如く多數の銀行が設立せられたのであるが、財界の推移に鑑み臺灣商工、新高、嘉義の三行を合併することゝなり、大正十二年七月中合併成立、八月十三日から臺灣商工銀行として取引を開始するに至つたのである。左に臺灣銀行以下各銀行の概況を略記せば。

▲臺灣銀行は資本金五百萬圓を以て設立し、其の後屢々增資を行ひ大正九年三月以降資本金額**六千萬圓**の巨額を算したが、大正十四年九月に資本金を四千五百萬圓に更に昭和二年十一月千五百萬圓に減資した。同行は銀行券發行の特權を有し、日本銀行代理店としての國庫事務、又は政府貸下金等、中央銀行の業務を取扱ふと共に、一般銀行の業務や對外爲替金融の事に當り、最も重要な金融機關である。臺北に本店を置き、島內、內地、諸外國に亙つて三十の支店と一の出張所とを有して居る。又た明治三十八年以來日本勸業銀行の代理貸付を行ひ、大正三年三月臺灣銀行法の改正に依つて、擔保付社債信託業をも其の營業科目に加へ、農工業界の金融に寄與することも亦甚だ多大である。

▲日本勸業銀行は本島產業開發の爲め直接に貸付を取扱ふの必要を認め、業務開始以來日尙淺きも、同行の島內放資總高は昭和二年末**五千二百五十五萬餘圓**に上る(臺銀取扱の代理貸付高を含む)。資金の用途は埤圳資金、農業者の舊債償還金最も多く、家屋建築資金、開墾資金、農業倉庫建設資金之に亞ぐ、期限は普通は二十年々賦とし年七分九厘乃至八分八厘の利率である。

▲其他の各銀行は孰れも普通銀行の業務を行ひ、島內及び內地南支南洋樞要の地に店舖(支店三十六、出張所十八)を設け、臺灣銀行と協力して南國金融界に貢獻しつゝある。昭和三年末に於ける島內各銀行(本島に本店を有する銀行のみ)總資本金**二千八百三十萬圓**、拂込資本金二千六十七萬餘圓で、以下各銀行の島內に於ける營業狀態を見るに預金殘高一億四百三十一萬餘圓(貯蓄預金六百十八萬餘圓を含む)、貸出金殘高二億三千七百八十一萬餘圓である。爲替取組高は收入七億七千六百二十六萬餘圓、支出七億二千六百六十八萬餘圓である。又臺灣銀行券の同末年發行現在高を見るに發行五千五百七十一萬餘圓、內制限外發行高は千六百六十一萬餘圓である。

【市街地信用組合】昭和三年末に於ける市街地信用組合は、組合數二一、出資金總額**二百九十六萬七千餘圓**、拂込濟出資金二百七十一萬四千餘圓、貯金一千百二十萬六千餘圓、準備金百二十萬五千餘圓、各種積立金四十四萬一千餘圓、借入金六萬一千餘圓、貸付金千百六十四萬餘圓であつて、庶民金融機關として市街地金融經濟上の發達に貢獻する所尠くない。

【農村信用組合及事業組合】市街地信用組合を除く他の產業組合は、昭和三年末に於て三百六十五組合を算し、その內、信用及び信用兼營組合は二百九十九(內未開始組合二)、此の成績を示すと出資金**千百二十九萬一千百三十七圓**拂込濟出資金九百五十二萬二千四百九十五圓、積立金六百五萬二千百七十三圓、貯金二千三百七十萬四千百七十六圓、借入金三百十四萬六千四百二十三圓、貸付金三千五百四十三萬二千六百八十三圓で、地方庶民金融機關として、活躍して居る。

【事業組合】事業組合は經營組織が複雜困難であるので其の發達も遲れ、現在六十六組合で(內未開始組合三)、出資額**百五萬五千百三十五圓**、拂込濟出資金五十一萬五千八百八十六圓、積立金五萬六百三十三圓、借入金五十萬六千百五圓、販賣高七萬五千三百四十九圓、購買高六十六萬四千六百三十二圓、利用料二千二百四十六圓。何れも金融の便を圖ると同時に地方產業の發達に貢獻して居る。

【無盡業】無盡業に關する規則は、大正五年三月を以て其の施行を見るに至つたもので、昭和三年末現在經營中のものは、臺灣勸業無盡株式會社と東臺灣無盡株式會社と臺灣南部無盡株式會社の三會社である。島內各地に支店七、出張所一、代理店四を有す而して其の總資本金額は**八十五萬圓**、拂込資本金額は三十八萬七千餘圓、同年末現在の無盡會は九百十九組で、此の給付金契約高三千四百六萬餘圓、內給付濟高二千百七十萬五千餘圓、掛金契約高三千五百八十四萬二千餘圓、內受入濟高二千二百三十一萬七千餘圓である。會員の加入成績も逐年增加の傾向を示し、庶民金融機關として相當の機能を發揮して居る。

【低利資金】此の資金は臺灣に於ける郵便貯金の中央政府に集積されたものを日本勸業銀行を通じて本島に還元した資金で、第一回は大正六年の百萬圓、第二回は同八年の二百萬圓、第三回は十年の百五十萬圓、第四回は十一年の百萬圓に上つて居る。其の貸出に就ては大藏省の承認を得た規程に基いて、總督府が相當と認むる方面に對して勸業銀行をして貸出さしむるもので、主なる貸出先は、公共團體、產業組合の事業資金、及び住宅資金、水利組合事業資金又は公設質舖資金等で、利息は六分乃至六分五厘である。

圖表對照統計

◇內地貿易品累年價額

年次	移出品價額	移入品價額	合計	移出超過（△は入超）
明治三十五年	七、四〇七、四九八円	九、三五五、三九〇円	一六、六四三、七八八円	△一、八四七、七九二円
同四十二年	三六、三〇九、六〇〇	三四、〇〇六、八〇五	六〇、三一六、四〇五	二、三〇三、六九七
大正元年	四七、八三一、四五一	四三、三五五、二九〇	九一、一八六、七四一	四、五五〇、一六一
六年	一〇五、五六七、九四一	六七、七九七、九五五	一七三、三六五、八九六	三七、七六九、九八六
九年	一八〇、八一六、一一三	一一二、〇四四、八四四	二九二、八六〇、九五七	六八、七七二、二六九
十二年	一六九、四四三、三六五	七一、〇一八、一三五	二三九、四六一、五〇〇	九八、四三四、二三〇
十四年	二三五、三四八、八〇七	一二九、九〇六、二〇一	三六五、二五五、〇〇八	八五、四四二、七九九
昭和元年	二〇三、一〇九、八三五	一一二、四〇四、七八四	三一四、一四四、六一九	八〇、九七〇、一五一
二年	二〇三、〇九八、五七四	一一二、一〇七、九一一	三一五、一八六、四八五	八〇、九九一、六六三
同三年	二一四、五三一、三九七	一三三、三八二、二四四	三四七、九一四、〇四一	八二、三〇九、一五三

◇重要移出品累年額價

年次	米	砂糖	食鹽	樟腦	樟腦油	酒精	芭蕉實
明治三十五年	一、六〇八、一八六円	三、一七三、四〇七円	一、三一三、一七八円	八六九、四一八円	九二一、三五六円	一、二一二、〇〇三円	一、三五八、八七九円
同四十二年	八、七七九、八二一	三五、〇〇一、七六九	一、六七四、四〇四	—	一、六一〇、九五五	一、三五三、七〇〇	三三六、六一七
大正元年	一〇、三〇〇、六五四	三八、二四一、一四四	二、三六七、九八一	一、〇〇八、四〇四	一、四六八、八四七	一、四八三、七五六	三、六〇八、一七七
六年	一三、六一八、五四四	六八、三四四、七一九	四五七、〇〇三	一、〇三五、三〇〇	一、四五七、八四七	一、八四三、三五六	一、八〇五、五一八
九年	一七、一八九、六四四	一二五、三四一、一九五	一、三一三、三三一	三、三七一、八七〇	九、八七八、四三三	一、九七四、九四三	三、三八〇、四一八
十二年	三三、六五六、九三一	二一二、〇七三、七三五	一、〇〇六、九五六、八七一	三、二五九、八五五	三、四九六、三五〇一	三、〇九七、〇〇〇	九、六六一、二八七
十四年	二三、〇二三、三八	一二、四三五、六三九	一、二六九、二二六	二、〇七七、四八四	三、四三三、三四〇	三、一九四、九四三	四、六六一、三五五
昭和元年	二七、八五五、七〇五	九、四三〇、七三四	六、〇二一、七八三	一、六八八、三五九	三、五五五、九七八	三、三九一、〇〇〇	四、六六一、三五五
同二年	二五、三五九、一〇七	一二、四三五、六三九	六、〇四一、七八三	一、六八八、三五九	三、五五五、九七八	三、三九一、〇〇〇	四、六六一、三五五

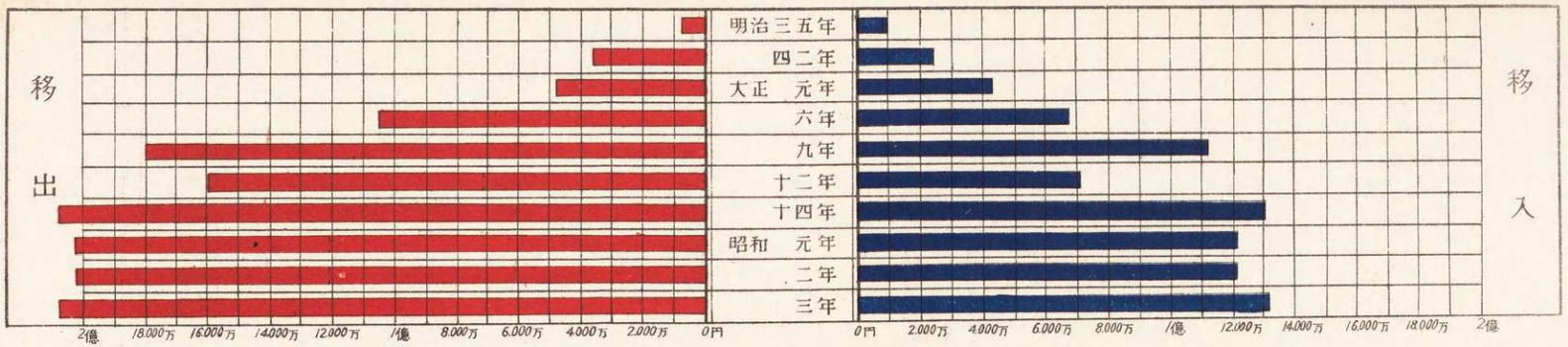
▲備考　本表の外、切乾薯、鑛石、石炭、木材、鮮魚介、鰹節、鳳梨罐詰、帽子等の重要品がある。

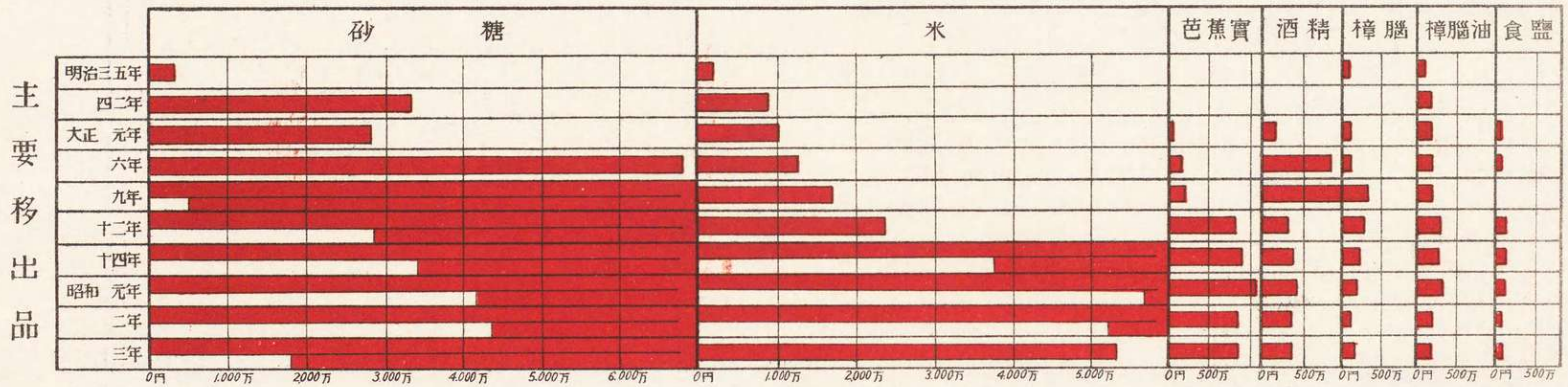
◇重要移入品累年價額

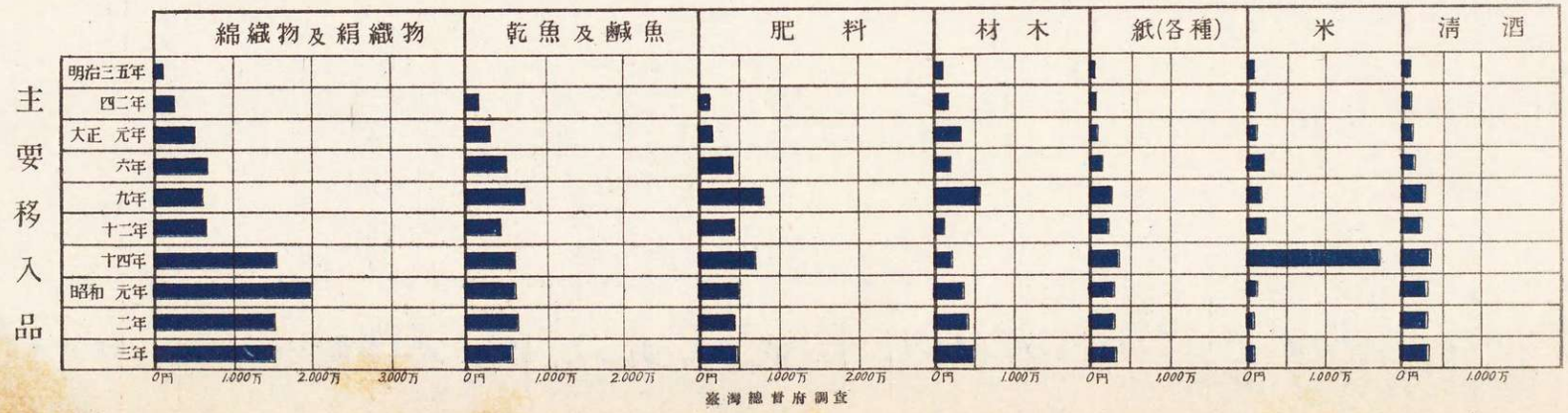
年次	米	乾魚及鹹魚	清酒	綿織物及絹織物	紙（各種）	材木	肥料
明治三十五年	四八、七九四円	九八、四九四円	六五七、七八七円	一、〇六五、九四九円	三三五、八三七円	七五五、六五七円	八三七円
同四十二年	四九三、〇〇三	一、三五七、九七七	七五九、一四九	二、五六六、三〇四	四九三、五三五	一、六六三、六〇五	一、〇〇〇
大正元年	一、〇一七、八四四	一、三五三、五一〇	一、三五三、三五五	三、〇一六、一四六	八三八、一三三	三、九五九、九四〇	一、五一四、六六六
六年	一、〇〇一、六一六	一、三六三、三一六	一、四七七、九三七	六、〇八六、四七三	一、四三七、三三七	一、九七七、三六一	一、六一四、六六六
九年	一、四一六、六九八	一、八二三、五九九	二、三五二、五八〇	六、四七三、八五五	一、七七一、〇〇〇	九、八七八、四三三	九六六、二八七
十二年	一、九七七、五八〇	四、三四五、三五九	一、七〇七、六三八	五、四三三、三四〇	二、九四九、九四三	三、〇九七、〇〇〇	二、九四九、九四三
十四年	一六、九八一、七八〇	五、九〇五、三五九	一、九九九、三五一	九、八〇五、五一〇	三、九五五、九七八	三、三九一、〇〇〇	三、九四九、九四三
昭和元年	九七四、四三一	六、一三五、八七八	一、六五八、三四九	一四、九四三、三五八	四、〇四四、六〇〇	四、六六一、三五五	四、八三三、三〇〇
同二年	五三四、三七四	五、九八六、〇〇七	二、一六一、七三七	一五、〇七八、八六	三、三五七、三五五	四、六六一、三五五	四、八三三、三〇〇
同三年	五三四、三七四	五、九八六、〇〇七	二、一六一、七三七	一五、〇七八、八六	三、三五七、三五五	四、六六一、三五五	四、八三三、三〇〇

▲備考　本表の外、小麥粉、砂糖、醬油、鑛詰食物、麥酒、紙卷煙草、石油、藥品類、燐寸、履物、セメント、陶磁器、鐵製品、鐵、銅、洋木等の重要品あり、又本表中には朝鮮貿易を含む。

內地貿易品累年價額







臺灣總督府調査

關東廳の部

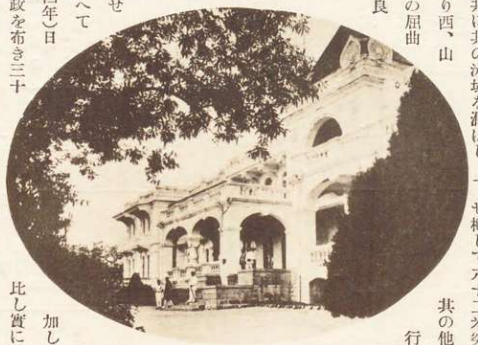
（昭和五年度關東廳調査）

■地誌

▲滿洲

【位置】滿洲は支那の東北部に位し黑龍江、吉林、盛京の三省を包括し、其の面積概算六萬四千七百方里と稱せらる、其の境域は北及び東は黑龍江に依り露領黑龍州及び沿海州に接し、南は長白山及び鴨綠江に依り朝鮮に境し西は呼倫池の西南に於て外蒙古に隣り、松花江に依り洮南府に境し、長城に依り直隸省に接す南方の突角は遼東半島にして渤海及び黃海に瀕せり。興安、長白の二嶺及び其の支脈の爲め地勢は東南より西北に隆起し西南に向つて緩斜せり、興安嶺は洲の北部に連亙蟠踞して南北に分水し、長白山は洲の東南方に峻嶺重疊して其の水流は集つて鴨綠江と成り朝鮮と境を分てり、黑龍江並に滿洲の中部を南北に二分せる松花江及び其の支流は北滿地方を縱橫に疏通し、遼河は蒙古方面を迂廻して盛京省の東部を貫き共に其の流域を潤ほし又た水利の便に富めり、滿洲の海岸線は東、鴨綠江より西、山海關に亘る黃海に瀕する方面は關東州を除くの外沿岸の屈曲至て尠く、渤海灣に面する方面は沿岸の出入多くして良港に乏しからざるなり。

因に記す遼東半島は明治二十七年（一八九四年）日清戰爭に於て我が國の占領に歸し、翌二十八年平和克復の際一旦我が國に割讓せられたるも、露、獨、佛の三國干涉に依り幾ならずして清國に還付せり、然るに明治三十一年三月露國は關東州の租借權を獲得し次で同年七月東清鐵道南部支線の敷設權を得、同三十四年公主嶺旅順間及び南關嶺大連間の鐵道を開通せり、三十三年北清に拳匪の亂起るや、露國は事を構へて金州城を占領するに至れり。明治三十七年（一九〇四年）日露戰を交ふるや同年五月金州及び大連を占領し、軍政を布き三十八年九月、日露媾和條約成立と同時に、關東州の租借權並に長春以內の東清鐵道は露國より之れを繼承獲得し、三十九年九月關東都督府を旅順に置き大正八年四月都督府を廢し關東廳を置き以つて今日に至れるものなり。



▲關東州

關東州は遼東半島の尖端に位し東は黃海に西は渤海に瀕す、我が租借地域は普蘭店の北方長陽寺會附近より鏡子窩の東方碧流河附近に至る線、以南の土地並に附近島嶼にして、其の面積は僅かに二百二十四方里四九に過ぎず、即ち之れが經度は東經百二十一度四分五十七秒なる山頭會の南角より、百二十二度三十四分十五秒なる碧流河口に至り、其の緯度は北緯三十八度四十三分二十秒なる老鐵山の南端より三十九度三十三分三十七秒なる長陽寺會宮家屯西北境に至れり。州內は丘陵起伏して平地に乏しく、河川は流域狹少にして水運の便なし、關東州の黃海に面せる部分は比較的海岸線の出入多くして大連旅順の如き天與の良港を形成し、沿岸の平沙淺洲は概ね鹽田の築造に適せり、島嶼の重なるものは五島及び長山列島なり。

▲南滿洲鐵道附屬地

南滿洲鐵道附屬地は大連と長春間四百三十八哩、奉天安東間、百六十一哩、其の他旅順線、營口線、煙臺線、撫順線、渾楡線、瓢兒屯線等其の延長六百九十四哩に涉れり、其の他鐵道用地及び市街用地にして、關東州外に於ける其の面積は十七方里餘とす鐵道の兩側を合せ概して六十二米突にして（本線 最廣四二米突六七 最狹四二米突七二 安奉線 最廣三六米突一 最狹一六米突七六）市街地其の他特殊の事情ある地方に於ては廣濶なる境域を有せり、我が行政區域は關東州及び州外鐵道附屬地にして其の面積合して二百四十一萬方里に過ぎず、併し乍ら滿洲の大都邑中哈爾賓、吉林等を除き他は悉く滿鐵沿線若くは其の附近に位置せり、之れが爲め鐵道附屬地は宛然滿洲經濟勢力の中樞地帶たるの情勢を馴致しつゝあり、大連、旅順、營口、安東の四都市は河海に臨み南滿四港と稱し南滿貿易の門戶にして就中大連港は港灣の設備完備し東洋屈指の良港たり。

【戶口】南滿洲鐵道附屬地を合して僅かに二百四十方里餘にして其の面積は內地の奈良縣と相伯仲するに過ぎざるも能く南滿に於ける經濟上樞要地帶と爲り戶口も逐年增加し今や戶數十九萬人口百十八萬を越え施政當初の卅九年末に比し實に三倍するの盛觀を呈せり、人口密度は別表に示すが如く一方里當り四千三百八十四人（州內三、四一一人 附屬地一七、七六八人）にして之れを內地の二千三百七十五人台灣の千七百十三人等に比し遙かに稠密なるを知るべし。

關東州內著名地

名稱	總人口	內地人	朝鮮人	概況
▲關東州	二五、六四四	一〇、五二四	九一	▲日露戰役に於て彼我苦戰地なり
旅順	三五、七〇五	八、八〇一	八、五五	▲南滿中最も繁盛なる貿易港なり
大連	一四、〇一七	一、一〇三	三、一〇三	▲遼東の古都、金州城此地にあり
金州	四、六〇八	三、九九	四八	▲市街の西岸一帶に多數鹽田あり
普蘭店	六、三一三	三五九	三三	▲關東州東海岸の戍克貿易港とす
▲滿鐵附屬地	四、七四四	二、一五七	三五	▲連接支那街は近時著しく發展す
瓦房店	三、八五六	二、三五三	三五	▲南滿鐵道營口支線の分岐點なり
大石橋	四、七九八	二、三三五	一〇五	▲滿洲に於ける最古の貿易港なり
營口	二、六二五	五、四四〇	一四二	製鐵事業に依る新興市街地なり
鞍山	八、九五八	四、七四一	三五	▲舊遼東の首府にして遼陽城あり
遼陽	三五、〇五五	二、六二一	三四	▲東三省の首都にして繁盛を極む
奉天	三、七八〇	二、一五五	一〇五	▲滿洲の古都、遼河の水運便なり
撫順	一四、四二五	三、三五五	三五	▲大豆の大集散地として有名なり
鐵嶺	一七、四二五	三、三五〇	三二	▲農產物の集散地として著名なり
開原	一三、〇三五	一、八五四	七二	▲滿鐵會社經營の農事試驗場あり
四平街	九、〇一二	八、九四四	八八	▲東支、吉長兩鐵道の連絡地なり
公主嶺	三、一〇〇	二、二四八	一二	▲撫順炭礦を以て世界的著名なり
長春	三、〇一七	二、三二一	三五	▲日支合辦煤鐵公司の所在地とす
本溪湖	二、八三七	一、一三三	七、六三七	▲木材の大集散地として有名なり
安東	五五、九五六	一〇、一三三		

管外滿蒙著名地

名稱	總人口	內地人	朝鮮人	概況
▲奉天省				
大疙瘩	四二、〇〇〇	二六	六六	▲開原東北の市にして農產に富む
蓋平城	一九、三九	四三	二	▲蓋平驛の東南一里餘縣公署あり
海城	五二、八〇〇	一四	二	▲海城驛より十町滿洲の舊都なり
牛莊城	一七、〇〇〇	三	一	▲營口の開港以來城內稍衰微せり
錦州	五二、〇〇〇	二四	一	▲京奉線の重要驛及縣公署あり
新民屯	三〇、〇四九	六八	二	▲商埠地にして我領事館分館あり
通化	二五、〇〇〇	三七	二、五四〇	▲山東移住民の建設せる市街なり
朝陽鎭	二五、〇〇〇	一三	一	▲海龍の東六里物資の集散地なり
鄭家屯	五二、〇〇〇	六七	一	▲蒙古貿易中心地我が領事館あり
洮南	一七、〇〇〇	四七	六六二	▲營口の開港以來城內稍衰微せり
昌圖城	二五、三五	三五	一	▲京奉線の重要驛及縣公署あり
▲吉林省				
吉林	一〇四、一五九	九六		▲政治軍事及經濟上の中心地なり
哈爾賓	三六六、一二四	三七二五		▲露國の建設せる北滿の都市なり
局市街	九、六〇八	三五		▲間島の都會たり我領事分館あり
龍井村	二六、三七五	九六		▲通商地にして穀物の集散地なり
琿春	八、七七三	二六	二、九四〇	▲露領に接し貿易上重要の地なり
▲黑龍江省				
齊々哈爾	三七、九二	二三		▲黑龍江省城あり行政上の中心地
滿洲里	二五、七四四	一四四		▲後貝加爾、東支兩鐵道の連絡地

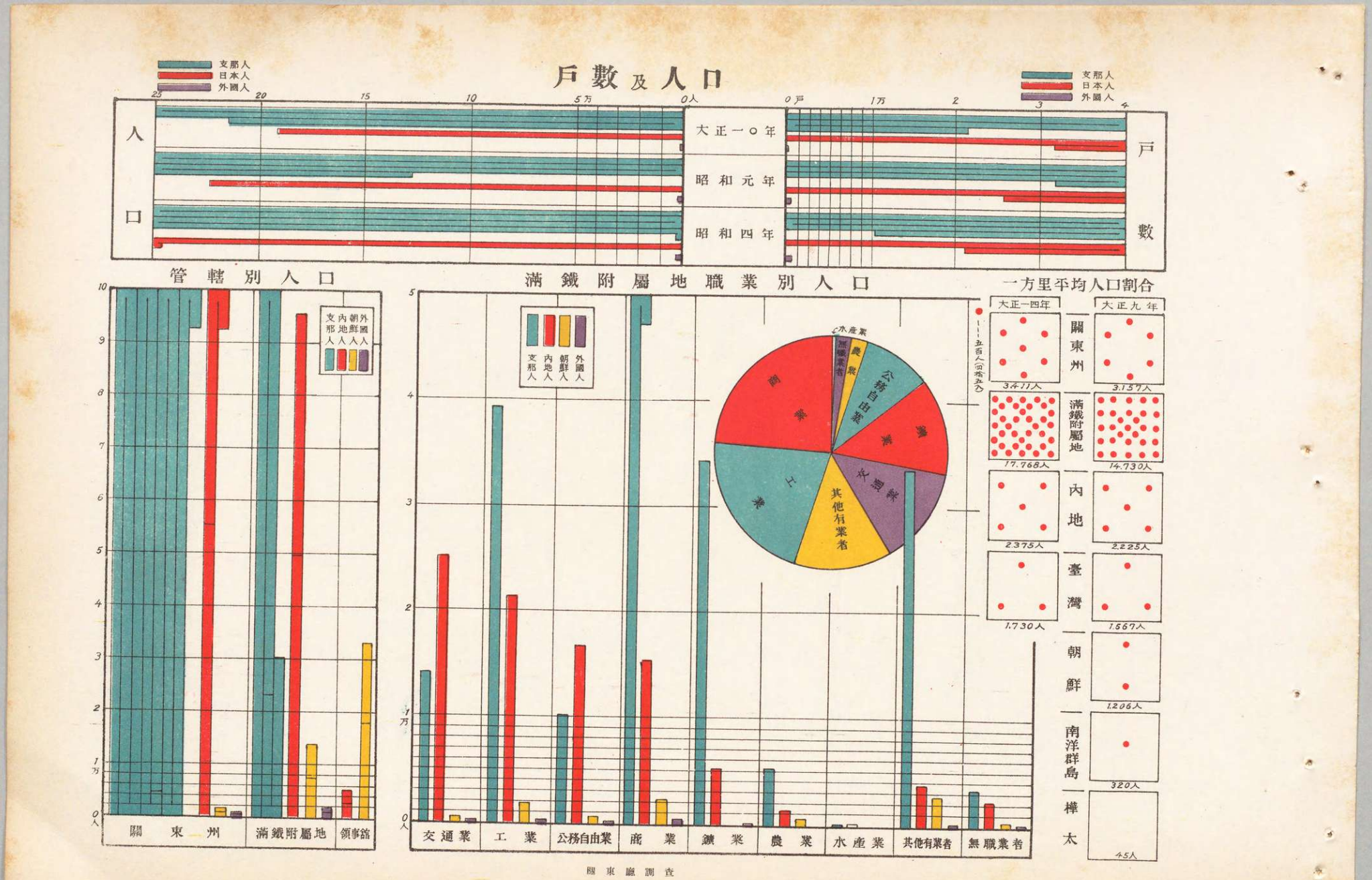
圖表對照統計

◇南滿洲戶口表

年次	日本人 戶數	日本人 人口	支那人 戶數	支那人 人口	外國人 戶數	外國人 人口	計 戶數	計 人口
明治三十九年	三、八八六戶	一六、六三人	五五、九五九戶	三六八、一〇三人	一四戶	三九人	五九、五九九戶	三八四、七五人
大正元年	三五、六四二	八六、〇三五	六八、四七五	四六、八九六	七三	一五七	九四、一八九	五六三、八六八
同五年	三八、五三〇	一〇五、四五〇	七八、三六六	五六、四〇一	八三	二七三	一〇六、八七九	六七三、一三三
同十年	四八、三四四	一九一、七九五	一〇一、五三〇	七五、一三一	一五三	五三三	一五〇、〇七七	九〇七、五四九
昭和元年	五四、一九一	二三七、八五三	一二八、三九一	八三、五六一	一五三	五三三	一八三、〇六三	一、一二六、九〇七
同四年	五八、九七〇	二五六、九七六	一四九、六五五	一〇〇、八〇七	六七	二一四	二〇九、三〇三	一、二五六、九〇七

◇管內現在人口と內地及植民地との比較

	大正九年十月一日國勢調査 男	大正九年十月一日國勢調査 女	大正九年十月一日國勢調査 計	大正十四年十月一日國勢調査 男	大正十四年十月一日國勢調査 女	大正十四年十月一日國勢調査 計	一方里に付人口 大正九年	一方里に付人口 大正十四年
關東廳管內	四〇九、九三一人	三九一、一九八	六八一、一三〇人	四三九、三四七人	三一六、五六八人	七六五、七五五人	三、一五七人	三、四二一人
南滿洲鐵道附屬地	一七三、六九三	五七、七四五	三三一、四三八	三〇六、四一〇	八三、七七一	三九〇、一九一	一四、七三三	一七、七八八
計	五八三、六二五	三三七、九四三	九一一、五六八	七四五、七五七	一二〇、九四二	一、一六六、九九九	三、九二一	四、三八四
內地	二八、〇四四、三三七	八、九〇三、〇〇〇	二七、九八八、七二六	二七、九二三、〇五三	八、三六一、一二九	三六、二八四、一七二	三、三五五	三、三五五
朝鮮	八、九〇三、〇〇〇	一、八五三、五四一	一〇、七五六、五四一	一〇、一七一、七五七	一、七六一、一九一	一一、九三三、九四八	一、一〇六	一、一〇六
臺灣	六三、三三七	一四、七三三	七八、〇七一	七三、八九九	一四、七三三	八八、六三二	四五	四五
帝國 計	二八、〇八三、一九五	八、九一七、六七四	三七、〇〇〇、八六九	二七、九九七、九五六	八、三七五、一九四	三六、三七三、一五〇	一、四四四	一、四四四
南洋群島	二四、〇一〇	一四、二一三	三八、二二三	五二、三三三	一四、二一三	六六、五四六	三〇	三〇


戶數及人口
支那人
日本人
外國人
人口
戶數
大正一〇年
昭和元年
昭和四年
管轄別人口
關東州
滿鐵附屬地
領事館
滿鐵附屬地職業別人口
交通業
工業
公務自由業
商業
鑛業
農業
水產業
其他有業者
無職業者
一方平均人口割合
大正一四年
大正九年
關東州
滿鐵附屬地
內地
臺灣
朝鮮
南洋群島
樺太
3.411人
3.157人
17.768人
14.730人
2.375人
2.225人
1.730人
1.567人
1.206人
320人
45人

關東廳調查

財政

【租稅】關東廳の租稅は國費に屬するものと地方費に屬するものあり、前者は地租、鹽稅、所得稅、取引所營業稅、取引稅、酒稅及び煙草稅、後者は營業稅及び雜種稅にして何れも民政署長又は民政支署長に於て之れを賦課徵收せらる、最近六ケ年間に於ける收入成績を圖表に示めせり。

▲國稅

【地租】地租は明治三十八年關東州民政署令關東州地租規則に依り田畑の業主(所有者)に對し、一畝(我約百八十坪)に付金二十錢の割合を以て賦課し每年十一月之れを徵收す。

【鹽稅】鹽稅は明治三十八年遼東守備軍令鹽稅規則に依り、關東州に於て製造したる鹽に付ては製造場より移出する時移出高一石(我約二石五斗)に付金六十錢、關東州外より輸入する鹽(日本製鹽を除く)に付ては一石に付金一圓五十錢の割合にて移出又は輸入の都度製造者又は輸入者より之れを徵收す。

【所得稅】關東州所得稅令に依り關東州に本店又は主たる事務所を有する法人は其の普通所得及び清算所得に付、所得稅法施行地、朝鮮、臺灣又は樺太に本店又は主たる事務所を有せざる法人にして關東州に資產又は營業を有する時は其の資產又は營業より生ずる所得に付、每事業年度又は清算結了の都度之れを賦課する事とし法人のみに課稅したりしも大正十五年より法人に非ざる社團も法人と看做し略法人同樣課稅し特殊の社會事情に適應せしめたり。

【取引所稅】取引所稅は大正八年勅令關東州取引所令に基き制定したる大正九年廳令關東州取引所稅規則に依り賦課せらる、但し南滿洲鐵道附屬地には大正八年廳令第六十六號を以て之れが適用を停止せり。

【酒稅】酒稅は大正十一年勅令關東州酒稅令に依り酒類を釀造酒、蒸餾酒、再製酒の三類に分ち關東州に於て製造する酒類には其の造石數に應じ製造者に之れを課し、一定の納期に於て徵收することゝし關東州外より輸入するものは、引取石數に應じ引取人より之を徵收せらる。

【煙草稅】大正十一年勅令關東州煙草稅令に依り煙草の耕作、製造、販賣は免許を受けしむることゝし製造煙草は口附紙卷煙草、刻煙草及び其の他の製造煙草の二に葉煙草は各等級に區分し其の小賣定價又は價格に應じ課稅地域又は郵便局より引取る際左記區分に依り煙草稅を引取人より徵收す、一面自家用煙草の制度を設け關東州外に輸出したる煙草及び煙草製造原料に供したる葉煙草に付ては煙草稅を免除さる。

▲地方稅

明治四十五年府令關東州地方稅規則及び昭和五年廳令關東州營業稅規則に依り營業稅及び雜種稅の二種に區分し左記の如く賦課せらる。

【營業稅】營業稅は關東州に營業場を爲す者に對し其の業態に應じ資本金額、資本金額、收入金額、請負金額、報償金額を課稅標準とし各所定の稅率に依り賦課せらる其の種類左の如し。

物品販賣業　銀行業　保險業　無盡業　金錢貸付業
物品貸付業　倉庫業　運送業　鐵道業　請負業
取引所信託業　周旋業　運送取扱業　問屋業　代理業
兩替業　仲立業　信託業　代書業　製造業
印刷業　出版業　寫眞業　洗濯業　湯屋業
旅人宿業　席貸業　料理店業　貸座敷業　飲食店業
理髮業　遊技場業　藝妓置屋業

【雜種稅】雜種稅は左の種目に付貸家稅は貸付用建物賃貸價格を、不動產に關する權利取得稅は取得價格を、土地增價稅は自然增加價格を、興業、演劇は收入金額を、船舶稅は登簿噸數を課稅標準とし、其の他のものは物件の數量又は人頭に應じ各所定の稅率を以て賦課せらる。

藝妓　俳優　幇間　遊藝師匠　遊藝稼人　娼妓
酌婦　娼車　船舶　興業　演劇　人寄席
屠畜　貸家　不動產に關する權利取得　土地增價

▲官有財產

【官有土地及び建物の沿革】明治三十八年九月日露媾和條約締結せらるゝや、帝國は同條約第五條に依り清國在來の官有地を始め露國が關東州租借以來銳意之れが經營の爲め買收したる土地及び其の建設せる建物等一切を繼承し、之れに戰役當時沒收に依り官有に歸屬したるものを加へ、都督府創設當時既に厖大なる官有土地建物を組成せり、更に大正三年度より開始したる土地調査の結果官有土地の區分明瞭となり、面積二億八千七百六十二萬餘坪の廣大なる土地の官有に編入せらるゝに至れり。

【官有土地建物の管理】明治三十九年九月關東都督府の置かるゝや、陸軍に於て直接其用途に供するものゝみを依然都督府陸軍經理部の所管とし他は總て民政部の保管に移屬せり、越へて明治四十年四月南滿洲鐵道株式會社の設立に當り、鐵道提理部所屬並に都督府陸軍經理部長所管土地建物の一部は政府の出資財產として同會社に引渡されたるを以て、殘餘の官有土地建物は陸海軍所管以外都督府民政部を經て全部當廳の管理する事となれり、昭和二年度末に於ける所管財產は合計一億五千六百十七萬九十七萬圓を算せり。

【官有土地建物の貸下】遼東守備軍司令官は主として渡航邦人の急需に應ずる爲め明治卅八年二月租借地內土地及家屋貸下內規を定められしが、其後事務は民政署に移りしも右內規は繼續適用せられ大連市街を圍繞せる北沙河口外二十四箇村貸地規程を制定せらるゝに至れり、然るに其後借地內隨處に永久的工作物を建設する旁續出するに至り將來市街計畫上に支障を來すの虞ありしを以て新たに規程を定められ、卽ち前記二十五箇村を甲乙二地域に區分し、甲地域に對して宅地に供するの外工作物の建築を禁止し、乙地域に對しては建築に際し許可を受くる事とせり、而して貸付期間は最長期を二十箇年とし、貸付料は使用の目的及場所の情況に依り一年乃至十年每に更改協定する事とせり、尙昭和三年度現行貸付料は土地一坪一箇月に付旅順市街宅地最低一錢、最高八錢、大連市街宅地最低一錢、最高四十錢、金州、普蘭店、貔子窩市街宅地最低一厘最高二錢、農耕地は地價の百分の五を以て年額料金とせり。

【官有土地建物の拂下】官有地は專ら貸付の方法に依り民間の利用に委し來りしが、世界大戰に依り經濟界活況を呈し土地の需要過多と爲りたるを以て、大正七年競賣規則を定め一般競爭入札の方法に依り之れが拂下の途を開きたり(但し公益事業に要する拂下規定は特別令を制定せらる)卽ち大正七年以降競賣方法に依りたるもの合計五萬七百九十七坪此の拂下價格百五十三萬二千四十圓にして特別令に依りたるもの合計六十四萬二千九百三十五坪此の拂下價格五百九十四萬九千二百二十八圓にして好況時の住宅難に際し之れが緩和に多大の効果を與へられたり。

▲歲計

【特別會計】關東都督府特別會計法は明治四十年法律第十七號を以て制定せられる、施政以來二十年を超へ產業の基礎漸く成らんとし、租稅其の他の收入は每年經常的に之を收納する事を得ると雖も、又一方には管下の發展に伴ひ衞生設備の改善、警察力の充實、敎育機關の增置、產業の助成、遞信事業の擴張等施政上緊急已むを得ざる施設費を要し、其の經費を悉く歲入に俟つ能はざる狀勢なるを以て未だ歲計獨立の時期に達せず、年々一般會計より經費の補充を受け經理を爲しつゝあり。累年の統計を圖表に示めせり。

【地方會計費】地方費に關する制度は明治四十年三月關東州地方費令の公布あり、同年四月一日より之を施行し特別會計法と相俟ちて財政運用の圓滑を期し管內一般の發展に寄與する所尠からず、地方費收入の種目は地方稅地方費に於て管理する事業及び財產の收入並に雜收入等にして始政當時特別會計より補給を受け來りたるも、大正五年度以降は收入增加の爲め補給を中止するに至れり、支出は事務費、敎育費、衞生費、勸業費、營繕土木費、敎育費、營造物費及び地方費取扱費等に充つるものとす。累年の統計圖表に示めす。

圖表對照統計

◇關東廳特別會計歲入歲出決算累年表

年度	歲入			歲出		
	經常部	臨時部	計	經常部	臨時部	計
明治四十年度	一、三六七、九九	三、〇〇五、四二三	四、三七三、四七一	二、六四六、〇九九	八五五、四八七	三、四五一、四八六
同四十一年度	一、三七四、九八	三、九五、一三三	四、三九、〇八一	二、三五六、四五〇	一、〇五五、一七〇	四、三一一、六四〇
同四十二年度	一、五二九、一三三	四、二九、〇八一	五、七〇八、二一四	二、八一七、一三三	一、八六二、四四一	四、六七九、六九
同四十三年度	一、六三、八四一	五、〇一〇、五五七	六、六四三、三九八	二、九八八、九三	一、七二四、九六一	四、七一三、八五四
同四十四年度	一、七九六、四八	四、八五五、九一七	六、六五二、四五	三、一四、九六一	三、三四、〇五五	五、四九九、一六
大正元年度	一、八二、七三	四、五〇、〇四五	六、三五八、七五五	三、三五、〇三五	一、四五九、〇四〇	四、四九四、一二三
同二年度	一、九三、七六	三、六五一、〇三五	五、四八〇、〇九三	三、四五、一五三	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同三年度	二、〇七、八四一	三、四七、九八五	五、四九八、一四六	三、四七、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同四年度	二、一三、四三	三、六七、一四五	五、八四〇、一七八	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同五年度	二、二二、八二〇	三、四七、九八〇	五、八九〇、八〇〇	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同六年度	二、三四、八三〇	四、一四〇、三四四	六、二五、一七四	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同七年度	二、四四、六九一	五、八六、七五五	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同八年度	二、五三、三五〇	七、五五三、三五〇	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同九年度	二、五三、三五〇	八、八九、一三三	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同十年度	二、五三、三五〇	九、〇〇、四三一	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同十一年度	二、五三、三五〇	九、四三、五四八	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同十二年度	二、五三、三五〇	八、五三、九八三	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同十三年度	二、五三、三五〇	七、一九、一三	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同十四年度	二、五三、三五〇	七、五五三、三五〇	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
昭和元年度	二、五三、三五〇	九、八二、六五五	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同二年度	二、五三、三五〇	七、九四、五八八	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同三年度	二、五三、三五〇	八、三六、三三五	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三
同四年度（豫算）	二、五三、三五〇	八、三六、三三五	六、六四一、九五五	三、五四、一四五	一、九七、一三	四、四九四、一二三

◇地方費收入支出表

年度	收入			支出			比較	
	經常部	臨時部	計	經常費	臨時部	計	增	減
明治四十年度	四、八六、七四	八九五、〇四	四、九五、七八	三、七七、八〇	三六、九四	三、八一〇、七四	一、七二四、三九六	
同四十一年度	四、三九、〇八一	一、三八、六四三	五、七八、七二四	四、一六、七四	一、六四、一二九	五、七八、一二三	四、一七〇、四三一	
同四十二年度	四、六四、二四九	一、三五、〇四一	六、〇八、二九〇	四、四九、七四	一、六〇、〇四一	六、〇八、二九〇	二、三七四、〇八八	
同四十三年度	五、一八、九三	一、四四、〇九九	六、二六、一三二	四、七六、七三	一、四四、〇九九	六、二六、一三二	一、三四七、四九三	
同四十四年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
大正元年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同二年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同三年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同四年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同五年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同六年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同七年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同八年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同九年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同十年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同十一年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同十二年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同十三年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同十四年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
昭和元年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同二年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同三年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	
同四年度	五、三五、一四五	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	四、九〇、三四	一、四四、〇九九	六、四九、二四四	一、四九六、九九二	

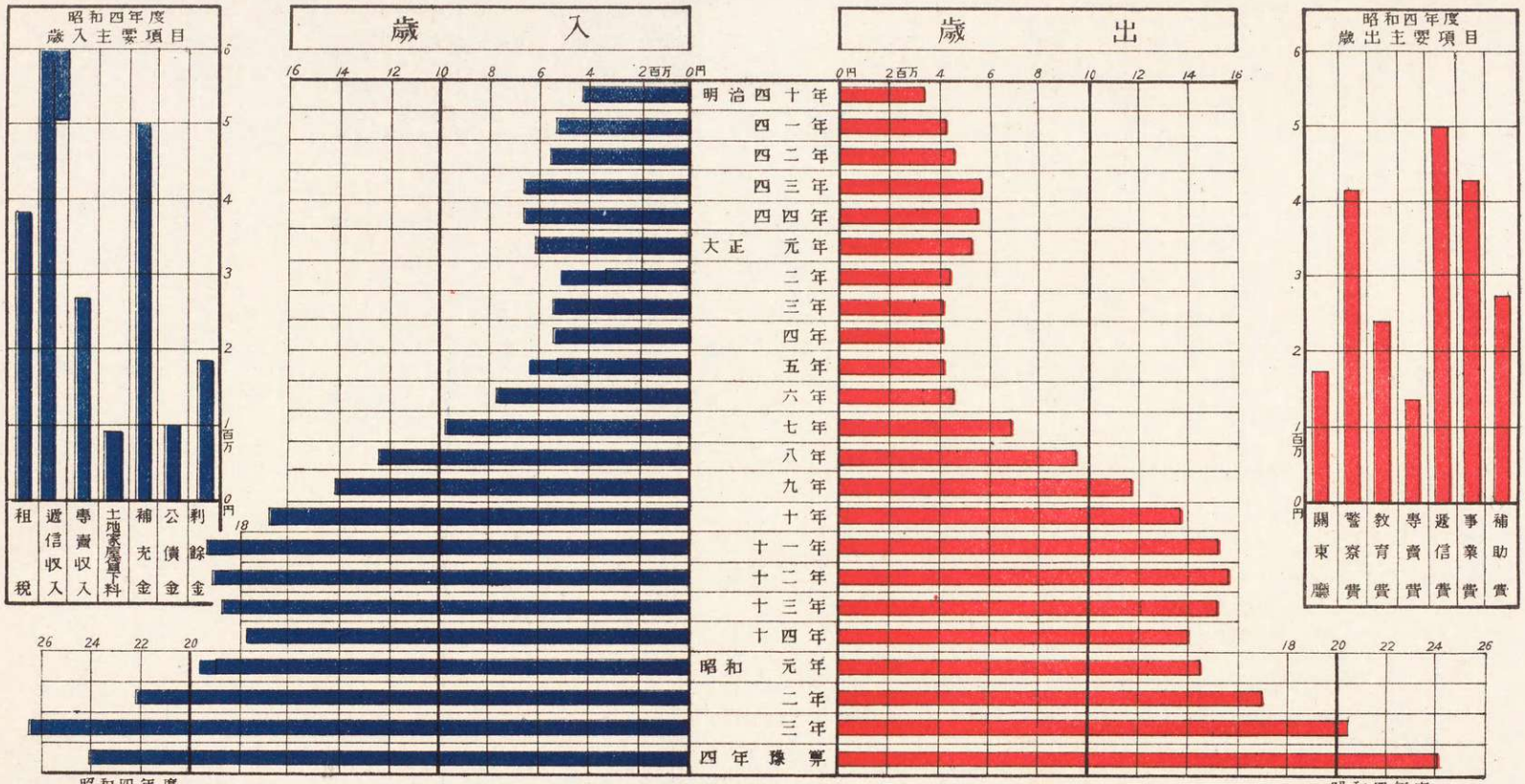
◇昭和四年度歲入出項目主要表

歲入ノ部		歲出ノ部	
稅	三、八一〇、七四六円	關東廳費	一、七二四、三九六円
郵便電信及電話收入	六、九四五、二九六	警察費	四、一七〇、四三一
專賣收入	二、六五七、五〇〇	教育費	二、三七四、〇八八
土地家屋貸下料	九三五、八四三	專賣局費	一、三四七、四九三
補充金	五、〇〇〇、〇〇〇	遞信費	四、九六六、九九六
公債金	一、〇〇〇、〇〇〇	事業補助費	四、二四七、八一二
前年度剩餘金繰入	一、八二九、三六六		一、六二一、六五〇

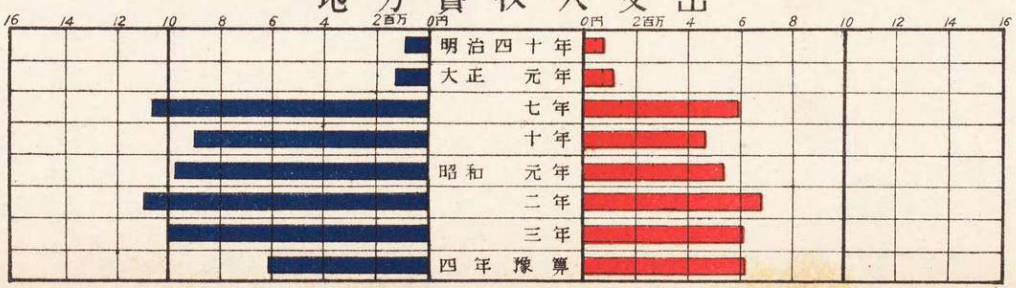
◇昭和四年地方費收支主要項目

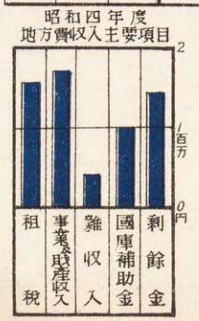
收入ノ部		支出ノ部	
稅	一、五九三、六九八円	教育費	五一七、五八六円
事業及財產收入	一、七〇三、七四四	營造物費	三三五、一五七
雜收入	四一五、六〇五	作業費	一、〇七三、七三〇
國庫補助金	一、〇〇〇、〇〇〇	土木維持費	三一〇、五〇二
前年度剩餘金繰入	一、四三二、四三九	營繕及土工費	一、七四八、五七一
		補助費	一、五六四、一九六

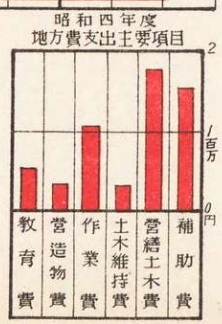
關東廳特別會計



地方費收入支出







調査 關東廳

■農林畜産業

▲農　業

【耕作方法】 農業は州内住民の主業なりと雖も其の農法は氣候、土質、地勢及び作物の關係上概ね粗笨なり、穀菽類としては包米（玉蜀黍）を主たるものとし高粱之れに次ぐ包米畑には豆類の間作を爲し、蔬菜は大根、白菜、葱等を主作物とせり、農民は能く最低度の生活に甘んじ而かも體軀強健多力勤勉にして加ふるに役畜の使用頗る巧妙なり、然るに州内農家の未だ振はざるは氣象地味の關係尠からずと雖も、肥培の不充分なる事も亦其の主因たるを失はず、彼の市街地附近の農民が老幼を問はず街路を彷徨し、競ふて馬糞を採集し、以て堆肥の原料となしつゝあるは日常目撃する所なり。滿洲に於ける主要農産物たる穀菽類及び蔬菜類の收穫統計を圖表に示せり。

【棉　花】 大正十一年朝鮮總督府勸業模範場木浦棉作場より、米國種陸地棉キングスイムプルーヴド種早熟系種子の分譲を受け、試作を行ひたりしに其の成績良好にして陸地棉栽培の可能性あることを確めたるを以て、翌十二年には前年より大規模に之れが試作を行ひ同時に旅順、大連、金州及び普蘭店等の民政署管内に亘り、日支篤農家に委託して試作する等其の作付段別は二十餘萬町歩に達したりしが、亦孰れも好結果を得たり。

斯の如く大正十一、十二兩年に於ける試驗は好成績を擧げ其の收益は在來の普通畑作物に比し二、三倍に上り其の成績益良好なるを明にせり、依て關東廳に於ては十箇年計畫を以て栽培總反別を四萬町歩に達せしめ、其の生産實棉大約四千萬斤（反當平均百斤）に達せしむべき方針を以て莅めり。更に大正十五年十一月には滿洲棉花株式會社を設立し、本州棉花の購入及び加工をなし生産者の販賣を便ならしめ、更に進んで益々本州棉花の産額を增加し以て内地に於ける紡績原料の一部を補ひ、又た一面州内日支農民の經濟向上を圖らん事に努めつゝ今日に及べり。（圖表參照）

【果　樹】 關東廳農事試驗場に於ては明治三十九年果樹園を設置し、内地より梨、苹果、葡萄、桃及び櫻桃等の苗木を移植し試作を行ひ其の成績良好なるものを選出し配布栽培せしめたりしが民間に於ても果樹の有利なるを認め稍勃興の狀勢に鑑み、更に大に生産額を增加し、州内の需要に應ずると共に進んで之れを州外に輸出し農家經濟の向上に資せしめんとし、第二期奬勵として大正十年度より五箇年間に五十萬本の苗木を養成配布するの計畫を樹てたりしが、急激に需用者增加せし爲め其の供給を滿たす能はず、止むなく内地朝鮮等より之れを輸入して栽植するものあるに至れり、然るに是等輸入苗木には病害蟲の附着するものある爲め、之れが豫防規則を制定せられ病害蟲類の驅除豫防に努め以て果樹に對する保護取締を講ぜり、更に翌十四年五月には當業者を促し關東州果樹組合を設立せしめ栽培法の指導並に病害蟲の驅除豫防に任ずると共に益優良果實の生産增加を圖り將來本州農産界に於ける一大特産品たるの名實を保持せしめん事を期せしめつゝあり。（圖表參照）

【水　田】 水田は從來土着民に依り粗劣なる在來種を以て、自然の水濕地に點々小規模に行はれたりと雖も、水利不便にして經營有利ならざりしが、明治四十三年頃より邦人の着目する處となり荒蕪地の貸下を受け水利の便を講じ相當の規模を以て經營を試むるものあるに至れり、農事試驗場に於ては大正三年より試作田を設け其の後數年間試作の結果、當地方の氣候に適する品種を選定して栽培を奬勵し其の成績稍見るべきものあるに至れり。

【蠶　業】 明治四十一年農事試驗場に於て初めて日本蠶種を輸入し飼育試驗を行ひたる結果其の有利なるを認め試驗場に於て蠶室及び桑園を新設し翌年同場養成の桑苗千二百五十本宛を旅順、金州に無償配付したるが、栽植の成績良好にして春蠶期刈桑反當三四百貫を收穫し秋蠶期更に二百貫内外の收葉を得、春秋季を通じて十二三貫の收繭を得るを確めたり、是に於て農家の副業として奬勵することゝし、蠶種の無償配付を開始せる外金州に蠶業傳習所を設置し、又た旅順民政署にも蠶業講習會なるものを開催し、前者と合せて大正七年迄に三十七名の修了生を出せり、彼等は歸農後既に大正四年度に於て收繭量二百三十八貫に達するの蠶を營むに至たれり、而かも尚漸次增加の趨勢に在りしを以て都督府に於ては蠶業十箇年計畫を樹て、十年後に於ける繭産額を五千石に向上せしむ可く奬勵に努め大正六年旅順にも蠶業試驗場を設置し昭和二年末迄に二百七十一名の修了生を出すに至たれり。（圖表參照）

【農事試驗場】 施政當初より關東州並に滿蒙開發の第一要義は産業の改良增殖を圖るにありとし、明治三十九年關東都督府農事試驗場規程を發布せられ、同時に大連西公園に設置し直ちに事業に着手せらる、而して附屬農場は反別九町八反歩にして内林木苗圃三町五反歩、果樹園二町三反歩、桑園七畝歩、花卉其の他雜用地一町歩殘り二町九反三畝歩を鑿菽、蔬菜、特用作物、果樹及び桑等の試驗並に種苗用に供せらる。然るに其の後大連市街擴張案成立し果樹園の大部分を失ふに至りたると同時に事業の擴張上農事試驗場移轉の必要起り大正十三年十二月遂に現位置たる金州城東門外に移轉すると共に其の敷地を擴大せらるゝに至たれり。

【蠶業試驗場】 當場は蠶絲業に關する試驗及び調査、蠶種及び桑苗の製造配付並に蠶絲業に關する講話及び指導の目的を以て、大正六年廳舍、蠶室其の他講習に必要なる建物の營繕及び桑園の一部を造成し、事業開始に必要なる設備を了し同年四月一日事業を開始し今日に及べり。尚一方野蠶の試驗場として海鼠山麓に柞樹園三町歩を設け、次で十四年同柞樹園に隣接して蒿柳園三町五反二畝歩を附設したりしが、大正十三年には野蠶監督舍をも建築し天柞蠶の試育を續行せられつゝあり。

▲林　業

【林況及び地況】 關東州の山地は重粘質壤土なるを以て周到なる管理の下に施業せられんか、將來良好なる樹林地として更新せらるべきも實際に於ては既往數百年來濫伐の弊に陷り、加之野火放牧及び採草の慣習等の爲め、州内到る處禿山と化し既に地力減退せる箇所をも生ずるに至り、樹林地としては僅に河岸地、墳墓地、村落及び寺廟等に點々存するのみ。以上は全州を通じて概論せるものなるが、小赫山、大赫山、老鐵山、安子嶺分水嶺の一部には既往よりあかまつ、柞等の小純林或は混淆林を存し以て多少地力の保護せらるゝものあるを見るのみ、斯くの如き程度なるにも拘らず金州方面の部民は造林を希望せざるを以て南山に關係ある附近の村落に六十六町六畝歩を貸付し、村落の共同事業として松苗二十四萬八千五十本の植付並に柞種子七石七斗五升の播種をなさしめたり、夙に軍政時代より民業奬勵に重きを置き、爾來其の方針を以て進みたるにも拘らず土人の頑冥にして容易に其の效果を奏せざりしも、玆に初めて官有地無償貸付の處分をなし共同的造林の一歩を見るに至れり。又た他方に於ては民間に對し植樹奬勵の爲め、造林奬勵規則發布せられ造林用官有地の無償貸付、種苗の無償下附、其の他苗圃の設立に對して補助金を下附する等保護奬勵せられたる結果、大正十一年末に於ては、民營苗圃も三十三箇所を算するに至る。斯くの如く連年繼續奬勵の結果漸く其の效果顯はれ、金州管内のみにても面積三十一町歩の造林を得るに至れり、尚官行造林事業も年々擴張せられ既設二箇所の官設苗圃にては所要の苗木を養成し難く、加之大連水源地造林の必要等より大連苗圃を再興し旅順、大連、金州の三箇所となれり此の總面積は五十三町八反六畝歩にして苗木三百萬本餘生産することを得るに至たれり。

【造林事業】 前揭の如く日露戰後遼東守備軍司令部設置當時より植林の必要を認められたるも官行造林は主として風致林、水源滴養林、魚附林の造成を計かり一面造林の模範を公衆に示すにありしが、造林奬勵規則の發布後民間に

於ける植林觀念漸次啓發せられたる結果、昭和二年末に於ける既成林面積は圖表の如く增大するに至れり。

▲畜　産

【概　說】關東州内に飼養する家畜の種類は牛、馬、騾、羊、豚及び家禽を主とす、是等の家畜は農業經營に又は運輸交通に之れを使役し、或は食用品として夫々重要缺くべからざるものなるも其の品種は所謂滿洲在來種にして、性能品質共に概ね良好ならず從て經濟的價値に乏しきを以て之れが資質の改良を爲すことは極めて肝要なるものあり、關東廳に於ても意を玆に注ぎ畜産改良に對し一定の方針を定め大正四年以來鋭意目的の達成を圖りしに今や漸く其の效果を認め得るに至れり。

【畜　牛】關東州内に飼養する畜牛は蒙古系統に屬する品種にして、外貌體型に於て蒙古産牛と著しき差異を認め難し、乃ち體軀は一般に大ならざるも頭部は稍大に眼は略圓し頸短く厚からず、鬐甲低く肩胛骨峻立し胸狹く胸垂少く腹は膨大に尻は斜尻にして四肢短く臆部の發育良好ならず、之れを要するに前軀に比し後軀の發育不良なり、體重牡牛七十貫乃至百貫にして、牝牛六十貫乃至八十貫なりとす。

【能力及び用途】役牛は州内にありては主として農耕又運輸に使役せらるゝも歩度頗る緩慢なり、肉用としては特に肥育せしむる目的を以て飼養するものなきが故に食用としては直に良好ならず、然れども寧ろ加工製造用肉としては良好なり乳用としては辛ふじて犢を養ひ得るに過ぎず。

【改良の方針】滿洲にありては牡牛の去勢普及せられ幼時殆ど總て之れを行ふの慣習ありて牡牛を見ること極めて稀なるの狀況なるを以て、關東廳に於ては大正五年以來年々數頭の種牡牛を購買し州内各民政署及び同支署管内に分配し、地方産牛の改良を爲しつゝあり。尙乳用牛の改良はホルスタインフリーシャン種を以て行ふことゝせり、又た搾乳業者も進んで内地より牝牛又は牡牛を買入れ改良繁殖を行ひつゝあり。

【馬　匹】關東州内に飼養する馬は蒙古産馬にして滿洲一帶に於て使役するものと同じく體軀は矮小なれども體質强健、而かも性温順にして粗飼及び粗管理に耐へ能く氣候風土の感作に抵抗す、而かも比較的力量に富み且持久力を有するは美點と稱すべし。

【改良の方針】州内は馬の使役地にして生産地にあらざりしが近年牝馬の飼養多きに至り、生産を欲するもの漸次增加の傾向あるを以て先づ試みに馬政局より種馬三頭の保管轉換を受け初めて種付を行ひたるが交配を希望するもの多く種牡馬不足を告げ改良繁殖の機運に到達せるを認め關東廳は馬匹改良の機關として州内に種馬所を設け輕輓馬生産を以て方針と爲し、此の目的に適合する種馬を充實せんことを期しつゝあり。

【驢　】滿洲に産する驢は體軀矮小にして體高僅に三尺乃至三尺七八寸體重三十貫平均に過ぎざるも性温順にして强健忍耐力あり、極めて粗食に堪え管理容易なり比較的力量あるを以て各種の用途に使役せられ、小農として缺く可からざる役畜なり、卽ち駄用として荷物を運搬し輓用として馬、騾を補助し或は眼掩を施して終日碾子又は臼を挽き又は田畑の灌漑用汲水作業に使用されるる等、最も一般的各種用途に使役せらるゝが爲め極めて重寶視せらる。

【改良の方針】滿洲に於ては前記驢の外種用として山東及び直隷地方産大型驢を移入し長育、農安及び懷德地方には夙に騾の改良に供用す、州内に於ては殆んど大型驢を飼養する者無く驢及び騾改良も行はれざりしが大正十一年以來州内に於ても之れが改良を行ふことゝし、直隷及び山東地方より年々大型驢を移入し之れを州内各地方に分配し種付を奬勵しつゝあり。

【騾　】騾は牡驢を牝馬に交配して生産せる一代交配雜種にして、滿洲に於ては馬と同じく農耕及び輓曳に使役するも乘用に供するを得ず、其の體型外貌部分的に馬及び驢に類似す、體高四尺二三寸乃至五尺に及ぶも平均四尺五寸内外なり。

【性能及び用途】性怯懦遲鈍にして悍戾なし馬に比し一層粗飼粗管理に堪え、力量は却て馬に優り且つ頗る强健なるを以て速力を要せざる重輓曳に適し州内に於ては專ら運輸に使役せらる。

【改良の方針】騾生産に供せらるゝ種用牡驢は州内に於ては小型驢のみなるを以て、北滿地方優良騾生産に供する種驢と同樣年々山東地方より大型驢を移入し騾の改良を行ひつゝあり。

【豚　】由來滿洲に飼養せらるゝ豚には大型、中型及小型の三種あり、就中州内にありては小型の飼養最も多く小型豚は大型中型に比し早熟なれども屠殺場に送るには尠くとも一年半を要し體重十五六貫乃至二十貫に達す。形態は顏面直にして長く口吻尖り耳は長大にして前外方に垂下し、體軀扁平にして腹部膨大に臀は短く尻の傾斜甚し脚は長く比較的大にして運動輕快なり。

【能　力】小型豚は骨大にして脂肪に富むも肉量に乏しく屠殺分止り良ならず、又た肉質は燻腿等の加工に適せざるも多産性により裕に十頭以上の仔豚を産し又た哺育巧なり。

【改良の方針】州内に於ける養豚の改良を計る目的を以てバークシャー種を入れ之れが雜種を生産せしめたるに、其の發育極めて速に肉質は佳良に然かも早熟にして一箇年餘にして裕に屠殺に適するに至り、同量の飼糧を給することに依り三割乃至四割の體重を增加し、且雜種仔豚は初時賣買に當り、在來種に比し約二三圓の高價を唱ふるに至れるを以て能く農家の意嚮に投じ今や州内に飼養する養豚の約八割は雜種を見るに至れり。

【緬羊及山羊】關東州内は耕地拓け山野には植林を爲し極めて集約的農業を營むに至れるを以て、自然採草地に乏しく又た放牧を主とする牧畜には不適當なり、されば緬羊及び山羊の如き其の飼養頭數極めて少數にして將來と雖も之れを改良又たは增殖を奬勵すべき價値を有せざるを以て、關東廳に於ては緬羊及び山羊に對し何等計畫せらるゝに至らず。

【家　禽】滿洲に於ては鷄の飼養極めて普及し飼料は穀類又は庖厨殘滓等僅に給與することあるも、多くは庭園周圍に自由に放飼し落穗虫類等を啣食せしむるに過ぎず、品種は大多數所謂支那鷄にして産卵又は肉用の目的に向て何等淘汰選擇を經たるものに非ず經濟價値に乏しきものなり。鴛の飼養も亦多けれども鷄同樣の飼養法にして鷄に比し飼料少量にして足り又た地積を要せずして管理も亦容易なり。

【性　能】州内に飼養する鷄は肉用とし或は卵用とし共に其の能力低劣なれども古來自然淘汰を經たるものなれば、强健にして氣候風土の感作に對し抵抗力に富む。

【改良の方針】養鷄は其の數莫大にして之れが改良は農民を稗益する所著しきものなるに依り、之れを其の用途に向て卵用種及び卵肉兼用種の二種類を以て改良することゝし農民の嗜好、氣候風土に對する抵抗力及び其の能力を考慮し、大正五年以來之れが種禽を撰び改良を奬勵しつゝあり。

【畜産奬勵機關】大正十五年以來關東廳に於ては畜産奬勵機關として金州に種畜場を設置し種豚の外種牛、種禽を置き種牛、種豚の種付及び種卵種豚の配付等を行ひ且仔畜の生産に力め州内全般に對し種畜を配給するに足るの内容を充實せん事を期せられつゝあり。

【種馬所】大正十五年關東廳種馬所を金州に設置し業務を開始せらる、現在種馬所保管に屬する種馬廿一頭あり而して其の目的は奉天以南滿鐵道沿線附屬地に産する馬及び州内に産する馬の改良にあり、種馬は奉天以南にありては安東、遼陽、海城、大石橋、熊岳城及び松樹に、州内にありては旅順、大連金州、普蘭店、華家屯及び鏡子寮に夫々種付所を設置し派遣したるも尙ほ年を逐ひ鐵道沿線(奉天以南滿鐵附屬地)及び州内共に種付所を增設せんとす。

牧畜

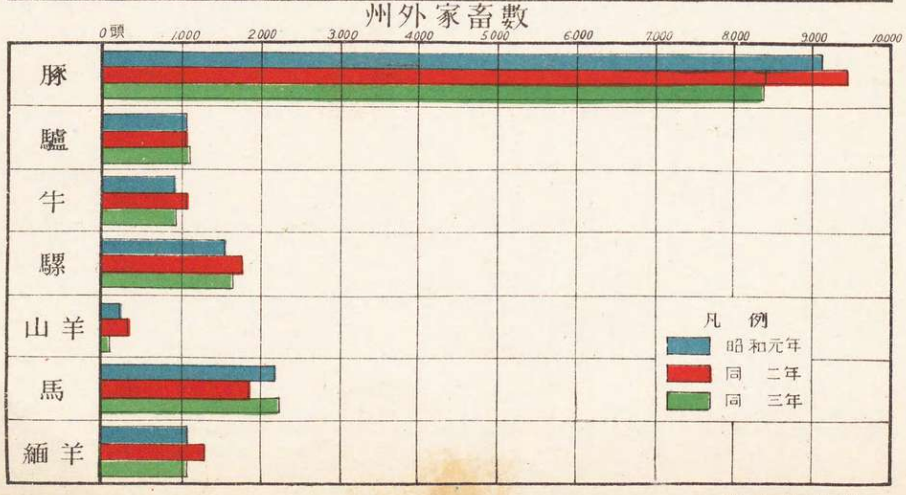
關東州内と州外の家畜割合



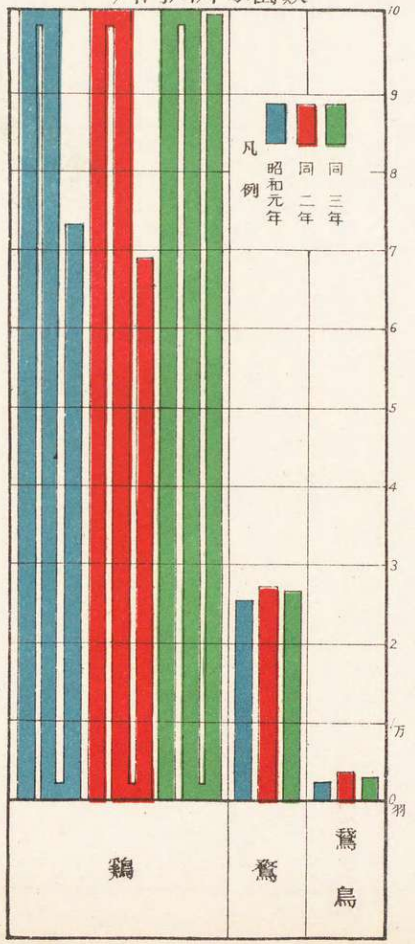
關東州州内家畜數



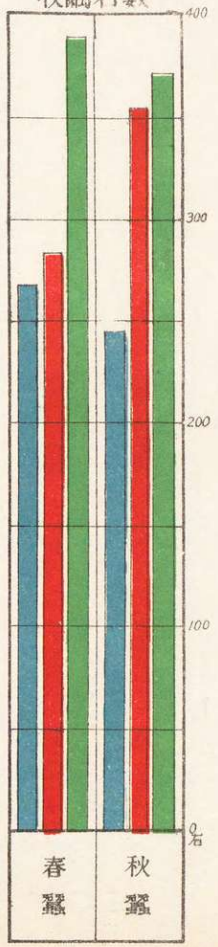
州外家畜數



州内州外家禽數



收繭石數



關東廳調査

圖表對照統計

◇州內各署別耕地面積表

耕地別 / 署別	官有地	民有地	計	官有地	民有地	計	合計
	田			畑			
大連民政署	一三、六三九町	一三、〇一一町	二七、六五〇町	九、〇六〇町	七、一五五町	一六、二一五町	四三、八六五町
金州支廳	六二、一〇一	六二、一〇一	一二四、二〇二	一三、一〇八	一三、一〇八	二六、二一六	一五〇、四一八
普蘭店支廳	一、〇八三、四〇〇	一、〇八三、四〇〇	二、一六六、八〇〇	三五、八九三	三五、八九三	七一、七八六	二三八、五八六
貔子窩支署	三六、四〇〇	三六、四〇〇	七二、八〇〇	二、三五〇	二、三五〇	四、七〇〇	七七、五〇〇
計	一、一〇八、三五五	一、一〇八、三五五	二、二一六、七一〇	五七、一〇〇	五七、一〇〇	一一四、二〇〇	四三〇、九一〇
（町反畝歩換算）	三六、一一七町	三六、一一七町	七三、二三四町	五七、一〇町	五七、一〇町	一一四、二〇町	四三〇、九一〇町

◇農業戶口表（其の一）

年次	專業						兼業						合計		
	日本人			支那人			日本人			支那人					
	戶數	人口		戶數	人口		戶數	人口		戶數	人口		戶數	人口	
		男	女		男	女		男	女		男	女		男	女
明治三十九年	一四	六三	五一	一九	八三	三六	三六、五〇一	一四、一六九	一四、三三六	四、六三一	二、〇八四	二、五四七	三七、一三五	一五、三五三	一五、七八二
同大正十年	一九	八三	三八	三六	一四九	八七	四一、一六九	一六、三六九	一六、八〇〇	四、六三一	二、〇八四	二、五四七	四五、八〇〇	一八、四五三	一八、三八七
昭和三年	三四	一四九	八五	三六	一四九	八七	四六、一六九	一八、三六九	一八、八五三	四、六三一	二、〇八四	二、五四七	五〇、八〇〇	二〇、四五三	二〇、三八七

◇農業戶口表（其の二）

年次	專業						兼業						合計		
	日本人			支那人			日本人			支那人					
	戶數	人口		戶數	人口		戶數	人口		戶數	人口		戶數	人口	
		男	女		男	女		男	女		男	女		男	女
明治三十九年	一四	六三	五一	一九	八三	三六	三六、五〇一	一四、一六九	一四、三三六	四、六三一	二、〇八四	二、五四七	三七、一三五	一五、三五三	一五、七八二
同大正十年	一九	八三	三八	三六	一四九	八七	四一、一六九	一六、三六九	一六、八〇〇	四、六三一	二、〇八四	二、五四七	四五、八〇〇	一八、四五三	一八、三八七
昭和三年	三四	一四九	八五	三六	一四九	八七	四六、一六九	一八、三六九	一八、八五三	四、六三一	二、〇八四	二、五四七	五〇、八〇〇	二〇、四五三	二〇、三八七

◇穀菽類作付段別及收穫高表（右州內左州外）

種目 / 年次	昭和元年			大正十四年			昭和三年		
	作付段別	收穫高		作付段別	收穫高		作付段別	收穫高	
包米	九、七、六八八 反	一、二〇四 石		一、一三五 反	一、三〇一 石		一、一三五 反	一、三〇一 石	
高粱	一、一四三、五四九	一、一四三、五四九		一、一四三、五四九	一、一四三、五四九		一、一四三、五四九	一、一四三、五四九	
粟	二、〇一三、九四九	二、〇一三、九四九		二、〇一三、九四九	二、〇一三、九四九		二、〇一三、九四九	二、〇一三、九四九	
糜子	一、一〇四、八〇〇	一、一〇四、八〇〇		一、一〇四、八〇〇	一、一〇四、八〇〇		一、一〇四、八〇〇	一、一〇四、八〇〇	
稗子	二、〇〇三、九四九	二、〇〇三、九四九		二、〇〇三、九四九	二、〇〇三、九四九		二、〇〇三、九四九	二、〇〇三、九四九	
大麥	四、九一	七〇、七		四、九一	七〇、七		四、九一	七〇、七	
小麥	一、四三二	一、三〇七		一、四三二	一、三〇七		一、四三二	一、三〇七	
蕎麥	三、三一二	四、四二九		三、三一二	四、四二九		三、三一二	四、四二九	
黃豆	一九、〇〇六	二三、四八七		一九、〇〇六	二三、四八七		一九、〇〇六	二三、四八七	

種目 / 年次	昭和元年			大正十四年			昭和三年		
	作付段別	收穫高		作付段別	收穫高		作付段別	收穫高	
綠豆	九、九四三 反	八、九八六 斤		八、二一一 反	七、三九〇 斤		八、二一一 反	七、三九〇 斤	
黑豆	七、九六五	九、五五五		九、九八七	一一、九八四		八、四九九	一〇、一九八	
小豆	七、四九六	四、九六八		七、八四九	五、二〇六		七、四九六	四、九六八	
落花生	一、八三二	二、〇五五		一、八三二	二、〇五五		一、八三二	二、〇五五	
水稻	三、一六五	八、〇五九		三、一六五	八、〇五九		三、一六五	八、〇五九	
陸稻	三、六四四	三、九四三		三、六四四	三、九四三		三、六四四	三、九四三	
其ノ他	一、四九二	一、七四四		一、四九二	一、七四四		一、四九二	一、七四四	
計	一、八二四、二五五	一、八二四、二五五		一、八二四、二五五	一、八二四、二五五		一、八二四、二五五	一、八二四、二五五	

◇蔬菜類作付段別及收穫高表（右州內左州外）

種目 / 年次	昭和元年			大正十四年			昭和三年		
	作付段別	收穫高		作付段別	收穫高		作付段別	收穫高	
蘿蔔	二、九三二 反	二、八四九、二五〇 斤		二、九三二 反	二、八四九、二五〇 斤		二、九三二 反	二、八四九、二五〇 斤	
葱	一、〇一七、八三二	一、〇一七、八三二		一、〇一七、八三二	一、〇一七、八三二		一、〇一七、八三二	一、〇一七、八三二	
茄子	八三〇	一、三五〇、〇〇〇		八三〇	一、三五〇、〇〇〇		八三〇	一、三五〇、〇〇〇	
牛蒡	一、三五	一、八〇〇		一、三五	一、八〇〇		一、三五	一、八〇〇	
白菜	九、七六八	一、一七五、七六〇		九、七六八	一、一七五、七六〇		九、七六八	一、一七五、七六〇	
韭菜	一、四五四	一、四五四、〇〇〇		一、四五四	一、四五四、〇〇〇		一、四五四	一、四五四、〇〇〇	
蒜頭	九一六	四九一、七五〇		九一六	四九一、七五〇		九一六	四九一、七五〇	
胡瓜	一、〇六一	一、二五八、二五〇		一、〇六一	一、二五八、二五〇		一、〇六一	一、二五八、二五〇	

種目 / 年次	昭和元年			大正十四年			昭和三年		
	作付段別	收穫高		作付段別	收穫高		作付段別	收穫高	
甜瓜	二、九三二 反	二、八四九、二五〇 斤		二、九三二 反	二、八四九、二五〇 斤		二、九三二 反	二、八四九、二五〇 斤	
西瓜	一、〇一七、八三二	一、〇一七、八三二		一、〇一七、八三二	一、〇一七、八三二		一、〇一七、八三二	一、〇一七、八三二	
南瓜	八三〇	一、三五〇、〇〇〇		八三〇	一、三五〇、〇〇〇		八三〇	一、三五〇、〇〇〇	
蕷	一、三五	一、八〇〇		一、三五	一、八〇〇		一、三五	一、八〇〇	
甘藷	九、七六八	一、一七五、七六〇		九、七六八	一、一七五、七六〇		九、七六八	一、一七五、七六〇	
馬鈴薯	一、四五四	一、四五四、〇〇〇		一、四五四	一、四五四、〇〇〇		一、四五四	一、四五四、〇〇〇	
其ノ他	九一六	四九一、七五〇		九一六	四九一、七五〇		九一六	四九一、七五〇	
計	一、〇六一	一、二五八、二五〇		一、〇六一	一、二五八、二五〇		一、〇六一	一、二五八、二五〇	
合計	二、九三二 反	二、八四九、二五〇 斤		二、九三二 反	二、八四九、二五〇 斤		二、九三二 反	二、八四九、二五〇 斤	

圖表對照統計

◇特用作物收穫高表

種目＼年次	昭和元年		昭和二年		昭和三年	
	作付段別	收穫高	作付段別	收穫高	作付段別	收穫高
棉花 陸地棉	有州內 七、六三三 反 左州外 一、一五一	一、六八、四九九 斤				
棉花 在來種	一、四七八	三、五八一				
蓖麻子（大麻）	三、〇〇五	三、〇〇四				
葫麻（芝麻）類	三、九三	二、八三、五九〇				
合計	三、三八五	三、三〇三、五九〇				

◇果實作付段別收穫高表

種目＼年次	昭和元年		昭和二年		昭和三年	
	作付段別	收穫高	作付段別	收穫高	作付段別	收穫高
葡萄	有州內 三〇四 反 左州外 一、三三一	一、八四、〇七一 斤	三〇五	三五、二九九	三一三、八三六 斤	
桃	一、一八	一、一五、八九三	一、四五九	一、一三、八〇六	八四五、四四八	
李	一、七一	一、一三、八五七	一、一三三	一、一三、一三五	三六、三五七	
梨	一、一三	一、一〇五、一三五	一、一三三	一、一三、一三五	三六、三五七	
櫻桃	四五	二九、四三五	三五	九、三四〇	三、四〇八	
共ノ他	七三	四三、六四三	八四	四四、〇〇三	三、九〇四	
合計	三、三八九	三、三〇三、五九〇	五、二一四	五、一三四、一四八	六、六五五、四〇九	

種目＼年次	昭和元年		昭和二年		昭和三年	
	作付段別	收穫高	作付段別	收穫高	作付段別	收穫高
甜菜	六三 反	八四、七〇〇 斤	五三	三三、八六二 斤	三一、八三六 斤	
煙草	六五	一、八九六	七三	一、三三、三三	一、八九六	
共ノ他	二四	一、三三、〇〇〇	二四	一、三三、〇〇〇	一、三三、〇〇〇	
合計	一、三五九	一、三七、一九	一、三五九	一、三七、一九	一、三五九	

◇養蠶戶數及收繭石數表

年次＼種目	昭和元年		昭和二年		昭和三年	
	作付段別	收穫高	作付段別	收穫高	作付段別	收穫高
桑園段別（有州內）（左州外）	二七町 一二	一、〇〇〇 斤	二七町 一二	一、〇〇〇 斤	二七町 一二	一、〇〇〇 斤
秋蠶 掃立蠶種 收繭高	一、〇〇四 枚	一、三五八	一、〇〇四 枚	一、三五八	一、〇〇四 枚	一、三五八
秋蠶 飼養戶數 繭	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇
春蠶 掃立蠶種 收繭高	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇
春蠶 飼養戶數 繭	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇
野蠶 飼養戶數 繭	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇	一、〇〇〇 斤	一、〇〇〇

◇造林面積表

區分＼種目	官行造林	公有林	私有林	計
旅順	四、三四四町	三、〇五、七三五	一、九、三一町	一、九、三一町
大連	三、九〇一、四一三	一、六三、六一〇	一、六三、六四〇、〇五三	一、六三、六四〇、〇五三
金州	一、九六五、四一三	三、四四六、六四〇	一、六三、六四〇、〇五三	一、六三、六四〇、〇五三
普蘭店	一、九六五、四一三	五、七九八、六三五	一、七、四九七、九三五	一、七、四九七、九三五
貔子窩	八、三三七、七八	三、四四六、六四〇	二、九九七、六三五	二、九九七、六三五
計	八、三三七、七八	三、四四六、六四〇	二、九九七、六三五	二、九九七、六三五

◇家畜飼育數表

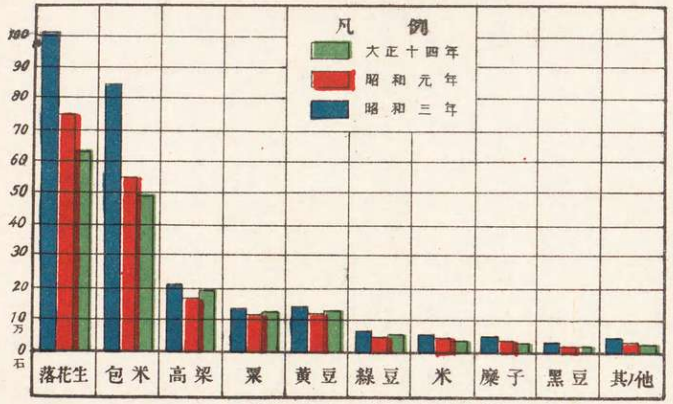
種目＼年次	昭和三年		昭和二年		昭和元年	
	牝	牡	牝	牡	牝	牡
牛 成牛	有州內 六、七一七 頭 左州外 三、〇一九	六、四四八	六、八八九	四、四八一	七、〇三五	四、三五五
牛 犢	一、〇四四	一、一七四	一、〇四四	一、一七四	一、〇四四	一、一七四
騾	九、六一二	七、一四	八、九六四	六、九三五	八、八三五	六、八三五
山羊	三、三六	三、三二	三、三六	三、三二	三、三六	三、三二
綿羊	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇

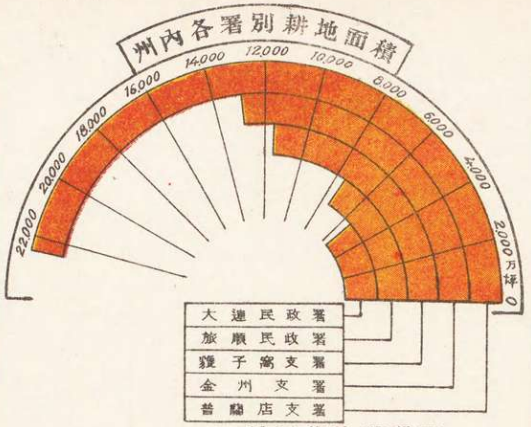
種目＼年次	昭和三年		昭和二年		昭和元年	
	牝	牡	牝	牡	牝	牡
馬	一、〇九一 頭	一、〇九一	一、〇九一	一、〇九一	一、〇九一	一、〇九一
騾	一、〇四三	一、〇四三	一、〇四三	一、〇四三	一、〇四三	一、〇四三
豚 在來種	三、八三五	三、八三五	三、八三五	三、八三五	三、八三五	三、八三五
豚 改良種 洋種	二、九三四	二、九三四	二、九三四	二、九三四	二、九三四	二、九三四
豚 改良種 雜種	一、一九四	一、一九四	一、一九四	一、一九四	一、一九四	一、一九四

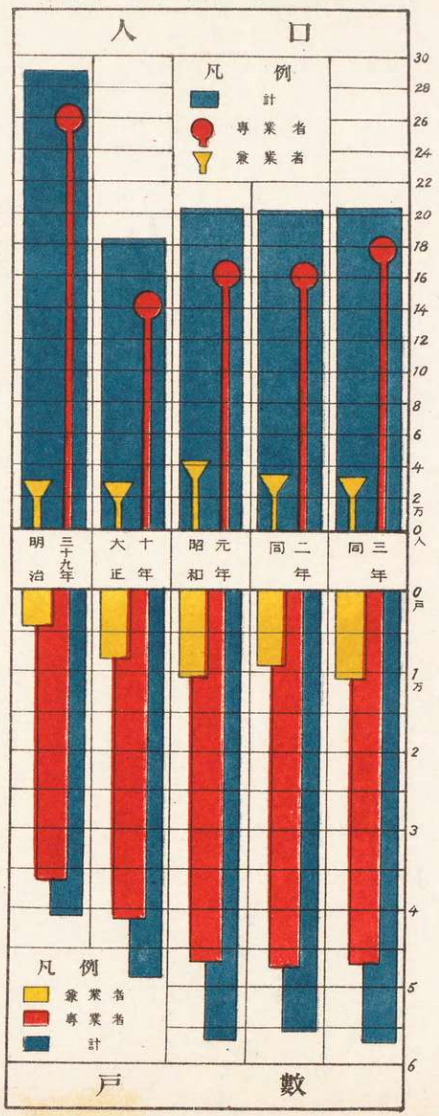
◇家禽飼育數表

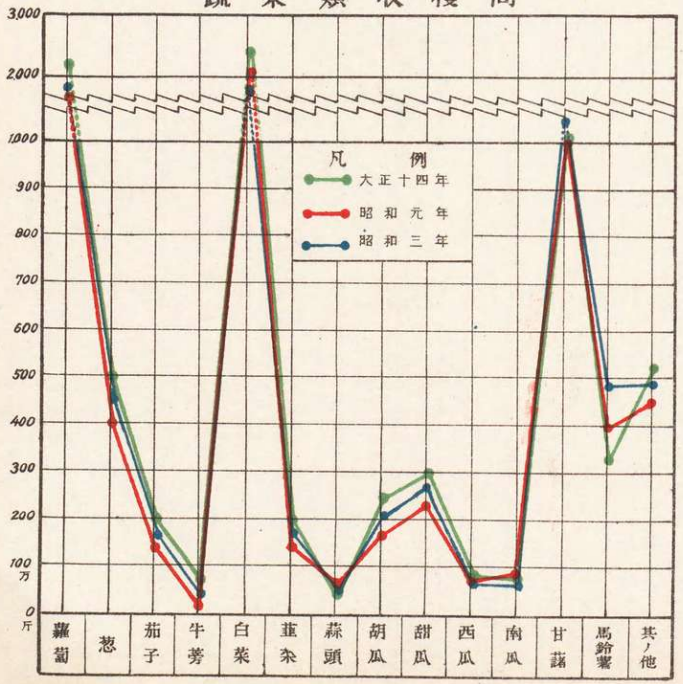
種目＼年次	昭和三年	昭和二年	昭和元年
	牝	牝	牝
鷄	有州內 三、三〇三 羽 左州外 二、六五六	三、三〇三	三、三〇三
鴨	一、九〇一	一、九〇一	一、九〇一
鵝	五、八六五	五、八六五	五、八六五
七面鳥	六五三	六五三	六五三

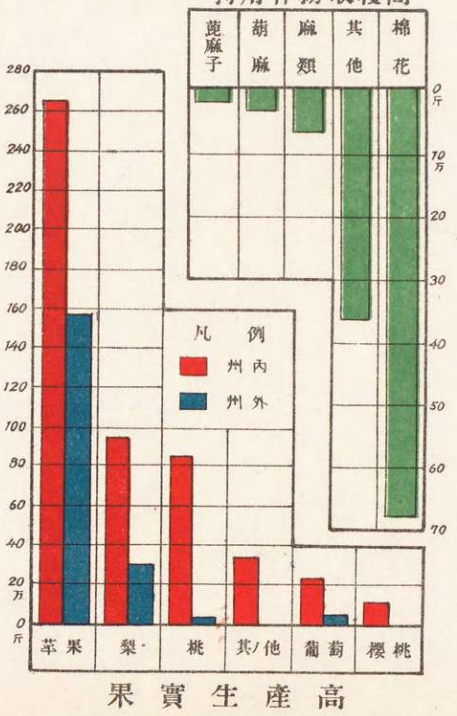
農業


穀菽類收穫高
凡例
大正十四年
昭和元年
昭和三年
落花生
包米
高粱
粟
黃豆
綠豆
米
糜子
黑豆
其ノ他

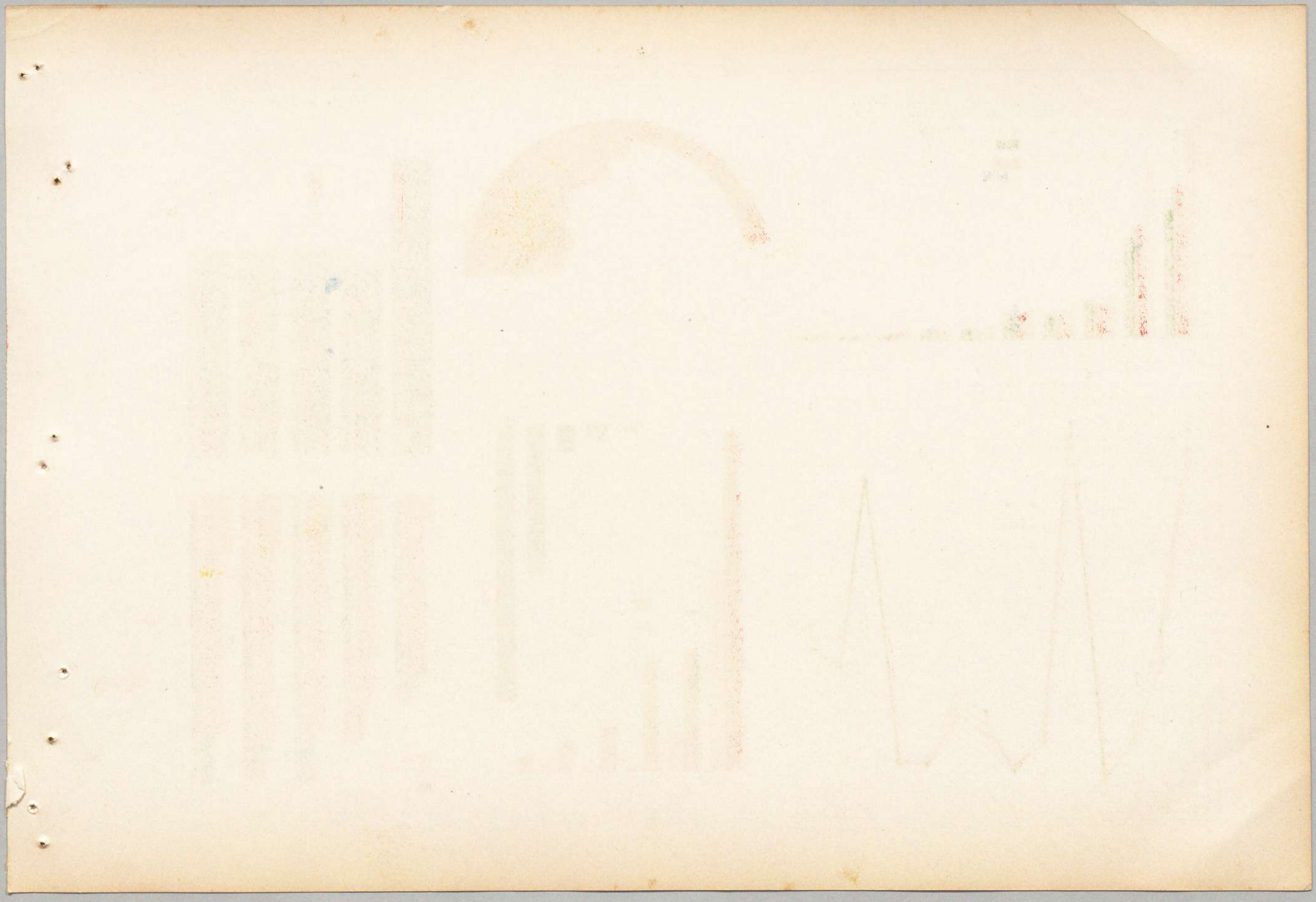

州內各署別耕地面積
大連民政署
旅順民政署
貔子窩支署
金州支署
普蘭店支署


農業者戸口
人口
凡例
計
專業者
兼業者
明治三十九年
大正十年
昭和元年
同二年
同三年
戸數
凡例
兼業者
專業者
計


蔬菜類收穫高
凡例
大正十四年
昭和元年
昭和三年
蘿蔔
葱
茄子
生薑
白菜
韮菜
蒜頭
胡瓜
甜瓜
西瓜
南瓜
甘藷
馬鈴薯
其ノ他


特用作物收穫高
蓖麻子
葫麻
麻類
其他
棉花
凡例
州內
州外
苹果
梨
桃
其ノ他
葡萄
櫻桃
高產生產果

關東廳調查



■氣　象

【氣象觀測事業の變遷】滿洲に於ける氣象觀測事業は明治三十七年日露戰役の際朝鮮及び滿洲各地に設置せられたる臨時觀測所に其の端を發せり、臨時觀測所は中央氣象臺の所屬にして大連、營口に於ては明治三十七年八月、奉天に於ては明治三十八年四月、旅順に於ては同年五月各其の事業を開始せらる明治三十九年九月關東都督府の設置に際し、從來中央氣象臺に屬したる在滿洲各臨時觀測所を都督府に移屬せしめ、大連、奉天、營口各測候所と改稱し旅順は大連測候所旅順出張所とす、明治四十一年十月勅令を以て關東都督府觀測所官制を發布せらるゝに至り。關東都督府觀測所と改稱し營口、奉天各測候所及び旅順出張所は觀測所支所と改名せらる、次で同年十一月更に長春に觀測支所を新設せらるゝに至れり。

【氣　象】滿洲の氣象は沿海一帶の地に於て多少海洋の影響を受くることあるも漸く內陸に進めば全然大陸的氣候の特質を現はし特に冬期氣壓の配置は蒙古北支那方面より滿洲一帶に亘り著しく高度に昇り、七百八十粍以上時として七百八十五粍以上の高壓出現すること稀ならず、此際偶々揚子江各地乃至黃海、東海方面に低氣壓の存在するあらんか、氣層の傾度忽ち急峻となり乾燥強烈なる北風數日に亘りて連吹し、北部內陸に於ては氣溫攝氏零下三十度に降ること屢々にして稀には三十五度に及ぶことあり、比較的溫暖なるべき關東洲附近に於ても零下二十度前後に降り附近海面の一部は凍結し、屋外の作業困難を覺ゆるに至る。

以上の如き氣層の配置は年により多少の遲速あるも十月より翌年四月に亘るものと見て大差なし、但し十月、十一月は尙初期に屬し三、四月は既に終期に近く寒氣甚だ強からず、其の最酷烈なるは一月中旬より二月中旬に至る間に在り此の期間に於ては大連灣內時に結氷を見甚しきは航洋船の埠頭著離に不便を來すことあり、然かも一朝氣層の配置彼此轉換し即ち黃海又は揚子江方面に高氣壓を生じ、北支那蒙古方面に淺薄なる低氣壓出現するに至れば南位の風穩かに天氣晴朗氣溫又た著しく上昇す、謂ゆる三寒四溫と稱するもの即ち是なり、但し氣壓の高低は必ずしも週期的のものにあらざるが故に寒溫の循環も亦週期的なるを必せざるや無論とす。

寒候漸く終れば氣溫急速に上昇し殊に大陸內部に於て著しく同時に漸次降水を增加し、七八月兩月に於て或は年量の半に達することあり、然れども降雨の狀況は稀に襲來する大風雨を除き、概して附近各所に於ける小低氣壓の頻繁なる發生消散に伴ふものなるを以て較々驟雨的降雨の度數を增すに止まり一時に多量の降水を見る如きは甚た少し、普通七八兩月を雨季と稱するも畢竟他季に比し較々多雨なりと云ふに過ぎず。

氣溫は七月より八月中旬に至り最高に達し、南部沿海地方に於て攝氏三十二度前後內陸各地に於て同三十五度附近に昇ることあり、然れども此の如きは一年數日を出でず且一日中高溫を繼續するは數時間に過ぎざるを以て朝夕は格別苦熱を覺へざるを普通とす、八月中旬以後に至れば氣溫漸く低落に傾き九月中旬頃より一層急速に下降し、秋氣天地に橫溢するを感ぜしめ北部內陸に於ては時として攝氏零度以下に降り結霜を見る事あり、降水は大に減少して漸次乾燥の度を進め初秋早くも強大なる高氣壓出現して不意に冷氣を覺へ、中秋以後或は我瀨戶內海地方の嚴寒の候よりも尙ほ酷烈なる寒氣を來たすこと稀れならず、十一月に入りて萬象概ね冬季の景觀を呈し次に眞の冬季となる春季に入りて氣溫上昇の急速なるは上に記する如くなれども、高氣壓の去來尙ほ甚だ盛んなるを以て時に我中部地方の極寒氣よりも一層低溫に降ること少なからず、要するに春秋兩季は氣候の變化比較的複雜にして寒溫迭に至り爲めに春秋雨季の頗る短きを感ぜしむ。

◇滿洲各地天氣日數

觀測所	旅順				大連				營口				奉天				長春			
	降水	霜雪	霧	快晴	暴風	雪霜	霧	快晴	暴風	雪霜	霧	快晴	暴風	雪霜	霧	快晴	暴風	雪霜	霧	快晴
一月	六	一一	五	〇八	四	一七	五	一五	八	一三	五	一四	四	一三	六	一七	四	一三	六	一八
二月	三	一三	一	一四	五	一三	三	一四	七	一三	三	一四	五	一三	二	一六	五	一三	二	一四
三月	四	一七	二	一三	七	一六	二	一三	七	一六	二	一三	九	一五	二	一三	七	一七	二	一〇
四月	四	一〇	二	九	八	一四	二	八	四	一四	二	八	一〇	一七	二	八	四	一七	二	〇八
五月	七	一一	三	七	六	一一	二	七	八	一一	二	七	一〇	一八	二	七	四	一二	二	〇五
六月	八	一一	四	六	三	一一	四	八	四	一一	四	七	五	一一	四	八	四	一一	四	〇九
七月	二	一一	六	三	一	一一	六	二	一	一一	六	三	三	一一	五	二	三	一一	五	〇八
八月	〇	一一	一	五	九	一一	一	五	〇	一一	一	五	一	一一	一	五	一	一一	一	〇九
九月	八	一一	〇	七	二	一一	〇	九	一	一一	〇	九	一	一一	〇	九	一	一一	〇	〇六
十月	六	一〇	〇	三	四	一〇	〇	三	四	一〇	〇	三	五	一〇	〇	三	四	一〇	〇	三
十一月	七	五	〇	〇	七	一〇	〇	〇	六	一〇	〇	〇	六	一〇	〇	〇	七	一〇	〇	〇
十二月	六	一二	四	一〇	七	一二	四	一〇	九	一二	四	一〇	一〇	一二	四	一〇	一〇	一二	四	一〇
全年	六四	一七	三〇	六二	六五	一四	三〇	六二	七二	一四	三〇	六二	七九	一五	三一	六二	七四	一五	三一	六二

圖表對照統計

◇滿洲各地氣溫（昭和二年迄の氣象に依り累年平均を算出せり）（備考（一）は零度以下を示す）

觀測所		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
旅順	最高	九・五	一三・〇	二一・三	二八・四	二六・八	三四・〇	三四・八	三二・六	二七・四	二三・七	一三・七	一〇・三	三五・四
	最低	(一)一九・三	(一)一三・一	(一)七・一	四・〇	八・六	一四・四	一九・九	一四・五	九・一	(一)一・三	(一)八・三	(一)一四・三	(一)一九・三
	平均	(一)四・三	(一)三・〇	一・七	一四・三	一三・〇	二〇・九	二五・七	二三・〇	一七・四	一〇・一	一・三	(一)七・三	一〇・三
大連	最高	一〇・三	一一・〇	一七・七	二八・三	三〇・九	三五・八	三五・七	三五・〇	二九・八	二三・一	一四・七	一〇・三	三五・七
	最低	(一)一九・四	(一)一四・三	(一)八・三	一・四	一・四	一〇・三	一四・九	一〇・八	五・八	(一)一・六	(一)九・四	(一)一八・九	(一)一九・四
	平均	(一)五・〇	(一)三・五	(一)一・八	九・三	一一・三	一五・三	一九・三	一七・〇	一二・四	五・一	一・六	(一)七・三	五・九
營口	最高	七・五	一〇・一	一七・七	二七・〇	三一・一	三五・四	三五・四	三四・〇	二九・四	二三・一	一四・七	一〇・三	三五・四
	最低	(一)一九・四	(一)一三・〇	(一)八・〇	一・〇	一・〇	一〇・三	一四・九	一〇・八	五・八	(一)一・六	(一)九・四	(一)一八・九	(一)一九・四
	平均	(一)五・〇	(一)三・五	(一)一・八	九・三	一一・三	一五・三	一九・三	一七・〇	一二・四	五・一	一・六	(一)七・三	五・九
奉天	最高	(一)三・五	(一)一・二	七・八	二〇・三	二三・一	二七・〇	二七・〇	二五・〇	二〇・四	一四・七	二・一	(一)七・一	二七・〇
	最低	(一)二九・四	(一)二六・〇	(一)一〇・一	一・〇	一・〇	一〇・三	一四・九	一〇・八	五・八	(一)一・六	(一)九・四	(一)一八・九	(一)一九・四
	平均	(一)一三・〇	(一)九・二	(一)一・三	八・五	一一・七	一五・七	一九・三	一七・〇	一二・四	五・一	一・六	(一)七・三	五・九
長春	最高	(一)二・七	(一)一・三	八・五	二〇・三	二三・三	二七・〇	二七・〇	二五・〇	二〇・四	一四・七	二・一	(一)七・一	二七・〇
	最低	(一)二五・〇	(一)二〇・〇	(一)九・九	一・三	三・四	一〇・三	一四・九	一〇・八	五・八	(一)一・六	(一)九・四	(一)一八・九	(一)一九・四
	平均	(一)一七・二	(一)一二・七	(一)三・五	四・四	一四・〇	一九・〇	二三・三	二一・〇	一六・四	九・一	二・一	(一)七・三	九・一

◇滿洲各地降水量（粁）

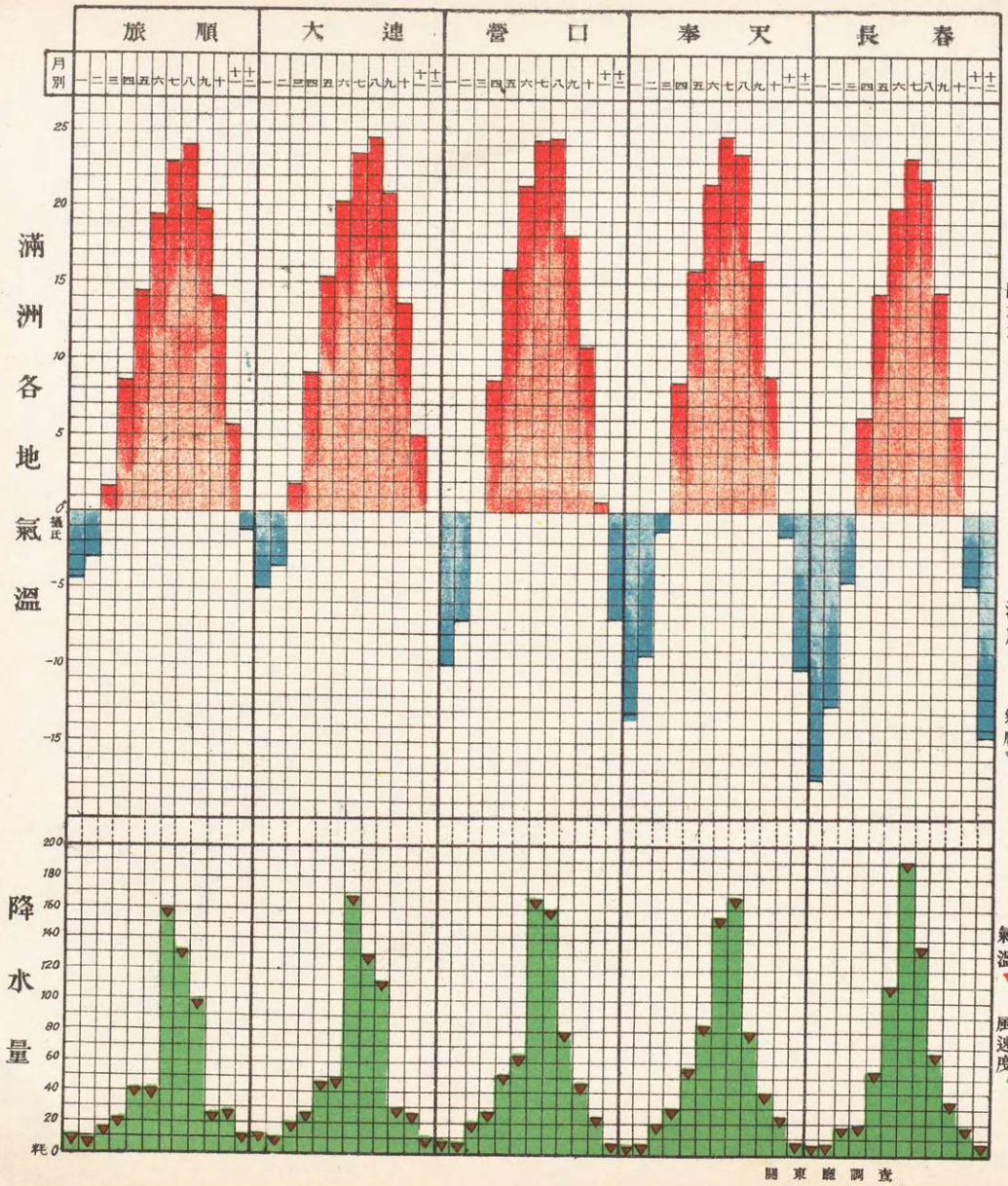
觀測所		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
旅順	總量	一〇・三	七・九	一八・一	四〇・九	五一・〇	四一・四	四〇・六	一五八・五	九四・七	三五・六	一二・四	五八・三	五八・三
	一日中最大量	一四・四	三・五	五三・八	四七・六	四九・五	六二・〇	一六六・八	一三六・〇	一六八・三	七五・八	一〇・一	一六六・八	一六六・八
大連	總量	一一・九	八・八	一九・二	四五・八	五五・三	六六・〇	一六五・八	一四一・四	一〇七・四	四〇・六	一四・〇	六八・八	六八・八
	一日中最大量	三・七	三・〇	五三・九	四五・八	五五・三	六六・〇	一六五・八	一四一・四	一〇七・四	四〇・六	一四・〇	六八・八	六八・八
營口	總量	七・一	五・九	一九・四	四八・〇	五五・五	六〇・五	一六五・三	一五五・一	九八・八	四〇・六	一四・〇	六八・八	六八・八
	一日中最大量	三・三	二・五	六三・四	二四・〇	五〇・五	八〇・三	一六五・三	一五五・一	九八・八	四〇・六	一四・〇	六八・八	六八・八
奉天	總量	四・〇	六・〇	一五・〇	四九・六	四五・七	六〇・五	一六五・八	一四一・四	一〇七・四	四〇・六	一四・〇	六八・八	六八・八
	一日中最大量	一・八	一・五	一七・〇	一九・八	一五・〇	三五・三	四五・七	四〇・八	一五・〇	一〇・三	一・〇	六・八	四五・七
長春	總量	六・六	六・六	一七・二	二一・〇	四五・三	八〇・三	一六五・八	一四一・四	一〇七・四	四〇・六	一四・〇	六八・八	六八・八
	一日中最大量	一・九	一・八	三・八	四・〇	五・六	八・〇	一六五・八	一四一・四	一〇七・四	四〇・六	一四・〇	六八・八	六八・八

◇滿洲各地風向風力表

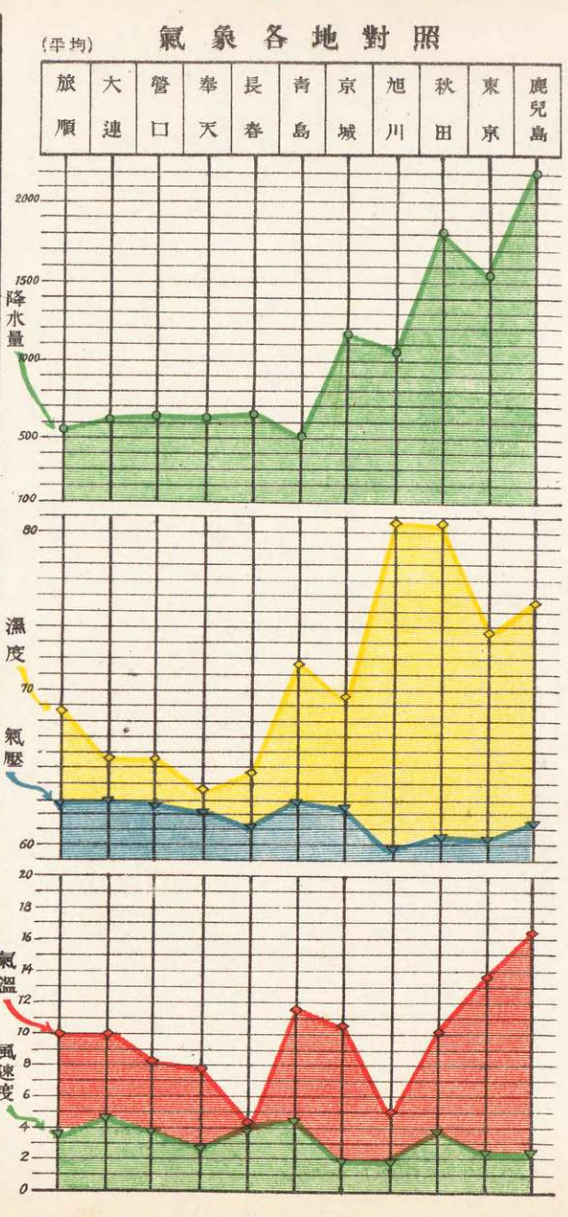
觀測所		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
旅順	平均風速度	四・三	四・一	四・四	四・四	四・一	三・三	二・九	二・七	三・一	三・七	四・五	四・四	三・八
	最大風速度	二一・五	一九・七	二四・六	二一・七	一四・九	一三・七	一三・五	一八・〇	一九・九	一八・〇	二一・五	二四・六	二四・六
	最多風向	北北東	北北東	北	西	南東	南東	南東	北北東	北北東	北東	北東	北	北
大連	平均風速度	四・一	四・四	四・八	四・八	四・八	四・〇	三・八	三・〇	三・〇	三・六	四・〇	四・一	三・八
	最大風速度	二一・五	一九・七	二四・六	二四・八	二四・八	一九・〇	一六・五	一六・〇	一七・〇	一九・四	二一・〇	二七・九	二七・九
	最多風向	北	北北東	北	南東	南東	南東	南東	南東	北北東	北東	北東	北	北
營口	平均風速度	四・四	四・一	四・四	四・四	四・一	三・三	二・九	二・九	三・一	三・七	四・四	四・四	三・八
	最大風速度	二一・七	一九・五	二四・六	二四・八	二四・八	一九・〇	一六・五	一六・〇	一七・〇	一九・四	二一・〇	二七・九	二七・九
	最多風向	北	北	北	南	南	南	南	南	北	北	北東	北	北
奉天	平均風速度	三・三	三・四	三・六	三・六	三・三	二・八	二・四	二・四	二・九	三・四	三・六	三・四	三・〇
	最大風速度	一四・八	一二・七	一九・三	一六・〇	一四・八	一〇・八	一〇・〇	一〇・〇	一二・五	一四・八	一五・〇	一四・八	一五・〇
	最多風向	北	北	北	南	南	南	南	南	南	北	北東	北	北
長春	平均風速度	三・〇	三・〇	三・七	三・七	三・三	二・八	二・四	二・四	二・九	三・四	三・六	三・四	三・〇
	最大風速度	一四・八	一二・七	一九・三	一六・〇	一四・八	一〇・八	一〇・〇	一〇・〇	一二・五	一四・八	一五・〇	一四・八	一五・〇
	最多風向	北	北	北	南	南	南	南	南	北	北	北東	北	北

◇氣象平均各地對照表

地名	區分	觀測所位置 北緯	觀測所位置 東經	高さ	氣壓	氣溫	濕度	風速度	降水量	降水日數 霜 初	降水日數 霜 終	降水日數 雪 初	降水日數 雪 終
大連		三八・五四	一二一・三八	九七・三	六二・一	一〇・三	六七	四・七	六二・八	十月廿一日	四月一日	十一月六日	三月十九日
旅順		三八・四七	一二一・一六	七九・六	六二・〇	一〇・三	六七	三・八	五八・三	十月廿三日	四月廿三日	十一月六日	三月廿五日
營口		四〇・四〇	一二二・一四	八・四	六二・〇	八・四	六六	三・九	六五・〇	十月十日	四月廿二日	十一月二日	三月廿九日
奉天		四一・四八	一二二・二三	四三・八	六二・四	七・一	六四	三・九	六五・〇	九月廿三日	五月三日	十月廿七日	四月八日
長春		四四・五五	一二五・八	二一五・七	六二・四	一四・五	六四	四・〇	六五・八	九月廿三日	五月三日	十月六日	四月八日
青島		三六・〇四	一二〇・九	大八・六	六二・二	一八	六五	三・七	一、二〇四・〇	十月廿三日	四月廿日	十一月九日	三月廿四日
京城		三七・三四	一二六・九九	三三・三	六二・七	一〇・八	七〇	三・九	一、一四・九	十月廿六日	四月廿日	十一月六日	三月廿七日
旭川		四三・四七	一四二・三	一二・三	五九・八	五・三	八一	一・八	一、〇四・九	九月廿三日	四月廿六日	十月廿三日	四月六日
秋田		三九・四一	一四〇・〇六	六〇	六二・〇	一〇・四	八二	三・九	一、八九・七	十月六日	四月廿三日	十月廿三日	四月廿一日
東京		三五・四一	一三九・四六	五・八	六二・〇	一三・九	七四	三・六	一、三五・九	十月十三日	四月廿七日	十一月廿日	四月廿日
鹿兒島		三一・三四	一三〇・三三	五四・九	六二・四	一六・七	七四	三・七	二、三五・四	十一月廿七日	三月廿三日	十一月五日	三月十四日


旅順
大連
營口
奉天
長春
月別
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二
滿洲各地氣溫
攝氏
降水量
粍

關東廳調查


(平均)
氣象各地對照
旅順
大連
營口
奉天
長春
青島
京城
旭川
秋田
東京
鹿兒島
降水量
濕度
氣壓
氣溫
風速度

工業

【概說】古來滿洲は小麥、大豆、高粱等各種の農產物並に畜產、鑛產、水產に富み無盡藏の石炭と低廉なる勞力とは工業上至大の利便を有したるも、交通不便にして文化の恩惠に浴すること尠く、工業として僅に釀造、製粉、搾油、窯業、柞蠶、製絲等農產品を原料とする粗工業を見たるに過ぎずして、是等工業も單に自給自足を目的とする家內工業の域を脫せざりき、然るに日淸戰役は支那の覺醒を促し且つ北淸事變後數多商埠地の開放を見るに至たり各種製造機械の輸入となり玆に近世的工業を誘起するに至れり。

日露戰爭の結果帝國が關東州を租借し、南滿鐵道を繼承し着々滿蒙の開發の施設を行ふに及び、邦人の手に依り關東州及び南滿鐵道沿線を中心として近世的各種工業漸次擡頭し、加之大連港の發展は直接間接に各種工業の進展を促し、卽ち大連を中心として各地に散在する搾油工業、機械工業、釀造業周水子のセメント、鞍山及び本溪湖に於ける製鐵業、安東を中心とする製材業、奉天、鐵嶺、長春附近に於ける製粉及び製糖業等の勃興を見るに至れり就中搾油工業は滿洲に於ける諸工業の中軸をなすものにして、主要都市は勿論大豆の集散する地方は何れの地にも本工業の發達を見ざるなきに至れり。

大正三年歐洲大戰の爆發に因り各種事業勃興したりしも、戰亂終熄と共に經濟界の反動期に逢着し一時我工業界の實勢力を危殆に陷らしめしが、其の後時日の推移と共に漸く安定の域に達し、當業者は銳意事業の擴回に努めつつあるを以て未だ不況の域を脫せずと雖も、歐洲戰亂は滿洲工業の發達に一轉機を與へたるものにして今後堅實なる發展を招來するに至るべし。

▲各種工業

【油房業】油房とは大豆より豆粕及び豆油を製造する工場の謂にして、日淸戰役前までは家內工業の域を脫せざりしが我が國の始政後各種の工業振興の機運を拓きたるに乘じ、油房の如きも急激なる發展をなし、大連のみにても現在數は五十九工場、一晝夜の生產能力豆粕二十一萬三千餘枚に上る其の內日本人の經營に係るもの六ケ所、日支合辦に依るもの一にして他は悉く支那人の經營に屬す、其の他南北滿洲の鐵道沿線に散在する油房數は二百餘工場を算するも小規模のもの多く、其の製造高は全部を合するも尙大連に及ばざるが如し、滿洲に於ける昭和五年三月末油房の總數は四百六十五工場を算し（此の內大連一割二分强は大連に在り）其の年產額豆粕約五千萬枚豆油二億二千五百斤に達し尙此の外撒粕三千萬斤を算するに至たれり。

【油脂工業】大豆油を原料とする硬化油製造の目的を以て、大正五年資本金百萬圓を以て、大連油脂工業株式會社を設立しグリセリン及び大豆油硬化を主たる業務とし、附隨事業としてオレイン、ステアリン石鹼脂等の製造を開始し、事業の發展上多大の努力と犧牲とを拂ひたりしが、母國との關稅關係に依り、附隨事業は一時休止するの已むなきに至りしも、石鹼脂は昭和二年以來關稅の引下を見たるを以て將來益々內地の需要を喚起するに至るべし。

【綿絲布業】滿洲に於ける棉花も近年漸次作付反別增加し、品質亦優秀にして殊に遼陽の如き滿洲唯一の棉花產地となれり、又た關東州內に在りては廳及び滿鐵會社保護の下に滿洲棉花栽培協會成立し、米棉の栽培を奬勵しつゝあれば、今後年々棉花の生產增加すべく延て滿洲紡績業に好影響を齎すべし。

【柞蠶絲】柞蠶絲は滿洲重要輸出品の一にして日露戰役後內地人にも斯業に着目する者あるに至りしも未だ充分の成績を擧ぐるを得ざりしが、歐洲戰爭勃發後歐米絹織物の生產額減少し頓に絹紬の需要增加せる爲め、之れに刺戟せられ滿洲柞蠶界は著く發展し柞蠶絲の輸出激增するに至れり。

【製麻業】麻の產地は松花江、鴨綠江、渾河、太子河の流域地方にして每年四五千萬斤の多量に及べり。目下製麻業に從事せる會社は滿洲製麻株式會社及び奉天製麻株式會社の二にして兩社は滿洲麻、印度麻を原料とし麻袋、帆布、麻絲等を製造す、而して兩社の麻袋製造能力は年約四百萬枚に達するも滿洲輸入の麻袋は年額約二千萬枚なるを以て將來益々有望の事業たる可し。

【毛織物業】現時滿蒙牧羊の總數約五百萬頭と推算せられ羊毛の年產額六百萬斤以上に達す、併し是れ等羊毛は未だ良好ならず目下改良研究中なるを以て早晩品質の向上產額の增加決して難事に非ざるべし。奉天に於ける滿蒙毛織會社（資本金三百萬圓）は現時三十萬碼の能力を以て操業中なるも豐富なる原毛と勞銀の低廉なる當地に於ては、會社の前途多望なりと云ふべきである。

【製粉業】曾て露國の帝政時代滿洲進出策の爲め北滿に駐屯したる多數の露國軍隊及び在留民の需要に應ぜんが爲め、千九百年哈爾賓に一製粉會社設立せられたるを濫觴とし漸次今日の隆盛を招けり。殊に歐洲大戰勃發後外國製粉の輸入杜絕の結果滿洲の製粉界は機に乘じ異常なる活況を呈するに至れり、今や南北滿洲を通じ既成機械製粉工場六十有餘、年額約一千五百萬袋の生產能力を有し、今や全滿洲の需要を充たすの盛況なり。

【淸酒釀造】滿洲に於ける淸酒の需要は年々增加し內地よりの輸入額頗る多量なるを以て、之れが釀造に着手するもの漸次增加の傾向を示し居れるも、原料を朝鮮又は內地に仰ぐの必要あり、殊に水質優良ならざる爲め、未だ著しき發展を見る能はず、現時の產額は需要高の約三割に過ぎざる程度なり。

【醬油釀造】古來支那人は食料の調味には多く鹽を用ゐ來りしが、近年支那人間に於ても日本醬油の愛好者漸く多く其の消費額頓に增加するに至れり、現時南滿洲に於ける邦人斯業經營者十九戶に及び、其の生產額年々三萬石以上に達せむとす、滿洲は原料たる大豆、小麥及び鹽に富み石炭亦廉なるを以て、醬油釀造には實に有利にして開業者漸次增加しつゝあり。

【製糖業】大正三年滿鐵會社公主嶺農事試驗場に於て甜菜の栽培を試みたりしが成績良好にして將來有望なること證明せられたるを以て有力なる邦人資本家の發起に依り、大正五年奉天に資本金一千萬圓の南滿製糖株式會社を設立し、奉天近傍の鐵道沿線より甜菜栽培者を募集契約し、同年十二月工場の竣備完成するに及び直に製造を開始せり、創業當時の生產高は僅に二十萬擔に過ぎざりしが、現今年額約三十萬擔內外の製造販賣を行ふに至れり。

【煙草製造業】煙草は滿洲各地に栽培せらるゝも主產地は奉天省及び吉林省一帶にして現時の產出年額は五千萬斤以上と稱せらる。從來滿洲に於ける需要は殆ど刻煙草なりしが近時紙卷煙草の需要を喚起し將來の販路を期待せられたりしに俄然日、英、米、露間に於て激甚なる競爭を惹起し巴狀戰を演ずるに至れり、最近の販賣高は年額七十六億萬本に達せるも、支那全土に亘たり卷煙草を消費するに至らば、恐らく世界第一の需要量を見るならんか。

【製藥業及び火藥製造業】滿洲に於ける製藥工業は曹達、甘草エキス、硫酸クレオソート、ナフタリン等にして曹達工業の原料は關東州產鹽と東蒙古の天然曹達の二樣あり、大戰中日內地に於ては曹達工業の獨立を絕叫せられたるも、由來原料豐富ならざる爲め未だ充分の發達を見るに至らず然るに滿洲には本工業の原料たる食鹽、石灰石、硫酸安母尼亞及び燃料たる石炭豐富にして、斯業發達の要素を完備せりと云ふを得べし、今曹達工業の原料たる關東州鹽に就きて見るに、今後產鹽見込高は既成鹽田のみにても、約六億斤に達するを得べし之れを以てせば優に十萬噸以上の曹達原料を得らるべきを以て、將來斯業の發達は期して俟つべきものあり。甘草エキスは蒙古產甘草を選別し一部は原形の儘、他はエキスとして輸出せらる。

【石鹼及び製蠟業】在滿邦人の增加と支那人の生活程度向上に伴ひ、石鹼の需要增加し日本內地より輸入するもの年額約六十萬圓に達す。滿洲に於ける石鹼工場は大連三、旅順一、奉天一にして年產額約三十萬圓を生產せり。蠟燭は滿洲產豆油を原料とする外、北米及び南洋より原料を輸入して製造するものにして大連、奉天、牛莊等に工場を存するも何れも生產額大ならず。

圖表對照統計

◇三港豆油輸出噸數（五箇年比較×單位米噸）

地名	年次	日本	支那	歐米	其ノ他	合計
大連	大正十二年	四、六六	一五、三五八	一八、六六八	六四	三五、三六八
	同十三年	一、六〇	六、〇〇〇	九、三六八	一、六四	一〇、〇〇八
	同十四年	一、〇三〇	一五、七五七	九、三六七	四九	一六、三八一
	昭和元年	六、一四一	一三、〇三一	一四、一三七	五、三一	四五、六三一
	同二年	公五	六、四一一	二四、三六一	七五	三一、一五四
	同三年	一、五五一	六、九四四	六、一九一	一、一四	一〇、三四四
營口	大正十二年	一	一、八、五四四	一、〇一三	二七	一八、六六一
	同十三年		一、九四〇	一〇、三一三	三一	一八、三六六
	同十四年		一、四四三	八、三六六	一三	一〇、四四三
	昭和元年		一、〇四二	五、一〇一	七三	五、六二一
	同二年		一、五八八	五、七五二	七三	一五、七五五
安東	大正十二年	一	二四一	七五	一九七	三、三六
	同十三年		九〇〇	三、三六	三六	四、三六
	同十四年		七一	一、三六	八三	二、六三
	昭和元年		三五	三六	四八	四、三六
	同二年	六三	三	一、三六	八	一、〇三六
	同三年	三六	一、三六			

◇三港豆油輸移出價額（海關兩）

港別	大正十二年	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年
大連	一、六、一四六、三三六	一四、一六、〇五〇	二、六二、〇四一、一五〇	三、三一、〇四一	三、三〇、九一八	一八、三〇、九一八
營口	二、四五、八二六	一、六五八、八四四	二、六二、〇四一	一、五九、八三一	二、九、五五三	二、九、五四
安東	四六、七五	四五、五一九	六六、八三	六六五	一五、六四	二九、五四

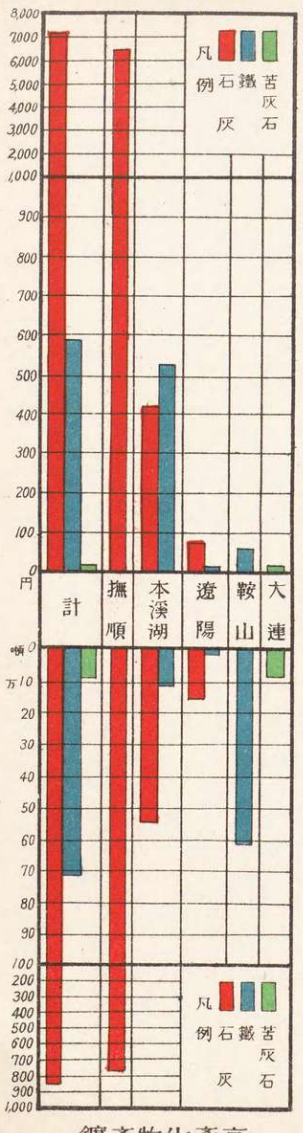
◇鑛山物產額（昭和三年度）

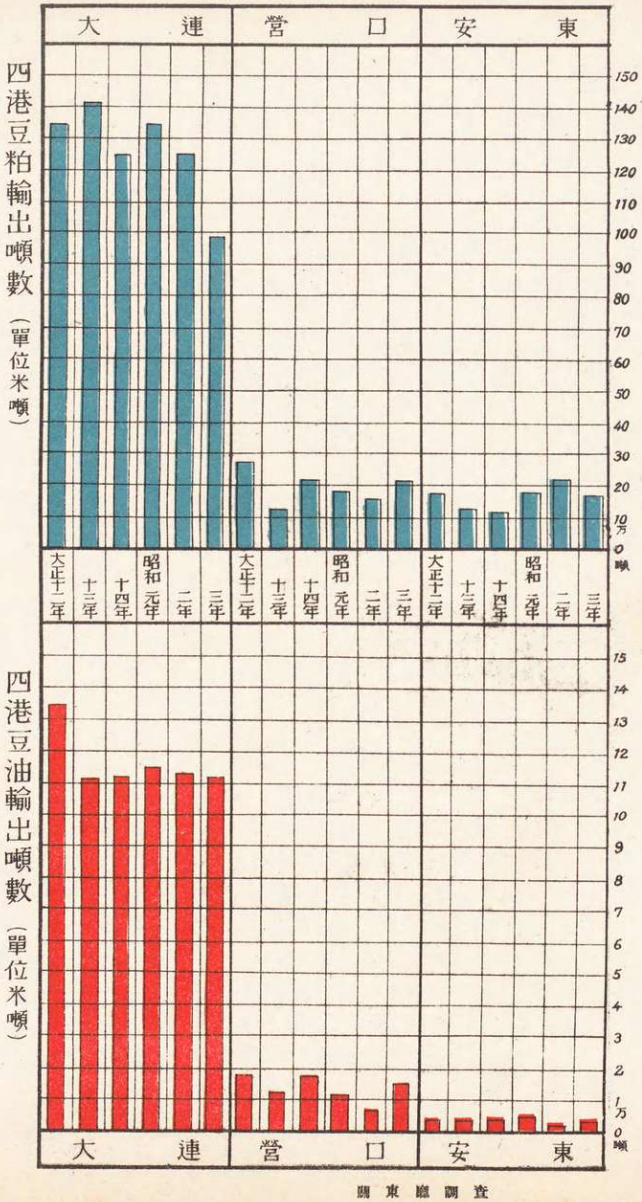
地方	種別	鐵		石炭		苦灰石		石綿		價額計
		數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	
大連		— 噸	— 円	— 噸	— 円	六七、七四四 噸	三三、六四四 円	一 噸	三三、六六五 円	三三、六四四 円
金州		—	—	—	—	—	—	—	—	三三、六六五
鞍山		六四、三六四	五五二、四七〇	—	—	—	—	六	三、六六五	五九三、四七〇
遼陽		六七	八、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	八、〇〇〇
本溪湖		八〇〇、〇〇〇	五、六〇〇、〇〇〇	一五六、八六六	四、三二一、七九一	—	—	—	—	九、九三三、七九一
撫順		—	五、九〇一、八三七	七六七、三五一	六五、三四〇、七三四	六七、七四四	三三、七四四	—	—	六、〇三四、三一五
計		八四七、三六一	五、九〇一、八三七	九二四、六一七	六九、六五三、七二四	六七、七四四	三三、七四四	六	三、六六五	六、〇三四、三一五

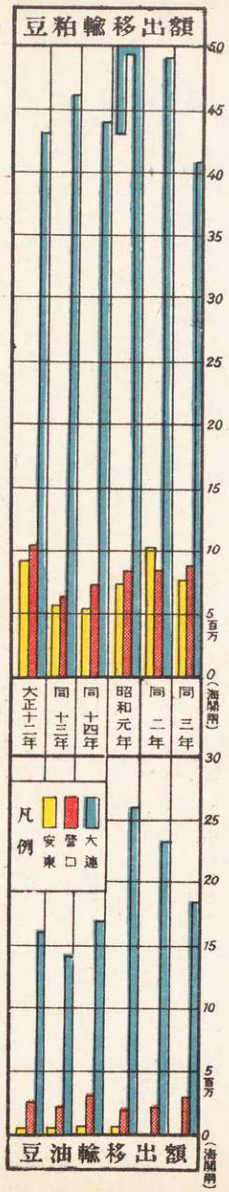
◇土石類產額（昭和三年度）

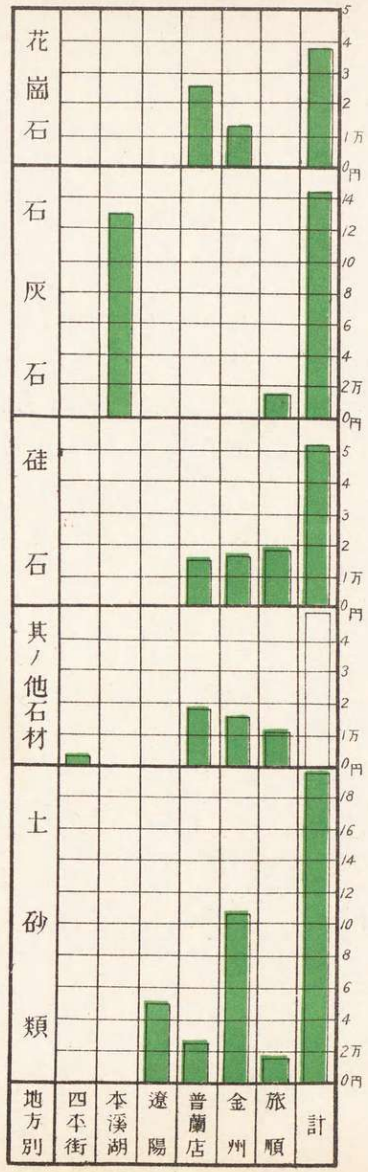
地方	種別	花崗石		石灰石		硅石		其ノ他石材價額	土砂價額	價額計
		數量	價額	數量	價額	數量	價額			
旅順		— 噸	— 円	二、八三八 噸	一四、七五三 円	一一、四四四 噸	一八、四三一 円	一〇、〇一四 円	一六、九五四 円	六〇、三三三 円
金州		一、三四四	一三、五三三	一、三九	一一、三九	五四	一六、九九八	一七、五四四	一〇五、八五〇	一五三、九二四
普蘭店		二九〇、九三一	二五、三六	—	—	四、三〇	一五、二一	一八、〇九	二四、二四	八三、二七一
遼陽		—	—	—	—	—	—	—	—	四七、九四五
本溪湖		—	—	二、六、六七	三、四三	—	—	三、八九八	一九五、〇六三	二八、六七八
平街		—	三七、九五	一四、七九	一四、七九	—	五〇、九三	四九、二六七	—	四七、八九八
計		二九〇、九三一	二五、三六	二、八三八	一四、七五三	一一、四四四	一八、四三一	一〇、〇一四	一六、九五四	六〇、三三三

工業及鑛業


鑛産物産額
凡例 苦灰石 鐵石灰
計 撫順 本溪湖 遼陽 鞍山 大連
高産生物産鑛


四港豆粕輸出噸數（單位米噸）
大連 營口 安東
大正十二年 十三年 十四年 昭和元年 二年 三年
四港豆油輸出噸數（單位米噸）
大連 營口 安東
關東廳調査


三港油防輸移出額
豆粕輸移出額
大正十二年 同十三年 同十四年 昭和元年 同二年 同三年
凡例 安東 營口 大連
豆油輸移出額


土石類産額
花崗石
石灰石
硅石
其ノ他石材
土砂類
地方別 四平街 本溪湖 遼陽 普蘭店 金州 旅順 計

【塗料及び染料製造業】滿洲に於ける塗料は概ね鑛物質硬化塗料及び豆油を原料とするものにして、マクネシヤ粉末、スタッコマンチユリア硅石粉及びトラスト、ペイントの類主として大連及び旅順に於て製造せられ、孰れも其の効用を一般に認められ將來益需要增加の傾向あり。

又た膠は其の原料たる獸皮の產出豐富なるが爲め相當額の生產あり主產地は奉天、錦州、赤峰、哈爾賓等に在り邦人にして膠を製造するものは滿蒙殖產株式會社奉天工場一箇所にして他は全部支那人の經營なり。尙染料は古來滿洲地方に產出する藍及び槐樹末或は楓葉染料等を使用し來れるも、獨逸染料の侵入以來殆ど忘却の狀態なりしが、大戰勃發輸入杜絶の結果、再び地藍の栽培擡頭するに至れり。然るに其の後邦人の發明に係る黑色硫化染料も關東廳の保護奬勵に依り、異常の發展を遂げ今や資本金二百萬圓大和染料製布株式會社として、支那市場に於ける斯業に大なる勢力を有するに至たれり。

【製材業】滿洲に於ける木材の產地は主として鴨綠江及び第二松花江流域の森林地帶にして、其の伐木は凡て江を流下し安東又は吉林に陸上げせられ、此の地に於て製材し或は原木の儘各地へ輸出せらる、而して木材產出量は年により一定せざるも最近數年間の統計に依れば、平均年額鴨綠江方面約二百萬尺締第二松花江方面六七十萬尺締なるが如し。

【煉瓦、瓦及び耐火煉瓦】南滿の煉瓦事業は將來益々有望の一たる可し、現在に於ける大小工場を合すれば總數四十六工場に達し、其の製造年額百萬圓を算す、又た耐火煉瓦は龍岩に滿鐵會社附屬工場に於て調査研究の結果優良なる原料を發見し優秀製品を出して鞍山製鐵所熔鑛爐、其の他高爐爐使用の工場へ供給せられたりしが大正十四年七月中新設大連窯業株式會社をして事業を繼承なさしめたりしが、今や海軍省の指定工場に認定さるゝに至れり。

【セメント及び石灰製造業】滿洲に於けるセメント製造業に先鞭を著けたるものは小野田セメント株式會社とす、同社は明治四十年五月資本金六十萬圓を投じ、大連市の西郊に分工場を設立し四十二年六月より作業を開始し、當時製造能力年二十五萬樽なりしが、其の後セメントの需要逐年增加せるを以て大正八年工場を擴張し今や年額七十五萬樽の製造能力を有するに至たれり。

【陶磁器及び硝子製造業】滿洲は人口多く從つて日常陶磁器の需要亦頗る多額なりと雖も、未だ本事業の發達充分ならず唯從來水甕類の奉天、撫順、長春本溪湖等に於て稍多量の生產を見るのみなり、尙硝子製造業者は從來何れも規模狹小なる個人經營のみなりしを以て、曩に滿鐵會社は此に着目し窯業試驗場に硝子工場を設置し種々研究の結果獨塊品を凌駕する優秀品を製出し得るに至れるを以て右試驗事業を打切り大正十四年七月耐火煉瓦の製造と共に大連窯業株式會社を新設して其の事業を繼承なさしめ今や盛業中なり。

【皮革工業】滿洲の地は舊來牧畜に富み、從て製革原料皮の產額豐富なるにも拘らず未だ優良なる皮革を製造する能はず本邦人に在りても二、三皮革製造會社の設立を見たりしも、豫期の成績を擧ぐるに至らずして獸皮の多くは生皮の儘各地へ輸出せらるゝは頗る遺憾なり。

鑛業

【概說】滿蒙の鑛業は農業と共に夙に二大利源と稱せらるゝものなるも、或は土地の開墾を不祥事として封禁し、或は利權擁護を名として外人との合同經營を避け、進んで開發の策に出でず無限の寶庫は空しく祕藏せられたるの觀あり、然るに近年我國の發展と共に稍開發の見るべきものありと雖も未だ九牛の一毛に過ぎず。今重要なる鑛產物を擧ぐれば、金、砂金、銀、銅、鐵滿俺、鉛、亞鉛、硫化鐵等、非金屬鑛物、石炭、菱苦土鑛、白雲石、石灰石硅石、粘土、石綿、螢石、滑石、長石、曹達等右の內金、鐵及び石炭は最も重要なる鑛物にして滿洲三大鑛業の素地を備へ又た菱苦土鑛及び白雲石は稀に見る大鐵床を賦存し世人の注意を喚起せり以下各鑛物に就て述べん。

【金及び砂金】金及び砂金は砂金の方主要にして其の規模は黑龍江省の二、三を除き他は何れも狹小なり其の內著名なるものには黑龍江岸の諸鑛を初め松花江西源滿地方、同東源地方、鴨綠江支流渾江流域、渾河上流域、輝發河流域、柴河流域等あり古來より多量の產金地として知らる。

【鐵鑛】鐵鑛は鞍山、弓張嶺一帶を以て最とす、該地方の鐵鑛は硅石と互層し主として、赤鐵鑛及び磁鐵鑛より成り其の鑛量多大なり且處々に二次生富鑛帶ありて鐵分六〇%以上のもの少からず、現在鞍山は滿鐵鞍山製鐵所の原料鑛石として採掘せられ、又た弓張嶺は中日合辦弓張嶺無限公司に於て採鑛中なり。尙本溪湖製鐵所の原鑛は主として朝兒溝鐵山に仰ぐ。

【石炭】石炭は滿洲重要鑛物中の第一位に推すべきものにして、年額七百萬噸に及び滿洲鑛產額の大部分を占め撫順、煙臺、本溪湖の名は既に世に噴々たり、滿蒙の石炭は其の成生の地質時代より分類する時は二疊石炭紀、侏羅紀、第三紀產とす、二疊石炭紀生に係るものは遼東半島に分布せられ個々獨立の小盆地に堆積したるものにして、炭質無煙炭若くは半無煙炭なるを常とす往々十數枚の炭層を埋藏し稼行に堪ゆるもの多く、特に本溪湖炭の如きは火力強く良好なる骸炭を製出し得るを以て其の名あり。

【非金屬鑛物】石炭以外の非金屬鑛物としては菱苦土鑛、重晶石、石綿、滑石螢石、耐火粘土、陶土、長石、硅石等あり、就中大石橋附近の菱苦土鑛は世界的の大鑛床として知られ、又た復州煙臺の耐火粘土及び闊東州內の苦灰石等は頗る重要なるものにして、製鐵鑛業用として內地に需要廣し石灰炭は到る所に產し石灰及びセメント製造に用ひられ硅岩は遼東半島特に旅順大連地方に廣く分布し、又硅石煉瓦及び硝子の原料となるべき純良のものを產す。

【撫順炭鑛】撫順炭鑛の位置は奉天の東約二十里の地點にして鑛區面積は約千八百二十萬坪、炭層の地質年代は第三紀に屬し灰青炭にして厚平均百三十尺（最厚四百廿尺）炭質は揮發分に富み一般に不粘結性なり、硫黃分少く多量の窒素を含有するを以て瓦斯發生用として最も適す。滿鐵會社纔承當時に在りては千金寨、楊柏堡、老虎寨及び煙臺の四坑のみにして一日僅に三百噸內外の出炭なりしが其の後大山、東鄉の二大竪坑開鑿せられたるを以て、明治四十四年には一躍一日平均出炭四千噸に達せり、大正四年度より新らたに露天掘の開鑿を始めし以來出炭量激增し今や年額七百萬噸を突破するに至れり。

【油頁岩工業】大露天掘計畫と共に其の炭層上に埋藏する油頁岩五億噸（炭層上四百五十尺全炭田の埋藏量五十五億噸）の處置は重大なる問題にして、之より經濟的に液體燃料を抽收し得ば露天掘計畫を有利に導くのみならず、液體燃料生產は我國情として一日も忽にすべからざる問題にして、調査研究の結果事業的に成算を得工場設備を完成せり。

【本溪湖炭鑛】位置は奉天本溪縣本溪湖にして鑛區面積千百五十六萬坪、炭層は採掘可能炭層八層、厚合計四十尺五寸、最厚九尺に達し、炭質は半無煙炭にして粘結性あり骸炭に最も適せり。本坑は明治三十八年大倉組開鑛に着手し、四十四年本溪湖煤公司と改稱し製鐵事業をも兼營するに至れり、現在に於ては一日平均千三百噸內外の出炭を見るに至たれり。

【鞍山鐵山】位置は滿鐵鞍山驛附近鞍山製鐵所を中心として、北東より西南に向ひ靠ける約半哩の半圓形中に點在す、本所の操業開始は歐洲大戰の終熄の直前なりしかば、休戰と同時に鐵價の暴落加ふるに當坑の弱點たる多量の貧鑛處理等の爲め、每年莫大の缺損を續けたりしが、製鐵所員の獻身的努力により還元焙燒法による貧鑛處理方法發明せられ、年產四十萬噸の能力を有する大選鑛場を大正十五年九月竣成し、熔鑛爐も二十萬噸全能力を發揮して大孤山に於ける大規模の露天掘採掘と共に鞍山復活の緒に就けり、而して豫て增產計畫中なりし五百噸爐は昭和五年一月に至り完成を告げ、近く火入を行ふの運びに至るべきを以て今後は年產額二十八萬噸に達する見込なり。

圖表對照統計

◇工場別投資額表

工場別	資本金	工場別	資本金
紡織工場	四、一〇九、一〇〇（円）	飲食物工場	八三、〇〇三、一四一（円）
金屬工場	三、三四二、三六八	雜工場	一〇、三〇八、四〇〇
機械及器具工場	一八、〇七七、三六一	特別工場	四八、四四七、一九三
化學工場	七、三三〇、三五五		

◇主要品生產價額表

品名	價額（千円）	品名	價額（千円）
綿絲	六、九六六	煙草	六、五二四
織物	三、三三六	粉	三、一八三
瓦	一、五二九	鐵	九、八三七
油	三四、〇三八	粕	五〇、三七
豆メント	三、七二九	其ノ他	三六、六四三

◇主要品生產高累年比較表

年別	豆粕綿糸（梱）	綿布（千疋）	セメント（樽）	煉瓦（箇）	製粉（斤）	燐寸（箱）
昭和元年	六五、一八〇、五九三	七八、三五三	六五三、四二一	八八、五八三、二四〇	四〇、八九二、一〇七	一九〇、六八六
同二年	六五、三五八、四九六	七三、五八三	六七三、七四四	二九、六四五、〇三四	六一、一三五、九四四	三三、二七三
同三年	五三、六〇二、五四三	八六、七三	九〇三、九二一	三三七、七五九、一五五	二九、一九三、四三〇	五四、四八四
同四年	—	八四、一八三	一、三三三、九二一	—	—	—
大正十二年	一、三四一、五九	二九、三五六	一、七一七、四九	一四、〇八	一、三四〇、四五〇	
同十三年	一、二八三、三〇九	二、一四一	一三〇、四三〇	一九、六九	一四、五七三	
同十四年	一、〇六八、四五	三、八七	六七三、七四四	一四、六三三	一八、九一	
昭和元年	一、〇四三、九二	三、八七	九〇三、九二一	一三、八〇	一三五、九三三	
同二年	九五九、三五七	四、三三	一、三三三、九二一	五〇、九三三	九八四、三三三	
同三年	四、三三	八、四三			三三九、〇四五	
同四年	二、一四一	三五、二四三	一三二、二〇〇	一三二、二〇〇	一三四、四五	
大正十二年	三、八七	八七、八四七	一七八、一三五	一七八、一三五	二一八、一三八	
同十三年	三、八七	四一、一三三	一四九、六三一	一四九、六三一	一八二、四九	
同十四年	三、八七	四一、一三三	一五五、八〇〇	一五五、八〇〇	一六四、一三三	
昭和元年	八、四三	五七、八五二	一七二、九二一	一五二	二四四、八〇八	
同二年	三五、二四三	五七、八五二	一三二、二〇〇	—	一六、四四九	
同三年	三〇、三五五	四一、一三三	一四八、八五一	—	二四四、四五	
大正十二年	三六	三六、六三八	一四、六三三	—	二一六、四四	
同十三年	五四	四一、一三三	一四八、八五一	—	一七、三七	
同十四年	一、四〇三	一四、八四三	一三三、九〇一	—	三七、三五	
昭和元年	一、〇六八、四五	一四、八四三	一三七、〇五一	—	三七、三五	
同二年	九五九、三五七	一四、八四三	一三七、〇五一	—	三七、三五	
同三年	一、〇六八、四五	一四、八四三	一三七、〇五一	—	三七、三五	

◇三港豆粕輸出噸數（六箇年比較）（單位米噸）

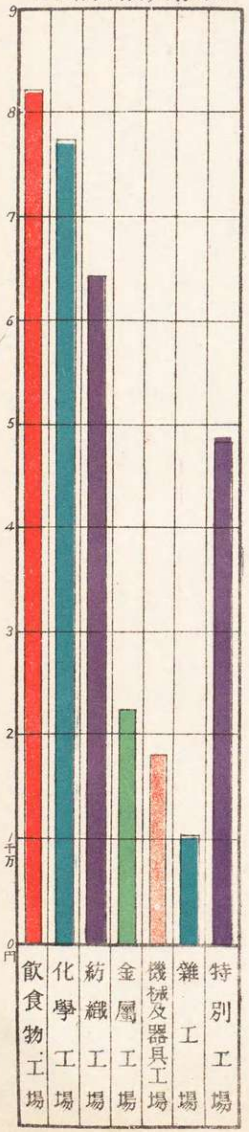
地名	年次	日本朝鮮支那	歐米其ノ他	合計
大連	大正十二年	一、三四一、五九	一四、〇八	一、三四一、四五〇
	同十三年	一、二八三、三〇九	一九、六九	一、四一五、七三
	同十四年	一、〇六八、四五	一四、六三三	一、一三〇、一五五
	昭和元年	一、〇四三、九二	一八、九一	一、一四三、一三三
	同二年	九五九、三五七	一三、八〇	一、一五七、七五四
	同三年	一、〇六八、四五	一三、八〇	九八四、三三三
營口	大正十二年	三六	一四、〇八	一、三四〇、四五〇
	同十三年	五四	一九、六九	一、四一五、七三
	同十四年	一、四〇三	一四、六三三	一、一三〇、一五五
	昭和元年	一、〇六八、四五	一四、六三三	一、一四三、一三三
	同二年	九五九、三五七	一三、八〇	九八四、三三三
	同三年	一、〇六八、四五	一三、八〇	一、一五七、七五四
安東	大正十二年	三、八七	一三、八〇	三、八七
	同十三年	三、八七	一四、六三三	一八、四九二
	同十四年	三、八七	一四、六三三	一八、四九二
	昭和元年	八、四三	一四、六三三	二三、四九二
	同二年	三五、二四三	一四、六三三	四九、四九二
	同三年	三〇、三五五	一四、六三三	四四、四九二

◇三港豆粕輸移出價額（海關兩）

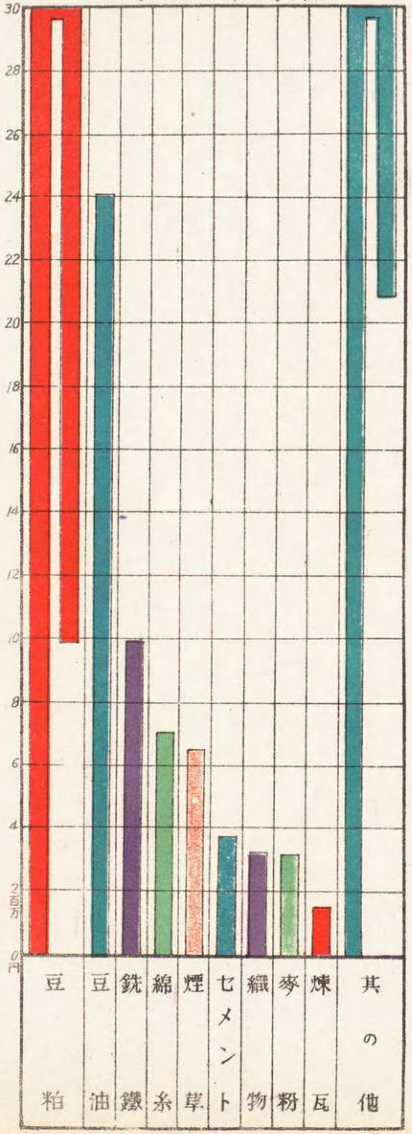
港別	大正十二年	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年
大連	四三、五五九、九〇〇	四六、〇一六、一四一	四四、六四五、五四四	五七、三八九、〇四〇	四〇、四七七、三三	四〇、九一五、七五五
營口	一〇、五〇、三八	六、七九〇、〇元	七、四四四、二四〇）	八、〇四五、一四四	八、九二一、〇五七	八、九二一、四三
安東	八、九九七、二三）	五、九七一、八一	五、〇六五、一〇三	七、五六二、一三三	七、九二一、四三	七、九二一、四三

工業

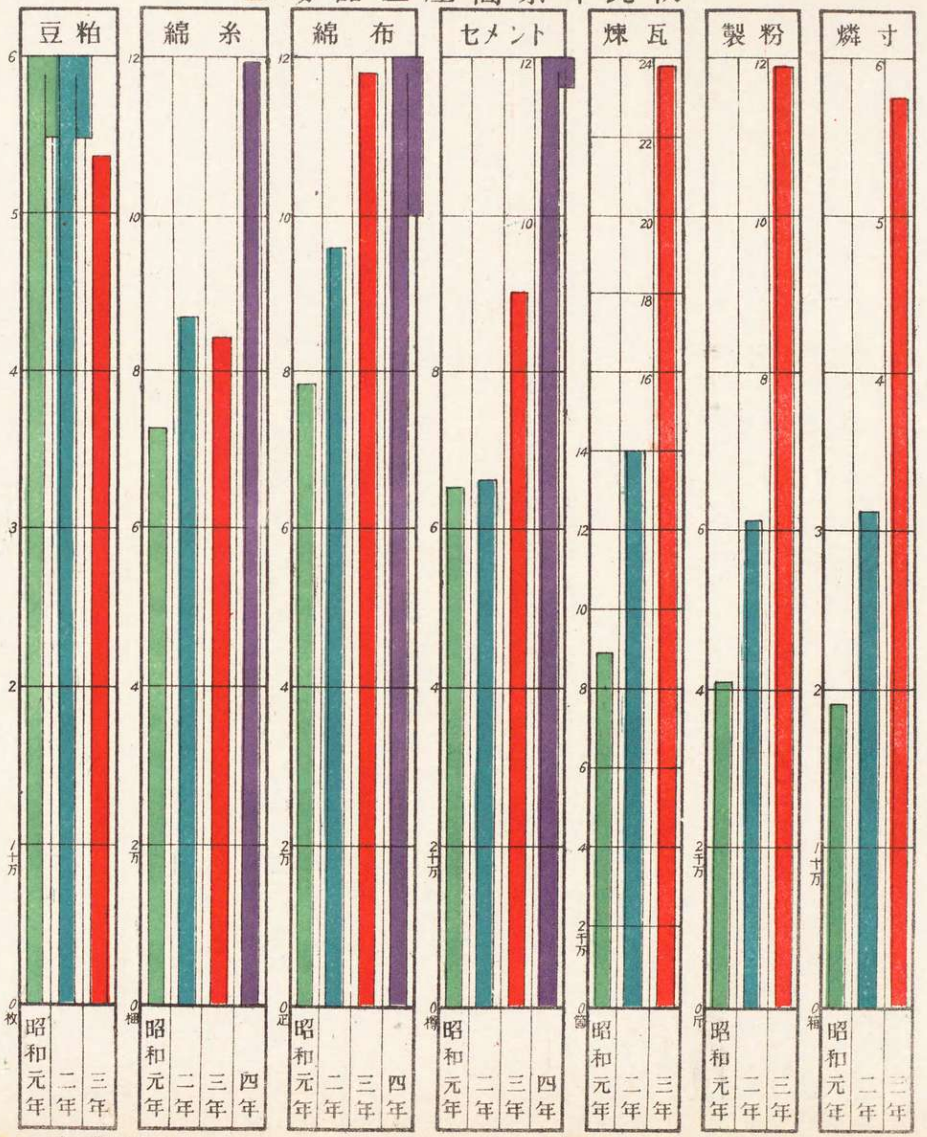
昭和三年現在
工場別投資額表



昭和三年
主要品生産價額



主要品生産高累年比較



滿鐵調査

水産業

【漁　業】關東州は南滿洲の最南端に突出せる半島にして、地域は僅かに二百平方里餘に過ぎずと雖も、其の海岸線の長さは附屬島嶼を合すれば約七百哩餘にして沿岸屈曲して港灣多く、東側は黃海に西側は渤海に面す、其の南端は渤海海灣口の一角を爲し直隷海峽を控へ舟楫の便、漁撈の利、自ら天與の水産地なるを以て、古來より住民斯業を以て主要の生業となし北支那に於ける唯一の水産地なりとす。

【漁場、漁法及漁期】關東州の漁業は地形上之れを黃海漁業、渤海漁業の二に區別し、又た民族關係上日本人漁業、支那人漁業の二に區別すべし。黃海は朝鮮西岸より直隷海峽に至る間の、一帶にして、水深二十尋より四十尋内外而して之れに生産又は回游する主なる水族は鯛、鰆、鰯、平鯽、鰤、鰹、鰡、金頭、鰈、鮮、鱚、鰺、鰯、太刀魚、鱈、鰡等にして他に鯨、海鼠、貝類、藻類等なりとす。渤海は其の面積約二萬七千方哩にして、水深二十尋内外其最深部も四十尋を超えず、生産又は回游する主なる水族は黃華魚、鯛、鰆、鰡、鰯、鰈、鮮、鱚、太刀魚、蝦、牡蠣、蛤、淺蜊等なり。

【漁獲高製造高】關東州内に於ける昭和三年末漁業者の數は土着支那人戶數八千八百十五戶、人員二萬二千六百九十四人、日本人定住者戶數八十一戶、人員二百四十九人なりとす。而して漁業船の數は支那人大型漁船（戎克）九百七十隻、同上小型漁船（舢板）四千七百二十七隻、日本型漁船二百一隻、發動機附漁船百九十九隻にして、此の内百二十五隻は内地より出漁せしものなり。前年度に於ける漁獲高は**四百二十九萬七千百八十圓**に達せり、尙右の外内地人の漁獲物として海洋島を根據地とする東洋捕鯨株式會社あり前年度の漁獲數長須鯨二十頭にして價格七萬圓なり。

【水産試驗場】水産試驗場に於ては漁業の發達、魚族の蕃殖、水産品の製造法等種々研究指導せられ、就中「底柄魚移動に關する基本調査として、魚類の季節的移動分布、海流の調査等を行ふ爲めデーゼル機關二百二十馬力を有せる旅順丸を出動せしめ、トロール網を使用し魚族の濃淡回游の方向時期を調査し、漁業家に便益を與へつゝあり、更に養殖部に於ては牡蠣の養殖を行ひ頗る好成績を擧げ、尙公魚の移殖試驗も可良なるを以て本年度も引續き卵粒六百萬を取寄せ、玉家店水源地へ百萬粒、龍王塘水源地へ五百萬粒を孵化移殖せしめられたり、尙前年龍王塘水源地へ移殖せし親魚よりは約百五十萬粒の採卵を得たるを以て、同地に孵化放流せり。其の他海蘿、蜊貝の養殖、雲母の製造、金頭魚の鹽藏等の試驗及び販路方面に就ても開拓中なり。

【水産會】關東州に居住する水産業者の爲に廳令を以て、關東州水産組合規則を發布せられ、之に依て在住漁業者は關東州水産組合を組織し、斯業の改良發達を圖るを以て目的とする公法人となり事務所を關東廳内に置き、大連、旅順、金州、普蘭店、貔子窩に支部を設け、關東州に於ける漁業者、水産製造業者、水産物販賣業者又は保管業者は必ず會員たることを強要せらるゝものにして、現在會員數日本人三百七十七人、支那人七千百三十二人なりとす、同會現在の事業としては大連、旅順に於ける魚市場の經營、模範漁船の建造、漁撈試驗、水産物販路調査其の他水産上の講習講話、遭難救恤等なりとす。

鹽　業

【概　說】關東州は降雨少なく蒸發量旺盛にして大氣乾燥せる爲め、天日製鹽に最も適當し古來此の天惠に依る製鹽の事業發達し臺灣、青島と共に著名の天日製鹽地と稱せられ、今や鹽田面積約七千町歩産額五億斤を超ゆるの盛況を見るに至り、今後需要の如何に依りては鹽田の擴張、生産の增加を圖り鹽の一大供給地と爲すこと、容易にして本業の將來は極めて有望のものなりとす。現在に於ける鹽田の面積は圖表に揭ぐ。

【經營者】關東州租借繼承當時にありては鹽業經營者は全部支那人なりしも、我國施政と共に本邦人の企業をも見るに至れり、現今に於ては支那人經營者（二百九十一人）の外邦人の經營の數會社は明治三十九年より當州鹽業の經營に着手し今日に至りたるものにして現在既成鹽田四千五百七十餘町歩を有し當州鹽田總面積の約六割五分は同社の所屬なり左に鹽田の總面積及び製産高を圖表に示めせり。

【鹽の生産】天日製鹽は煎熬法に依る製鹽と均しく天候の良否に依り、生産に著しき豐凶の差を生ずるが故に、年々の産額は不同あるを免れず而して天日鹽田は其の生産能力を完全に發揮するに至るは、開設後少くも三年の時日を要するを以て鹽田面積の增加に依り直ちに産額を增加するものにあらず、故に生産の豐凶又は鹽田の生産能力如何を見るに當りては鹽田熟成の程度をも併せ考慮せざるべからず、殊に昭和三年よりは産鹽實行不況の爲め秋季の採鹽を休止したる鹽田多く之れ等人爲的制限に依り生産の減收を見る事あり、從て圖表にも既往數年間の生産實績を揭げ生産の狀況を示すことゝせり。併し將來に於ける生産豫想高は優に十五億斤に達する計算なるも、從來の實績に徵するときは支那人經營鹽田の如き一町歩當り最多十七萬二千斤を生産したるものあるを以て、既成鹽田に對し相當の改良を施すときは邦人經營鹽田の如きも從來に比し産率の向上を期待し得べきを以て將來母國に於ける鹽の供給地として極めて必要の地位を占め居るものと謂はざるべからず。

【鹽の品質及用途】關東州産鹽は臺灣、青島に於ける一般の天日鹽と均しく結晶粒粗大にして、色相不純なりと雖も其の純分に至りては内地鹽の二等格以上に相當するを以て、少しく採鹽作業に注意するときは色相を佳良ならしむること敢て困難ならず。殊に粉碎洗滌を爲したる加工鹽の如きは、内地煎熬鹽（内地鹽）と大差なき品質なると共の價額の如きも極めて低廉なるを以て、各方面の用途に使用し得べし然も現今は大部分原鹽の儘輸出し、本邦内地にありては主として醬油釀造用、再製用及び化學工業用に使用せられ、朝鮮市場にありては原鹽の儘及び一部再製用として使用されつゝあり。

【製鹽の販銷】關東州産鹽の主なる販路は本邦内地及び朝鮮にして、其の他は僅少なる州内の需要に過ぎず、近年沿海州樺太方面に輸出を見るに至りたるも其の數量未だ謂ふに足らず、朝鮮に輸出するものは主として貔子窩地方の支那人製鹽にして、鴨綠江筋の新義州を主要仕向地とし其の他の地方は低廉なる山東省製鹽の輸入盛なるため、從來殆んど輸出されざりし所なるも、大正十四年以來貔子窩地方支那人製鹽の輸出を見るに至り、又た釜山及び北鮮方面は殆んど青島鹽の獨占市場たりしが青島鹽田還付後は關東州鹽の市場と急變するに至れり、然るに大正十三年來新たに臺灣鹽及び西班牙鹽等の輸入せるあり朝鮮市場は再び青島鹽田還付以前に於ける如き混戰市場と化し以て今日に及べり、要するに州鹽の販銷に就ては未だ容易に樂觀を許さざるも、逐年增加の趨勢を辿れり、左に最近年間に於ける移輸出高を圖表に示せり。

【鹽の再製加工業】關東州内に於ける再製鹽製造業者數は本邦人四、支那人五にして此の内規模大なるは、東洋拓殖株式會社及び大日本製鹽業株式會社にして其の他は何れも小規模のものなり、東洋拓殖株式會社は旅順に再製工場を有し製造能力一箇年八百萬斤なり、大日本鹽業株式會社は旅順管内雙島灣同社鹽田内に工場建設し、昭和三年に於て粉碎洗滌鹽、洗滌鹽計三千六百餘萬斤を製造し、現今も引續き製造中にして前者は主として勘察加方面の漁業用に、後者は内地工業用として販銷しつゝあり。

【輸出奬勵】關東州に於ける天日製鹽の事業は將來之れを發達せしめ得る諸要素を具備せる所なりと雖も、産鹽の消化充分ならず年々多額の餘鹽を持越すの狀態に在るを以て、輸出を增進し斯業の發達を助長せしむる爲め大正十一年來内地工業鹽及び内地以外の輸出鹽に對し、奬勵金を下付せられ居れり。

圖表對照統計

◇關東州漁獲高（昭和三年度）

地方及日支別	數量	價格	地方及日支別	數量	價格	地方及日支別	數量	價格
旅順 日本人	一、九二九、五八〇	四、一五五、九三三	大連 日本人	一、九〇一、四八八	四、一五五、九三三	大連 日本人	一、九〇一、四八八	四、一五五、九三三
支那人	一、八八〇、〇三三	六、六三、八〇一	支那人	一、四四一、七四九	一、五五、〇〇九	支那人	一、四四一、七四九	一、五五、〇〇九
金州 日本人	二、九〇六、五二五	九、四二三、一八六	普蘭店 日本人	二、〇一一、七二三	七、九二、一三三	普蘭店 日本人	二、〇一一、七二三	七、九二、一三三
支那人	一、〇三三、九二三	一、〇五二、九四〇	支那人	一、〇三三、九二三	一、〇五二、九四〇	支那人	一、〇三三、九二三	一、〇五二、九四〇
貔子窩 日本人			計 日本人			總計 日本人		
支那人			支那人			支那人		

◇關東州水產製造高（昭和三年度）

地方及日支別	數量	價格	地方及日支別	數量	價格	地方及日支別	數量	價格
旅順 日本人	三三、一〇九	七、九二三	大連 日本人	二四三、四九六	一〇、七七五	大連 日本人	二四三、四九六	一〇、七七五
支那人	九、八、九九五	八三、九一五	支那人	一、六一〇、一五四	一、六五、一三二	支那人	一、六一〇、一五四	一、六五、一三二
金州 日本人	一、九四、六一七	四三、七九一	普蘭店 日本人	二六、一三六	一、六五、一三二	普蘭店 日本人	二六、一三六	一、六五、一三二
支那人	三、三三一、四〇五	八五、一七三	支那人	一、七三一、一〇九	九六、一〇三	支那人	一、七三一、一〇九	九六、一〇三
貔子窩 日本人			計 日本人			總計 日本人		
支那人			支那人			支那人		

◇鹽田面積表

管轄別	本邦人鹽田	支那人鹽田	計	年度別	本邦人鹽田	支那人鹽田	計
旅順	九三〇・三 町	一八五・三 町	一、一二五・七 町	昭和二年	五、三六六、八六〇 坪	一、二〇九、〇〇五 坪	六、九七五、八六五 坪
大連	三九・七	四・一	四三・八	同三年	五、三六六、八六〇	一、二〇九、〇〇五	六、九七五、八六五
金州	—	八・五	八・五	同四年	四、六五五、九二一	一、二〇九、〇〇五	五、八六四、九二六
普蘭店	二四五・五	三五・四	二八〇・九	同五年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
貔子窩	九三・三	—	九三・三	同六年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
順	八七、七九三、三四 斤	一九、七四一、〇一〇 斤	一〇七、五六、三四四 斤	同七年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
連	九五一、九〇	三一、一〇〇	九八二、一九〇	同八年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
州	—	六、八六、八〇〇	六、八六、八〇〇	同九年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
店	三、四三七、四〇〇	三、三五、三〇〇	六、七七二、七〇〇	同十年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
子窩	九、三五四、七四〇	一、二一、四九〇	一〇、五七六、二三〇	同十一年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
				同十二年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
				同十三年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
				同十四年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
				昭和元年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
				同二年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三
				同三年	四、二六九、七四八	一、二〇九、〇〇五	五、四七八、七五三

◇製鹽高表

管轄別	本邦人鹽田	支那人鹽田	計	年度別	本邦人鹽田	支那人鹽田	計
旅順	一、一二五・七 町	一、二〇九・〇 町	二、三三四・七 町	昭和二年	二、三六、四七八、九一〇 斤	一、二〇九、〇〇五 斤	三、六九七、八八五 斤
大連	四三・八	四・一	四七・九	同三年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
金州	八・五	八・五	一七・〇	同四年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
普蘭店	二八〇・九	三五・四	三一六・三	同五年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
貔子窩	九三・三	—	九三・三	同六年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
順	一〇七、五六、三四四 斤	一九、七四一、〇一〇 斤	一二七、二九七、三五四 斤	同七年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
連	一、一二六、九〇	三一、一〇〇	一、一五八、〇九〇	同八年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
州	四三、八五〇	八、三五〇	五二、二〇〇	同九年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
店	三、四三七、四〇〇	三、三五、三〇〇	六、七七二、七〇〇	同十年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
子窩	九、三五四、七四〇	一、二一、四九〇	一〇、五七六、二三〇	同十一年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
				同十二年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
				同十三年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
				同十四年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
				昭和元年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
				同二年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五
				同三年	二、三六、四七八、九一〇	一、二〇九、〇〇五	三、六九七、八八五

◇製鹽輸出及移出高

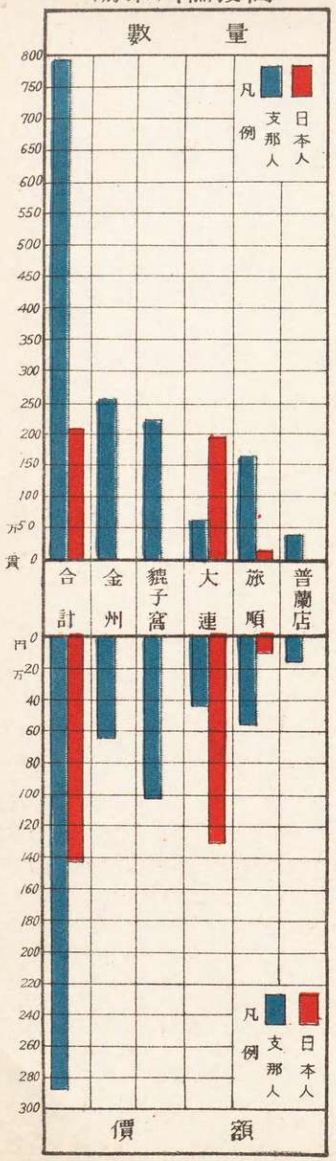
年別	日本內地輸出	朝鮮輸出	州內移出	其ノ他	計
大正十年	一、八、四九一、八四〇 斤	一、四九、一八〇 斤	一、四九、一八〇 斤	一、八六、四〇〇、一八〇 斤	一、八六、四〇〇、一八〇 斤
同十一年	二、七、〇一〇、九八〇	一、四九、一八〇	一、四九、一八〇	二、〇七、一八〇、一六〇	二、〇七、一八〇、一六〇
同十二年	二、五、三〇八、八四〇	一、四九、一八〇	一、四九、一八〇	二、〇五、一八〇、一六〇	二、〇五、一八〇、一六〇
同十三年	二、七、九八、七四〇	一、四九、一八〇	一、四九、一八〇	二、〇七、一八〇、一六〇	二、〇七、一八〇、一六〇
同十四年	二、七、九八、七四〇	一、四九、一八〇	一、四九、一八〇	二、〇七、一八〇、一六〇	二、〇七、一八〇、一六〇
昭和元年	二、七、九八、七四〇	一、四九、一八〇	一、四九、一八〇	二、〇七、一八〇、一六〇	二、〇七、一八〇、一六〇
同二年	二、七、九八、七四〇	一、四九、一八〇	一、四九、一八〇	二、〇七、一八〇、一六〇	二、〇七、一八〇、一六〇
同三年	二、七、九八、七四〇	一、四九、一八〇	一、四九、一八〇	二、〇七、一八〇、一六〇	二、〇七、一八〇、一六〇

◇會社別製造高及移輸出高

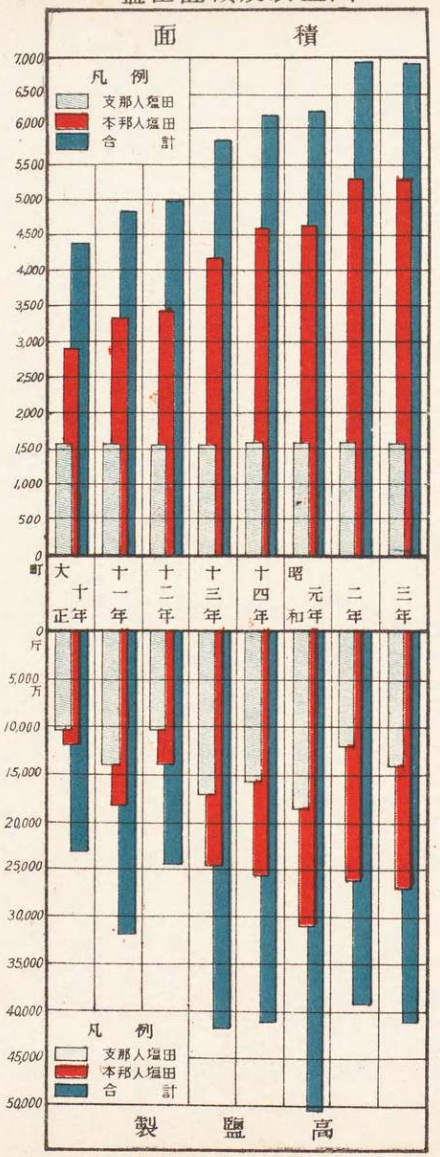
年別	種別	東洋拓殖會社	大日本鹽業會社	其ノ他	計
大正十年	製造高	一、二四一、二四〇 斤	一〇一、七二一、六八〇 斤	七、〇五五、九四〇 斤	二、〇八九、〇〇〇 斤
	移輸出高	一、二四一、二四〇	一〇一、七二一、六八〇	七、〇五五、九四〇	二、〇八九、〇〇〇
同十一年	製造高	二、四七二、七八〇	一、六八一、八九一	四五、九四〇	一、三九、〇〇〇
	移輸出高	二、四七二、七八〇	一、六八一、八九一	四五、九四〇	一、三九、〇〇〇
同十二年	製造高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
	移輸出高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
同十三年	製造高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
	移輸出高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
同十四年	製造高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
	移輸出高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
昭和元年	製造高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
	移輸出高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
同二年	製造高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
	移輸出高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
同三年	製造高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇
	移輸出高	二、四七二、七八〇	三、四〇、一四一	四五、九四〇	三、四一、〇〇〇

水産業

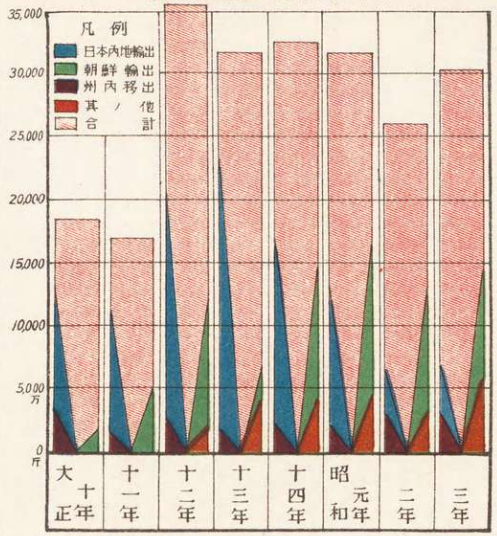
關東州漁獲高



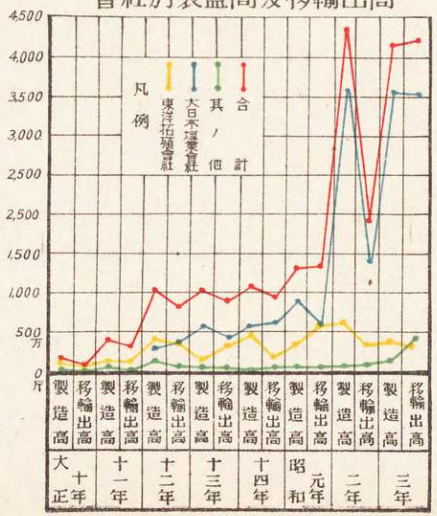
鹽田面積及製鹽高



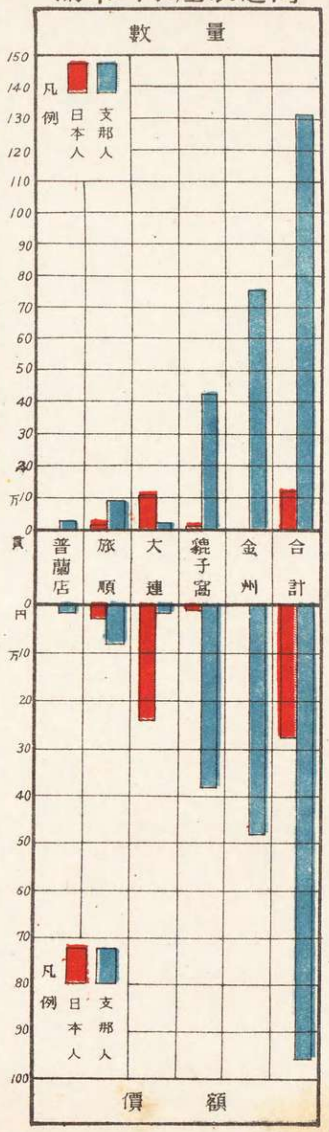
製鹽輸出及移出高



會社別製鹽高及移輸出高



關東州水產製造高



■商業

▲滿洲の市場

【概要】滿洲文化の開發は我國民の努力に依り促進せられたるもの多く、現在貿易市場は大連、營口、安東、浦鹽等の關門開かれ、殊に大連は滿洲唯一の市場にして大呑吐港となり、其の貿易額は駸々として增加する狀態なり、更に彼の大正四年五月の日支條約に依り日本國民は南滿洲各地に於て居住、來往の自由、商業其の他の業務に從事するを得るに至たれり、其の他條約に依り開放されし市場左の如し。

【奉天省】牛莊（營口）一八五八年六月英清間天津條約により一八六一年開放
安東 一九〇三年米清條約により開放を約し一九〇七年三月開放
大東溝 明治卅六年十二月日清追加通商條約に於て其の開放を約せり
奉天 明治卅六年十二月日清追加通商條約に於て其の開放を約せり
遼陽、鳳凰城、新民屯、鐵嶺、通江口、法庫門
（以上明治卅八年十二月日清滿洲善後協約により開放）

【吉林省】吉林、長春（附窳城子）哈爾賓、寧古塔、三姓
（以上明治卅八年十二月日清滿洲善後協約により開放）
綏芬河 一九〇八年（清國自ら開放す）
龍井村、局子街、頭道溝、百草溝
（以上明治四十二年九月間島に關する協約により開放）

【黑龍江省】齊々哈爾、海拉爾、璦琿、滿洲里
（以上明治卅八年日清滿善後協約に依り開放）

▲商品

滿洲に於て取引せらる商品は穀類、石炭、皮革共の他の原產品若くは粗生產品を主とし工業生產品は綿絲布、銑鐵及柞蠶絲等とす、而して此等商品は農業、工業、貿易等に關連し共の產額輸出入の如きも、各項に於て之れを記述せるを以て各品に對する說明は之れを省略し以下數品に就き之れを略叙す。

【大豆】滿洲は大豆の世界的主要產地なるが南滿は未開墾地勘きを以て增收率從て小なるも、北滿即ち黑龍江省及び蒙古地方の未開墾地は年々非常なる勢を以て開拓され、交通機關の充實と共に著しき增收を期待せらる之れが輸出港は南滿に大連、營口及び安東の三港あり、北滿產出のものは浦鹽搬出有利なるが如し。

【柞蠶繭及び絲】柞蠶は滿洲に於ては大豆に亞ぐ重要產物にして、支那全產額の約七割を占む繭の年產額約九十億乃至百億粒と稱せられ、滿洲南部の山野に產す之れが集散市場は蓋平、海城、岫巖、安東にして安東は滿洲柞蠶額の半を集散し取引旺盛なり、蓋平は本品市場として最も古きも近年は安東の爲めに凌駕せられ集散高は安東の約半數なり。

【羊毛】現在滿蒙に於ける綿羊數は約三百萬頭と稱せらるも從來殆んど改良增殖を圖らず、隨て共の毛は粗硬にして一頭平均二斤位なりしも南滿洲鐵道會社は大正四年頃より綿羊改良の計畫を樹て、二十年に三百萬頭の羊の改良を企て公主嶺農事試驗場に畜產部を設け品種の改良試驗を爲しつゝあり、現在に於ける毛產額は大約四百五十萬斤と稱せらる。

【皮革】滿蒙の皮革は牛皮、馬驟皮、羊皮、豚皮を主なるものとし是等の皮革及び其他の獸皮の集散市場は奉天、營口、錦州、鄭家屯、長春、海拉爾、滿洲里等なるが、就中奉天は南北滿洲の獸皮取引の市場にして年々此の地に集まる數量は巨額に達す、而して是等皮革は殆んど生皮の儘羊毛と同じく天津を經由して歐米に輸出さるゝもの多數を占む、滿洲は皮革工業幼稚なるが爲め鞣皮の供給は却て之れを輸入に仰ぐ狀態なり。

▲商業機關

【大連商業會議所】本所は大正四年六月の設立にして關東廳及び滿鐵より經費の一部補助を受け諸般の經濟問題に對し、研究調查を行ひ商工業者の啓發に資すること勘からず、昭和二年度中に於ける主なる調查件數は千六百七十七件にして現在に於ける會員數は二百四十六名とす。

【同業組合】關東州には未だ同業組合法の制定なきを以て法令に依る是等の組合なきも同業者の福利增進を圖らんとして組合は逐年增加し其の內容漸次充實し來れり、然れども動もすれば組合員間に紛爭を生じ或は組合を惡用するが如き傾向起る虞れあるを以て、取締規則制定の必要を認めらる而して現在に於ける組合數八十八組合員は合計四萬六千七百二十名に達しつゝあり。

【市場】公設市場として信濃町、小崗子、山縣通、沙河口の四市場の外新設の食料品市場あり、此の外關東州水產會の經營する魚雜市場あり何れも設備完備し、常に市內魚菜小賣相場の標準を示し市民の利便勘からず、二年末現在出店舖總數二百二十六戶賣揚高六百二十四萬四千二十五圓に達せり。

【會社】關東廳管內に於ける現在の會社數は株式、合名、合資を合せて六百七十社にして、資本總額は七億九千七百十三萬九千餘圓、此の拂込資本金は五億四千六百八十八萬五千餘圓に達せり、而して昭和二年度に於ては一般の財界不況なりしにも拘らず、新設六十二社、解散四十二社、差引二十社の增設となり拂込資本金に於て二千三百四十一萬餘圓の增加を見るに至たれり。

【取引所】取引所は官營のものは大連、開原、長春、四平街、公主嶺、及び奉天取引所の六にして、民營は大連株式商品取引所、安東取引所の二なり、現在の取引物件は官營取引所に於ては重要物產たる大豆、豆粕、豆油、高粱、饅鈔の金票、鈔要（銀票）とし民營取引所中、大連株式商品取引所は有價證券（株式）綿絲布、麻袋、安東取引所は有價證券（株券）及び鎭平銀とす。

【取引擔保會社】取引擔保會社は關東廳取引所に隷屬し信託會社と稱し、取引所に於て行はるゝ先物取引の履行を擔保し、之れが精算並に受渡の事務を行ひ、取引所と相俟て取引機關の機能を完ふするものとす、會社は取引の安全を期し且契約を確保する爲め取引人より會社所定の身元保證金を提供せしむ、而して賣買契約に際し本證據金を納入せしめ、尙必要に應じて追證據金、增證據金及び豫納證據金を差入れしむるものとす。（圖表參照）

■金融

【正金銀行】滿洲に於ける邦人經營の金融機關は明治卅三年一月の開設に係る橫濱正金銀行牛莊支店を以て嚆矢とす、當時露國の勢威は隆々として滿洲を壓し、邦人の在留する者甚だ少く同行の業務も亦殆んど見るべきものなかりしが、偶日露戰端の開始は同行の急激なる發展を促し大連、旅順、奉天、鐵嶺に各支店又は出張所を增設するに至れり、而して政府は戰後經營の一端として固有業務の外金庫事務軍用手票の回收、銀券の發行等を併せ行はしめたりしが其の後滿洲經濟界の進步發展に伴ひ幾多の改變を經過し、大正六年に至り政府に於て滿洲特殊金融機關に關する制度の更新により、正金銀行の業務の一部を朝鮮銀行と東洋拓殖會社に引繼がしむる事とせり、玆に於て滿洲に於ける特殊金融機關は朝鮮銀行、正金銀行及び東洋拓殖株式會社の三者相鼎立し其の職能を分てり、現在正金銀行の支店は六箇所にして、朝鮮銀行現在の在滿支店及び出張所は十四箇所にして昭和二年下半期末現在各店預金總高は五千二百五十一萬圓貸出金總高は一億二百九十八萬圓なり。

【東洋拓殖株式會社】が滿洲に進出を計りたるは主として滿洲に於ける不動產金融の樞軸機關たらしむるに在り、現在に於ける支店は三ケ所にして昭和元年十二月末現在貸出金三千九百九十六萬圓なり。

【普通銀行】滿洲に於ける普通銀行の嚆矢は正隆銀行なり同行は日支合辦事業にして銀資本二千四萬圓を以て軍政治下の營口に開店したるものなりしが、現在に於ける資本金は千二百萬圓にして地方銀行の巨擘たり。其の他滿洲銀行を初め邦人經營及び日華合辦に係る普通銀行は全滿洲を通じ昭和二年末に於て十六銀行に上り、其の公稱資本金三千二百六十七萬圓、拂込資本金千四百三十五萬圓、諸預金六千四百萬圓、貸出金一億六千二百萬圓を算せり。

圖表對照統計

◇會社現在數表（昭和二年度現在）

種別	昭和二年度中 前年現在 設立	増資	解散	減資	本年末現在
合名會社（出資金數）	五	—	—	—	五
合名會社（出資金金額）	二七、〇〇〇円	—	—	—	二七、〇〇〇円
合資會社（出資金數）	九	五	—	—	一四
合資會社（出資金金額）	二七、〇〇〇円	五、〇〇〇円	—	—	三二、〇〇〇円
株式會社（出資金數）	四	—	二	—	六
株式會社（出資金金額）	四〇、〇〇〇円	—	二、〇〇〇円	—	四二、〇〇〇円
合計（會社數）	一八	五	二	—	二一
合計（出資金金額）	九七、〇〇〇円	五、〇〇〇円	二、〇〇〇円	—	一〇〇、〇〇〇円
前年に比し増減（會社數）	△△△		△		
前年に比し増減（出資金金額）	二五、三五八、一〇〇	五三、七六五、三五〇	二、七三一、三五〇	一七、〇〇八、三五〇	一五〇、〇五〇、六五一

◇株式取引高（民營取引所取引高）

所名	定期取引 出來高	定期取引 價額	延取引 出來高	延取引 價額	現物取引 出來高	現物取引 價額	計 出來高	計 價額
大連株式商品取引所	四七、五八〇枚	三、三七、五四円	一、〇七、三〇〇枚	二、七三、一二〇円	二、四六、八五〇枚	七、二、〇九〇円	三、九九、八五〇枚	一〇、七、三五〇円
安東取引所	四九、〇〇〇	三、三五、八二〇	一、〇〇〇	二、六三、〇〇〇	九、三三五、五三〇	六、八六、四五〇	一、三八、三三〇	九、七一、七七〇
計	九六、五八〇	六、七三、八七四	一、〇七、三〇〇	二、八九、一二〇	三、三六、一八〇	一三、〇八、五四〇	五、三七、七六〇	二〇、八一、五二四
前年に比し増減（十）	四二、七〇〇	二、九三、一〇〇	一、〇〇〇	二、三三、〇〇〇	九、三三五、五三〇	六、八六、四五〇	一、三八、三三〇	九、七一、七七〇
前年に比し増減（出來高）	四九、二八〇	三、三五、八二〇	一、〇〇〇	二、六三、〇〇〇	九、三三五、五三〇	六、八六、四五〇	一、三八、三三〇	九、七一、七七〇
前年に比し増減（十）	六、七〇〇	三、三七、五四	—	二七、三〇〇	三、三七、二九〇	二、三三、四〇〇	三、三八、三九〇	二、七四、二四〇

◇信託會社及民營取引所營業成績　昭和三年（右行上半期 左行下半期）

(1)官營取引所信託會社

會社名	收入	支出	純益	積立金	株主配當率
大連	一七、三〇七円	一〇、七、七二	六、六〇〇円	一、〇〇〇円	七分
大連（錢鈔）	一〇、七、七二	七、九三、九六	二、七、八〇四	一、〇〇〇	六分
開原	一、九三、一五五	一、五三、二五三	三九、九〇二	一、〇〇〇	一割
奉長	六四、三七五	五四、九六六	九、四〇九	一、〇〇〇	一割
四平街	一、三三、〇九一	一、〇三、〇〇〇	三〇、〇九一	一、〇〇〇	一割
公主嶺	一、四一、〇三五	一、〇三、〇〇〇	三八、〇三五	一、〇〇〇	一割
奉天	一、九〇、九七六	一、四三、八四〇	四七、一三六	一、〇〇〇	一割

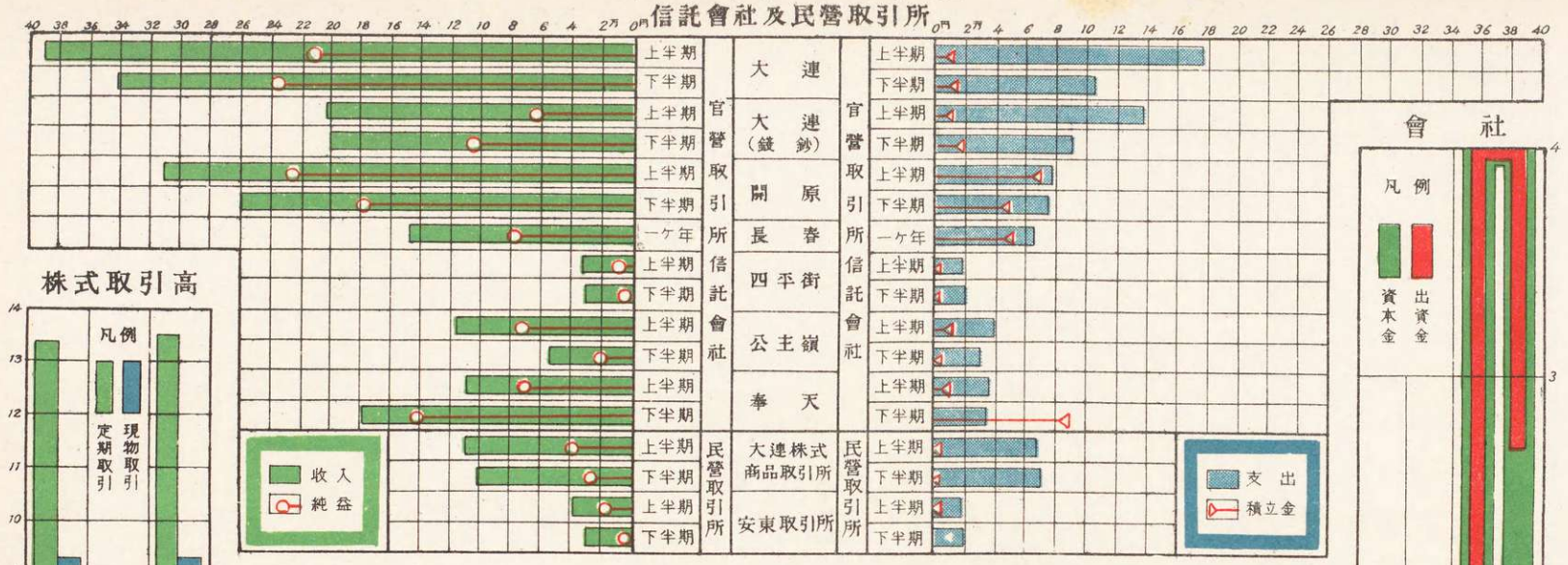
(2)民營取引所

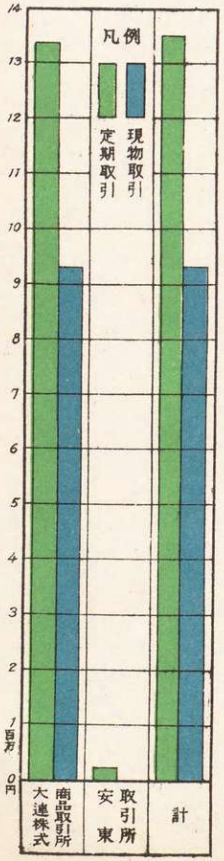
所名	收入	支出	純益	積立金	株主配當率
大連株式商品取引所	一〇一、四三一円	六七、九四四円	三三、八七七円	二、〇〇〇円	六分
安東取引所	三八、四九一	九、九三九	一〇、三三七	四、〇〇〇	一割

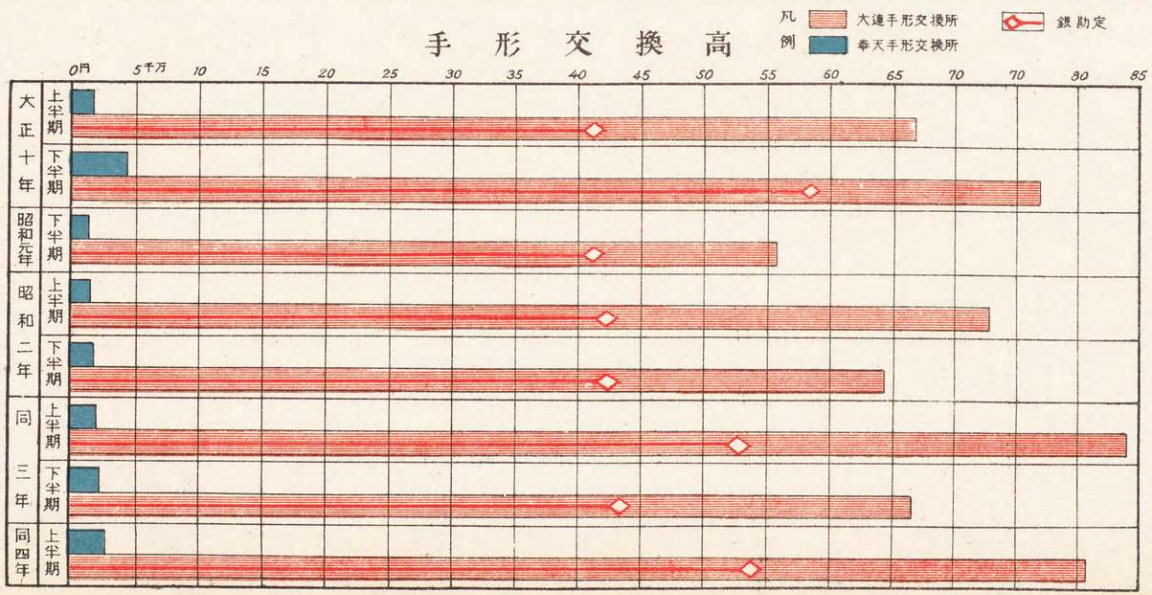
◇手形交換高（右行金勘定 左行銀勘定）

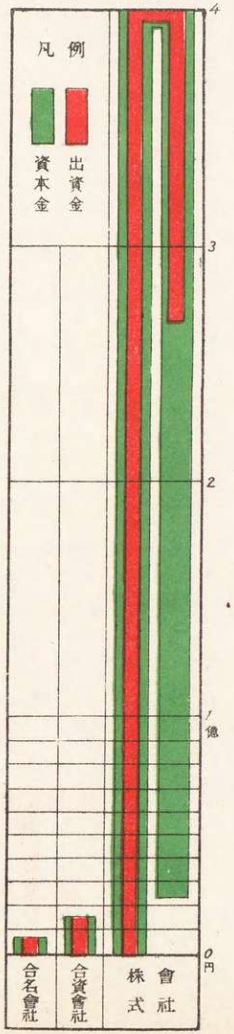
期間	大連手形交換高 枚數	大連手形交換高 金額	奉天手形交換所 枚數	奉天手形交換所 金額	合計 枚數	合計 金額
大正十年上半期	一四四、六七一	四九、六五一、九二五円	一三、三八一	一六、三七一、二四円	一五六、〇五二	五九、〇二三、一五九円
同下半期	一八、七九八	五九、四〇一、三五五	二五、九四〇	一四、一六七、八一五	四二、七三八	七三、五六九、一七〇
昭和元年下半期	一四二、一〇二	四九、九五八、〇三三	一二、五三三	一六、三四五、九九九	一五四、六三五	六六、三〇四、〇三二
同二年上半期	一六、七九七	五四、一八九、〇二五	一四、一五五	一六、〇三四、二四五	一七〇、九五二	七〇、二二三、二七〇
同下半期	一二、一五六	四四、一四四、八四三	一四、一六五	一六、一四一、八一七	一五六、三二一	六〇、二五五、六六〇
同三年上半期	一四、一五八	五五、八九〇、三五五	一五、七〇	一六、三五三、九〇四	一七九、八七四	七二、二四四、二五九
同下半期	一六、一五一	五五、八七九、〇三三	一六、一五五	一六、三五三、九〇四	一八二、三〇六	七二、二四四、二五九
同四年上半期	一四、一五八	五五、八七九、〇三三	一六、一五五	一六、三五三、九〇四	一八二、三〇六	七二、二四四、二五九

關東州の商業









關東廳調査

南滿洲鐵道株式會社

【概　說】明治三十八年九月五日の日露媾和條約に依り我が國は東清鐵道會社に屬したる長春旅順間の鐵道及び其の一切の支線並に之れに屬する一切の權利、特權、財産及び炭坑を露國より讓受けたるを以て明治卅九年六月八日勅令を以て本鐵道の經營に關する規定を發布せられ、新らたに南滿洲鐵道株式會社を創立し野戰鐵道提理部其の他の官憲より全部の引繼ぎを受け本社を大連に東京に支社を置きて明治四十年四月一日業務を開始せられたのである。

【會社の資本】會社の資本は當初二億圓にして內一億圓は政府の出資金として滿洲に於ける既成の鐵道及び之れに附屬せる一切の財産並に撫順及び煙臺の炭礦を以て之れに充て、殘り一億圓は之れを日淸兩國人より募集すべきものとし、創立當時我政府は淸國政府に對し、之れが株式引受けに關し數回交涉を重ねたるも、遂に何等の回答に接せず仍て會社は我が國一般民間より募集する事となし而して大正九年一月迄に全部結了せり。然るに戰後事業の發展に伴ひ資金增加の必要起りたるを以て更に二億四千萬圓の增資を決行し、資本總額を四億四千萬圓となせり、而して其の增加額の半額一億二千萬圓は政府に於て之れを引受け殘額一億二千萬圓は一般民間に於て之れを募集せり。

【會社の組織】會社の重役は創立以來大正六年七月迄は總裁、副總裁各一人、理事四人以上監事三人乃至五人の規定なりしが現時に於ては總裁、副總裁及び理事長を廢し社長、副社長各一人を置くことに改正せらる。而して社長、副社長は勅裁を經て政府に於て之れを命じ理事は五十株以上を有する株主中より政府之を任命し、監事は株主總會に於て之れを選任す、而して重役の任期は社長、副社長は五年、理事四年、監事は三年なり。

【鐵　道】南滿洲鐵道は現在約七百哩の營業線にして即ち大連より長春に至る本線約四百卅八哩及び旅順、柳樹屯、營口、煙臺及び撫順の五支線九十八哩二並に安奉線百六十一哩七を有し、是れ等が實に滿洲の動脈を成せるものなり。昭和二年度末現在に於ける南滿鐵道會社の主要設備を擧ぐれば左の如し。

幹線	滿洲本線	大連長春間	四三八・五
線	安奉線	安東奉天間	一六一・七
支線	旅順線	周水子旅順間	三一・六
	營口線	大石橋營口間	一三・九
	煙臺炭礦線	煙臺煙臺炭礦間	九・七
	撫順線	蘇家屯撫順間及び瀝青礦兒屯千金寨間	三二・九
	沙河口輸炭線	沙河口輸炭臺間	二・五
	柳樹屯線	大房身柳樹屯間	三・六



南滿鐵道株式會社

鐵道の收入は別表の如く約八割五分は貨車收入にして、客車收入は僅かに一割五分內外に過ぎず而して輸送貨物の主なるものは大豆、豆粕、雜穀の如き滿洲特産物並に撫順炭にして大部分は輸出品に屬し、爲めに特産物の出廻り時期たる冬期に在りては貨物輸送の繁忙洵に言語に絕するものあり、近來又た奥地開發に伴ひ輸入品たる綿絲、綿布、砂糖、石油、機械、金物類、建築用品等の輸送次第に增加し來りたるは注目に値す所なりとす。

【港　灣】港灣事業は主として大連港に於て其の大部分を占め旅順、營口及び安東港に於ては僅かに其の事業の一端を見るのみ。設計は大體に於て露國の計畫を踏襲すると共に既成部分の改善修築並に未成工事に對する適宜の進捗を圖り、進んで大正二年度より第三埠頭及びて埠頭築造工事に着手し、大正九年之れが竣工を見るや頓に面目一新の觀を呈するに至れり。今大連埠頭に於ける着埠汽船數、輸入貨物噸數、離埠汽船數、輸出貨物噸數、貨車積卸噸數及び其の營業收支を擧ぐれば別表の如し。

【會　社】會社の鑛山事業は專ら炭礦業にして最初會社が政府より引繼ぎを受けたる炭坑は撫順、煙臺及び瓦房店附近に於ける炸子窖の三炭坑なりしが、明治四十年七月日露鐵道接續協約の結果露國政府より長春附近の石碑嶺及び陶家屯の炭田の引渡を受けたり、然れども會社が採掘に從事せるは撫順及び煙臺の二坑のみにして、炸子窖は貸貸し石碑嶺及び陶家屯の二炭田は大正七年南滿鑛業株式會社をして之れが經營を爲さしむることゝせらる。

【製　鐵】會社は鞍山に於て製鐵事業を經營す、製鐵工場は滿鐵本線鞍山驛と走山驛との中間に位し、昭和二年度末に於ては工場用地として二百四十八萬三千三百坪の面積を有し、外に鞍山市街用地面積三百四十六萬九千九百四十七坪餘を有せり。鞍山の地域に鐵鑛區の存することは明治四十二年會社地質研究所員に依り發見せられたり、玆に於て四十四年會社は時の奉天總督に對し採掘許可を出願せしも許可を得ざりしが、偶々大正四年五月日支條約關係公文に依り日支合辦に依り鑛山採掘を爲すことを得るに至り、五年三月日支合辦鞍山鐵鑛振興無限公司を設立し六年三月鐵鑛採掘の許可を得たり。大正六年五月愈々工場の建築工事に着手し同八年四月二十九日熔鑛爐二臺中一臺及び之れに附隨する諸般の設備を完成し、之れが火入を行ひ同年五月一日始めて出銑を見たり、引續き第二熔鑛爐の完成を告げたる際恰も歐洲戰亂終局の爲め經濟界が不況に陷り爲めに暫く作業を見合せ中偶々一熔鑛爐破損し其の作業を一時休止すると同時に第二熔鑛爐を使用し爾來第一、第二熔鑛爐を交互に使用せられつゝあり、而して出銑の狀況は事業開始以來極めて順調に進行して漸次品質を改良し現に一日五百五十五噸の出銑を見るに至れり、製鐵所に於ける興業費は創業以來昭和二年度末迄に投資せる額二千七十四萬七千餘圓に達せり。

【電　氣】會社は大連、奉天、長春、安東、撫順及び鞍山に於て電氣事業を經營したるも、大正十五年五月二十日大連、奉天、長春、安東に於ける電氣事業を獨立企業に變更し、南滿洲電氣株式會社と爲し同年六月一日より獨立營業を開始せらる、(此の內撫順は炭礦、鞍山は製鐵所に於て經營す)各地共市街の膨脹並に工業の發達に伴ひ電燈、電力の需要增加の傾向著しく何れも事業擴張の計畫中なり。

尙會社は右の外日支合辦組織の下に撫順奉天間、奉天遼陽間の送電線及び金州送電線を有し以て低廉なる電力の需要に應ずると共に一面送電線路の幹線網完成の端を開き前記撫奉、奉遼、金州の三送電線の外沿線各地の電氣事業の爲めに其の創業を助け、或は興業費を貸付くる等其の發展の爲めに盡力したる所鞏からず、是れ等諸會社は大半滿鐵會社の出資に依て成立せるものにして、各社とも社長及び技術者は會社の推薦に依るものとせらる。

【瓦　斯】從來會社は大連、鞍山、奉天及び安東の四箇所に於て瓦斯事業を經營し、最近長春に於ても之れが事業を繼承することゝなれり。

【旅　館】鐵道沿線主要驛に於ける會社の旅館施設義務は會社の設立に關し、政府命令書の要求する所にして會社は日下大連、旅順、奉天及び長春の各地にヤマトホテルを建設して旅館業を經營せるの外避暑客を招致せんが爲め更に大連郊外風光明媚なる星ヶ浦海岸にホテル及び貸別莊を開設せり、尙旅順黃金臺に夏期中ホテル及び貸別莊も經營せられつゝあり。

【地方經營】會社は明治卅九年八月會社設立事務に關する三大臣命令書に依り鐵道附屬地內に於ける土木、敎育、衞生等に關し必要なる施設を爲すべきことを命ぜられ、同時に其の費用を支辨する爲め政府の認可を得て附屬地內の居住者に對し手數料を徵收し、其の他必要なる費用の分賦を爲し得る權能を附與せられたるを以て、會社は明治四十年四月一日業務を開始するに當り、地方經營を行ふ爲め地方部を設置し其の業務を主宰せしむることゝせらる。

圖表對照統計

◇鐵道運輸收支

年度＼區分	客車收入	貨物收入	總收入	支出
大正十四年度	一四、五四〇、九四二	八〇、五五五、八三〇	九七、三九九、三八	三八、八〇〇、六九一
昭和元年度	一五、三六、三五二	八九、五三、三〇五九	一〇七、九三、五六七	四五、九三一、六三
同二年度	一六、一〇一、九五五	九四、〇四〇、八八	一一〇、一四一、七一	四五、三三五、八二四
同三年度	一七、六、九、二九五	九七、七八、一四七	一二五、三五七、四四〇	四四、三六八、〇〇六

◇公費歲出年度別表

年度＼種目	事務費	土木費	教育費	衛生費	警備費	其の他	計
大正十四年度	五六、一〇四円	六九、〇九三	一、〇一、一〇五	三五、三五	二六、八〇〇	四九〇、〇四四	三、六九、三九八円
昭和元年度	五四、一〇四	五三、〇一七	一、九八三、一六九	三七、四〇三	三六、四五	四五、一一〇	三、九九、五四四
同二年度	五五、五八	六九、一〇八	一、四五三、二四一	四一、五四	三四、四五	一、〇八〇、五三	三、九四一、五八〇
同三年度	五九、二三	五五、九五三	一、六二一、〇四一	五五、〇一七	三四、四三	一、二五、六五五	四、二四三、九二六

◇公費歲入年度別表

年度＼種目	公費	補給金	其の他	計
大正十四年度	七九、三六円	二、七五、四六六円	二、四、七二五円	三、六九、三九八円
昭和元年度	八三、四八	二、八四三、八六	三四、四五	三、九九、五四四
同二年度	八六、〇三	二、七四一、〇一四	三四、八三	三、九四一、五八〇
同三年度	九六、八〇七	三、〇五〇、八六六	三五三、四三	四、二四三、九二六

◇大連埠頭輸出入貨物噸數及營業收支

年度＼區分	着埠汽船數	輸入貨物噸數	離埠汽船數	輸出貨物噸數	貨車積卸噸數	埠頭營業收入	同上支出
大正十四年度	三、五五三	一、〇三、五一〇噸	三、五二	六、〇七、一〇四八噸	六、五四四、二三二噸	九、一六二、五九九円	七、九七、〇一〇円
昭和元年度	三、八三五	一、一〇八、四四四	三、八三五	六、二四四、八六六	六、六六六、三六九	九、五六六、三六九	八、〇一三、八九
同二年度	四、二三四	一、〇五六、一四一	四、二三五	七、二九一、九一三	六、九五三、〇六九	一〇、三五、九四一	九、三〇五、七二
同三年度	四、五〇三	一、三六〇、五四四	四、四九八	七、七九二、六五九	八、二五三、四五九	一〇、六五、四三六	八、三三三、六〇一

◇昭和三年度石炭賣却噸數

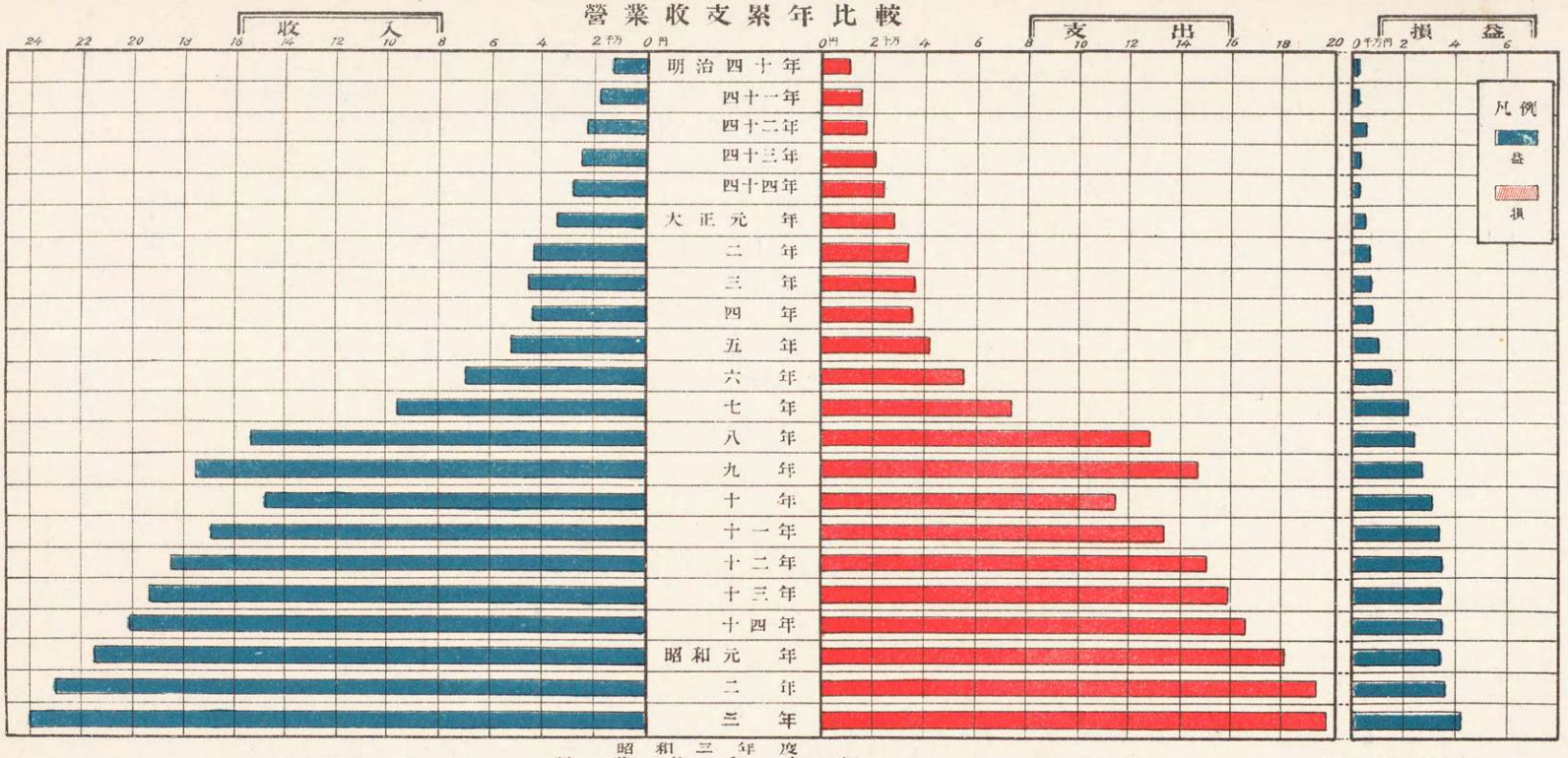
區別＼事業別	地賣	船焚	內地	社用	朝鮮	海外	合計
石炭	二、一〇二、二六噸	七二、一〇七噸	一、八九、三五噸	一、三六、六九噸	四四、一九噸	一、三九、五七噸	七、八五、八六噸

◇諸事業投資額　昭和三年現在

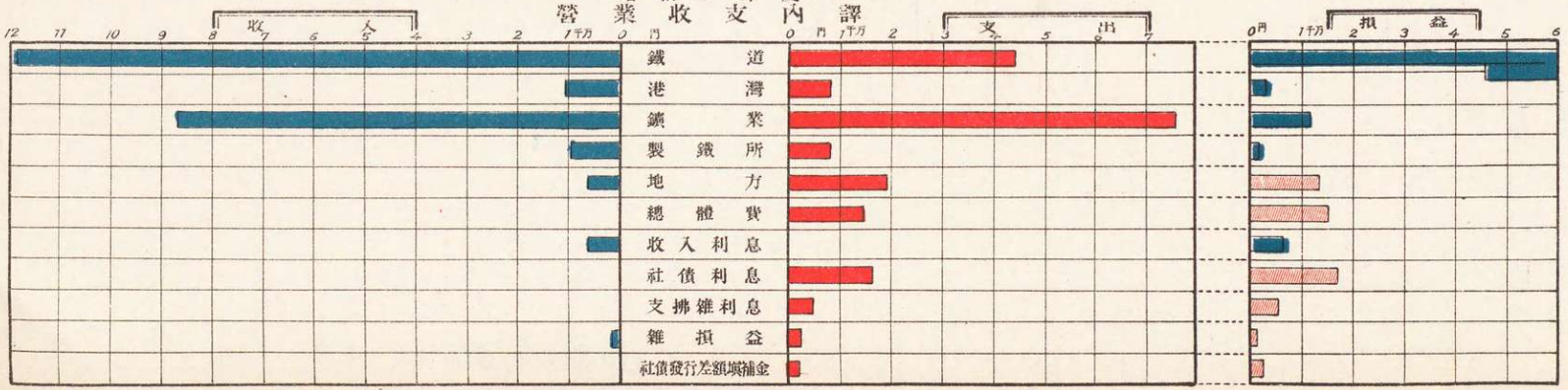
事業別＼昭和三年度	備考
雜施設	四五、四九、八七七
地方施設	一六七、一九、三九五
肥料工場	五、七三
製油工場	四、九五五、六六六
鐵製所	一〇、八七一、三一五
礦山	一〇六、七一九、一四〇
港灣	九、一〇三、一四八
工場	七、五九、一七
鐵道	二四九、七〇三、三九

南滿洲鐵道株式會社

營業收支累年比較



昭和三年度 營業收支內譯



滿鐵調査

圖表對照統計

◇南滿洲鐵道株式會社營業收支累年比較

年次	收入	支出	損益
明治四十年度	二、五四三、一二六	一、〇五六、五四五	一、四八六、五八一 円
同四十一年度	一七、六二五、六八二	一五、五〇二、一〇一	二、一二三、五八二
同四十二年度	二二、一三九、二三五	一七、四二一、二三四	五、七一七、九九九
同四十三年度	二四、七七七、六八五	二二、〇六九、三三八	三、七〇八、三二六
同四十四年度	二八、二五五、〇八〇	二四、四八七、六五二	三、六六七、四二八
大正元年度	三三、五四六、四七七	二八、六〇〇、四三三	四、九四六、〇四五
同二年度	四二、四一七、一三三	三三、一四九、八四四	七、一六七、二九〇
同三年度	四四、六四〇、六六六	三七、三九五、五二五	七、四四一、〇九一
同四年度	四三、六六〇、〇三五	三五、七〇五、五二六	八、〇八〇、四九九
同五年度	五二、四三一、四八	四二、二九四、八〇一	一〇、一三七、二〇八
同六年度	六九、四九八、二五一	五四、〇六四、七〇六	一四、九三五、六四三
同七年度	九六、二五七、八大	七四、〇六四、七〇六	二三、一九三、二七一
同八年度	一五二、一三三、二六七	二六、七五八、四三三	二四、三四四、九六四
同九年度	一七四、七八、二六七	四七、七二四、四六四	二七、七二一、九六五
同十年度	一四七、一〇〇、六〇三	二五、七一四、四六四	三二、六六八、三九九
同十一年度	一六九、九六六、四六六	二三五、八四九、八四四	三五、〇八〇、二四四
同十二年度	一八五、六六八、三三四	二五〇、九〇二、七三一	三四、七五二、五九二
同十三年度	一九四、一八一、七八五	二五九、六六八、八三一	三四、八六五、二八〇
同十四年度	二〇二、九九八、三六九	二六二、四五七、〇六〇	三四、八六五、二八〇
昭和元年度	二三五、六二四、九四四	一九四、八六四、八〇二	四一、三五三、八六二
同二年度	二三〇、五九八、二五四	一九七、八四四、八〇二	三六、七四四、三三三
同三年度	二四〇、四一七、五五二	一九七、八四四、八〇二	四二、五五三、八六二

◇南滿洲鐵道輸送客貨

年度區分	乘車人員	貨物噸數	備考
昭和元年度	八、二四〇、〇八五 人	一六、五三五、一九四 噸	
同二年度	八、二六三、〇八九	一八、四二、七、七七五	
同三年度	九、七〇二、一二九	一九、三三三、五四四	

◇昭和三年度營業收支內譯

種別	收入	支出	損益
鐵道	一二八、六三九、〇九九 円	四四、二六八、〇六五 円	七四、二六一、〇四四 円
港灣	一〇、七六六、四六六	八、一三三、六〇一	二、四六一、八三五
鑛業	八七、一六七、七四九	三五、五五五、〇九七	二、六〇二、五五一
製鐵所	九、七四〇、五三一	八、三四四、九一〇	一、三五、六二一
地方	六、三三〇、八三一	一九、四三五、三〇七	一三、一九六、二四
總體費	—	一四、九七五、五七四	一四、九七五、五七四 損
收入利息	六、二四一、四五二	—	六、二四一、九三一
社債利息	—	一六、七〇六、二九七	一六、七〇六、二九七 損
支拂雜利益	—	五、〇〇四、六九六	五、〇〇四、六九六 損
雜損	一、六三、四三	二、六五〇、六〇五	一、〇九七、一八三 損
社債發行差額填補金	—	二、三三〇、八七八	二、三三〇、八七八 損

圖表對照統計

◇滿蒙鐵道一覽表

鐵道名	本社所在地	性質	粁數 本線	支線	計
南滿洲鐵道	大連	日本經營	九六一・〇九粁	一四五・七粁	一、一〇八・六粁
東支鐵道	哈爾賓	露支合辦	一、七三二・三	四二・三	一、七三六・六
北寧鐵道	天津	借款官辦	四二〇・八	四五四・八	八七五・六
四洮鐵道	四平街	借款官辦	四三〇・〇	一	四三七・〇
吉長鐵道	吉林	借款官辦	二七八・七	一	二七九・七
洮昂鐵道	洮南	借款官辦	二四・二	一	二四・二
金福鐵道	大連	日支合辦	一〇二・二	一	一〇二・二
瀋海鐵道	瀋陽	支那官有	二五一・〇	六・四	二五九・四
呼海鐵道	松浦	支那官商合辦	三二一・一	一	三二一・一
吉海鐵道	吉林	支那官商合辦	一八三・四	一	一八三・四
吉敦鐵道	―	借款官辦	三一〇・一	一	三一〇・一
齊克鐵道	齊々哈爾	支那官有	三三・五	一	三三・五
穆稜鐵道	寶清	露支合辦	六三・〇	一	六三・〇
鶴立崗鐵道	鶴立崗	個人經營	五六・〇	一	五六・〇
溪城鐵道	本溪湖	日支合辦	一五・〇	九	二四・〇
開拓鐵道	開原	支那商辦	六三・七	一	六三・七
天圖鐵道	龍井村	日支合辦	一〇一・〇	一〇・〇	二一・〇
齊昂鐵道	齊々哈爾	支那商辦	二九・〇		二九・〇

◇東支鐵道營業收支

年次	收入	支出	備考
一九二六年度	五三、七九七千留	二七、一八二千留	
一九二七年度	六〇、三七八	四〇、二八三	
一九二八年度	六四、七八八	四八、五二五	

但し一九二八年度の數字は推定額

◇東支鐵道輸送客貨

年次	旅客	貨物	備考
一九二六年度	三、六三一、九六四人	四、三三二、三七八噸	
一九二七年度	四、五三一、〇六四	四、八九八、一〇三	
一九二八年度	五、一四七、三四	五、四四七、四六九	

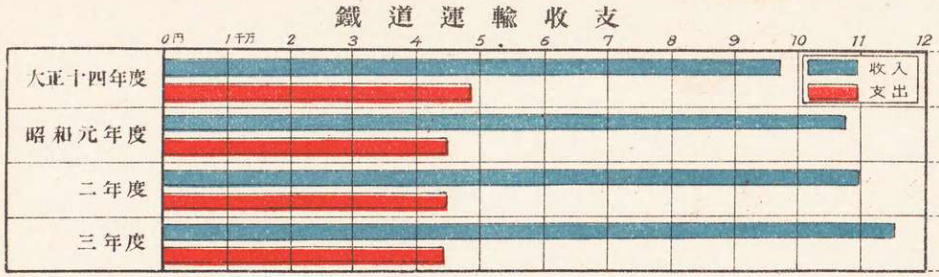
◇北寧鐵道輸送客貨

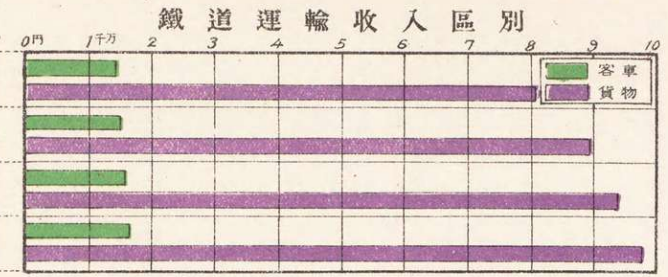
年次	旅客	貨物	備考
一九二五年度	六、三一七、三一七人	七、七〇、一四一噸	
一九二六年度	四、九二一、四九七	五、八〇、三三六	
一九二七年度	五、五一六、五九九	八、八三五、六九六	

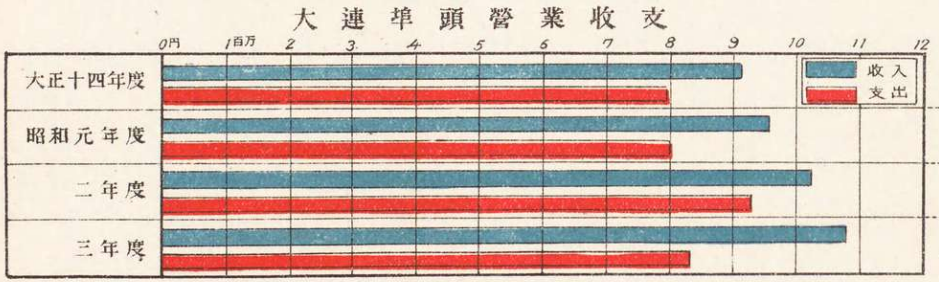
◇北寧鐵道營業收支

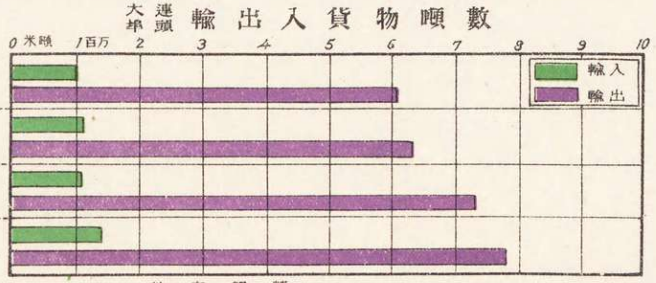
年次	收入	支出	備考
一九二五年度	二四、〇四七、六五六元	二三、二八、二四四元	
一九二六年度	二三、四八七、一六九	二三、五九八、九八〇	
一九二七年度	二四、七二〇、四六六	二五、九四一、二七七	

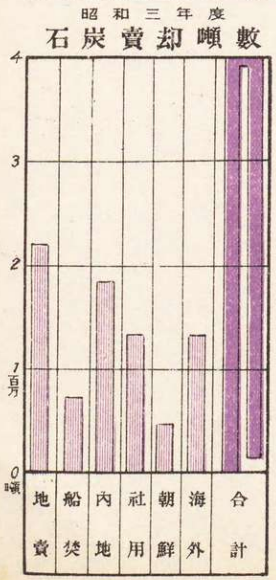
南滿洲鐵道株式會社事業

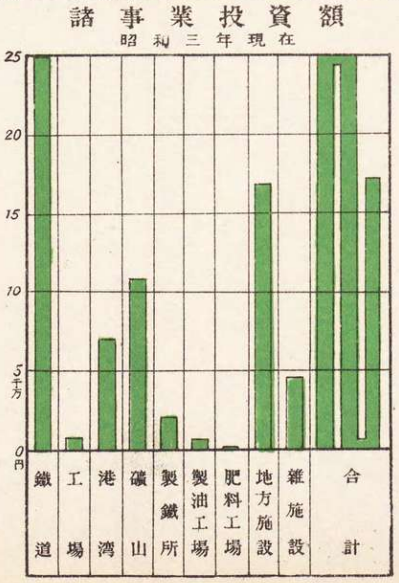


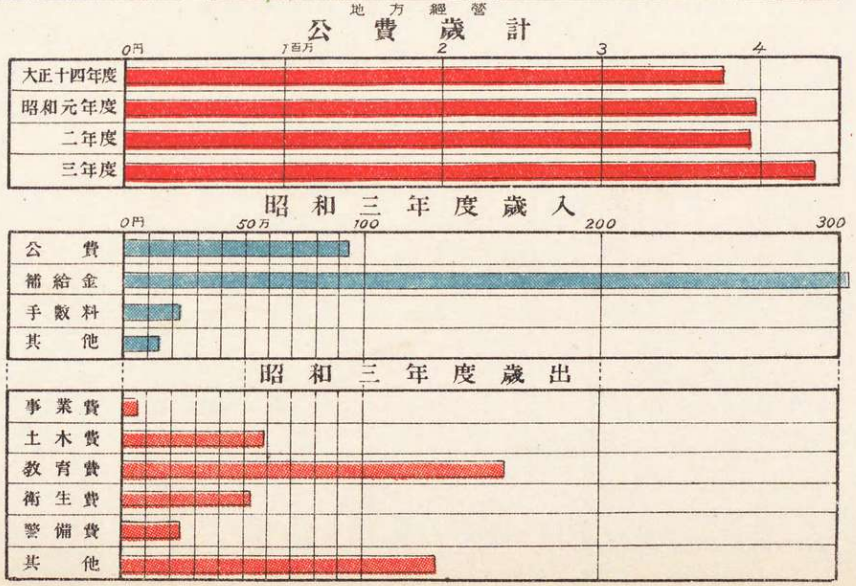






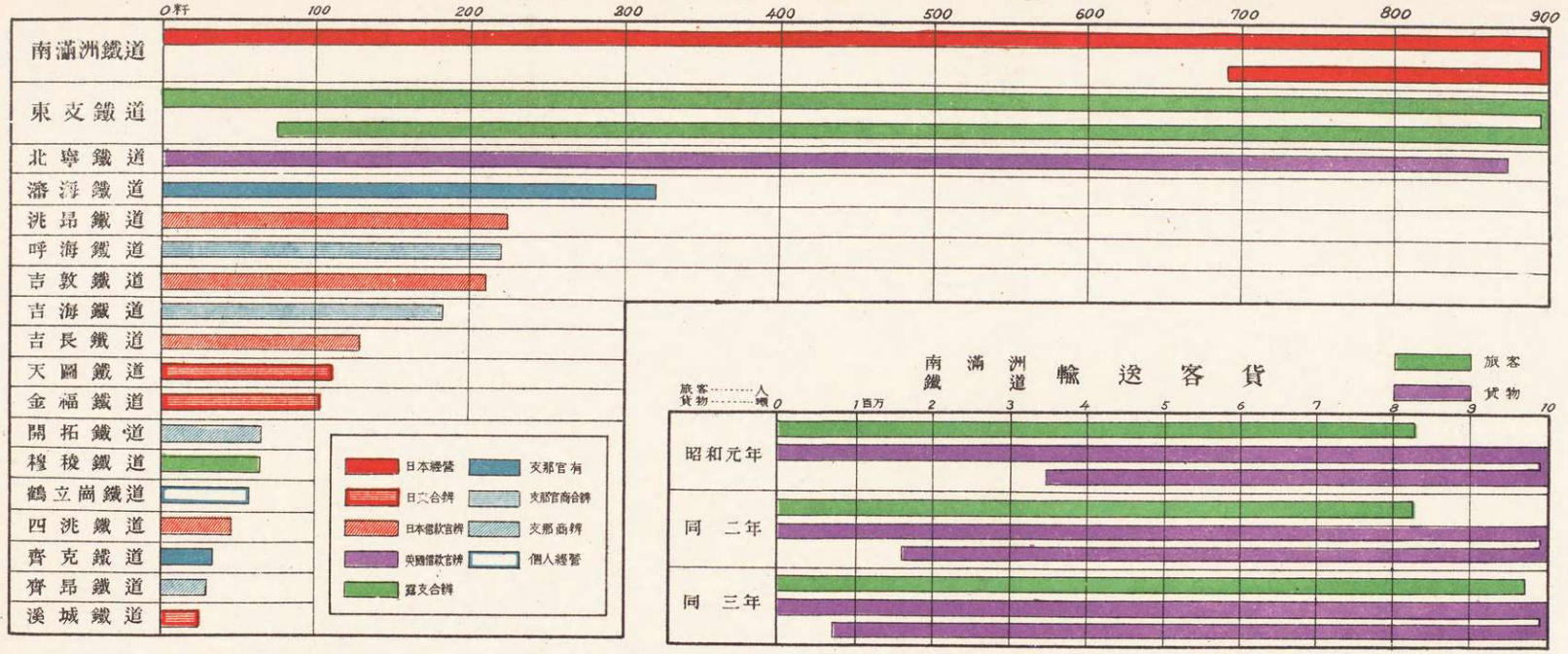


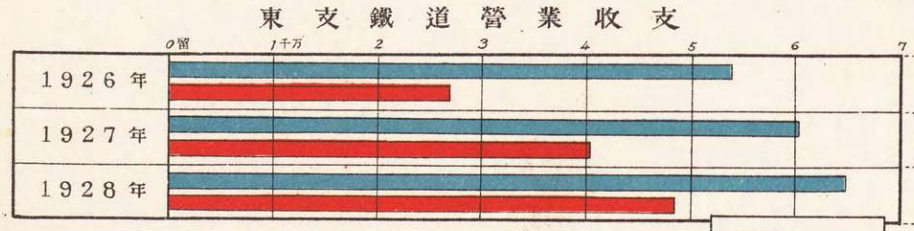


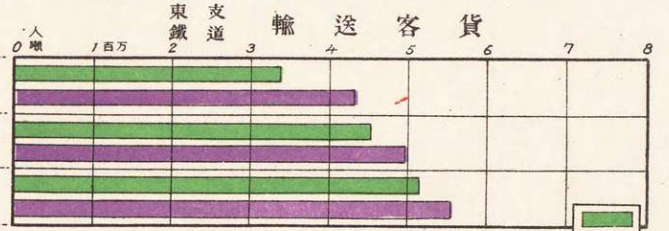


關東廳調查

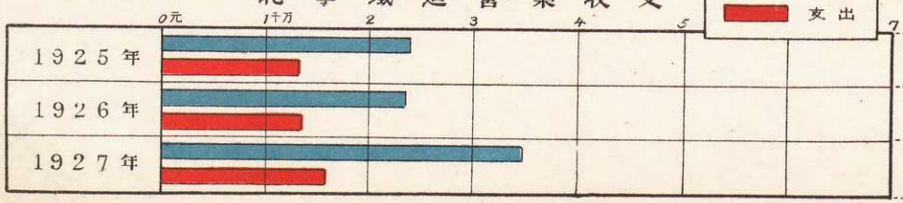
滿蒙鐵道一覽













關東廳調查

■貿　易

▲概　說

滿洲が外國貿易の爲めに開放せられたるは、一八六一年（我が文久元年）營口（現今の牛莊）を開港せしを濫觴とし、明治四十年七月（一九〇七年）大連に支那海關の設置せらるゝ迄は外國貿易は本港に依るの外なかりしなり、日清戰役後露國が遼東半島の租借權を得しより逐次東方經營策を實現せしめ、大連を自由港とし、哈爾賓、大連間の鐵道を竣成せしめし以來營口の繁盛は遂ひに大連に奪はるゝに至れり、日露戰役後我が國が露國に代つて關東州を租借するや、鋭意大連港の修築を計かりたる結果、滿洲の物資は翕然として大連に集中し漸次今日の殷盛を招けり、爾來安東線の改築、鴨綠江の架橋竣成と共に安東は急速の發達を來たせり、而して南滿洲鐵道附屬地は對內市場として物資の集散を司り、就中奉天、長春及び東支線の哈爾賓は將來益々發達すべき運命を有して居るのである。今左に大連、安東開港當初の一九〇七年以後滿洲に於ける開港場と年月を擧ぐれば左の如し。

安　東	一九〇七年三月
大東溝	一九〇七年一〇月
大　連	一九〇七年三月
滿洲里	一九〇八年二月
哈爾賓	一九〇九年七月
綏芬河	一九〇九年二月
三　姓	同
瑷　琿	同　年七月
琿　春	一九一〇年一月
龍井村	一九一〇年一月

滿洲各市場に於ける貿易品の集散狀況は凡て奉天を中心として浦鹽其の他の露領各地東支線及び南支線に接續する所謂北滿貿易との二大系統に類別し得るものとす、故に假に大連、營口、安東（大東溝を含む）の三海關を南滿洲とし、龍井村、琿春、綏芬河、滿洲里、瑷琿、三姓の七海關を北滿洲と看做し別表を作製せり、今滿洲貿易の支那總貿易に於ける關係を觀察せんか、昭和三年支那總貿易額は二十二億百餘萬海關兩、滿洲各關の對外貿易額は五億三千三百餘萬兩にして、支那總貿易額の二割四分は滿洲貿易の占むる所なり、而して北滿は一億一千五百餘萬兩、南滿は四億一千七百餘萬兩、大連は五億五百餘萬兩にして日本の對支貿易は七億九千九百餘萬兩、大連の對日本貿易は一億五千六百餘萬兩を算せり、今之れを對比するときは左の割合となる（支那海關統計に依る以下揭記の詳細統計と小差あり）

滿洲貿易は	支那總貿易の	二割四分
南滿貿易は	滿洲貿易の	七割二分
大連貿易は	滿洲貿易の	五割七分
大連貿易は	日本の對支貿易の	三割八分
大連對日本貿易は	大連總貿易の	五割一分

以上の數字を以て滿洲貿易と大連貿易との現狀並に地位を知るに足るべし。

▲南滿洲貿易

南滿三港中大連港貿易は其の不凍港たると、港灣設備並に埠頭の聯絡輸送の至便と相俟ちて他の二港に比し、絕對的優勢を示めして居るのである、現在に於ては一年七百萬噸の貨物と七千七百隻の汽船とを呑吐せり、其の設備は大體露國時代の設計を踏襲せられたるものにして滿鐵會社が大正十五年完成までに投じたる金額は五千百餘萬圓の巨額に達せり。現在の繫船護岸は延長一萬五千八百九十六尺、埠頭構內に九萬八千坪の倉庫及び上屋、約十一萬六千坪の野積場を有せり、而して左記汽船會社の定期航海の要路に當たれり。

大阪商船、　日本郵船、　近海郵船、　大連汽船、
阿波共同、　朝鮮郵船、　政記公司、　青筒汽船、

牛莊港（營口）は遼河を溯ること十四哩の左岸に位し、大連の開設（明治四十年七月）以前は南滿唯一の貿易港たりしが、埠頭は水深三十尺であるにも拘らず隨時下流に淺洲を生じ、吃水十七呎以上の船は高潮に乘ずるにあらざれば埠頭に進む能はず、河水減退すれば水運衰へ河水氾濫すれば河床に變形を來たせる等、到底永久的埠頭の建設は至難とせらる、加之滿洲物資の輸送期たる冬季は河水凍結して交通杜絕する等の缺點ある爲め、近年大連港に其の勢力を奪はれしも尙相當の貿易額を有し殊に對岸天津、山東半島及び上海其の他の沿岸貿易相當に行はれ居れり。安東港は對鮮鐵道貿易最も盛んにして、海路貿易は安東を距る三邦里下流の三道溝頭及び鴨綠江口の大東溝に於て行はれ、戎克によりて其の間の輸送をなすも其の額鐵道貿易に及ばざる事遠し、左に南滿三港貿易統計を揭ぐ（支那海關統計による）

▲北滿洲貿易

北滿洲貿易は主として哈爾賓、綏芬河、滿洲里に於て行はる、龍井村は對鮮貿易を主とする各地何れも貿易額は年々累加增進せり、就中哈爾賓は最も地の利に惠まれ將來益々繁盛を期せらる可し、哈爾賓の位地たるや松花江の右岸に位し東に浦鹽を控へ、東支鐵道本線より我が南滿鐵道に連絡せる南部線との分岐點にして水陸の交通頗る便なるのみならず、廣漠たる周圍の沃野は滿蒙の特產たる大豆、小麥、豆粕等の產出地にして其の集散年額四百萬噸を超ゆるの盛況である、左に大正十三年以來昭和三年に至る貿易額を圖表に示めせり、同地は人口三十五萬余、在留內地人約四千人に及べり。

滿洲里は哈爾賓より鐵路五七〇哩の地點にして露支國境地點で東支鐵道の終端驛である、ザバイカル鐵道は此の地より起りチタ、イルクーツクを經て歐路に連絡せり、此の地の貿易は「別表哈爾賓管內國別貿易西伯利輸出入額表」にも示めすが如く、同地の東端綏芬河を經由し主として浦鹽に出づる露西亞太平洋岸貿易にして從つて多額なる貿易高は浦鹽港による對外國貿易と云ふ可きである。其の他の諸國との貿易額は東支沿線に出入する小包郵便物を示す、尙小額の支那領黑龍江沿岸貿易あり。

龍井村は主として對鮮貿易にして琿春は對鮮、對東部西伯利並に小額の內國貿易を有す、北滿瑷琿は主として對西伯利貿易にして同じく小額の內國貿易あり左に北滿貿易を表示す（支那海關統計による）

◇過去五箇年間南三港總貿易高

		大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年
大連	輸出	一五二、六五五、五六六	一八三、六五〇、〇一五	二三七、六三二、六九一	二三〇、〇二〇、六〇五	二四二、四六四、六〇五
	輸入	一一〇、四二一、三七三	二三四、九〇〇、七四一	二四四、一五九、七三三	一八六、九四六、四四四	一八六、九四六、七五九
	計	二六三、九六六、八四三	三一三、五三三、三三三	三六一、七七〇、八〇八	三三五、六五五、九六六	四二四、一四二、一八四
牛莊	輸出	三五七、八四八、一二三	六六一、九七九、六七七	九二、四九九、九五一	八二、三一八、一五〇	四八、六四九、三五五
	輸入	六四、三五五、九八七	九二、七九九、六七七	四九、五三二、一六八	六四、三五二、四七	八六、八九九、三五五
	計	四二、三五七、二五一	四四、七〇〇、〇二一	四四、六六二、一四三	四二、六六二、一九一	五三、八一七、一四〇
安東	輸出	八六、七九、三五六	八六、七九、三五六	九四、七五五、八五五	九六、六七二、一六	九六、六四九、三五五
	輸入	二九九、七三二、六六	三三四、六七七、一〇九	二九九、五〇六、一六七	三三七、六三四、八三三	八四、三五五、九四四
	計	二三三、四四〇、六九二	三四四、二五八、七五五	二九八、一二四、一二九	三六八、〇五二、一八五	六二四、四二八、七三三
合計	輸出	一五九、七六五、〇五六	一八三、六五〇、〇一五	二三七、六三二、六九一	二三〇、〇二〇、六〇五	二四二、四六四、六〇五
	輸入	一一〇、四二一、三七三	二三四、九〇〇、七四一	二四四、一五九、七三三	一八六、九四六、四四四	一八六、九四六、七五九
	計	二六三、九六六、八四三	三一三、五三三、三三三	三六一、七七〇、八〇八	三三五、六五五、九六六	四二四、一四二、一八四

備考　外國品、支那品の總貿易高にして滿鐵貿易を含む、安東は鐵道及海路（大東溝を含む）合計なり、大連、牛莊戎克貿易を含む。

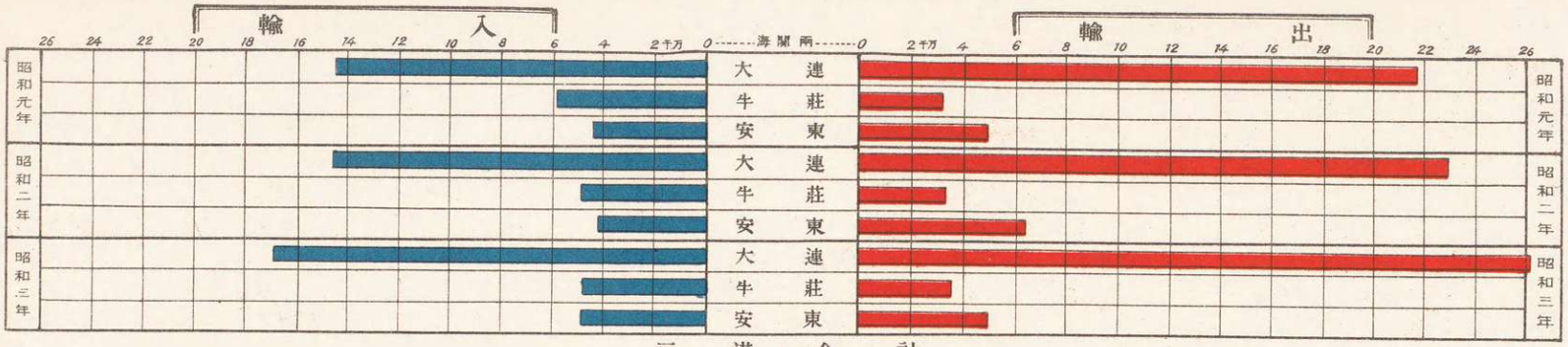
圖表對照統計

◇昭和三年中南滿三港對手國別貿易（汽船及戎克總貿易高による單位海關兩、金額順）

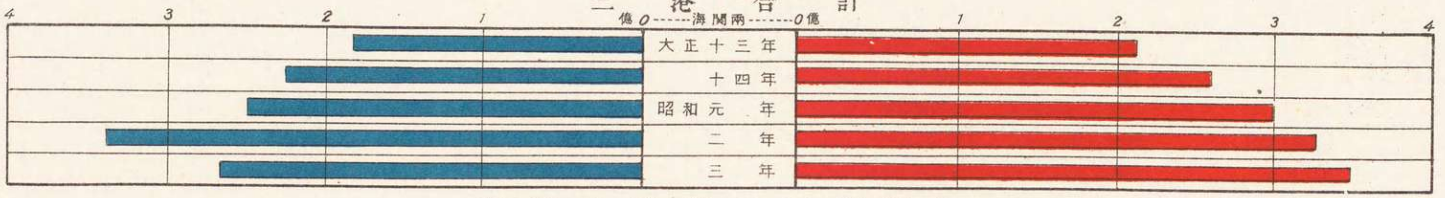
對手國		輸入額	輸出額	合計
日本		一〇九、一四四、八五六	一三三、四六八、七四八	二四三、二四八、七四四
朝鮮	船車	七、〇五二、六六四、二五五	二六、二四一、四八五	四六、二九五、一二一
	戎克	四六、二九五、七五五	一、八六四、二四五	四八、一六〇、〇〇〇
計		七、一八、七五五	一六、四四一、六五五	二四、二五三、二一一
日鮮合計		一二六、二九二、四一一	一五、三五五、九五五	一九八、四九九、九五一
支那沿岸戎克汽船		九、〇四八、七〇六	九一、六二三、九六九	一〇〇、六七二、六七五
計		八、一三〇、三五五	一六、〇四三、七〇六	一九四、八四三、三五八
北米合衆國		八、一六、〇三三	六、九三三、二四四	一六、四九九、三五三
英吉利		一九、六三七、三九五	一三、五九九、〇一〇	三三、五三七、四〇五
香港		六、六四八、二七一	六、六三五、〇三五	一三、二八七、二〇六
土耳古、波斯、埃及其他		一、九四八、七三三	一七、一二一、九六六	一九、〇七〇、六九九
和蘭		八、九六、九六一	一六、六五七、六六八	二五、六二四、六二九
獨逸		八、〇一五、七九七	一、七九八、六七七	九、八一四、四七四
蘭領印度		九、一〇、九二二	一六、九二、九二七	二六、九二三、八四九
伊太利		五三、一五五、一五六	五、六六、一五〇	五九、八二一、三〇六
白耳義		三、三二九、八六六	三三三、〇九五	三四、二五九、〇六一
佛蘭西		三、二五、三五八	一〇、九九九、〇九五	一四、二二四、四五三
英領印度		二、九七一、三五八	四、〇〇〇	二、九七五、三五八
諾威		二、六八四、九六六	八七、五一〇	二、七三二、四七六
波蘭		二、三五六、九七七	—	二、三五六、九七七
比律賓		七三、八七五	一五、一〇、三六	一、二五三、二三三
英領海峽殖民地		六三、三五〇	五九九、八五三	五四七、三三四
墨西哥及中米		一四一	四五、四九五	四五八、三四
加奈陀		三五五、四五五	六二、八三九	五五七、八七九
瑞典		一六三、〇五六	一四四、八〇一	一九四、八五七
濠洲		四四、〇五七	二六三、六三七	二六四、九九五
露西亞太平洋岸		三二九、四七七	二九、四六七	二五八、九四四
佛領印度		一九、八二三	二五、五六六	二三五、三六九
暹羅		八九、八一〇	一〇、八〇〇	一〇〇、〇九〇
瑞西		六六、八〇一	一〇七	五九、〇九〇
佛門		一一〇、一一二	—	一一〇、一一二
澳		三、五〇〇	二、三一〇	二、四一〇
ラトビヤ		—	六、七四	六、七四
西班牙		三七二	次	次
南亞米利加		七二	二、三一〇	二、四一〇
墺地利匈牙利		五六七	—	五六七
露西亞歐洲各港		五四八	—	五四八
葡萄牙		四五	—	四五
其他		—	—	—
合計		二六六、二六一、八二八	二四八、〇六六、八四	六一四、四二八、七三

備考　戎克は支那及朝鮮のみなり。

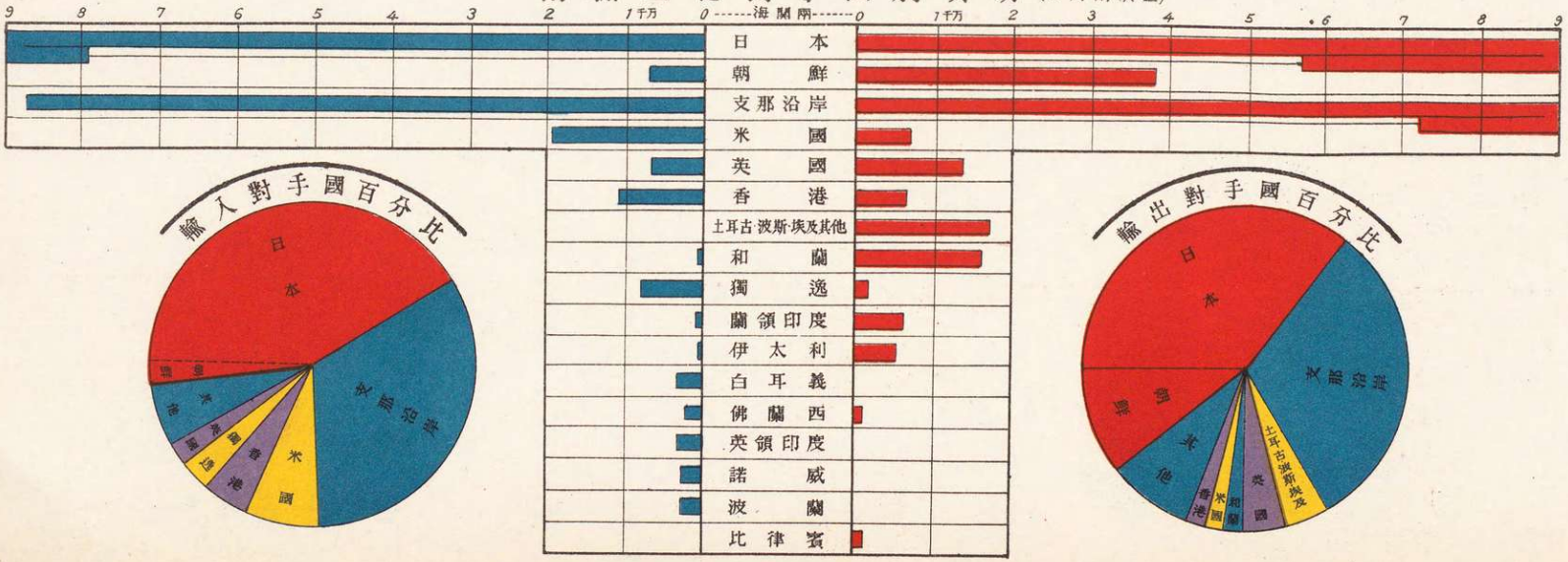
南滿三港總貿易高



三港合計



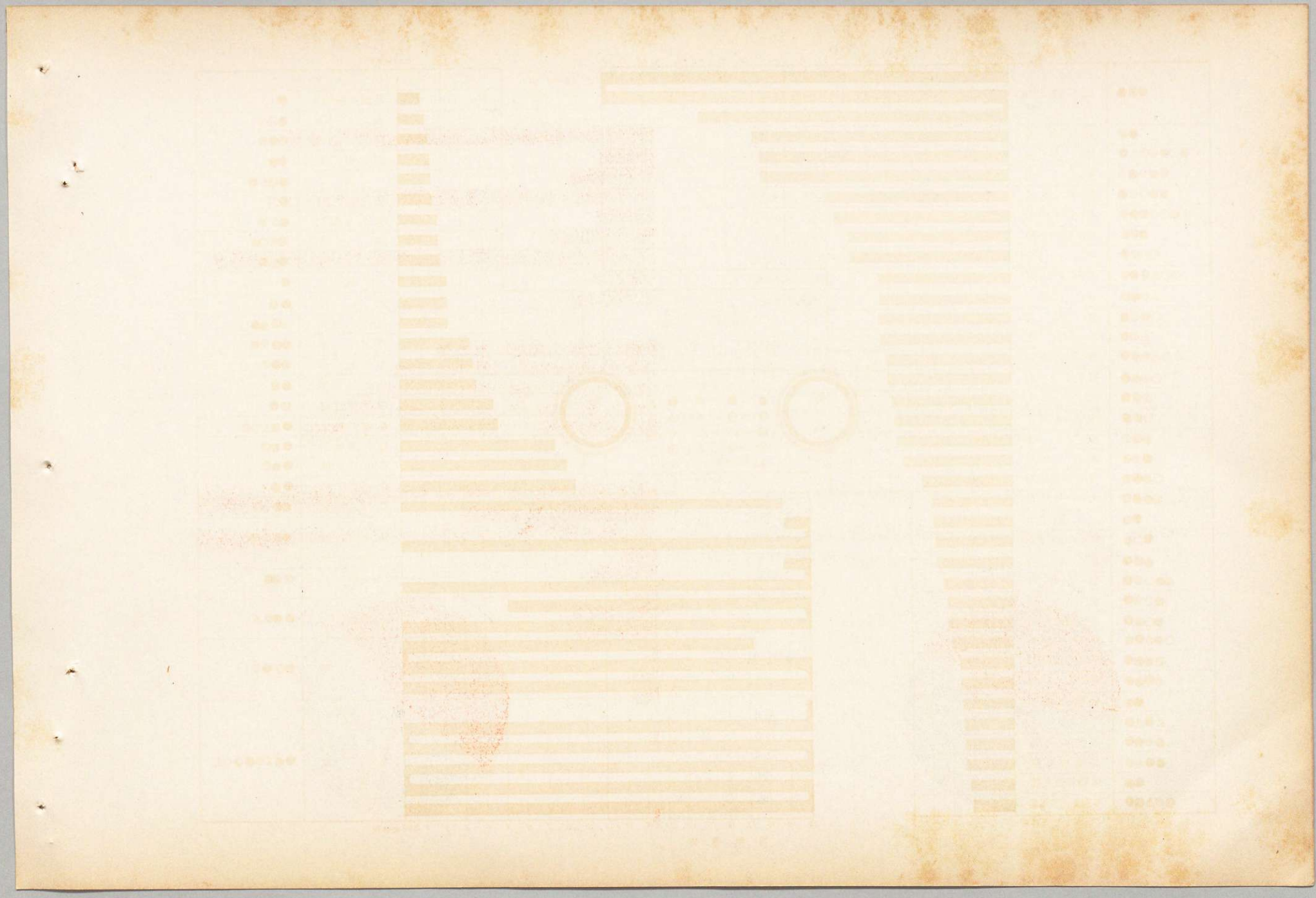
南滿三港對手國別貿易（百萬兩以上）

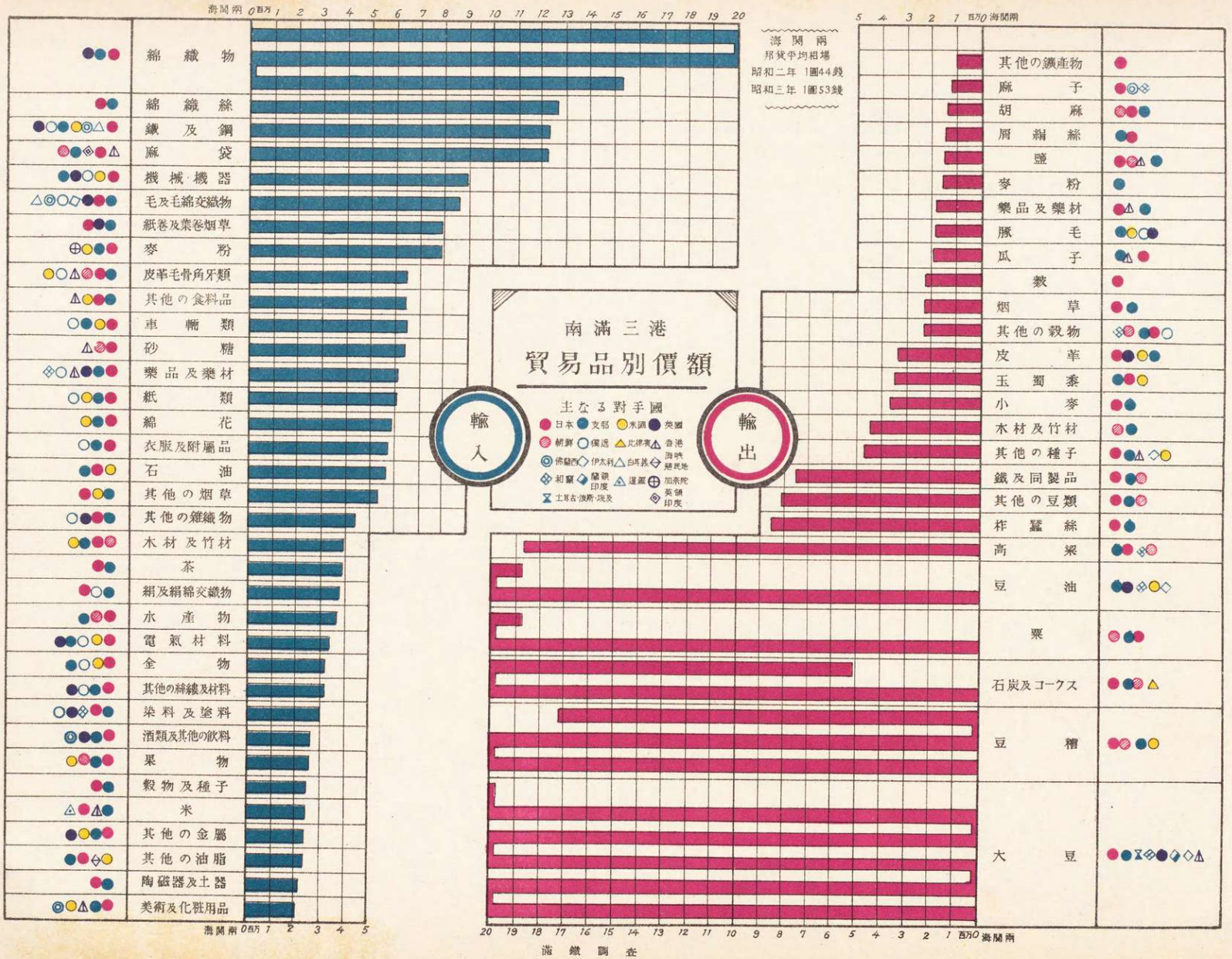


輸入對手國百分比

輸出對手國百分比

滿鐵調查




南滿三港
貿易品別價額
輸入
輸出
主なる對手國
日本 支那 米國 英國
朝鮮 獨逸 北洋 香港
佛蘭西 伊太利 白耳義 海峽殖民地
和蘭 蘭領印度 瑞西 加奈陀
土耳古 波斯 埃及 英領印度
海關兩 邦貨平均相場
昭和二年 1圓44錢
昭和三年 1圓53錢
綿織物
綿織絲
鐵及鋼
麻袋
機械機器
毛及毛綿交織物
紙卷及葉卷烟草
麥粉
皮革毛骨角牙類
其他の食料品
車輛類
砂糖
藥品及藥材
紙類
綿花
衣服及附屬品
石油
其他の烟草
其他の雜織物
木材及竹材
茶
絹及絹綿交織物
水產物
電氣材料
金物
其他の紡纖及材料
染料及塗料
酒類及其他の飲料
果物
穀物及種子
米
其他の金屬
其他の油脂
陶磁器及土器
美術及化粧用品
其他の鑛產物
麻子
胡麻
屑絹絲
豐
麥粉
藥品及藥材
豚毛
瓜子
薄荷
烟草
其他の穀物
皮革
玉蜀黍
小麥
木材及竹材
其他の種子
鐵及同製品
其他の豆類
柞蠶絲
高粱
豆油
粟
石炭及コークス
豆糟
大豆
海關兩 0 百万 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
海關兩 0 百万 1 2 3 4 5
海關兩 5 4 3 2 1 百万 0
海關兩 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 百万 0
滿鐵調查

圖表對照統計

◇昭和三年中南滿三港輸出入品大別價格（單位海關兩金額順）

輸入品目		
品名	輸入額	主なる仕出國
綿織物	五五、二六二、三二一	日本、支那沿岸、英國
綿絲	三、六五〇、六四一	支那沿岸、日本
鐵及鋼	三、五二四、七四四	日本、白耳義、佛蘭西、米國、支那沿岸、獨逸、英國
麻袋	三、二四〇、九六八	香港、日本、英領印度、支那沿岸、朝鮮
機械、機器	八、九六二、三三三	日本、米國、獨逸、英國、支那沿岸
毛及毛綿交織物	八、七九一、七二一	支那沿岸（外國品）、日本、英國、伊太利、獨逸、佛蘭西、白耳義
紙卷及葉卷煙草	八、〇五七、一三一	支那沿岸、英國、日本
麥粉	七、八三三、〇八三	日本、支那沿岸、米國、加奈陀
皮革毛骨角牙類	六、五四五、〇〇六	支那沿岸、日本、朝鮮、香港、獨逸、米國
其他の食料品	六、五六八、二四〇	支那沿岸、日本、米國、香港
車輛	六、四六七、四三五	日本、米國、支那沿岸（外國品）獨逸
類	六、三四四、五九八	日本、朝鮮、香港
砂糖	六、二七一、九四八	日本、支那沿岸、英國、香港、獨逸、和蘭
藥品及藥材	六、一〇〇、一六七	日本、支那沿岸、米國、獨逸
紙類	五、八五七、七六六	日本、支那沿岸、米國
棉花	五、七〇二、六〇〇	日本、支那沿岸、獨逸
衣服及附屬品	五、六九八、八四〇	米國、日本、支那沿岸（外國品）
石油	五、二九九、三三七	支那沿岸、米國、日本
其他の煙草	四、九三三、四四四	支那沿岸、日本、英國、獨逸
其他の雜織物	四、九五六、七六八	朝鮮、日本、支那、米國
木材及竹材	三、八五七、八八〇	支那、日本
茶	三、六九二、六四七	支那、獨逸、日本
絹及絹綿交織物	三、六二一、六四七	日本、朝鮮、支那
水產物	三、四八〇、八三二	日本、米國、獨逸、支那（外國品）英國
電氣材料	三、二四〇、四八〇	日本、米國、獨逸、支那
金	三、〇六五、六三一	日本、支那、獨逸、英國
其他の絲綿及材料（絹絲を含まず）	二、六六六、八六八	支那、日本、和蘭、英國、獨逸
染料及塗料	二、六九九、八〇八	日本、支那、英國、佛蘭西
酒類及其他の飲料	二、五三一、四三五	日本、支那、朝鮮、米國
果物	二、四六二、七五六	支那、日本
穀物及種子（米を含まず）	二、四五七、四〇六	支那、香港、日本、遼羅
米	二、四五一、三七二	日本、支那、米國、英國
其他の金屬	二、四三六、八六六	北米、海峽植民地、日本、支那
其他の油脂（機械油を除く）	二、三〇八、三〇三	支那、日本
陶磁器及土器	二、〇六八、二九二	日本、支那、香港、米國、佛蘭西
美術及化粧用品	二、〇六二、九七七	
其の他合計	二六六、三六一、八五九	

輸出品目		
品名	輸出額	主たる仕向國
大豆	一〇〇、一四五、〇六一	日本、支那、「土耳古、波斯、埃及、其他」和蘭、英國、蘭領印度、伊太利、香港
豆粕	五七、二〇〇、五九八	日本、朝鮮、支那、米國
石炭及コークス	二四、八七七、六六八	日本、支那、朝鮮、比律賓
粟	三、三五九、八九九	朝鮮、支那、日本
豆油	三、四〇一、二一七	支那、英國、和蘭、米國、伊太利
高粱	二、六九八、八五一	支那、日本、和蘭、朝鮮、米國
柞蠶絲	八、五五五、七一四	日本、支那
其他の豆類	八、二一六、九〇二	日本、支那、朝鮮
鐵及同製品	七、五五五、〇七七	日本、支那、朝鮮、香港
共他（蘇子を含まず）種子	四、七八八、二九四	日本、支那、香港、伊太利、米國
木材及竹材	四、四五九、七七七	朝鮮、支那
小麥	三、六四六、一〇〇	日本、支那
黍	三、五五六、八一九	支那、日本、米國
玉蜀	三、三六八、九九九	日本、英國、米國、支那
皮革	二、三三一、四三一	和蘭、朝鮮、支那、日本、獨逸
其他の穀物	二、三五四、三三三	日本、支那
煙草	二、二六〇、七六六	日本
麵	一、九六四、四三三	支那、香港、日本
瓜子	一、九六、四八	支那、米國、獨逸、英國
豚毛	一、七三〇、七八	日本、香港、支那
藥品及藥材		

圖表對照統計

品名	輸出額	輸出品目（前頁のつゞき）主たる仕向國
麥粉	一、五六一、五八〇	支那
鹽	一、五九一、四三三	日本、朝鮮、香港、支那
絹屑	一、三七一、五九七	支那、日本
胡麻子	一、三五六、三五五	朝鮮、日本、支那
其他の鑛産物	一、三四一、九三三	日本、佛關西、和蘭
其他	一、〇〇一、二〇七	日本
再輸出額（內外品）	一六、〇九九、七四〇	日本、支那、朝鮮、香港
計	一四、〇三一、七二一	支那、朝鮮、米國、日本、獨逸、英國
	三四八、〇九六、八四四	

備考　海關兩に對する邦貨の平均相場は昭和二年一圓四十四錢、昭和三年一圓五十三錢なり。

◇過去五箇年間北滿に於ける總貿易（單位海關兩）

	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年
哈爾賓管內 輸出	五一、八五二、二四五	四九、七六六、〇一三	五五、四七二、二四二	七五、八四二、七二一	八〇、三九、四〇〇
哈爾賓管內 輸入	一〇、一一〇、四五五	一三、四三三、六五一	一〇、九二一、八六八	一三、〇三七、八八	二六、六九八、〇六一
哈爾賓管內 計	六一、九五八、八〇〇	六三、一九九、一五五	八六、四九一、一〇〇	九六、八八〇、六九	一〇六、九九八、〇六一
龍井村 輸出	一、六六八、一四七	一、九〇八、九〇三	二、九三一、九六	四、三五二、八四六	三、〇三五、七九
龍井村 輸入	二、九四一、一四五	二、九二一、一〇五	四、六八一、九七九	五、〇八〇、六八六	五、〇九八、七〇
龍井村 計	四、六四〇、二四九	四、八四〇、〇八八	七、八四二、二三五	九、四三三、五三三	八、一二七、八九〇
琿春 輸出	四、七三〇、二四二	五四〇、四三二	大八一、一九四	一、〇八八、八四〇	一、六四三、〇六六
琿春 輸入	一、一五二、一九六	一、一五二、一四四	一、七四四、一〇一	一、三三四、四〇一	一、四三五、七六六
琿春 計	五、八八二、四三八	一、六九二、五五七	二、六二五、二九五	二、四二二、三三一	三、〇七八、七九六
瑷琿 輸出	一、六九五、一四五	一、三三一、一四〇	一、四九一、二四四	一、四〇六、四九八	九六七、七三三
瑷琿 輸入	四、〇五三、二四九	二、六二九、八〇五	二、六五二、〇五二	二、六五二、三五五	一、四三三、三五六
瑷琿 計	五、七六八、九三	三、九三一、〇四五	四、一三一、四六六	四、〇五八、八四九	二、四〇一、〇九六
計	五二、七三五、二四五	五三、九三七、二四五	七六、四九二、二四五	九三、四九二、二四五	一一二、九三一、七九七

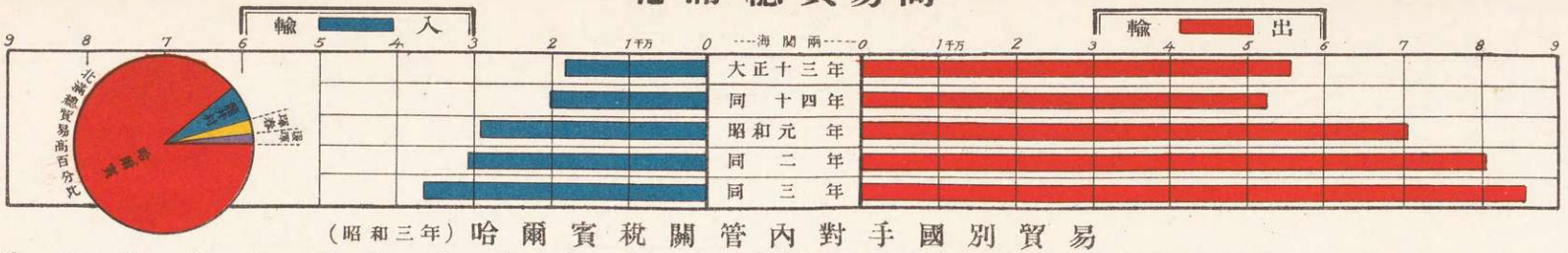
◇昭和三年哈爾賓稅關管內（東支線）對手國別貿易（單位海關兩）

國別	輸入	輸出	計
露西亞太平洋岸（綏芬河）	三一、六三二、二四九	七三一、三五二、九〇七	九五、三六、二五六
露領西伯利（滿洲里）	四、九四〇、九六九	一、七三二、〇一九	六、七三、九八
支那領黑龍江沿岸	七三一、〇三	二、四四六、二六〇	三、一四九、四三一
其他の諸國（小包郵便物）	一、六二二、一二一	一、九六、一四	三、五九八、三五五
計	六、六六八、六六一	八〇三九、四〇〇	一〇八、九九八、〇六一

◇昭和三年哈爾賓稅關管內主要輸出入品（單位海關兩金額順）

品名	輸入額	品名	輸出額
鐵及鋼材	四、七五五、六四一	大豆	四六、二三、二三八
麻袋	三、一九、四九二	豆粕	一六、〇五二、八七一
綿織物	二、八九九、六四	小麥	三、七二二、八五
砂糖	二、五一九、〇八	皮革	二、七〇二、七三
石炭コークス	二、四四三、七六六	豆油	二、六〇六、五二九
機械機器	一、四二九、三二九	粟	一、五五五、七四〇
石油	八九九、三七	毛	五九四、四〇〇
小包郵便物	八三、三	粉	五三六、八四四
水產物類	八三、四七一	麥	五二七、四六六
車輛	六三、一七九	高粱	四七、五〇七
衣服及附屬品	六一、〇五九	其他	三、三三〇、四九一
木材	五六六、五一九	の內外品再輸出	二、一一〇、三六六
皮革毛骨角牙類	五五五、七四四	計	八〇、三九、四〇〇
鐵道材料	三〇〇、〇六		
その他	五、九三、二七		
計	二八、六六八、六六一		

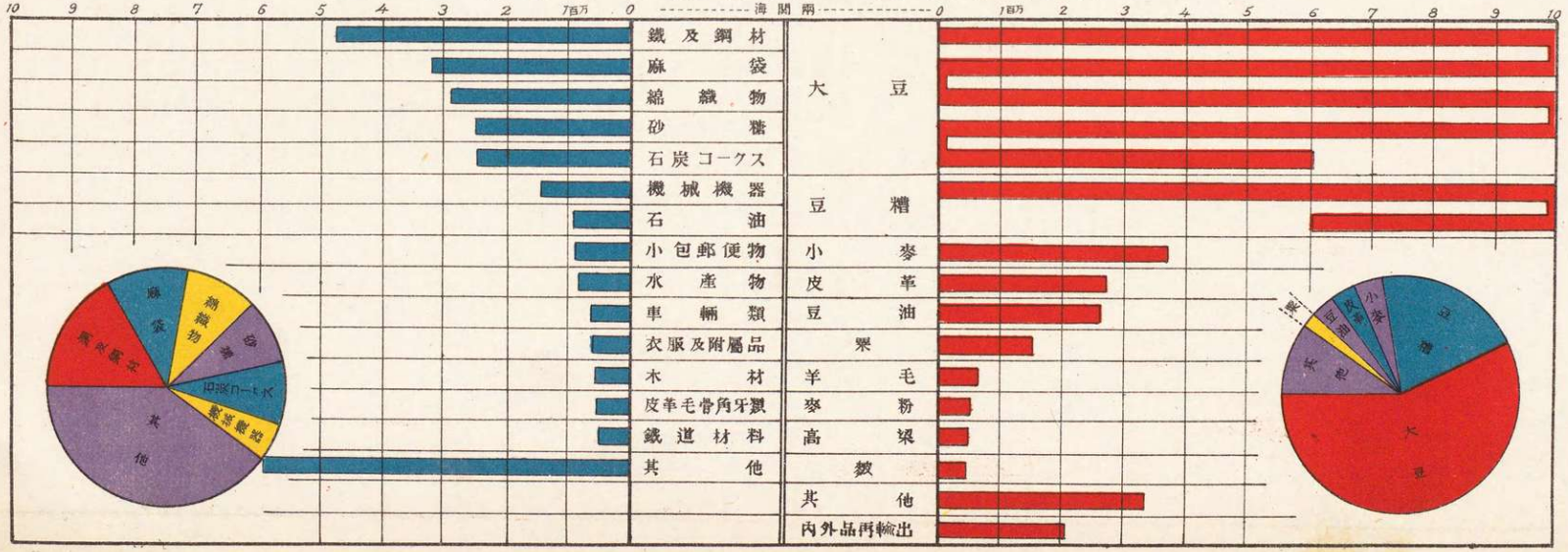
北滿總貿易高



哈爾賓稅關管內對手國別貿易（昭和三年）



哈爾賓稅關管內主要輸出入品（昭和三年）



滿鐵調查

樺太の部

（昭和五年度樺太廳調査）

■地誌

【位置及面積】樺太はオホツク海と日本海との間に介在して南北に延び、西は間宮海峡を隔てゝ沿海州に對し、南端西能登呂岬は北緯四十五度四十五分に位し峡間約二十三浬の宗谷海峡を隔てゝ北海道宗谷岬と相呼應す、北部は北緯五十度を以て露領樺太と境し延長百十六餘里幅員、八里乃至四十里、其の面積約二千三百三十九方里にして臺灣より稍大なり。

【地勢】樺太は地貌及び地質に由り之れを分ちて東部、中央、西部の三地帶に區別するを得べし。

▲西部山地帶　の脊骨を成せる山嶽は所謂西樺太山脈にして、概ね南北に延び平頂を有する特徴あり、本山脈中の最高峰（敷香嶽）は海抜四千餘尺に達す。

▲東部山地帶　東部山地帶は多來加灣頭より榮濱に至る間海中に沒するを以て南北に二分す。北部は東北山脈と稱し五十度附近に於て幅廣く海抜二千尺に達する所あり、西南は多來加灣の北方に於て絶え、東南は絡越に於て沒し、再起して一連の山丘は北知床半島と爲り遠く南方に突出す。

▲中央凹地帶　中央凹地帶は東側に於ける東部山地帶の中絶するや、幌内河口附近より榮濱附近迄の間は海面下に沒し爲めに南北二帶に分たる。北中央凹地帶の大部分は所謂ツンドラと稱する一種の低濕地にして厚層の泥炭上に厚き蘇苔類密生するのみにて、沼澤多き階段的平地なり。

■主要市街地

一、豐原町　（戸數）五、三七〇戸　（人口）二五、九八七人

樺太廳の所在地にして本島第一の平原たる鈴谷平野の中央に位し、面積四十二方里規模壯大にして市區整然たり。露領時代ウラジミロヲカと稱せし所にして今や政治、文化、交通の中心地たり。鐵道本線は此の地を過ぎて東海岸に至り東西樺太を連結すべき豐眞鐵道の逓ぜらるゝに及び島内交通の集軸を占む。

二、大泊町　（戸數）六、三八二戸　（人口）二九、九六八人

亞庭灣の北澳千歳灣の東岸に位する開港場にして内外の船舶輻輳す。泊榮線の起點にして内地連絡及び島内交通の要地を占め、交通頗る頻繁市況殷盛、本島物資の呑吐口にして貨客集散の中心を爲し經濟上本島第一の大都市なり。我が國領有初期曾時政治の中心を爲し、各官公署の此の地に置かるゝもの多かりしを以て、急速の發展をなし本島中最も多數の人口を抱擁せる都會なり。

三、落合町　（戸數）二、六三七戸　（人口）一三、二七〇人

東海岸榮濱の稍南に位し泊榮線沿線の要地にして、樺太鐵道株式會社の經營に係る鐵道は此の地點より起り東海岸に長驅して知取に至る、露領時代僅に十數戸の一寒村に過ぎざりしが、大正六年製紙工場の設置以來急激なる發展を爲し期年ならずして市街地を形成せり、加之附近に肥沃なる農耕適地と豊富なる炭田を擁するを以て、之れが開發と相俟つて將來益々有望の地ならんか。

四、知取町　（戸數）三、五四〇戸　（人口）一六、四二六人

東海岸の要地にして富士製紙工場の設置以來急激に發展し、加之、落合、知取間鐵道開通し、沿線の商工業の發達著しく一層町勢の發展を見るに至れり。

五、本斗町　（戸數）一、七四〇戸　（人口）九、〇九五人

本島唯一の不凍港にして内樺連絡の要地を占め、西海岸鐵道の起點なり。近海魚族の饒多なると林産物、鑛産物の豊富なる爲め急激に膨脹發展せり。

六、眞岡町　（戸數）三、〇六九戸　（人口）一四、五三一人

西海岸の要地を占むる開港場にして、曩きに東海岸の鐵道連絡開始以來益々商工業の活潑を來し、西海岸に於ける交通經濟の中心となり會社工場等多し。

■氣象

樺太の氣候を概説せば南西沿岸部は暖流に洗はるゝを以て、比較的温暖に北東海岸は寒流の影響を受け寒暑の差甚しく、是れを世界同緯度の地に比して氣温の低きは、主として亞細亞大陸の影響を受くるにあり、暖寒兩流の衝突する附近には濃霧を生じ、冬季氣温低下するに至りて止む。

【氣温】本島の氣温は本斗の四度六より敷香の氷點下零度二の間に在り、最寒なるは一月最暖なるは八月にして温度の急昇するは融雪期其の劇降するは降雪初期なり。各地を通じ冬期は氣温の差甚だ大なれども夏季は小なり、西海岸は暖流の影響を受け同緯度の東海岸に比し各季節を通じて高温なり。

【風】風向は各地一定せざるも、概括すれば四月乃至九月の六箇月は南風多く其の他の六箇月は北風なり。其の北風より南風に變ずるは各地とも、其の期を一にするも南風より北風に轉ずるは各地多少の遲速あり。

【降雨】降雨日數は南部に於て秋冬の交に多く、夏季に少きも北東部は之に反す。而して西海岸南部に於ては略々山陰地方に等しく、一年の總日數は約二百日に達し、東海岸北部は關東地方と大差なく百五十日に過ぎず。

【雪】雪は北部に早く概ね十月中下旬に現はるゝも、平地の初雪は概ね十月下旬なり、終雪は各地とも五月下旬の交にあるも、大正二年には南部一體六月中に於て降雪を見たり、斯の如き晩雪は又た稀有のことに屬す。



樺太廳

■戸口

昭和三年度末現在人口は總數二十五萬一千三百十三人にして内内地人二十四萬四千九百三十一人、朝鮮人四千百九十七人土人一千九百二十一人、外國人二百六十三人なり。之を領有當初明治三十九年末人口一萬二千三百六十一人に比すれば、二十三萬八千九百五十二人の增加にして實に約二〇倍に達す。

■土人と風俗

樺太に在住する所謂土人とはアイヌ、ニクブン、オロツク、サンダー及びキリリンの五種族を指稱せるものなり、彼等は從順なれども文化極めて低きを以て樺太廳に於ては、特殊制度を設け之れを保護し、農業及び漁業を奬勵して生活の安定を計らしめ、同時に文明の恩澤に浴せしむ可く誘掖に努めつゝあり。

夏期は河海に於て漁撈に從事し、冬期に狩獵又は勞働によりて生活の資料を得つゝありしも、半農半漁の方針に依り指導したる結果、漸次農耕の方法をも取得せり、從つて生活狀態も漸次改善せられ、到底昔日の比にあらず、然れども一般に貯蓄の念乏しく一朝不漁、不作に遇はんか直ちに窮境に陷るの弊あるも、又た一面隣保相扶け同病憐むの情に厚きは彼等の美風と賞するに足る。

▲衣服　多く草木の度を以て製したるアツシを用ゆ、體服には襟、裾、袖、脊等に刺繍を施せる者あり、婦人用のものは海豹皮及び魚類の皮にて製し鳥毛にて裝飾せり。其の他犬の皮を以て外套、股引、手袋等の防寒具等を作る。

▲裝飾　身體の裝飾としては男女共に耳環を付け、婦人は一般に上唇に黥をなす。其の他練玉又は青銅貨等を紐に通して頸より胸に懸け、或は眞鍮の輪若くは穴明錢を紐に通して帶と爲し、又た女子は頭髪の亂れを防ぐ爲め、綿布を以て高さ三寸位の環を作り色絲を以て刺繍をなし冠となす者あり。

圖表對照統計

◇人口累年比較表

年次	戸數	人口 男	人口 女	人口 計
明治四十三年	七、六四	一七、九五	一三、三四	三一、二〇一七
同四十四年	八、八六	二〇、七四	一五、九四	三六、七二五
大正元年	九、八一七	二三、九〇五	一八、三五	四二、二五八
同二年	一〇、七三七	二四、七五	一九、七三	四四、三五六
同三年	一三、〇一七	三二、三一四	二四、八三	五七、一三〇六
同四年	一三、八四	三四、一五四	二六、三五〇六	六〇、六五〇
同五年	一四、六三四	三七、一四〇	二九、四〇	六六、二八〇
同六年	一六、〇九	四一、八七九	三三、一〇〇	七四、九七九
同七年	一六、五八	四五、二五八	三四、三八〇	七九、七五八
同八年	一八、〇七三	四七、四三八	三五、三四	八三、一八二
同九年	一九、二五〇	五一、三四	三九、八三四	九一、一三六
同十年	二一、一三一	五五、一三六	四四、九八六	一〇〇、二二
同十一年	二三、四五四	六〇、三四	四九、八六八	一〇二、一五二
同十二年	二七、六三	七一、八一	五七、一八一	一二九、一九二
同十三年	二九、九六	七六、四〇三	六四、一〇三	一四〇、五〇六
同十四年	三七、四〇三	九一、三四五	七四、三四七	一六五、六九二
同昭和元年	四一、三四五	一〇二、三四	八四、三四	一八七、六八
同二年	四四、三三	一〇七、四〇	九〇、三四	一九八、七四
同三年	四八、五六〇	一一七、三九	九八、三四	二一六、一五三
同四年	五一、三九	一二五、五〇三	一〇三、四五六	二二九、四五九

◇支廳別戸數人口表

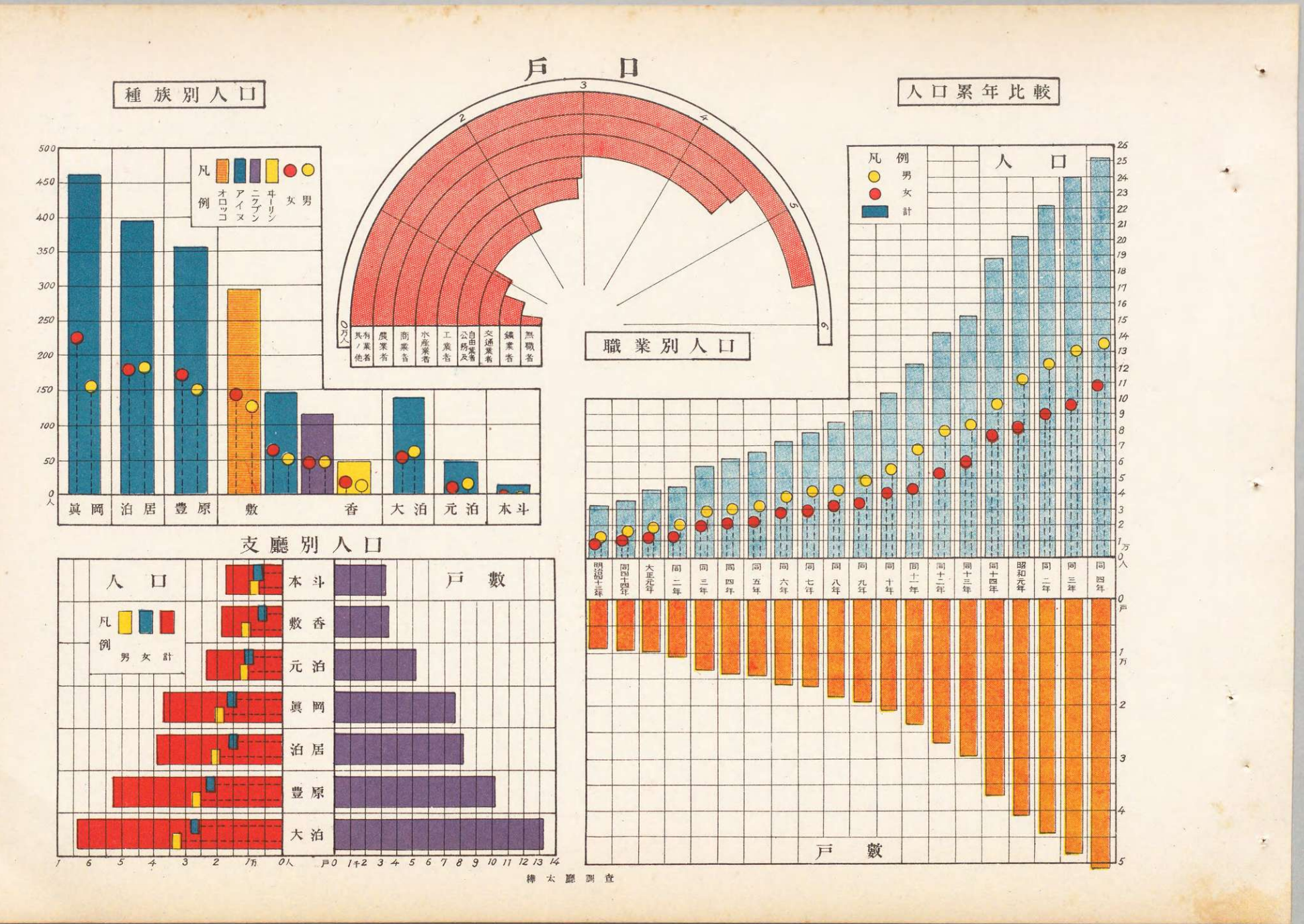
支廳別	戸數	人口 男	人口 女	人口 計	一方粁ニ付人口
豊原	一〇、八八	三八、七五一	三三、九三四	七二、六八五	一・〇九
大泊	一三、一五	四三、四八七	三九、七九	八三、二七六	一・三七
本斗	三、三五	九、三六三	七、七三七	一七、〇九九	〇・八五
眞岡	七、四三三	二〇、一三〇	一六、三四	三六、四七四	一・九四
泊居	八、二一	三二、九三九	二六、三四	五九、二八三	七・四三
元泊	五、〇三五	一二、一二六	一〇、三四	二二、四七〇	一・四九
敷香	五一、二九	一三五、五〇三	一〇七、四〇	二四三、九四三	六・九六

◇職業別人口表

種別	本業者	從屬者	計
農業	三、四八三	四六、六四九	四九、六三二
水產業	一〇、八三〇	二四、二六六	三四、一九六
鑛業	三、三八〇	一八、八六五	二二、二四五
工業	二一、三五九〇	三、九二三	二五、七二三
商業	一九、三八三	六、一九三	二六、一二
交通業	三、六五三	一七、三五一	二一、二〇四
公務及自由業	七、六一〇	六、三五一五	一三、九二五
其他の有業者	三、六五三	一六、三二九	一九、九八二
無職業	八四	三、四一三	三、四九七
計	一〇一、七四	一四九、三五九	二五一、三三

◇土人の戸數及人口表

管轄支廳	種別	戸口	人口 男	人口 女	人口 計
豊原	アイヌ	九四	一五三	一九一	三三四
	ニクブン				
	オロッコ				
	キーリン				
	計	九四	一五三	一九一	三三四
大泊	アイヌ	二七	六五	六四	一二九
	ニクブン				
	オロッコ				
	キーリン				
	計	二七	六五	六四	一二九
本斗	アイヌ	四	三	四	七
	ニクブン				
	オロッコ				
	キーリン				
	計	四	三	四	七
眞岡	アイヌ	一〇七	三三	三三七	七〇
	ニクブン				
	オロッコ				
	キーリン				
	計	一〇七	三三	三三七	七〇
泊居	アイヌ	九七	一九六	一九五	三九一
	ニクブン				
	オロッコ				
	キーリン				
	計	九七	一九六	一九五	三九一
元泊	アイヌ	一一	三五	三三	六八
	ニクブン				
	オロッコ				
	キーリン				
	計	一一	三五	三三	六八
敷香	アイヌ	三七一	一四六	一四〇	二八六
	ニクブン	三	三	三	六
	オロッコ				
	キーリン				
	計	三七四	一四九	一四三	二九二
計	アイヌ	一三五四	三五九	三五五	七一四
	ニクブン	三	三	三	六
	オロッコ				
	キーリン				
	計	一三五七	三六二	三五八	七二〇


戸口
種族別人口
凡例
男
女
オロッコ
アイヌ
ニクブン
キーリン
0万人
有業者其ノ他
農業者
商業者
水産業者
工業者
自由業者公務及
交通業者
鑛業者
無職者
職業別人口
人口累年比較
凡例
男
女
計
人口
戸數
明治四十三年
同四十四年
大正元年
同二年
同三年
同四年
同五年
同六年
同七年
同八年
同九年
同十年
同十一年
同十二年
同十三年
同十四年
昭和元年
同二年
同三年
同四年
支廳別人口
人口
戸數
凡例
男
女
計
本斗
敷香
元泊
眞岡
泊居
豊原
大泊
樺太廳調査



財政及金融

【財政】 樺太の歳計は領有の當所に於ては臨時軍事費特別會計に屬せしが明治四十年三月軍政を撤去し樺太廳官制實施と共に樺太廳特別會計を設置し、租稅其の他の收入及び一般會計よりの補充金を以て諸般の歳出に充當することゝなれり。閉廳以來の累年歳入出を別表に示す。

【歳入】 樺太に於ける租稅制度は明治四十年三月の制定に係り、當時戸數割營業稅及び雜種稅の三目に分類せられしが爾來數次の改廢又は增設に依り今日に至れり。今現行種目を示せば市街宅地稅、所得稅、營業收益稅、酒造稅出港稅、消費稅、鑛業稅及び漁業稅等なり。

【市街地宅地稅】 本稅は大正十年四月の制定に係り特に指定したる市街宅地の拂下價格を以て地價と定め、課率は之れを二級に分ち一級は地價千分の五、二級は地價千分の三を賦課す。實施初年度歳入は**六千八百三十三圓**なりしが昭和五年度豫算額は**九千二百二十圓**を示せり。

【所得稅】 大正八年度始めて法人所得(第一種)のみに對し賦課し、大正十一年度より新に第二種及び第三種をも賦課することに改正し猶ほ大正十三年、十四年及び昭和二年三月一部分の改正を爲し以て今日に至れり、本稅實施初年度歳入は**十萬五千二百七十五圓**にして、昭和五年度は**六十三萬八千七百二十九圓**を計上せられたり。

【營業收益稅】 本稅實施前は營業稅として明治四十年實施以來數回の改廢ありしも昭和三年度より之れを廢止し新に本稅の實施を見たり。個人の課稅營業種類は物品販賣業、銀行業、無盡業、金錢貸付業、物品貸付業、製造業、運送業、倉庫業、請負業、印刷業、出版業、寫眞業、席貸業、旅人宿業、料理店業、代理業、周旋業、仲立業、問屋業の十九種とし其の課率は法人個人共內地と同一なり。營業稅は施行初年度即ち明治四十年度歳入は貳萬五千圓なりしも、商工業の發展に伴ひ逐年增加し、昭和五年度收入豫算高は**四十三萬七千八百五十二圓**を計上せられたり。

【酒造業】 本稅は創始時代營業稅中に加へられ等級課稅なりしが、大正五年度より造石課稅に改められ大正十年四月より獨立稅目となれるものなり。課稅標準の造石高に改められたる大正五年度の造石高は一千五十一石にして、逐年增加し本稅の獨立したる大正十年度酒造石高は六千六百二十石となり、昭和五年度(昭和四年度酒造分)の見込石數四萬一千百六十四石此の豫算稅額は**九十一萬三千六百九十一圓**を計上せられたり。

【出港稅】 本稅は樺太に於て製造したる酒類を帝國內の他の地方へ移出するとき課す稅率にして大正元年八月制定後、大正四年度に始めて百三圓の歳入あり、爾來逐年增加の趨勢なりしも昭和四年度は幾分減收を來たし**四百六十圓**となれり、昭和五年度見込石數約八石、豫算稅額は**千四百六十三圓**を示すに至れり。

【消費稅】 砂糖消費稅は明治四十二年度より、織物消費稅は明治四十三年度より內地當該稅法を施行せり。然れども樺太には製造者なく偶々北樺太方面より移入取引ありたる際課稅するの狀態にして、砂糖消費稅は大正十三年度初めて三十六圓、織物消費稅は大正十一年度十七圓の歳入ありしに過ぎず。昭和五年度豫算額は五十圓を計上せられたり。

【鑛業稅】 本稅は創始當時は雜種稅中に加へられて課稅したるも、大正十一年四月鑛業法及び砂鑛區稅法の全部を施行し內地同樣賦課することゝなれり。之れが實施當初たる大正十一年度の歳入は**十二萬四千五百九十圓**なりしが、逐次減少したるも昭和五年度豫算額は**十二萬八千五百八圓**を增加計上せられたり。

【漁業稅】 本稅は從來租稅外收入として徵收せるものにして明治四十二年度の如きは歳入額實に七十八万圓を算したりしが、漁獲高の漸減と一面大正十二年度より租稅に改められたる關係上其の實施初年たる大正十二年度歳入額は激減して**十九萬九千二十圓**となり其の後數次稅法の改正ありて昭和四年度豫算稅額十九萬千百六十三圓を計上せられたり。

金融

樺太に於ける金融機關の大要を略述すれば左の如し。

【銀行】 明治三十八年本島が我が國の版圖に歸するや、北海道拓殖銀行は政府の命に依り直に大泊に派出所を設け、中央金庫事務の取扱を爲す傍ら預金及び爲替業務を行ふことゝなれり。併かし當時一般銀行業務は同行定款の許さゞる處なるを以て明治四十四年拓殖銀行法を改正して樺太をも同行の一般營業區域に加ふる事となれり。爾來同行支店出張所は一般普通銀行業務、不動產抵當貸付、地方低利資金取扱、農業者連帶無擔保貸付、公共團体無擔保貸付、漁業權抵當貸付、漁業者連帶無擔保貸付及び工場財團抵當貸付等を取扱ひ、其の業務極めて廣汎にして、樺太の開發と時勢の進運に順應し樺太の資金需要年々增加の趨勢に在り、尙同行に於ては大正八年に泊居に大正十年に野田に又た大正十三年には本斗に派出所を設置せり。而して樺太支店は大正三年四月之れを豊原支店と改稱し、大泊出張所は大正七年眞岡出張所は大正八年野田出張所は大正十三年何れも支店に昇格せり。昭和二年落合知取間鐵道開通と共に兩町とも非常なる發展をなし、延いて資金の需供は頻繁を加へ同行はこの趨勢に鑑み昭和三年九月兩町に出張所を設置せられたり。

樺太に於ける產業資金の供給を圓滑ならしむるの目的を以て大正三年五月設立せられたる樺太金融株式會社は、更に大正五年十月大泊に資本金五十萬圓を以て樺太銀行を創立し銀行業を開始せり。然るに大正八年三月資本金を二百萬圓に增資すると同時に眞岡に支店を設置せり。

右の外樺太に於ける唯一の貯蓄銀行として大正十一年四月一日支店を豊原に設置したる株式會社北門貯蓄銀行は鋭意島民貯蓄心の向上に努め其の業績漸次良好に向ひつゝあり。今參考迄に昭和四年六月末現在の各種銀行貸付及び預金額を圖表に示す。

【產業組合】 大正四年產業組合法施行以來各地に設立せらるゝもの逐年其の數を增加し成績見るべきものあり。今其の組合數を見るに、施行當時許可せるものは二組合なりしが、昭和三年末に於ては三十七組合となれり。現在に於ける運用資金は總額**百七十二萬三百三十四圓**に達するに至れり。

【質屋業及無盡講會】 金融機關の施設備はらざる本島に於ては、質屋は重要なる金融機關にして各地何れも相當利用せられつゝあり。質屋營業に付ては明治四十年質屋取締法施行せられ、昭和四年六月末に於ける營業者數百六十人總運轉資金額百三十六萬八千三百十八圓、昭和四年上期中に於ける總貸出金百五十七萬七千五百三十二圓を算出する至れり。

煙草專賣

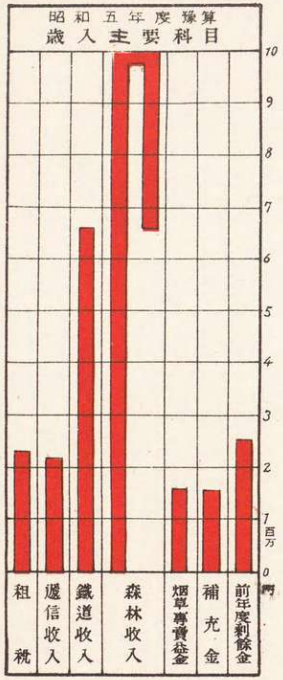
樺太に煙草專賣法を施行せられたるは明治四十二年六月一日にして、其の以前は大泊に有力なる煙草卸商人ありて豊原、眞岡に支店を設け、生產地より直接煙草を移入し、小賣商人を經て全島各地に煙草を供給し來りしなり。然るに專賣法施行と同時に函館專賣支局出張所は豊原に、同專賣官吏派出所を大泊に新設し、專ら煙草供給に關する事務を取扱ひ尙豊原、大泊、眞岡に煙草元賣捌人を置き、各地の煙草小賣人は其德煙草小賣人に指定せられたり。爾來土地の開發に伴ひ漸次增設せられて現在に於ては豊原、大泊、眞岡、泊居元泊、敷香の六箇所に專賣官署(出張所若くは派出所)及び元賣捌營業所を置き略ぼ煙草供給機關の完成を見るに至れり。

圖表對照統計

◇樺太廳特別會計歲入及歲出

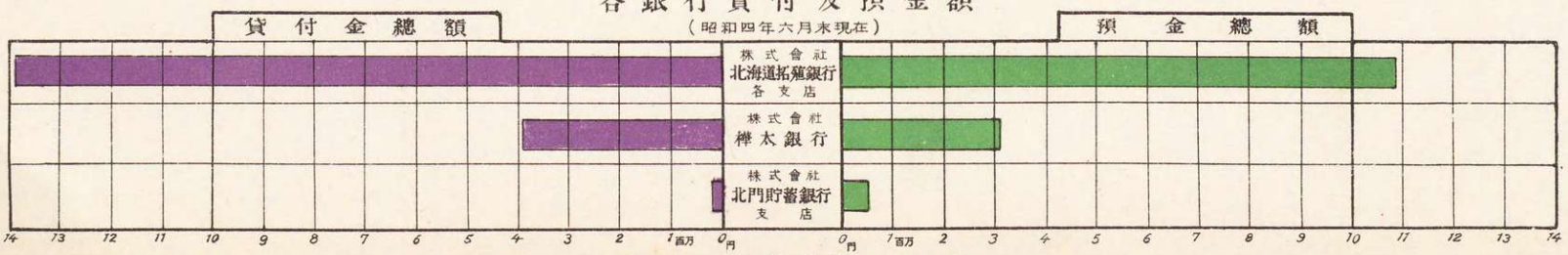
年度	歲入 收入	歲入 補充金	歲入 繰入金	歲入 公債及借入金	歲入 計	歲出
	円	円	円	円	円	円
明治四十年	一、〇三七、〇四六	六二九、四〇六	—	—	一、六六六、四五三	一、二一一、九八七
同四十一年	七六三、五四三	六二九、四〇六	四五四、四六四	—	一、八四七、四一三	一、五六九、八五七
同四十二年	一、〇六一、四三四	五〇〇、〇〇〇	二七七、九六六	—	一、八三九、八〇〇	一、三七八、八五七
同四十三年	一、三三九、七〇五	五四四、七一四	二六〇、五三四	—	二、〇三四、九四三	一、八九七、四六五
同四十四年	一、五六九、〇四五	五九〇、〇六五七	一三七、四九	—	二、〇七七、一八	一、九〇七、三三一
大正元年	一、五三四、九九一	五九一、八一九	一六九、九四九	—	二、二九六、七九	二、〇七七、六七〇
同二年	二、〇六二、五七四	三八八、二九一	二一九、〇八三	—	二、六七〇、九四七	二、二七八、〇四六
同三年	一、五四八、七四八	三三三、五七五	三九三、九〇一	—	二、二六五、三三四	二、〇三四、九四三
同四年	一、四九五、〇四六	三三三、五七五	一九一、一九一	—	三、〇〇九、八一三	一、九〇七、三三一
同五年	二、〇五八、五六六	二九三、五七五	三三九、三五五	—	二、六八一、四〇六	一、八五一、八四三
同六年	二、六一、九三五	三三三、五七五	八三九、五六三	—	三、七三、四五五	二、〇三四、九四三
同七年	二、九三六、七三五	—	一、六三、九〇七	一、〇九一、〇〇〇	五、六二一、七三五	二、九一五、七四一
同八年	三、七〇、六九八	三〇〇、〇〇〇	二、七二、一一〇	一、一三、五〇〇	七、七四四、三六八	七、九四一、八六五
同九年	五、三二、九四四	一、四三三、〇〇〇	三、〇一三、四四四	三、三八一、二〇九	一二、七五五、二八七	八、二八五、四八四
同十年	七、〇五七、一〇三	一、四三三、〇〇〇	三、一〇九、八〇七	四、一三五、二九〇	一五、七四三、二〇〇	一三、〇六五、五八一
同十一年	八、三六、〇一二	一、一〇〇、〇〇〇	三、五〇七、九三三	七、六〇七、九三〇	二〇、八〇一、五五五	一八、〇四七、五八八
同十二年	一二、四三六、八六一	一、七六、〇〇〇	二、七五三、九六九	四、四七五、四三六	二一、四五三、二六六	一九、二八四、〇二六
同十三年	一五、七三、〇六六	一、〇〇〇、〇〇〇	二、一六八、二五五	四、六、二一八	一九、三五六、五二九	一九、三七九、〇六五
同十四年	一六、〇〇〇、三〇五	九〇〇、〇〇〇	七八、四五四	一、七〇〇、〇〇〇	一八、六六八、七九九	一八、〇九九、九四五
昭和元年	一八、三五九、三〇八	一、五七、三四五	六一八、八一四	一、七八六、五六三	三、三三、〇二七	一七、七二四、〇九九
同二年	一八、四一四、〇三七	二、〇三九、六五五	四、五八七、九二七	一、八四五、〇五三	二六、八七、八三六	一九、九八二、〇四〇
同三年	二一、八五三、八五五	二、〇三九、六五五	六、八四九、九七六	一、八五七、九三四	三一、六四六、五五五	二五、六九一、二七〇
同四年（増加）	二、五五、九〇一、四三五	三、〇〇〇、〇〇〇	二、四九、九〇〇	一、七〇五、五五〇	三三、〇六六、九三五	三五、〇六五、五五五
同五年（増加）	二六、五四三、七七七	一、六〇〇、〇〇〇	二、五三一、七七六	—	三〇、六五五、五五五	三〇、六五五、五五五

樺太廳特別會計



各銀行貸付及預金額

（昭和四年六月末現在）



樺太廳調査

農業

樺太は我國唯一の亞寒帶に位する島にしてボドゾル地帶を形成す。此の地の氣溫と土質關係により內地、臺灣の農業とは其の趣を異にせり。

樺太の自然的基礎條件を考慮し科學的及び經濟的に研究せる結果、其の合理的と認むべき物は含水炭素物卽ち砂糖、澱粉、纖維等の生產にあり、故に甜菜亞麻、馬鈴薯、大麥、小麥、ライ麥等の栽培は其の將來を認められつゝあり。

種別＼年次	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年
耕地面積	一七、九五三町	一九、九八〇町	三二、一〇〇町	三四、〇九四町	三七、〇七四、九〇町
增加指數	一〇〇	一一一	一三九	一四四	一六〇

樺太開拓の行程は露領時代にありては成績の見るべきものなく、無慮の寶庫は空しく荊棘の蔓るに委せられたりしが。明治三十八年我有に歸するや開拓の基礎創めて樹ち、爾來玆に二十有餘年其の間農業に關する施設も亦着々其の緖に就き、農產物生產年額約四百二十萬圓を算し、十年前に比し實に隔世の感あり。然れども耕地反別は僅に二萬七千町歩に過ぎずして、農牧適地七十二萬八千町歩に比すれば未だ其三分に滿たず。尙容易に數萬戶の農民を收容し得べく、是等農耕適地開發の曉には益し優に他の產業を凌駕し得ること明なり。

【農業者戶口】 近時樺太內地間交通の便著しく增進せられ世人の樺太に關する知識向上し、一般渡來者の增加すると共に農業移住民も亦著しく其の數を增し、昭和三年末現在一萬六百七戶、四萬八千七百六十八人にして全戶口の約二割に達せり左に既往十年間に於ける戶口の增加率を圖表に示す。

【農畜產物】 樺太の沿海は到る處魚介豊富なるのみならず、陸には森林、鑛物及び沃野の農牧に適するもの亦尠からず。各種の產業は之れより起り逐年隆昌に赴きつゝあれども開拓日淺く未開の地は今尙隨所に多く。從つて之れ等の未開地にして開發せらるゝに至らば本島の產業は著しき發展を見るべし。

【作物の種類】 樺太は北緯四十五度以北に位するを以て氣溫は內地北海道に比し低しと雖も、栽培せらるゝ作物の種類に至りては北海道に於けると大差なく殊に從來不可能とせられたる水稻栽培も漸く其の曙光を認むるに至れり。

▲食糧作物中到る處栽培せられつゝあるは麥類、豆菽類、馬鈴薯、根菜類、葉菜類の各種にして麥類中最も多く栽培せらるゝものは裸麥なり。其の範圍は全島に亙り作付面積七百十五町歩餘其の產額は**十三萬六百餘圓**に達す。

▲大小麥は能く樺太の風土に適し生育最も良好なり、昭和三年末に於ける作付反別は大麥百五十二町歩餘其の產額は**二萬八千圓**、小麥二百二十八町歩其の產額は**四萬六千七百圓**なり。

▲豆菽類中最も廣く栽培せらるゝは豌豆にして、其の作付反別三百五十八町歩、產額**七萬四千八百圓**に達し、品質又た優良なり。豌豆に次ぐは菜豆の百八十五町歩產額**四萬八千圓**にして、蠶豆にありては全島到る所生產せらるゝを以て家畜の增加と相俟つて其の飼料として將來益々增加すべし。

▲穀類としては以上の外蕎麥、粟、黍、玉蜀黍等も生產せらるゝも蕎麥を除きては栽培普及せずして生產額僅少なり。馬鈴薯は燕麥と共に樺太に於ける重要作物にして其の作付反別二千二百七十四町歩產額**八十八萬餘圓**に達せり

▲工藝作物中樺太に適するものはライ麥、亞麻、甜菜、薄荷等なれども、是等の內現在利用せられつゝあるはライ麥及び亞麻等なり。

▲ライ麥の栽培者は大泊製藥會社と契約し酒精原料として之れを該會社に販賣しつゝあり。其の作付範圍は現在大泊、豊原及び本斗支廳管內に限られ居るを以て作付反別亦八十九町歩餘に過ぎず。

▲亞麻は現在主として豊原支廳管內に栽培せられ、作付反別百三十七町歩、年產額二萬圓內外に過ぎざるも漸次增加すべきは想像に難からず。而して生產品は主として製糸工場を經て北海道帝國製麻會社に供給されつゝあり。

▲甜菜は昭和二年度より試作せしめられたるに其の成績極めて優良にして品質遙かに北海道產品を凌駕し、昭和三年度に於ける平均反當り數量四千二百五十二斤に達し、樺太に於ける最も有望なる作物の一と謂ふを得べし。

▲燕麥は家畜飼料たるの外一般需要亦尠からず。其の作付反別は現在に於ては五千八百餘町歩、年產額九十三萬餘圓に達し尙年々增加の趨勢にあり。併し未だ島內の需要は不足を苦げ年々北海道より移入するもの尠からず。

畜產

樺太の氣候風土は家畜の飼養に適し飼料作物の生育亦良好にして寒氣も何等恐るゝに足らず。其の施設宜しきを得ば大に斯業發展の要素を具備せり。

明治三十八年我軍の樺太を占領するや露人の多くは飼養家畜を遺棄して引揚げたるを以て牛馬は群を爲して山野に彷徨し島內は寂然一大牧場の觀を呈せり依て臨機の策として軍令を以て移住民の捕繫するを許すと共に、其の半數を上納せしめ他の半數は之を捕繫者に拂下げられたりしが、當時收容所に收容したる牛馬は僅に五百餘頭、民間にて拾得飼養のものを合し二千數百頭に過ぎず。尙其の大部分は山野に放棄の儘なりしかば、冬季食料を得ること能はず遂に斃死するに至たれり。明治三十九年七月中貝塚に種畜場を置き、種牡馬二頭種牛一頭(ホルスタイン種)を購入して場內の牝畜に種付すると同時に民間の種付にも應ぜり、爾來諸般の施設を爲し之れが改良蕃殖に努め居れり。

【畜牛】 樺太產牛の基礎をなせるものは在來種(露人の遺棄せるもの)及び領有後北海道より移入せるもの〻二種に大別せらる在來種は體格一般に矮少にして朝鮮牛に髣髴たり、寒氣に堪ゆるも乳量一箇年二石以上にして四石に達する物稀なり、肉量亦尠く四五才にして骨付三十貫乃至四十貫に過ぎず。北海道より移入せるもの〻內エアシヤー種は繁殖盛にして、在來種は殆どエアシヤー種に依りて改良せられ現在畜牛の六割以上はエアシヤー種を以て占め成績良好なり。又た近時ホルスタイン種の移入增加し漸次增殖の趨勢なり、

【馬匹】 樺太の馬匹を大別すれば在來種及び領有後他より移入せるもの〻二とす。在來種は老馬多く時に體格優良なるものあるも體軀矮少なり、粗食寒冷に耐ふるも、負擔力、挽曳力少く稚して能力低劣なり。領有後馬匹の改良を圖り、樺太廳に於ては優良馬を直接移入するの外、補助金を與へて民間に移入せしむる等種々奬勵の結果、最近優良なる逸物を產するに至たれり。

【養豚】 樺太廳に於ては奬勵品種としてバークシヤー種及びヨークシヤー種の二種を選定し農事試驗場に於て種畜の配付をなし民間に於ける飼育を奬勵に努められつゝあり。

【養鷄】 占領當時より露助鷄と稱する在來種の系統と認むべきもの各地に分布せり。されど体軀一般に矮少にして體量僅に三百匁乃至五百匁に過ぎず其の產卵數一箇年五十乃至八十個を算し一個の重量十二三匁內外なり。

領有後數種の飼養試驗の結果、單冠白色レグホーン種並に橫斑プリマスロック種を樺太に最適のものと認め之れを奬勵品種に決定し、一般に其の飼養を奬勵したる結果現在總數の約九割を占め成績亦可良なり。

【養狐】 養狐事業は大正四年廳種畜場に於ける飼養試驗を以て本邦に於ける嚆矢となし、爾來飼養者漸次增加し樺太特有の有望なる產業たるを失はず。依つて樺太廳に於ては養狐業の爲め共の用地とし一萬五千坪以內の未開地を貸付するの途を開けるを以て爾後堅實なる發達を遂げつゝあり。養狐場は人家を離れたる閑靜且つ高燥なる針濶混交林地を選び、飼料の關係等より海濱附近を最適とし、飼養管理は繁殖時期及び仔狐の育成中最も困難にして、狐は驚怖心及び猜疑心強きを以て特に細心の注意を要す。熟達せる管理人は一人にて約五十偶を管理することを得べく、飼料は獸肉、魚肉を主食とし根菜類、麥粉、骨粉、巢實等を適宜に給し、幼狐には牛乳を用ふ。

圖表對照統計

◇農業者戸口表

年次	戸口	戸數	人口
大正八年	四、四五五	一九、一三〇	
大正九年	五、〇三三	三〇、六三七	
大正十年	五、二八八	三一、六七六	
大正十一年	五、五五一	三〇、四一八	
大正十二年	七、三五四	三一、九五〇	
大正十三年	八、七九三	五七、八一三	
大正十四年	九、六三五	四一、八一九	
昭和元年	九、五一九	四三、三三五	
昭和二年	九、九三五	四三、六八三	
昭和三年	一〇、〇〇七	四八、七六八	

◇重要農産物作付面積表

種目 / 年別	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年
作付面積	一二、七〇九・八町	一三、九六〇・六町	一四、一三七・〇町	一四、六四七・〇町	一七、〇五三・八町
生産價額	三、一五三、三六七円	三、七一九、五六一円	三、九四一、〇三六円	三、五六六、〇八八円	四、二〇六、二〇一円

◇各種農産物作付面積及生産額

品種名	作付面積	生産價額	品種名	作付面積	生産價額
大麥	一、三五二反	二八、二七九円	燕麥	五八、六三〇反	九二、一二六円
小麥	二、二八六	四八、六九九	裸麥	七一四	一三〇、六六六
ライ麥	九〇九	一六、一五七	藍	三、九五八	三四、七五五
黍	一、二一九	二四、四八〇	甘藍	二、七三一	一三四、〇八〇
玉蜀黍	二、二六九	四四、三七一	漬菜	一、三四五	一七、三〇〇
大豆	六〇九	一二、七七〇	葱	四四三	三四、七六六
豌豆	三、五八〇	七四、八七三	蘿蔔	四六三	四六、九九九
蠶豆	九〇	一、七〇一	青蘿蔔	八四	一、七〇一
燕麥	一、八九六	四、二四九	胡蘿蔔	一、七〇一	二三、四八七
蕎麥	三、三七七	六八、一四〇	牛蒡	一、三八六	一七、一二一
馬鈴薯	三、三七七	六八、一四〇	瓜	九二五	三四、九三七
牧草	三、三七七	五九、四一〇	胡瓜	六、六四一	一三、四八七
亞麻	一、三七〇	一九、九六七	その他	一七〇、五三八	四、三〇六、六〇一

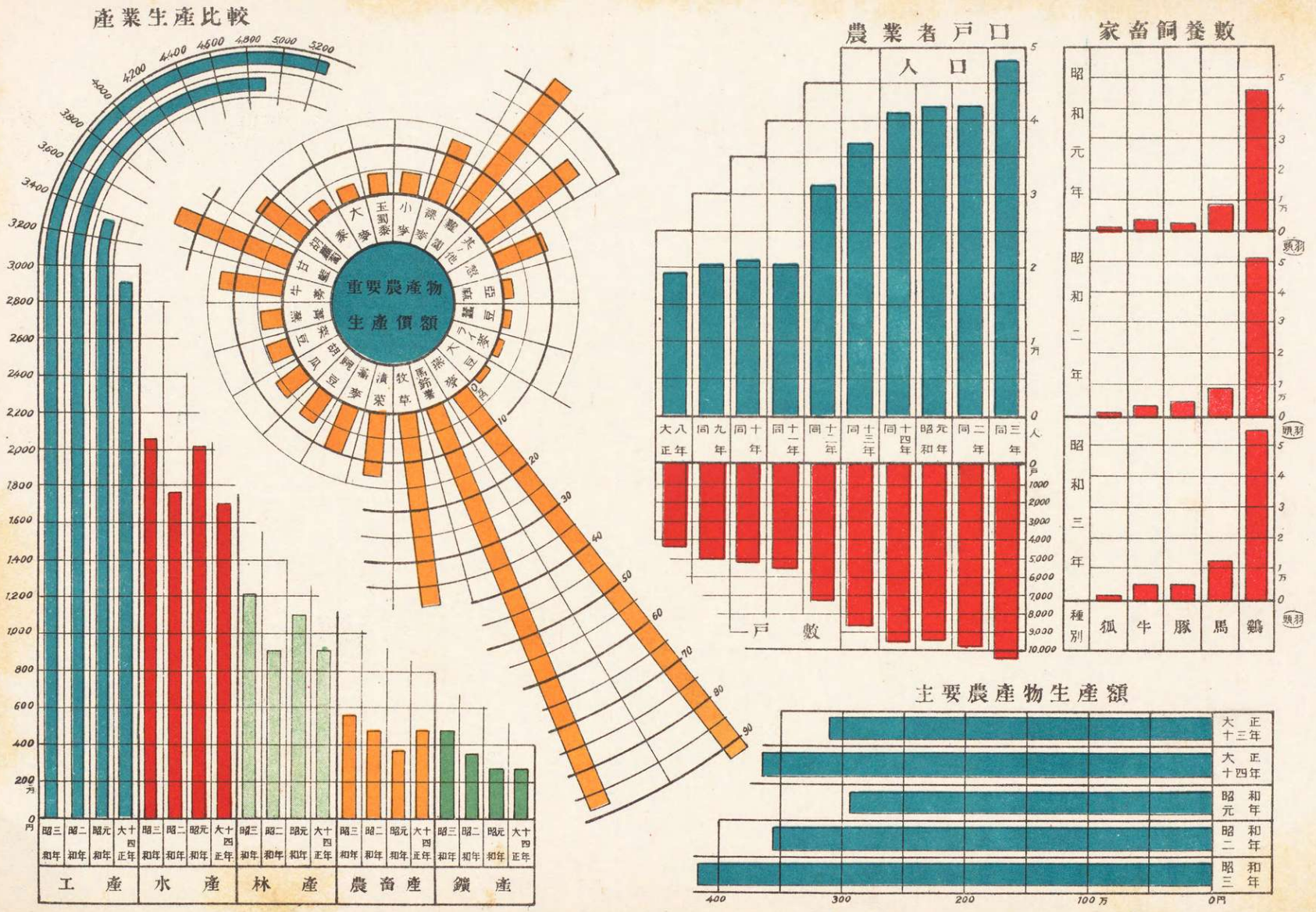
◇生産物の産額比較表

年次 / 種別	農畜産	林業	水産	鑛産	工産	計
大正十二年	三、五二五、一四九円	四、五五八、八七四	一、三二二、三五九円	一、八〇九、四二三円	二五、八四二、七五四円	四八、九八八、六三三
同十三年	三、八四六、九二三	一〇、六〇五、四六四	一二、九三〇、〇八三	二、三五五、七一五	二七、七〇六、八三七	五七、三五五、〇九九
同十四年	四、九三四、九七七	九、一八六、六八五	一七、三〇六、四九二	二、七三七、九七〇	二九、八七一、一九	六四、三三三、三三三
昭和元年	三、七六七、〇〇〇	一一、四一四、九三三	二〇、〇〇〇、九四四	二、七一二、二九九	三三、四七〇、六六	七一、二五五、〇六五
同二年	四、八五三、五九一	九、一七九、八七七	一五、七〇五、三五〇	三、五五五、七二一	四九、〇九二、五五六	八三、三五五、〇六五
同三年	五、〇四二、八六	一三、一〇一、二九三	三〇、五五七、四三三	四、八八七、九八九	五三、五三〇、〇九七	九五、六八二、〇九八

◇家畜飼養數比較表

年次 / 種別	牛	馬	緬羊	豚	鷄	狐
大正十三年	二、二三六	七、六九四	三三	一、七九四	四五、一〇四	七四一
同十四年	二、七六五	八、六七三	四五	二、三六四	四九、四六六	五九〇
昭和元年	三、一〇七	九、〇四八	四〇	二、六一七	五一、〇四九	八〇七
同二年	三、六六四	九、六四四	七〇	三、七三二	五二、七七六	七三五
同三年	三、七四七	一二、一四九	一〇一	四、五二六	五四、九七六	八三三

農業


産業生産比較
重要農産物生産價額
農業者戸口
人口
戸數
家畜飼養數
昭和元年
昭和二年
昭和三年
種別
鶏
馬
豚
牛
狐
主要農産物生産額
工産
水産
林産
農畜産
鑛産
樺太廳調査

■鑛業

樺太の鑛業は其の領有前に在りては僅に猿津炭坑、落帆炭坑及び西海岸小田洲附近に於て炭層の露頭を辿り、幼稚なる方法を以て採掘せしに過ぎず、されば内部森林地帶の鑛物に付ては、何等知る所なかりし狀態なり。明治三十八年邦領に歸するや先づ全管内に於ける鑛業の絶對禁止を聲明し、爾後幾多の調査と變遷とを經て漸次部分的に之れが開放を行ひ、今や管内三大封鎖炭田の石炭鑛業を除くの外は總て内地と同一制度となれり。

【鑛務行政】 樺太に於ける鑛務行政は前述の如く明治四十年度に開始せられてより實に廿三年にして、其の間出願總件數四千八百三十七件（昭和四年末）に及び其の大部分は石炭鑛業に屬す。

鑛業出願の趨勢を見るに明治四十年の十件を初めとして爾來連年倍率を以て進展し、大正五年には四十三件の出願を見、大正六年には俄然二百二十三件に上り、翌七年及び八年は相次で倍加率を以て增進したりしが、歐洲戰亂終局と同時に一時衰勢を示めしたりしが、大正十四年には稍や之れを挽回して二百八十五件、昭和元年には二百四件同二年には三百五十三件、同三年には五百五十一件、同四年には二百六十二件を算するに至れり。昭和四年末現在許可鑛區數を擧ぐれば左の如し。

種別	採掘權 鑛區數	採掘權 面積	試掘權 鑛區數	試掘權 面積	砂鑛權 鑛區數	砂鑛權 面積
石炭鑛亞炭鑛	四五	三、〇七二、九八三	一九三	一四〇、四二六、五五五		
石油鑛	五	四、〇五六、八八三	三	二、〇七、三五〇		
金屬鑛	四	三、五四四、九六六	一三	九、三二、七六六		
燐鑛			一	七五〇、〇〇〇		
砂金					一六	四五七、六四三
砂鐵					一	一、三五五、七四四
砂金、砂水金					一	七三、〇〇〇
砂白金					一	九〇、〇〇〇
計	五四	三五、五四四、七七〇	一三〇九	一五三、一〇五、七〇一	一九	六三九、六三四

【鑛物】 樺太に於ける鑛物は石炭を主とし石油之れに亞ぐ。其の他金、砂金含銅硫化鐵鑛及び辰砂鑛等存在するも未だ重要なる鑛床を發見せず。

建築及び土木用の石材類には花崗岩、閃綠岩、安山岩、流紋岩等の火山岩及び粘板岩、硅岩、硬砂岩類等の水成岩多く海岸に露出するを以て切割運搬に便なり。石炭岩は知床半島に露出しバルブ製造用として採掘せられ、其の花崗岩に接觸するものは往々結晶質（大理石）と爲れるもの數からず。

【石油】 明治四十年度に於ける鑛床調査に際し、初めて樺太南部西海岸地方に石油を含有する地層の存在を認め、其の後の調査に依りて判明したる處によれば、既知含有層は新第三紀のみに限られたるもゝ如く、新第三紀層は更に分ちて上層及び下層となすを得べし。

▲上部含油層　に屬するものに西海岸の名寄、智來油田、本斗油田、野田油田及び東海岸中央凹地帶の西側に存する含油層等あり。

▲下部含油層　に屬するものに、西海岸の上能登呂油田及び名寄、智來油田の下部等あり。今普油を期待せらるゝ區域を擧ぐれば

一、本斗背斜層　本斗油田に於ける背斜軸は略々南北に走り、南は椎内川より北直岡に至る延長十四里に亘り、吐醍保澤は其の中心地なり。

二、内淵背斜層　南は圓山部落より、北は内淵川左岸、山中部落に至る延長約五里半に亘り不對稱背斜構造をなす。

三、智來背斜層　背斜軸は北西より南東に走り、智來部落より南東に延長約千八百間にして斷層に境せらるゝ一の不對稱北斜構造をなせり。

四、名寄背斜層　背斜軸の延長約一里にして、北西は海に限られ、南東は斷層により切斷せらる。

五、東條背斜層　東條川北方に在り、背斜軸の延長は約一里にして、北西より東南に走り、北西は海に限らる。

六、南名寄背斜層　東北東より西南西に走り、北西より北北西に十五度乃至二十度の緩傾斜をなせり。

昭和四年七月以降日本石油株式會社は、本斗郡本斗町字吐醍保澤に於てロータリー式試錐機に依り、一の試錐井を掘鑿中なるを以て、之れが試錐の結果は樺太油田地質上の重大なる指針たる可く、背斜層の地下深く下部含油層を發見することを得んか樺太油田の發展は蓋し甚大なるものあるべし。

【石炭】 現今樺太に於ける唯一の鑛業は石炭にして、年々產額增加の傾向にあるも、需要炭の一部は移入を仰ぎ居りしを以つて昭和三年末に於て封鎖炭田中、南部炭田の一部（自北内淵澤至白牛川面積六百四十七萬坪）及び北部炭田の一部（自内川至駒間川面積七百八十五萬百三十坪）を開放し自給自足を計りたり。最近に於ける本島石炭の產額は別項圖表に示せり。

▲川上炭鑛　川上炭田は樺太に於ける最も重要なる中部炭田に屬し、内淵炭田の南端にして三井鑛山株式會社の所有に屬す。含炭層は厚さ約二千尺にして其の間主要なる炭層十四を算し之れ等の内現今開坑せるものは、一、二、四、七、八、九番層、十番層、十四番層にして、層厚は一尺五寸より七尺に及ぶ。炭層は西に傾斜し鑛區南部に於て四十五度、北部は三十度乃至三十五度の斜角をなせり。走向は略南北にして鑛區の延長八千間に達し其の間著しき斷層等の變動なく連綿として炭層を露出せり。

從來の川上探炭所は海拔約九百尺の高地點に於ける露頭より二三の採炭坑道を掘進し、地表に近き炭層を採掘する姑息なる方法にして、之れが運炭鐵道は樺太廳鐵道本線小沼驛より分岐する川上線を通じ、大正十年以來の擴張工事今や完成して島内鐵道の延長、港灣の改善に從ひ逐次年產額を增し將來三十萬噸を出炭せんとし、昭和三年には二十萬六千九百六十六噸、昭和四年に**二十一萬二千八百八十八**噸を產せり。

▲大榮炭礦　本炭礦は中部炭田の北端に接し、樺太工業株式會社の所有に屬す炭層は四尺層の一にして傾斜頗る緩なり。炭質は不粘結性歷青炭にして、採掘せる石炭は延長二哩半の架空索道及び輕便鐵道によりて泊居製紙工場に搬出供給せり。昭和四年中の出炭量は**六萬八千九百八十五**噸なり。

▲知取炭礦　本炭礦は知取川の北方左岸に位し、登帆炭鑛株式會社の所有に屬す。現今稼行せる炭層は三層ありて其の厚さ四尺乃至六尺に及び南北に走り傾斜七十度内外なり。昭和四年中の出炭量**十二萬九百二十一**噸なり。

▲大平炭礦　本炭礦は惠須取川の中流大平澤に位し、炭層は南北に走り、十度乃至二十度の緩傾斜を以て西方に沈下す。炭層の厚さは八、九尺乃至二十五尺に對するものあり。昭和四年中の出炭量は十九萬一千四百三十三噸なり。

▲其の他　東白浦及び樫保に於ては上部含炭層（褐炭）に屬する炭田存在し、横坑によりて水準以上の採炭をなせり。昭和四年中の出炭量は夫々二萬四千七百三十五噸及び一萬五百六十五噸なり。又た西海岸惠須取町の南方三里天内澤に於ても昭和三年一月以降石炭の採掘を開始し同四年は出炭三千四百三噸にして其炭質は太平炭礦と同じく粘結性なく灰分少く發熱量大なり。

【埋藏量】 我國石炭の埋藏量は先年農商務省地質調査所長井上禧之助の調査に依れば、實測炭量九億三千萬噸、推定炭量五十億六千萬噸にして、之れに比較せば樺太の推定埋藏炭量六億八百三十萬噸は敢て大なりと云ふを得ざるが如きも、内地炭は多年採掘の結果前途益々採掘難を感ずるに反し、樺太に於ける重要炭田の大部分は封鎖炭田に屬し、豫め小炭坑分立の弊を避け統一的大經營の要素を保留せるのみならず、其の埋藏炭量は優に採掘に容易なる安全量を示せるものなるを以つて、樺太石炭鑛業の前途は實に洋々たるものなるべし。

圖表對照統計

◇出炭額累年表

年次	川上炭鑛	泊居炭鑛	大榮炭鑛	登帆炭鑛	東白浦炭鑛	野田炭鑛	知取炭鑛	大平炭鑛	樫保炭鑛	天内炭鑛	計
大正十一年	六八、九五二噸	三、一〇一噸	二八、八三二噸	一、一九一噸	六、五五三噸	五、九三四噸	一、一五四噸	二、七五五噸	一、〇六八噸	四、四一八噸	二一四、五四七噸
同十二年	八五、五五三	八、五五〇	五一、三八三	一四、五三〇	一九、八七一	六、〇四一	七、三三五	三、七五五	一、九五五	一、四一八	二一六、九八六
同十三年	一一四、五五一	三、七三三	五九、五一〇	三一、八七一	九、一三三	七、四四〇	六、七四一	三〇、九五三	一、九五五	一、四一八	一九九、九五五
同十四年	一〇九、九八四	八、五五	五七、一六三	三三、六七三	一八、六八〇	三、五六五	三五、一三五	四〇、五八一	三五〇	一、四一八	三五〇、八六一
昭和元年	一〇六、一二六	一、五五三	四九、四五六	三一、八七八	六、七九三	八四、五四五	八四、一八〇	一七、一三	一、〇六六	四、四一八	三五七、〇四六
同二年	一三五、五六九	一、三九四	五一、八五八	休業	一七、〇〇九	休業	一〇四、一八〇	一四一、四八一	五五、九六五	四、四一八	五四一、八〇六
同三年	二〇六、九六六	九五〇	六八、九五五	休業	二四、七三五	休業	二一〇、九二一	一九一、四三五	一〇、五六五	三、四〇三	六三一、九五〇
同四年	二一三、八八八										

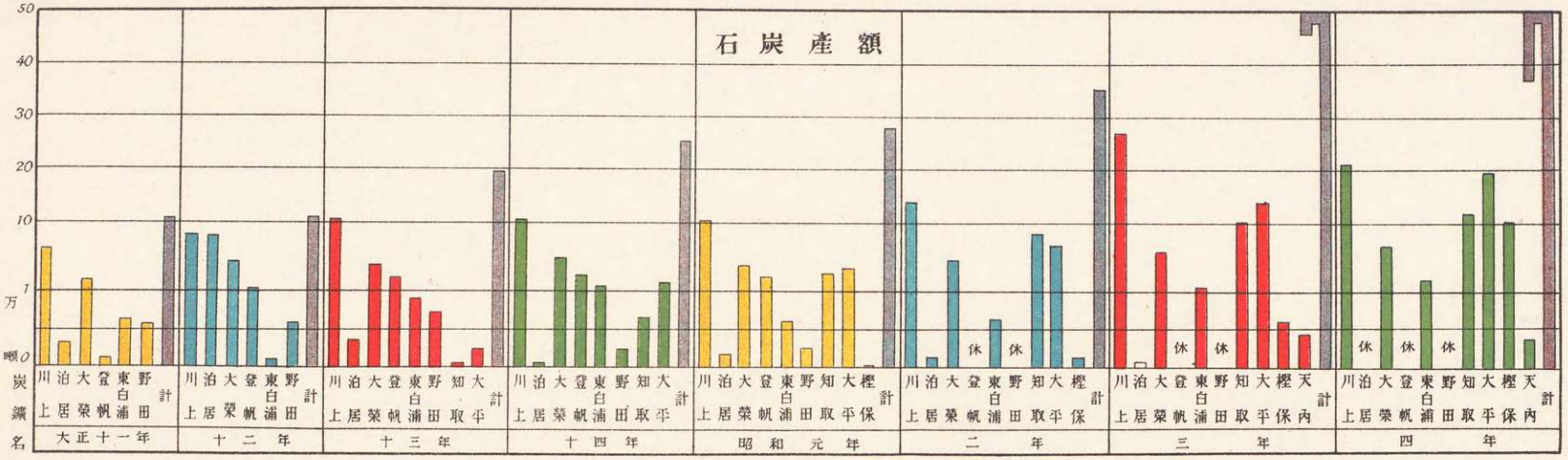
◇石炭需要額表

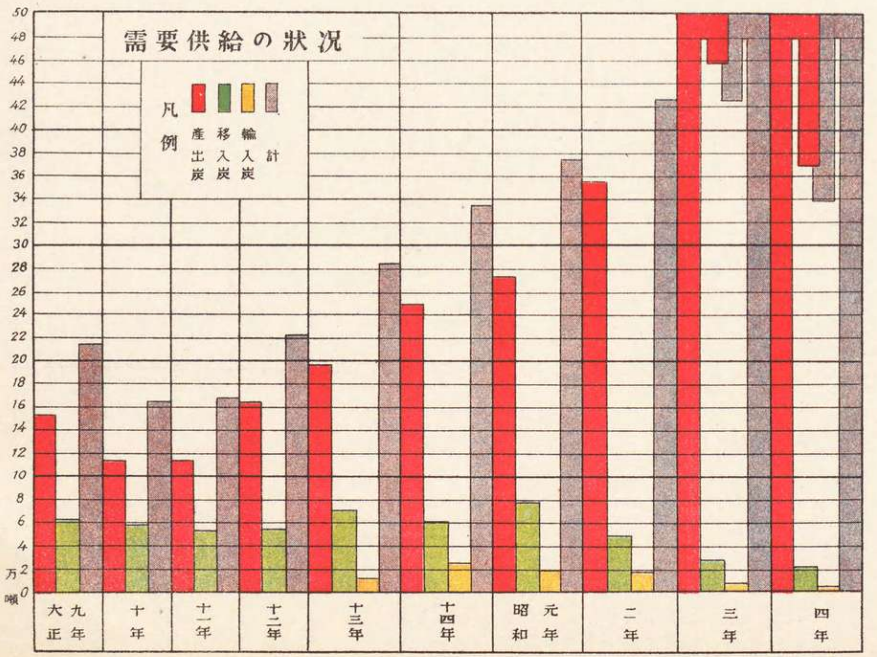
年次	産出炭	移入炭	輸入炭	計
大正九年	一五四、二九三噸	六二、三三噸	一噸	二一六、六二四噸
同十年	一一五、三五五	四九、四五六	一	一六四、七一一
同十一年	一一四、五四九	五四、八四三	一	一六九、三五三
同十二年	一六六、九八六	五六、七八一	一三、九五〇	二三三、七六七
同十三年	一九九、三五五	七三、八八六	二五、一八一	二八五、二三一
同十四年	二三〇、六二五	六〇、六四四	一〇、〇〇〇	三三六、四五〇
昭和元年	二三五、八三三	七九、三三七	一〇、〇〇〇	三七五、一三〇
同二年	二四一、六八六	四九、三八七	一九、九五三	四三六、三六八
同三年	二〇八、九五〇	二八、三六八	八、〇〇〇	三五七、九五五
同四年	二三三、八八八	三三、四六八	四、九五〇	六六〇、三三四

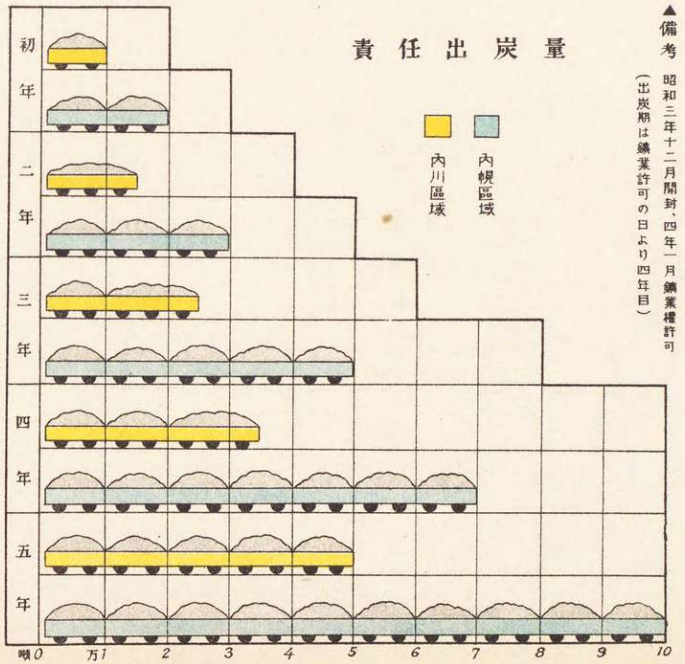
◇封鎖炭田の開放に對する責任出炭量

年次	内川區域	内幌區域
初年目	一萬佛噸	二萬佛噸
二年目	一一萬五千佛噸	三萬佛噸
三年目	二萬五千佛噸	五萬佛噸
四年目	三萬五千佛噸	七萬佛噸
五年目	五萬佛噸	十萬佛噸

鑛業







▲備考　昭和三年十二月開封、四年一月鑛業權許可
（出炭期は鑛業許可の日より四年目）

樺太廳調査

■林　業

本島が明治三十八年邦領に復歸して以來專門の學者、技術者に依囑して實地に踏査せしむると共に、過去に於ける施設を調査研究して本島森林行政に關する方針及び諸般の施設を進めらるゝに至れり。本島の森林は總て天然林にして樹種約百二十二種あり、內喬木四十九種、灌木七十三種に分類せらるゝも實際利用價値ある材木はエゾマツ、トドマツ、グイマツ、イチヰ、シラカバ、ドロヤナギ、ハンノキ及びタモ等にして、其の分布殆んど一定し、河岸の底地にはヤナギ、ハンノキ及びタモ等の濶葉樹生立し、山岳にはトドマツ及びエゾマツの針葉樹を生じ、中腹より白樺を混生し頂上に近づくに從ひ白樺の純林となり居れり、尙グイマツは主もに低地濕地に生ず。而して此等樹種中最も多きはトドマツ及びエゾマツにして其の約八割に達せり。

【造　林】人類の生存上必要缺くべからざる森林も往古樺太に於ける狀態は、人力を借らずして自然に繁殖生長し、其の面積亦全島を掩ひしを以て、島民各自共の欲する所に從ひ、隨意伐採利用せりと雖も、當時人口稀少にして利用の途開けざりしを以つて、敢て木材の不足を感ぜざりしのみならず、拓殖の第一步には蓊蒼たる森林に火を放ちて灰燼となすことさへありき。從つて營林的觀念の如きは殆ど顧みられず、領有當時始めて林業方針が樹立せられたるも極めて簡略不確實、不合理のものにして造林の如きは、全然度外せられたる問題なりしが拓殖移民の奬勵は漸く人口の增加となり、人智亦開くるに及び木材の利用發達し、從來無價値に近しとせられたる木材は材價次第に騰貴し、木材の利用は年を追つて增加し、加之大正九年以來數年間に亘る蟲害被害地を膨大ならしめ一方山火の頻發は年々廣大なる美林を燒失せしめる等樺太森林の一大破壞期に遭遇するに至たれり。

玆に始めて人工造林、或は天然更新或は防火線の設置等を痛感し大正九年六月先づ造林事業擴張の前提として、落合町附近の山火跡地に、トドマツ、エゾマツ、カラカツ及び白樺の播種造林を試みられたるが、實行の結果成績良好なるのみならず且つ經費僅少にして造林に要すべき大地積を有する本島に於ては、最も有利なる施業法とせられ、爾來播種造林を主とし、側ら植樹造林を行ふの計畫樹立せらる。之れ樺太造林實行の第一步なりき。更に第二期計畫として大正十二年より年々五千町步宛の播種造林を實施され。大正十五年第三期計畫として年々一萬町步宛の播種造林を實施さるゝに至たれり。

昭和四年一月林務署官制の發布と共に事業にも稍や改變を加へられしが施行面積は年々增加せらるゝに至れり、而して昭和四年度末に於ける從來實行面積は、新種四萬九千五百三十九町七反三畝步、補播五千六百七十四町六反二畝步の大面積を有するに至たれり。

【植樹造林事業】播種造林の從として之れが側ら大正十年以來、トドマツ、エゾマツ、カラマツ、ドイツタウヒ、シラカバ、ナナカマド、イタヤ等の樹種につき年々僅少面積を實行しつゝありしも、其の經路を見るに活着生長共に良好にして、播種造林に比し經費に於て多額を要すと雖も、經費と結果とを考照するに共の成績播種林に優れるを以つて、年々施行面積を增加せるのみならず。尙昭和四年度以降に於ては改正案に基き主力を該法に注がる可き豫定なるを以つて、實行面積は益々增加の見込なり。昭和四年度末に至る從來實行面積は、新植二千八百三十二町三反步、補植七百三十一町九反步、手入一千八百四十二町三反三畝步となれり。

【防火線事業】大正十一年初期開設となり其の多くは造林地保護を第一となし概ね造林地附帶的のものなりしが、天然林保護の必要上更に之れに對する施設となり、造林事業の進捗と共に增設し、昭和四年度末に至る新設延長四十三萬三千七百九十六間、手入四十四萬五千五百七十一間となれり。

【苗圃事業】明治四十五年始めて豊原苗圃の設置となり、トドマツ、エゾマツ、カラマツ其の他の養苗に努められしが、大正九年以降更に各地に苗圃を增設せらる。蓋し播種造林の成績より植樹造林の成績可良なるを立證せらるゝの機運に際會せる結果益々主力を苗圃事業に傾注さるゝに至たれり。現在十二箇所の苗圃を有し、年產成苗實に五百萬本の多きに達す。將來益々本事業を擴張し年產成苗一千萬本となすの見込なり。

【森林調査】本島領有後此の地の森林概況調査の計畫を樹てられ、島內を十區に區劃し明治三十九年度に調査に着手し、同四十一年度に之れを完了せられたるが、大正二年更に十五箇年計畫を以て之が基本調査を爲すことゝせり。卽ち全域三百三十餘萬町步より開拓豫定地四十三萬町步を控除し、之れを三十箇の經營區域に分ちて事業區及び保安林を設定せんとの計畫なりしも經費其の他の都合により漸く大正五年度に至り經營調査事項中先づ林種區分及び施業案の編成等をなすべく、三組の調査班を設け最も急要の地點より調査に着手せられ、大正十四年度を以て一先づ完了せり。卽ち調査の成績は本島森林原野面積二百五十四萬六千九十三町步、材積針葉生立木六億二百八萬石、同蟲害木五千百八十六萬石、濶葉樹八千三百三十九萬石、外にツンドラ地帶二十四萬一千百十町步と發表せらる。

【林業試驗】本島は北方に僻在し本土と其の氣候風土を異にするを以て林木の種類及び林況等同じからず。從つて森林更新の方法、主副產物の利用、造林樹種の選定等に關しては愼重に研究するの必要を認められ、依つて先づ豊原の近郊大澤に面積二千二十七町步の試驗林を設定せらる、大正元年以降毎年各種の試驗を行はれつゝありしが。大正十年中火災及び松毛蟲の爲め其の殆ど全部を侵害せられたるを以て、前記各種試驗も中絶の已むなきに至れるを以て、大正十四年別に東海岸白東浦の南方保呂に試驗林を設け大澤試驗林は造林試驗林とし十四年秋より播種、植樹等の試驗を開始せらる。

然るに當時松毛蟲の繁殖甚だ猛烈を極めたるを以て驅除方法として誘蛾試驗を行ひしに成績可良なりしを以て、大正十年及び十一年の兩年に亘り焚火誘殺法を施行し、其の防遏に努むると共に一面松毛蟲に對する基礎的研究調査を行ひ、十三年樺太松蛀蠹に關する調査を公にせらる。

【官行研伐】大正九年より大正十二年に亘る松毛蟲蔓延の爲め森林面積約二十二萬町步、材積約八千八百萬石の被害を蒙りたるが、當時之れが利用應急の措置として其の一部は民間に拂下げ同時に他方官營に依る蟲害木の研伐事業を計畫し、大正十一年度より事業を開始し昭和元年度に於て大體所期の計畫は完了せられたるが、更に恒久的の官行研伐事業の必要を認められ、昭和五年一月より林務署に於て事業を開始せらるゝに至たれり。

昭和四年度に於ける事業の經過は左の如し。

(一) 官行研伐収入　三、五二六、〇六〇圓　(二) 官行研　伐　費　二、四九九、〇六〇圓

(三) 伐　木　高　一、三〇〇、〇〇〇石　(四) 販　賣　高　一、二〇〇、〇〇〇石

【事業の成績】大正十一年度は當初計畫の通り丸太三百萬石を造材し、內五十萬石搬出の豫定なりしも、民間造材の物興に伴ふ、勞力の不足並に勞銀騰貴等の關係の爲め、伐木數量を減じて搬出數量を增加せり。大正十二年度は蟲害蔓延狀況當初の豫想に反し、大體終熄の狀態に在りしも、恰も關東地方の大震災あり、需要の激增に應すべく增伐計畫を企てられたるも勞力の拂底、勞銀及び船運賃の暴騰等に累せられ、成績豫期の如くならざりき。大正十三年度は增伐の豫定なりしも、議會解散の爲め豫算の不成立及び政府の事業緊縮方針に餘儀なくせられ、二百三十萬石伐採、二百五十萬石搬出の計畫に改められたるが比較的順調に進行せり。大正十四年以後昭和二年度に至たる五ケ年間中昭和元年の如きは搬出量豫定の三分の一に過ぎざるが如き、障害を生じたる等にて事業の消長は時に免ぬかれ能はざりしも、大體に於て好調を辿り昭和四年度に於ける搬出高は別表の如く約三百萬石に達せり。

圖表對照統計

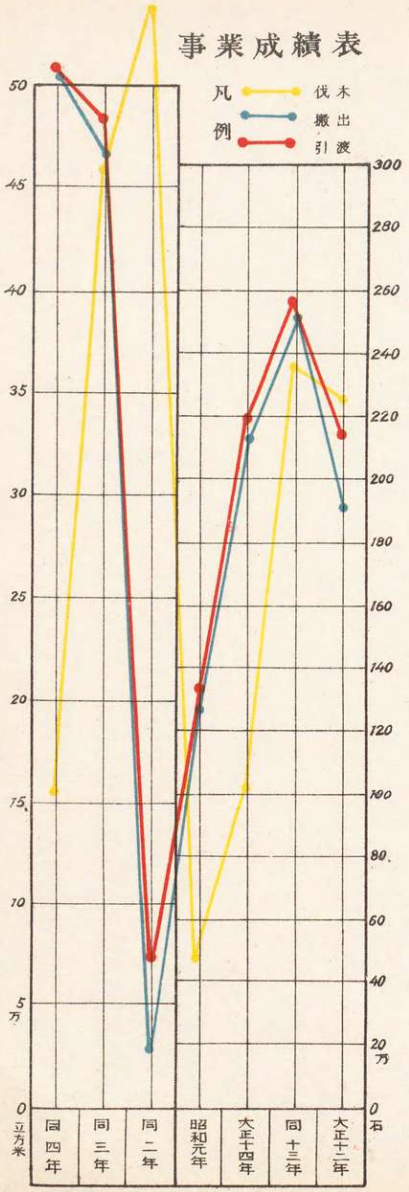
◇事業成績表

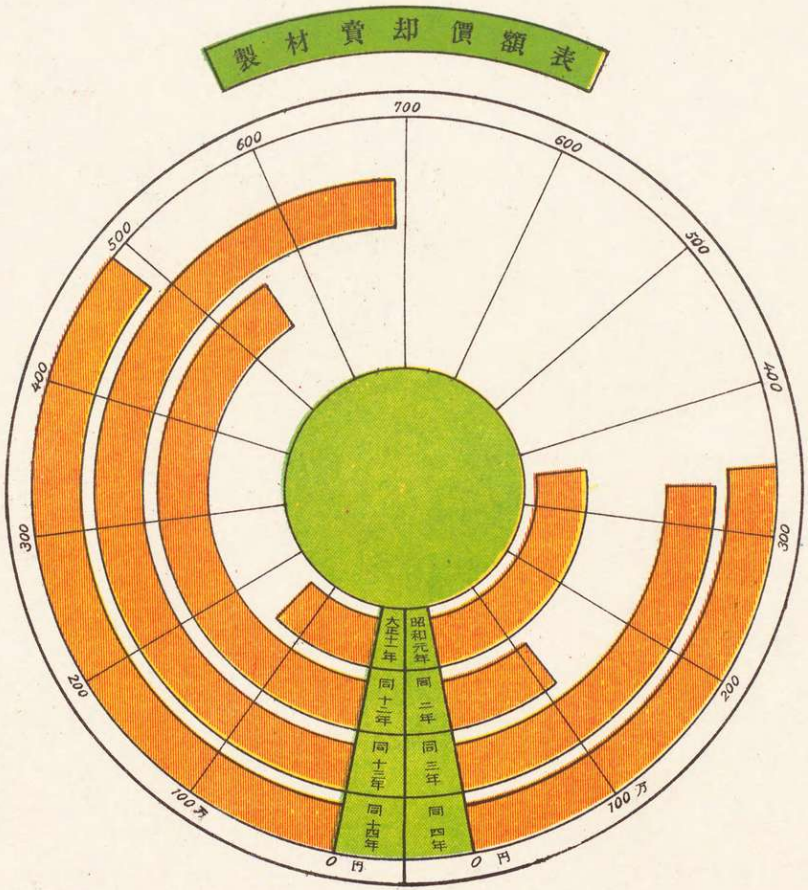
年度	伐木	搬出	引渡	備考
大正十一年	二、七三三、六〇一・四八石 三、三八〇・〇〇粁	六七三、六六六・二八石 三七三・六〇粁	六二六、八五九・一三石 六六六・〇〇粁	一、搬出は鐵道沿線に在りては鐵道各驛附近其の他に在りては海岸最終上場迄とす
同十二年	二、三五九、四八五・七七 一、〇九〇・〇〇	一、九〇四、三五〇・八三 三、三四・四〇	二、二一二、六三〇・〇九 二、七二三・六〇	二、數は薪材なり。
同十三年	二、三六六、五四五・九八 —	二、四三三・九〇	二、四三八・五〇	三、大正十年度繰越事業二十二萬五千八百四十四石一斗六升を含む。
同十四年	一、一〇〇、三八八・九一 —	二、一三〇、二一八・〇三 —	二、二九、三五三・三八 一〇・八〇	四、昭和四年度分は昭和四年十二月二十日の現在の數字を示す。
昭和元年	四七四、九八三・〇〇 —	一、二七四、六八三・一七 —	一、三一九、五〇一・八六 立方米 三五六、四二九・〇一五 （二、三六、五六四本）	
同二年	五四一、六三〇・四七五 立方米 （一、三五五、四三一本）	三五六、四二九・〇一五 立方米 （一、三六、五六四本）	四五二、一七〇・七八 立方米 （一、九九五、三五〇本）	
同三年	四五九、〇六八・〇〇六 立方米 （一、七六八、〇一四本）	四六二、八四九・〇八 立方米 （一、八三二、三三二本）	四七七、四九九・〇八 立方米 （一、九六、九八六本）	
同四年	一五三、七〇一・七三 立方米 （五七〇・〇七三本）	五七、一七〇・七八 立方米 （一、九九五、三五〇本）	五七、一七〇・七八 立方米 （一、九九五、三五〇本）	

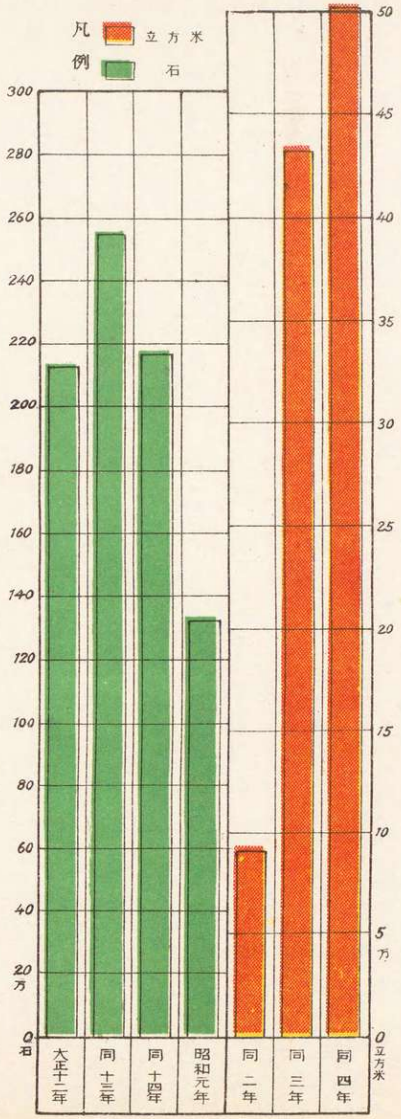
◇製材賣却價額表

年次 ＼ 賣拂區別	積材金額	年期	豫約公募	特賣	計
大正十一年	材積	三三三、六三五・七六石	五七、一二四・九一石	三三六、〇九八・九八石	六一六、八五九・一三石
	金額	五六、七四七・四五円	一、六〇、三一四・六八円	六九七、七〇三・三五円	一、四三五、五三一・四五円
同十二年	材積	一、八三八、七六〇・八〇石	五三三、八三五・三四石	七五一、四三五・九五石	二、一二、六三〇・〇九石
	金額	一、九九、六八八・六〇円	一、六九、〇一二・三一円	一、九一七、四三九・五九円	二、七二三・六〇円
同十三年	材積	一、五五七、四九九・〇二石	四九、三六五・九六石	六六一、二一九・三五石	二、二九、三五三・三八石
	金額	四、三五〇、〇二三・〇六円	一、〇七、一八五・〇九円	一、六二七、九三五・四三円	三、四三三・九〇円
同十四年	材積	八三三、七六〇・〇〇石	四五七、七〇九・七五石	八三四、七〇九・三五石	二、一三〇、二一八・〇三石
	金額	一、八六、八六〇・〇〇円	一、〇六、一六〇・〇〇円	一、九六、九四三・〇〇円	三、四三三・九〇円
昭和元年	材積	一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇石	八四、七〇九・三五石	八四、七〇九・三五石	一、七四、六八三・一七石
	金額	二、三五〇、〇〇〇・〇〇円	一、九四、〇〇〇・〇〇円	一、九四、〇〇〇・〇〇円	五、三八、六八三・一七円
同二年	材積	一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇石	一、四四、七〇九・三五石	一、四四、七〇九・三五石	一、三一九、五〇一・八六石
	金額	二、三五〇、〇〇〇・〇〇円	三、三四、〇〇〇・〇〇円	三、三四、〇〇〇・〇〇円	七、九八、五〇一・八六円
同三年	材積	二、七八一、一八五・〇六石	一、八六、八四九・三五石	一、八六、八四九・三五石	四七七、四九九・〇八石
	金額	四五四、八八三・〇六円	四、三七、〇〇〇・〇〇円	四、三七、〇〇〇・〇〇円	一、〇九、四八三・〇六円
同四年	材積	二、七八一、一八五・〇六石	二、四四、七〇九・三五石	二、四四、七〇九・三五石	五七、一七〇・七八石
	金額	四五四、八八三・〇六円	五、六一、〇〇〇・〇〇円	五、六一、〇〇〇・〇〇円	一、〇二、七八三・〇六円
昭和二年	材積	—	八、八三四、九三七立方米	八一〇、三二・三五立方米	八九、八八七、一一九立方米
	金額	—	六六、八三五・四一円	一、〇六三、三五・一三円	一、一三〇、四五九・五三円
同三年	材積	—	—	四三一、三五八、一九九立方米	四三一、三五八、一九九立方米
	金額	—	—	三、四五、二八六・九九円	三、四五、二八六・九九円
同四年	材積	—	—	三五八、一七〇、七八五立方米	三五八、一七〇、七八五立方米
	金額	—	—	二、八六、九三五・四二円	二、八六、九三五・四二円
計	材積	一、〇二、七八三・〇四石	八、八三四、九三七立方米	八一〇、三二・三五立方米	八九、八八七、一一九立方米
	金額	一、〇二、七八三・〇四円	六六、八三五・四一円	一、〇六三、三五・一三円	一、一三〇、四五九・五三円

樺太林業







樺太農商課調査

水産業

樺太に於ける鰊、鱒及び鮭の漁業は遠く松前氏の經營時代に於て既に邦人に依り行はれたりしが、明治八年千島樺太交換條約の結果、樺太が露領となりたる後に於ても、漁業は尙依然として邦人に依り經營せられ、内地に於ける鰊鱒及び鮭の大半は此の地方の漁獲物なりしが、明治卅八年我が國の版圖に歸するや、之れ等主要魚族の漁利を永遠に保持せんが爲め、新らたに漁業規則を公布せられ、漁業上の奬勵と同時に魚族の保護蕃殖に努められたる結果、今や本島の貿易品中重要の地位を占むるの發展を見るに至れり。別項圖表を以て累年の消長を示せり、以つて其の狀況を窺知するを得ん。

【水産製造】 樺太に生産する水産物の主なるものは鰊、鮭、鱒、鱈、鰷、鮫、蟹、海鼠、帆立貝、北寄貝、鯨、鰛鮫及び昆布にして鰛鮫及び鯨を除き他の水産物は定置漁業者並に四千戸の定住漁業者に依り、採捕處理せらる。定置漁業者の使用する漁船は凡そ千六百隻内外にして、定住漁業者に依り使用せらるゝ漁船凡そ一萬餘隻に達す。尙主要水産物に付き其の漁業の概況を記述すべし。

【鰊】 鰊漁業は其の産額、漁業中の首位を占め年額五六百萬圓を普通とせしも大正十四年より一千萬圓を突破するに至れり。東海岸國境より北知床岬に至る間及び中知床岬より愛郎岬に至る間を除くの外、至る處之れが漁獲を見ると雖も就中近時漁獲最も多き地方は亞庭灣内の一帶、及び東海岸前記以外の沿岸にして、之に次ぐは西海岸に於ける泊居、本斗間とす。

本漁業に使用する漁具は大正十一年漁業の改正により建網を使用する事と成れり、大正六年度に於ける定置漁業權三百六十四漁場に對し現在鰊建網四百四十七、鱒及び鮭瓢網又は建網二百六十五に及べり。鰊は其の大部分は漁業者に依り搾粕に製造せらるゝと雖も、近時身欠鰊並に鯑の製産次第に增加し品質亦漸次改良せらるゝに至れり。

【鱒】 鱒漁業は鰊漁業に次ぐ重要漁業にして東海岸を主とし、就中幌内川を中心とする多來加、新問間及び内淵川を中心とする元泊、宮内間を最とす。此の外亞庭灣に在りては中和床岬及び留多加川を中心とせる一帶は稍漁獲多く、西海岸に於ては内幌、樂磨附近、來知志川口附近は比較的優秀なり。本漁業に使用する漁具は從來建網に限られたるが大正九年より瓢網をも使用し得ることゝなれり。鱒は島内各地及び冷藏船に依り内地へ生賣せらるゝもの殊に最近島内に於ける冷藏庫の設備と相俟つて冷藏原料に供するもの、並に罐詰原料に供するもの次第に增加せるも尙其の大部分は鹽藏せらる。

【鮭】 鮭は夏期秋期の二期に漁獲せられ前者を夏鮭又はトキシラズと云ひ後者はアキアヂと稱し、其の分布區域狹く豊凶の差少し。夏鮭は東海岸敷香附近を主とし一漁場にして漁獲高六萬貫内外に達するものあるも、他の地方は甚だ稀薄なり。アキアヂは西海岸に於ては多蘭泊、麻内、阿幸及び南名好川附近、東海岸に在りては内淵川附近に多く一漁場にて三萬貫以上漁獲するものあり。鮭は鱒と同じく一部生賣せられ又は罐詰原料に供するも其の大部分は鹽藏に製せらる、近時燻製品の製造あるも未だ産額微々たり。

【鱈】 鱈は釜島沖合一帶に棲息せるも其の主産地は西海岸野田より武意泊に至る間にして、專ら配繩を以て釣獲せらる。該地方に於ては夏期三箇月を除くの外殆ど該漁業に從事す。同地方に於ける盛漁期は所謂春漁季即ち二月より六月に至る時期にして、此の期間に於ける漁獲高は川崎船一隻にて三萬尾乃至四萬尾、發動機付漁船一隻にて五萬尾乃至十萬尾に達す。十月より翌年一月に至る秋及び冬漁は漁獲高春漁の半に達せず。大正十四年夏以來小型發動機船激增したるのみならず、最も多産する北本斗漁船の如きは五六十馬力を普通とし或るものは百馬力に近き發動機をも据付くるに至りしを以て今後は其の産額著しく增加すべし。

鱈は主として棒鱈に製するも夏季に於て主として搾粕又は開鱈に製す。尙副産品たる鱈肝油の製造盛にして主要なる鱈漁業地には共の工場を見ざるなく製品は工用油及び藥用肝油の二種にして其の年産額二萬函に達す。

【鰷】 鰷の種類は十數種に及び到る處之れが棲息を見る。漁業は配繩及び手繰網漁業の二種なりしも最近發動機船に依る底曳網漁業續出せり。鰷は生賣せらるゝの外悉く搾粕に製造せらる。

【蟹】 蟹の最も多く利用せらるゝものはタラバガニと稱するものにして、沿海到る處に棲息し就中西海岸及び亞庭灣口に多く、專ら刺網を使用して漁獲せらる。蟹は少量の生賣を除くの外全部罐詰及び塩詰に製造せらる、大正六年は共の産額十二萬函、價額參百十六萬五千餘圓に上れるが、漁獲高漸減の傾向を呈せるを以て大正九年工場の合同を行ひ、蟹の濫獲を防ぐと共に一面製品の改良統一を計り、重要水産物として共の聲價を擧ぐるに努め居れり。

【昆布】 昆布は共の分布顧る廣く全沿海殆ど產せざるなく、就中西海岸及び亞庭灣に多產す。西海岸に於ては有部以南西能登呂に至る間及び海馬島最も多く品質亦良好なり。亞庭灣に於ても大泊、池灣澤間は產額最も多く品質西海岸に次ぎ、東海岸は品質一般に劣れり。昆布は豊凶隔年にして凶年には豊年の二分の一にも達せざることあり。

【鯨】 春夏の候海岸近くに回游するも尠からず、種類は春期には克鯨多く夏期は長鬚鯨を主とし座頭鯨之れに亞ぐ。捕鯨は現時東洋捕鯨株式會社にて行はれ亞庭灣内札塔に根據を置き、毎年捕鯨船一隻乃至二隻を使用し從業せらる。捕獲頭數は年に依り消長ありと雖も、大正十年の如きは八十二頭の多きに達せしも漸次減少し、大正十四年には三十六頭、昭和元年には四十九頭、昭和二年には三十九頭、昭和三年に於ては三十六頭を捕獲せり。

【鰛鮫獸】 海豹島は我國唯一の鰛鮫獸蕃殖場にして、米領プリヒロフ群島及び露領コンマンドルスキー群島と共に北太平洋に於ける三大棲息地として並び稱せらる。明治三十八年樺太の我領有に歸するや直に獵獲を禁止し、尋で之れが蕃殖狀態を調査し、翌明治三十九年より年々監視員を駐在せしめ專ら鰛鮫獸蕃殖保護及び調査に從事せしめたり。明治四十四年英米露と條約の結果大正元年より之が獵獲を開始せり。

▲水産物總價額

種類＼年度	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年
鰊	二三、七九六、六五九 円	九、九〇五、九七六 円	二三、七二六、七二三 円	一四、六五六、七五六 円
鱒	二、四六七、一三八	一、〇三四、一九三	二、六四七、三五八	一、二一九、三五八
鮭	四八三、三七九	三四八、九二四	三四四、三七九	三三三、九〇四
鰷	二、二三三、一三〇	二、一〇九、八三五	一、七五五、九九九	一、五六八、四三九
鱈	五五、五四九	八九、九二九	二九、五四〇	二九、三四〇
鰛鮫獸	六二一、五六三	一、〇四〇、〇四六	一九八、九七一	二八一、二三五
蟹	八五三、五六五	三五五、五七三	七七八、八九九	六四三、二九八
昆布	四九、九〇三	四三、一〇九	八五、八四六	二四、七三三
鯨	二七、三五〇	三三、一六〇	一三、三五〇	一四、三五三
鮫	三五、四三三	三五、八三一	四八、三五四	三九、二八九
貝類	四〇、三五〇	七四、三七〇	一〇〇、〇四七	一〇〇、〇四七
其他	七七四、八三一	六五四、三八〇	六六一、二九五	六六一、二九五
計	二〇、三八〇、九四四	一五、七〇五、三一〇	二〇、三五七、四三三	二〇、八〇〇、六一〇

【鱒鮭人工孵化事業】

大正十三年度より幌内川支流保惠川上流に五百萬粒收容の鮭人工孵化場を設置し、翌十四年度更に多蘭泊上流に二百萬粒收容の孵化場を設置せしに共に共の成績良好なり。採卵數を示せば次の如し。

孵化場＼年度	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年
保意多蘭泊	二、三七五、八七八 三、三四四、六〇〇	六、三五三、八八八 八、一五四、三〇〇	六、三九〇、一九三 一四、一六八、四七七	五、二七七、三三〇 七、三五五、九三七

圖表對照統計

◇鰊漁獲高（生鰊の重量にして、百石を二萬貫として計算したるもの）

年度	支廳	敷香	元泊	豊原	大泊	本斗	眞岡	泊居	計
昭和元年	貫	七、一四八、七四〇	五、三九、六八〇	三、九、七四〇	四、九六九、一八〇	五、三五、八四〇	一、八五三、六八〇	一、八五三、二五〇	九、一四五、一五〇
同二年	貫	五、一〇五、一三八	六、三八、九〇	三、一〇五、一三八	六、三八、九〇	三、一〇五、一三八	一、一三、二六四	一、一三、二六四	八、一七、三五六
同三年	貫	七、一四八、七四〇	五、三九、六八〇	三、九、七四〇	四、九六九、一八〇	五、三五、八四〇	一、八五三、六八〇	一、八五三、二五〇	九、一四五、一五〇
同四年	貫	五、一〇五、一三八	六、三八、九〇	三、一〇五、一三八	六、三八、九〇	三、一〇五、一三八	一、一三、二六四	一、一三、二六四	八、一七、三五六

◇鱒漁獲高（生鱒重量にして一尾三百六十匁として計算したるもの）

年度	支廳	敷香	元泊	豊原	大泊	本斗	眞岡	泊居	計
昭和元年	貫	二、九五、一七五	一、六四、七二〇	一、六四、七二〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、九七、一六〇
同二年	貫	一、一五、一三八	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇
同三年	貫	一、一三、二六四	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇
同四年	貫	二、九五、一七五	一、六四、七二〇	一、六四、七二〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、九七、一六〇

◇鮭漁獲高（生鮭の重量にして一尾九百匁として計算したるもの）

年度	支廳	敷香	元泊	豊原	大泊	本斗	眞岡	泊居	計
昭和元年	貫	三三五、九〇五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一九七、一六五
同二年	貫	一、一五、一三八	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一九七、一六五
同三年	貫	一、一三、二六四	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一九七、一六五
同四年	貫	三三五、九〇五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一四四、四三五	一九七、一六五

◇鱈漁獲高（生鱈の重量にして一尾八百匁として計算したるもの又は）

年度	支廳	敷香	元泊	豊原	大泊	本斗	眞岡	泊居	計
昭和元年	貫	二、八〇五、一七五	一、六四、七二〇	一、六四、七二〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、九七、一六〇
同二年	貫	一、一五、一三八	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇
同三年	貫	一、一三、二六四	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇
同四年	貫	二、八〇五、一七五	一、六四、七二〇	一、六四、七二〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、六五四、二四〇	一、九七、一六〇

◇鰈漁獲高（生鰈の重量にして百石を二萬貫として計算したるもの）

年度	支廳	敷香	元泊	豊原	大泊	本斗	眞岡	泊居	計
昭和元年	貫	五、四一〇、〇〇〇	五、三九、六八〇	三、九、七四〇	四、九六九、一八〇	五、三五、八四〇	一、八五三、六八〇	一、八五三、二五〇	九、一四五、一五〇
同二年	貫	三、二四六、〇〇〇	三、二三、八〇八	一、八六二、四四〇	三、一八一、八〇八	三、二三、八四〇	一、一一、二六四	一、一一、二六四	五、四八、九〇
同三年	貫	五、四一〇、〇〇〇	五、三九、六八〇	三、九、七四〇	四、九六九、一八〇	五、三五、八四〇	一、八五三、六八〇	一、八五三、二五〇	九、一四五、一五〇
同四年	貫	三、二四六、〇〇〇	三、二三、八〇八	一、八六二、四四〇	三、一八一、八〇八	三、二三、八四〇	一、一一、二六四	一、一一、二六四	五、四八、九〇

◇蟹漁獲高

年度	支廳	敷香	元泊	豊原	大泊	本斗	眞岡	泊居	計
昭和元年	貫	一、一五、一三八	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇
同二年	貫	一、一三、二六四	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇
同三年	貫	一、一五、一三八	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇
同四年	貫	一、一三、二六四	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇

◇昆布製品額

品種	支廳	敷香	元泊	豊原	大泊	本斗	眞岡	泊居	合計	金額
反昆布	布								貫	円
長昆布	布								貫	円
花切昆布	布		五、五五						貫	円
折口昆布	布								貫	円
田口昆布	布								貫	円
足折昆布	布								貫	円
目ノ字昆布	布								貫	円
細工昆布	布								貫	円
其他	布								貫	円
計										

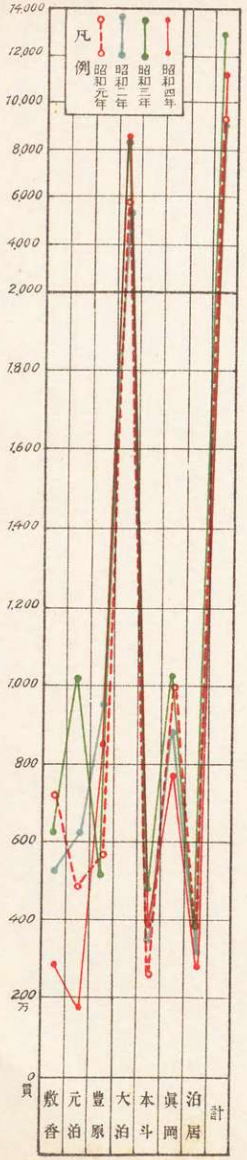
◇昆布獲高

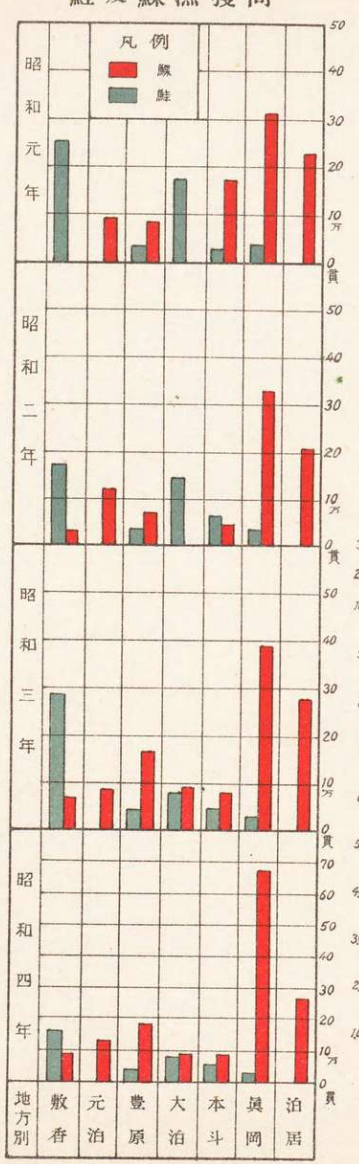
年度	支廳	敷香	元泊	豊原	大泊	本斗	眞岡	泊居	計
昭和元年	貫	一、一三、二六四	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇
同二年	貫	一、一五、一三八	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇
同三年	貫	一、一三、二六四	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇
同四年	貫	一、一五、一三八	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、四三、二〇〇	一、九七、一六〇

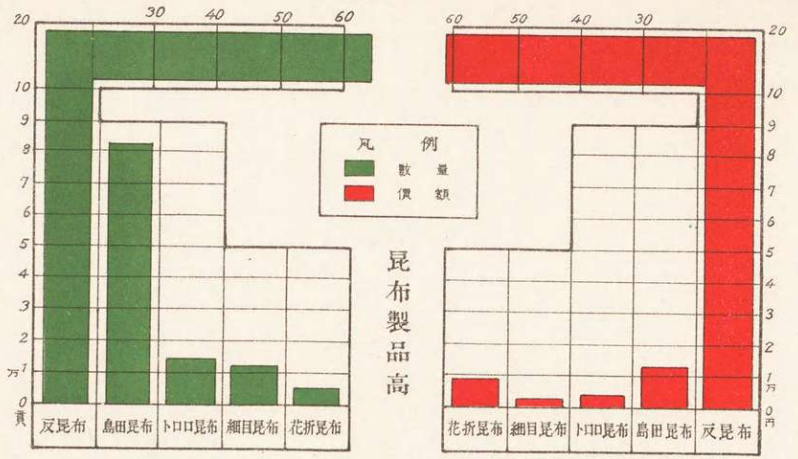
◇腦肭獸蕃殖狀況

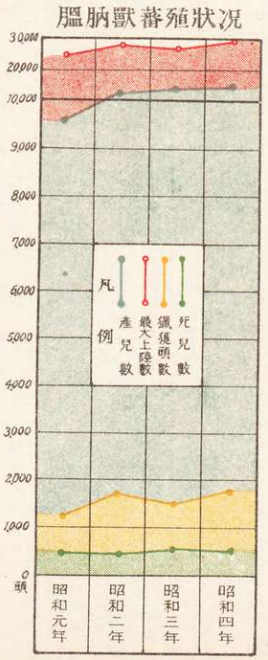
年別	最大上陸數	産兒數	死兒數	獵獲頭數
昭和元年	二、四一、三三五 頭	九、六五四 頭	四、三五 頭	一、三三 頭
同二年	二、八〇九、八〇八	一、一二、三二〇	五、五四〇	一、一七、五〇八
同三年	二、七一、八〇〇	一、〇八、四〇〇	五、三五〇	一、一七、五〇八
同四年	二、九一、七八四	一、一三、〇〇〇	五、四〇	一、一七、五〇八

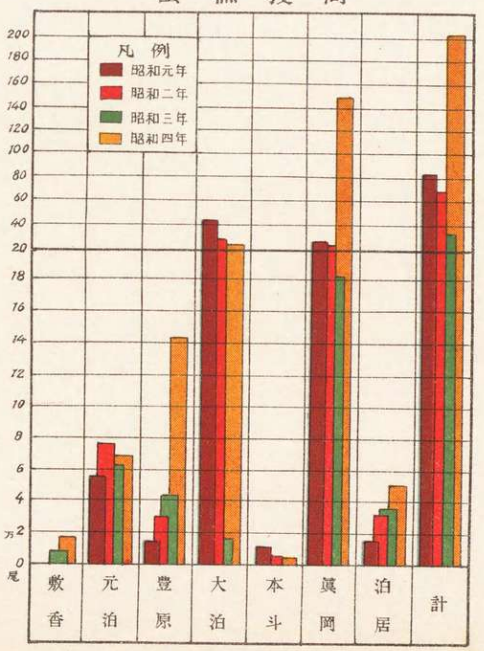
樺太水産業

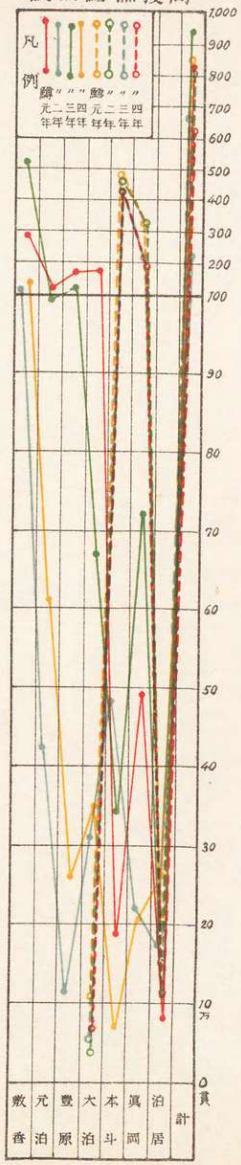

鰊漁獲高
凡例
昭和元年
昭和二年
昭和三年
昭和四年
敷香
元泊
豊原
大泊
本斗
眞岡
泊居
計


鮭及鱒漁獲高
凡例
鱒
鮭
昭和元年
昭和二年
昭和三年
昭和四年
地方別
敷香
元泊
豊原
大泊
本斗
眞岡
泊居


凡例
數量
價額
反昆布
島田昆布
トロロ昆布
細目昆布
花折昆布
昆布製品高


鰛魚蕃殖狀況
凡例
産卵數
最大上陸數
孵化稚魚數
死卵數
昭和元年
昭和二年
昭和三年
昭和四年


蟹漁獲高
凡例
昭和元年
昭和二年
昭和三年
昭和四年
敷香
元泊
豊原
大泊
本斗
眞岡
泊居
計


鱒及鱈漁獲高
凡例
鱒 元年 二年 三年 四年
鱈 元年 二年 三年 四年
敷香
元泊
豊原
大泊
本斗
眞岡
泊居
計

樺太廳調査

■商工業

【商業】新領土の通弊として所謂一攫千金を夢想し、浮薄なる商人の渡來する者頗る多かりしが、爾來幾多經濟界の變動は斯かる不健全分子を驅逐し漸次堅實なる發展をなしつゝありしが、大泊港の開港せられし以來外國貿易の發展により面目頓に一新し、次で大正十一年眞岡港の開港、港灣の築港、鐵道の開通、道路の新設等に伴ひ愈々繁盛の氣運に赴きつゝあり。

▲豊原町は鐵道本線と豊眞線の分岐點に當り交通の中心たり、大泊町は本島の玄關、物資の呑吐港にして、眞岡町は西海岸唯一の商業地なり。

▲其の他西海岸に本斗、野田、泊居、惠須取、東海岸に落合、榮濱、元泊、知取、敷香等の各地は夫々特殊の使命を有し、開拓交通の普及と相俟つて漸次發展なしつゝあり。

【會社】會社設立の狀況は産業の發達に伴ひ大規模の企業漸次增加し、殊に近年各種工業を目的とする大會社の設立益々增加の傾向を示せり。

▲樺太に本店を有する會社（昭和三年末現在）

種別	會社數	資本金	拂込金
株式會社	二九	一、四〇、八五〇、三〇〇	八、二九六、八三〇
合資會社	一四	三、一四四、九五〇	一、八九一、七一九
合名會社	三	一、九八三、一〇〇	一、三四四、六三四
計	三六	一四四、四五三、八五〇	八四、四五三、三〇五

▲樺太外に本店を有する會社（昭和三年末現在）

種別	會社數	資本金	拂込金
株式會社	四	一六六、三六六、六五〇	二一、四八三、三五
合資會社	二	六〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇
合名會社	二	五六、〇〇〇	五六、〇〇〇
計	八	一六六、八六二、六五〇	二三、二八三、三五

■工業

本島は天産物豊富にして水産、林産、農産等の原料は無限なる上に助成原料たる石炭無盡藏と稱せらるゝも、內地に比し勞銀及び金利の高率に依る障害勘からず、今其の概況を見るに本島に於ける昭和三年に於ける各種生産物總額九千五百六十八萬五千二百十圓中、工産物は五千二百五十三萬九十七圓にして約五割五分を占め、之れを十年前の大正七年の實數生産總額三千七百五十六萬九千三百六十六圓中、工産物一千七百九十八萬七千八百四十二圓に對比すれば著しき、發展と云はざるべからず、然れども無限の助成原料を有する樺太に於ては資本と勞力の供給により猶一層の顯著なる發展を見るに至らんか。

富有なる樺太の天産物を如何に利用すべきかに就ては領有の初期に於て夫々斯道の專門家により調査研究の結果テレビン油製造、樟腦製造、木材乾餾、製箆製造、パルプ製造等の試驗其の他醋酸、石灰、木精及び木タール製造且つ副産物たる木炭の移出奬勵、針葉樹の利用は建築材、鐵道用材の外製紙原料たるパルプ製造用に誘導せられたる結果今日の盛大を見るに至たれり。

【パルプ】樺太材木の利用に就いてパルプ製造なすを最も得策となし、之れが奬勵に努めたりしも、當時我が國に於けるパルプ事業甚だ不振にして、且つ樺太の事情の未だ一般に知悉せられざりし爲め、特殊の保護も企業者の意を惹くに至らざりしが、漸次民間調査も進み大正二年始めて大泊に王子製紙株式會社の工場創設せられ、次で泊居に樺太工業株式會社工場の設置を見るに至たれり、時恰も歐洲大戰に際會しパルプの輸入杜絶せるのみならず、却つて逆輸出の狀態を示すに至りし爲め、玆に形勢一變し工場增設氣運を醸成し、現在八工場、製産年額パルプ十五萬噸、洋紙二億萬ポント此の價格四千五百萬圓に及び之れが所要資材三百七十萬石を要し、現時本邦パルプ資材の大半を供給する狀況となれり。

▲パルプ資材移出高

大正十二年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年
六、六二〇、〇〇〇 斤	九、五五〇、〇〇〇 斤	一〇、七〇〇、〇〇〇 斤	一二、五六〇、〇〇〇 斤	一二、四九九、六三〇 斤

【醸造業】移住者の增加に伴ひ酒類の醸造を企圖するものありしが、氣溫の低下に對する設備の不完全に基因し好結果を得る能はざりしも、設備の完全に專念せる結果、今や內地に比し敢えて遜色なき醇良品を生産するに至れり。

新殖民地殊に泛寒の地なるを以て、酒精飲料の需要比較的多きも當初は概して製品不良の爲め、自然內地よりの移入酒に依り需要を滿たし來りしも、年々品質向上改善せられ、一面人口の急激なる增加に伴ひ、生産量亦逐年增加し現在醸造場五十餘を有し、早晩移入酒を驅逐すべく努力なしつゝあり。

【醬油】醬油の醸造は酒類に比し未だ幼稚なるも將來相當發展すべし。

【罐詰業】本島に於ける罐詰業（主に蟹罐詰）は明治四十二年以來事業勃興し、大正六年度には工場數百十一、製産額十三萬六千八百八十四函、三百三十七萬餘圓に達したりしが、其の後濫獲の結果次第に其の量を減じたるを以て、大正九年以來蟹罐詰工場の合同を行ひ工場數に制限せしめたる結果、昭和四年の現在は工場數十七、製産額六萬四千三百二十二函、百四十七萬九千餘圓に達せり。

【澱粉製造】農産工業に馬鈴薯を原料とする澱粉製造あり、一時非常の勢を以て發展し大正七年には製産戸數二百八十八、製造額四萬四千四百四十一圓に達したりしも漸次不況を招き、現在にては僅かに片影を止むるに過ぎず。

■貿易

本島の貿易は我が領有後政府の産業上に於ける奬勵と、天然資源利用に基づく民間企業の勃興により、漸次發達の趨勢を示し、殊に製紙工場設置以來急激なる發展を遂げたりしが、歐洲戰爭の爆發將た終熄等の影響により波瀾重疊たる如き、消長を經過したりしも其の後財界の平靜に歸するに及び、次第に回復し最近の發達は實に目覺しきものあり左に累年の比較を圖表に示す。

【內地貿易】本島貿易の大部分を占むるものは內地貿易にして、總額一億圓を突破するの盛況を呈せり。左に最近十ケ年間の貿易圖表を示す。

【外國貿易】本島の貿易港は現在大泊、眞岡の二港にして、大泊港は明治四十二年、眞岡港は大正十一年に開港を見たり。貿易先は最初殆ど朝鮮、支那露領東部亞細亞に限られしが、大正八年以降朝鮮貿易は杜絶し、大正十二年より關東州との貿易を見、大正十四年には英國、米國及び獨逸等の間に貿易を見るに至りしが更に大正十五年以來西班牙、埃及をも加へるに至たれり。

本島の貿易は最初朝鮮への鐵道枕木其の他の木材、支那への木材、露領亞細亞への石炭等の輸出及び朝鮮より帆條其の他鐵道用金具、露領亞細亞より鰒、鮭等魚類の輸入に始まり。明治四十三年の貿易額輸出十萬六千八百九圓輸入三十萬七千九百七十九圓、計四十一萬四千七百八十八圓を算したりしが爾來漸次減退し、大正六年最も不振を極めしが、翌大正七年より再び漸增し大正十年には輸出八十七萬九千八百二十八圓、輸入四萬四千七百二十五圓を示したり、越えて大正十一年二月眞岡港の開港を見るも貿易は却て逆調を呈し減少せるが大正十四年には著しく輸入增加し、貿易總額百三十六万圓を超え實に領有以來の首位を占めたり。其の後稍や衰退傾向なりしも昭和三年には貿易總額七十五萬五千餘圓、其の中輸入超過五十三萬九千二百九十四圓となれり、左に最近數年間に於ける貿易の消長を圖表に示めせり。

圖表對照統計

◇パルプ資材の消費及生産高

年次	資材丸太消費高	生産高 パルプ	生産高 洋紙	價格 パルプ	價格 洋紙	計
	千石	噸	千封度	千円	千円	千円
大正十三年	一、四九五、五四三	九二、三四六	四〇、〇四三	一五、二四九	六、〇一五	二一、二七五
同十四年	一、七五二、〇八〇	一〇二、六二五	四七、七五五	一七、六五三	七、五一四	二五、一六七
昭和元年	二、三五三、〇八〇	一三四、〇九三	六二、七〇五	二一、〇七〇	一〇、〇八一	三一、一五一
同二年	二、三五八、三七〇	一三三、〇八一	一六四、八六四	二三、〇九四	二五、一四	三五、一八
同三年	二、三九三、一〇四	一五〇、四六	一九七、九二七	二一、七五三	三五、三六	四五、〇九七

▲備考 一、括弧内は洋紙製造にのみ使用したる數量
昭和二年に於て洋紙生産高の急増したるは知取、泊居、惠須取三工場一齊に洋紙製造をなしたるに依る。

◇酒類製造及移入酒高

酒造年度 種別	酒造高	移入酒高
	千円	千円
大正十三酒造年度	三、四五五、六一七	一、四三五、三一〇
同十四酒造年度	三、三一〇、二一三	一、三一〇、九三五
昭和元酒造年度	三、三六一、二五五	一、三一〇、八四〇
同二酒造年度	三、三六一、二五五	一、三一〇、八四〇
同三酒造年度	三、四五五、二一八	一、四三五、三一〇

▲備考 酒造高は清酒、燒酎、酒精及酒精含有飲料の合計に揭上せり。

◇累年貿易表

年次	外國貿易	內地貿易	總額	指數
	円	円	円	
大正三年	二九〇、八六九、〇〇〇	一三〇、〇一七、〇〇〇	一三〇、〇一七、〇〇〇	一〇〇
同四年	二三四、〇三一、〇〇〇	一一五、九三三、〇〇〇	一一五、九三三、〇〇〇	九六
同五年	二一二、九〇五、〇〇〇	一九一、八一三、〇〇〇	一九一、八一三、〇〇〇	一四二
同六年	二六八、〇九九、〇〇〇	一九八、六三一、〇〇〇	一九八、六三一、〇〇〇	一四七
同七年	二九〇、〇〇二、〇〇〇	一九一、九三一、〇〇〇	一九一、九三一、〇〇〇	一四二
同八年	三一〇、二五五、〇〇〇	二〇三、〇三一、〇〇〇	二〇三、〇三一、〇〇〇	一五一
同九年	四一一、二二二、〇〇〇	二四一、九三五、〇〇〇	二四一、九三五、〇〇〇	一七九
同十年	四一一、九二二、〇〇〇	二四一、九三五、〇〇〇	二四一、九三五、〇〇〇	一七九
昭和元年	四一一、九二二、〇〇〇	二四一、九三五、〇〇〇	二四一、九三五、〇〇〇	一七九
同二年	四一一、九二二、〇〇〇	二四一、九三五、〇〇〇	二四一、九三五、〇〇〇	一七九
同三年	四一一、九二二、〇〇〇	二四一、九三五、〇〇〇	二四一、九三五、〇〇〇	一七九

◇內地貿易表

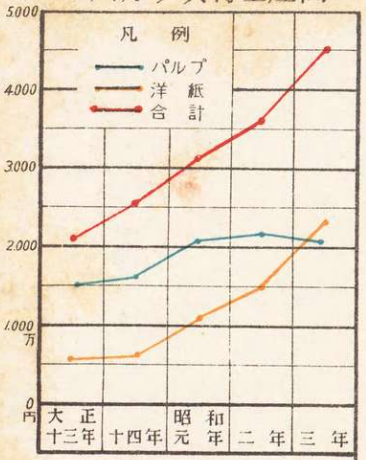
年次	總額	移出	移入	移出超過（△印入超）
	円	円	円	円
大正八年	二八六、一四五、三一〇	二三、四五五、一三〇	二六二、六八九、一八〇	△二三九、二三四、〇五〇
同九年	三一〇、七六九、九〇五	二〇、一六九、一四四	二九〇、六〇〇、七六一	△二七〇、四三一、六一七
同十年	二六一、九〇五、一四四	一六、一四四、一三五	二四五、七六〇、九〇九	△二二九、六一六、七七四
昭和元年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
同二年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
同三年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
同四年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
同五年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
同六年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
同七年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
同八年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
昭和元年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
同二年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
同三年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇
同四年	二四一、九三五、〇〇〇	一五、三五〇、〇〇〇	二二六、五八五、〇〇〇	△二一一、二三五、〇〇〇

◇外國貿易表

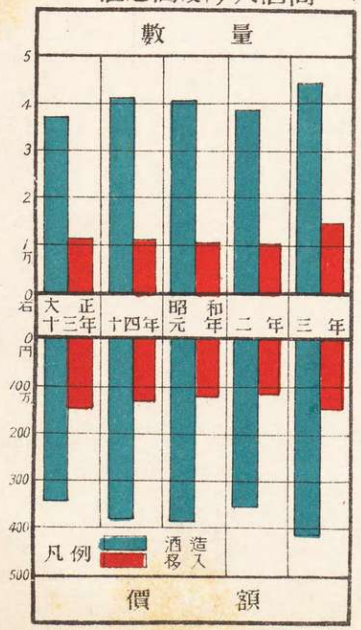
區別	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年
	円	円	円	円	円	円
ソヴイエト聯邦（北樺太、沿海州、尼港、天津、太沽、秦皇嶋） 輸入	二三二、八五四、八〇九	六、九一七、二四一	一八、二四一、九五五	一、三三一、二三七	一、五九、一五五	五、九六一、一六三
ソヴイエト聯邦（北樺太、沿海州、尼港、天津、太沽、秦皇嶋） 輸出	四四、八〇九	一、八〇九、二四一	一九、九五五、四四九	三五、三四一、三五五	二、一五五、一五五	三、三三一、八〇九
關東州 輸入	二三二、八五四、八〇九	六、九一七、二四一	一八、二四一、九五五	一、三三一、二三七	一、五九、一五五	五、九六一、一六三
關東州 輸出	四四、八〇九	一、八〇九、二四一	一九、九五五、四四九	三五、三四一、三五五	二、一五五、一五五	三、三三一、八〇九
其他の外國 輸入		七、〇〇〇、〇〇〇	八八〇、〇〇五	三四、一五六	四四〇、四九〇	四四、〇九五
其他の外國 輸出						
英國、米國、獨逸、西班牙、埃及、白耳義、蘭領印度 輸入	二九、一八、八五四	一、三三一、二三七	三四、一五六	二、三六、三五五	一九、三五三、二五五	七、一五、一五五
英國、米國、獨逸、西班牙、埃及、白耳義、蘭領印度 輸出	三七、三四九	五七九	七、五五一	八、七五五	一、三五九、一五五	一、三三一、二三七
合計 輸入	二九、一八、八五四	一、三三一、二三七	三四、一五六	二、三六、三五五	一九、三五三、二五五	七、一五、一五五
合計 輸出	三七、三四九	五七九	七、五五一	八、七五五	一、三五九、一五五	一、三三一、二三七
超過 輸入	二九、一八、八五四	一、三三一、二三七	三四、一五六	二、三六、三五五	一九、三五三、二五五	七、一五、一五五
超過 輸出	四四、八〇九	一、八〇九、二四一	一九、九五五、四四九	三五、三四一、三五五	二、一五五、一五五	三、三三一、八〇九
超過 輸入	二九、一八、八五四	一、三三一、二三七	三四、一五六	二、三六、三五五	一九、三五三、二五五	七、一五、一五五
超過 輸出	四四、八〇九	一、八〇九、二四一	一九、九五五、四四九	三五、三四一、三五五	二、一五五、一五五	三、三三一、八〇九

商業

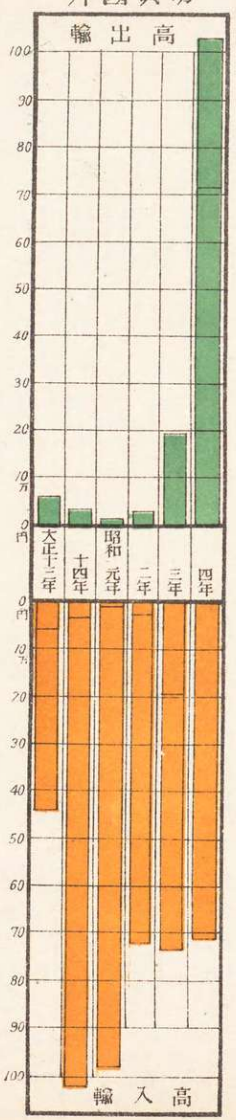
パルプ資材生産高



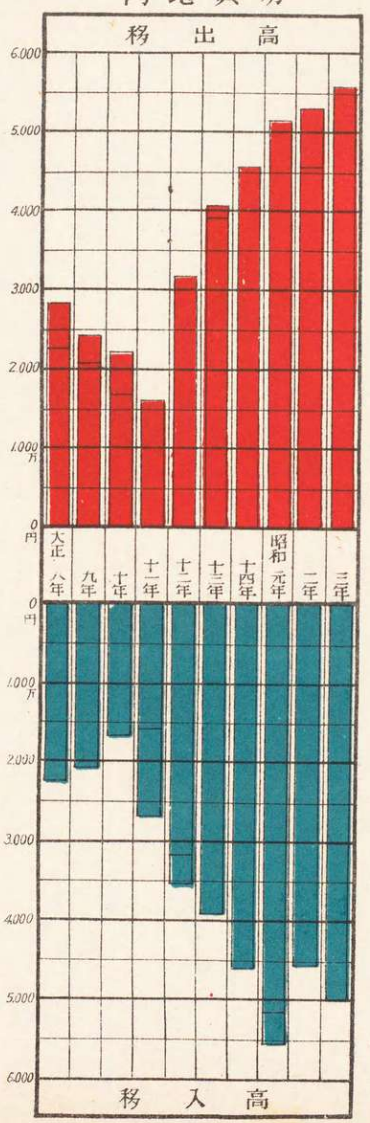
酒造高及移入酒高



外國貿易

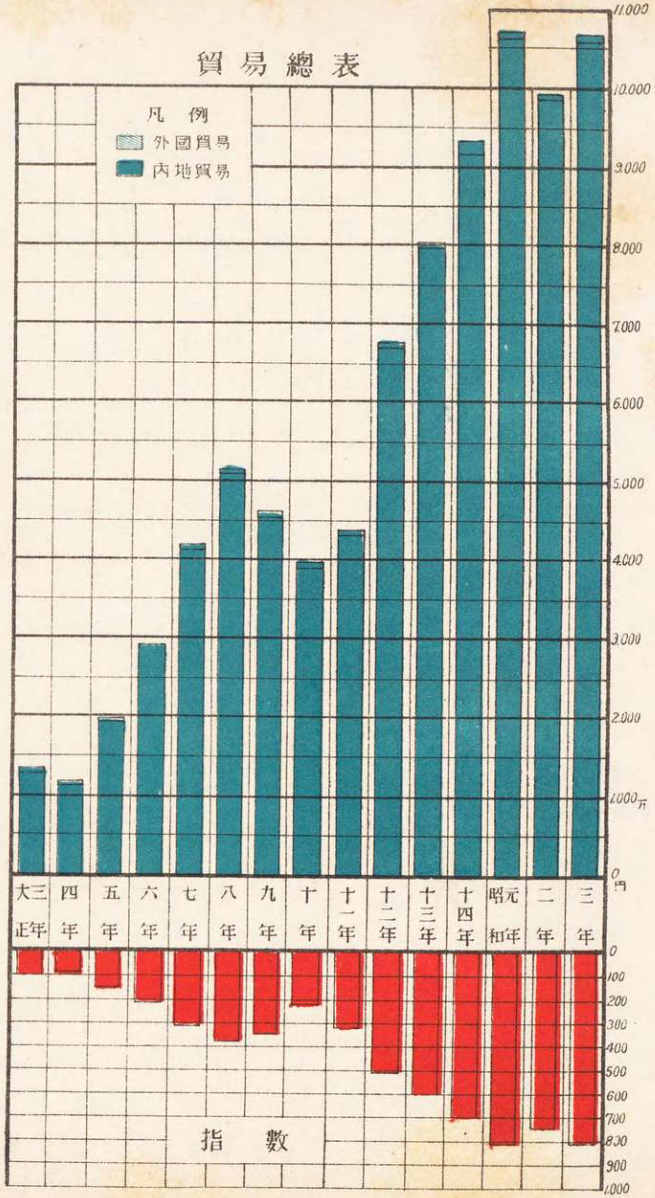


内地貿易



樽太廳調査

貿易總表



南洋の部

（昭和五年度南洋廳調査）

■沿革及地勢

【沿　革】南洋群島とは舊獨領中、北太平洋中に散布する幾多の島嶼の總稱なり、之を大別してマーシヤル群島、マリアナ群島、カロリン群島の三とす。

マーシヤル群島は千五百年代に發見せられ、千七百八十一年英國人マーシヤル氏の探檢に依り、始めて世界に紹介された、故に**マーシヤル**群島と稱せしものなり、形式全からざるに乘じ千八百十五年獨逸之れを占領したるも、其の後千八百八十八年英獨間の協約を以てギルバート島を英領とし、本群島及びナウル群島を獨逸の殖民地となせり。

マリアナ群島は千五百二十一年葡萄牙の航海者マゼラン氏か發見し、千五百六十五年西班牙の領に歸せり、時の皇帝ヒリツプ四世の皇后マリアナの名を冠しマリアナ群島と稱せり、千八百九十九年米西戰爭の結果、西班牙政府は比律賓及びマリアナ群島中の巨島グアム島を米國に割讓せり、獨逸は西班牙が戰後財政の困難を極むるを奇貨とし、千八百九十九年マリアナ及びカロリンの二群島を九百六十萬圓にて買收せり。

カロリン群島は千五百二十七年葡萄牙人ディエゴ・ダ・ロシヤ氏が發見し、千六百八十六年西班牙の領有に歸す、時の國王カロロ、二世の名を冠しカロリン群島と稱せり。

千八百九十九年獨逸は本群島をマリアナ群島と共に買收せり、以上三群島は歐洲大戰に依り千九百十四年我海軍の占領となり、次で對獨平和條約の結果、千九百二十一年、我國之れが委任統治を爲すことゝなり、千九百二十二年南洋廳を置かる。

【位　置】南洋群島は帝國の南に位し、マリアナ、カロリン、マーシヤルの三群島より成り、東は米領ハワイに對し西はフイリツピン諸島及び蘭領セレベス島に隣り、南はニューギニア島及びビスマルク諸島に面し北は小笠原島及び硫黄諸島に連る、マリアナ群島中に介在する米領グアム島を除き、三群島の島數約六百二十三の多きに達す。

南洋群島經緯度（日本統治區域）

自 東經 一三〇度——至 東經 一七五度
自 北緯 〇度——至 北緯 二二度

最端地名
極東 マーシヤル群島ミレ島
極西 西カロリン群島トコベー島
極南 東カロリン群島グリーニツチ島
極北 マリアナ群島ウラカス島

【面　積】廣袤實に南北千二百哩、東西二千五百哩の海面を抱擁する南洋群島も陸地の面積は極めて狹小にして、島嶼、岩礁の類一千四百五十八餘を合算して尙大約百四十方里に過ぎず、略ぼ我が沖繩縣の（一四四方里）又は東京府（一三八方里）の面積に等し。

▲面積及び島數（但し面積中米領グアム島を除く）

群島別	島別	面積
マリアナ群島	一四	四一、四三（方里）
カロリン群島	五四九	八五、五九
マーシヤル群島	六〇	一二、三〇
計	六二三	一三九、三二

支廳管區別	島別	面積
サイパン支廳管內	一四	四一、四三（方里）
ヤップ支廳管內	八五	一四、六四
パラオ支廳管內	一〇九	三一、〇〇
トラック支廳管內	二四五	八、五五
ポナペ支廳管內	一三八	三二、六五
ヤルート支廳管內	三二	一一、〇五
計	六二三	一三九、三二

▲ヤルート支廳管の內三十二島嶼は更に八百六十七の礁島より成れり

主要島別	附屬島嶼	面積
マリアナ群島	サイパン島	一二、〇〇（方里）
	テニアン島	六、三五
	ロタ島	八、一〇
西カロリン群島	ヤップ島	一四、〇〇
	パラオ諸島本島	二四、〇〇
	アンガウル島	〇、五〇
東カロリン群島	春島	一、四三
	夏島	〇、五八
	水曜島	一、五一
	ポナペ島	二四、三四
	クサイ島	七、五〇
マーシヤル群島	ヤルート島	〇、五一



【人　種】各群島に於ける土人の種類に關しては、所說區々にして一定せず、或は馬來島より東遷せしと傳へ、或は東方ポリネシア人の西進したるものと稱す、各群島土人の言語、風俗及び習慣の相異なる點より察するに、極めて錯雜せる人種なることは明かである、之れを概別して「チヤモロ」「カナカ」の二南洋種族とす。

チヤモロ族は性溫順勤勉にして其の容貌風姿稍カナカ族に勝る、衣食住も亦比較的進歩し、カナカ族とは此等の點に於て、殆ど其の趣を異にせり、上流者に在りては洋風清楚の住宅を有し、居常洋裝をなし、中には樂器を備へ寬活なる文化生活を營む者尠からず。

カナカ族は概して性溫順にして快活なり、然れども徒に天惠の餘澤に享樂し、極めて懶惰にして勞働を嫌ひ且つ恬淡にして事物に就き研究執着なき弊あり、文化の程度亦低く其の居常尙未だ原始的狀態を脫せざる者多し、カナカ族は其の數に於てチヤモロ族の約十六倍に達し、群島を通じて土人の數四萬九千の內約四萬六千はカナカ族之れを占む。

【風　俗】言語——言語は各群島毎に特種の言語を有し、彼我共に相通ぜず。

邦語——占領以來約十年間、島民學校又は公學校にて、一般島民兒童に教育を施し來りたるを以て、今日に於ては、群島の大部分は、邦語を以て一般に通ずるに至つた。他に西班牙語、英語又は獨逸語を解する者稀ならず。

衣服——チヤモロ族及び東部カナカ族の一部分の外、概して裸體跣足なりしが、文化の進歩と共に、裝身の風漸次進化を認めらる、カロリン群島には裸體の者多く、マーシヤル、マリアナ群島には着衣の者多し、着衣は凡て男女共洋風にして、男子はシヤツの下に半袴を穿ち、女子は更紗金巾等にて作れる西洋婦人の寢衣樣のものを用ふるを普通とす。下層の島民は殆ど寢具を用ゐず、一般に林投（タブ）樹の葉を以て編みたる敷物を敷き、座臥飮食凡て此の上に於てす、未開人種の常としては古來より文身、裂耳、耳環、腕環、脚環、頸飾、彩身等に依り身體に裝飾を爲すの風習あるも、教育及び宗教の感化に依り斯かる惡風は減少しつゝあり。

食物――天惠に裕なる本群島は、食物を得るに頗る簡易なるを以て、少數の上流者を除き多くは主食として野生の植物を用ひ、間々漁獲したる魚介に簡單なる調理を加へて食す。最近に至りては、米を食する者次第に增加せり、鳥獸肉、貝及び魚類果實等は最も彼等の好んで食する所なり。飲料水は概して雨水又は椰子の實より之れを得るも、中には溪流又は井戸に賴るものあり。

住居――衣食既に單純にして原始的なるが如く、住居も亦一般に粗雜にして簡單なり、家屋は共の構造に於て群島各共の特色を現はせり、西カロリン群島の諸島は稍進歩せる構造を有し、殊にパラオ諸島の家屋に在りては堅牢にして床土高く、採光通風等に多少の考慮を拂へるものあるを認められる。間々規模宏大なる集會所とも云ふべき建物を有せり。又種々の彫刻共の他裝飾を施し濃麗なる色彩を加へたるものあり。

トラック諸島及びマーシヤル群島に於ける住居は概して劣等なる床上或は土間に莫産を敷き椰子の葉を編みたるものを以て其の周圍を覆ひて起臥す、屋根は一般に椰子又は林投樹を葉を以て葺けり、資産ある者又はチヤモロ族の多くは、木造又はコンクリート亞鉛板葺の洋風家屋に居住す、殊にサイパン島に於けるチヤモロ族に在りては、洋風コンクリートの家屋軒を連ね、集つて一街區を成せり。

【戸口】 南洋群島の總人口は昭和四年十月一日現在**六萬四千九百二十一人**にして內本邦人一萬六千二百二人、島民四萬八千六百十七人、外國人百二人なり、而して一方里の人口密度は四百六十五人にして之を支廳別にせば人口の最も稠密なるはトラック支廳管內の千八百四人、ヤルート支廳管內の八百七十五人之れに次ぎ、最も稀薄なるはパラオ支廳管內の二百五十三人なり。

■運輸交通

▲本群島の交通は專ら船舶艇に依るのみにして道路は僅に主要島に存するに過ぎず又軌道も「サイパン」島に於て南洋興發株式會社の事業用鐵路を兼ねて交通に便ぜると「アンガウル」島に於ける採鑛所燐鑛運搬用として僅に存するに過ぎず。

▲海上の交通は內地、群島主要島間の連絡航路及群島主要島と共の離島間の連絡航路の幹支に岐れ、本群島の交通大系をなすと共に又唯一の郵便線をなせり、沿海交通は主として島民の唯一の交通機關たる「カノー」に依れり。

▲內地群島間の連絡航路は之を東廻、西廻、東西連絡及サイパン線の四線に分れ、各船共神戸を起點とし門司を經橫濱を發濟港として群島に來航す。

▲東廻は「サイパン」を經て同島より東折して「トラック」、「ポナペ」、「クサイ」を經て「ヤルート」に至る、共の神戸よりの往復航程は七、三一〇浬にして、所要日數約四十九日なり。

▲西廻は「サイパン」に至り更に西南下して「テニアン」、「ヤップ」、「パラオ」を經て蘭領「セレベス」島「メナード」港に至る。(復航來領「ミンダナオ」島「ダバオ」に寄港す)共の神戸よりの往復航程六、九五〇浬にして所要日數約四十六日なり。(年六回は「アンガウル」港に寄港す、都合により「ソンソル」、「トコベー」に寄港することあり)

▲東西連絡は橫濱より南下して「パラオ」に直行し、東折して「トラック」、「ポナペ」、「クサイ」を經て「ヤルート」に至る、共の神戸よりの往復航程は九、二六〇浬にして所要日數約五十八日なり。

▲サイパン線は二見「サイパン」に寄港し「テニアン」に至る、共の神戶よりの往復航程は三、七九〇浬共の航海日數約三十日なり。

▲使用船舶五隻噸數一六、二三四噸、年航海度數東廻六回、西廻一三回、東西連絡五回、サイパン線六回にして、日本郵船株式會社の受命する所なり。

▲共の他群島の主要島及び離島間に左記の航路あり、名稱左の如し。

▲マリアナ群島線（「サイパン」を中心として「マルアナ」群島を南北に航海す）

▲ヤップ、パラオ離島線（「ヤップ」及「パラオ」を中心として「ヤップ」、「パラオ」支廳管內の離島を航海す）

▲ポナペ、トラック離島線（「ポナペ」、「トラック」を中心として「ポナペ」、「トラック」支廳管內の離島と濠洲委任統治領の「ケピアン」、「ラバウル」間を航海す）

▲マーシヤル群島線（「ヤルート」を中心として「ヤルート」支廳管內の離島及び「ヤルート」と英領「ギルバート」島間を航海す）

▲使用船舶五隻、總噸數一、四五四噸、航海度數五十七回にして南洋貿易株式會社の受命する所なり。

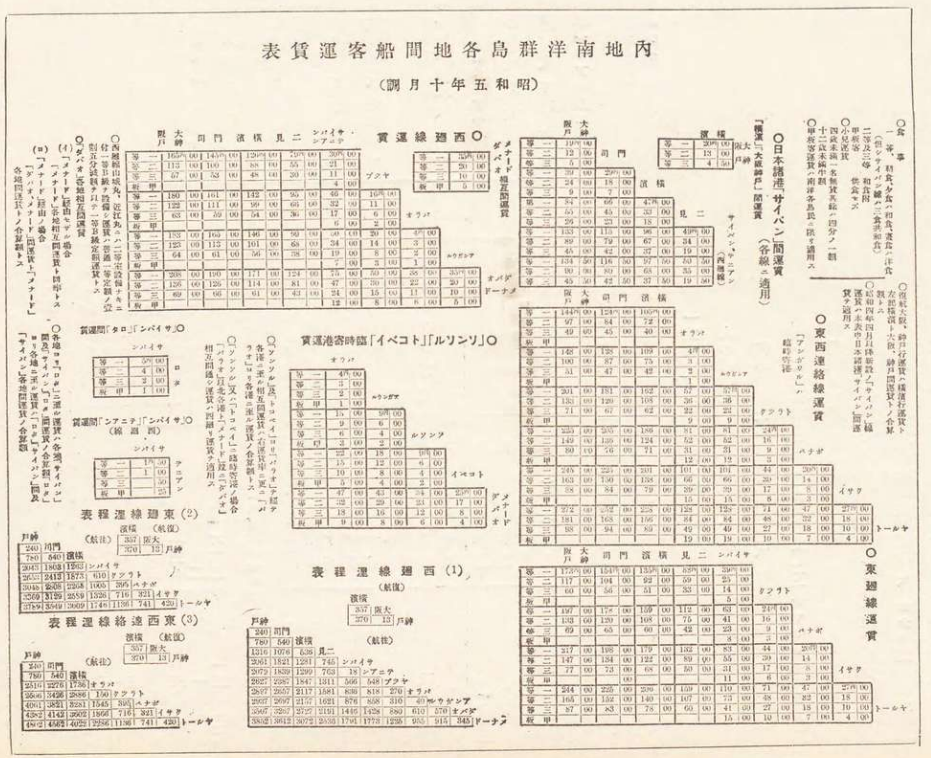
右の外環礁內航路として「パラオ」諸島巡航線「トラック」諸島巡航線あり。

▲「パラオ」諸島巡航線は「コロール」島を中心として「パラオ」諸島東岸、西岸各地及「ペリリュー」、「アンガウル」各島を交互に巡航するものにして年航海數一五六回とす。

▲トラック諸島巡航線は夏島を中心として春島、秋島、冬島、月曜島、水曜島及金曜島各地を交互に巡航するものなり。

內地南洋群島各地間船客運賃表

（昭和五年十月調）



商業

本群島人口の大多數を占むる島民は一般に購買力乏しく且つ邦人々口も一萬六千人餘に過ぎず、而かも各島に散在せるを以て、商業未だ幼稚の域を脱せず今各島に於ける物價の平均値段及び勞働賃銀等を左に示す。

◇邦人本籍別人口表（昭和四年十月一日現在）

府縣別	サイパン	ヤップ	パラオ	トラック	ボナペ	ヤルート	計
北海道	四	一	一	一	一	一	九
青森縣	一六	一	一	一	一	一	二一
岩手縣	一七	一	一	一	一	一	二二
宮城縣	五	一	一	一	一	一	一〇
秋田縣	八	一	一	一	一	一	一三
山形縣	四	一	一	一	一	一	九
福島縣	四	一	一	一	一	一	九
茨城縣	四	一	一	一	一	一	九
栃木縣	四	一	一	一	一	一	九
群馬縣	四	一	一	一	一	一	九
埼玉縣	九	一	一	一	一	一	一四
千葉縣	一四	一	一	一	一	一	一九
東京府	一三	一	一	一	一	一	一八
神奈川縣	一五	一	一	一	一	一	二〇
新潟縣	一〇	一	一	一	一	一	一五
富山縣	三	一	一	一	一	一	八
石川縣	一三	一	一	一	一	一	一八
福井縣	一三	一	一	一	一	一	一八
山梨縣	五	一	一	一	一	一	一〇
長野縣	一九	一	一	一	一	一	二四
岐阜縣	一一	一	一	一	一	一	一六
静岡縣	一七	一	一	一	一	一	二二
愛知縣	一五	一	一	一	一	一	二〇
三重縣	一一	一	一	一	一	一	一六
滋賀縣	八	一	一	一	一	一	一三
京都府	一二	一	一	一	一	一	一七
大阪府	一三	一	一	一	一	一	一八
兵庫縣	一九	一	一	一	一	一	二四
奈良縣	一一	一	一	一	一	一	一六
和歌山縣	一四	一	一	一	一	一	一九
鳥取縣	一一	一	一	一	一	一	一六
島根縣	一三	一	一	一	一	一	一八
岡山縣	一四	一	一	一	一	一	一九
廣島縣	一四	一	一	一	一	一	一九
山口縣	一四	一	一	一	一	一	一九
德島縣	一四	一	一	一	一	一	一九
香川縣	一四	一	一	一	一	一	一九
愛媛縣	一四	一	一	一	一	一	一九
高知縣	一四	一	一	一	一	一	一九
福岡縣	一四	一	一	一	一	一	一九
佐賀縣	一四	一	一	一	一	一	一九
長崎縣	一四	一	一	一	一	一	一九
熊本縣	一四	一	一	一	一	一	一九
大分縣	一四	一	一	一	一	一	一九
宮崎縣	一四	一	一	一	一	一	一九
鹿兒島縣	一四	一	一	一	一	一	一九
沖繩縣	一四	一	一	一	一	一	一九
朝鮮	一四	一	一	一	一	一	一九
臺灣	一四	一	一	一	一	一	一九
樺太	一四	一	一	一	一	一	一九
合計	三四五	四一	一八一	四七	八〇	八〇	七一〇三

種目	サイパン島	ヤップ島	パラオ島	トラック島	ボナペ島	ヤルート島
白米（一等）斗	四、三〇	四、三〇	四、三〇	四、三〇	四、三〇	四、三〇
外米 同	三、一五	三、七〇	三、七〇	三、七〇	三、七〇	四、六五
糯米 同	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	六、四〇	五、〇〇	五、〇〇
改良麥 同	二、一〇	二、一〇	二、一〇	二、一〇	二、一〇	三、〇〇
大豆（三等）升	〇、一八	〇、二五	〇、二五	〇、二五	〇、二五	〇、四〇
小豆（三等）同	〇、一八	〇、二五	〇、二五	〇、二五	〇、二五	〇、三五
干瓢 百匁	〇、〇八	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一四
椎茸（丸） 同	〇、三〇	〇、三〇	〇、三〇	〇、三〇	〇、三〇	〇、四〇
寒天 本	〇、三〇	〇、三〇	〇、三〇	〇、三〇	〇、三〇	〇、四〇
白玉粉 百匁	〇、一八	〇、一八	〇、一八	〇、一八	〇、一八	〇、二五
小麥粉 同	〇、一一	〇、一〇	〇、一一	〇、一一	〇、一一	〇、一五
乾海苔（上）帖	—	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一三
板昆布 百匁	〇、一六	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、二〇
素麺 同	〇、一三	〇、一六	〇、一九	〇、一九	〇、一九	〇、二五
鰹節（本節）同	一、〇五	一、〇〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、五〇
澤庵 同	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、二〇
梅干（上） 同	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、二〇
肉（上） 同	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、二〇
肉（上） 同	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、二〇
豚 百匁	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、二〇
鷄卵 箇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一五
味噌（白） 百匁	〇、一三	〇、一三	〇、一三	〇、一三	〇、一三	〇、一八
醬油（上） 升	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、一五	〇、二〇
練乳 罐	〇、五〇	〇、五〇	〇、五〇	〇、五〇	〇、五〇	〇、七〇
清酒（四合入）本	〇、八〇	〇、八〇	〇、八〇	〇、八〇	〇、八〇	一、一〇
麥酒 同	〇、五〇	〇、五〇	〇、五〇	〇、五〇	〇、五〇	〇、七〇
サイダー 同	〇、三〇	〇、三〇	〇、三〇	〇、三〇	〇、三〇	〇、四〇
豆腐丁 同	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一五
木炭 貫	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一五
薪 同	〇、一〇	〇、一〇	—	〇、一〇	〇、一〇	〇、一五
玉葱 同	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一五
甘藷 同	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇八
馬鈴薯 同	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇八
胡瓜 同	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一五
食鹽 百匁	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇五	〇、〇八
砂糖（三盆白）斤	〇、二〇	〇、二〇	〇、二〇	〇、二〇	〇、二〇	〇、三〇
生魚（鰹） 百匁	〇、一〇	—	〇、一〇	〇、一〇	—	—
同 上（鮪）同	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇	〇、一五
同 上（鯵）同	〇、一〇	—	〇、一〇	〇、一〇	—	—

圖表對照統計

◇人口密度表

支廳別	人口	面積	一方里人口密度
サイパン支廳管內	二六、五九六人	四三・〇カ里	四〇〇人
ヤップ支廳管內	一六、八七九	四六・〇〇	三六五
パラオ支廳管內	一五、四三二	三〇・五五	五〇五
トラック支廳管內	一八、五一五	三八・〇〇	四八七
ポナペ支廳管內	二六、八九二	三五・六五	七五三
ヤルート支廳管內	九、〇六三	一四・〇〇	六四五
全群	一、一三、八〇九	一、六六一・〇五	六八〇
ヤルート支廳管內	九、〇六三	一四・〇〇	六四五

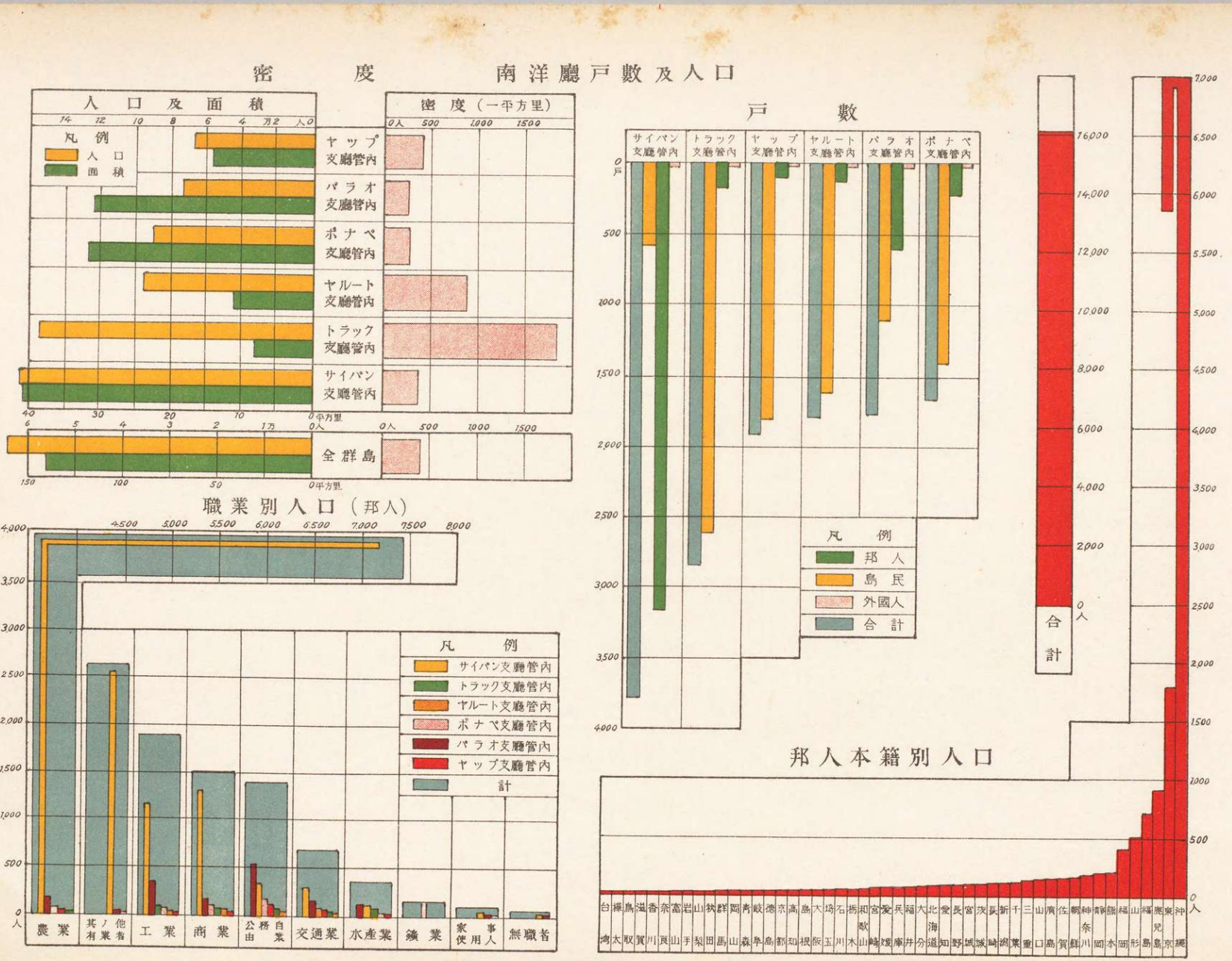
◇戸數表（昭和四年十月一日現在）

居住者國別	サイパン支廳管內	ヤップ支廳管內	パラオ支廳管內	トラック支廳管內	ポナペ支廳管內	ヤルート支廳管內	計
邦人 內地人	三、一五〇戸	九月	六一戸	一六八	三三	一四	四、三七五
邦人 臺灣人	三、九三一	九三	六、八三〇	一、七四一	三、四九六	一、六六七	一四、六四四
邦人 朝鮮人籍民	四三五	一、七〇一	一、三五一	二六一	一四九	一四	三、八〇五
島民 カロリン人	一、三〇五	一、七〇一	一、三五一	二六一	一四九	一四	四、五二一
島民 チモール人	四三五	一、七〇一	一、三五一	二六一	一四九	一四	四、五二一
島民 ヤップ人	三、九三一	一、七〇一	一、三五一	二六一	一四九	一四	八、五二一
島民 モナ人	四三五	一、七〇一	一、三五一	二六一	一四九	一四	四、五二一
島民 ナウル人	四三五	一、七〇一	一、三五一	二六一	一四九	一四	四、五二一
外國人 英國人	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
外國人 米國人	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
外國人 佛國人	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
外國人 獨國人	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
外國人 西班牙人	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
外國人 其ノ他ノ國人	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
外國人 計	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
合計	四、三七五戸	四、五二一	四、五二一	四、五二一	四、五二一	四、五二一	四、五二一

◇邦人職業別人口表（昭和四年十月一日現在）

職業別 ＼ 支廳別	サイパン支廳管內			ヤップ支廳管內			パラオ支廳管內			トラック支廳管內			ポナペ支廳管內			ヤルート支廳管內			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
農業 內地人	四、三五二	四、二四九	八、六〇一	二二	一三	三五	二四	一九	四三	一一	四	一五	一一	七	一八				四、四〇〇	四、三〇二	八、七〇二
農業 朝鮮人	一、三〇七	一、二四八	二、五五五	六	二	八	一五二	一二一	二七三	四九	三五	八四	七一	五二	一二三				一、六〇五	一、四六三	三、〇六八
水產業 內地人	一四	一〇	二四				(一)		(一)										一四	一〇	二四
水產業 朝鮮人	一二	一三	二五	一		一	一二	一	一三	一		一	一		一				一五	一四	二九
鑛業 內地人							九	一	一〇										九	一	一〇
鑛業 朝鮮人							七	一	八										七	一	八
工業 內地人	一四	一二	二六	一		一	一三	一	一四	一		一	一		一				一六	一三	二九
工業 朝鮮人	一、〇六一	一、〇五	二、一一六	一二	一	一三	一、一三一	一〇一	一、二三二	一四	一	一五	一〇	一	一一				一、一八一	一、〇五九	二、二四〇
商業 內地人	一四	一二	二六	一		一	一三	一	一四	一		一	一		一				一六	一三	二九
商業 朝鮮人	四三九	四二	八四一	九	一	一〇	一一二	一〇	一二二	一四	一	一五	一〇	一	一一				四八四	四五	九二九
交通業 內地人	一二	一〇	二二				六	一	七										一八	一一	二九
交通業 朝鮮人	二六	二五	五一	三		三	三五	三	三八	一		一	一		一				六六	三三	九九
公務自由業 內地人	一三	一〇	二三				四	一	五										一七	一一	二八
公務自由業 朝鮮人	一二	一一	二三	一		一	一三	一	一四	一		一	一		一				一七	一二	二九
其ノ他ノ有業者 內地人	一四	一二	二六				五	一	六										一九	一三	三二
其ノ他ノ有業者 朝鮮人	一、八〇一	一、七五六	三、五五七	一四	一三	二七	一、三五一	一、二三一	二、五八二	一六	一五	三一	一二	一一	二三				一、八九三	一、八二六	三、七一九
家事使用人 內地人	一三	一〇	二三				四	一	五										一七	一一	二八
家事使用人 朝鮮人	一、〇四一	一、〇二二	二、〇六三	一二	一二	二四	一、二三一	一、一三一	二、三六二	一四	一三	二七	一〇	一〇	二〇				一、一〇七	一、〇八八	二、一九五
無職業 內地人	一		一																一		一
無職業 朝鮮人	九一	八二	一七三	三	二	五	一〇一	九二	一九三	一二	一一	二三	八	七	一五				一、〇三四	九三四	一、九六八
合計 內地人	一、六四〇	一、五九四	三、二三四	一二	一三	二五	一、六四〇	一、五九四	三、二三四	一二	一三	二五	一二	一一	二三				一、六八六	一、六三四	三、三二〇
合計 朝鮮人	一二、七四一	(一)	一二、七四一	二四五		二四五	一、八一五	(一)	一、八一五	一三五		一三五	八四		八四	三五		三五	一三、九六五	(一)	一三、九六五
合計 計	一三、八八一	(一)	一三、八八一	二六九		二六九	三、四五五	(一)	三、四五五	一四八		一四八	九六		九六	三五		三五	一五、六五一	(二)	一五、六五一

▲備考　括弧内の數字は臺灣籍民の數なり


密度
南洋廳戸數及人口
人口及面積
密度（一平方里）
凡例
人口
面積
ヤップ支廳管内
パラオ支廳管内
ポナペ支廳管内
ヤルート支廳管内
トラック支廳管内
サイパン支廳管内
全群島
戸数
凡例
邦人
島民
外國人
合計
職業別人口（邦人）
農業
其ノ他有業者
工業
商業
公務自由業
交通業
水産業
鑛業
家事使用人
無職者
凡例
サイパン支廳管内
トラック支廳管内
ヤルート支廳管内
ポナペ支廳管内
パラオ支廳管内
ヤップ支廳管内
計
邦人本籍別人口
合計
台湾 樺太 鳥取 滋賀 香川 奈良 富山 岩手 山梨 秋田 島根 群馬 岡山 青森 岐阜 徳島 京都 高知 島根 大阪 埼玉 石川 栃木 和歌山 宮崎 愛媛 兵庫 福井 大分 北海道 愛知 長野 宮城 茨城 長崎 新潟 千葉 三重 山口 広島 佐賀 鹿児島 朝鮮 神奈川 福岡 熊本 福島 山形 福岡 鹿児島 東京 沖縄

南洋廳調查

■土地

本群島の總面積約百四十平方里即ち約**二十二萬町歩**にして、內農耕適地又は椰子林適地として、推定的七萬町歩を算せらる、然るに既に開墾せられたる農耕地として約一萬二千三百町歩、椰子林としては約二萬七千八百町歩、合計四萬二百町歩にして、尙**二萬九千七百餘町歩**の土地は將來に向つて經濟的利用の時機を俟てり。

■農業

島民の農業狀態は頗る原始的にして、玉蜀黍、甘藷、タピオカ、薯蕷、甘蔗、麵麭果、鳳梨、バナナ、密柑等を頗る粗放的寧ろ放任的に植栽せり、從つて其の收量も少なく品質も亦劣れり。近時邦人の增加と農業上の施設とは島民の啓發並に生活の向上と相俟つて著しく開拓を誘發しつゝあり。左に主要農作物の生產高及び價格を圖表を以て示せり。

■家畜及家禽

本群島の畜產は頗る幼稚の域を脫せず、從つて其の飼養管理の方法も見るべきものなし。牛は主としてサイパン支廳管內に多く役牛にして、豚は島民好んで之れが飼養を爲し管內畜產の最たるものなり。鷄は肉用卵用として豚に次ぐ重要なるものなるが、從來放飼の狀態にあり產卵率も著しく少し。

島別	牛	馬	豚	緬羊	山羊
サイパン島	二、三五〇	一二	二、三一二	一	三五
ヤップ島	七三	一	一四七	一	一五
パラオ島	一、二九	八	一、二四六	二	五六
トラツク島	三四	一	六六八	一	二九三
ポナペ島	二八五	一	三、六二一	五	一、一〇一
ヤルート島	四	一	六六六	一	一
計	三、八七五	三〇	八、九七〇	七	一、九九九

島別	鷄	鷲	吐綬鷄
サイパン島	三五、三一〇	五八五	三五
ヤップ島	二、五九三	二七	一
パラオ島	九、九八〇	一四八	一三
トラツク島	四、〇九八	四六五	一
ポナペ島	九、八二八	二九〇	一二
ヤルート島	六、八八〇	三一九	九六
計	五八、六七〇	一、八三四	二四五

■糖業

製糖業は本群島主要產業の一にして大正六年サイパン島に於て、西村拓殖株式會社及び南洋殖產株式會社の二社の創業に始まり、大正十年十二月新に資本**金三百萬圓**の南洋興發株式會社創立せられ、前記二社の事業を繼承し今日に及べり。現在甘蔗の栽培せらるゝはサイパン島及びテニアン島にしてサイパン島に於ける同社の製糖能力は千二百英噸の分蜜製糖機一基一晝夜約**百二十萬斤**の甘蔗を壓搾し得。而してテニアン島に於ては既に製糖工場を設置し昭和四年期より製糖を開始する豫定なり。

■林業

海岸低地にありては椰子樹、紅樹(マングローブ)は至る所に繁茂し蓊鬱たる林相を現すもの少からず。椰子は本群島に於ては林產として首位を占むると共に又た食料、飲料として島民の日常缺く可からざるものなるのみならず、其の果核中の仁肉を乾燥したるものは、即ち**コプラ**にして本群島の移出品中の主なるものなり。本群島より內地に移出する年額凡そ一萬噸、此の金額**二百萬圓**に上れり。林產物としては其の他象牙、椰子、紅樹、鐵木、ウカル、クマナ、マンゴー等あり何れも移出高年々相當金額に達するもの多し。

尙椰子及びコプラの年產額を左に圖表を以て示せり。

■林野產物

島別	用材		薪炭材		木炭		其の他	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
サイパン島	三、三〇〇石	一〇、六二四円	二、八〇〇石	三、四九三円	四六、九五〇貫	一、〇〇〇石	四、三五〇円	
ヤップ島	四七五	一、二四一	—	—	八七〇	一七一	—	—
パラオ島	二、六二三	八三〇	一、〇六〇	五三、七二〇	—	—	—	—
トラツク島	二四五	四、〇四三	一、二六五	二五、七〇五	—	—	—	—
ポナペ島	一、三〇三	六一八	三〇	一五	三五、八五〇	五、九四五	—	—
ヤルート島	三一〇	一、二七〇	三一〇	三、三〇〇	一、三〇〇	二、〇〇〇	一、一〇〇	一、一〇〇
計	八、四二九	一八、六三五	一四、三〇五	四六、二三三	五七、〇八〇	九、九六五	五、四五〇	五、一〇〇

■鑛業

鑛業としては、唯燐鑛あるのみ、アンガウル島の燐鑛は目下南洋廳の官營に屬し、其の蓄積量約**二百四十萬噸**と推定せられ年產額約六萬噸、此の金額百餘萬圓に上れり。アンガウル島の燐鑛の蓄積を有する島嶼にペリリュ島、ファイス島、トコベー島等あるも其の埋藏量僅少なり。アンガウル島の燐鑛は千九百三年獨逸探險隊に依り初めて發見せられたるものにして現今は南洋廳採鑛所を置き、所長及び少數の所員を以て其の業に當れり。燐鑛(精鑛)移出累年表等を左に圖表を以て示せり。

圖表對照統計

◇耕地面積表（椰子林面積を含まず）

支廳管區	田	畑	計
サイパン	一町〇反〇畝〇歩	八、九七一町八反〇畝〇歩	八、九七一町八反〇畝〇歩
ヤップ	一、二一九反八畝〇歩	一、〇四一町〇反〇畝〇歩	二、八五五町〇反〇畝〇歩
トラック	五九八反〇畝〇歩	一、三六三町〇反〇畝〇歩	三、九六一町〇反〇畝〇歩
ポナペ	一〇反〇畝〇歩	三、四六六町〇反〇畝〇歩	三、四七六町〇反〇畝〇歩
ヤルート		四七六町〇反〇畝〇歩	四七六町〇反〇畝〇歩
計	一、四九八反三畝〇歩	一〇、九〇六町〇反〇畝〇歩	一二、三六〇町〇反〇畝〇歩

◇農業戶數表

支廳管區	戶數	人口 男	人口 女	人口 計
サイパン島民	一、二一五	三、四二一	三、四六〇	六、八八一
ヤップ島民	一、九六一	三、〇九〇	三、〇九〇	六、一八〇
トラック島民	一、〇〇〇	三、〇四四	三、〇五九	六、一〇三
ポナペ島民	三、五三一	七、一二八	七、一九一	一四、三一九
ヤルート島民	一、一二四	四、三四一	四、三四二	八、六八三
合計	一、一四九、八三八	三、四二一、一六三	三、四六〇、一九二	六、八八一、三五五

◇甘蔗作付面積及產糖高

年次	作付面積	產糖高
大正八—九年	四九〇町〇反〇畝〇歩	七五五、五九〇斤
同九—十年	五五九、〇〇〇	一、九五六、〇〇〇
同十—十一年	五六八、〇〇〇	二、〇九六、〇〇〇
同十一—十二年	三五〇、〇〇〇	一、六三〇、〇〇〇
同十二—十三年	二一二、五〇〇	五、八五七、二〇〇
同十三—十四年	三七〇、〇〇〇	一四、八五五、四〇〇斤
同十四—十五年	三九六、〇〇〇	一五、三五六、八〇〇
昭和元—二年	三一九、八〇〇	一〇、七三三、〇〇〇
同二—三年	三三七、〇〇〇	一二、四三三、〇〇〇
同三—四年	三三一、五〇〇	一六、四三三、〇〇〇

◇椰子林面積及生產高

年次	椰子林面積	果實生產數	數量 コプラ	價額 コプラ
大正十二年度	三、一二三町〇反〇畝〇歩	三、七三二、一一〇個	七一八噸	一一〇、〇一六円
同十三年度	三、一〇七、〇〇〇	三、一〇四、一〇〇、〇〇〇	三五〇、〇〇〇	四九、三五五、〇〇〇
同十四年度	三、一〇七、〇〇〇	三、一〇四、一〇〇、〇〇〇	一、八〇〇、〇〇〇	三六、〇〇〇、〇〇〇
同十五年—昭和元年度	三、一〇七、〇〇〇	三、一〇四、一〇〇、〇〇〇	三、三五〇、〇〇〇	三、三五〇、〇〇〇
昭和二年度	三、一〇七、〇〇〇	三、一〇四、一〇〇、〇〇〇	三、三五〇、〇〇〇	三、三五〇、〇〇〇
同三年	三、一〇七、〇〇〇	三、一〇四、一〇〇、〇〇〇	三、三五〇、〇〇〇	三、三五〇、〇〇〇

◇燐鑛（精鑛）移出累年表

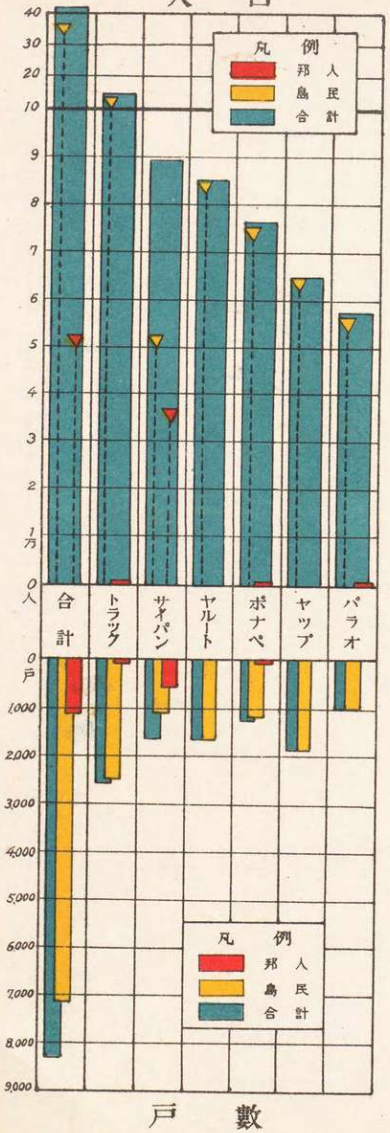
年次	數量	價額
大正六年度	四七、三五〇噸	五五、九〇七、〇〇〇円
同七年度	五五、九六九	六〇、六五九、〇〇〇
同八年度	五五、五三二	六〇、六四四、〇〇〇
同九年度	五四、八三〇	六〇、三五五、〇〇〇
同十年度	四七、三五〇	五五、九〇七、〇〇〇
同十一年度	四五、〇〇〇	五三、一〇〇、〇〇〇
同十二年度	四七、三五〇	五五、九〇七、〇〇〇
同十三年度	四五、〇〇〇	五三、一〇〇、〇〇〇
同十四年度	四七、三五〇	五五、九〇七、〇〇〇
同十五年—昭和元年度	四五、〇〇〇	五三、一〇〇、〇〇〇
昭和二年度	四七、三五〇	五五、九〇七、〇〇〇
同三年	四五、〇〇〇	五三、一〇〇、〇〇〇

◇酒類釀造高及工場（サイパン支廳管內以外になし）

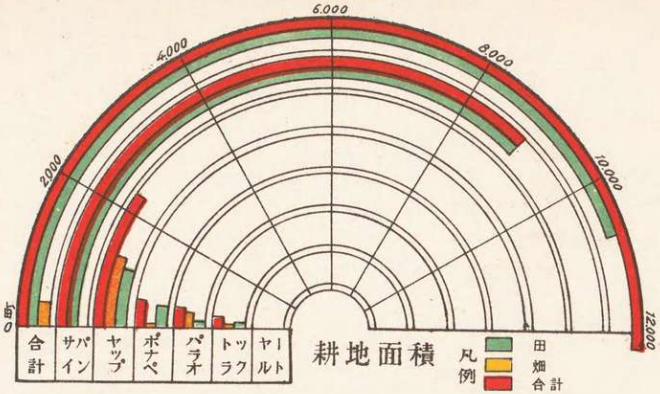
品名	石數	金額	工場別	職工人夫	一年間製造高	一年間製品價格
酒精	四、五二一、四〇〇石	一〇一、一四一円	製糖工場	九三人	一〇、三五五、九〇〇斤	三、六四七、〇四〇円
燒酎	一、一四一、三〇八	？	酒精工場	四	七、四〇〇石	四〇六、四三〇
共ノ他	夫、一九	？	製氷工場	一	七、一〇〇斤	三、一六〇
計	五、九四一、九五五		清涼飲料製造所	一	五四、〇〇〇	八一、〇〇〇
			計	二四		四、一五五、六六一

林業、糖業

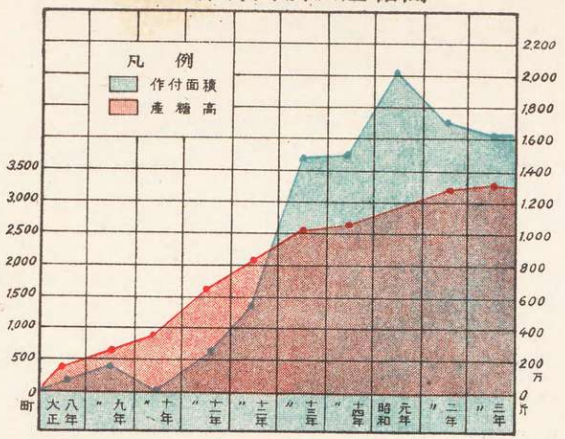
農業者戸口



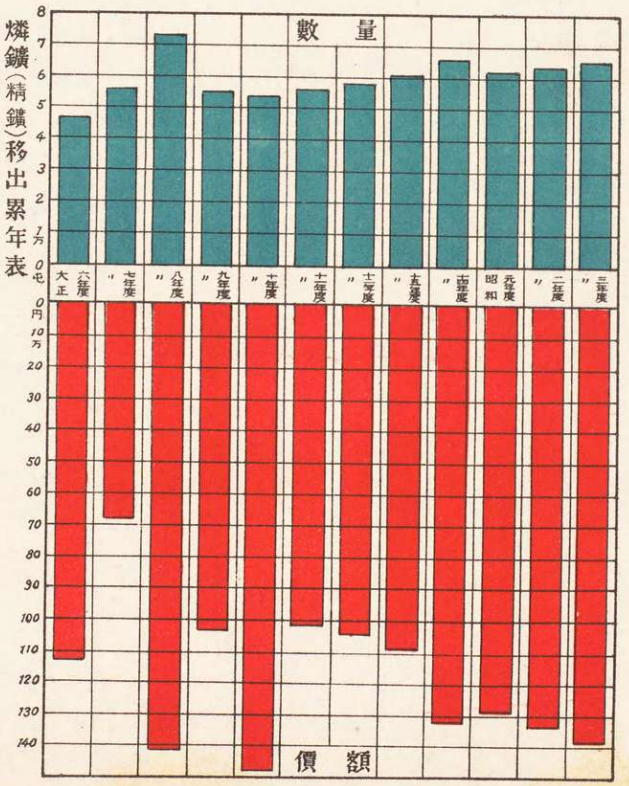
耕地面積



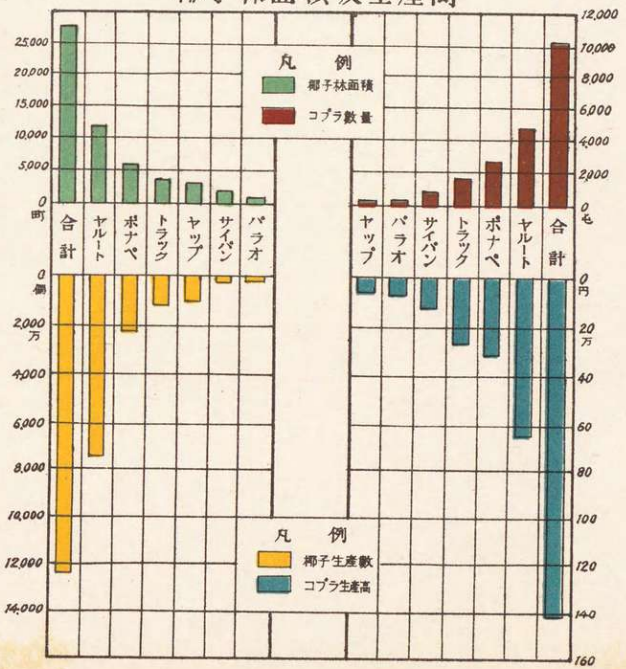
甘蔗作付面積及産糖高



燐鑛(精鑛)移出累年表



椰子林面積及生産高



南洋廳調査

貿易

移輸出貨物の主なるものは燐鑛、「コプラ」、砂糖及び酒精にして四者を合し、移輸出總額の約九十四「パーセント」を占む、其の他群島特産たる高瀬貝、海參等あるも其の額大ならず。

移輸入貨物の主なるものは米穀其の他飲食物、布帛及び布帛製品、衣類及び同附屬品、金屬品木材及び木製品等にして是等を合するときは移輸入總額の約六十九「パーセント」を占む。

南洋群島に於ける開港場は「サイパン」「パラオ」「アンガウル」「トラック」「ヤルート」の五港にして「アンガウル」港は輸入貨物に付制限を附せり。

移輸出品の殆ど全部は日本內地に移出するものにして外國に輸出するものとしては「サイパン」島より米領「グアム」島に「ヤルート」島より英領「ギルバート」島に少許の雜貨類を輸出するに過ぎず。

移輸入品の殆と全部は日本內地より移入するものにして外國より輸入するものとしては瓜哇より砂糖、蘭領「セレベス」島「メナド」、英領「ギルバート」及び米領「グアム」島等より「コプラ」雜貨等少許の輸入あるのみなり。

◇移出品別表

品目	支廳別	サイパン島	ヤップ島	パラオ島	トラック島	ポナペ島	ヤルート島	計
穀物、穀粉、澱粉類及ビ種子		—	—	—	—	一四四、四一〇	一、七一四	一六、一三四
砂糖		三、九一六、一三六	—	—	—	—	一四一	三、九一六、二七七
鰹節		—	—	—	—	二、一二六	—	二八、九九五
海參		六、一五〇	—	二八、九九五	一〇、五一二	—	一、六二六	一九、三六八
酒精含有飲料		一七、九四三	—	—	七一〇	—	—	一八、四五三
高瀬貝		—	八、六五九	六七、〇四一	—	五一〇	—	七五、一七二
眞珠		—	—	一二、四〇〇	—	—	—	一二、四〇〇
酒精		六八一、〇〇〇	—	—	—	—	—	六八一、〇〇〇
燐鑛		—	五九、〇四四	一、四六一、六三六	四九、七一九	一四四、四二九	九九、三三〇	一、七四四、七三六
コプラ		三六、一四〇	四、〇四四	四四、四二九	二七、八一二	一四、五九七	一、四四〇	一四三、三四二
木炭		七、六四〇	一、三四一	三、三四〇	一、七一〇	三、五七七	四、八三	一三、一四〇
其ノ他		五、〇八〇、二六八	九〇、四五	一、九九、六四四	二四四、六九七	一三、一四四	九六、〇四〇	五、四四七、九九八
計		五、一四〇、一七九	九九、一四三	一、六九、六四四	二四四、六九七	一三、一四四	九六、〇四〇	五、四四七、九九八

◇移入品別表

品目	支廳別	サイパン島	ヤップ島	パラオ島	トラック島	ポナペ島	ヤルート島	計
米及ビ粟		四三、一〇五	一三、八四七	一五、九一六	五七、一三三	一四、一七七	五一、一六七	一五六、八九九
蔬菜、果實及核子		三、一九六	三、九五四	三、一六六	三、〇六五	一四、三五五	四、五六九	三一、一四四
砂糖		九四、六三一	一、六一五	一三、三六六	四、六三一	一七、〇五五	一、四一五	八三、一五九
酒精含有飲料		一二、〇四三	九、四三三	六四、四八一	一八、四五一	三六、一〇一	一五、四四〇	一五五、四〇〇
果汁、鑛水、非酒精含有飲料		二四、二四四	一、一六九	四、八一三	四、〇八六	一〇、〇五五	七、一七九	三五、七六六
煙草		七五、〇四一	一一、九一六	四三、三五五	一三、一一〇	一六、八四〇	五〇、三五七	三九、七六六
石油		二六、八五三	二、七三	四四、七五九	四、八四四	九、八八八	一五、九八八	一〇四、一四五
藥材、化學藥、製藥其ノ調合及ビ爆發藥		四〇、五九二	一七〇	一七、〇四〇	四、〇四六	四、九五六	八、五八六	七四、一七二
絲縷繩索及同材料		四〇、八二三	九、三五四	四三、一三〇	三〇、六五五	一四、一一一	四四、三四三	一五三、一三四
布帛及布帛製品		三二、一四三	五、一四三	四五、八九	一二、七四五	四、七二三	五、四一一	一〇八、一七二
衣類及同附屬品		三、三四一	三、八五三	四七、八九	六、三五〇	一、四四〇	一四四、〇〇〇	二七八、三五三
製紙用パルプ紙、紙製品、書籍及ビ繪畫		二、八九	三〇五	六、一〇九	一、四四一	一八、〇九七	一八、〇九七	四三、一四二
石炭		五、一一九	六、八八	八四、九〇	六、三〇〇	一八、四四九	一四、三五五	一三七、一七三
金屬製品		一五、二一六	六、一八	一二、八七	一、四四一	一四、三三一	一四、三四七	一〇一、一四七
時計、學術器、銃砲、車輛、船舶及機械類		一二四、三四	三、八九三	一二四、八三	九、五九九	一、四四一	一〇、八一二	一五六、六三一
木材及木製品		一九、一六四	三、一八	一四、三九八	一二、三三	一八、三三一	一二、四七	一三一、三五八
其ノ他		一、八三三、三六一	一三四、八一〇	一、〇三五、一三五	三六六、四〇九	四四六、一〇三	七六八、一九	四、六四一、六九五
計		一、八三三、三六一	一三四、八一〇	一、〇三五、一三五	三六六、四〇九	四四六、一〇三	七六八、一九	四、六四一、六九五

◇輸出品別表

品目	支廳別	サイパン島	ヤップ島	パラオ島	トラック島	ポナペ島	ヤルート島	計
穀物、穀粉、澱粉類及ビ種子		四四、四一〇	—	—	—	—	七、五一〇	五一、九二〇
飲食物及煙草		五六、六八	—	—	—	—	四、七五五	六一、四二三
布帛及布帛製品		—	—	—	—	—	一、六二六	一、六二六
其ノ他		三三、七五三	—	一〇、九五一	一〇、三九一	—	一一、〇九一	六六、一二六
合計		四四、四一〇	—	一〇、九五一	一〇、三九一	—	一三、一八一	一二三、一八八

圖表對照統計

◇輸入品別表

品目	支廳別	サイパン島	ヤップ島	パラオ島	トラック島	ポナペ島	ヤルート島	計
砂糖		六〇、九四五	—	五一七	—	—	七、九一三	六九、三四四
コプラ		六六、〇一六	—	—	—	—	四五、七八八	一一、七四四
其他		二、〇四九	—	一、八四三	二、〇〇〇	—	一、八一三	一六、八一四
ノ計		一三八、〇一〇	—	二、三九七	二、〇〇〇	—	五五、五六三	一九七、九三三

◇移輸出品累年表

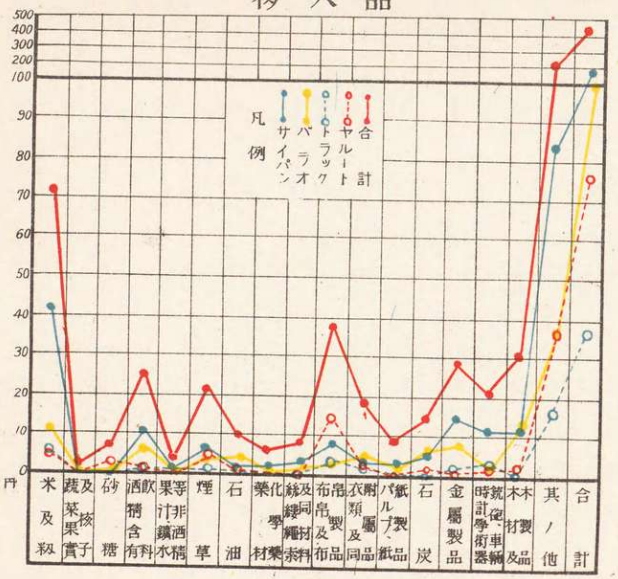
品目	年次	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年	計
アイボリーナット		五、二六〇	四、三四三	一、〇四三	—	一三、七〇〇	二四、三五五
砂糖		一一、二六、一四三	二、八三五、六一五	三、六五一、一九七	四、三五二、九七一	三、九一七、六三五	六四、八四九、六九七
輕節		—	一〇〇	—	—	—	八六、一四一
海參		三五、三一七	九、〇一五	二、〇六一	一、九一五	九、〇八	八六、一四一
酒精含有飲料		六三	一、五六五	九九	八四	八、四九九	三一、一六八
高瀨貝		一、三三七	七、三三三	一、三四一	一、三五一	一、五五二	一一、七五一
眞珠		—	—	—	—	—	三、四〇〇
精		—	九、三四〇	四、六四〇	五三、一〇〇	一、〇〇〇	六七、〇四〇
酒		一三、八三	一九、八一四	一二、九一三	一、九一三	七、九四三	一、五五四
布帛及布帛製品		一、一六、九七〇	一、一六、三五五	一、一六、三四三	一、一六、六四一	一、四九二、五五五	一、四九二、五五五
鱗		一、一六、九七〇	一、一六、三五五	一、一六、三四三	一、一六、六四一	一、四九二、五五五	一、四九二、五五五
コプラ		一、一六、九七〇	一、一六、三五五	一、一六、三四三	一、一六、六四一	一、四九二、五五五	一、四九二、五五五
木炭		四、三五五	二、一七五	一、一六一	六、四九七	一、四四二	一九、〇八三
其ノ他		八、九一三	八、六四三	一、一六一	六、四九七	一、四四二	一九、〇八三
合計		三、五五、三一二	三、八四四、五三四	六、五六八、〇九五	六、五六八、〇九五	八、三五、一三五	三、六三、一八三

◇移輸入品累年表

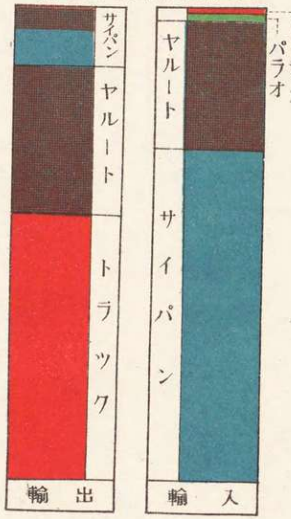
品目	年次	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和三年	計
米及ビ籾		三九二、八九二	六四、〇五九	五二、七一一	四九、〇五五	三五、九四四	二九六、〇五五
砂糖		四〇、〇九八	一五五、四九〇	一五二、一四一	一四一、一三五	一〇一、〇五五	六四九、〇五五
酒精含有飲料		一三〇、〇一三	八〇、九二一	一五五、七六八	一四一、一三五	一〇一、〇五五	六四九、〇五五
果汁・鑛水・等非酒精含有飲料		八、一三九	一三、九七〇	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
煙草		一三、七四九	一五、九七〇	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
皮毛・骨角・齒牙甲殼及其製品		一六、八〇八	八〇、〇九〇	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
石油		一六、八〇八	八〇、〇九〇	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
藥材・化學藥・製藥		八一、九五三	九八、三五九	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
其ノ調合及ビ爆發藥		五一、七五二	六八、三五九	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
染料・顏料・塗料類及ビ填充料		二一、二五	一九、三五九	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
絲縷・繩索及同材料		四九、八三五	六八、三五九	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
布帛及布帛製品		二四八、九五六	三四五、七一一	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
衣類及同附屬品		一五七、一五六	一五五、七六八	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
製紙用パルプ紙・紙製品・書籍及ビ繪畫		四二、一〇一	四、七六八	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
石炭		九、三六一	一三、九三一	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
陶磁器・硝子及硝子製品		一三、一六五	一三、九三一	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
金屬製品		一三、一六五	一三、九三一	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
時計・學術器・銃砲類		一三、一六五	一三、九三一	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
車輛・船舶・機械ノ類		一三、一六五	一三、九三一	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
コプラ		一三、一六五	一三、九三一	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
木材及ビ木製品		一三、一六五	一三、九三一	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
其ノ他		一三、一六五	一三、九三一	一四、七一一	一四、一三五	一〇、〇五五	七一、〇五五
合計		二三五、三五五	二四、三五五	二四、三五五	二四、三五五	二四、三五五	二四、三五五

南洋群島貿易

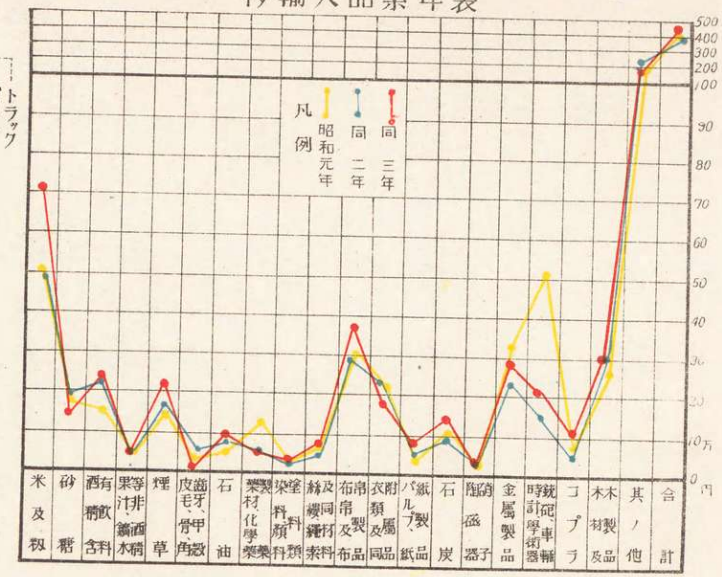
移入品



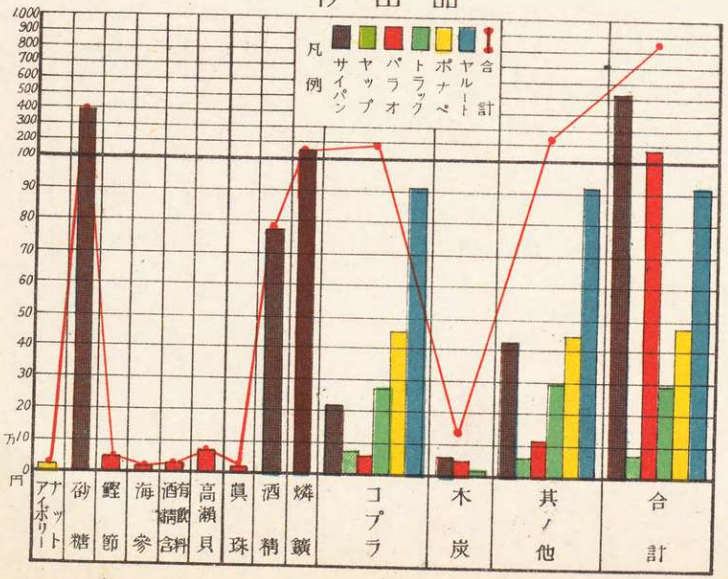
輸出入島別比較



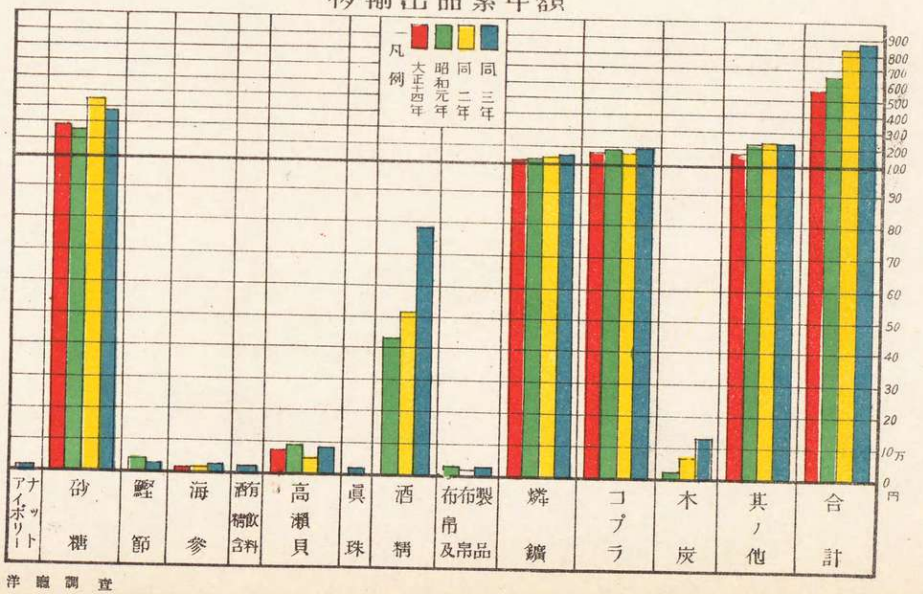
移輸入品累年表



移出品



移輸出品累年額



■水産業

全群島を通じて魚類の主なるものは、鰹、鮪、鮫、鰺、鰯、鰆、鯵、鯵、鰆等にして各島至る處之れを得るに難からずと雖も、漁業方法の幼稚なると、海底は殆んど珊瑚礁なる爲め漁撈作業の困難なるとに因り、其の生産額多からず、從つて之れが製造物も亦極めて少し。鰹、鮪に付ては特に其の漁期、漁獲方法等調査中に屬するを以て近き將來に於て、大量の生産を擧ぐるに至らん。

貝類は其の種類頗る多きも、商品として價値あるものは高瀬貝及び螺貝の二種とす、高瀬貝は主として西カロリン群島のヤップ、パラオの近海に多く産し釦の原料として重用せらる。元來本群島は海水清澄にして、水温高く、石灰質に富める等貝類の繁殖上極めて適當の素質を有せるを以て、永久性を帶びたる本島の重要輸出品たる可し。

最近パラオ諸島及びボナペ島に於て此の天惠を利用し眞珠養殖を試みる者あり、其の成績に付きては未だ試驗中に屬するも、將來有望なる事業の一なるべし、本島に於ける重要水産物漁獲高及び水産製造物高を左表に示す。

◇水産物漁獲高及水産製造物高

魚類		サイパン島	ヤップ島	パラオ島	トラック島	ボナペ島	ヤルート島	計
鰹	數量（貫）	七、〇六五	三〇〇	三五、〇三二	一、三〇〇	四七		四三、六五七
	價額（圓）	一、一二九	三〇〇	三五、〇三二	一、〇六八	四七		四八、四四四
鮪	數量（貫）	三六八	二八〇	四、七五四	二、〇七五	二、〇七五	三五五	一、一六八
	價額（圓）	三六八	二八〇	四、七五四	二、〇七五	二、〇七五	三五五	一、一六八
鰮	數量（貫）			三、〇二〇				四三、七二八
	價額（圓）			三、〇二〇				四三、七二八
鯵	數量（貫）	二七五	四五〇	一、八				三、九三五
	價額（圓）	二七五	四五〇	一、八				三、九三五
鰆	數量（貫）	一、一〇四	一、〇〇〇	三、〇〇〇				四、九〇四
	價額（圓）	一、一〇四	一、〇〇〇	三、〇〇〇				四、九〇四
鯵	數量（貫）	一、三五〇	一、三五〇	一、三五〇				四、〇五〇
	價額（圓）	一、三五〇	一、三五〇	一、三五〇				四、〇五〇
鰆	數量（貫）	一、二〇〇	一、二〇〇	一、二〇〇				三、六〇〇
	價額（圓）	一、二〇〇	一、二〇〇	一、二〇〇				三、六〇〇
其ノ他	數量（貫）	一、一四四	一、一四四	一、一四四				三、四三二
	價額（圓）	一、一四四	一、一四四	一、一四四				三、四三二
計		七、〇六五	三〇〇	三五、〇三二	一、三〇〇	四七		四三、六五七
		一、一二九	三〇〇	三五、〇三二	一、〇六八	四七		四八、四四四

貝類		サイパン島	ヤップ島	パラオ島	トラック島	ボナペ島	ヤルート島	計
高瀬貝	數量（貫）			二九、四三五				三六、六五四
	價額（圓）			二九、四三五				三六、六五四
其ノ他	數量（個）			二、九六〇				二、九六〇
	價額（圓）			二、九六〇				二、九六〇
計				三二、三九五				三九、六一四

雜種		サイパン島	ヤップ島	パラオ島	トラック島	ボナペ島	ヤルート島	計
海鼠	數量（貫）	八〇〇		九、六五四	九、四五四			一二、五、四九八
	價額（圓）	二、四二六		二、三六〇	四、八五〇	四、七一〇		一四、三二六
玳瑁	數量（頭）			三、三六〇	八〇	三五		四、〇七五
	價額（圓）			三、三六〇	八四〇	三五		四、〇七五
眞珠	數量（個）		二〇	三、〇〇〇				三、〇二〇
	價額（圓）		二〇	三、〇〇〇				三、〇二〇
參	數量（貫）			三、七五〇	三、七〇〇	三、七〇〇		一一、一五〇
	價額（圓）			三、七五〇	三、七〇〇	三、七〇〇		一一、一五〇
鯨	數量（貫）			四、一四三	四、八五五	四、八五五		一三、八五三
	價額（圓）			四、一四三	四、八五五	四、八五五		一三、八五三
鮪節	數量（貫）			九、八五五	三、七〇〇	三、七〇〇		一八、二五五
	價額（圓）			九、八五五	三、七〇〇	三、七〇〇		一八、二五五
鯖	數量（貫）		七	一、二〇〇	一、三五〇	一、三五〇		四、四五七
	價額（圓）		三五	一、二〇〇	一、三五〇	一、三五〇		四、四五七
其ノ他	價額（圓）	九四四	六、三〇〇	二三四、八一八	三四、八五一	七、〇六〇	一九、二四四	三〇六、〇五五
計		三二、二六	二四二	二三四、八一八	三四、八五一	七、〇六〇	一九、二四四	三〇六、〇五五

■工業

工業としてはサイパン島の製糖工業、之れに附帶する酒精及び少量の清涼飲料製造等あるの外特記すべき工業の乏しきは、遺憾とする處なれども南洋廳に於ては、各種の工藝に就て指導奬勵中なるを以て、早晩著しき發展を見るならんか。現在に於ける重なる手工業を上ぐれば、ヤルート島に於ける椰子帽子、パラオ島ボナペ島ヤルート島に於ける椰子繩、其の他葉編製品等なり。

工産物		サイパン島	ヤップ島	パラオ島	トラック島	ボナペ島	ヤルート島	計
砂糖	數量（瓲）	一七六、七三七						一七六、七三七
	價額（圓）	三、八四四、九八八						三、八四四、九八八
非酒精飲料	數量（石）	二、一八						二、一八
	價額（圓）	一、一八						一、一八
酒精飲料	數量（石）	三、〇八九						三、〇八九
	價額（圓）	三、〇八九						三、〇八九
工業用酒精	數量（石）	四、五七三						四、五七三
	價額（圓）	三〇一、一四四						三〇一、一四四
精	數量（瓲）	？						？
	價額（圓）	四九、五八五						四九、五八五
其ノ他	價額（圓）	五三、一六三						五三、一六三
價額計（圓）		四、一七二、一六七						四、一七二、一六七

手藝品		サイパン島	ヤップ島	パラオ島	トラック島	ボナペ島	ヤルート島	計
椰子帽子	數量（個）	三二八	四七六	一、〇七五	九六五五	一、一〇〇	四、六七五	八、五〇九
	價額（圓）	二、八〇五	二、一八〇	五五、〇七〇	五五、〇七〇	一、〇〇〇	四、六七五	一〇一、〇〇五
林投帽子	數量（個）							
	價額（圓）							
葉纖維編製品	數量（個）							
	價額（圓）							
椰子繩	數量（把）		七三	一、八四九	六、〇五〇	一、四八〇	一、〇三〇	一〇、四一二
	價額（圓）		一、一五五	一、四四九	一、九五〇	一、四八〇	一、〇三〇	七、六六八
其ノ他	數量（個）							
	價額（圓）							
價額計		二、八〇五	三、三三五	一、四四九	二、〇二五	二、四八〇	五、七〇五	一七、五四九

■海外拓殖事業

▲海外移民の沿革

我國の海外發展は、足利時代に初まり、慶長年間既に海外に渡航したものもあつたが、明治以前には移民として考へられる問題も少い。故に明治以後に於ける移民の狀況を其の消長又は取扱の方法等で時期を區別して略述する。

【移民の初期時代】 明治元年布哇との契約が成立して、先づ百五十三人の移民を送つたのが、移民の嚆矢とも稱すべきで、この移民は布哇の甘蔗園で勞働することゝなつたが殆んど失敗に歸し、翌年には四十人の歸國者を見た程である。其後明治十七年に日布渡航條約、日布勞働移民條約、航海條約の三條約が成立して翌十八年九百五十一人を再度の移民として布哇に送つた。其後漸次布哇の有望であることが認められて渡航希望者が漸增し、明治二十七年迄に船數二十八艘、約三萬人を布哇に渡航せしめて居る。

【移民會社時代】 明治二十七年頃になると移民希望者が增加し、民間より移民取扱の希望申出があつたので、政府は移民取扱事務から手を引き、民間の移民會社に其取扱を委ねた。恰も日清戰後の好況に刺戟されて、海外發展の氣運隆昌を來し移民希望者の增加と共に、移民會社が續興し、多きときは其數四十を越える有樣であつた。一方明治廿九年に政府は移民保護法を制定して其の保護指導に當たれり。三十一年には布哇へ一萬人、カナダ、米國、濠洲等に二千餘人、三十二年には布哇へ二萬三千、米國カナダへ四千三百人、尙南米初期の渡航者として、ペルーに八百人の移民が渡航して居る。

然るに布哇の甘蔗園主の橫暴や、移民會社間の競爭、かて加へて布哇が三十三年合衆國の一領土となり、契約移民禁止の規定が布哇にも適用されるため、布哇への契約移民は中絶の止むなきを以て移民會社は大打擊を被り解散するもの續出せり。併し三十四五年頃は其殘存會社は南洋、南米方面に其進路を見出し、比律賓へ二千名近くペルーへ一千名餘、三十七八年にはメキシコ、南洋ニューカレドニヤ等へ多數の契約移民を送つた。

【自由渡航時代】 明治三十七年頃から、布哇在住の邦人で、米本國へ轉航するもの多く、又直接日本からも三十九年四十年頃には一千七百名から二千七百名近くの渡航者があり、米國の邦人は明治三十五年に五千人位であつたのが六年後の四十三年には九萬一千人となり每年一萬人の增加を見る有樣となつた。處が布哇よりの轉航者が米人の反感を買ひ排日運動が勃興し、遂にかの紳士協約となつて來本土、布哇行移民が制限せられたる結果一時墨國熱が高まり、三十九年に五千人、四十年に三千七百人をメキシコへ契約移民として送り出して居る。又四十年にはカナダへの契約移民も相當あつた。

【移民の制限時代】 明治四十年の紳士協約の結果日本自ら米國行移民を制限することゝなつた。一方米國に於ける排日運動が猛烈を極め邦人の土地所有、租借の禁止、市民權附與の制限となり、明治三十五年以來每年一萬に近い布哇移民が四十二年には二千と減じ、米本國への入國は全く困難の狀態となつて、四十一年以後は少數の自由渡航者があるのみである。この政府の移民制限は其他の方面にも表はれ、三十五年來每年一萬三、四千から三萬六千迄あつた移民の數が四十二年は四千に減少して居る。

然るに此時期に注目すべきは、邦人の南米進出である。四十一年には契約移民として初めてブラジルへ八百名、ペルーに二千名の邦人を送り出した、其以後の會社取扱の移民は大部分南米行移民でブラジル、ペルー、アルゼンチンと大擧して出かけたのである。其後、一萬五千乃至二萬の移民が、每年日本から出たが、政府に於ても爾來の消極的方針を許さず遂に大正十年この移民制限方針を廢棄し此に官民協力の時代に入つたのである。

【移民奬勵時代】 我國の人口問題食糧問題と關聯して海外の發展が盛に唱導されて來た、先づ大正四年には廣島と熊本に、大正七年には和歌山、防長等の海外協會の設立があり、此等が移植民の宣傳普及に又其保護指導に努める事となつた。こゝに於て外務省も先の移民制限方針を廢して、積極的に移民を送り出す方針を取るに至り先づ政府は海外興業會社に補助金を交附し、海外移植民思想の宣傳普及と移民の保護敎養の施設を講ぜしめた。

大正十二年には關東大地震の罹災者で海外渡航を希望するものに補助金を與へることゝし、百十一人が渡航費の補助を受けてブラジルに渡つた。これが移民渡航費補助の初めで、十三年以後は罹災者以外一般にも其の渡航を奬勵する意味で補助金を交附することゝし、大正十三年には三、一六八人に補助し、十四年は五、三二四人、十五年には七、三五二人と其の補助人員を增加した。一方此の政府の方針に力を得て海外協會が各府縣に續々設立され、其の事業を開始して來たが政府は此等の事業の有要必須なるを惟ひ、大正十二年以降各々若干の助成金を交付することゝなつた。南米殊にブラジルの有望であることが認められると同時に移民は續々其方面に出掛ける狀態となつた。十三年に信濃、熊本、富山、鳥取等の各海外協會は、ブラジルに土地を購入し、大正十四年に信濃海外協會は四百五十人の移住者を其購入地に送り出した。又一般民間の有力者にも漸次南米に投資し土地を買入れ珈琲其他の栽培事業を行ふ者が增加して來た。政府も此狀勢に鑑み移植民奬勵保護の爲め先に設置された橫濱、神戸、長崎等の海外渡航者講習所に交付金を與へ昭和二年には從來缺陷の多かつた移民の出發港に於ける宿泊及移民の衞生、敎養等の改善、統制を圖るために移民收容所が神戸に設置された。所が從來の移民は、殆んど勞働移民であつたが、南米殊にブラジルの事情に鑑みて相當の資本と敎養ある移民の必要であるを惟ひ、所謂企業移民として渡航せしめるために、昭和二年海外移住組合法を制定し、其組合員を企業移民として海外に移住せしめ、其土地の取得、移住地に於ける敎育、衞生、產業施設をなすことゝした。同年七月岡山に移住組合が設けられたのを初めとして山口、廣島、三重等相次いで設立され八月にはこれ等の聯合によつて成る海外移住組合聯合會の設立を見共の統制連絡を圖ることゝなつた。

移住組合は昭和二年には九、三年には十七、四年は十八と增加した。聯合會ではブラジルに土地を買入れ、移住組合員を渡航せしめ、農業に從事しめる事となつた。近年本邦移民を歡迎するは南米ことにブラジルで、補助移民は殆どブラジルのみに渡つた。其數は昭和二年には九、八八九人、三年には一〇、七七五人に達し本年度も相當の數に達する形勢である。一方又南米に於ける拓殖事業の有望であることが認められて、民間會社がブラジルに土地を買入れ、邦人の移住者をそこに送つて、拓殖事業に從事するものが漸次增加し移民個人の事業と相俟つて着々堅實な地歩を占めつゝある。

昭和四年六月拓務省の設置と共に移植民に關する事項は拓務省の主管に移り、本省で各種の移民保護奬勵施設をなすと共に民間の移植民後援團體、移住組合等と協力して海外發展移植民の宣傳普及に努めることゝなつた。

▲移植民の現況

【移民渡航狀況】 本邦移民の渡航狀況を概觀すると、來本土、布哇、加奈陀、濠洲等は本邦移民の入國を禁止又は制限して居るために移民渡航者數は殆んど數ふるに足りない。南洋方面に於ては契約移民を入國せしめぬ地方もあるが自由渡航者は相當多い。メキシコ、キューバ中央アメリカ等は本邦移民の入國を制限して居ないが、未だ移住適地としては不充分な點があり甚だ遺憾である。現在日本移民を歡迎する地方は、只南米方面のみである。

殊にブラジルは、日本人を歡迎するばかりでなく、自然の富源土地の廣大等の原因から政府もこゝに力を入れ民間にもブラジル渡航熱が高い。

【移住邦人の事情】 昭和三年十月一日現在調査に依る在外邦人數は、七〇九、八三八人で、其內男四〇五、四九九人、女三〇四、三三九人にして、別項圖

表によりこれが分布狀況を在留地別に示めせり。

▲ブラジル　在伯邦人大部分は**サンパウロ**州に在住し、現在其數約八萬に及ぶ。邦人の職業では農業が大部分で、八萬人に達し、其の中獨立農と借地農が三分の二で個人が所有して居る土地の總面積は二十一萬町歩以上に達する。殘りの三分の一は現に契約勞働者として珈琲園に勞働して居る。此等の農業は主に珈琲の栽培で、其他棉花、米、甘蔗、唐蜀黍、野菜等の栽培があり殊に將來棉が有望視されて居る。農業者に次いで小商人が多いが一千人に足りまい。其他の職業に從事するものは少數である。

現在**ブラジル**は邦人移民を歡迎して居るばかりでなく氣候風土等邦人にも適し廣大肥沃の土地の天然の資源に富むから、移住地として邦人に適して居る。最近**サンパウロ**州以外の**パラナ**州、**ミナス・ヂエラエス**州殊に**アマゾナス**州等の北部諸州へ移住する者、或は拓殖事業を行ふ者が增加して來た。

▲アルゼンチン　現在**アルゼンチン**は、日本人を歡迎して居るが、在留邦人數は、三千四百五十人で、他の地方に比較して餘り多くない、其の職業は、農業者が最も多く、七百七十人程居る。同國の**ミシオネス**州地方の**マテ**茶の栽培、**チヤコ**地方に於ける棉花の栽培等は邦人の事業として將來發達するであらう。其他小商人と工場勞働者が農業者に次いで多數である。

▲ペルー　同國在留邦人は、一萬六千八百人であるが、小商人が大部分で、四千三百人、其の他の商業者を合せると、一萬一千人近くある。次が農業者で三千五百人、多くは棉花栽培であるが、未だ充分の發達を見ない。

將來交通の發達によつて、棉花其の他の企業が發展すべく、既に本邦の會社も二三同地に土地を購入して、棉花栽培を目論んで居るから、本邦人の同地方進出も見るべきものがあらふ。

▲南米諸國　南米諸國中には、現在々留邦人は少いが邦人移民を制限しないのみならず、國情として移民に適する地方がある。殊に**コロビヤ**は各種の栽培企業に適して居り、昭和四年十一月迄に二十五人の移住者があつた。此の他にも**ボリビヤ**は各種の栽培に、**パラグアイ**は**マテ**茶の栽培に適して居る。

▲中米地方　**メキシコ**在留邦人四、五〇〇人の中農牧業者が大部分で約千百人小商人が之に次いで多い、同國は邦人移民について制限しないし、農、牧、漁業等見るべきものがあり、邦人に對し同國人が好感を有する事情もあつて將來移住地として考慮を要すべき地方である。

▲フイリツピン群島　南洋中邦人在留者は同島に最も多く、其の職業は殆んど麻の栽培に從業して居る。**フイリツピン**は契約移民、補助移民の入國を許さぬから邦人は自由移民として入國し、多くは會社の經營する麻農園に入つて勞働するのであつて、其等の者が次第に獨立栽培業者となるのである。現在既に半數以上の獨立栽培業者が居る。農業者に次いで會社員、銀行員等が多く一千餘、其他漁業者、小商人が之に次ぐ。

▲マレー半島蘭領東印度其他の南洋群島　此等の地方に在留する邦人の大部分は、銀行會社員と商業に從事するもので、殊に小商人が多い。其他農業、工業、漁業、土木建築等の勞働に從事するものもかなり多く、職業は廣汎に亘つて居る。其中農業者は大部分護謨の栽培で地方によつては甘蔗、椰子の栽培もして居る。近來會社及個人で、土地を借り受け、相當大規模に此等の栽培をなすものが增加して來た。此等の地方では他に低廉な勞働力があるから勞働移民としてよりは、小資本であつても、企業移民として事業をする方が有利であると見られて居る。

▲移民保護奬勵施設

【渡航奬勵金】　我國の海外移民は、由來資力の乏しい、小農民に限られて居たので、北米への我移民が制限されてから、其の數が漸減し移民會社や船會社が南米地方の有望であることを唱導したが、地理國情は不案内であり、更により以上遠隔の地であつて、多額の渡航準備金がいる等の理由で、南米行移民の數も依然として增加するに至らなかつた。大戰後に至つて我國情は、國民の海外發展を必要とすると共に、國民にも僅かな資力で海外渡航を希望するものが漸く增加して來た。恰も關東の大震災が勃發し、其の罹災者で、海外へ渡航を希望するものが尠くなかつたので、政府は此等の者の渡航貸を補助することゝし、先づ南米移民百十名に補助金を交付して之を送り出した。此が渡航奬勵金の嚆矢であるが、此時代から、國民の海外渡航熱が高調して來たので、大正十三年度からは政府は一般移民にも其渡航費を補助して、南米移民を奬勵し以て今日に至つたのである。

【移民取扱手數料全廢】　從來は移民取扱會社が、移民保護法に基き移民取扱手數料として、十二歳以上のもの一人に付三十五圓（呼寄及再渡航移民に付ては十五圓）宛を移民から徵收したのであるが、我國移民の大多數が資力乏しい小農民である所から、政府は大正十二年移民の經濟的負擔を輕減する目的で、此手數料を全廢させ、政府が其の相當額を報償金として交付することゝした。

【移植民思想の普及宣傳】　海外移住を奬勵するに當つては成可く正確な、移住地事情を國民に周知させる必要がある。之れが爲めに政府は、大正十年以來海外興業會社に補助金を交附して、海外移植民の宣傳普及をなさしめると共に、大正十二年からは、宣傳費をおいて移住地事情の調査書を印刷及配布し、其の講演會を開催し、移植民後援團體の宣傳事業を指導して居る。又各府縣で開催する移植民講演會や講習會に講師、活動寫眞班を派遣する等、適切な施設を講じて居る。殊に本年拓務省の設置と共に其經費も增加し其の施設も着々進捗しつゝある。

【内地移住】　人口稀薄で、粗笨的な農業を營んで居る地方に農業者を移住せしめ、海外移植民事業の一助となすと共に、當該地方の農業の實地指導をなす目的で、政府は大正十二年から朝鮮に於ける不二農村、平康面等の農場に移住する者を助成して居る。

▲不二農村移住狀況　不二興業會社の經營して居る農場の中、全羅北道群山府外にある不二沃溝農場は干拓地千九百町歩中一千町歩に内地農民を移住せしめ、大正十二年から土地を分譲し、耕作に從事せしめ殘りの部分には朝鮮人を入植せしめてゐる。而して内地農民を招致してゐる前記千町歩を不二農村と稱してゐる。

昭和三年から同會社の植民事業は、不二農村産業組合の經營に移つた。大正十二年以降昭和二年迄に、二百二十五戸餘の家族が移住した。

▲平康面移住狀況　江原道平康郡平康面に於ける平康産業組合は、昭和二年度から其の經營地五百町歩に内地農民を移住せしめ、土地を分譲して、自作農村を建設する計劃を立て、昭和二年に十五戸の入地者があつた。

政府は右二移住地に入地する内地農民に移住奬勵金を交附し、同地移住を奬勵して居る。

【海外移住組合】　從來の移民は多く勞働移民であつて、此等の移民では經濟的不利や教養上の缺陷があるから、相當の資金と教養とを持つ、所謂企業移民の移住も必要だと言ふ趣旨で、昭和二年海外移住組合法が制定された、この企業移民である海外移住組合員の海外移住を圖り、此等のものゝ海外に於ける土地の取得及教育、衞生、産業等について、諸種の施設をなし、適當な指導と助成とをなして居る。其の助成の方法として先づ政府は海外移住組合に對して、海外企業資金の貸付を行つて居る。此貸付金は、海外に於て土地購入其他之に關する費用に充てるために、資金を貸付け移住地の設定を容易にする趣旨で、先づ移住組合聯合會に貸付け、聯合會が其の貸付金で土地を購入して、組合を通して組合員に、土地の分譲をなし、移住者を獨立農業者たらしめるのである。昭和四年十二月末迄に、組合員で渡航したものは、二百三十三家族である。

次に海外移住組合の事業が内外に亘つて、其の經營維持が複雜且困難である所から、此等の費用を補助するの必要があるので、政府は聯合會及組合の事務費に對しても補助金を與へて居る。

【移民收容所】 從來**ブラジル**國行移民は、出發港である神戸の所謂移民宿に宿泊して居たのであるが、不當の宿賃又は移民の風紀、衞生、敎養等についても遺憾の點があつたので、大正七年頃からこれに代る國立移民收容所の設置の必要が民間にも、政府にも認められて、遂に昭和二年七月の勅令で、移民收容所官制が公布された。而して昭和三年三月、鐵筋**コンクリート**五階建で、約八百人の收容力ある移民收容所が、神戸に設立され、同月十七日から事業を開始した。同所は當分の中神戸から乘船する、南米**ブラジル**行の移民のみを收容するのであつて、先づ**ブラジル**行移民として必要な身體檢査をなし、其合格者を無料で收容宿泊させ、入所期間中約十日間、移住に必要な衞生、敎養上の保護指導を與へるのである。

【移植民團體指導助成】 移植民事業の圓滿なる發達を期する上に於ては、政府の事業と共に民間に於ける、後援團體の活動に俟つ所多々ある。故に民間で移住思想の普及、內外移住者に對する指導、保護、海外事情の調査等の事業をして居る移植民後援團體に對して其助長發達を圖る趣旨で、政府は大正十二年以來此等の團體に、助成金を交付して來たが、昭和三年に助成金を受けたもの二十九團體に及んでゐる。

【海外に於ける移民の指導】 移民の指導、保護は單に國內に於ける施設のみでは充分でない。當に海外に於ても、實際的な指導と保護とを要する。政府はこの趣旨で、之が指導、保護に當るべき技術者を移民の多い地方に配置し、又產業組合、產業道路、其他の產業施設に補助を與へ、尙移住組合員には生產資金の貸付を行つて其の保護を圖り助成につとめつゝある。

【移住適地の調查】 個人又は民間の小團體が、海外遠隔の地に於ける移住適地の調查をする事は、極めて困難であるから、政府は自ら之が調查に當り移住地の擴張、新移住地の研究調查を行ふことゝなつた。

【海外興業會社】 移民保護法に依ると、行政廳の許可を受けたものゝみが移民取扱人たり得るので、現在は海外興業株式會社が本邦で唯一の移住取扱人である。同社は大正六年十二月當時の小移民會社六つを合併して創立され、大正七年一月から其の事業を開始した。其の業務は、(一)宣傳、(二)募集、(三)渡航乘船手續、(四)船中の移民保護、(五)配耕及配耕地に於ける保護等であつて、其の機關としては本社を東京に、輸送事務所を神戸に、支店を**ブラジル**に置く外、全國に三十七人の代理人を置いて其の事務を取扱つて居る。移民出願者は、原籍地の代理人に申出て、其の指揮を受けることになつて居る。

海外興業會社で取扱つた移民は、主として南米行移民であるが、大正七年創立以來から昭和三年迄の取扱移民數を目的地別に見ると

▲**ブラジル** 四六、九九二人　▲**ペルー** 二、六三二人
▲**フイリツピン** 一〇、七八七人　▲**濠洲** 九二八人

其他玖馬三九二、**メキシコ**が一一二、**ニューカレドニヤ**一一、沿海州九三、太洋島六五、**タヒチ**島二八等を合せて、總計六二、一四九人である。

【海外移住組合】 從來の勞働移民が、移住地で獨立農業者となるには、相當の日時と資本とを要し、且敎養の程度の低い者が多いので、此等勞働移民の外に相當の資金を有し、比較的高い敎養を受けた移民の進出を圖り、勞働と資本とを併用して拓殖事業の發達を圖るの必要を生じて來た結果遂に昭和二年三月に海外移住組合法の制定を見るに至たり之れに依り各地に移住組合が設けられ、更に進んで移住組合聯合會が設立された。現在に於ける移住組合數及び移住人員數等を圖表に揭ぐ。

▲海外拓殖事業の現況

【南アメリカ諸國】 現在本邦移民のために、其の門戶を開放するは、たゞ南米のみであると云つて良い。而も南米諸國は廣大な土地と豐富な天然資源がある。更に氣候、風土、親日的感情に惠まれて、近年南米渡航熱の昂騰著しいものがある。こゝに於て從來の勞働移民と共に相當の資本と組織的經營とに依つて、拓殖事業を行ふものが增加して來た。殊に注目すべきは拓殖事業會社自身が、其の事業地に、直接本邦の移民を入れて、事業を經營して居ることである。左に事業地と經營會社とを列記せり。

▲ブラジル方面

▲海外興業會社經營**イグアペ**植民地
同社では大正七年以降**ブラジル**國**サンパウロ**州に、七萬二千三十町歩の土地を得て**イグアペ**植民地を經營し、この地の農業家族を入植させ、土地の分讓、生產品の加工販賣等を行つて居る。既に昭和三年末迄に入植した者、六〇九家族、三五六一人で主として珈琲、米、玉蜀黍の栽培をなして居るが其他豆類、甘蔗、煙草、**マンヂオーカ**等を栽培して居る。

▲海外興業會社經營アニューマス農場
同社は更に**サンパウロ**州に一、二一〇町歩の土地を購入して、會社の直營地として在伯邦人を小作人として珈琲を栽培して居る。

▲海外移住組合及聯合會經營
海外移住組合及聯合會は**サンパウロ**州に**アリアンサ**、**バストス**及び**チエテ**移住地と**パラナ**州に**トレスバラス**移住地と更に**ミナスゼラエス**州に**サスイグランデ**移住地とを經營して居る。全部を合して土地面積が二六一、九三〇町歩で昭和四年十二月末迄に二三三家族の入植者があつた。此等の者は全部珈琲の栽培をして居る。

▲南米拓殖會社經營
同社では**パラー**州に**アカラ**及**モンテアレグレ**の二移住地を經營して居る、其の總面積は百三萬町歩で、既に昭和四年十二月末迄までに入植したものは八三家族、四二七人である。入植者には土地を分讓して、農業に從事させるのである。此移住地の主な農作物は棉、米、煙草である。

▲アマゾン興業株式會社經營
同社は**アマゾナス**州に二萬町歩の土地を得て植民地を經營して居るが、同社は株主たる移住者のみを入植させる計畫で、昭和四年十月七日家族五十人の第一回移住者を送出した、こゝでは**グワラナ**、煙草、棉花の栽培を目論んで居るが目下のところ**グワラナ**は會社直營地のみにて栽培せられて居る。

▲日伯柘殖株式會社經營
同社は**サンパウロ**州に千二百町歩の土地を買入れ、珈琲の栽培と牧畜を行つて居るが、こゝは邦人の勞働移住者を使用して居るが會社の直營である。

▲東山農事會社經營
同社も又**サンパウロ**州に土地を購入して、珈琲の栽培を主とし其他甘蔗、玉蜀黍等の栽培並に牧畜を營み、又た同時に生產物委託販賣並金融事業なども行つて居る。

▲野村農場經營
パラナ州に千二百町歩の土地を買入れ、珈琲を栽培して居るが之れ又前者同樣直營地事業のみである。

▲アルゼンチン方面

▲日亞拓殖株式會社經營
同社は亞國**チヤコ**地方に、一萬町歩の棉花耕地を買入れ、昭和四年度から四十家族宛の棉花農夫を移住させる計畫で昭和四年十月迄に四家族三四人を送り出し日下棉作見習に從事し居る。

▲ペルー方面

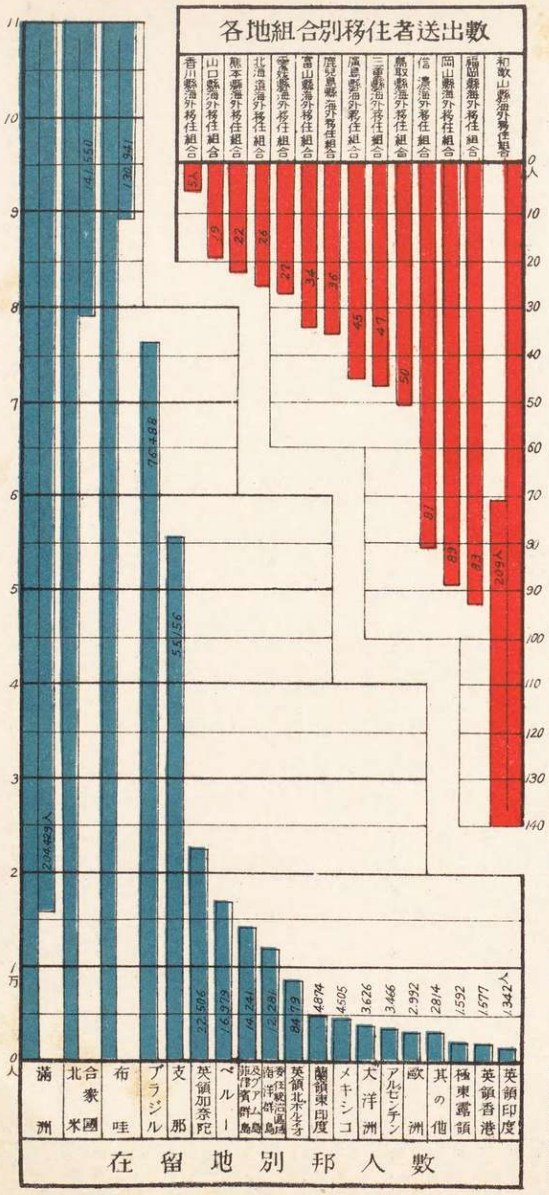
▲秘露棉花會社經營
同社は三千餘町歩の土地を購入し、棉花栽培事業を經營し居るが、主として**ペルー**人を使用し居るも日本人も小作人として相當就勞して居る。

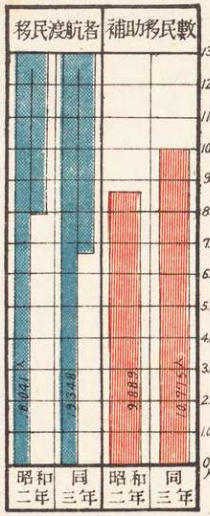
▲レテス農事會社經營
同社も又千三百町歩の土地を所有して棉花栽培業を營で居るが、之れは在秘邦人の主たる人々が**ペルー**人を使用して事業を營んで居るものである。

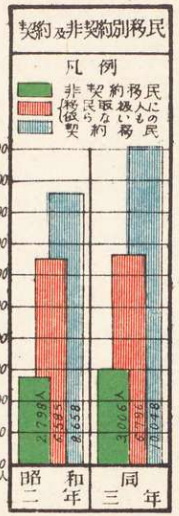
▲星製藥會社經營
三十萬町歩の土地を買入れ主として**キナ**、**コカ**を栽培して居る。

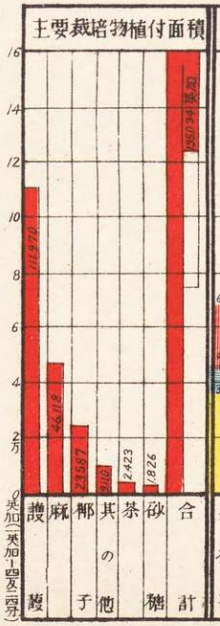
【南洋方面】 南洋方面に於ける邦人の事業經營は、其の歷史も相當古く、且地理上の關係から、本邦會社及個人の栽培事業を營むものがかなり多い。現在南洋方面に於ける會社及個人の農園數は約三百十四あるが其租借地及買入の總面積**五十六萬五千二百六十餘町歩**、生產可能の面積が十四萬千九百餘町歩餘ある。此等の農園では護謨、麻の栽培が大部分で其他椰子、甘蔗等の栽培に從事して居る此の栽培企業の狀況を地方別として圖表に示めせり。

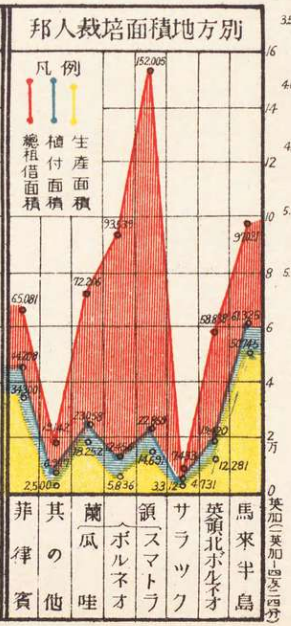
海外拓殖事業

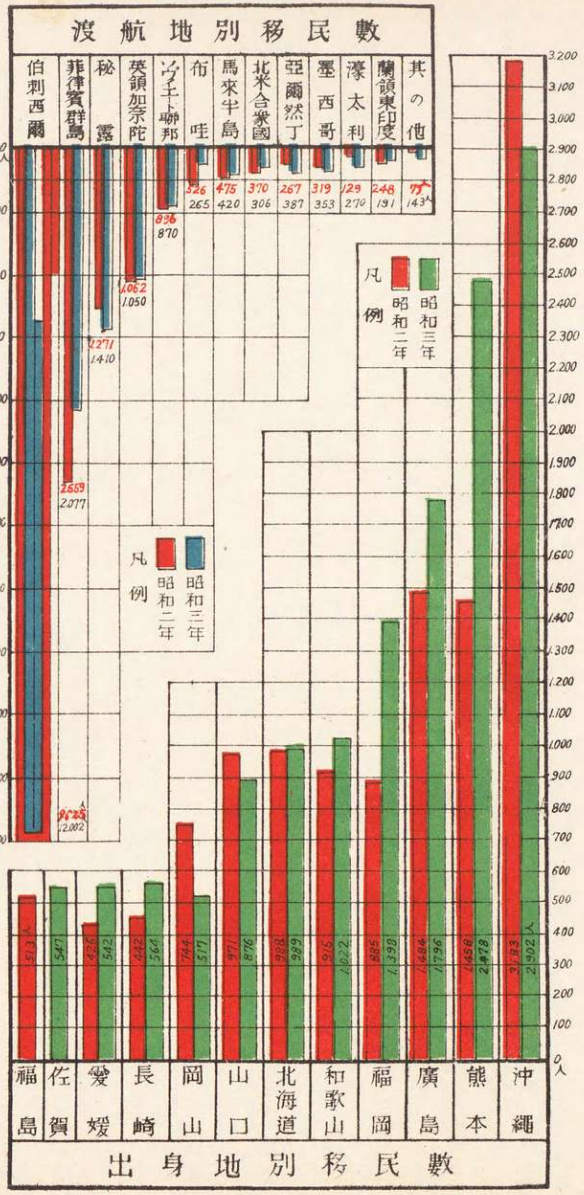

各地組合別移住者送出數
和歌山縣海外移住組合
福岡縣海外移住組合
鹿兒島縣海外移住組合
富山縣海外移住組合
愛媛縣海外移住組合
北海道海外移住組合
熊本縣海外移住組合
三重縣海外移住組合
鳥取縣海外移住組合
信濃海外移住組合
岡山縣海外移住組合
山口縣海外移住組合
香川縣海外移住組合
在留邦人數
滿洲
合衆國北米
布哇
ブラジル
支那
英領加奈陀
ペルー
英領北ボルネオ
蘭領東印度
メキシコ
大洋洲
アルゼンチン
歐洲
其の他
極東露領
英領香港
英領印度


移民渡航者補助數
昭和二年
同三年


民約及非契約別移民
凡例
昭和二年
同三年


主要栽培物植付面積
撒布護
麻
煙草
其の他
砂糖
合計


邦人栽培面積地方別
凡例
總租借面積
植付面積
生産面積
菲律賓
其の他
蘭領
瓜哇
英領北ボルネオ
サラワク
馬來半島


渡航地別移民數
伯剌西爾
菲律賓群島
秘露
英領加奈陀
ハワイ
布哇
馬來半島
北米合衆國
亞爾然丁
墨西哥
濠太利
蘭領東印度
其の他
凡例
昭和二年
昭和三年
出身地別移民數
福島
佐賀
愛媛
長崎
岡山
山口
北海道
和歌山
福岡
廣島
熊本
沖縄

拓殖總覽關係法規抄

第一章　法例抄

▲朝鮮及關東州ニ於ケル法律命令施行時期（明治四十年二月十四日勅令第十一號）

〔韓國〕及關東州ニ於テ適用スル法律命令ハ其ノ各官廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算シ七日ヲ經テ施行ス但シ別段ノ施行時期アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十九年勅令第百六十一號ハ之ヲ廢止ス

▲臺灣ニ於ケル法律命令施行期限（明治二十九年八月二十日勅令第百九十二號）

法律命令ノ臺灣ニ於ケル施行期限ハ其ノ各廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算シテ七日トス但シ別段ノ施行時期アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十九年勅令第百六十一號ハ之ヲ廢止ス

▲南洋群島ニ於ケル法律命令施行時期（大正十一年三月三十一日勅令第百三十號）

南洋群島ニ於テ適用スル法律命令ハ其ノ各官廳ニ到達シタル日ノ翌日ヨリ起算シ七日ヲ經テ之ヲ施行ス但シ別段ノ施行時期アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

附　則

本令ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

▲朝鮮ニ施行スヘキ法令ニ關スル法律（明治四十四年三月二十五日法律第三十號）

第一條　朝鮮ニ於テハ法律ヲ要スル事項ハ朝鮮總督ノ命令ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得

第二條　前條ノ命令ハ內閣總理大臣ヲ經テ勅裁ヲ請フヘシ

第三條　臨時緊急ヲ要スル場合ニ於テ朝鮮總督ハ直ニ第一條ノ命令ヲ發スルコトヲ得

前項ノ命令ハ發布後直ニ勅裁ヲ請フヘシ若勅裁ヲ得サルトキハ朝鮮總督ハ直ニ其ノ命令ノ將來ニ向テ效力ヲキコトヲ公布スヘシ

第四條　法律ノ全部又ハ一部ヲ朝鮮ニ施行スルヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條　第一條ノ命令ハ第四條ニ依リ朝鮮ニ施行シタル法律及特ニ朝鮮ニ施行スル目的ヲ以テ制定シタル法律及勅令ニ違背スルコトヲ得ス

第六條　第一條ノ命令ハ制令ト稱ス

附　則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

▲制令ニ於テ法律ニ依ルノ規定アル場合其ノ法律ノ改正アリタルトキノ效力ニ關スル件（明治四十四年六月二十二日制令第十一號）

制令ニ於テ法律ニ依ルノ規定アル場合ニ於テ其ノ法律ノ改正アリタルトキハ改正法律施行ノ日ヨリ其ノ改正法律ニ依ル但シ別段ノ規定アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

▲朝鮮ニ於ケル法令ノ效力ニ關スル件（明治四十三年八月二十九日制令第一號）

朝鮮總督府設置ノ際朝鮮ニ於テ其ノ效力ヲ失フヘキ帝國法令及韓國法令ハ當分ノ內朝鮮總督ノ發シタル命令トシテ尙其ノ效力ヲ有ス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

▲明治四十三年制令第一號ニ依ル命令ノ區分ニ關スル件（明治四十三年十月一日制令第八號）

明治四十三年制令第一號ニ依リ現ニ效力ヲ有スル命令ニシテ其ノ制令ヲ以テ定ムルコトヲ要スル事項ヲ規定シタルモノハ制令、其ノ朝鮮總督府令ヲ以テ定ムルコトヲ得ル事項ヲ規定シタルモノハ朝鮮總督府令〔其ノ警務總監部令ヲ以テ定ムルコトヲ得ル事項ヲ規定シタルモノハ警務總監部令〕其ノ道令ヲ以テ定ムルコトヲ得ル事項ヲ規定シタルモノハ道令、〔其ノ警務部令ヲ以テ定ムルコトヲ得ル事項ヲ規定シタルモノハ警務部令〕ヲ以テ定メタルモノトス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

▲臺灣ニ施行スヘキ法令ニ關スル法律（大正十年三月十五日法律第三號）

第一條　法律ノ全部又ハ一部ヲ臺灣ニ施行スルヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

前項ノ場合ニ於テ官廳又ハ公署ノ職權、法律上ノ期間其ノ他ノ事項ニ關シ臺灣特殊ノ事情ニ因リ特例ヲ設ケル必要アルモノニ付テハ勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ爲スコトヲ得

第二條　臺灣ニ於テ法律ヲ要スル事項ニシテ施行スヘキ法律ナキモノ又ハ前條ノ規定ニ依リ難キモノニ關シテハ臺灣特殊ノ事情ニ因リ必要アル場合ニ限リ臺灣總督ノ命令ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得

第三條　前條命令ハ主務大臣ヲ經テ勅裁ヲ請フヘシ

第四條　臨時緊急ヲ要スル場合ニ於テ臺灣總督ハ前條ノ規定ニ依ラス直ニ第二條ノ命令ヲ發スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ發シタル命令ハ公布後直ニ勅裁ヲ請フヘシ勅裁ヲ得サルトキハ臺灣總督ハ直ニ其ノ命令ノ將來ニ向テ效力ヲキコトヲ公布スヘシ

第五條　本法ニ依リ臺灣總督ノ發シタル命令ハ臺灣ニ行ハルル法律及勅令ニ違反スルコトヲ得ス

附　則

本法ハ大正十一年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十九年法律第六十三號又ハ明治三十九年法律第三十一號ニ依リ臺灣總督ノ發シタル命令ニシテ本法施行ノ際現ニ效力ヲ有スルモノニ付テハ當分ノ內仍從前ノ例ニ依ル

▲樺太ニ施行スヘキ法令ニ關スル法律（明治四十年三月二十九日法律第二十五號）

法律ノ全部又ハ一部ヲ樺太ニ施行スルヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム但シ左ノ事項ニ關シテハ勅令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

一、土人ニ關スルコト

二、行政官廳又ハ公署ノ職權ニ關スルコト

三、法律上ノ期間ニ關スルコト

四、裁判所又ハ裁判長カ職權ヲ以テ選任シ又ハ選定スル辯護人、訴訟代理人又ハ訴訟承繼人ニ關スルコト

附　則

本法ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

▲關東州ニ行ハルル勅令ニ於テ法律ニ依ルノ規定アル場合ニ於テ其ノ法律ノ改正アリタルトキノ效力ニ關スル件（勅令第二百四十九號）

關東州ニ行ハルル勅令ニ於テ法律ニ依ルノ規定アル場合ニ於テ其ノ法律ノ改正アリタルトキハ改正法律施行ノ日ヨリ其ノ改正法律ニ依ル但シ別段ノ規定アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

▲關東州ニ於ケル諸般ノ成規ニ關スル件（明治三十九年八月一日勅令第二百三號）

關東州ニ於ケル諸般ノ成規ハ別段ノ規定ヲ設クル迄當分ノ內從前ノ例ニ依ル但シ租稅其ノ他ノ收入及其ノ支出ニ關シテハ會計檢査院ノ檢査ヲ經ルコトヲ要ス

附　則

本令ハ明治三十九年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

▲關東廳管內ニ於ケル諸般ノ成規中關東都督府ヲ關東廳ト認ムル等ノ件（大正八年四月十二日關東廳令第三號）

關東廳管內ニ於ケル諸般ノ成規中關東都督府又ハ當府トアルハ關東廳、關東都督府又ハ都督トアルハ關東長官、民政長官トアルハ事務總長、關東都督府府報又ハ府報トアルハ關東廳廳報トス

附　則

本令ハ大正八年四月十二日ヨリ之ヲ施行ス

▲南洋群島ニ行ハルル勅令ニ於テ法律ニ依ルノ規定アル場合ニ於テ其ノ法律ノ改正アリタルトキノ效力ニ關スル件（大正十二年一月二十九日勅令第三十號）

南洋群島ニ行ハルル勅令ニ於テ法律ニ依ルノ規定アル場合ニ於テ其ノ法律ノ改正アリ

ダルトキハ改正法律施行ノ日ヨリ其ノ改正法律ニ依ル但シ別段ノ規定アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

▲南洋群島ニ於ケル諸般ノ成規中廳名官名ニ關スル件（大正十一年四月一日南洋廳令第一號）

南洋群島ニ於ケル諸般ノ成規中臨時南洋群島防備隊民政部又ハ民政部長トアルハ南洋廳又ハ南洋廳長官、臨時南洋群島防備隊民政署又ハ民政署長トアルハ南洋廳支廳又ハ支廳長トス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

▲朝鮮總督府道知事ノ發スル命令ノ罰則ニ關スル件（大正八年八月二十日勅令第三百九十二號）

朝鮮總督府道知事ハ其ノ發スル命令ニ三月以下ノ懲役若ハ禁錮、拘留、百圓以下ノ罰金又ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十三年勅令第三百七十六號ハ之ヲ廢止ス

第二章　官制抄

▲拓務省官制（昭和四年六月十日勅令第百十二號）

前文ハ略ス

第一條　拓務大臣ハ朝鮮總督府、臺灣總督府、關東廳、樺太廳及南洋廳ニ關スル事務ヲ統理シ南滿洲鐵道株式會社及東洋拓殖株式會社ノ業務ヲ監督ス

拓務大臣ハ涉外事項ニ關スルモノヲ除クノ外移植民ニ關スル事務及海外拓殖事業ノ指導奬勵ニ關スル事務ヲ管理ス

拓務大臣ハ前項ノ事務ニ付外務大臣ヲ經由シ領事官ヲ指揮監督ス

第二條　拓務省ニ左ノ一部及三局ヲ置ク

朝鮮部

管理局

殖産局

拓務局

第三條　朝鮮部ニ於テハ朝鮮總督府ニ關スル事務ヲ掌ル

第四條　朝鮮部ニ部長ヲ置ク拓務次官ヲ以テ之ニ充ツ拓務大臣ノ命ヲ承ケ部務ヲ掌理ス

第五條　管理局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、他局ノ主管ニ屬スルモノヲ除クノ外臺灣總督府、關東廳、樺太廳及南洋廳ニ關スル事務

二、拓務大臣ノ定ムル地域ニ於ケル移植民ノ保護指導ニ關スル事務

第六條　殖産局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、臺灣總督府、關東廳、樺太廳及南洋廳ノ產業、交通、通信、金融、租稅及專賣ニ關スル事務

二、南滿洲鐵道株式會社及東洋拓殖株式會社ノ業務ノ監督ニ關スル事務

三、拓務大臣ノ定ムル地域ニ於ケル海外拓殖事業ノ指導奬勵ニ關スル事務

第七條　拓務局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、他局ノ主管ニ屬スルモノヲ除クノ外移植民ニ關スル事務

二、他局ノ主管ニ屬スルモノヲ除クノ外海外拓殖事業ノ指導奬勵ニ關スル事務

第八條　拓務書記官ハ專任十五人ヲ以テ定員トス

第九條　拓務省ニ事務官專任九人ヲ置ク奏任トス上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ掌ル

第十條　拓務省ニ技師專任十三人ヲ置ク奏任トス上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第十一條　拓務省ニ理事官專任三人ヲ置ク奏任トス上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ掌ル

第十二條　拓務省ニ通譯官專任四人ヲ置ク奏任トス上官ノ命ヲ承ケ通譯ヲ掌ル

第十三條　拓務屬ハ專任八十二人ヲ以テ定員トス

第十四條　拓務省ニ技手專任三十人ヲ置ク判任トス上官ノ指揮ノ承ケ技術ニ從事ス

第十五條　拓務省ニ通譯生專任十二人ヲ置ク判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ從事ス

第十六條　第十條及第十四條ノ職員ハ之ヲ外國ニ駐在セシメ帝國領事館附ヲ命スルコトヲ得

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十一年勅令第百七十九號及大正九年勅令第百五十號ハ之ヲ廢止ス

▲朝鮮總督府官制（明治四十三年九月三十日勅令第三百五十四號）

沿革及前文略

第一條　朝鮮總督府ニ朝鮮總督ヲ置ク

總督ハ朝鮮ヲ管轄ス

第二條　總督ハ親任トス

第三條　總督ハ諸般ノ政務ヲ統理シ內閣總理大臣ヲ經テ上奏ヲ爲シ及裁可ヲ受ク

第三條ノ二　總督ハ安寧秩序ノ保持ノ爲必要ト認ムルトキハ朝鮮ニ於ケル陸海軍ノ司令官ニ兵力ノ使用ヲ請求スルコトヲ得

第四條　總督ハ其ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リ朝鮮總督府令ヲ發シ之ニ一年以下ノ懲役若ハ禁錮、拘留、二百圓以下ノ罰金又ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第五條　總督ハ所轄官廳ノ命令又ハ處分ニシテ制規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第六條　總督ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任文官ノ進退ハ內閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任文官以下ノ進退ハ之ヲ專行ス

第七條　總督ハ內閣總理大臣ヲ經テ所部文官ノ叙位叙勳ヲ上奏ス

第八條　總督府ニ政務總監ヲ置ク

政務總監ハ總督ヲ補佐シ府務ヲ統理シ各部局ノ事務ヲ監督ス

第九條　總督府ニ總督官房竝左ノ六局及一部ヲ置ク

內務局　財務局　殖產局　法務局　學務局　警務局　山林部

第十條　總督官房、各局及部ノ事務ノ分掌ハ總督之ヲ定ム

第十一條　總督府ニ左ノ職員ヲ置ク

局長　六人　勅任

山林部長　一人　勅任

祕書官　專任二人　奏任

事務官　專任三十三人　奏任（內二人ヲ勅任トスコトヲ得）

山林事務官　專任一人　奏任

視學官　專任三人　奏任

編修官　專任五人　奏任

技師　專任三十九人　奏任（內三人ヲ勅任トスコトヲ得）

通譯官　專任九人　奏任

屬　專任二百二十九人　判任

編修書記　專任五人　判任

技手　專任百十八人　判任

通譯生　專任三人　判任

第十二條　局長ハ各局ノ長ト爲リ總督及政務總監ノ命ヲ承ケ局務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第十三條　山林部長ハ總督及政務總監ノ命ヲ承ケ部務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第十四條　削除

第十五條　祕書官ハ總督ノ命ヲ承ケ機密ニ關スル事務ヲ掌ル

第十六條　事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ府務ヲ掌ル

第十七條　山林事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ林野ニ關スル事務ヲ掌ル

第十七條ノ二　視察官ハ上官ノ命ヲ承ケ學事ニ關スル視察及ヒ事務ヲ掌ル

第十七條ノ三　編修官ハ上官ノ命ヲ承ケ教科用圖書ノ編修及檢定ニ關スル事務ヲ掌ル

第十八條　技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第十九條　通譯官ハ上官ノ命ヲ承ケ通譯ヲ掌ル

第二十條　屬、編修書記、技手又ハ通譯生ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務教科用圖書ノ編修及檢定ニ關スル事務技術又ハ通譯ニ從事ス

第二十一條　削除

第二十二條　削除

第二十三條　學務局ニ觀測所ヲ置キ氣象ニ關スル事務ヲ掌ラシム

第二十四條　觀測所長ハ朝鮮總督府技師ヲ以テ之ニ充ツ

第二十五條　觀測所ノ名稱及位置ハ總督之ヲ定ム

第二十六條　殖產局ニ地質調查所ヲ置キ地質ノ調查ニ關スル事務ヲ掌ラシム

第二十七條　地所調查所長ハ朝鮮總督府技師ヲ以テ之ニ充ツ

附　則

本令ハ明治四十三年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十三年勅令第三百十九號ハ（其ノ官立學校ニ關スルモノヲ除ク）ノ外之ヲ廢止ス

附　則（大正八年勅令第三百八十六號）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

別ニ定ムルモノヲ除クノ外他ノ勅令中朝鮮總督府各部長官トアルハ朝鮮總督府各局長朝鮮總督府度支部長官トアルハ朝鮮總督府財務局長、朝鮮總督府農商工部長官トアルハ朝鮮總督府殖産局長、朝鮮總督府司法部長官トアルハ朝鮮總督府法務局長、朝鮮總督府鐵道局長トアルハ朝鮮總督府鐵道部長トス

▲臺灣總督府官制（明治三十年十月三十一日勅令第三百六十二號）

沿革前文略

第一條　臺灣總督府ニ臺灣總督ヲ置ク

總督ハ臺灣ヲ管轄ス

第二條　總督ハ親任トス

第三條　總督ハ拓務大臣ノ監督ヲ承ケ諸般ノ政務ヲ統理ス

第三條ノ二　總督ハ安寧秩序ノ保持ノ爲必要ト認ムルトキハ其ノ管轄區域内ニ於ケル陸海軍ノ司令官ニ兵力ノ使用ヲ請求スルコトヲ得

第四條　總督陸軍武官ナルトキハ臺灣軍司令官ヲ兼ネシムルコトヲ得

第五條　總督ハ其ノ職權若ハ特別ノ委任ニ依リ總督府令ヲ發シ之ニ一年以下ノ懲役、禁錮若ハ拘留又ハ二百圓以下ノ罰金若ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第六條乃至第八條　削除

第九條　總督ハ必要ト認ムル地域内ニ於テ其ノ他ノ守備隊長若ハ駐在武官ヲシテ民政事務ヲ兼掌セシムルコトヲ得

第十條　總督ハ知事又ハ廳長ノ命令又ハ處分ニシテ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得

第十一條　總督ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任文官ノ進退ハ拓務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十二條　總督ハ拓務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ所部文官ノ叙位叙勳ヲ上奏ス

第十三條　總督ハ所部文官ヲ懲戒ス其ノ勳任官ニ係ルモノ並ニ奏任官ノ免官ハ拓務大臣由リ内閣總理大臣ヲ經テ上奏シ其ノ他ハ之ヲ專行ス

第十四條　總督府ニ總督官房ヲ置ク

總督官房ニ專任祕書官一人ヲ置ク機密ニ關スル事務ヲ掌ル

祕書官ハ奏任トス

第十五條、第十六條、削除

第十七條　總督府ニ總督官房ノ外左ノ五局ヲ置ク

内務局

文教局

財務局

殖産局

警務局

内務局ニ測候所ヲ附屬セシム

殖産局ニ獸疫血清製造所ヲ置キ獸疫血清ノ製造及配付ニ關スル事務ヲ掌ラシム

殖産局ニ營林所及其ノ出張所ヲ置キ總督ノ指定スル國有林野ノ造林ニ關スル事務、其ノ國有林野ノ產物ノ採取、製造、加工販賣ニ關スル事務、竝之ニ附帶スル鐵道、道路及其ノ鐵道ニ依ル貨客ノ運輸營業ニ關スル事務ヲ掌ラシム

殖産局ニ度量衡所ヲ置キ度量衡器ノ製造修理、販賣及取締リ其ノ他ノ度量衡及計量ニ關スル事務ヲ掌ラシム

第十八條　總督官房及各局ノ事務ノ分掌及其ノ分課ハ總督之ヲ定ム

第十九條　總督府ニ左ノ職員ヲ置ク

總務長官　一人　勅任

局長　五人　勅任

事務官　專任二十人　奏任（内一人ヲ勅任トス）

警視　專任一人　奏任

視學官　專任五人　奏任

編修官　專任二人　奏任

技師　專任四十人　奏任（内二人ヲ勅任トス）

統計官　專任一人　奏任

醫課官　專任二人　奏任

屬　專任二百一人　判任

警部　專任五人　判任

編修書記　專任四人　判任

技手　專任百十二人　判任

通譯　專任一人　判任

各測候所ヲ通シテ技師一人技手十七人ヲ置ク

測候所技師ハ奏任測候所技手ハ判任トス

第二十條　總務長官ハ總督ヲ佐ケ部務ヲ總理シ總督官房及各局ノ事務ヲ監督ス

第二十一條　局長ハ總督及總務長官ノ命ヲ承ケ其ノ主務ヲ掌理シ及局中各課ノ事務ヲ指揮監督ス

第二十二條　警務局長ハ總督ノ特ニ命スル場合ニ限リ警察事務ノ執行ニ關シ總督及總務長官ノ命ヲ承ケ廳長、警務部長及警視以下ノ警察官吏ヲ指揮監督ス

第二十三條、第二十四條　削除

第二十五條　事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ總督官房及各局ノ事務ヲ掌ル

第二十六條　警視ハ警務局ニ屬シ上官ノ命ヲ承ケ審務ヲ掌ル

警視ハ審務警察事務ノ執行ニ關シ警務局長ノ命ヲ承ケ警部以下ノ警察官吏ヲ指揮監督ス

第二十六條ノ二　視學官ハ文教局ニ屬シ上官ノ命ヲ承ケ學事ニ關スル視察及事務ヲ掌ル

第二十六條ノ三　編修官ハ文教局ニ屬シ上官ノ命ヲ承ケ教科用圖書ノ編修及檢定ニ關スル事務ヲ掌ル

第二十七條　技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

技師ハ上官ノ命ヲ承ケ總督官房及各局ノ事務ヲ助ク

第二十七條ノ二　統計官ハ上官ノ命ヲ承ケ統計ヲ掌ル

第二十七條ノ三　測候所技師ハ上官ノ命ヲ承ケ氣象ニ關スル事務ヲ掌リ測候所技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ氣象ニ關スル事務ニ從事ス

第二十八條　翻譯官ハ上官ノ命ヲ承ケ通譯ヲ掌ル

第二十九條　各課ニ課長一人ヲ置キ奏任官又ハ判任官ヲ以テ之ニ充ツ

課長ハ上官ノ命ヲ承ケ課務ヲ掌理ス

第三十條　屬、技手及通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務技術通譯ニ從事ス

第三十一條　警部ハ警務局ニ屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ審務ニ從事ス

第三十二條　編修書記ハ文教局ニ屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ教科用圖書ノ編修及檢定ニ關スル事務ニ從事ス

第三十三條　測候所ハ獸疫血清製造所、營林所、營林所出張所及度量衡所ノ名稱及位置ハ總督之ヲ定ム

附　則

臺灣總督府度量衡司檢所官制ハ之ヲ廢止ス

▲關東廳官制（大正八年四月十二日勅令第九十四號）

沿革前文ヲ略ス

第一條　關東州ニ關東廳ヲ置ク

第二條　關東廳ニ關東長官ヲ置ク

關東長官ハ關東州ヲ管轄シ南滿洲ニ於ケル鐵道線路ノ警務上ノ取締ノ事ヲ掌ル

第三條　關東長官ハ南滿洲鐵道株式會社ノ業務ヲ監督ス

陸軍武官關東長官ニ任セラレタルトキハ之ニ關東軍司令官ヲ兼ネシムルコトヲ得

第四條　關東長官ハ拓務大臣ノ監督ヲ承ケ諸般ノ政務ヲ統理ス但シ涉外事項ニ關シテハ外務大臣ノ監督ヲ承ク

第五條　關東長官ハ其ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リ廳令ヲ發シ之ニ一年以下ノ懲役、禁錮若ハ拘留又ハ二百圓以内ノ罰金若ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第六條　關東長官ハ安寧秩序ノ保持ニ必要ナル場合ニ於テ前條ノ制限ヲ超ユル罰則ヲ附シタル命令ヲ發スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リテ發シタル命令ハ發布後直ニ拓務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ勅裁ヲ請フヘシ若シ勅裁ヲ得サルトキハ關東長官ハ直ニ其ノ命令ノ將來ニ向テ效力ヲ失フコトヲ公布スヘシ

第七條　關東長官ハ其ノ管轄區域ノ安寧秩序ノ保持又ハ鐵道線路ノ警護ノ爲必要アルトキハ關東軍司令官ニ兵力ノ使用ヲ請求スルコトヲ得

第八條　關東長官ハ所轄官廳ノ命令又ハ處分ニシテ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ之ヲ取消スコトヲ得

第九條　關東長官ハ所部ノ職員ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ拓務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ專行ス

第十條　關東長官ハ拓務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ所部ノ職員ノ叙位叙勳ヲ上奏ス

第十一條　關東長官ハ所部ノ職員ヲ懲戒シ其ノ勳任官ニ係ルモノ及奏任官ノ免官ハ拓務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏ス

第十二條　關東廳ニ長官房、内務局、警務局及財務部ヲ置ク

第十三條　關東州ヲ二區ニ分チ各區ニ民政署ヲ置ク其ノ位置、名稱及管轄區域ハ關東長官之ヲ定ム

第十四條　民政署ノ事務ヲ分掌セシムル爲須要ノ地ニ民政署ヲ置ク其ノ位置、名稱及管轄區域ハ關東長官之ヲ定ム

第十四條ノ二　管内ニ警察署ヲ置ク其ノ位置、名稱及管轄區域ハ關東長官之ヲ定ム

第十五條　關東廳ニ左ノ職員ヲ置ク

局　長　二人　勅任
財務部長　一人　奏任
事　務　官　專任十五人　奏任（內一人ヲ勅任トスルコトヲ得）
祕　書　官　專任一人　奏任
理事官　專任五人　奏任
視　學　官　專任一人　奏任
技　師　專任九人　奏任
警　視　專任十一人　奏任
翻　譯　官　專任一人　奏任
屬　學　專任九人　判任
部　專任六十三人　判任
技　手　專任六十五人　判任
翻　譯　生　專任二十六人　判任
稅　務　吏　專任三十人　判任
森林主事　專任五人　判任
警　部　補　專任百二十人　判任

事務官ハ南滿洲ニ駐在スル領事官ヲシテ之ヲ兼ネシムルコトヲ得

交通ノ事務ニ關シ關東廳ニ顧問ヲ置ク顧問ハ南滿洲鐵道株式會社ノ總裁ヲ以テ之ニ充ツ

第十六條　削除

第十七條　局長ハ各局ノ長ト爲リ關東長官ノ命ヲ承ケ局務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

警務局長ハ警察及衛生ノ事務ノ執行ニ關シ關東長官ノ命ヲ承ケ民政署長、民政支署長、警視、警部、警部補及巡査ヲ指揮監督ス

財務部長ハ關東長官ノ命ヲ承ケ財務部ノ事務ヲ掌理ス

第十八條　削除

第十九條　事務官ハ民政署長又ハ民政支署長タル者ヲ除クノ外上司ノ命ヲ受ケ廳務ヲ分掌ス

第二十條　民政署長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ關東長官ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ施行シ部內ノ行政事務ヲ管理ス

第二十一條　民政署長ハ部內ノ行政事務ニ付其ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リ管內一般又ハ其ノ一部ニ民政署令ヲ發シ之ニ五十圓以內ノ罰金若ハ科料又ハ拘留ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

第二十二條　民政署長ハ管內ノ警察署長ヲ指揮ス

第二十三條　民政署長ハ所部ノ職員ヲ監督シ判任官ノ進退ヲ關東長官ニ具狀ス

第二十四條　民政署長ハ署中處務ノ細則ヲ設クルコトヲ得

第二十五條　民政署長事故アルトキハ上席ノ官吏其ノ職務ヲ代理ス

民政署長ハ部下ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第二十六條　削除

第二十七條　祕書官ハ關東長官ノ命ヲ承ケ機密ニ關スル事務ヲ掌ル

第二十八條　理事官ハ民政支署長タル者ヲ除クノ外上司ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス

第二十八條ノ二　視學官ハ上司ノ命ヲ承ケ學事ニ關スル視察及事務ヲ掌ル

第二十九條　技師ハ上司ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第三十條　警視ハ上司ノ命ヲ承ケ警察及衛生ノ事務ヲ掌リ部下ノ警部警部補及巡査ヲ指揮監督ス

第三十一條　翻譯官ハ上司ノ命ヲ承ケ翻譯通辯ヲ掌ル

第三十二條　屬ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三十三條　視學ハ上司ノ指揮ヲ承ケ學事ニ關スル視察及事務ニ從事ス

第三十四條　警部ハ上司ノ指揮ヲ承ケ警察及衛生ノ事務ニ從事シ部下ノ警部補及巡査ヲ指揮監督ス

第三十五條　技手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第三十六條　翻譯生ハ上司ノ指揮ヲ承ケ翻譯通辯ニ從事ス

第三十六條ノ二　稅務吏ハ上司ノ指揮ヲ承ケ稅務ニ從事ス

第三十六條ノ三　森林主事ハ上司ノ指揮ヲ承ケ營林及林野保護ノ事務ニ從事ス

第三十六條ノ四　警部補ハ上司ノ指揮ヲ承ケ警察及衛生ノ事務ニ從事シ部下ノ巡査ヲ指揮監督ス

第三十七條　民政支署長ハ事務官、理事官、警視、屬又ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ

第三十八條　民政支署長事故アルトキハ上席官吏其ノ職務ヲ代理ス

第三十八條ノ二　警察及衛生ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第三十八條ノ三　消防署長ハ警視又ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ上司ノ指揮ヲ承ケ部內ノ消防事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第三十八條ノ四　民政署長又ハ關東州外ノ警察署長ハ管內ノ靜謐ヲ維持スル爲兵力ヲ要スルトキハ之ヲ關東長官ニ具狀スヘシ但シ非常急變ノ場合ニ際シテハ直ニ其ノ附近ノ守備隊長ニ兵力ノ使用ヲ請求スルコトヲ得

第三十九條　關東廳ニ巡査ヲ置ク判任官ノ待遇トス

巡査ノ定員ハ關東長官之ヲ定ム

第四十條　消防手ノ俸給其ノ他ノ消防署ニ關スル經費ハ國庫ニ屬スルモノヲ除クノ外關東廳地方費ノ支辨トス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

關東都督府官制ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ關東都督府ノ參事官、事務官、祕書官、學務官、技師、警視、翻譯官、屬、視學、警部、技手、翻譯生、警部補又ハ巡査ノ職ニ在ル者ハ關東廳ノ參事官事務官、祕書官、學務官、技師、警視、翻譯官、屬、視學、警部、技手、翻譯生、警部補又ハ巡査ニ同官等俸給ヲ以テ任セラレタルモノトス

別ニ定ムルモノヲ除クノ外他ノ勅令中關東都督府トアルハ關東廳ト、關東都督又ハ都督トアルハ關東長官トス

他ノ勅令中任用給與等ニ付テノ在職年數ニ關スル規定ノ適用ニ付テハ關東都督府職員トシテノ在職ハ之ヲ關東廳職員トシテノ在職ト看做ス

▲樺太廳官制（勅令第百九十八號　大正七年六月六日）

沿革前文略

第一條　樺太ニ樺太廳ヲ置ク

第二條　樺太廳ニ左ノ職員ヲ置ク

長官	一人	勅任
部長	三人	奏任
事務官	專任六人	奏任
視學官	專任一人	奏任
支廳長	七人	奏任
警視	專任三人	奏任
技師	專任四人	奏任
屬	專任百二十五人	判任
視學	專任九人	判任
警部	專任十四人	判任
技手	專任四十人	判任
通譯	專任一人	判任
警部補	專任十九人	判任

第三條　長官ハ拓務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部內ノ行政事務ヲ管理ス但シ郵便電信及電話ニ關スル事務ニ付テハ遞信大臣、貨幣銀行及關稅ニ關スル事務ニ付テハ大藏大臣、度量衡及計量ニ關スル事務ニ付テハ商工大臣ノ監督ヲ承ク

第四條　長官ハ其ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リテ廳令ヲ發シ之ニ三月以下ノ懲役若ハ禁錮、拘留百圓以下ノ罰金又ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第五條　長官ハ非常急變ノ場合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警護ノ爲兵備ヲ要スルトキハ師團長ニ移牒シテ出兵ヲ請フコトヲ得

第六條　長官ハ所部ノ官吏ヲ指揮監督シ高等官ノ功過ハ拓務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ行フ

第七條　長官ハ所部ノ高等官ノ懲戒ヲ拓務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ懲戒ハ之ヲ行フ

第八條　長官ハ所轄官廳ノ命又ハ處分ニシテ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第九條　長官事故アルトキハ官等順序ニ從ヒ部長其ノ職務ヲ代理ス

長官及部長共ニ事故アルトキハ拓務大臣ニ於テ他ノ高等官ノ一人ヲシテ長官ノ職務ヲ代理セシム

長官ハ廳ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第十條　長官ハ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ所轄官廳ニ委任スルコトヲ得

第十一條　樺太廳ニ長官官房及左ノ三部ヲ置ク

內　務　部
農　林　部
警　察　部

長官官房及各部ノ事務分掌ハ長官之ヲ定ム

第十二條　樺太廳管內須要ノ地ニ樺太廳支廳ヲ置ク其ノ名稱、位置及管轄區域ハ拓務大臣ノ認可ヲ經テ長官之ヲ定ム

第十三條　部長ハ長官ノ命ヲ承ケ所部ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第十四條　警察部長ハ事務ノ執行ニ關シ長官ノ命ヲ承ケ警視、警部、警部補及巡査ヲ指揮監督ス

第十五條　事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス

第十五條ノ二　視學官ハ上官ノ命ヲ承ケ學事ニ關スル視察及事務ヲ掌ル

第十六條　支廳長ハ長官ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部内ノ行政事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第十七條　支廳長ハ法律命令ニ依リ又ハ長官ヨリ委任セラレタル事件ニ付支廳命ヲ發スルコトヲ得

第十八條　支廳長事故アルトキハ其ノ廳勤務ノ上席屬其ノ職務ヲ代理ス

第十九條　支廳長ハ其ノ廳ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第十九條ノ二　警視ハ上官ノ命ヲ承ケ警察及衛生ニ關スル事務ヲ掌リ部下ノ警部補及巡査ヲ指揮監督ス

第二十條　技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第二十一條　屬ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第二十二條　視學ハ上官ノ指揮ヲ承ケ學事ニ關スル視察及事務ニ從事ス

第二十三條　警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察及衛生ノ事務ニ從事シ部下ノ警部補及巡査ヲ指揮監督ス

第二十四條　技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第二十五條　通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ從事ス

第二十六條、第二十七條削除

第二十八條　警部補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察及衛生ノ事務ニ從事シ部下ノ巡査ヲ指揮監督ス

第二十九條　長官ハ支廳ノ事務ヲ分掌セシムル爲支廳出張所ヲ置クコトヲ得其ノ名稱、位置及管轄區域ハ長官之ヲ定ム

第三十條　支廳出張所長ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ上官ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス

第三十一條　樺太廳管内須要ノ地ニ警察署ヲ置ク其ノ名稱、位置及管轄區域ハ長官之ヲ定ム

第三十二條　警察署長ハ警視又ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ但シ地方ノ狀況ニ依リ警部補ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

警察署長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ部内ノ警察及衛生ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第三十三條　樺太廳ニ巡査ヲ置ク判任ノ待遇トス

巡査ニ關スル規定ハ別ニ定ムル所ニ依ル

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正五年勅令第六十二號及大正五年勅令第二百四十六號ハ之ヲ廢止ス

附　則（昭和五年勅令第二百八十一號）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ樺太廳森林主事ノ職ニ在ル者別ニ辭令ヲ發セラレサルトキハ樺太廳林務署森林主事ニ同俸給ヲ以テ任セラレタルモノトス

本令施行ノ際現ニ樺太廳森林主事ノ職ニ在リ休職中ノ者別ニ辭令ヲ發セラレザルトキハ休職ノ儘樺太廳林務署森林主事ニ同俸給ヲ以テ任セラレタルモノトス

前二項ノ規定ハ文官任用ノ資格ニ關スル規定ノ適用ヲ妨ケス

▲南洋廳官制（大正十一年三月三十一日勅令第百號）

第一條　南洋群島ニ南洋廳ヲ置ク

第二條　南洋廳ニ左ノ職員ヲ置ク

長官	勅任	
書記官	專任	一人　奏任
事務官	專任	五人　奏任
警視	專任	一人　奏任
技師	專任	二人　奏任
屬	專任	四十八人　判任
警部	專任	十二人　判任
警部補	專任	十二人　判任
技手	專任	十二人　判任

第三條　長官ハ拓務大臣ノ指揮監督ヲ受ケ部内ノ政務ヲ管理ス但シ郵便及電信ニ關スル事務ニ付テハ遞信大臣、貨幣銀行及關稅ニ關スル事務ニ付テハ大藏大臣、度量衡及計量ニ關スル事務ニ付テハ商工大臣ノ監督ヲ承ク

第四條　長官ハ其ノ職權又ハ特別ノ委員ニ依リ廳令ヲ發シ之ニ一年以下ノ懲役若ハ禁錮拘留二百圓以下ノ罰金又ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第五條　長官ハ安寧秩序ヲ保持スル爲臨時緊急ヲ要スル場合ニ於テハ前條ノ制限ヲ超ユル罰則ヲ附シタル命令ヲ發スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リテ發シタル命令ハ公布後直ニ拓務大臣ニ由リ內閣總理大臣ヲ經テ勅裁ヲ請フヘシ勅裁ヲ得サルトキハ長官ハ直ニ其ノ命令ノ將來ニ向ケ效力ナキコトヲ公布スヘシ

第六條　長官ハ其ノ管轄區域ノ安寧秩序ヲ保持スル爲必要アリト認ムルトキハ鎭守府司令長官又ハ附近ノ海軍主席指揮官ニ兵力ノ使用ヲ請求スルコトヲ得

第七條　長官ハ所部ノ職員ヲ指揮監督シ高等官ノ功過ハ拓務大臣ニ具狀シ判任官ニ以下ノ進退ハ之ヲ行フ

第八條　長官ハ所轄官廳ノ命令又ハ處分ニシテ成規ニ違ヒ、公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第九條　長官ハ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ所轄官廳ニ委任スルコトヲ得

第十條　南洋廳ノ事務分掌ハ長官之ヲ定ム

第十一條　南洋廳管内須要ノ地ニ南洋廳支廳ヲ置ク其ノ名稱、位置及管轄區域ハ拓務大臣ノ認可ヲ經テ長官之ヲ定ム

第十二條　長官ハ支廳ノ事務ヲ分掌セシムル爲支廳出張所ヲ置クコトヲ得其ノ名稱、位置及管轄區域ハ長官之ヲ定ム

第十三條　書記官ハ長官ノ命ヲ承ケ廳務ヲ掌理ス

第十四條　事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス

第十五條　支廳長ハ事務官、屬又ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ長官ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部内ノ行政事務ヲ掌理シ部下ノ職員ヲ指揮監督ス

第十六條　支廳長ハ部内ノ行政事務ニ付其ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リ支廳命ヲ發スルコトヲ得

第十七條　支廳出張所長ハ屬又ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ上官ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス

第十八條　警視ハ上官ノ命ヲ承ケ警察、衛生及監獄ノ事務ヲ掌リ其ノ執行ニ關シ警部、警部補及巡査ヲ指揮監督ス

第十九條　技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第二十條　屬ハ支廳長タル者ヲ除クノ外上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第二十一條　警部ハ支廳長タル者ヲ除クノ外上官ノ指揮ヲ承ケ警察、衛生及監獄ノ事務ニ從事シ部下ノ警部補及巡査ヲ指揮監督ス

第二十二條　技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第二十三條　警部補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察、衛生及監獄ノ事務ニ從事シ部下ノ巡査ヲ指揮監督ス

第二十四條　氣象ニ關スル事務ヲ掌ラシムル爲南洋廳ニ觀測所ヲ置ク其ノ名稱及位置ハ長官之ヲ定ム

觀測所長ハ技手ヲ以テ之ニ充ツ長官ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス

第二十五條　南洋廳ニ巡査ヲ置ク判任官ノ待遇トス

巡査ノ定員ハ長官之ヲ定ム

附　則

本令ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

大正七年勅令第二百六十七號ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ臨時南洋群島防備隊ニ在勤スル者別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ海軍書記生ハ南洋廳屬ニ海軍警部ハ南洋廳警部ニ、海軍技官補ハ南洋廳技手ニ、海軍警部補ハ南洋廳警部補ニ海軍巡査ハ南洋廳巡査ニ同俸給ヲ以テ任セラレタルモノトス

第三章　雜則

▲樺太移民取扱規程（明治四十年四月樺太廳訓令第十七號）

內務部支廳

沿革略、

樺太移民取扱規程

第一條　移住民取扱ノ爲大泊、青森、函館、小樽、稚內ニ移住民取扱所ヲ置ク但シ必要ニ依リ臨時其ノ他ノ箇所ニモ設置スルコトアルヘシ

第二條　青森、函館、小樽、稚內ノ移住民取扱員ハ左ノ資格アル移住民ニ對シテハ汽船賃割引券ヲ交付スヘシ

一、本籍地及現住地ノ官公署ノ移住證明書ヲ有スル者

二、所轄官公署ノ證明ナキモ本島ニ永住ノ決心アル者ニシテ必要ナル準備ヲ有スル者

三、既ニ移住シタル者ノ家族ニシテ戶主ノ喚寄ニ依リ渡航スル者

前項各號ノ移住民ニ對シテハ必要ナル注意ヲ加ヘ宿泊及乘船等ニ關シ便宜ヲ與フヘシ

第三條　移住民ノ携帶スル左ノ荷物モ所定ノ汽船賃割引ヲ受ケシムヘシ

一、日常衣食住ニ要スル器具、器械

二、農具及器具竝種子、苗等ノ類

第四條　乘船地ノ取扱員ハ移住者ノ本籍、住所、氏名、移住ノ目的及證明ノ有無ヲ調査

シ別紙第一號ノ樣式ニ依リ毎月二期ニ分チ樺太廳長官ニ報告スヘシ

第五條　乘船地ノ移民取扱員ハ移民事務ニ關シ取扱上官公署ニ對シ照會ヲ要スル必要アルトキハ電報若ハ書面ヲ發送スルコトヲ得

第六條　郵便及電信ニ關スル切手ノ受拂ハ一定ノ帳簿ニ發信先、事件ノ要領、景目、電信ニ在テハ其ノ字數ヲ記載シ置クヘシ

第七條　乘船地ノ取扱員ハ一時ニ五十名以上ノ渡航者アルトキハ其ノ都度樺太廳ニ電信ヲ以テ通報スヘシ

第八條　上陸地ノ取扱員ハ埠頭ニ於テ移住民ヲ休憩所ニ案內シ移住證明書ヲ提供セシメ移住者ノ本籍及前住所、職業、氏名、年齡及家族ノ人員竝渡航ノ目的ヲ調査スヘシ

前項ノ調査ヲ遂ケタル後永住ノ移民ト認ムルトキハ割引特約旅舍又ハ宿泊所ニ收容ノ手配ヲ爲シ所定ノ樣式ニ依リ內務部長ニ報告スヘシ

第九條　移住民ニシテ移住地ノ確定セサルモノハ最寄支廳ニ就キ移住地及家屋土地貸付ニ關シ指示ヲ受ケシムヘシ

第十條　移住民ニシテ鐵道便ニ依リ移住目的地ニ向ハムトスル者ニ對シテハ其ノ出發セムトスル前日正午迄ニ乘車券ノ交付及荷物輸送ノ手續ヲ爲スヘシ

第十一條　上陸地ノ移民取扱員ハ多數移民ノ宿泊シタルトキハ臨時旅宿其ノ他ノ宿泊所ヲ視察シ必要ナル注意ヲ與フヘシ

第十二條　汽車便ニ依リ多數移民ノ出發セムトスルトキハ出發地ニ於ケル移民取扱員ハ豫メ着驛地取扱員ニ其ノ旨通報シ且停車場ニ出張シ乘車荷積等ニ付必要ナル保護ヲ與フヘシ五十名以上同時ニ出發セントスルトキハ着驛迄取扱員之ニ付添フヘシ

第十三條　上陸地以外ニ於ケル島內ノ移住民取扱員ハ其ノ地ヲ通過シ若ハ宿泊スル移住民ニ對シ休憩宿泊荷物輸送等ニ相當ノ便宜ヲ與ヘ其ノ取扱數ヲ別紙第一號ノ樣式ニ依リ毎月二回樺太廳長官ニ報告スヘシ

（樣式略）

拓殖總覽附錄『銀行、會社』一覽表

（氏名いろは順）

道別	地名	行名
京畿道	京城	朝鮮銀行本店
同	同	朝鮮殖産銀行本店
同	同	朝鮮商業銀行本店
同	同	海東銀行本店
同	同	漢城銀行本店
同	同	韓一銀行本店
同	同	第一銀行支店
同	同	山口銀行支店
同	同	安田銀行支店
同	同	十八銀行支店
同	平澤	朝鮮商業銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	仁川	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮銀行支店
同	開城	朝鮮商業銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
忠清北道	清州	朝鮮商業銀行支店
同	忠州	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮商業銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
忠清南道	江景	朝鮮商業銀行支店
同	論山	朝鮮殖産銀行支店
同	鳥致院	朝鮮殖産銀行支店
同	大田	朝鮮殖産銀行支店
同	公州	朝鮮殖産銀行支店
同	同	韓一銀行支店
同	江景	一銀行支店
同	鷄山	湖西銀行支店
同	天安	湖西銀行支店
同	天安	朝鮮商業銀行支店
同	大川	朝鮮殖産銀行支店
同	洪城	湖西銀行支店
同	公州	朝鮮商業銀行支店
全羅北道	群山	朝鮮銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮商業銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
全羅南道	木浦	朝鮮殖産銀行支店
同	茁浦	朝鮮商業銀行支店
同	群山	韓一銀行支店
同	金堤	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮商業銀行支店
同	全州	朝鮮殖産銀行支店
同	井邑	朝鮮殖産銀行支店
同	南原	朝鮮商業銀行支店
同	裡里	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮商業銀行支店
同	同	朝鮮銀行支店
慶尚北道	大邱	朝鮮銀行本店
同	同	慶一銀行本店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	慶尚合同銀行支店
同	同	慶尚共立銀行本店
同	同	南銀行本店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮商業銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産銀行支店
同	同	朝鮮殖産

道別	地名	支店名	住所	氏名	營業科目
成鏡南道	元山里	朝鮮殖産銀行支店	京城府太平通二丁目三五	富田屋合資會社	羅紗、絹、綿、麻布、防水寶買紙文房具販賣
同 北青	青	朝鮮殖産銀行支店	同 本町二丁目	友井尚文堂	
同 咸興	興	韓一銀行支店	同 蓬萊町一ノ四	德本火藥銃砲株式會社	
成鏡北道 清津	清津	朝鮮殖産銀行支店	京町	豊國製粉株式會社	
同	同	朝鮮商業銀行支店	同 黄金町一ノ七〇	愛國合名會社	
同	城	朝鮮殖産銀行支店	同 南大門通	朝鮮物産株式會社	
同	會寧	朝鮮銀行支店	同 永樂町一ノ四六	地珠肥料合資會社	
同	同	朝鮮殖産銀行支店	同 長谷川町七四	近澤洋紙店	
同	羅津	朝鮮商業銀行支店	同 南大門通二丁目	丁子屋商店	洋服羅紗製造販賣
同	同	朝鮮殖産銀行支店	同 漢江通一一	龍山倉庫金融株式會社	
同	羅南	朝鮮殖産銀行支店	同 漢江通七	龍山工作株式會社	鐵道製作用品
同	同	朝鮮商業銀行支店	同 漢江通一五	龍山水產株式會社	
同	南	朝鮮殖産銀行支店	同 南米倉町二八三	中央物產株式會社	市場經營、海陸物產委託販賣
同	雄	朝鮮殖産銀行支店	同 堅志洞三二	漢城圖書株式會社	
同	基	朝鮮殖産銀行支店	同 安國洞一五九	關東產業株式會社	
同	同	朝鮮殖産銀行支店	同 南大門通四ノ七六	皆東合名會社	輸出入貿易業
同	同	東洋拓殖株式會社本店	同 西小門町六二	開壽土地興業株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社土地改良部	同 南大門通五丁目	河村運送株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社釜山支店	漢江通一三	海運臺企業合資會社	
同	同	東洋拓殖株式會社大邱支店	本町一丁目	横山商店	
同	同	東洋拓殖株式會社裡里支店	長谷川町七四	吉原商店	
同	同	東洋拓殖株式會社木浦支店	黄金町三丁目	大正信託社	
同	同	東洋拓殖株式會社大田支店	岡崎町	大正石粉工業株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社京城支店	公平洞	大昌貿易株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社元山支店	冷洞七	大昌織物株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社沙里院支店	鐘路五ノ二三二	大成貿易株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社平壤支店	笠井町二五八	大同殖産株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社奉天支店	元町一丁目	大陸ゴム工業株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社哈爾賓支店	觀水洞七〇	大陸自動車運輸株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社大連支店	太平通二丁目	海堂	印刷製本活字鑄造
同	同	東洋拓殖株式會社間島出張所	公平洞五五	大東印刷株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社青島出張所	北米倉町一〇八	大東興業株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社天津出張所	南大門通四ノ五〇	大同林業株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社本店	岡崎町六九	大二商會	
同	同	東洋拓殖株式會社朝鮮業務部	古市町四三	大盛商會	
同	同	東洋拓殖株式會社釜山支店	本町四丁目	泰岡商店	
同	同	東洋拓殖株式會社大邱支店	南大門通五丁目	谷口組	
同	同	東洋拓殖株式會社裡里支店	南大門通二ノ一	辰巳商事株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社木浦支店	鐘路二ノ六一	第一藥品株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社大田支店	古市町四三ノ二八	臺源商會	海產物米穀綿絲ノ委託販賣
同	同	東洋拓殖株式會社京城支店	間城郡松都面	高麗蔘業組	
同	同	東洋拓殖株式會社元山支店	京城府櫻井町二ノ一七〇	榮	土木建築土地開拓
同	同	東洋拓殖株式會社沙里院支店	南大門通一丁目	ソウル護謨工社	
同	同	東洋拓殖株式會社平壤支店	鐘路一ノ一九	角田被服株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社奉天支店	水標町	內鮮自動車運輸株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社哈爾賓支店	漢江通一五	內外實業合名會社	鑛業運送、農林造船鐵工貸金貿易不動產賣買土木建築請負業
同	同	東洋拓殖株式會社大連支店	本町五ノ五一	中地組	
同	同	東洋拓殖株式會社間島出張所	黄金町一ノ九二	中野合名會社	
同	同	東洋拓殖株式會社青島出張所	旭町一ノ二四	長門組	
同	同	東洋拓殖株式會社天津出張所	南大門通二丁目	難波酒造場	
同	同	東洋拓殖株式會社支那直隸省	元町一丁目	ライオン自動車株式會社	
同	同	東洋拓殖株式會社支那山東省	本町二丁目	樂天堂製藥株式會社	毛綿麻絹織物輸出入
同	同	東洋拓殖株式會社支那吉林省		睦商會	
同	同	東洋拓殖株式會社關東州		クームヒン株式會社	金車、消火器家具雜貨販賣
同	同	東洋拓殖株式會社支那遼寧省		熊本商店	
同	同	東洋拓殖株式會社平安南道			
同	同	東洋拓殖株式會社黃海道			
同	同	東洋拓殖株式會社忠清南道			
同	同	東洋拓殖株式會社京畿道			
同	同	東洋拓殖株式會社成鏡南道			
同	同	東洋拓殖株式會社全羅北道			
同	同	東洋拓殖株式會社全羅南道			
同	同	東洋拓殖株式會社慶尚北道			
同	同	東洋拓殖株式會社慶尚南道			
同	同	東洋拓殖株式會社東京支店			
同	同	東洋拓殖株式會社東京出張所			

朝鮮之部

（氏名いろは順）

住所	氏名	營業科目
▲京畿道		
京城府漢江通六	伊藤商店	度量衡器製作販賣
同 鐘路一丁目二六	井上宣壽堂	酒類雜穀海陸物產賣買
同 米倉町三五	池尻商行	
同 南大門通二丁目	日獨貿易合名會社	綿糸布絹布卸小賣
同 金重路四丁目一五	朴承穆商店	內外諸皮革雜貨ノ輸出入
同 黃金町一ノ六五	ペニンシラ洋行	
同 古市町	東洋塗料株式會社	農蠶具種苗肥料製造販賣
同 議州通二丁目	東洋畜產興業株式會社	
同 南大門通一丁目	東洋物產株式會社	綿絹麻布綿糸雜貨販賣
同 黃金町二ノ一九九	東洋興產株式會社	
同 長谷川町七五	東益	
同 光化門通一三九	東亞日報社	
同 三坂通三	東亞林業合資會社	
同 南大門通三ノ一〇	戶田農具株式會社	
同 南大門通五丁目	土木用達合資會社	
同 三坂通二四一	土木興業合資會社	

住所	氏名	營業科目
京城府若草町一三三	山崎鐵工所	工事測量設計
同 並木町一五一	安邊金鑛	
同 本町二丁目二〇	前田商店	和洋酒類販賣 清涼飲料販賣
同 蓬萊町一丁目六二	丸三商會	
同 鐘路四丁目	滿洲實業株式會社	土地開墾、一般鮮滿物產貿易、貸金
同 大和町一丁目三八	鮮滿林業土地株式會社	
同 岡崎町	滿鮮工業株式會社	
同 南大門通五丁目六八	京畿自動車商會	
同 本町二丁目三	京城賣買株式會社	
同 太平通一丁目	京城日報社	
同 南大門通一丁目一六	京城紡織株式會社	
同 貫鐵洞	京城隆興株式會社	金錢貸付業
同 岐仁洞二四二	京城家畜株式會社	
同 岡崎町	京城菓子株式會社	
同 黃金町一丁目	京城殖產株式會社	
同 黃金町七丁目九	京城肥料株式會社	
同 義州通二丁目一二	京城水產株式會社	
同 南大門通二丁目一三三	共益社	輸出入業
同 永樂町二丁目二五	共濟無盡株式會社	
同 永樂町二丁目二五	共濟信託株式會社	
同 太平通二丁目二〇七	共進商會	織物綿糸雜貨卸賣
同 林町一七〇	共和興業株式會社	山林經營、製材、鐵道枕木、木箱製造
同 黃金町二丁目一九	京城株式現物取引市場	
同 南大門通二丁目一	京城窯業株式會社	
同 岡崎町	京城建具株式會社	
同 旭町二丁目	京城葬儀社	
同 本町三丁目	京城劇場	
同 南大門通五丁目五九	京城合同運送株式會社	
同 岡崎町五	京城護謨工業所	不動產賣買
同 南大門通一丁目一四	京城興產株式會社	
同 黃金町二丁目	京城興業信託株式會社	
同 鐘路五丁目八五	京城鑛業社	
同 蓬萊町一丁目四八	京城穀物信託株式會社	
同 漢江通一五	京城天然氷株式會社	
同 元町一丁目一二八	京城繭絲倉庫株式會社	
同 本町二丁目	京城起業株式會社	
同 明治町一丁目	京城共同株式會社	
同 南大門通五丁目六三	京城共立無盡合資會社	土地建物貸付賣買
同 黃金町三丁目三三四	京城共立金融合名會社	
同 鐘路通五九	京城金融株式會社	
同 鐘路通二丁目四四	京城商工株式會社	
同 明治町二丁目八七	京城證券株式會社	
同 鐘路六丁目二六五	雞林興產株式會社	
同 旭町三丁目六	雞林起業製作所	
同 初音町六九	雞林合資會社	商品賣買
同 南大門通一丁目一〇三	共同貿易株式會社	
同 漢江通	京龍館	活動寫眞其他興行
同 茶屋町一二四	協成社	不動產擔保貸付
同 旭町二丁目五三	元山畜產株式會社	金物農工具、建築材料機油販賣
同 南大門通三丁目九一	福田又商店	染料加工賣買
同 大島町一	福壽洋行	穀物海鹽物產、家屋賣買、農業開墾、不動產管理、信託業
同 南大門通三丁目一〇三	福德無盡株式會社	
同 本町三丁目一〇	藤富商會	
同 黃金町一丁目七	不二興業株式會社	
同 黃金町一丁目	不二鑛山株式會社	

住所	氏名	營業科目
京城府南大門通二丁目一二三	小林合名會社	土地建物貸貸賣買
同 永樂町二丁目七	後藤工業合資會社	金融、土木建築請負、人夫供給材料販賣、土地建築請負、製材業
同 榮町	黃興海社	
同 泉町一五四	興隣建物株式會社	建築請負
同 堅志洞八〇	興業無盡株式會社	
同 南山府三丁目一三	公益炭製造株式會社	
同 京町	合成株式會社	不動產、有價證券擔保貸金
同 黃金町二丁目一六	永樂商店	物品販賣業
同 南大門通五丁目二八	永興炭鑛株式會社	
同 太平通二丁目三四	永興社	
同 唐珠洞	新井藥房	不動產、有價證券取得賣買
同 南大門通二丁目一一八	亞細亞鑛山株式會社	
同 貞洞	阿川組	
同 旭町一丁目八一一	齋藤合名會社	土木建築請負業
同 南大門通四丁目	齊民社	各種商品賣買、倉庫業
同 堅志洞	北村商店	一般金融業
同 南大門通一丁目九三	北島藥店	靴鞄原料附屬品卸賣
同 本町二丁目三六	貴重木材合資會社	
同 太平通二丁目二二六	金鷄	貿易金融業
同 樂閑洞二二九	明時堂	時計、貴金屬販賣
同 南大門通五丁目五六	明治興產株式會社	酒類販賣、製麵、養豚、養雞
同 舟橋町二〇六	名組	土木建築工事請負
同 太平通一丁目二九	南大門ビルデング	
同 南大門通一丁目一	南昌社	金錢貸付
同 慶雲洞九六	三成泰合資會社	洋靴、木型折疊枕其他製造
同 黃金町一丁目一四三	三中井吳服店	
同 本町一丁目四五	宮川組	土木建築請負、不動產取得温泉旅館食堂、貸店舖興行
同 岡崎町七〇	新世界	
同 本町二丁目四三	昭和繩叭製造合資會社	土木建築工事測量設計並材料販賣、勞力供給（工事材料賣買、土木建築用材料賣買、鑛物肥料賣買）
同 古市町四三	昭和工業合資會社	
同 大和町一丁目四	昭和商事株式會社	
同 漢江通一三	城南演藝株式會社	
同 漢江通三	清水組	土木建築請負業
同 舟橋町二〇六	順興釀造所	
同 智洞	廣藏株式會社	地所貸付、倉庫業
同 南米倉町二〇一	平田百貨店	
同 大和町一丁目四	木浦土地合資會社	物產ノ賣買、旅館業、藥品製造
同 南大門通二丁目一	森永製品朝鮮販賣株式會社	
同 鐘路通一	模範賣藥商會	
同 黃金町二丁目一九八	鮮滿開拓株式會社	
同 黃金町二丁目	鮮滿興業株式會社	土地、山林經營、倉庫信託
同 壽松洞二七	鮮光印刷株式會社	
同 若草町八四	鮮一商會	海鹽物產貿易米穀肥料賣買擔保貸付
同 壽松洞二六	鮮一紙物株式會社	
同 漢江通一一	盛陽社	材料供給、工事請負
同 本町一丁目一八	セヤマ樂器店	蓄音器、樂器、運動具販賣
同 岡崎町八七	須川材木店	山林伐採、電柱、枕木販賣
同 仁川府本町四ノ二	日鮮海運株式會社	
同 新町一八	朝鮮計理株式會社	
同 宮町三三	吉田精米所	
同 市外里二四〇	玉植商店	日鮮人向雜貨商
同 萬石町九七	月尾島遊園株式會社	
同 新町五八	內鮮商事株式會社	
同 山手町三丁目	奧田精米所	

住所	氏名	營業科目
仁川府宮町九	增田屋商店	酒、醬油、味噌、飲料水販賣
同　港町五丁目三	協同海運株式會社	
同　桃山町	朝日釀造株式會社	
同　本町四丁目一	仁川汽船株式會社	
同　仲町二丁目一〇	仁川起業株式會社	
同　支那町五七	仁川水產株式會社	
同　海岸町三丁目一	仁川米豆取引所	
同　本町四丁目四	仁川無盡株式會社	
同　龍岡町一	仁川物產株式會社	
同　金谷里	仁川燐寸株式會社	
同　本町四丁目八	仁川信託株式會社	
同　宮町三八	昭和興業株式會社	
利川郡邑內面	利川稚苗株式會社	
開城郡松都面	開城電氣株式會社	
同　松都面	開城製造株式會社	
同　松戶面南山町	開城釀造株式會社	
同　松都面南山町	松都ゴム工業株式會社	
同　松都面南本町	松都殖產株式會社	
同　松都面高麗町	松都高實業場	
同　柴范面	友益社	
同　郡內面	松高殖產會社	
同　桂南面稻柳里	梧柳莊	
江華郡光鮮面溫水里	江華興業株式會社	
同　仙源面神井里	森信汽船株式會社	
高陽郡漢芝面	開城釀造株式會社	
同　龍江面五	森信種苗株式會社	
同　崇仁面	森信釀造株式會社	
安城郡北內面	平山牧場	
同　邑內面	城南電燈株式會社	
同　邑內面	安城鑰器製造株式會社	
同　邑內面	安城商事株式會社	
始興郡新東面	安城釀造株式會社	
同　郡內面	內外蠶種株式會社	
振威郡南南面	林田朝鮮農事改良株式會社	
同　西炭面	振威興農株式會社	
水原郡水原面	大同產業株式會社	
同　水原面	京南酒造株式會社	
同　水原面山樓里	富國園	
同　水原面	水原印刷株式會社	
同　水原面梅山里	水原合同運送株式會社	
同　水原面梅山里	水原商事株式會社	
同　水原面山樓里	水原釀造株式會社	
同　水原面南水里	水原殖林種苗株式會社	
同　水原面山樓里	水原酒造株式會社	
京城府永樂町一丁目	朝鮮活動寫眞株式會社	
同　貫鐵洞二四八	朝鮮紙株式會社	
同　本町二丁目六二	朝鮮館	
同　長谷川町	朝鮮官鹽販賣株式會社	
同　旭町二丁目	朝鮮勸農株式會社	
同　蓬萊町三丁目六三	朝鮮印刷株式會社	
同　竹添町二丁目	朝鮮賣藥株式會社	
同　西小門町九二	朝鮮人參製劑所	
同　黃金町一丁目九七	朝鮮土地改良株式會社	
同　大門通五丁目	朝鮮土地經營株式會社	
同　堅志洞	朝鮮圖書株式會社	
同　太平通二丁目一一五	朝鮮新聞社	

住所	氏名	營業科目
始興郡永登浦面	朝鮮皮革株式會社	
京城府太平通一丁目六四	朝鮮美術品製作所	
同　南大門通一丁目	朝鮮生命保險株式會社	
同　和泉町一	朝鮮精米株式會社	
同　旭町一丁目	朝鮮拓興株式會社	
同　漢江通一三	朝鮮興業合名會社	輸出入貿易業、委託販賣
同　大門通五丁目二八	朝鮮鑛工業用品株式會社	
同　漢江通一一	朝鮮有馬組本店	土木建築請負業
同　鐘路二丁目九	朝鮮基督敎彰文社	
同　崇仁洞一七八	朝鮮絹織株式會社	
同　永樂町二丁目一	朝鮮敎育普成株式會社	
同　黃金町三丁目二九	朝鮮金工株式會社	
同　南大門通五丁目一	朝鮮郵船株式會社	
同　御成町	朝鮮林業株式會社	
同　黃金町三丁目七	朝鮮化學製藥株式會社	
同　南大門町五丁目二八	朝鮮火藥銃砲株式會社	
同　明治町一丁目五九	朝鮮火災海上保險株式會社	
同　瑞麟洞一三五	朝鮮興業株式會社	
同　太平通二丁目三四	朝鮮商工株式會社	
同　仁寺洞一八八	朝鮮釀造株式會社	
同　旭町一丁目二八	朝鮮營林洋行	各種燃料販賣
同　黃金町二丁目	朝鮮鐵道株式會社	
同　二村洞二九五	朝鮮天然氷株式會社	
同　青葉町二丁目	朝鮮製綿株式會社	
同　崇仁洞	朝鮮製絲株式會社	
同　本町三丁目	朝鮮興業株式會社	
同　南大門通一丁目一九	朝鮮水電株式會社	
同　南大門通四丁目	朝鮮產業株式會社	
同　黃金町一丁目	朝鮮製藥株式會社	農村開墾物產賣買
同　長沙洞八三	朝鮮染織株式會社	
同　竹添町一丁目	朝鮮商工株式會社	
同　林町一九〇	朝鮮醬油釀造株式會社	綿織物、ゴム品製造販賣
同　蓬萊町一丁目五	朝鮮拓殖株式會社	
同　黃金町二丁目一九八	朝鮮煙草興業株式會社	
同　漢江通一三	朝鮮運輸計算株式會社	
同　吉野町一丁目	朝鮮農林株式會社	
同　元町二丁目五七	朝鮮農工株式會社	
同　館洞六九	朝鮮農業株式會社	
同　黃金町七丁目一	朝鮮產業貿易株式會社	
同　京町一五	朝鮮酸素合資會社	
同　吉野町一丁目六九	朝鮮特產物株式會社	
同　元町三丁目一	朝鮮書籍印刷株式會社	
同　岡崎町	朝鮮製菓株式會社	
同　南大門通四丁目	朝鮮開拓株式會社	
同　竹添町二丁目	朝鮮農業改良株式會社	
同　大鳥町	朝鮮蠶絲株式會社	
同　南大門通二丁目	朝鮮羅紗製品株式會社	
同　岡崎町	朝鮮石鹼株式會社	
▲江原道		
江陵郡江陵面大和町	江陵酒造株式會社	
同　江陵面江陵面	江陵自動車運輸株式會社	
同　江陵面本町	江陵印刷株式會社	
同　江陵面本町	江陵電氣株式會社	
鐵原郡鐵原面	金剛山電氣鐵道株式會社	
同　於雲面	鐵原農事經營株式會社	

住所	氏名	營業科目
奉川郡奉川面	奉川電氣株式會社	
▲黃海道		
鳳山郡沙里院面	沙里院運輸倉庫株式會社	
同　沙里院面北里	岐西勸農株式會社	
同　沙里院面	西鮮興農株式會社	
長淵郡白翎面	黃海運輸株式會社	
海州郡海州面旭町	難波商店	
同　海州面	海州電氣株式會社	
黃州郡黃州面	黃州果樹園	
延白郡延安面	延安汽船株式會社	
載寧郡載寧面日新里	西鮮電氣株式會社	
同　載寧面	黃海農事株式會社	
同　載寧面	載寧運輸倉庫株式會社	
同　下柳面	新院商農株式會社	
同　載寧面	山ヤ西鮮運輸商事株式會社	
信川郡加蓮面	日鮮融和農事株式會社	
同　信川面校塔里	信川運輸倉庫株式會社	
瑞興郡禾回面	松田株式會社	
▲平安南道		
平壤府柳町七九	西京商工株式會社	
同　八千代町一〇	西鮮造林合資會社	
同　壽町八九	西鮮飲料株式會社	
同　水玉里一四六	平安興業金融株式會社	
同　大和町	平壤魚市場	
同　柳町一二	平壤電氣株式會社	
同　櫻町五三	平壤キネマ	
同　本町	平壤機械器具株式會社	
同　泉町一六	平壤醬油株式會社	
同　旭町二	平壤信託株式會社	
同　下水口里	平壤染織合名會社	
同　竹典里四	平壤官煙元賣捌所	
同　幸町三一	平壤第二典禮株式會社	
同　旭町二	平壤無盡株式會社	
同　本町二〇	兩銑商會	
同　櫻町六	吉澤組	
同　本町六	竹中商店	
同　港町五〇	武內商會	
同　大和町三	丹宗製藥株式會社	
同　南門町四一	大同活映株式會社	
同　橋口町	大平釀造株式會社	
同　新倉里	大同商事信託株式會社	
同　壽町一三四	常塚合名會社	
同　本町三二	中平組	
同　館渡里一一九	中信委託會社	
同　大和町	雲鮮合資會社	
同　大和町一七	丸天時計店	
同　大和町	雞林商事株式會社	
同　新陽里	公文	
同　壽町	麻生鑛業合資會社	
同　鏡齋里四	宮川商店	
同　大和町九	宮崎自動車商會	
同　壽町八六	箕城自動車商會	
同　旭町一七	尋木商店	
平壤府外船橋里	平壤電氣興業株式會社	
龍岡郡池雲面眞池里	西鮮產業株式會社	

住所	氏名	營業科目
龍岡郡池雲面眞池里	眞泉釀酒商會	
大同郡栗里面	朝鮮農事株式會社	
安州郡安州面	安州貿易株式會社	
同　安州面	安州電氣株式會社	
鎭南浦府碑石里	西鮮繰綿株式會社	
同　碑石里一九一	平安運輸株式會社	
同　三和町六一	富田合資會社	農業、鑛鑛採掘、牧畜、陶器
同　三和町	鎭南浦果實株式會社	
同　港町八	鎭南浦倉庫株式會社	
同　三和町一〇八	鎭南浦無盡株式會社	
同　龍井町	鎭南浦物產市場	
同　月見町	鎭南浦電氣株式會社	
同　三和町	鎭南浦水產株式會社	
同　三和町七八	鎭南浦商工株式會社	
河東郡河東面邑內洞	河東電氣株式會社	
鎭南浦府旭町一〇	加藤精米所	
同　三和町一〇六	柳原釀造所	
同　碑石里一七七	丸合平安運輸株式會社	
同　三和町五七	南浦組	
安州郡安州面	平安官煙元賣捌株式會社	
成川郡成川面下部里	成川酒造株式會社	
▲平安北道		
新義州府常盤町七ノ二四	磯谷商會	
同　常盤町三丁目	鴨綠江輪船公司	
同　常盤町八丁目五	鴨綠江木材株式會社	
同　濱町	鴨綠江運輸株式會社	
同　常盤町七丁目三	丸加商會	
同　濱町	滿鮮染料工業株式會社	
同　濱町二	共同保管株式會社	
同　眞砂町一丁目一	共榮木材株式會社	
同　常盤町七丁目四	新義州印刷株式會社	
同　濱町二	新義州貿易株式會社	
同　濱町一丁目四	新義州窯業株式會社	
同　大和町一	新義州電氣株式會社	
同　常盤町九丁目二一	新義州木材株式會社	
同　濱町二	新義州水產市場	
同　本町	新義州木材運送株式會社	
同　大和町一丁目一	新義州材木株式會社	
同　濱町一	新義州防腐合資會社	
同　博川郡南面孟中洞	久富商店	
龍川郡龍川面	孟中自動車株式會社	
江界郡江界面西部洞	孟中漁業株式會社	
同　江界面東部洞	江界工業株式會社	
同　江界面西部洞	江界電氣株式會社	
定州郡南面	江界釀造株式會社	
同　定州面	瑞穗農場	
鐵山郡站部洞	定州電氣株式會社	
義州郡光城面	車輦館合同運輸株式會社	
宣川郡宣川面	滿鮮殖產電氣株式會社	
▲咸鏡南道	宣川電氣株式會社	
元山府上洞一九	德興商店	
同　銘石洞	合成釀造所	
同　旭町二丁目	吉田倉庫株式會社	
同　幸日町一二	橫山商店	

住所	氏名	營業科目
元山府榮町九一	共益土地建物株式會社	
同　旭町一	金光酒造合資會社	輸出入仲介、貸金、酒製造
同　北村洞	興業社	
同　上里二洞	朝鮮倉庫株式會社	
同　館橋洞一〇〇	朝鮮ゴム工業株式會社	
同　北村洞	元山貿易株式會社	
同　春日町	大盛商會	米穀肥料產物
同　幸町二六	元山海水浴株式會社	
同　海岸通二丁目一	元山倉庫株式會社	
同　旭町二丁目一六	元山無盡株式會社	
同　本町一丁目一	元山自動車運輸株式會社	
同　上里二洞二五	元山商業株式會社	
同　泉町四丁目七	元山酒造株式會社	
同　仲町二丁目二〇	元山信託株式會社	
同　陽地洞三三	元山水力電氣株式會社	
同　海岸通一丁目四	元山水產株式會社	
北青郡北青面	北青電燈株式會社	
同　北青面	青南株式會社	海產物、貿易、海運、釀酒業、印刷、書籍、各種印刷、文具、樂器、貿易（自動車、貿易、日用品、雜貨、酒類、燃料、燃木類）
同　新浦面新浦里	文化株式會社	
同　北青面內里	共興株式會社	
同　老德面內里	北鮮土木合資會社	土木建築請負
咸興郡咸興面	北鮮貿易社	
同　咸興面	咸南商工株式會社	
同　咸興面	咸興無盡株式會社	
同　咸興面	咸興運輸株式會社	
同　西湖面	咸興酒造合資會社	
同　咸興面	咸興精米株式會社	
同　咸興面	丸は精米株式會社	
同　咸興面	大成	
同　咸興面	旭印刷所	
同　咸興面	佐川組	倉庫、金融、運輸保險代理
咸興郡咸興面	百草製藥研究所	開墾林請負、農林產賣買
同　咸興面東陽里	西湖水產株式會社	天然氷採取、水產物販賣
同　西湖面西湖里	西湖津商船組	
同　西湖津	川內里鐵道株式會社	木材賣買
文川郡草面川內里	今西	
甲山郡普惠面	今西商事株式會社	酒釀造販賣、印刷、養豚
同　惠山鎭	惠山鎭林業株式會社	
同　普惠面	惠山農蠶林株式會社	
永興郡洪仁面	永興合同運送株式會社	
同　洪仁面南山里	永興釀造株式會社	
同　洪仁面都良里	新上精米所	
定平郡谷柳面	東益株式會社	養蠶
安邊郡鶴城里	三水釀酒株式會社	
三水郡三南面	新興林業合資會社	
新興郡永興面	井川商店	海產物賣買
▲咸鏡北道	北鮮炭鑛汽船株式會社	
清津府敦島町二	東一商會	稅關貨物取扱
同　明治町三	韓成運輸株式會社	
同　寶町	辛良極商店	海陸產物賣買
同　新岩洞一〇〇		
同　新岩洞一〇〇		

住所	氏名	營業科目
清津府榮町七	松下商店	海陸物產賣買
同　榮町七	公海興產株式會社	
同　明治町二六	清津タクシー	
同　明治町三二	清津倉庫株式會社	
同　彌生町八	清津無盡株式會社	
同　大和町二七	清津運輸株式會社	
同　彌生町三	清津電氣株式會社	綿絲布類、雜貨移入販賣
同　北星町一九	清津水產株式會社	
會寧郡會寧面	會寧電氣株式會社	
同　會寧面	前田政商店	
同　會寧面	豆滿江林業株式會社	輸出入貿易、倉庫運送貸金
同　會寧面	廣成商會	
慶興郡雄基面	近江土地株式會社	
同　雄基面	北鮮土地株式會社	
同　雄基面	雄基電氣株式會社	
同　雄基面雄基洞	福生洋行	
鏡城郡羅南面本町	鮮運回漕合名會社	
同　羅南面初瀨町	伊丹組	土木建築請負
同　羅南面生駒町	北朝鮮產業株式會社	農林、水產、牧畜、工業及產物賣買
同　羅南面本町	咸北印刷株式會社	
同　羅南面	羅南劇場株式會社	
同　羅南面	羅南酒造合名會社	
同　羅南面初瀨町	羅南醬油株式會社	
同　羅南面生駒町	羅南種苗株式會社	
同　羅南面	農林株式會社	
同　羅南面本町九一	協和無盡株式會社	
同　羅南面本町	協和信託株式會社	
同　羅南面本町	嘗原倉庫合資會社	
城津郡城津面	北鮮勸業株式會社	一般商品販賣、仲介及貸金貿易業
同　城津面旭町	咸北	
同　城津面旭町	泰成社	
同　城津面旭町	城津畜產株式會社	
同　城津面本町	城津電氣株式會社	
▲忠淸南道	忠南產業株式會社	
論山郡江景面中町	忠南酒造株式會社	
同　論山面榮町	忠南蠶業株式會社	
同　魯城面	內外土地株式會社	
同　江景面	江景來穀信託株式會社	
同　江景面	江景電氣株式會社	
同　江景南町	江景水產株式會社	
同　江景面	三益社	委託貿易
保寧郡大川面	忠南土地合資會社	
唐津郡泛川面	朝鮮農業株式會社	
大田郡大田面榮町	忠南無盡株式會社	
同　大田面本町	忠淸煙草元賣捌株式會社	
同　大田面本町	大田土地株式會社	
同　外南面	大田鑄工所	
同　大田面榮町	大田商事株式會社	
同　大田面本町	大田電氣株式會社	
同　外南面	大田皮革株式會社	
同　大田面本町	昭和農事株式會社	農事經營、資金貸付、肥料、農具、物品販賣問屋業
禮山郡禮山面	忠南商業株式會社	
同　五可面	海外拓殖株式會社	
扶餘郡鴻山面	忠南苧布株式會社	

住所	氏名	營業科目
公州郡公州面	南鮮興業株式會社	
同　公州面西錦町	公州電氣株式會社	
同　公州面本町	公州自動車運輸株式會社	
洪城郡洪州面	洪城商事株式會社	
燕岐郡錦南面大平里	千年農場	
同　鳥致院面	中鮮商事合資會社	皮革製造
同　鳥致院面	雞林土地物産株式會社	
同　鳥致院面	共立倉庫物産株式會社	
同　鳥致院面	朝永土地株式會社	
天安郡天安面邑內里	金谷商店	穀物肥料
同　笠場面	天安中央鑛業株式會社	
同　天安面	天安電氣株式會社	
同　邑內里	朝鮮京南鐵道株式會社	
同　成驛面魚徹里	成驛牧場合資會社	
舒川郡馬東面	錦江土地建物合資會社	
▲忠清北道		
忠州郡忠州面	忠州電氣株式會社	
永同郡永同面稽山里	共立倉庫物産株式會社	
同　黃澗面馬山里	三共榮商會	
清州郡清州面北町	中北無盡株式會社	
同　清州面西町	清州土地建株物式會社	
同　清州面本町	忠清農園	
同　四州面	朝鮮運輸倉庫株式會社	
▲全羅南道		
木浦府南橋洞四八	東亞護謨工業株式會社	
同　壽町一丁目	海鮮運送株式會社	
同　海岸通一丁目	南北棉業株式會社	
榮町一丁目四	南一運輸株式會社	
榮町二丁目四	南鮮商工株式會社	
同　福山町一一	南鮮煙草組合	養兎業
同　竹洞三二	共榮養兎株式會社	
同　海岸通一丁目八	福田農事株式會社	
同　大成洞一八	國武農場	
同　壽町一丁目五	朝日精米所	
同　大和町二丁目九	有恒社	農業、有價證券取得
同　明治町一一	三共倉庫運輸株式會社	農事、工業、商業
同　榮町一丁目八	木浦殖產株式會社	
同　本町三丁目八	木浦酒造株式會社	
同　常盤町二丁目九	木浦信託株式會社	
同　港町六	木浦製氷冷藏株式會社	
同　仲町一丁目四	全南印刷株式會社	
同　寶町三丁目一	全南燒酎株式會社	
同　幸町一丁目三	全南信託株式會社	
同　櫻町	全南魚市場	
同　南橋洞一〇八	全南鑄造株式會社	銑鐵ヲ原料トスル鑄物製造業
同　幸町一丁目三	全南倉庫金融株式會社	
同　常盤町二丁目九	全南無盡株式會社	
同　湖南町七	全南麵子株式會社	
同　福山町七	全南電燈株式會社	
同　海岸通一丁目二	全南醬油株式會社	各種藥酒、燒酎、清酒製造
同　南橋洞五七	全南釀造株式會社	
同　壽町一丁目	全南綿花株式會社	
同　寶城郡筏橋面	全南製帽合名會社	
同　筏橋面	南鮮貿易株式會社	

住所	氏名	營業科目
長城郡長城面鈴泉里	全南運輸倉庫株式會社	
海南郡海南面大町	海南共同運輸株式會社	
同　黃田面	花源殖產株式會社	
咸平郡咸平面	咸平軌道株式會社	
同　咸平面	咸平殖產株式會社	
同　咸平面	咸平興產株式會社	精米諸穀物賣買
同　嚴多面	高力農場	
莞島郡莞島面	莞島運輸株式會社	
潭陽郡潭陽面	京南商會	乘合自動車業
靈巖郡靈巖面	靈巖運輸倉庫株式會社	
同　望湖里	靈巖田川農事株式會社	
同　靈巖面	中農場	
靈光郡法聖面	法聖浦物產株式會社	水產賣買漁具製造
同　靈光面	靈光倉庫金融株式會社	
同　靈光面	靈法電氣株式會社	農林業、土地賣買周旋、農林、開墾土地家屋賃貸、貸倉庫
同　西面	月隱農產合名會社	
麗水郡麗水面	高瀨農場	
同　麗水面	麗水電氣株式會社	
同　麗水面	興洋水產株式會社	
同　麗水面東町	全南製氷株式會社	
同　麗水面	全南水產株式會社	
羅州郡羅州面	羅州興農株式會社	
同　榮山面	榮山浦運輸倉庫株式會社	米穀、肥料、海產物倉庫
同　榮山面榮山里	全南商事株式會社	
同　羅新面	全南電氣株式會社	
同　榮山浦	全南繩叭株式會社	
光州郡光州面	南鮮工業合名會社	
同　光州面仲町	南朝鮮護謨合名會社	
同　松汀面松汀里	不二酒造株式會社	
同　光州面	湖南產業株式會社	
同　光州面北城町	光州無盡株式會社	
同　光州面北城町	光州農工株式會社	
同　光州面花園町	光州酒造株式會社	
同　光州面	佐藤商店	自動車及各種部分品販賣
同　光州面校社里	全羅南道是製糸株式會社	
同　松汀里	全南殖產株式會社	
同　瑞坊面舅鄕里	全南酒麵株式會社	酒類釀造及麵子製造、金融、倉庫、セメント加工品製造販賣
同　松汀面	全南企業株式會社	
高興郡蓬萊面新錦里	鮮南漁業株式會社	
康津郡康津面	康津運輸倉庫株式會社	
濟州島濟州面	濟州電氣株式會社	
同　濟州面	濟州棉業株式會社	
同　濟州面	濟州商船株式會社	
順天郡順天面	順天無盡株式會社	
同　順天面	順天電氣株式會社	
群山府明治町通六五	横山釀造株式會社	
▲全羅北道		
同　本町通一九	大同洋行	有價證券賣買
同　本町通二七	中柴商事株式會社	海陸運送業
同　本町通四七	群山米穀信託株式會社	
同　金州通三八	群山海運株式會社	
同　本町通一三	群山通商合資會社	
同　本町通一三	群山興農株式會社	
同　大和町一五	群山商工信託株式會社	
同　横田町	群山酒造株式會社	

住所	氏名	營業科目
群山府苧町一八	湖南農具株式會社	
同　本町通三四	安部商店	木材建築
同　淺山町三	南朝鮮電氣株式會社	
同　榮町六六	南朝鮮護謨株式會社	
同　榮町三一	清水合名會社	金錢貸付、質屋物件貸付、植林農具、肥料雜貨賣買
同　新興洞一四六	鮮南勸業株式會社	
同　西濱町二	全北水產株式會社	
同　榮町一四二	全北叺輸出株式會社	
沃溝郡米面京場里	宮崎農場	農業經營、土地開發、金融
同　開井面鉢山里	島谷農事株式會社	
扶安郡乾先面	茁浦水產株式會社	魚市場倉庫
益山郡益山面	大橋農場	
同　五山面松鶴里	眞田農事合名會社	
同　益山面	全北蠶業株式會社	
同　益山面裡里	全北企業株式會社	肥料農具、不動產賣買、資金融通、倉庫金融、肥料雜穀、土地賣買
同　益山面裡里	全北商事株式會社	
金堤郡金堤面	石川縣農業株式會社	
同　白鷄面	井上農事合名會社	
同　青蛾面	萬頃畜產株式會社	
同　青蛾面	中柴產業株式會社	農業、殖林、畜產開墾
井邑郡井邑面蓮池里	井邑自動車株式會社	
同　井邑面蓮池里	平田商店	米穀農具、物品販賣、肥料移入
全州郡全州面大和町	一三商會	海陸物產貿易
同　伊東面	松本運送店	
同　全州面本町	湖南鐵砲火藥株式會社	
同　伊東面	朝鮮製莚株式會社	肥料農具製造、穀類雜貨販賣
同　全州面本町	全北肥料株式會社	
同　全州面大正町	全州無盡株式會社	諸物品賣買及金融
同　全州面高砂町	全州興產合資會社	
同　伊東面老松里	全州製糸株式會社	
▲慶尙南道		
釜山府大倉町四丁目四一	石川精米所	
同　本町三丁目三八	萩野商店	海產、物產、貿易委託賣買
同　草梁町一七〇	發明品製造株式會社	醬油釀造販賣、開拓殖林
同　瀛仙町一八二一	日本硬質陶器株式會社	
同　辨天町	日清製藥株式會社	
同　旭町一丁目五	東鮮林產株式會社	
同　埋立新町七	大池回漕店	來繭穀、海藻類賣買
同　高島町五	大池精米所	
同　榮町三丁目四一	關東商會	穀物、油脂、肥料賣買
同　佐川洞六八八	山上商店	
同　佐川洞	上山商行	紙文房具販賣
同　辨天町二丁目	吉見商店	絹、綿糸、布、雜貨販賣其他
同　本町二丁目	高瀨合名會社	
同　大倉町三丁目九	澤山兄弟商會	海陸運送業
同　富平町二丁目	辻酒造株式會社	
同　本町二丁目八	中島商店	諸商品賣買
同　草梁町三九三	南鮮倉庫株式會社	
同　大倉町二丁目二四	南朝鮮自動車株式會社	
同　大倉町一丁目一八	山利商店	
同　富平町一丁目一〇	丸金酒造株式會社	
同　高島町七	滿留嘉久合資會社	
同　瀛仙洞	牧島信託株式會社	
同　瀛州洞二六	慶南印刷株式會社	

住所	氏名	營業科目
釜山府大倉町四丁目二五	慶南繩叺株式會社	
同　本町一丁目	慶南無盡株式會社	
同　埋立新町一四	慶南亞砒酸鑛業株式會社	
同　南濱町一丁目三〇	慶南潛水器漁業株式會社	
同　瀛仙洞一	慶南船渠工業株式會社	
同　辨天町二丁目九	慶南製藥株式會社	
同　幸町一五	慶南勸業株式會社	手形割引證券運用
同　本町一丁目	慶南水產輸出株式會社	
同　昌平町三丁目五六	慶南瓦斯電氣株式會社	
同　本町一丁目	慶南海藻株式會社	
同　佐藤町二	慶南汽船株式會社	
同　凡一町七〇〇	慶南紡織株式會社	
同　大倉町四丁目三六	釜山日報社	
同　大廳町一丁目三五	釜山米穀證券信託株式會社	
同　富平町四丁目一一	釜山築港合資會社	穀物、肥料、委託賣買
同　本町四丁目一六	福島合資會社	
同　榮町三丁目五六	釜山共同倉庫株式會社	
同　大倉町四丁目二二	釜山商船組	海陸運送
同　大廳町一丁目三五	釜山證券株式會社	
同　南濱町一丁目六六	釜山食糧品株式會社	
同　辨天町一丁目三〇	釜山信託株式會社	
同　富平町二丁目三	釜山西部自動車株式會社	
同　幸町二丁目四五	釜山精米所	
同　南濱町一丁目三三	釜山水產株式會社	
同　凡一町三一一	釜山鎭埋築株式會社	
同　幸町一丁目四〇	釜山無盡株式會社	
同　大倉町三丁目一	釜山證券株式會社	
同　南濱町一丁目三三	釜山運送事業合同株式會社	海陸貨物運送業
同　水晶町四六六	釜山丸魚合資會社	演劇、活動寫眞興行、船舶及諸機械製作材料賣買貿易業
同　瀛仙町一九一三	釜山興產株式會社	
同　本町二丁目四	釜山鐵工所	
同　大倉町四丁目四〇	五島合名會社	
同　佐藤町五	國際商會	活動寫眞業
同　大廳町一丁目三八	佐治商會	石炭、醬油、鹽、販賣布、綿糸、食料品、雜貨賣買
同　南濱町一丁目四一	明治屋	海陸物產運送業、諸物產運送業、貨物運送業、貨物運送業ニ附帶シ倉庫業ヲ兼營ス
同　黃登面黃登里	守谷商店	
同　埋立新町一七	全北畜產株式會社	
馬山府濱町三丁目	忽那商店	各種機械類ノ販賣
同　元町	馬山海產物株式會社	
同　通町一丁目	馬山倉庫株式會社	
同　都町二丁目	馬山無盡株式會社	
同　都町二丁目八	馬山運送倉庫株式會社	
同　港町二丁目一一	馬山線合同運送倉庫株式會社	
同　濱町三丁目五	馬山製氷株式會社	
同　濱町一丁目	馬山水產株式會社	
同　柳町一五	鎭海灣汽船株式會社	土地取得農業經營並ニ資金貸付
同　元町九一丁目一	共立	
同　上南洞二一四	元東貿易株式會社	
同　萬町七三	合同運送株式會社	
同　京町二丁目七	產業金融株式會社	
東萊郡龜浦面	昭和酒類株式會社	酒類販賣
同　沙下面	松島農事株式會社	
同　西面田浦里	遊園	動產、不動產、取得利用
同　沙上面甘田里	釜山窯業株式會社	
	阿部合名會社	

住所	氏名	營業科目
東萊郡南面	金海農業株式會社	
統營郡統營面	統營海運株式會社	
同　統營面敷島町	統營海産株式會社	
同　統營面敷島町	統營煙草元賣捌株式會社	
同　統營面吉野町	統營漆工株式會社	
同　統營面敷島町	統營精米所	
同　統營面	統營製網株式會社	
同　統營面	大正運輸組	漁網、漁具製造販賣、漁船具販賣
同　巨濟面	共同漁業株式會社	
同　統營面	巨濟運航株式會社	
河東郡河東面	御崎酒造株式會社	
咸陽郡咸陽面	南一物産株式會社	
蔚山郡東面方里	三一産業株式會社	
同　蔚山面	蔚山電氣株式會社	
固城郡固城面東外洞	統營精米所	
居昌郡居昌面下洞	統營製網株式會社	
密陽郡密陽面	大正運輸組	漁網、漁具製造販賣、漁船具販賣
同　統營面	共同漁業株式會社	
同　巨濟面	巨濟運航株式會社	
同　統營面	御崎酒造株式會社	
同　密陽面	南一物産株式會社	
同　密陽面	三一産業株式會社	
昌寧郡靈山面	蔚山電氣株式會社	
同　昌寧面	固城電氣株式會社	
同　昌寧面遠亭里	居昌自動車株式會社	
泗川郡三千浦面	密陽麵子株式會社	
同　泗川面貞義洞	密陽電氣株式會社	
同　文善面	密陽財興株式會社	
昌原郡舊馬浦	島津商行	
同　鎭海面龜島町	靈山自動車株式會社	
同　大山面	慶南合同自動車株式會社	
晋州郡晋州城外	昌寧商事株式會社	
同　晋州面大安洞	倉庫商會	
同　晋州面川前里	泗川酒造株式會社	
同　晋州面飛鳳洞	三千浦水産合資會社	
同　晋州面	馬山金融株式會社	
同　晋州面大安洞	北陸組	
同　晋州面大安洞	鎭海水産株式會社	
同　晋州面	村井農場信用株式會社	
晋州郡晋州城外	協成商會	
同　晋州面大安洞	晋州無盡株式會社	
同　晋州面川前里	晋州運送株式會社	
同　晋州面飛鳳洞	晋州電氣株式會社	
同　晋州面	晋州商友會	
同　晋州面大安洞	晋州信託株式會社	
同　晋州面大安洞	晋州肥料株式會社	
同　晋州面	晋州土地株式會社	
▲慶尚北道		
大邱府旭町一五	寶水産合名會社	
同　錦町二丁目二一九	朝鮮繭糸株式會社	
同　西城町二丁目七	朝陽無盡株式會社	
同　元町二丁目二〇	芳德合資會社	
同　大和町六六	大邱運送株式會社	
同　錦町一丁目三	大邱物産貿易合資會社	
同　錦町一丁目二五	大邱穀物株式會社	
同　元町一丁目	大邱穀物信託株式會社	
同　大和町	大邱起業株式會社	
同　元町一丁目二一	大邱魚菜株式會社	
同　元町一丁目	大邱酒造株式會社	
同　三笠町	大邱精米株式會社	
同　錦町二丁目	大邱物産商店	
同　錦町二丁目	大邱農林合資會社	
同　三笠町七四		

住所	氏名	營業科目
大邱府上町	大邱鑛業株式會社	
同　鳳山町	大邱杞柳株式會社	
同　元町一丁目	大邱企業株式會社	
同　東城町二丁目	大八無盡株式會社	
同　東城町二丁目	大八	土地、建物、貸貸
同　大和町三三	大邱博善社	賣買、葬式請負、葬具賃貸
同　東城町三丁目七	大邱日報社	
同　東城町三丁目七一	大邱朝鮮酒釀造株式會社	
同　田町	大邱無盡株式會社	
同　南龍岡町五六	大邱産業合名會社	
同　東本町十一丁目一	大興電氣株式會社	
同　元町一丁目	大正商會	穀物、繩叭並商品賣買、精米
同　元町二丁目二	南鮮運輸株式會社	
同　東城町三丁目四九	南鮮釀造	
同　錦町二丁目	中西組	建築請負業
同　大和町七四	南一商會	貸金、不動産賣買仲介
同　東城町一丁目八	共榮自動車株式會社	
同　川町三六	慶北水力電氣株式會社	
同　南龍岡町五五	深田合資會社	山林、土地、建物所有賣買
同　錦町二丁目	高麗窯業株式會社	
同　元町二丁目三五	高麗磁器製造株式會社	
同　大和町六六	坂野組	土木建築請負業
同　市場北通一五二	山陽商會	米雜穀、繩叭及精米販賣、雜金、土地、建物賣買
同　錦町二丁目二一五	菊地組	雜貨、金融及倉庫業、養
同　元町二丁目八	鮮南殖産株式會社	米販賣、雜金、土地、建物賣買
醴泉郡醴泉面	杉原合資會社	物品販賣、問屋業代理業、鐵工場、瓦製造
慶山郡慶山面	醴泉酒造株式會社	
慶州郡江西面安居里	慶山自動車株式會社	
同　陽北面廿浦里	土佐興農合名會社	土木建築請負業
同　慶州面	甘浦電氣株式會社	
同　慶州面	慶州商會	日用品雜貨卸小賣
同　慶州面	慶州電氣株式會社	
同　慶州面	慶州釀造株式會社	
同　中垈面	百濟釀造株式會社	
迎日郡浦項面	浦項無盡株式會社	
同　浦項面	浦項合同運輸株式會社	
同　浦項面	浦項釀造株式會社	
同　浦項面	浦項信託株式會社	
同　浦項面	拓産組	殖林、農事經營
同　濟州面	九龍浦電氣株式會社	
同　浦項面	丸木運送株式會社	
同　浦項面	迎日興業株式會社	
同　浦項面	慶北鑛業株式會社	
同　良浦里	慶北良浦製氷合資會社	
同　浦項面	福島商店	酒食料品販賣農業商業
同　濟州面九龍浦里	鮮海漁業株式會社	
高靈郡高靈面	高靈酒造株式會社	
盈德郡盈德面	東海産業株式會社	
同　盈德面江口洞	盈德電氣株式會社	
永川郡衙川面	永川産業株式會社	
同　永川面	永川酒造株式會社	
同　永川面倉邱	永川産業株式會社	叭蔴製造販賣精米
榮州郡榮州面	榮州釀造株式會社	
安東郡安東面	慶安釀造株式會社	
同　安東面	安東電氣株式會社	海陸物産製造貿易

臺灣之部

（氏名いろは順）

住所	氏名	營業科目	道別	氏名	營業科目
安東郡安東面	安東酒造株式會社	商品賣買、土木建築請負	臺北市表町一丁目二六	太溪炭礦株式會社	土木建築請負
金泉郡金泉面大和町	馬場運送店		同　新榮町一丁目五	大永興業株式會社	
同　金泉面	山上商會		同　表町二丁目八	大有物產株式會社	
同　金泉面	慶北運送株式會社		同　永樂町二丁目五四	大正醬油株式會社	
同　金泉面	永和商業株式會社	魚菜市場經營	同　下奎府町二丁目四四	大正信託株式會社	
同　金泉面	金泉無盡株式會社		同　太平町四丁目七	和榮商會	肥料製造、穀粉類砂糖、油類、販賣
同　金泉面大和町	金泉合同運送株式會社		同　永樂町四丁目二五	赤司鑛業株式會社	
同　金泉面錦町	金泉金融倉庫株式會社		同　城內府後街	華南銀行	
同　金泉面本町	金泉酒造株式會社		同　表町二丁目二	吉永商會	砂糖、麥粉、藥品販賣、味ノ素、穀粉、砂糖食物販賣、不動產、有價證券賣買
尙州郡尙州面	尙州商事株式會社	物貨、賣買、運輸倉庫、金融、信託	同　榮町二丁目二八	吉野屋商店	
同　尙州面仁鳳里	尙州酒造株式會社		同　本町二丁目二三	用和振業合資會社	
漆谷郡倭館面	倭館金融倉庫株式會社		同　建成町一丁目二〇五	臺灣製氷株式會社	
青松郡青松面	青松興業社	海陸物產販賣、農業、資金貸付	同　新宮町三丁目八	臺灣製壜株式會社	
星州郡星州面京山洞	星州儉蓄商會		同　堀江町二〇六	臺灣石材株式會社	
			同　築地町一丁目八	臺灣染織株式會社	
			同　宮前町一丁目一九	臺灣纖維工業株式會社	
			同　表町一丁目三〇	臺灣土地開拓株式會社	
			同　西門町三丁目二一	臺灣土地建物株式會社	
			同　北門町一一	臺灣鑄造株式會社	
			同　大龍峒町一一七	臺灣爆竹煙火株式會社	
			同　河合町一	臺灣蓄地物產株式會社	
			同　元園町六四	臺灣日日新報社	
			同　榮町四丁目三二	臺北製壜株式會社	
			同　表町二丁目一四	大成火災海上保險株式會社	
			同　北門町八	大全興業株式會社	
			同　西門町三丁目二一	太平興業株式會社	
			同　北門町一一	臺北印刷株式會社	
			臺北市下奎府一町丁目	臺北カネタツ株式會社	
			同　大和町三丁目二	臺北魚市株式會社	
			同　表町二丁目八	臺北劇場合資會社	
			同　艋舺西門外	臺北工業株式會社	
			同　大和町二丁目八	臺北永樂座	
			同　永樂町三丁目一四	臺北鐵道株式會社	
			同　新宮町五丁目五〇	臺北空瓶株式會社	
			同　新起町二丁目九	臺北共榮株式會社	
			同　本町二丁目六六	臺北自動車株式會社	
			同　北門町七	臺灣製革合資會社	
			同　宮前町四〇〇	臺灣製腦株式會社	
			同　濱町二丁目二	臺灣電力株式會社	
			同　書院町一丁目一	臺灣電氣興業株式會社	
			同　書院町一丁目一	臺灣炭業株式會社	
			同　表町二丁目八	臺灣煉瓦株式會社	
			同　表町二丁目一四	臺灣倉庫株式會社	
			同　泉町一丁目七	臺灣銀行	
			同　榮町二丁目一	臺灣貯蓄銀行	
			同　本町一丁目四三	臺灣商工銀行	
			同　大和町四丁目一	臺灣畜產株式會社	
			同　幸町一七七	臺灣オフセット印刷株式會社	
			同　宮前町三六三	臺灣織物株式會社	
			同　大瀧嗣町四三八	臺灣物產商事合資會社	
			同　表町二丁目二	臺灣コークス株式會社	
			同　表町一丁目四六	臺灣勸業無盡株式會社	
			本町一丁目一七	臺灣勸業銀行	
			同　新宮町五丁目一七	臺灣用達株式會社	
			同　京町二丁目一一		

▲臺北州

住所	氏名	營業科目
臺北市京町四丁目一〇	橋口商店	各種ゴム製品販賣、自動車自轉車ノ物品部品販賣
同　大和町四丁目八	日東鑛業株式會社	石炭採掘賣買
同下奎府町一丁目二〇四	日本新質舖	質屋業、信託倉庫業
同　北門町八	日淸石油合資會社	淸酒釀造販賣
同　表町二丁目一四	日本芳釀株式會社	
同　馬場町一一八	日本醬油株式會社	
同　太平町五丁目一三	新新興業株式會社	
同　堀江町	新高サイダー株式會社	
同　表町二丁目八	新興業株式會社	
同　西門町三丁目三一	新高炭礦株式會社	
同　表町二丁目一四	北投窯業株式會社	
同　港町三丁目一八	丙南信託株式會社	
同　御成町三丁目一九	東洋コンクリート株式會社	
同　建成町四丁目一二	東亞鐵工所	土地建物賣買
同　太平町四丁目一八	東亞製藥貿易株式會社	
同　港町三丁目四五	東華殖產株式會社	
同　綠町四丁目一〇	東光油脂工業株式會社	不動產賣買賃貸、造林業、穀物、欧米雜貨賣買
同　入船町四丁目八	德興商行	
同　入船町一丁目一	德昌商行	土地建物賣買
同　榮町二丁目一七	巴商會	
同　太平町五丁目二〇	同源炭礦株式會社	
同　堀江町三九	特許白麵製造所	白麵製造販賣
同　太平町二丁目一〇三	德馨合資會社	
同　太平町三丁目一〇三	德馨建業株式會社	
同　千歲町一丁目二四	長命軒	玄米精乳製造販賣
同　瀧口町五丁目三三	頂双溪炭礦株式會社	
同　下奎府町四丁目三〇	張馥泉	土地建物賣買賃貸有利事業投資
同　下奎府町四丁目二九	中南商行	
同　永樂町一丁目二三	林本源柏記產業株式會社	
同　港町二丁目一〇	林本源彭記產業株式會社	
同　大正町二丁目四二	林本源興殖株式會社	
同　入船町四丁目八	林德興商行	
同　太平町三丁目一五九	李金燦參莊	內外藥種、賣藥販賣
同　新富町五丁目一八	龍泉飲料株式會社	
同　上奎府町	大塚合名會社	物品販賣、冷藏業土地建物賃貸、化粧品和洋雜貨卸
同　表町一丁目二六	大崎公司	

住所	氏名	營業科目	住所	氏名	營業科目
臺北市千歲町三丁目四一	臺灣酸素合名會社		臺北市永樂町四丁目五四	裕余行	金錢貸付、物品委託販賣
同 堀江町三一一	臺灣蠶絲業株式會社		同 龍匣口庄三四七	七堵輕便鐵道合名會社	
同 建成町四丁目	臺灣木材工業株式會社		同 大龍峒町六五	昭和家畜株式會社	
同 下奎府町一丁目	臺灣興業信託株式會社		同 表町二丁目八	昭和拓殖株式會社	
同 壽町一丁目一八	臺灣劇場株式會社		同 大正町三丁目九	彰化銀行	
同 太平町二丁目四二	臺灣農林株式會社		同 永樂町一丁目五二	昌記商行	米穀、砂糖、肥料內外物產移輸出入業
同 築地二丁目六	臺灣拓殖製茶株式會社		同 本町	資生堂藥舖	
同 表町二丁目八	臺南カネタツ株式會社		同 永樂町三丁目三四	謝義德商行	綿絲布、毛織和洋雜貨販賣
同 大和町四一八	高砂石組	內外各種商品ノ賣買仲立問屋代理業	同 太平町二丁目九	振臺印刷株式會社	
同 本町二丁目二六	高砂商店	有價證券賣買、有利事業投資	同 北門町一二	昭和產業株式會社	
同 太平町七丁目一二	高砂鑄造株式會社		同 元園町一〇	春記商行	土地家屋賣買
同 御成町一丁目二二	高砂興業株式會社		同 城內府後街	日之丸館	旅館、販賣、運送、物品開鑛、貿易、運送、其他物品販賣、問屋、不動產、賃貸
同 上埤頭一五四	高砂麥酒株式會社		同 大和町四丁目八	持木商會	
同 本町四丁目二四	辰馬商會	木材鑛業、生產品加工製造、土木建築請負並移出入貿易其他	同 本町二丁目	進盛商行	
同下奎府町一丁目二四二	聯發商行	酒類、砂糖、肥料、雜貨ノ委託販賣、貿易品移出入	同 表町一丁目八三	森永製品臺灣販賣株式會社	
同 下奎府町四丁目六一	鶴木產業株式會社	土地、建物賣買、開墾造林	同 基隆市哨船頭一九七	西村漁業株式會社	石炭採掘販賣及造林
同 泉町二丁目	瑞泰商事株式會社		同 哨船頭一九七	芳隆炭礦株式會社	
同 錦町五丁目六六	瑞裕拓殖株式會社	土地建物賣買、貸借不動產內外物產賣買	同 哨船頭一九七	蓬萊水產株式會社	
同 永樂町五丁目三七	瑞昌興業株式會社		同 哨船頭一九七	東成商行	
同 表町二丁目二	南洋倉庫株式會社	各種織物卸小賣	同 後井子一七	中臺商事株式會社	
同 太平町二丁目一四五	菊元榮商會		同 哨船頭一九七	柏原運送部	海陸運送、船舶倉庫保險代理
同 表町二丁目八	久大實業株式會社	酒、醬油、白米、食料品販賣	同 哨船頭一九七	海山炭礦株式會社	
同 大正町一丁目一三	訓眉建業株式會社		同 田寮港一六	臺灣海陸運輸株式會社	
同 若竹町一丁目五	大和工業合資會社	一般鑛業土木建築請負土場鐵道、土木建築工事請負	同 曾子寮	臺灣海陸物產株式會社	
同 上奎府町二丁目一	大和製氷株式會社		同 土名新店	臺灣肥料株式會社	
同 御成町一丁目四	ヤマト管杜合名會社	酒類、砂糖、肥料、雜貨ノ委託販賣、貿易品移出入	同 田寮港二〇五	臺灣炭礦株式會社	
同 東廣町三丁目四	山一商行	土地、建物賣買、開墾造林	同 土名新店	臺灣運送荷役株式會社	
同 本町一丁目一九	松浦屋商店		同 曾子寮一	臺灣水產株式會社	
同 本町一丁目三〇	丸山吳服店	土地建物賣買、貸借不動產內外物產賣買	同 土名鼻仔頭	臺洋漁業株式會社	
同 太平町三丁目八七	建泰茶行		同 哨船頭	臺陽鑛業株式會社	
同 永樂町四丁目一〇二	建昌興業株式會社	木材鑛業、生產品加工製造、土木建築請負並移出入貿易其他	同 田寮港一六	田邊商店	
同 太平町三丁目一二五	福昌商行	有價證券賣買、有利事業投資	同 哨船頭	禮和商行	
同 京町一丁目四九	近藤商會	土木建築請負	同 田寮港一六	辻本商事株式會社	
同 永樂町三丁目四七	高源發商行	土地建物賣買、貸借不動產內外物產賣買	同 哨船頭一九七	瑞芳營林株式會社	
同 龍山寺町一丁目一	黃鼎美商店	土地、建物賣買、自動車、自轉車、附屬品販賣、勞力請負、不動產、物品販賣、投資	同 瑞芳庄		
同 榮町二丁目三〇	小林商店		同 基隆街	山菱商會	木材賣買
同 榮町四丁目一三	古賀組		同 基隆街	雲泉商會	物品販賣、勞力、土力請負
同 表町二丁目一四	後宮合名會社	土木建築、勞力請負、不動產、物品販賣、投資	同 牛稠港	丸合聯興運送部	石炭採掘販賣
同 本町四丁目二〇	後藤組	運送、倉庫、代辦業	同 基隆街	萬成商行	物品販賣業、代理業、石炭鑛業及販賣、貿易代理業
同 日新町一丁目一九〇	永裕茶行	動不動產ノ賣買、有價證券ノ取得內外各種商品輸出入	同 義重橋	藤田商會	
同 下奎府町四丁目六一	永代建業株式會社		同 哨船頭	近江商事合資會社	米穀、纏詰類、日用品販賣
同 永樂町五丁目二四〇	永安商行	土地、建物、有價證券賣買、土地、家屋、賣買仲介	同 新店一〇五	鶯山炭礦株式會社	鑛山賣買、鑛業權賣買、貸借、不動產賣買、放牧、賣買、石炭、木材、肥料、米穀、鐵物業
同 太平町五丁目一三	永昌產業株式會社		同 庄八堵	基隆煉瓦株式會社	
同 永樂町五丁目一九三	天南信託公司		同 草店尾	基隆輕鐵株式會社	
同 御成町三丁目四	朝日興業株式會社	土地、經營、開墾造林、鑛山	同 基隆	基隆劇場株式會社	
同 本町三丁目一	龜甲萬醬油販賣株式會社		同 基隆新原店	基隆礦業株式會社	
同 新起町一丁目八	共益社	機械、工具、材料販賣	同 基隆會子寮	基隆自動車株式會社	
同 泉町二丁目一	共成拓殖合名會社		同 哨船頭	基隆賣氷株式會社	
同 大和町四丁目一	京和合資會社	土地、建物、所有賣買	同 宇新店	基隆牧場株式會社	
同 港町二丁目二	金德發瑞記商行	米穀輸移出入商	同 牛稠港	基隆船渠株式會社	
同 港町二丁目九	協裕土地建物株式會社		同 哨船頭	基隆岡崎造船鐵工所	
同 太平町五丁目一三	協成土地建物株式會社		同 宇新店	基隆第二拓地合名會社	開墾、殖林、物品販賣
同 牛埔庄八九	季芳罐詰株式會社		同 瑞芳庄九	基隆炭礦株式會社	
同 宮前町二八四	宜蘭紡績株式會社		同 基隆後井子	金瓜石鑛山株式會社	
同 下奎府町四丁目六	覆泉製氷株式會社		同 基隆	昭和採炭株式會社	石炭採掘賣買
				廣通運輸社	

住所	氏名	營業科目
七星郡汐止街	德興株式會社	石炭採掘及賣買
同　土林庄	長春畜產株式會社	
同　北投庄	臺灣製蓙株式會社	
同　土林庄	臺灣製紙株式會社	
同　內湖庄	大和炭鑛株式會社	
同　松山庄松山一三九	復記產業合資會社	
海山郡鶯哥庄	王讓發商行	
同　鶯哥庄	王讓發成記產業株式會社	
淡水郡淡水街	施坤記合名會社	
同　淡水街	施合發商行	
宜蘭郡宜蘭街	蓬萊叭株式會社	
同　宜蘭街	展蘭產業株式會社	
同　宜蘭街	宜蘭產業株式會社	
羅東郡羅東街	宜蘭殖產株式會社	
宜蘭郡宜蘭街	宜蘭水產株式會社	
同　宜蘭街	金益發商行	
羅東郡三星庄	臺灣森林工業株式會社	
同　三星庄三星	三成產業合名會社	
同　五結庄	昭和製糖株式會社	
文山郡新店庄大坪林	大新自動車株式會社	
同　新店庄	建業商會	
同　深坑庄內湖	文山茶業株式會社	
海山郡板橋庄	智記商行	
同　板橋庄	林本源維記興業株式會社	
同　鶯哥庄	咸鶯炭礦株式會社	
同　三峽庄	海山輕鐵株式會社	
同　板橋庄	海山自動車株式會社	
同　板橋庄	嘉禾拓殖株式會社	
同　三峽庄	臺灣興殖株式會社	
同　鶯哥庄	樹德商行	
同　三峽庄	壽星商行	
同　鶯哥庄彭福	周隆源商行	
同　板橋庄	泉和組	
▲新竹州		
新竹郡關西庄關西	關西興業株式會社	製腦、製糖、有價證券賣買、茶葉加工品、製造賣買
同　新竹街西門	臺灣蓪草株式會社	蓪草紙製造
新竹街南門外	臺灣金泉發蓪紙株式會社	理化學應用品製造販賣
同　新竹街	內外物產工業株式會社	
同　新竹街新竹北門外	警記興業株式會社	不動產所有賣買、土地開墾
同　新竹街	新竹拓殖軌道株式會社	
同　新竹街	新竹土地建物株式會社	
同　新竹赤土崎	新竹煉瓦株式會社	
同　新竹街南門	新竹劇場株式會社	
同　新竹街南門外	新竹電燈株式會社	
同　新竹街新竹	新竹殖產株式會社	
中壢郡中壢庄	日本拓殖株式會社	
同　楊梅庄	楊梅軌道株式會社	
同　中壢庄	中壢軌道株式會社	
桃園郡桃園街	陳合發商行	
同　桃園街大樹林	臺灣合同電氣株式會社	
同　桃園小桃園街	三備商會	
同　桃園街土名武陵	桃園軌道株式會社	交通運輸、造林經營
大溪郡龍潭庄	東南拓殖株式會社	
同　大溪街	自治商行	不動產賣買、植林
同　大溪街土名新街	大正鑛業株式會社	炭礦採掘、運搬販賣

住所	氏名	營業科目
大溪郡大溪街	建成商行	石炭、製材、販賣
竹南郡頭分庄	展南拓殖株式會社	開墾、製糖、運輸、石炭採掘、土地開墾、改良農林業
苗栗郡苗栗街	三益株式會社	
同　涌香庄	苗栗興業株式會社	漁業、西瓜園、運輸
同　苗栗街	臺灣軌道株式會社	
同　苗栗街七三〇	大安製糖株式會社	砂糖、米穀、肥料雜穀販賣
同　譚內庄	大正拓殖株式會社	
同　苗栗庄	興臺物產株式會社	
同　苗栗街	新竹製糖株式會社	
大湖郡大湖庄	次高木材合資會社	
▲臺中州		
臺中市錦町四丁目六八	日華商行	羅紗、絹物、木綿販賣、メリヤス製造
同　榮町三丁目一九	平和自動車商會	
同　榮町一丁目一九	東華名產株式會社	書籍物產ノ販賣、內外物產ノ輸出入賣買ト為ス
同　若松町六丁目六	中央製氷株式會社	氷製造販賣、冷藏營業
同　橋町二三〇	中部拓殖株式會社	
同　老松町四丁目一七	海南製粉株式會社	
同　新富町四丁目二九	臺中恒產信託株式會社	
同　綠川町一丁目七	臺中產業信託株式會社	
同　臺中	臺中製氷株式會社	
同　老松町五丁目五五一	臺中鑄造鐵工株式會社	
同　臺中一七九	臺灣商工株式會社	
同　千歲町	臺灣運輸產業株式會社	
同　千歲町六五八	臺灣物產商事株式會社	
同　橋町三丁目二	臺灣通運合資會社	
同　橋町一五二	臺灣果物株式會社	
同　橋町二丁目一	臺灣青果株式會社	
同　榮町一丁目四	大東信託株式會社	土地、建物並貸借
同　寶町二丁目二	寶町土地住宅株式會社	
同　花園町五丁目七	南投炭礦株式會社	
同　府中街三丁目二五三	山下商店	
同　錦町二丁目三八	丸は吳服店	金物工業用品販賣
同　頂橋頭庄	松岡拓殖合資會社	
同　榮町四丁目一〇	景星大藥房	
同　錦町四丁目一一三	協順土地建物株式會社	土地、建物、有價證券賣買、製茶附屬品販賣加工
同　楠町四丁目六	布岐拓殖株式會社	
同　楠町五丁目一	吳鸞磾實業株式會社	
同　大稻埕稻新街	永和興公司	
同　高砂町一八	帝國製糖株式會社	
同　楠町四丁目一〇	禎洋拓殖株式會社	
同　橋四丁目一六	朝日自動車合資會社	
同　新富町二丁目三二	榊原殖產合資會社	
同　老松町八丁目二二	錦川バナマ工業株式會社	金錢貸付、不動產賣買、土地有價證券、金錢貸付
大屯郡霧峰庄	利源產業信託株式會社	
同　霧峰庄	五郎合資會社	
同　霧峰庄	三五實業株式會社	
同　霧峰庄	霧峯宏業株式會社	運送業
豐原郡豐原街	豐原製紙製材株式會社	
同　豐原街	富春製氷株式會社	
同　豐原街	臺灣製麻株式會社	
同　豐原街	臺灣物產鑛詰株式會社	
同　豐原街	臺中輕鐵株式會社	
同　豐原街	葫蘆墩製粉製米株式會社	農產物栽培、味噌醬油販賣、帽子製造、土地開墾
大甲郡清水三塊厝	平裕和株式會社	土地開墾、造林、動產、不動產有價證券

住所	氏名	營業科目
大甲郡大甲街	中南拓殖株式會社	土地開墾利用物產販賣
同　清水街	王裕和株式會社	米穀、肥料、土地賣買其他
同　清水街	大豐物產株式會社	土地開墾
同　清水街社口	三和拓殖株式會社	
同　沙鹿庄	沙鹿製糖株式會社	
同　龍井庄	順昌物產株式會社	
同　東勢郡東勢庄	東勢角物產株式會社	林產物販賣
同　東勢庄	臺灣拓殖產業株式會社	
彰化郡和美庄	新高製糖株式會社	
同　六甲街	中部漁業株式會社	
同　鹿港街和興	大豐拓殖株式會社	
同　彰化街	顏仁成號	貸地、開墾、砂糖及鹽製造、呉服卸小賣、染物商
同　鹿港街鹿港	鹿港物產信託株式會社	
同　鹿港街鹿港	鹿港製鹽株式會社	
同　南廍庄	臺灣農事株式會社	
同　和義庄月眉	益昌拓殖株式會社	
同　彰化街	義泉罐詰株式會社	
同　彰化街	彰林物產株式會社	
同　彰化街	員林果物株式會社	
員林郡員林街五八九	彰化輕鐵株式會社	
員林街三八八	員林製氷株式會社	
同　二水庄	二八水製材株式會社	
同　田中央庄	田中央興業株式會社	貸金、建物、開墾
同　田中央庄	田中央製酒場	
同　溪湖庄	溪湖產業株式會社	
同　員林街	興農株式會社	土地、開墾、耕作
同　永靖庄	錦城春醬油株式會社	
同　永靖庄永靖	金源發物產株式會社	米穀賣買
北斗郡二林庄	三五公司源成株式會社	
南投郡南投街包尾	南投輕鐵株式會社	貨客、運輸、寢臺車貸與、製材、木材販賣、開墾
同　南投街	南投興業株式會社	
同　南投街一〇六	南投商事株式會社	
同　草屯庄草屯	草屯產業信託株式會社	
能高郡埔里街埔里	埔里工業株式會社	材木賣買、製材經營
新高郡集々庄	新高拓殖軌道株式會社	
竹山郡竹山庄	林杞埔產業株式會社	

▲臺南州

住所	氏名	營業科目
臺南市白金町二丁目四八	東亞商行	舶來洋酒雜貨、土地賣買斡旋、造林
同　北門町二丁目五五	臺南タクシー株式會社	旅客貸物運搬
同　西門町一丁目四四	臺南大舞臺株式會社	劇場貸貸興業
同　白金町三丁目八九	臺南拓殖株式會社	土地、開墾、木材販賣
同　楠整淺五二	臺南煉瓦株式會社	
同　本町三丁目二三四	臺南新報社	葬儀請負、葬儀諸用具貸付
同　港町一丁目一四七	臺南製酒株式會社	
同　新町一丁目九八	臺南製氷株式會社	
同　花園町二丁目一九	臺灣製菓株式會社	
同　廳堤三	臺灣織布株式會社	
同　白金町三丁目九五	臺灣車輛株式會社	
同　白金町四丁目五七	臺灣弘仁株式會社	
同　錦町三丁目二三四	臺灣南部無盡株式會社	
同　末廣町二丁目二一	臺灣漁業株式會社	
同　寶町二丁目一四〇	臺灣製皮株式會社	
同　安平一〇〇〇	臺灣製鹽株式會社	
同　明治町三丁目三六	臺灣輕鐵株式會社	
同　港町二丁目一一七	臺灣濟仁株式會社	

住所	氏名	營業科目
臺南市本町四丁目一九二	臺灣製藥株式會社	一般商品販賣
同　末廣町二丁目二	南部臺灣海產株式會社	機械、銅鐵製品、製品販賣、土地、家屋賣買、貸仲立業、代理業
同　永樂町二丁目一八四	室谷商店	
同　大宮町一丁目一二	山田商店	
同　本町三丁目八七	越智一致會	
同　永樂町二丁目一七四	掌潭製鹽株式會社	
同　本町四丁目二四〇	城成發合資會社	土地建物ノ賣買及貸貸
同　本町四丁目一〇五	日吉屋呉服店	內外書籍、文房具、銘仙運動具、賣藥出版業
同　本町三丁目七〇	景文堂	
同　新化郡新市庄	新化產業合資會社	
同　新化街	新化軌道株式會社	
同　七甲庄	赤山煉瓦製造株式會社	
曾文郡麻豆街	東洋鳳梨罐詰株式會社	
同　嘉義街	呉服店	
同　嘉義街北門外	明治製糖株式會社	
北門郡北門庄	北門輕鐵株式會社	
新營郡新營庄	鹽水港製糖株式會社	
同　白河庄	關子嶺興業株式會社	
同　白河庄	關子嶺軌道株式會社	
嘉義郡嘉義街	日本製材燐寸株式會社	
同　嘉義街北門外	新谷呉服店	
同　嘉義街	東洋鳳梨罐詰株式會社	
同　嘉義街	家畜產業株式會社	
同　嘉義街	嘉義物產株式會社	
同　嘉義街	嘉義電燈株式會社	
同　嘉義街	嘉義產業合資會社	
同　嘉義街	嘉義製材合名會社	
同　南端庄	嘉義製酒株式會社	
同　嘉義街北門外	嘉義製材合名會社	
同　樸子街	臺灣製酒株式會社	
同　嘉義街	臺灣容器株式會社	
同　嘉義街	臺灣竹材株式會社	
同　嘉義街北門外	臺灣丸太共同購買所	
同　嘉義街北門外	臺灣木材共同販賣所	
同　嘉義街	文峰社	
同　東店庄	富士友釀造株式會社	
東石郡朴子街	鴻謨殖產株式會社	
嘉義郡水燦林庄	水燦林拓殖株式會社	
斗六郡斗六街	林內自動車株式會社	
虎尾郡西螺街	西崙自動車株式會社	
同　西螺街	永豐同族恒產株式會社	
北港郡北港外	北港興產株式會社	
同　北港街	臺灣製粉株式會社	

▲高雄州

住所	氏名	營業科目
高雄市新濱町一二三	本田合名會社	販賣、火藥、煙火
高雄郡前金庄三三〇	東洋電化株式會社	炭化、石炭、電氣化學工業
高雄市苓雅寮	陳中和物產株式會社	農耕、不動產賃貸貿易
湊町四丁目二三	高雄魚市株式會社	
新濱町一丁目一	高雄劇場株式會社	
湊町二丁目一七	高雄共榮自動車株式會社	
山下町四丁目一八	高雄自動車合資會社	乘合自動車、貨物運搬、自動車營業
新濱町一丁目二七	高雄商事株式會社	
鹽埕町二丁目一七	高雄製氷株式會社	
新濱町一丁目四一	臺灣採籐株式會社	採籐、籐加工製造販賣
高雄街	臺灣鐵工所	
同　新濱町	臺灣運輸株式會社	農、海產、米、砂糖、肥料賣買
同	高鳳物產株式會社	

住所	氏名	營業科目
高雄州鹽埕町四丁目一〇	多木合名會社	各種肥料輸入販賣
同 新濱町一二三	南部製酒株式會社	業務ニ飲料水、呉服太物、食料品、雜貨及ビ労力供給
同 前金三三〇	打狗土地株式會社	
同 高雄街	藤田豆粕製造株式會社	
岡山郡彌陀庄烏樹林	平田商行	工事請負、土木農産工業
鳳山郡鳳山街新庄子	烏樹林製鹽株式會社	
同 大樹庄	臺灣鳳梨罐詰株式會社	
同 大寮庄山子頂	振南鳳梨罐詰株式會社	
旗山郡旗山街手內寮	新興製糖株式會社	
同 旗山街磐礴坑	三五公司南隆農場	
同 內門庄	旗山拓殖株式會社	
屏東郡六龜里庄二〇一	昭興製糖株式會社	
同 楓港庄	六龜里商事株式會社	
同 屏東街一九六	枋山物產株式會社	業務ニ飲料水、呉服太物食料品、雜貨及ビ労力供給
同 屏東街三四九	屏東信託株式會社	
同 屏東州歸來	屏東製藥株式會社	
同 恒春街	屏東製氷株式會社	
同 屏東街	恒春芳釀拓殖株式會社	
同 長興庄	臺灣製糖株式會社	山物產、運輸、組粉、造林牧畜、農產物販賣
同 里港庄武洛	南麟軌道株式會社	
同 蓽寮街	大和興業株式會社	
同 屏東西街	大和產業株式會社	
潮州郡潮州庄	吳臥龍商行	
同 枋山庄	潮恒自動車商行會社	
恒春郡恒春庄	葦知高合資會社	農業物、建築材料雜貨賣買
澎湖郡馬公街	恒春電氣株式會社	
同 馬公街	澎湖海運株式會社	
東港郡東港街	澎湖製氷株式會社	
同 東港街	東港養殖合資會社	
同 新街庄	東港殖產株式會社	
同 佳冬庄佳冬	東港製酒株式會社	陸上運送及ビ物品運輸業、物品販賣
▲臺東廳	南雄運輸株式會社	
臺東街寶町	臺東開拓株式會社	
同 榮町	臺東產業株式會社	
同 寶町	臺東商事株式會社	
同 北町	臺東製糖株式會社	製糖貸地
臺東郡六龜庄土壠灣	阿緱製糖株式會社	
臺東街南町	櫻組	運送、倉庫、物品販賣、軌道業
同 寶町	昭和物產株式會社	土地開墾、農林業
廣鄉成廣澳庄	廣鄉產業株式會社	製糖、鹽開墾、牧畜、農林業
▲花蓮港廳	花蓮港物產合資會社	
花蓮港廳花蓮港	花蓮港電氣株式會社	
同 花蓮港	花蓮港產業株式會社	労力職工ノ供給
同 花蓮港	花蓮港木材株式會社	運輸倉庫業
同 黑金通	朝日組	運送、倉庫、物品販賣
同 玉里庄	三和興業株式會社	土地開墾、賃貸及造林、牧畜、田畑耕作及農林苗產物賣買
同 玉里庄	東臺振業合資會社	
同 花蓮港	東臺灣無盡株式會社	
同 花蓮港	東臺灣新報社	

滿洲之部（氏名いろは順）

住所	氏名	營業科目
▲大連市		
浪速町八	石田洋行	金物製造販賣
山縣通七	石井洋服店	洋服調製
伊勢町四八	石本鑛業所	硫化鐵鑛採掘其他鑛業ニ關スル事務
山縣通一七七	合資會社岩城商會	特產物輸出
兒玉町四	泉商店	石材、砂利、其他建築材料一般
霧島町四六	今井組	土木建築請負
山縣通八〇	出光商會大連支店	各種鑛植物性、油脂類一般
浪速町一二	伊藤呉服店	呉服太物一切
播磨町四七	榮洋行	各種貿易主ニ電氣鐵銅機械工業用品
山縣通二一	合名會社原田組	土木建築請負業
八幡町二七	合資會社焙燒煉炭公司	煙臺焙燒炭賣買及煉炭製造販賣
榮町一	服部皮革店	
榮町一五	濱恒材木店	
淡路町一八	橋詰洋行	寫眞機械和洋各種菓子
大山通六四	花乃屋支店	
山縣通一五二	日本生命保險株式會社大連支店	
若狹町四〇	日本タイプライター株式會社大連支店	
山縣通一一五	日本呉服株式會社大連支店	
浪速町一四七	日本橋ホテル	
伊勢町一	日本物產株式會社大連出張所	
山縣通五五	日本綿花株式會社大連支店	
山縣通	日本郵船株式會社大連出張所	
山縣通一八一	日清製油株式會社	
寶町三	合資會社日清印刷所	
大江町二	日支自動車研究所	
北大山通一四	日滿通信社	新聞通信
佐渡町一八	西森造船所	
乃木町一四	星ヶ浦土地建物株式會社	高級工作機械一般
愛宕町三五	保祥公司	
山縣通五三 第一山縣ビル內	東亞印刷株式會社大連支店	
近江町	東亞ペイント製造株式會社大連出張所	
山縣通一一三	東京電氣株式會社大連出張所	
山縣通五四	戶畑鑄物株式會社大連出張所	
三河町一七	鳥羽洋行	金物一切
近江町八	鳥羽鐵工所	鐵道用品、諸機械
臺山町二六	巴商行	ヤマカ醬油、巴味噌、酢醸造
西崗街九二	株式會社德泰公司	外國貨幣寶買
山縣通五	德和公司	石灰、鱗灰、製造販賣
近江町二	東洋綿花株式會社大連出張所	
山縣通一八二	東洋コンプレッソル株式會社出張所	鐵筋コンクリート一般
霧島町九六	東亞土木企業株式會社	土木建築請負業
山縣通八八	東亞煙草株式會社大連出張所	
監部通一一三	中日實業興信社	興信事務一般
信濃町六一	中國銀行大連支店	
大廣場山縣通一	朝鮮火災海上保險株式會社大連出張所	
紀伊町五三	小野木、橫井共同建築事務所	建築設計
紀伊町八五	小野實雄法律事務所	辯護士一般
但馬町一二	小川商店	洋裝具一般
伊勢町四一	大阪商船株式會社大連支店	海運業
山縣通二二三	岡本會計事務所（滿鮮興益社）	一般會計業務
若狹町三		

住所	氏名	營業科目
浪速町三七	合資會社近江洋行	裝身具一切
伊勢町四八	和盛洋行	食料品ノ直輸入
西通四八	渡部商會	煖房衛生、水道工事請負
鑑部通二六	嘉納合名會社大連支店	清酒白鶴及龜甲萬醬油
紀伊町二六	合資會社加藤洋行	貿易業
山縣通一一三	橫濱護謨製造株式會社	護謨製品製造販賣
山縣通一三九	吉井洋行	ゴム製品一切
山縣通八三	株式會社米井商店大連出張所	各種機械及ビ肥料燃料輸入輸出賣買乘客運輸及自動車修理一般
土佐町三八	田中自動車工場	
西通一一七　中央ビル内	大連火災海上保險株式會社	
山縣通一九九	大連汽船株式會社	
紀伊町六二	大連起業倉庫	
沙河口臺山町二三	株式會社大連機械製作所	
橋立町二	大連工業株式會社	
三奉町一	大連精糧株式會社	
榮町二	大連製材株式會社	
榮町一二	大連鐵工所	
香取町二七	大連油脂工業株式會社	
榮町	大連窯業株式會社	耐火煉瓦製造
小圖子北海岸通	大華窯業公司	陶磁器製造
榮町二	大陸窯業株式會社	土管各種煉瓦
鑑部通四九	株式會社大信洋行	銅鐵金物
山城町	大正洋行	杉丸太、竹
鑑部通三三	合資會社文德洋行	輸出輸入
浪速町一五八	袋布向春園	茶道具、茶
山縣通一六六	多久島商店	一般輸入業
淡路町三	株式會社多田工務所	土木建築請負
紀伊町二六	高岡久留工務所	同
伊勢町三二	詫摩洋服店	建築用タイル
裾野町六〇	臺山窯製陶所	一般信用調査
山縣通一六	泰東興信公所	大連取引所
奥町二三	泰信錢莊	滿洲特產物商
山縣通一六六	玉谷商店	絹沙、綿布類
大山通六一	合資會社武內洋行	和洋食料品
大山通二丁目四七	宅合資會社文連支店	建築材料直輸入商
紀伊町八五	辰己銀二商店	諸機械一般
日吉町一一	中村鐵工所	薪炭、米穀
西公園町四七	中村商店	食料品一切
磐城町九三	中村榮吉商店	各種機械一般
西公園町八五	中村商會	滿洲特產輸出商
山縣通一三七	瓜谷長造商店	廻漕業
北大山通四	宇田商會	度量衡器、金庫製造
但馬町五七	能登洋行	西洋雜貨直輸入
山縣通五三　山縣ビル二階	グレゴリーボトリヤシク	旅行用具一式
伊勢町五四	熊井洋行	諸船製造一般
乃木町一四	倉本造船所	
山縣通二〇〇	山下汽船株式會社大連支店	
信濃町五六	株式會社山葉洋行	洋樂器類及室內裝飾品
千代田町二九	大和染料製布株式會社	
山縣通一八　大倉ビル內	社團法人滿洲技術協會	
山縣通　山縣ビル	株式會社滿洲共益社大連出張所	滿洲特產物輸出、絹絲布輸入
山縣通三三	滿洲起業株式會社	諸般ノ企業其他
山縣通一四二	滿洲報社	
日吉町一	滿洲製麻株式會社	
須町三	滿洲船渠株式會社	

住所	氏名	營業科目
山縣通	社團法人滿洲土木建築業協會	
寶町三	滿洲ペイント株式會社	
大山通三一	滿洲書堂書店	
伊勢町五三	前澤商行	
須磨町二	マンチユリヤ●デーリーニウス社	英文日刊新聞其他
敷島町六	增井洋行	船具用品、工業用品、荒物雜貨等
若狹町六	合資會社丸二商店	海陸運送業
近江町三二	丸山洋行	建築材料輸入販賣
東公園町三九	福井組	耐火煉瓦、各種窯業原料各種
鑑部通五二	福井高梨組	土木請負業
敷島町六	合資會社福盛號紙莊	輸出輸入貿易商
埠頭棧內	福昌華工株式會社	和洋紙一般印刷用インキ
大山通一丁目一四	藤川篤助商店	大連埠頭棧內荷役
浪速町八四	二葉成文堂	印章彫刻物品販賣
山縣通一六　大倉ビル內	復州鑛業株式會社	各種耐火、粘土採掘販賣
山縣通一四七	合資會社福盛號紙莊	和洋紙一般印刷用インキ
敷島町六	福昌華工株式會社	大連埠頭棧內荷役
大山通六三	藤川篤助商店	印刷、紙類
山縣通一六	二葉成文堂	印章彫刻物品販賣
大山通五一	復州鑛業株式會社	各種耐火、粘土採掘販賣
大山通六九	撫順炭販賣株式會社大連支店	
伊勢町二一	古河電氣工業株式會社富士洋紙店大連出張所	
大山通五八	扶桑海上火災保險株式會社大連出張所	
山縣通一八	國際運輸株式會社	海陸運送業
山縣通一三	小林又七支店	不動產の管理
山縣通五五	株式會社鴻業公司	和洋紙類
山縣通二二一	光明洋行紙店	物品販賣及代理業
大山通六三	合資會社肥塚商店大連支店	醫料機械一般
山縣通一六	株式會社後藤風雲堂大連出張所	歐米化粧品一般
山縣通一八一	高新洋行	商品一般
大山通五一	永順洋行	海運業
大山通六九	合資會社永和公司	各國時計商
山縣通一七八	營口近江洋行大連販賣部	石油、揮發油
淡路町二八	テキサス會社	特產物輸出
浪速町三丁目九四	株式會社有馬洋行大連出張所	陸軍用達學用品
東公園町七〇	合資會社天野滿書堂文具店	寫眞製作一般
播磨町五一	亞細亞寫眞大觀社	民刑商事其他一般
土佐町二六	相川法律事務局	工作諸機械
山縣通一八一	株式會社鴻業公司	醫療藥品類
西公園四	光明洋行紙店	民刑事訴訟其他
龍登町一五	合資會社肥塚商店大連支店	土木建築請負業
紀伊町八五	株式會社後藤風雲堂大連出張所	鐵道業
山縣通六三	高新洋行	美術工藝品一般
伊勢町一〇九	永順洋行	書籍文房具
大山通七七	合資會社永和公司	機械材料販賣
山縣通一五一	營口近江洋行大連販賣部	機械工具
西通九三　常盤橋角松村ビル三階	テキサス會社	辯護士
山縣通一八二	株式會社有馬洋行大連出張所	
山縣通	合資會社天野滿書堂文具店	
伊勢町二四	亞細亞寫眞大觀社	
大山通六六	相川法律事務局	
信濃町一三	株式會社鴻業公司	
西通一一七	光明洋行紙店	
西通一一七	合資會社肥塚商店大連支店	
入船町一	株式會社後藤風雲堂大連出張所	
彌生町一四	高新洋行	
	永順洋行	
	合資會社永和公司	
	營口近江洋行大連販賣部	
	テキサス會社	
	株式會社有馬洋行大連出張所	
	合資會社天野滿書堂文具店	
	亞細亞寫眞大觀社	
	相川法律事務局	
	株式會社鴻業公司	
	光明洋行紙店	
	合資會社肥塚商店大連支店	
	株式會社後藤風雲堂大連出張所	

住所	氏名	營業科目
紀伊町五七	新聞聯合社大連支局	内外政治經濟通信
鹽部通二〇	合資會社島松商會	醫、理化學、機械製造販賣
若狹町四〇	島津製作所大連出張所	理化學器械
沙河口	昌光硝子株式會社	窓硝子製造
佐渡町三〇	株式會社進和商會	鐵、鋼、銅等
若狹町三	株式會社日立製作所大連販賣所	
雲井町二七	森永製品滿洲販賣株式會社	菓子商
山縣通一九三	合資會社靖和商會	海運業
榮町一	合資會社泉陽商會	米穀雜穀類
山縣通一八　大倉ビル	スコダ工場大連出張所	特種鋼一般
榮町一五	杉元商店	石綿製品各種
▲奉天		
青葉町	一厘堂	菓子商
加茂町八	橋口洋行	特產物輸出商
宮島町六	奉天窯業株式會社	各種煉瓦製造
加茂町八	合資會社實信洋行	電氣工事一切
春日町七	東榮洋行	寫字文房具、事務用品等
宇治町一〇	德成號	朱乙烋、暖取骨、殺虫藥、外化學品一般
橋立町五	上木組	土木請負業
宮島町二	開光堂書店	各種書籍
松島町四	吉川組	土木建築業
琴平町一六	大都洋行	輸出入貿易商
浪速町二二	大陸堂書店	圖書、文房具
藤浪町七	高岡久留工務所	土木、建築、設計
橋立町一八	滿洲食糧公司	文化米製造販賣
隅田町四	滿洲製氷株式會社	
隅田町六	滿洲土地建物株式會社	
橋立町五	滿洲土木建築業協會 奉天支部	
千代田通三九	株式會社滿蒙牧場	
春日町一〇	松永兄弟商會	自轉車直輸入
宮島町一六	丸信運輸公司	海輸運送業
宮島町二	南滿洲電氣株式會社 奉天支部	
浪速通二五	南滿印刷所	各種印刷
藤浪町二	小村洋行	柳行笥、バスケット等製造
千代田通三八	弘利洋行	新聞、雜誌、圖書一切
小西開大街	合名會社近藤組	土木建築工事請負
八幡町七	三昌洋行	土建業、金物、諸機械、藥劑、寶藥、醫療器械
春日町五	佐藤廣濟堂藥房	土木建築請負
春日町七	榊原組出張所	内外諸新聞取次
彌生町三	清野雙合館	内外文房具、事務用一式
淀町九	義道洋行	輸出入貿易商
春日町八	合資會社松隆洋行	土木請負業
▲沿線其他	肥田工務所	時計、貴金屬其他
旅順市青葉町三八	合名會社森洋行	各種印刷
同　乃木町三丁目四	旅順ホテル	企料品卸
同　乃木町一丁目一	大島商店	果樹栽培及葡萄酒釀造
同　乃木町三丁目	村上農園	諸機械
大連市外周水子會泡崖屯	野間鐵工所	綿織糸製造
同　周水子	小野田セメント株式會社大連支社	綿糸紡績
關東州金州	滿洲福紡株式會社	
瓦房店東區常盤街五	內外綿株式會社金州支店	
熊岳城中華街一	瓦房店電燈株式會社	果實、蔬菜寶買
同　特第一	熊岳城殖產株式會社	果樹栽培
	熊岳農園	

樺太之部（氏名いろは順）

住所	氏名	營業科目
熊岳城大正街	鷹野農園	蔬菜、草花、球根類一切
同　中華街二〇	杉本商店	日用雜貨一切
營口新市街	滿洲新報社	
同　新市街南本街四八	營口水道電氣株式會社	
撫順東二條通四二	社團法人滿洲土木建築業協會 撫順支部	土木建築業協會支部事務ヲ處理ス
同　東二條通三六	撫順市場株式會社	水陸產物委託販賣
同　中央大街二〇	合資會社飛鳥井組	土木建築請負
鐵嶺北三條通六丁目	大矢組株式會社	建築材料販賣
同　元町三丁目五四	樋太商店	土木建築請負
同　松島町	鐵嶺電燈局	
開原附屬地昌平街二五	株式會社日華銀行	
同　大街	關原取引所信託株式會社	
同　市場大街	滿洲電氣株式會社	
公主嶺櫻町一丁目	四平街電燈株式會社	
同　敷島町一丁目	四平街取引所信託株式會社	
長春日本橋通二九	公主嶺電燈株式會社	
同　東五條一	公主嶺取引所信託株式會社	
同　日本橋通三八	長春市場株式會社	
同　羽衣町四丁目一	長春取引所信託株式會社	
同　富士町二丁目	南滿洲電氣株式會社長春支部	
同　日本橋通一六	國際運輸長春支店	
本溪湖永利町	弘文堂書店	
同　石山町	本溪湖石灰公司	
安東縣市場通八丁目一	南滿洲電氣株式會社安東支店	
同　南二條通二丁目九	滿鮮坑木株式會社	
同　市場通四丁目四	文榮堂書店	
同　南七條通一丁目	富士瓦斯紡績株式會社安東工場	
同　市場通二丁目	國際運輸株式會社安東支店	
同　大和橋通九丁目	株式會社安東取引所	
同　五番通八丁目一	安東窯業株式會社	
吉林省城東關	吉林燐寸株式會社	
同　ハルピン	ハルピン石炭商組合	
同　道裡透籠街三二	北滿電氣株式會社	
同　ポレワヤ街	北滿ホテル	
同　埠頭區商務街一一	川崎汽船株式會社出張所	
同　埠頭區埠頭街八七	名古屋ホテル	
同　モストワヤ街八	前田時計店	
同　地段街三〇	滿鐵石炭西部線販賣組合	
同　埠頭區地段街	國際運輸株式會社ハルピン支店	

住所	氏名	營業科目
▲樺太		
本斗町	北門金融株式會社	
本斗町	本斗海陸運輸株式會社	
本斗町	本斗倉庫合名會社	
本斗町	本斗電氣株式會社	
本斗町	本斗商事金融株式會社	
本斗郡海馬村	海馬島漁業拓殖株式會社	
西海岸海馬島ウツス	海馬島漁業合資會社	
豊原町	二印樺太運送株式會社	
豊原町	東海運輸株式會社	

住所	氏名	營業科目
豐原郡豐原町	豐原賣炭商品倉庫合資會社	
同　豐原町	豐原金融倉庫合資會社	
同　豐原町西一條	豐原市街自動車株式會社	
同　豐北村	豐原木工場	
同　豐北村	豐北木工場	
同　豐原町東一條	豐北木材合資會社	
同　豐原町	中央サイダー株式會社	
同　豐原町	大泊農牧株式會社	
同　豐原町大通	樺太農產興業株式會社	
同　豐原町西一條	樺太倉庫株式會社	
同　豐原町	樺太通運株式會社	
同　豐原町	樺太軟石合資會社	
同　豐原町	樺太無盡株式會社	
同　豐原町西二條	樺太鐵工場	
同　豐原町東二條	樺太電氣合資會社	
同　豐原町大通	樺太電氣株式會社	
同　豐原町	樺太採氷株式會社	
同　豐原町大通	樺太勸業無盡株式會社	
同　豐原町	樺太炭鑛株式會社	
同　豐原町	樺太木材合資會社	
同　豐原町	樺太製麻株式會社	
同　豐原町	樺太味噌醬油釀造株式會社	
同　豐原町	臺灣物產罐詰株式會社	
同　豐原町	中沖相互保證株式會社	
同　豐原町	武藏組	土木建築請負業
泊居郡名寄	殖產無盡株式會社	
同　泊居町彌生町	別府商會	
同　泊居町常盤	泊居倉庫株式會社	
同　泊居町	泊居病院	
同　泊居町	樺太中央產業株式會社	
同　泊居町	樺太汽船株式會社	
留多加郡留多加町	樺太工業株式會社	
同　留多加町	隆高輕便軌道株式會社	
同　留多加町本町	留多加釀造株式會社	
同　留多加町	樺太貯蓄無盡株式會社	
同　能登呂村	東樺拓殖合資會社	
同　留多加町	金一泥川林業合資會社	
大泊郡大泊町榮町	小原金融株式會社	
同　大泊町本町	今佐解部	
同　大泊町本町	新田汽船株式會社	
同　大泊町	西谷海運株式會社	
同　大泊町	北辰林業株式會社	
同　大泊町榮町大通	東海木材合資會社	
同　大泊町大畑町	東洋養狐株式會社	
同　大泊町	大泉同族株式會社	
同　大泊町榮町	大泊倉庫株式會社	
同　大泊町	大泊無盡株式會社	
同　大泊町本町	大泊輕便軌道株式會社	
同　大泊町榮町	大泊魚榮株式會社	
同　大泊町	大泊市街軌道株式會社	
同　大泊町通町	大泊酒造株式會社	
同　大泊町榮町	樺太銀行	
同　大泊町	樺太運輸株式會社	
同　大泊郡大泊町	樺太ゴム工業株式會社	
同　大泊町	樺太鱗光株式會社	

住所	氏名	營業科目
大泊郡大泊町	樺太寒天合資會社	
同　大泊町	樺太拓殖無盡株式會社	
同　大泊町榮町	樺太冷藏株式會社	
同　大泊町榮町	樺太合同運送株式會社	
同　大泊町旭町	樺太演藝株式會社	
同　大泊町榮町	樺太雜貨株式會社	
同　大泊町	樺太除蟲菊株式會社	
同　大泊町榮町	樺太殖產合資會社	
同　大泊町本町	樺太信託株式會社	
同　大泊町	樺太木材紙料株式會社	
同　大泊町	樺太生產株式會社	
同　深海村	樺太製藥株式會社	
同　大泊町	樺太漁業商事株式會社	
同　大泊町	高梨商事株式會社	
同　大泊町	種田合資會社	
同　大泊町	南樺鐵道株式會社	
同　大泊町	楠溪信託合資會社	
同　大泊町榮町	山九大野商事合名會社	
同　大泊町榮町	丸茶佐々木商店	
同　大泊町本町	富士商會	
同　大泊町榮町	小中合名會社	
同　大泊町榮町	亞庭養狐場	
同　大泊町榮南濱通	旭榮商事株式會社	
同　大泊町榮町	佐々木汽船株式會社	
同　大泊町	北日本無盡株式會社	
同　大泊町榮川濱通	北日本汽船株式會社	
同　大泊町榮町	南樺太漁業株式會社	
同　大泊町榮町	昭和信託株式會社	
同　大泊町	新樺物產株式會社	
同　大泊町帆寄町	菱上竹田合名會社	
同　大泊町	森田商會	
名好郡惠須取村	絲音農興合資會社	
同　惠須取村	吉峰商會	
同　惠須取村	大同海運株式會社	
同　惠須取村	第一相互無盡株式會社	
名好村	名好殖產合資會社	
同　惠須取村	丸福阿部興業合資會社	
同　惠須取村	惠須取回漕店	
同　惠須取村	惠須取倉庫株式會社	
長濱郡長濱村	長濱電氣株式會社	
鵜城郡鵜城村	樺太勸業株式會社	
同　鵜城村	富彌興業合資會社	
野田郡野田町	樺太共榮無盡株式會社	
同　野田町	野田解運送株式會社	
同　野田町	萬金無盡株式會社	
同　小能登呂村	小能登呂商會	
同　野田町	南豐製材合名會社	
久泰內郡三濱村	珍內電燈株式會社	
同　久泰內村	久春內製材所	
眞岡郡眞岡町	一ノ辻商事株式會社	
同　眞岡本町二丁目四	畑木商店	
同　眞岡町	大印眞岡漁業株式會社	
同　眞岡町	樺太鹽業株式會社	
同　眞岡町	樺太郵船株式會社	

味噌醬油釀造販賣
鋼鐵、度量衡、機械販賣
漁撈及販賣業
製造加工
金錢貸付、不動產ノ賣買
農牧畜
海陸運送業
物品販賣業
農作物利用販賣
林產
清飲冷水販賣
果實販賣、酒造商
海產、製材、雜貨商

住所	氏名	營業科目
眞岡町濱北町	樺太緬羊牧圃合資會社	
同　眞岡町	樺太製粉株式會社	
同　眞岡町	樺太産業株式會社	
同　眞岡町	樺太相互無盡株式會社	
同　眞岡町	樺太中央電氣株式會社	
同　眞岡町本町	海陸産業株式會社	
同　蘭泊村	樺太木材株式會社	
同　清水村	樺太牧業合資會社	
同　南濱町	田中商店	
同　眞岡町本町	拓殖進興合資會社	
同　眞岡町本町	眞岡牧畜株式會社	
同　眞岡町	眞岡土地建物株式會社	
同　眞岡町	眞岡倉庫株式會社	倉庫業
同　眞岡町	眞岡無盡株式會社	
同　眞岡町	眞岡輸出合資會社	
同　眞岡町	丸一眞岡合同運送社	
同　眞岡町	丸茶金谷商店	酒類釀造販賣業
同　眞岡町	丸木波多野商店	
同　眞岡町南濱町	丸三共商會	
同　眞岡町本町	南樺拓殖株式會社	
同　眞岡町	大鋸商會	
榮濱郡榮濱村		

住所	氏名	營業科目
榮濱郡落合町	落合運送社	
同　落合町	落合電燈株式會社	
同　榮濱村	樺太鐵道株式會社	
同　落合町	樺太水產株式會社	
同　榮濱村	高崎組	請負業
同　榮濱村	榮濱回漕合名會社	
同　榮濱村	相濱木工場	
同　白縫村	東白浦電氣株式會社	
敷香郡敷香村	樺太畜產合資會社	
同　敷香村	樺太經木合資會社	
同　內路村寶町	內路電氣株式會社	
同　敷香村	敷香電氣株式會社	
同　敷香村	敷香金融株式會社	
元泊郡知取町	東洋金融株式會社	
同　東知取村	東海金融株式會社	
同　東知取村	知取倉庫金融株式會社	
同　知取町	知取運送株式會社	
同　知取町	知取病院	
同　知取町	吉川農場	
同　知取町	秋山酒造合資會社	
同　東知取村	三星東知取魚菜市場	
同　元泊村	元泊電氣株式會社	

昭和五年十月十五日印刷
昭和五年十月二十一日發行

不許複製

定價貳拾五圓

東京市日本橋區江戸橋二丁目六番地
明正ビルデング十一號
內外經濟調査會
編輯者　松本龜造

東京市牛込區早稻田鶴巻町三百一番地
發行者　小瀧貞治

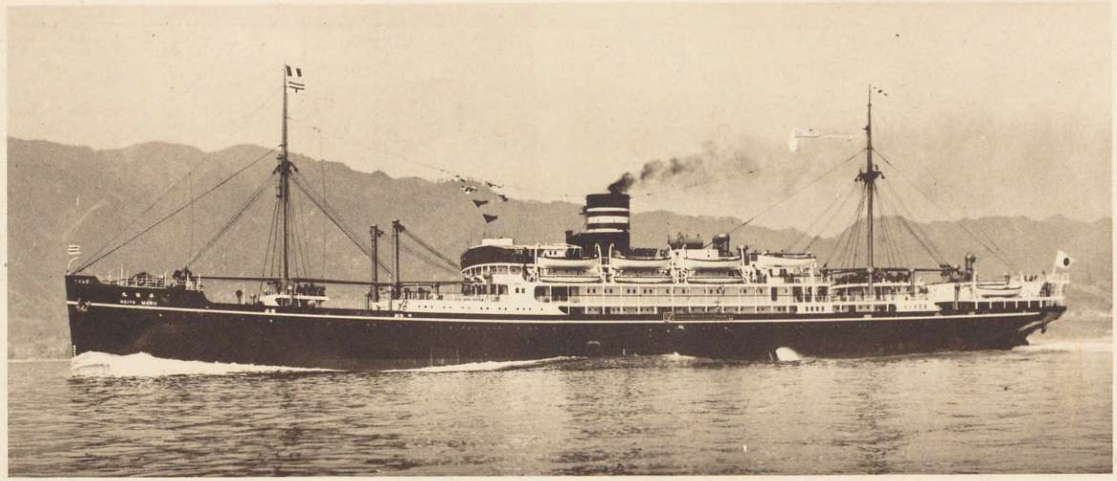
東京市神田區今川小路一丁目六番地
印刷所　中村倍吉

發賣所
東京市日本橋區江戸橋二ノ六
明正ビルデング十一號
電話日本橋一五九五番
振替口座東京七二八〇六番
內外經濟調査會

神田今川小路一ノ六 精進社印刷

創立明治拾八年拾月　所有船舶百五拾隻
總噸數八拾七萬五千噸　經營航路四拾餘航路

南米西岸航路新造モーター客船平洋丸（總噸數一萬噸）



日本郵船株式會社

本店　東京市丸ノ内ノ貳丁目貳拾番地

（郵船ビルデイング）

店理代務業客船社會船汽ドーナユキ

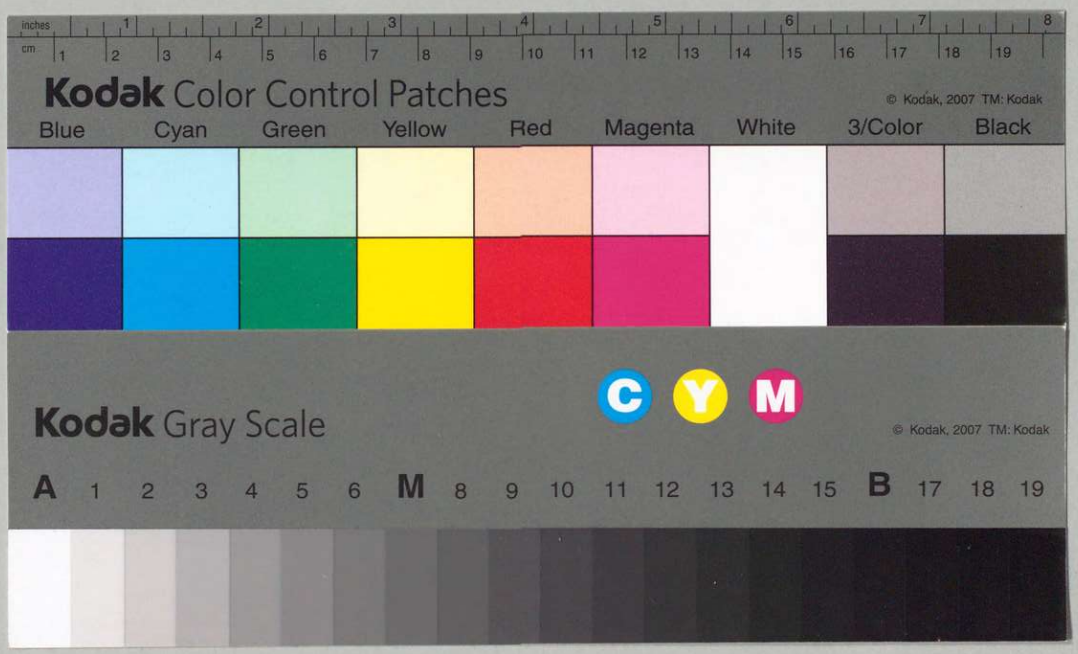
東京・横濱・名古屋・大阪・神戸・門司・長崎

主要航路

桑港線	（就航船五隻）	二週一回
シアトル線	（同五隻）	二週一回
南米東岸線	（同四隻）	四週一回
南米西岸線	（同四隻）	毎月一回
紐育線（パナマ經由）	（同十二隻）	毎月二回
倫敦線	（同十隻）	二週一回
李浦線	（同六隻）	四週一回
漢堡線	（同七隻）	四週一回
濠洲線	（同三隻）	毎月一回
孟買線	（同六隻）	毎月二回
甲谷陀線	（就航船九隻）	毎月二回
横濱上海線	（同三隻）	毎六日目
阪神上海線	（同四隻）	毎週二回
日華聯絡線	（同二隻）	毎四日目
阪神青島線	（同一隻）	毎月二回
裏南洋線	（同四隻）	毎月二回
天津線	（同三隻）	毎五日目
基隆線	（同三隻）	毎月六回
横濱牛莊線	（同四隻）	毎週一回
函館樺太線	（同二隻）	毎月六回


茅沼
野田
大沼
ヤルート
サイパン
ポナペ
トラック
ヤップ
パラオ諸島
コロール


奉天
新義州
平壤
元山
營口
大石橋
山海關
大連
旅順
京城
仁川
釜山
木浦


inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
Kodak Gray Scale
C
Y
M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19